

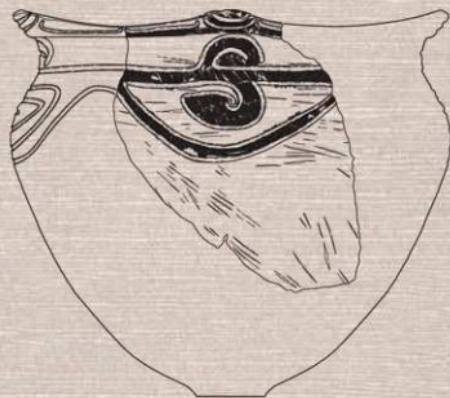
ISSN 2434 - 4516

愛南町文化財調査報告書第2輯

愛南町内遺跡2

平城貝塚

総括報告書1



2021.3

愛媛県南宇和郡愛南町教育委員会

愛南町内遺跡2

平城貝塚

総括報告書1

2021.3

愛媛県南宇和郡愛南町教育委員会



第1次調査 人骨出土の建築工事用基礎壕



第1次調査 “純粹貝層（牡蠣塚と思われるもの）”

巻頭図版 1 上段の説明

西田1954の他、『愛媛県史 資料編 考古』(西田1986)等にも掲載されており、第1次調査と同じ時期に撮られた写真であることは間違いないと思われる。第1次調査A地点の調査塙の写真として理解されることが多いようであるが、本報告書では西田1954のキャプションに従った。

写真に写っている人物の陰影を見る限り、撮影者は南におり、南から北を向いて撮影された可能性が極めて大きい。塙の形状に難があるが、西田1954の「道路局地図(127頁)」において建設工事基礎塙とされたものの写真であろう。

また、写真中央に見られる拵方壁面のえぐれを、西田1955の4月7日の日誌に記述されている「建築物基礎工事中の現場の東端に頭蓋骨一発見、併しそれより下部は障家の軒柱にて作業不能の頭蓋骨を壊損した際のものとして理解し、それを記録した写真として解釈すれば、建設工事基礎塙の写真である可能性は更に大きくなる。

尚、写真的人物は西田栄氏ではなく、水田政章氏とする見解がある(多田 2018)。後年の西田栄氏本人の写真と比較しても、西田栄氏その人である可能性は極めて小さいものと思われる。

巻頭図版 1 下段の説明

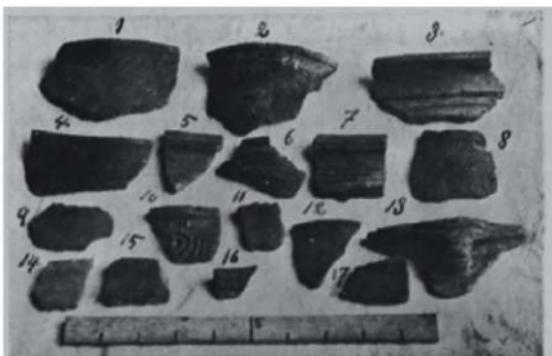
西田1986において、「倉田家乙地点の純貝層」として掲載されている。

この論稿の中では、第1次調査B・C地点を乙、丙地点としているが、両地点は近接している。また、牡蠣が特に多かつたとしていることから、一連の貝塙のものと考えてよいと思われる。よって、第1次調査B・C地点いずれかの写真である可能性が高い。

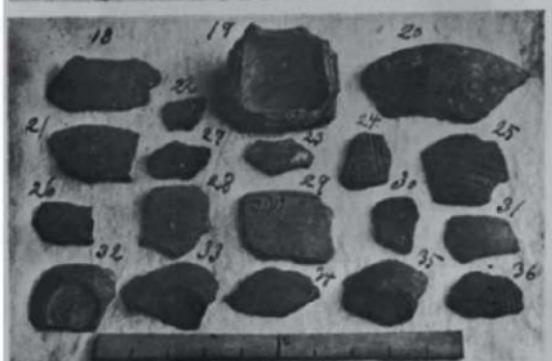
文献

- 西田栄 1954 「平城貝塙調査略報－(愛媛県南宇和郡御庄村)－」『愛媛大学紀要第一部人文学科』第二巻第1号 愛媛大学
119-132頁
1955 「平城貝塙の發掘について－中間報告－」『伊豫史談』第139號 伊豫史談会 1-12頁
1986 「四三 平城貝塙」『愛媛県史』資料編 考古 愛媛県 127-130頁
多田仁 2018 「愛南町における考古学史－近代から現代の調査と研究－」『愛南町史』 愛南町 701-733頁

平城貝塚出土縄文式土器



全
上



平城貝塚出土石器、貝類、鰐鳥魚骨



(南字和都文) 長山源雄著 南字和都利村長会發行 【復刻】株式会社藤川書店より影印

大正 12 (1923) 年に長山源雄が行った 2 回目の発掘調査から出土した遺物

巻頭図版 2 の説明

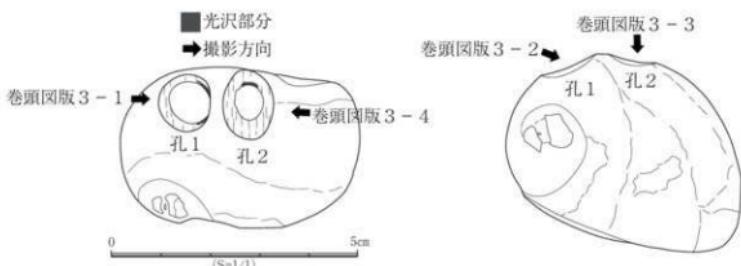
「南宇和郡史」 長山源雄著 南宇和郡町村長會発行 【復刻】株式会社臨川書店 より転載した。尚、転載に際しては、株式会社臨川書店と調整を行なった。

写真中段の「19」は、長山1924で國化されている。その中で“香爐形(或は高坏形)”とされた土器であって、所謂“古付鉢”的鉢の部分として考えられる。南九州との深い關係性を伺わせる資料であるが、所在は未確認である。

文献

長山源雄 1924 「平城貝塚調査報告」『考古学雑誌』第14卷第11号 日本考古学会 47~56頁

卷頭図版 3



貝製品 (Fig.161-1389) 近接写真の撮影方向



卷頭図版 3-1 孔1 の減摩部分

卷頭図版 3-2 孔1 の減摩部分と光沢部分



卷頭図版 3-3 孔2 の減摩部分

卷頭図版 3-4 孔2 の減摩部分と光沢部分

貝製品 (Fig.161-1389) に穿たれた孔に観察できる使用痕

卷頭図版 3 の説明

卷頭図版3－1は、手前が孔1で、奥に孔2を見る。孔の減摩部分は、減摩部分以外の孔の縁より切り立った角度になっている。

卷頭図版3－2は、減摩部分の両縁に光沢部分が確認できる。光沢部分①は、角が取れて丸くなっている。光沢部分②は、孔を穿った時に生じた擦痕が消えてしまっている部分がある。

卷頭図版3－3は、減摩部分で孔の縁が抉れており、その近くに光沢部分がある。光沢部分は角が取れて丸くなってしまっており、この部分以外の孔の縁の状態と比べてみれば、その差は一目瞭然である。

卷頭図版3－2と4の撮影は、市販のUSB Digital Microscopeを使用し、Adobe Photoshop2020とAdobe Illustrator2020で加工した。

序

平城貝塚は、明治24(1891)年に発見された縄文時代の貝塚で、令和3(2021)年で、この貝塚が発見されてから130周年となります。

この節目の年にあたり、これまで平城貝塚で行われてきた数々の発掘調査そして研究を総括することを目的とした報告書を刊行できるのは、大きな喜びです。

平城貝塚が発見された明治という時代は、日本が近代化を推し進め、欧米諸国と競い始めた時代であることは広く知られていることですが、国際社会においての日本人としてのアイデンティティーを確認し、それを確立していく時代でもありました。

そしてこの時代においては、大学という新しい高等教育機関が発足し、今まで発展してきた訳ですが、この高等教育機関で発達した人類学や考古学という、それまで日本になかった新しい学問のおかげで、日本人のアイデンティティーを確認し、確立することが今まで出来てきたと言えるでしょう。

これらの学間に親しんだ明治時代の青年達は、日本各地で縄文貝塚や縄文集落の発見はもちろんのこと、東京人類学会による千葉県加曾利貝塚等の調査や、それぞれの地域での歴史と文化の研究に勤しむことで、日本人の起源を明らかにしていくこととなります。

この青年達の一人に、寺石正路という土佐の人がいました。彼は、土佐で教員を勤めていた時に、貝が散らばる土地を探索しに御荘町を訪れており、平城貝塚を発見した他、高知県宿毛市に所在する宿毛貝塚も発見しています。

彼は、大学で人類学や考古学を専攻した訳ではありませんが、同じ土佐人で、後に“日本の植物学の父”として知られる牧野富太郎を通して、人類学や考古学等の新しい学間に親しんでいたようです。明治の人の“進取の気性”や、学問に対する姿勢は、現代に生きる私達にとって学ぶべきところが多いように思います。

さて、2020年が始まって間もなく、我が国をはじめ世界各国は、新型コロナウイルス(COVID-19)感染症の流行に直面し、経済と社会機構全体に大きな影響が及びました。現段階においても尚、予断を許さない状況が続いています。

この流行が収まれば、日本そして愛南町を再生させる取り組みを急がねばなりません。その取り組みにおける基礎、または未来へ生きていく自信の源として、平城貝塚を始め町内に所在する各種文化財について学ぶと共に、これらを積極的に活かし、未来の健全な日本と愛南町の形成に繋げていきたいと考えています。

本書が、その一助となれば幸いです。

令和3年3月31日
愛南町教育委員会
教育長 中村 維伯

例言

1. 本報告書は、令和元(平成31)年度以前において、平城貝塚で行われてきた発掘調査と立会調査等で得られた調査成果と出土遺物について総括を行うことを目的に刊行したものである。
平成29年度下半期から整理作業に着手し、令和2年度まで事業を継続して、令和3年3月31日に刊行に至った。
2. 所在地 愛媛県南宇和郡愛南町御荘平城2069番地1外
3. 調査面積 第1次調査 126m²(民間開発)
(調査理由) 第2次調査 14m²(民間開発)
第3次調査 91m²(民間開発)
第4次調査 153m²(民間開発)
第5次調査 235m²(民間開発)
第6次調査 16m²(学術調査)
第7次調査 12m²(民間開発)
4. 調査期間 第1次調査 昭和29年2月20日から同年4月9日まで
第2次調査 昭和37年10月28日から同年10月30日まで
第3次調査 昭和47年10月24日と25日
第4次調査 昭和56年9月25日から同年10月5日まで
第5次調査 平成7年10月17日から同年11月4日まで
第6次調査 平成25年3月14日から同年3月26日まで
第7次調査 令和元年8月21日から同年9月5日まで

5. 愛南町の文化財保護行政に係る体制

愛南町教育委員会 生涯学習課 文化振興係

平成29年度 教育長 中村 維伯
課長 本多 幸雄
課長補佐 織田 浩史
係長 松本安紀彦
臨時職員 吉田 貴子

平成30年度 教育長 中村 維伯
課長 清水 雅人
課長補佐 織田 浩史
係長 松本安紀彦
臨時職員 吉田 貴子

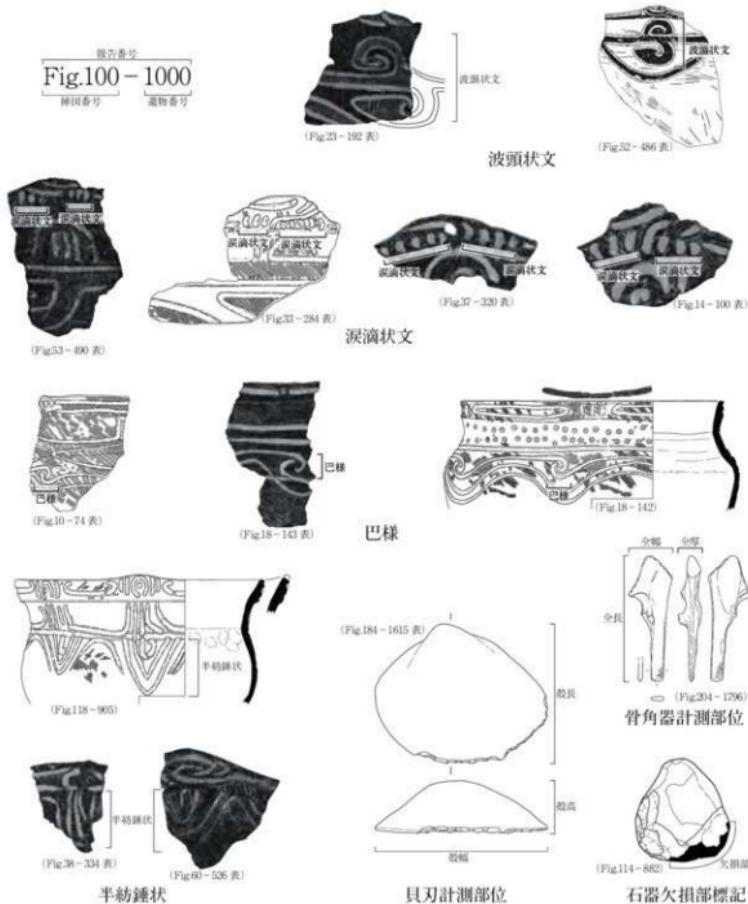
平成31年度 教育長 中村 維伯
(令和元年度) 課長 清水 雅人
課長補佐 織田 浩史
係長 松本安紀彦
臨時職員 吉田 貴子

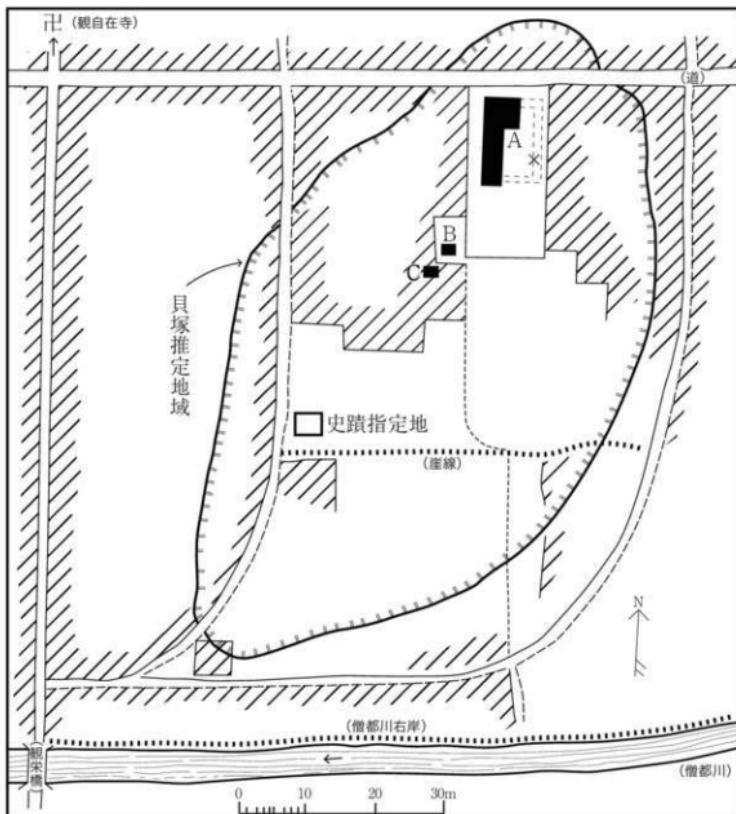
令和2年度 教育長 中村 維伯
課長 清水 雅人
課長補佐 織田 浩史
係長 松本安紀彦
臨時職員 吉田 貴子

6. 調査区と出土地点の位置については、令和元年度の第7次調査に合わせて作成した世界測地系第4系に基づく20mグリッドに地籍図の情報を付加し、第7次調査区以外の調査区と出土地点をその範囲の中において割り付けたものである。それらの位置は測量によるものではないために若干の誤差があるものの、地番が異なるような大きな誤差は無いものと思われる。
7. 本報告書掲載遺物には報告番号を注記した。ただし、中には過去の調査内容が注記されていたものがある。主なものは平城展示室で展示し、それ以外は一本松郷土資料館で保管する。
8. 平城貝塚からの出土遺物は、町外で保管されてきたものが多く、それらの町への返却に関しては愛媛県教育委員会と愛媛大学、所蔵資料の使用に関しては愛媛県歴史文化博物館にご理解とご協力を賜った。記して感謝の意を表す。
そして、これら町外で保管されてきた遺物が今まで継承されてきたことは、平城貝塚第1次調査の指揮及び研究発展の功を取られ、地域の文化財の保護を担う人材を育てた、故西田栄氏(元愛媛大学教授)とその御家族の配慮に抱るものである。
また、町内で保管されてきた遺物については、故中岡修也氏(元城辺町文化財保護審議会委員)の平城貝塚にかける情熱と御家族の配慮に抱るところが大きい。
ここに記して感謝の意を表す。
9. 本書刊行にあたって、下記の方々からご協力を賜った。記して感謝の意を表する(五十音順)。
石井寛(繩文時代文化研究会員) 石丸恵利子(広島大学総合博物館埋蔵文化財調査部門研究員)
井出耕二(愛媛考古学協会監事) 稲村晃嗣(株式会社四門) 犬飼徹夫(日本考古学協会員)
小澤政彦(千葉県教育庁) 遠部慎(久万高原町教育委員会) 覚張隆史(金沢大学准教授)
加納実(千葉市立加曾利貝塚博物館館長) 幸泉満夫(愛媛大学准教授)
高野紗奈江(京都大学大学院) 多田仁(伊予史談会常任委員) 千葉豊(京都大学准教授)
谷若倫郎(瀬戸内海考古学研究会副代表) 中野良一(日本考古学協会員)
兵頭勲(愛媛県教育委員会) 村上恭通(愛媛大学教授) 水ノ江和同(同志社大学教授)
山田康弘(東京都立大学教授) 米田穰(東京大学総合研究博物館放射性炭素年代測定室教授)

10. 出土物の縮尺は、土器並びに土製品は1/3、礫石器は1/4、剥片石器は2/3、骨角器は1/2とした。ただし、版に収まらない等の理由により上記の縮尺と異なる場合は、異なる縮尺の遺物図近くに、その遺物だけの縮尺を表記している。
10. 遺物の図化と浄書は吉田が、本書の執筆と編集は松本が、それぞれ主となって行なった。但し、骨角器と貝製品に関しては、多田仁氏が愛南町誌に掲載したもののが原図を浄書した。

凡例





□家屋敷地 ■発掘地点 □建設工事基礎塁 ×人骨発見地点

平城貝塚の範囲を示す図（※編集者が西田 1954 にある図を墨書きした。() は加筆したもの）

目 次

卷頭図版	
序・例言	
目次《本文・挿図・表・写真図版》	
本文	
第I章 平城貝塚について	1
1. 平城貝塚の発見から昭和初期までの調査研究	
2. 平城貝塚とその周辺における地勢と遺跡	
第II章 平城貝塚の既往調査等に係る報告	5
1. 土器の記述について(5頁)	
2. 調査の記録について(5頁)	
3. 第1次調査(7頁)	
4. 第2次調査(63頁)	
5. 昭和40年資料(65頁)	
6. 第3次調査(77頁)	
7. 昭和50年5月18日採集資料(92頁)	
8. 昭和52年資料(93頁)	
S52a資料(93頁:昭和52年5月28日採集資料)	
S52b資料(97頁:昭和52年6月5日採集資料)	
9. 昭和56年3月11・12日資料(104頁)	
10. 第4次調査(113頁)	
11. 昭和62年11月25日資料(160頁)	
12. 第5次調査(169頁)	
13. 平城貝塚一括資料(234頁)	
14. 第6次調査(246頁)	
15. 第7次調査(264頁)	
16. 木村剛朗氏の資料(266頁)	
第III章 自然科学分析について	267
1. 鹿骨の年代(267頁)	
2. 炭化材の年代(270頁)	
3. 炭化材の樹種同定(272頁)	
4. レプリカ法による土器圧痕の同定(274頁)	
第IV章 平城貝塚の既往調査等の成果	277
1. 平城貝塚の面積と貝塚の形成について(277頁)	
2. 遺物から見る平城貝塚の時間幅(279頁)	
3. 放射性炭素年代測定について(281頁)	
4. 平城人の生活史～貝塚形成から墓域形成まで(282頁)	

挿図目次

平城貝塚の範囲を示す図	例言最終頁
Fig. 1 愛南町内遺跡位置図	3
Fig. 2 平城貝塚調査区位置図	6
Fig. 3 第1次調査「1」出土遺物(1~8)	10
Fig. 4 第1次調査「1」出土遺物(9~16)	12
Fig. 5 第1次調査「2」出土遺物(17~28)	14
Fig. 6 第1次調査「2」出土遺物(29~36)	15
Fig. 7 第1次調査「3」出土遺物(37~60)	18
Fig. 8 第1次調査「3」出土遺物(61)	19
Fig. 9 第1次調査「4」出土遺物(62~72)	20
Fig. 10 第1次調査「5」出土遺物(73~79)	21
Fig. 11 第1次調査「6」出土遺物(80)	22
Fig. 12 第1次調査「7」出土遺物(81~93)	23
Fig. 13 第1次調査「7」出土遺物(94~97)	24
Fig. 14 第1次調査「8」出土遺物(98~111)	26
Fig. 15 第1次調査「8」出土遺物(112~130)	28
Fig. 16 第1次調査「8」出土遺物(131~137)	29
Fig. 17 第1次調査「101」出土遺物(138~141)	31
Fig. 18 第1次調査「101」出土遺物(142~145)	32
Fig. 19 第1次調査「101」出土遺物(146~166)	34
Fig. 20 第1次調査「101」出土遺物(167~177)	35
Fig. 21 第1次調査「102」出土遺物(178~188)	36
Fig. 22 第1次調査「D70-D90」出土遺物(189~191)	37
Fig. 23 第1次調査「E·E 1·E 2」出土遺物(192~203)	39
Fig. 24 第1次調査「E·E 1·E 2」出土遺物(204~212)	40
Fig. 25 第1次調査「E·E 1·E 2」出土遺物(213~219)	41
Fig. 26 第1次調査「HI 十二、二十三」出土遺物(220~221)	42
Fig. 27 第1次調査「一、一ノ右」出土遺物(222~237)	43
Fig. 28 第1次調査「外、外1、外2」出土遺物(238~252)	45
Fig. 29 第1次調査「雑、雑1」出土遺物(253~262)	47
Fig. 30 第1次調査「雑、雑1」出土遺物(263~270)	48
Fig. 31 第1次調査「雑、雑1」出土遺物(271~275)	49
Fig. 32 第1次調査「雑、雑1」出土遺物(276~283)	50
Fig. 33 第1次調査「市川」出土遺物(284~294)	51
Fig. 34 第1次調査「市川」出土遺物(295~299)	52
Fig. 35 第1次調査「十八」出土遺物(300)	53
Fig. 36 第1次調査「八区・一〇-三〇」出土遺物(301~318)	54

Fig. 37 第1次調査「一括」出土遺物(319~331).....	59
Fig. 38 第1次調査「一括」出土遺物(332~338).....	60
Fig. 39 第1次調査「一括」出土遺物(339~356).....	61
Fig. 40 第1次調査「一括」出土遺物(357~366).....	62
Fig. 41 第2次調査出土遺物(367~372).....	65
Fig. 42 昭和40年資料(373~394).....	67
Fig. 43 昭和40年資料(395~405).....	68
Fig. 44 昭和40年資料(406~415).....	70
Fig. 45 昭和40年資料(416~431).....	71
Fig. 46 昭和40年資料(432~442).....	72
Fig. 47 昭和40年資料(443~461).....	73
Fig. 48 昭和40年資料(462~466).....	74
Fig. 49 昭和40年資料(467~478).....	75
Fig. 50 昭和40年資料(479~484).....	76
Fig. 51 第3次調査土壤堆積図.....	77
Fig. 52 第3次調査出土遺物(485~489).....	78
Fig. 53 第3次調査出土遺物(490).....	79
Fig. 54 第3次調査出土遺物(491~501).....	81
Fig. 55 第3次調査出土遺物(502~505).....	82
Fig. 56 第3次調査出土遺物(506~509).....	83
Fig. 57 第3次調査出土遺物(510~516).....	85
Fig. 58 第3次調査出土遺物(517~522).....	86
Fig. 59 第3次調査出土遺物(523).....	87
Fig. 60 第3次調査出土遺物(524~532).....	88
Fig. 61 第3次調査出土遺物(533~538).....	89
Fig. 62 第3次調査出土遺物(539~542).....	90
Fig. 63 第3次調査出土遺物(543~548).....	91
Fig. 64 第3次調査出土遺物(549~555).....	92
Fig. 65 昭和50年5月18日資料(556).....	92
Fig. 66 S52a資料(557~560).....	94
Fig. 67 S52a資料(561~576).....	95
Fig. 68 S52a資料(577~592).....	96
Fig. 69 S52b資料(593~603).....	99
Fig. 70 S52b資料(604~619).....	100
Fig. 71 S52b資料(620~635).....	101
Fig. 72 S52b資料(636~642).....	102
Fig. 73 S52b資料(643~655).....	103
Fig. 74 昭和56年3月11・12日資料(656~677).....	105

Fig. 75	昭和56年3月11・12日資料(678～694).....	107
Fig. 76	昭和56年3月11・12日資料(695～713).....	109
Fig. 77	昭和56年3月11・12日資料(714～732).....	110
Fig. 78	昭和56年3月11・12日資料(733～739).....	111
Fig. 79	昭和56年3月11・12日資料(740～746).....	112
Fig. 80	昭和56年3月11・12日資料(747～750).....	113
Fig. 81	第4次調査 調査区平面図.....	117
Fig. 82	第4次調査 土壌堆積図.....	118
Fig. 83	第4次調査 第1号土壌墓遺構図.....	119
Fig. 84	第4次調査 第1号土壌墓出土遺物(751～753).....	120
Fig. 85	第4次調査 第2号土壌墓遺構図及び出土遺物(754).....	120
Fig. 86	第4次調査 第3号土壌墓検出状況図1.....	121
Fig. 87	第4次調査 第3号土壌墓検出状況図2.....	122
Fig. 88	第4次調査 第3号土壌墓検出状況図3.....	122
Fig. 89	第4次調査 第3号土壌墓遺構図.....	123
Fig. 90	第4次調査 第3号土壌墓出土遺物(755～764).....	124
Fig. 91	第4次調査 貯蔵穴遺構図及び出土遺物(765～768).....	125
Fig. 92	第4次調査 集石遺構図及び出土遺物(769).....	126
Fig. 93	第4次調査 配石遺構図.....	126
Fig. 94	第4次調査 配石遺構出土遺物(770).....	127
Fig. 95	第4次調査 柱穴群及び遺物集中平面図.....	128
Fig. 96	第4次調査 柱穴群及び遺物集中出土遺物(771～776).....	129
Fig. 97	第4次調査 性格不明遺構平面図.....	130
Fig. 98	第4次調査 性格不明遺構出土遺物(777～784).....	131
Fig. 99	第4次調査 性格不明遺構出土遺物(785～790).....	132
Fig. 100	第4次調査 G.A 3出土遺物(791).....	132
Fig. 101	第4次調査 G.B 2出土遺物(792～794).....	133
Fig. 102	第4次調査 G.B 3出土遺物(795～797).....	133
Fig. 103	第4次調査 G.B 4出土遺物(798～803).....	134
Fig. 104	第4次調査 G.B 6出土遺物(804～805).....	134
Fig. 105	第4次調査 G.C 0出土遺物(806～815).....	135
Fig. 106	第4次調査 G.C 1出土遺物(816～820).....	135
Fig. 107	第4次調査 G.C 2出土遺物(821～825).....	136
Fig. 108	第4次調査 G.C 3出土遺物(826～827).....	136
Fig. 109	第4次調査 G.C 4出土遺物(828～840).....	137
Fig. 110	第4次調査 G.C 4出土遺物(841～846).....	138
Fig. 111	第4次調査 G.C 5出土遺物(847～853).....	138
Fig. 112	第4次調査 G.C 雜出土遺物(854～856).....	139

Fig.113	第4次調査 G.D 0出土遺物(857~871)	140
Fig.114	第4次調査 G.D 1出土遺物(872~882)	141
Fig.115	第4次調査 G.D 2出土遺物(883~891)	142
Fig.116	第4次調査 G.D 3出土遺物(892~894)	143
Fig.117	第4次調査 G.D 4出土遺物(895~904)	144
Fig.118	第4次調査 G.D 5出土遺物(905~917)	146
Fig.119	第4次調査 G.D 8出土遺物(918~919)	147
Fig.120	第4次調査 G.E 4出土遺物(920~934)	148
Fig.121	第4次調査 G.E 4出土遺物(935~939)	149
Fig.122	第4次調査 一括出土遺物(940~962)	150
Fig.123	第4次調査 一括出土遺物(963~966)	152
Fig.124	第4次調査 一括出土遺物(967~982)	153
Fig.125	第4次調査 一括出土遺物(983~996)	154
Fig.126	第4次調査 一括出土遺物(997~1006)	155
Fig.127	第4次調査 一括出土遺物(1007~1018)	156
Fig.128	第4次調査 一括出土遺物(1019~1031)	158
Fig.129	第4次調査 表面採集等遺物(1032~1045)	159
Fig.130	昭和62年11月25日資料(1046~1055)	163
Fig.131	昭和62年11月25日資料(1056~1069)	164
Fig.132	昭和62年11月25日資料(1070~1081)	165
Fig.133	昭和62年11月25日資料(1082~1090)	166
Fig.134	昭和62年11月25日資料(1091~1099)	167
Fig.135	昭和62年11月25日資料(1100~1107)	168
Fig.136	第5次調査 A~D区東西土壤堆積図	172
Fig.137	第5次調査 A~D区南北土壤堆積図	173
Fig.138	第5次調査 グリッド図及び試掘確認調査図面並びに出土遺物(1108~1116)	174
Fig.139	第5次調査 G.A 0出土遺物(1117~1122)	177
Fig.140	第5次調査 G.A 0出土遺物(1123~1136)	178
Fig.141	第5次調査 G.A 0出土遺物(1137~1152)	179
Fig.142	第5次調査 G.A 0出土遺物(1153~1163)	180
Fig.143	第5次調査 G.A 0出土遺物(1164~1175)	181
Fig.144	第5次調査 G.A 1出土遺物(1176~1183)	183
Fig.145	第5次調査 G.A 1出土遺物(1184~1204)	184
Fig.146	第5次調査 G.A 1出土遺物(1205~1221)	185
Fig.147	第5次調査 G.A 2 SX 1出土遺物(1222~1235)	186
Fig.148	第5次調査 G.A 2出土遺物(1236~1249)	188
Fig.149	第5次調査 G.A 2出土遺物(1250~1267)	189
Fig.150	第5次調査 G.A 2出土遺物(1268~1283)	190

Fig.151	第5次調査 G.B 0出土遺物(1284~1294)	192
Fig.152	第5次調査 G.B 0出土遺物(1295~1311)	193
Fig.153	第5次調査 G.B 0出土遺物(1312~1323)	194
Fig.154	第5次調査 G.B 0出土遺物(1324~1332)	195
Fig.155	第5次調査 G.B 1出土遺物(1333~1339)	196
Fig.156	第5次調査 G.B 2貝層下出土遺物(1340~1342)	197
Fig.157	第5次調査 G.B 2出土遺物(1343~1358)	198
Fig.158	第5次調査 G.B 4 I層・IIa層出土遺物(1359~1365)	199
Fig.159	第5次調査 G.B 4 IIb層出土遺物(1366~1372)	200
Fig.160	第5次調査 G.B 4 IIc層出土遺物(1373~1386)	201
Fig.161	第5次調査 G.B 4 IIc層出土遺物(1387~1389)	202
Fig.162	第5次調査 G.B 4 IId層出土遺物(1390~1401)	202
Fig.163	第5次調査 G.B 4 IV層出土遺物(1402~1424)	204
Fig.164	第5次調査 G.C 0出土遺物(1425~1436)	205
Fig.165	第5次調査 G.C 0出土遺物(1437~1444)	206
Fig.166	第5次調査 G.C 1出土遺物(1445~1454)	207
Fig.167	第5次調査 G.C 2出土遺物(1455~1473)	209
Fig.168	第5次調査 G.C 2出土遺物(1474~1488)	210
Fig.169	第5次調査 G.C 3出土遺物(1489~1498)	211
Fig.170	第5次調査 G.C 4貝層出土遺物(1499~1514)	213
Fig.171	第5次調査 G.C 4貝層出土遺物(1515~1527)	214
Fig.172	第5次調査 G.C 4貝層出土遺物(1528~1536)	215
Fig.173	第5次調査 G.C 4 CD間ベルト IIc層中位出土遺物(1537~1545)	216
Fig.174	第5次調査 G.C 4 CD間ベルト IIc層中位出土遺物(1546)	217
Fig.175	第5次調査 G.C 4 CD間ベルト IIc層下出土遺物(1547~1550)	217
Fig.176	第5次調査 G.C 4 CD間ベルト IIc層下出土遺物(1551~1558)	218
Fig.177	第5次調査 G.C 4出土遺物(1559~1573)	219
Fig.178	第5次調査 G.C 4出土遺物(1574~1575)	220
Fig.179	第5次調査 G.C D区間出土遺物(1576~1580)	220
Fig.180	第5次調査 G.D 0出土遺物(1581~1587)	221
Fig.181	第5次調査 G.D 0出土遺物(1588~1601)	222
Fig.182	第5次調査 G.D 1 C 1南ベルト出土遺物(1602)	223
Fig.183	第5次調査 G.D 1出土遺物(1603~1613)	223
Fig.184	第5次調査 G.D 2南北ベルト出土遺物(1614~1616)	224
Fig.185	第5次調査 G.D 2出土遺物(1617~1631)	225
Fig.186	第5次調査 G.D 2出土遺物(1632~1654)	226
Fig.187	第5次調査 G.D 3出土遺物(1655~1673)	228
Fig.188	第5次調査 G.D 3出土遺物(1674~1683)	229

Fig.189	第5次調査 G.D 4 出土遺物(1684~1703)	231
Fig.190	第5次調査 G.D 4 出土遺物(1704~1712)	232
Fig.191	第5次調査 G.E 1 出土遺物(1713)	232
Fig.192	第5次調査 G.F 1 出土遺物(1714~1718)	233
Fig.193	第5次調査 G.F 2 出土遺物(1719~1726)	233
Fig.194	第5次調査 G.F 3 出土遺物(1727~1729)	234
Fig.195	第5次調査 G.I 0 出土遺物(1730~1731)	234
Fig.196	第5次調査 G.I 1 出土遺物(1732)	234
Fig.197	平城貝塚一括資料(1733~1735)	235
Fig.198	平城貝塚一括資料(1736~1744)	236
Fig.199	平城貝塚一括資料(1745~1748)	237
Fig.200	平城貝塚一括資料(1749~1762)	240
Fig.201	平城貝塚一括資料(1763~1772)	241
Fig.202	平城貝塚一括資料(1773~1783)	242
Fig.203	平城貝塚一括資料(1784~1793)	243
Fig.204	平城貝塚一括資料(1794~1799)	244
Fig.205	平城貝塚一括資料(1800~1804)	245
Fig.206	第6次調査 第1調査区平面図	250
Fig.207	第6次調査 第1調査区土壤堆積図	251
Fig.208	第6次調査 第1調査区 SB 1 (Pit 1・2) 遺構図	252
Fig.209	第6次調査 第1調査区 Pit 3 遺構図	252
Fig.210	第6次調査 第1調査区 Pit 4 遺構図	253
Fig.211	第6次調査 第1調査区 Pit 5 遺構図	253
Fig.212	第6次調査 第1調査区 Pit 6 遺構図	254
Fig.213	第6次調査 第1調査区 Pit 7 遺構図	254
Fig.214	第6次調査 第1調査区 Pit 8 遺構図及び出土遺物(1805)	254
Fig.215	第6次調査 第1調査区 Pit 9 遺構図	255
Fig.216	第6次調査 第1調査区 Pit 10 遺構図	255
Fig.217	第6次調査 第1調査区 Pit 11 遺構図	255
Fig.218	第6次調査 第1調査区 Pit 12 遺構図	256
Fig.219	第6次調査 第1調査区 SK 1 遺構図	256
Fig.220	第6次調査 第1調査区 SK 2 遺構図	257
Fig.221	第6次調査 第1調査区 SK 3 遺構図	258
Fig.222	第6次調査 第1調査区 SK 4 遺構図	258
Fig.223	第6次調査 第1調査区 SK 5 遺構図	259
Fig.224	第6次調査 第1調査区 SX 1 遺構図	259
Fig.225	第6次調査 第1調査区出土遺物(1806~1807)	259
Fig.226	第6次調査 第2調査区平面図	260

Fig.227 第6次調査	第2調査区土壤堆積図	261
Fig.228 第6次調査	第2調査区Pit13遺構図	262
Fig.229 第6次調査	第2調査区Pit14・15遺構図及び出土遺物(1808)	262
Fig.230 第6次調査	第2調査区SX 2 遺構図	263
Fig.231 第7次調査	調査区平面図	264
Fig.232 第7次調査	土壤堆積図	265
Fig.233 第7次調査	出土遺物(1809~1813)	265
Fig.234 木村剛朗氏の資料(1814・1815)		266
Fig.235 暦年較正結果		272

表目次

表1 愛南町内遺跡一覧	3
表2 受付分析試料のリスト	267
表3 前処理の結果	268
表4 元素および安定同位体比の分析結果	268
表5 グラファイト化の結果	268
表6 放射性炭素年代測定の結果	269
表7 推定される較正年代と注記(cal BP表記)	269
表8 推定される較正年代と注記(BC/AD表記)	269
表9 測定試料および処理	271
表10 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果	271
表11 樹種同定結果	273
表12 平城貝塚出土土器の圧痕の同定結果	275
表13 平城貝塚における放射性炭素年代測定一覧	281
表14 平城貝塚より出土した埋葬人骨一覧	283

写真図版目次

鹿骨年代測定試料	267
炭化材年代測定試料	270
炭化材の走査型電子顕微鏡写真	274
平城貝塚出土土器の圧痕レプリカの走査型電子顕微鏡写真	276
PL. 1 遺物番号1~20	
PL. 2 遺物番号21~40	
PL. 3 遺物番号41~61	

- PL.4 遺物番号62~74
PL.5 遺物番号75~88
PL.6 遺物番号89~101
PL.7 遺物番号102~119
PL.8 遺物番号120~137
PL.9 遺物番号138~139
PL.10 遺物番号140~145
PL.11 遺物番号146~166
PL.12 遺物番号167~176,178~188
PL.13 遺物番号189~203
PL.14 遺物番号204~221
PL.15 遺物番号222~237
PL.16 遺物番号238~259
PL.17 遺物番号260~283
PL.18 遺物番号284~300
PL.19 遺物番号301~323
PL.20 遺物番号324~341
PL.21 遺物番号342~366
PL.22 遺物番号373~395
PL.23 遺物番号396~418
PL.24 遺物番号419~442
PL.25 遺物番号443~466
PL.26 遺物番号467~484
PL.27 遺物番号485~486
PL.28 遺物番号487~501
PL.29 遺物番号502
PL.30 遺物番号503~522
PL.31 遺物番号523~538
PL.32 遺物番号539~553
PL.33 遺物番号556~570
PL.34 遺物番号571~592
PL.35 遺物番号593~611
PL.36 遺物番号612~632
PL.37 遺物番号633~655
PL.38 遺物番号656~677
PL.39 遺物番号678~700
PL.40 遺物番号701~722
PL.41 遺物番号723~746

- PL.42 遺物番号747～764
PL.43 遺物番号765～770
PL.44 遺物番号771～776
PL.45 遺物番号777～794
PL.46 遺物番号795～802,804～815
PL.47 遺物番号816～827
PL.48 遺物番号828～845,847～853
PL.49 遺物番号854～871
PL.50 遺物番号872～894
PL.51 遺物番号895～917
PL.52 遺物番号918～939
PL.53 遺物番号940～962
PL.54 遺物番号963～986
PL.55 遺物番号987～1010
PL.56 遺物番号1011～1035
PL.57 遺物番号1036～1045,被熱花崗岩礫
PL.58 遺物番号1046～1069
PL.59 遺物番号1070～1090
PL.60 遺物番号1091～1106
PL.61 遺物番号1108～1129
PL.62 遺物番号1130～1154
PL.63 遺物番号1155～1175
PL.64 遺物番号1176～1201
PL.65 遺物番号1202～1226
PL.66 遺物番号1227～1253
PL.67 遺物番号1254～1279
PL.68 遺物番号1280～1303
PL.69 遺物番号1304～1325
PL.70 遺物番号1326～1349
PL.71 遺物番号1350～1370
PL.72 遺物番号1371～1388,1390～1395
PL.73 遺物番号1396～1419
PL.74 遺物番号1420～1444
PL.75 遺物番号1445～1470
PL.76 遺物番号1471～1493
PL.77 遺物番号1494～1517
PL.78 遺物番号1518～1534
PL.79 遺物番号1535～1545,1547～1555

- PL.80 遺物番号1556～1573,1575
- PL.81 遺物番号1576～1598
- PL.82 遺物番号1599～1614,1617～1625
- PL.83 遺物番号1626～1650
- PL.84 遺物番号1651～1675
- PL.85 遺物番号1676～1698
- PL.86 遺物番号1699～1722
- PL.87 遺物番号1723～1743
- PL.88 遺物番号1744～1765
- PL.89 遺物番号1766～1783
- PL.90 遺物番号1784～1791,1803・1804
- PL.91 遺物番号1805～1815
- PL.92 遺物番号177,367～372,554,555,803,846,1107,1389,1546,1574,1615
- PL.93 遺物番号1616,1792～1795
- PL.94 遺物番号1796～1802,馬齒(第1次調査出土)
- PL.95 「伊豫平城貝塚－繩文式土器を中心として－」(1957 御荘町教育委員会刊行)掲載図版
(※第1次調査)
- PL.96 「御荘町史」(1970 御荘町)掲載図版(※第2次調査)
- PL.97 「平城貝塚第3次発掘調査概報」(1973 愛媛県文化財保護協会)掲載図版(※第3次調査)
- PL.98 第4次調査 第3号土壙墓(第3号人骨)出土状況
第4次調査 第3号人骨(第3号土壙墓出土)復元
第6次調査 第1調査区遺構検出作業
第6次調査 第1調査区遺構検出状況(南より)
第6次調査 第1調査区遺構検出状況(東より)
第6次調査 第1調査区遺構検出状況(西より)
- PL.99 第6次調査 第1調査区SK 1埋土
第6次調査 第1調査区SK 1完掘
第6次調査 第1調査区SK 2埋土
第6次調査 第1調査区SK 2疊等出土状況
第6次調査 第1調査区SK 3疊等出土状況
第6次調査 第1調査区完掘状況(東より)
第6次調査 第1調査区完掘状況(北より)
第6次調査 第2調査区中央土壤堆積(西より)
- PL.100 第6次調査 第2調査区検出状況(南より)
第6次調査 第2調査区 SX 2完掘状況(西より)
第6次調査 第2調査区 Pit14・15出土状況(西より)
第7次調査 北壁土壤堆積第7次調査 西壁土壤堆積
第7次調査 遺構検出状況(南より)

- (PL.100) 第7次調査 Pit 1・2検出状況(南より)
- PL.101 第7次調査 Pit 1 検出
第7次調査 Pit 1 半截(東より)
第7次調査 Pit 1 完掘(東より)
第7次調査 Pit 2 検出(西より) Pit 1 完掘含
第7次調査 Pit 2 検出(西より)
第7次調査 Pit 2 半截(東より)
第7次調査 Pit 2 完掘(南より)
第7次調査 Pit 1・2 完掘(南より)
- PL.102 第7次調査 完掘状況(西より)
第7次調査 完掘状況(南西より)
平城貝塚立会調査(第4次調査地点西端の土壌堆積)
平城貝塚立会調査(第4次調査地点西端の混貝土壌)
平城貝塚立会調査(S52b地点真南の土壌堆積)
平城貝塚立会調査(S52b地点南の旧国道下の土壌堆積)
- PL.103 鹿角製髪飾り 昭和62年11月25日採集資料(所在不明)
- PL.104 平城貝塚の石碑とその碑文

卷頭図版

- 卷頭図版 1 上段: 第1次調査 人骨出土の建築工事用基礎壕(西田1954)
下段: 第1次調査 “純粹貝層(牡蠣塚と思われるもの)”
- 卷頭図版 2 大正12(1923)年に長山源雄が行った2回目の発掘調査から出土した遺物
- 卷頭図版 3 貝製品(Fig.161-1389)に穿たれた孔に観察できる使用痕

第1章 平城貝塚について

1. 平城貝塚の発見から昭和初期までの調査研究

平城貝塚は、愛媛県の最南端、高知県と境を接する南宇和郡愛南町御荘平城(旧御荘町)に所在する縄文時代の遺跡である。

この遺跡は、明治24(1891)年8月に、高知県が誇る郷土史家・寺石正路によって発見され、その際には、土器と石鎌そして骨針とされた骨角器の他、貝殻や獸骨などの動物遺存体が確認されている。このことについて寺石は、同じ機会に発見した高知県宿毛市に所在する宿毛貝塚と合わせて、速やかに学会誌で公表している(寺石1891)。

この公表により、平城貝塚の名はその有望性と共に学界に知れ渡ることとなった。その表れとして、寺石の公表に関して帝国博物館に籍を置いていた若林勝邦からの「…寺石氏ガ報告ハ實人類學上神益ヲ興フルヤ鮮少ナラザルナリ…」というコメントや、明治31(1898)年に東京帝国大学より刊行された『日本石器時代人民遺物發見地名表』への掲載に繋がっている(多田2018)。

平城貝塚での最初の発掘調査は、明治38(1905)年に大野延太郎(別称“雲外”)によって行われている可能性がある(東京人類学会1905、大野1917)。しかしながら、その調査に係る明確な記録や遺物は未だ確認できていない。

明確に記録が残る発掘調査は、大正5(1916)年5月15日と16日に、愛媛県が誇る郷土史家・長山源雄が行っている(長山1916)。この記録において長山は、出土物に関して弥生式土器と祝部の他、現代の我々が縄文時代の土器として認識する土器について“石器時代土器”と記述しており、この時点においては縄文土器という慣用語を使用していない。尚、この調査で得られた出土物は、大正6年10月4日に焼失している。

大正12(1923)年に行った2回目の発掘調査(Fig. 2 “長山1923”)以降、長山は遺物が出土した層位を重視する発掘に取り組んでおり、2回目の発掘調査を公表した際には、簡便ながらも土壌堆積図を図示している(長山1924)。この時には、“香爐形”(巻頭図版2中段の19)と表現した土器の出土があり、これは南九州との関連を想起させるものである。この調査に係る報告においては、先の調査で石器時代土器とした土器を“縄紋土器”として記述しており、この時初めて長山の中で、平城貝塚を縄文時代の遺跡として理解したと考えられる。

尚、縄文土器という慣用語は、明治19(1886)年に白井光太郎が論文中で使用した“縄紋土器”に初源があり(白井1886)、大正時代末期から昭和時代初期にかけて広く使われるようになったとされているため(芹澤1956)、長山の石器時代土器という表現から縄紋土器という表現への変化は、学界の流れに即したものと言える。また、昭和13(1938)年の論考では“縄文式土器”と表現しており、“紋”から“文”、そして“縄文式土器”から“縄文土器”へ変化(里見2015)していくことからも、長山が学会の動向はもちろんのこと、学会で使用される用語の変遷についても敏感に応じていたことをうかがい知ることができる。

さて昭和2(1927)年8月に長山は、日本そして徳島県が誇る人類学者・鳥居龍藏と共に発掘調査を行なっている(長山1938)。長山と鳥居の調査においては、牡蠣殻と貝殻で構成された貝層がほとんど土砂を交えずに堆積していることを確認しているため、純貝層の存在が確認できたものと考えられる。

また、同年12月4日には、帝国陸軍中佐・佐治琢磨が平城貝塚を掘削している。その際の出土遺物に関する記録を、愛媛県の考古学徒の先駆者として知られる鶴久森熊太郎が作成しており、鐘崎式土器と全縄文土器そして無文土器の他、動物遺存体のスケッチを残している。その中の、牡蠣またはウミギク属の貝殻を原材料とした貝輪は、極めて興味深い遺物である(井出他2020)。

これまで見てきたとおり、平城貝塚の発見から昭和初期までの調査と研究は、主として長山の手によるものである。そして長山の土壤堆積の記録から、平城貝塚においては地表下約30cmのところに層厚約85cmから90cmの貝層、しかも純貝層が所在していたことを理解することができ、このことは戦後の調査で裏付けられることとなる。

そして、日本が西歐列強に比肩すべく近代化を進める時代に、当時の日本人類学の権威であった島居龍藏が來訪して調査を行った要因については、平城貝塚が、近代日本の形成期における“日本人はどこから来たのか、そして何者なのか”という問題について答える情報を秘めている遺跡の一つとして認識されていたがゆえのことと理解できる。

2. 平城貝塚とその周辺における地勢と遺跡(Fig. 1, 表1)

まず、平城貝塚とその周辺における地勢である。

平城貝塚は、この地域において主峰といつてもよい觀音岳(標高782m)の東斜面に源を発し、城辺そして御荘の田畠と市街を貫流して御荘湾へと至る、延長距離約17kmの中級河川、僧都川の右岸に形成された遺跡であって、そこから約1km下ると御荘湾すなわち海に至る。本来であれば汽水域に面すると考えられるが、現在は河中に堰が設けられているため、満潮時の海水の週上はそこまでである。しかし、この堰が無ければ、汽水域は貝塚より更に上流まで広がると考えられる。

この貝塚は、觀音岳から複雑な地形を成しながら南の御荘湾の方に向いて舌状に伸びる尾根筋の先端に形成された洪積段丘端部の平坦面に立地しており、貝層の厚さは頂部で薄く、緩斜面で厚いことが過去の調査において指摘されている。標高は頂部で8.35m、緩斜面では7.21mを測る。

貝塚の東側には和口川が流れしており、貝塚から和口川に向かって緩やかに降る地形であることから、貝塚が立地する段丘は、和口川がもたらした土壤の堆積とその侵食といった作用を受けていると考えられる。したがって平城貝塚は、東と南を河川に囲まれ、細長く入り込んだ御荘湾がすぐ足元にまで迫ることから、食糧の獲得はもちろん舟を使った移動に適した環境にあったと言える。

貝塚は、主として段丘頂部の平坦面から南西方向に広がる緩斜面に形成されていると考えられてきた。しかし、緩斜面は南東方向にも広がっていることから、その方向にも広がる可能性を考慮する必要がある。

次に、平城貝塚とその周辺における遺跡である。

この地域の大まかな傾向として、山岳部において遺跡は希薄であり、御荘湾岸とそれを望む丘陵に集中している。節崎遺跡・八幡野遺跡・長崎遺跡・貝塚遺跡・深泥遺跡・馬瀬遺跡等は、總てがそれらの環境下に立地する遺跡であって、ほとんどが縄文時代に属するものの、規模は小さい。

後期旧石器時代の遺跡は、和口西の駄場遺跡がある。在地の石材であるホルンフェルスを素材とし、瀬戸内地域をその中心とすることで知られる瀬戸内技法を用いて、石器を製作している。

縄文時代草創期の遺跡は、局部磨製石斧が採取された縁当时遺跡がある他、隆起線文土器や隆帶文土器が平城貝塚から出土していたことが、今回の報告で明らかにすることができた。



Fig. 1 愛南町内遺跡位置図

番号	名称	番号	名称	番号	名称	番号	名称
1	五輪墓跡（油袋342）	21	平城貝塚	41	鳶の巣城跡	61	梶郷駄場3遺跡
2	五輪墓跡（油袋515）	22	猪ノ尻遺跡	42	大谷の皆跡	62	茶堂Ⅱ遺跡
3	五輪墓跡（油袋369）	23	岡村松軒翁の墓	43	大森城跡	63	茶堂遺跡
4	白王山遺跡	24	法華寺遺跡	44	太郎谷皆跡	64	札掛遺跡
5	本谷しく様遺跡	25	日枝神社遺跡	45	一夜城跡	65	駄場遺跡
6	法華石城跡	26	日向谷遺跡	46	不老の皆跡	66	広見遺跡
7	鳥巣城跡	27	水の岡遺跡	47	愛宕山遺跡	67	猿越城跡
8	小山畠遺跡	28	源駄場遺跡	48	御陣山城跡	68	ナカシマ遺跡
9	矢落遺跡	29	大谷遺跡	49	数城跡	69	段ノ上遺跡
10	串ヶ岡城跡	30	和口西の駄場遺跡	50	御莊焼窯跡（豊田）	70	岭の城跡
11	風ヶ森城跡	31	安住寺五輪塔	51	御莊焼窯跡（長月）	71	ムソノ城跡
12	銭坪遺跡	32	水月城跡	52	御莊焼窯跡（一木）	72	伊予瀬路道銀自在寺道
13	小浦墓地（五輪塔群）	33	三島岡遺跡	53	緑城跡		
14	大島遺跡	34	常盤城跡	54	御莊焼早崎窯跡		
15	深泥Ⅱ遺跡	35	城辺小学校校庭遺跡	55	緑當時遺跡		
16	深泥遺跡	36	久保遺跡	56	太場遺跡		
17	馬瀬遺跡	37	鳥越遺跡	57	ホリキリ		
18	筋崎遺跡	38	高野長英基造の台場跡	58	大道下遺跡		
19	貝塚遺跡	39	天鏡の鼻砲台場石壘	59	梶郷駄場1遺跡		
20	八幡野遺跡	40	天鏡の鼻遺跡	60	梶郷駄場2遺跡		

表1 愛南町内遺跡一覧

縄文時代早期の遺跡は、平城貝塚と直線で約1.7kmの比較的近い距離に位置する深泥遺跡がある。早期から前・中・後期にかけての遺物が出土しており、特に姫島産黒曜石の出土では、四国屈指の遺跡として理解されている。

縄文時代前期から中期は、主となる遺跡は確認できないものの、その時期の遺物を有する遺跡は所在していることから、他の時期に比べて異なる生活様式があった可能性が考えられる。

縄文時代後期は、僧都川下流域において、平城貝塚の他に良好な後期縄文遺跡の調査は行われていないが、八幡野遺跡において縁帶文土器が採集されており、平城貝塚と関係する集落遺跡が存在する可能性を考慮しておく必要がある。

弥生時代は、沖積地の発達が極めて弱いため、そこに形成されるうる弥生時代の遺跡は確認できていない。しかしながら、町有形文化財として指定している城辺町内出土考古資料の内、不老池出土土器と愛宕山出土土器は、丘陵から得られたものである。また、遠賀川式土器が発見された法華寺遺跡も丘陵に所在する。このことから愛南町の弥生遺跡は、主に丘陵に所在した可能性が高い。

古代は基本的に不明である。しかしながら、7世紀の白鳳文化の作品とされる愛媛県指定有形文化財「銅造誕生釈迦仏立像」の存在は、この地で豊かな文化が営まれていたことを示すものである。

中世は、山城を中心とする。これらのほとんどは御荘氏によって築かれたものであり、土佐との境に数多く築かれている点は、土佐を治めていた長宗我部氏との攻防を如実に示すものである。山城の麓に存在していたであろう当時の集落の様相を伺うことはできないが、平城貝塚から出土した瓦器碗や土師質土器の存在は、観自在寺周辺の集落の所在を示すものとして理解できる。

引用・参考文献

- 井出耕二・松本安紀彦・高梨修・川上晃生 2020
報告「昭和初期の平城貝塚出土品の記録をめぐって－佐々木家所蔵の鶴久森熊太郎の臘写版より－」『遺跡』第53号 遺跡発行会 304-320頁
- 大野雲外 1917 「雑報 四國九州先住民遺跡」『人類学雑誌』第32卷第2號 東京人類学会 51・52頁
- 白井光太郎 1886 「石器考」『人類学会報告』第1卷第3号 人類学会 49-51頁
- 里見鉢子 2015 「『縄紋』から『縄文』への転換の実相」『岡山大学大学院社会文化科学研究所紀要』第39号 岡山大学大学院社会文化科学研究所 213-232頁
- 芹澤長介 1956 「縄文文化」『日本考古学講座』第3巻 河出書房 44-50頁
- 多田仁 2018 「愛南町における考古学史1－近代から現代の調査と研究－」『愛南町史』 愛南町 701-733頁
- 寺石正路 1891 「四國島貝塚の發見」『東京人類學會雑誌』7卷67号 東京人類学会 17-21頁
- 東京人類學會 1905 「雑報 大野延太郎君の四國旅行」『東京人類學會雑誌』20卷233号 491-492頁
- 長山源雄 1916 「平城貝塚調査報告」『伊豫史談』第7号 伊豫史談会 440-441頁
- 長山源雄 1924 「平城貝塚調査報告」『考古学雑誌』第14卷第11号 考古学会 703-712頁
- 長山源雄 1938 「上編 通史 第一章 先史時代 第一節 石器時代に於ける縄文式系文化」『南宇和郡史』 南宇和郡町村長會 1-9頁

第Ⅱ章 平城貝塚の既往調査等に係る報告

1. 土器の記述について

平城貝塚から出土した土器は、第1次調査の概要報告の際に“平城式土器”として型式設定され、その中で磨消繩文を持つ土器群を「第一類土器」、縁帶文土器を「第二類土器」、磨消繩文を有する浅鉢を「第三類土器」、口唇部に沈線文様を持った繩文のはほとんど認められない土器を「第四類土器」、繩文のみによって施文効果を挙げている土器を「第五類土器」とした（鎌木・西田1957）。

その後、第一類土器群を“平城Ⅰ式土器”、第二類土器群を“平城Ⅱ式土器”として型式設定され、現在までそれらの呼称が使用されている（犬飼1982）。

しかしながら、それら型式設定に用いられた資料が、本報告書が刊行されるまで公にされることなく、土器の系譜や時間的序列を論じるにおいて、それぞれの研究者によって平城式土器に対する認識と理解が異なってしまったため、これまで多様な研究が成されてきた。

本報告書においては、今以上の混乱を避けるために型式名を用いることはせず、まず出土経緯を明確にした上で、時代・時期・器種・部位・文様に従って記述を行った。平城式土器の定義については、巻末でまとめることとする。

2. 調査の記録について

第1次調査から第5次調査に至るまで、公式非公式を問わず関わり続けてきた郷土史家・中岡修也氏が、第5次調査実施の際に作成したメモが残されていた。このメモからは、開発が進んだために昔の景観を留めない平城貝塚の各調査地を突合するのに極めて有意である。

平成7年11月1日(水) 於：御荘町教委

平城貝塚の範囲内における発掘の記録メモ 文責 中岡修也

A (※ A 地区のこと、第1次調査の最も北の調査区 Fig. 2 の I a)

まず調査区の西端側面に南北のトレンチを設定し遺物の確認を試みる。その結果 342m² の敷地内で北半分を重点とすると決定される。

東西12m・南北30mの建築用地の調査区域内で北半の東西9m・南北15mの範囲を第1次の調査区と決定する。

まず、A区域で西側にそって南北1×10mのトレンチを設定する。更に巾1mと拡大する。翌日(2月24日)には、これを東西に拡げ、更に東南に延ばし、東側を南へと拡げる。(3月9日)4月7日には東端北より南に8mの位置に人骨を発見したが、下部は隣家に統いていたので作業を中止する。

註 この人骨が、昭和37年(第2次)に再発見・発掘となったものである。第4次の報告書P76一下より3行「今回発見(S56)された三体の人骨中一体は第2次の現場に当時確認されながら発掘に至らなかった云々…」とあるが、これは誤解であって、新聞発表・単行本も当を得ない。これらはF区域(第4次調査区)の人骨発見場所を確認すれば理解できよう。したがって、A区域の発掘及び工事基礎塚試掘調査をまとめると、32+24+28+18=102m²となる。

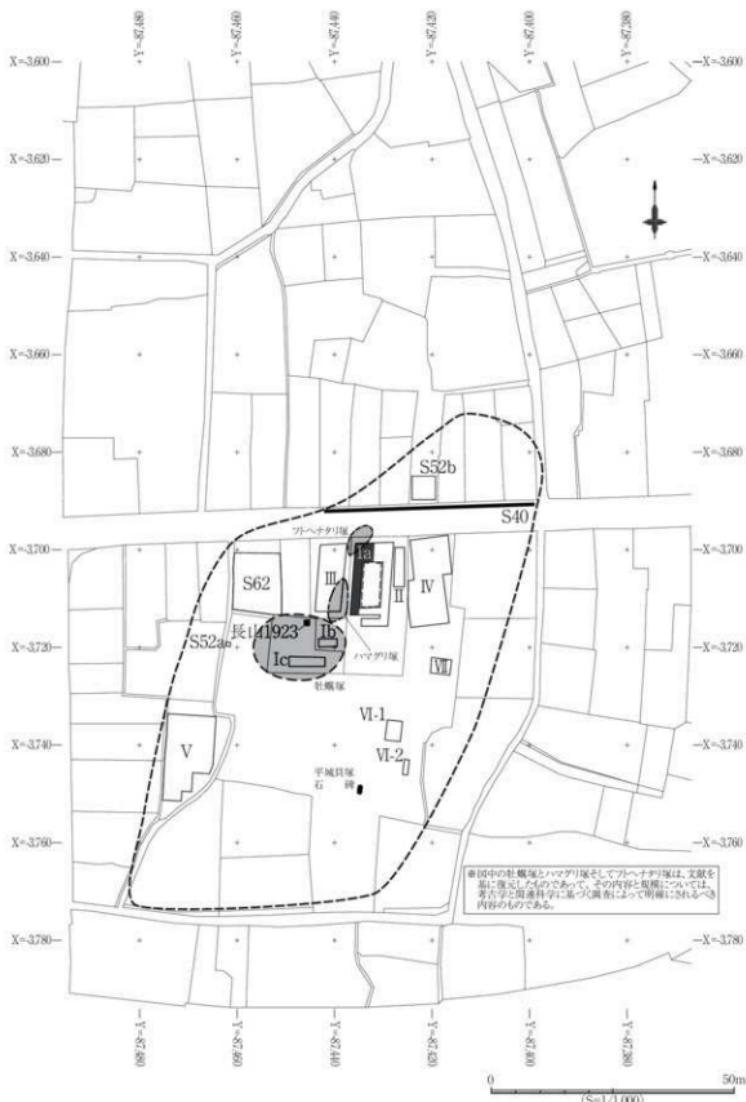


Fig. 2 平城貝塚調査区位置図（破線は、貝塚の想定範囲）

B(※第1次調査 Fig. 2 の I b)

B 区域は、中岡分担区で東西に 2×2 m の試掘トレンチの指示。結果的には更に表層のみであったが、 2×2 m を拡大する。・・・ 8m

C(※第1次調査 Fig. 2 の I c)

C 区域は本田分担区で 1.5×1.5 m の指示で試掘を開始するが、結果的には 2×2 m 位に拡大された。更に貝層調査のため 1×6 のトレンチを西方に進め、本田・中岡が合同で 1×6 と拡大し貝層調査となる。・・・ 16m

A+B+C=126m² となった。

D(※第2次調査 Fig. 2 の II)

人骨発見による発掘調査となった。一体目は銀行寄り東端より北 8m 南下コンクリート埠直下 (S 29 年残) 二体目は上記より 3m 北方でコンクリート埠より 2.5m 東・深さ 40cm ・・・ 14m

E(※第3次調査 Fig. 2 の III)

工藤タバコ店跡で周囲 2m を残し全面発掘・地籍図 132m² の内 91m² が発掘面積となる。整地後は銀行の駐車場として昭和 56 年まで使用。

F(※第4次調査 Fig. 2 の IV)

東西 8.5m・南北 18m を全面発掘・ 2×2 の 36 グリッド地籍図 172m² の内 153m² を発掘。人骨三体は C-2 区 (N 5 × E 5)・A-3 区 (N 7 × E 2)・D-3 区 (N 7 × E 7) より発見された。

G 省略(※第5次調査 Fig. 2 の V)

3. 第1次調査 (Fig. 3 ~40)

所 在 地 御荘平城 2080

調査面積 126m²

調査原因 民間開発 (金融機関の建設)

調査期間 第一期：昭和 29 年 2 月 20 日から同年 2 月 25 日まで

第二期：昭和 29 年 3 月 9 日から同年 3 月 11 日まで

第三期：昭和 29 年 4 月 7 日から同年 4 月 9 日まで

※第1次調査の調査期間計 3 期の標記方については、西田 1955 では第一次から第三次、鎌木・西田 1957 では第一期から第三期となっている。本報告書においては、調査の次数についてはアラビア数字で “次” と表記し、その内の期間については、鎌木・西田 1957 を踏襲し、漢数字で “期” と表記する。

調査主体 御荘町

調査担当 西田栄 (愛媛大学教授)

調査参加者 赤松亨 (平城小学校教諭)、市川学瑞 (南字和高校教諭)、本田多作 (城辺中学校教諭
別称 “南城”)、中岡修也 (御荘中学校教諭)、水田政章 (南字和高校教諭)

調査記録 西田栄 1954 「平城貝塚調査略報」 - (愛媛県南字和郡御荘町) - 『愛媛大学紀要第一
一部人文科学』第二卷第 1 号 愛媛大学 125-132 頁

西田栄 1955 「平城貝塚の發掘について - 中間報告 - 」『伊豫史談』第 139 號
伊豫史談会 1-12 頁

- 鎌木義昌・西田栄 1957 「伊豫平城貝塚」『瀬戸内考古学』創刊号 瀬戸内考古学会
1-16頁
- 鎌木義昌・西田栄 1957 「伊豫平城貝塚－縄文式土器を中心として－」
愛媛県御荘町教育委員会

調査概要

西田1955の日誌

二月二十日、土曜(晴)現地よりの招電にて夜到着、
翌廿一日、日曜(晴)予察のため現地廃屋に最も関係の深い実藤道久氏を訪ね、現場実見後過去における建造物の在り方既往の発掘状況等について承わる。
二月廿二日、月曜(晴)家屋東西に近接するため南北に通ずるA地点に試掘濠を作る。前建築基礎工事のコンクリート(厚さ約十五釐)の除去作業、人夫一、南字和高校生徒十数名加勢、純貝層と称すべきものを発見しえなかつたが混土貝層より可成り土器片を拾出す。
二月廿三日、火、(晴)隣接地区のB、C地点を中岡氏本多氏の手にて二米四方の濠各一を掘る。
純粹貝層に到達、人夫二、中学生十数名、高校生数名来援。
二月廿四日、水、(晴)前々日の試掘濠を東西に拡大す。小中学生並に大師祭による一般來観者多く混雜す。人夫二。
二月廿五日、木、(曇後小雨)雨模様にて作業持らず、人夫二、中学高校共に考古期にて加勢依頼無理。
三月九日、火、(晴)午後三時現地着、教育学部学生吉田省而君の協力で中学生近平君等二名と共に東へ拡大発掘。
三月十日、水、(雨)平城校赤松氏小学六年生を率いて協力していただいたが雨のため午後休止、人夫一名で東南へ拡大発掘。
三月十一日、木、(小雨)ぬかるみのため作業不能、発掘品一部整理後現地を去る。
四月七日、水(晴)午後三時現地着、建築物基礎工事中の現場の東端に頭蓋骨一発見、但しそれより下部は隣家の軒柱にて作業不能、前日にも同様のもの一部発掘ときく、
四月八日、木(晴)工事現場にて土層及出土物についての補充考察、包含物は過去に可成り移動せるものかと考えられる。午後中岡氏と基礎工事濠掘り中の工夫の突当てた人骨の発掘に着手。
四月九日、金(晴)人骨収納、出土品一部整理後午後現地引揚、この後にも人骨数体本田氏によって収納されたようであるが精査未完。

鎌木・西田1957の日誌

第一期(昭和廿九年二月二十一日 - 二十五日)は基礎作業 ABC 試掘壕並に擴大作業においてA地区北端並に西端に貝層整一ならざるも土器の收穫多く特徴的なものをも把握した。
第二期(同年三月九 - 十一日)は前記 A 地区の南方への試掘壕延長並東北への拡大発掘を行ったが魚骨を多くえた位で特記する程でなかった。学期末の関係で種々差支えがあり…
第三期(四月七 - 九日)新建設基礎塹に沿って採集中、貝層極めて薄く散布せる所にて頭蓋骨に遭遇せるも、隣家の側壁下に割込める爲め採掘完からず、次に同様の貝の稀薄にして土器も細片

散点せる中に発見せる頭蓋は最初縫合線を崩したが上半身は概ね完き形で収容することが出来た。これは表土から約一米の基層上に、上半身を水平にし、頭を東南にして全く静かな仰臥の姿勢であり、両腕は身に密接して伸ばし、両肩から手首の辺迄拳大の石を胸の周辺に接して並べ敷いてあつた点は極めて有意的な葬り方と思われた。

なお頭蓋の左下寄りに頭部よりやや大きい石を見出したが、頭部はこれに載らず隣接している程度であった。歯牙は完全に揃い抜歯の跡なく、その他の加工も見られなかった。腰椎以下は見出しえなかつたが、当時実物の鑑定を岡山大学の中島壽雄教官に依頼した結果、繩文時代の熟年男子という認定をいただいた。然しそれ以上にこの人骨については何の消息もえないので明かでない。

またこの遺体は下半身を欠如していて仰臥屈葬か仰臥伸展葬か明かにしえなかつたが、恐らく後者に属するものと考えられる。この欠如は過去の建築の際地固めか何かで逸失したものかと思われるが、前後に出土したものも下半身を収容しえず、また宿毛貝塚出土の人骨も同様であった由、全体の葬法を窺知しえないのは遺憾である。BC地点発掘の結果A地点と異なる所は貝の種類がカキを著しく増した以外に土器については余り変化を見出しえなかつたよう思う。其他A地点で小型の馬の歯牙を認めえたことは特記すべきことと考えられる。

調査の発端は、四国銀行御荘支店の建設工事にあり、その基礎工事に先立って調査が行われている。調査に際しては、事業者と地元はもちろんのこと、町行政の協力があった。

調査を主として行ったのは、西田栄と中岡修也そして本田多作であつて、A(Fig. 2 I a)・B (Fig. 2 I b)・C (Fig. 2 I c)の三地点について調査を行なっている。西田1955によると、それぞれにおいて主として調査を担当したのは、A 地点は西田、 B・C 地点は中岡と本田である。ただし、A 地点は西田のみであったのか、B・C 地点のどれを中岡と本田が担当したのか、または二人が共にそれを調査したのかについては記録されていないが、平成 7 年の中岡のメモから、B 地点は中岡の担当で、C 地点は本田の担当であつて、C 地点を拡張する際に中岡が加わっている。

これらの地点については、現在の考古学の見地に基づく記録は作成されていない。ただし分かっていることは、A 地点は最も北に位置しており、調査地において南北トレンチとも言うべき試掘坑を掘削してから東西に拡張している。貝塚の範囲が南北 90m 東西 50m と推定され、地形が北から南へ下がっていく以上、調査の早い段階で堆積を理解するには適切な試掘坑の設定であったと思われる。尚、ここでは混土貝層とフトヘナタリの純貝層が確認されている。

次に B・C 地点であるが、それらは A 地点の南に位置し、方形の試掘坑を掘削している。おそらくは、貝塚の広がりを確認することを目的としたのであろう。それは結果的に正解であったといえる。なぜならば、そこで純粹貝層を確認しており、牡蠣(鎌木・西田1957での“カキ”)が A 地点よりも著しく多い傾向が指摘されているからである。純粹貝層における主体が牡蠣であったとする記録は無いが、掘削面積からするとその可能性は高いと思われ、牡蠣を集中して採取していた季節ないしは時期があった可能性を考慮する必要がある。将来的に、その“牡蠣塚”的時代と採取の季節及び採取具を探ることにより、貝塚の新たな個性が明らかになると思われる。

遺物の出土地点及び層位に関する記録は無かった。このため、遺物に記された「1」等の墨書きに基づいてとりまとめ、それに則して記述した。

「1」(Fig. 3・4)

「1」は、16点を図示した。1から15は縄文時代のもので、16は中世のものである。

1から14は深鉢である。1から5は沈線文を施して区画を作り、縄文を磨り消す区画と残す区画を組み合わせた文様(以下、磨消縄文)、6から9は口縁部外面に文様をもつ縁帶文、10から12は縄文または擬縄文、13は無文であって、14は底部である。15は浅鉢、16は鉢である。



Fig. 3 第1次調査「1」出土遺物（1～8）

1は「一」と「東北端」という墨書きを有する他、土器の接合部に「×」を付けている。胴部に最大径を持つ寸詰まりの器形であって、外面にベンガラと思われる赤色顔料が付着しており、赤彩されていた土器である。胎土及び作りは精錬されたものであって、器面調整のミガキは内外共に光沢を呈する程に丁寧なものである。

口縁は、やや厚く作出しており、平縁に突起を有する。その数は4つであったと考えられる。頸部はミガキを施して無文であるものの、突起の下に橋状把手を作出していることから、この土器には把手が2ないしは4つあったと考えられる。

文様はRL地を沈線で区画して磨消繩文としている。

口縁部の文様は、平縁においては外面に一条の沈線を有する。沈線の下に繩文を施しているが、その上に繩文は認められない。突起には、上から見ると「U」字様の沈線を噛み合うように絡ませ、その外に繩文を施している他、突起頂部の下には焼成前穿孔を有する。尚、平縁と突起の沈線は連続せず、それぞれ独立したものである。

頸部の橋状把手の文様は、正面左から伸びてくる沈線に、橋状把手のみに施される沈線を絡ませるが、橋状把手の沈線と突起の沈線は関係を持たないため、突起と橋状把手の文様はそれぞれ独立したものである。但し、正面左から伸びてくる沈線は、平縁外面の沈線と関係を持つ可能性が高いと考えられる。尚、沈線の外は繩文を残すが、沈線が絡む中央部分は繩文を磨り消している。

胴部の文様は、波頭状文の意匠である。口縁部の突起そして頸部の橋状把手の下に配置されていることから、これらは器面において軸を同じくするものと考えられる。

2は胴上部であって、器形は1と同じと思われる。外面に施された文様は磨消繩文であって、RL地を沈線で区画して磨消繩文としている。外面にベンガラと思われる赤色顔料が付着しており、赤彩されていた土器である。

3は胴上部であって、器形は1と同じと思われる。外面に施された文様は磨消繩文であって、RL地を沈線で区画して磨消繩文としている。左右から伸びてくる沈線は、末端を巴様に取めて絡ませると考えられ、その文様の外部には波頭状文の系譜にある意匠を配置していたと思われる。

4は胴下部であって、外面に施された文様は磨消繩文である。RL地を沈線で区画して磨消繩文としている。沈線の末端は、3と同じ様に巴様に取めて絡ませると考えられる。

5は胴下部であって、器形は1と同じと思われる。胴上部の文様は、RL地を沈線で区画して磨消繩文としていた可能性が高く、その文様帯の下端として理解できる。文様帯の下は、巻貝条痕を綴く消しているが、内面は巻貝条痕が明瞭に残る。

6は縁帶文土器の口縁部である。口縁部外面に沈線を施し、主文様と従文様で構成される。主文様は、紡錘様の対弧文であって、その数は2ないしは4つであったと考えられる。それらを繋ぐよううに従文様があり、この土器では並行する2本の沈線である。外面の器面の状態が悪いため、そこに繩文を確認することができないが、強く面取りした口唇部にはLRが確認できる。よって、外面にもLRを施してから沈線文を施した可能性がある。尚、口縁部内面に沈線を一条施す。

7は縁帶文土器の口縁部である。外面に1を施してから沈線文を施し、更にその後にナデている。口唇部は面取りするが、緩いものである。

8は縁帶文土器の口縁部である。口縁部外面直下にやや幅広い沈線を一条施す。口唇部は強く面取りしている。

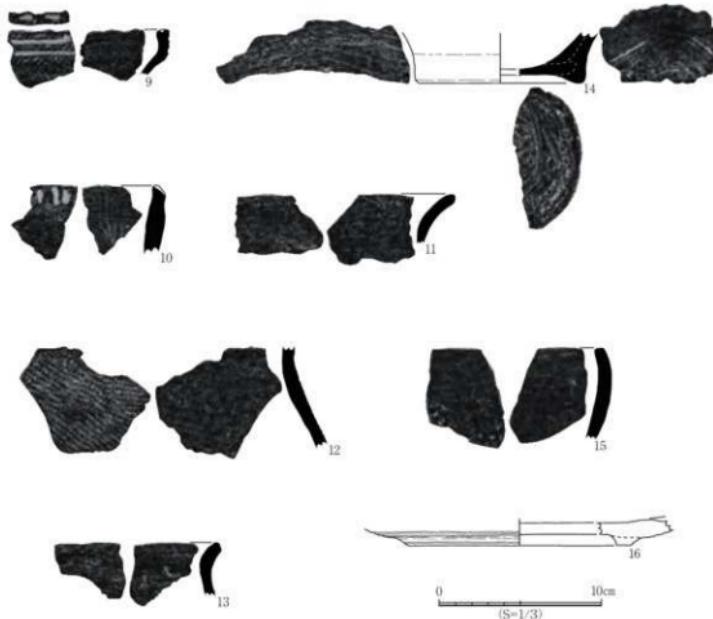


Fig. 4 第1次調査「1」出土遺物（9～16）

9は縁帶文土器の口縁部である。外反する頸部から上向に屈折する口縁部を作出しており、内面の粘土の接合部に見られる幅10mm程の横走する凹みは、指による撫でつけによるものであって、接合を強めるための所作の結果として考えられる。口唇部は緩く面取り、刺突文を有する。この文様は、口唇部を上方にし、右手で施文具を持ち、右から左に向かって刺突してつけたものである。口縁部外面はLRを施してから、二条の並行する沈線を施している。

10は内面に擬繩文を有する土器の口縁部である。外面端部を丸く取めて刻みを施すのに対して、内面はほぼ垂直に胴部へと向かう。内外面共に巻貝条痕が顕著であるが、内面には巻貝の回転圧痕が認められ、擬繩文様となっている。

11と12は外面に繩文を持つ土器である。11は口縁部を丸く作出して外端を面取りし、RLを施す。12は胴上部で、筋の太いRLを全面に施す。

13は無文つまり文様を持たない土器の口縁部である。外端を撫でて面取る。

14は底部である。凹み底であって、その中央の器厚は3mm強と著しく薄い。外面の巻貝条痕は顕著であり、内周部には石灰華が付着している。

15は口縁部である。端部が内済し、器形はボウル状である。胎土は精選されたもので、微細な金雲母を極めて多く含むため、自然光に晒した時に器面が輝く効果を狙った可能性がある。

16は鉢の底部である。瓦質土器であり、高台は貼付輪高台である。

「2」(Fig.5・6)

「2」は、20点を図示した。17から34は縄文時代のもので、35と36は弥生時代のものである。

17から32は深鉢であり、17から27は口縁部、28から30は胴部、31と32は底部である。33と34は浅鉢であって、いずれも口縁部である。35は甕、36は壺であって、いずれも口縁部である。

17は突起を有し、その数は4つ、そして突起の間は平縁であったと考えられる。突起には、沈線を絡ませており、上から見ると二筆で「S」字様の文様を描いている。沈線の外にはRLを施す。頭部は無文でミガキを施し、橋状把手を作出していたが剥落している。

口縁はやや厚く作出しており、RL地に沈線を施している。沈線下の縄文は明瞭に残るが、上の縄文は不明瞭であって、撫で消したものと考えられる。尚、平縁と突起の沈線は連続せずにそれぞれ独立したものであるが、平縁と橋状把手の沈線は連続していた可能性がある。

18は縁帶文土器の口縁部であって、波状口縁の波頂部である。口縁部外面に節の太いRLを施してから凹点と沈線を施しており、主文様と従文様で構成される。主文様は、波頂部下に凹点を施し、その左右に沈線を施す。凹点の外周に施された沈線は、反時計回りに一周するものの、その外側の沈線は弧状である。それらを繋ぐように従文様があり、この土器では並行する二条の沈線である。尚、この土器における沈線の端は明瞭ではなく、力を抜いて流すようなものである。

19は縁帶文土器の口縁部であって、「2」と「4」が接合している。波状口縁の波頂部であって、口縁部外面に節の粗いRLを施してから後に沈線を施しており、主文様と従文様で構成される。主文様は、波頂部下に菱形ないしは「V」字様の沈線を向かいあって配置していたものと考えられる。それらを繋ぐように従文様があり、この土器では並行する二条の沈線である。尚、この土器における沈線の端は、力を抜いて流すように収めている。

20は縁帶文土器の口縁部であって、波状口縁の波頂部である。波頂部の口唇には、幅10mm程度の緩い刻みを施すが、平縁の口唇は面取りを行い、RLを施す。口縁部外面の文様は、主文様と従文様で構成され、主文様は波頂部下に施された短い縱位の沈線である。それらを繋ぐように従文様があり、この土器では一条の沈線である。尚、この土器における沈線の端は、力を抜いて流すように収めている。波頂部下の頭部には、沈線とRLが施されているが、これは磨消縄文となり、その意匠は波頭状文の系譜のものと考えられる。

21と22は縁帶文土器の口縁部であって、いずれも口縁部外面に縄文を施してから沈線を一条施している。前者は波頂部に近く、後者は平縁である。特に後者の口唇は強く面取るもの、後の縄文の施文により粘土が被さっている。また、口縁部内面にも文様を持ち、縄文を施した後に沈線を一条施している。尚、縄文はRLである。

23は縁帶文土器の口縁部であって、波状口縁であったと考えられる。口縁部は、外面を丁寧に撫でた外反する頭部からやや上向きに粘土を積み上げて作出しており、外面に二条の沈線と刺突そして縄文が施されている。沈線は比較的深いものである。施文の順番は、上の一条目を施文してから縄文を施し、刺突を施す。それから二条目を施文している。口唇は緩く面取るが、施文は波頂部付近のみである。尚、縄文はLRである。

24は縁帶文土器の口縁部であって、短く外反する頭部から外向きに粘土を積み上げて突出させている。口縁部文様はその上面に描かれており、主文様と従文様で構成される。

主文様は、焼成前穿孔とその外に孔を囲うように描かれた弧状の沈線文であって、孔のすぐ外のものは「U」字様である。それらを繋ぐように従文様があり、この土器では一条の沈線である。尚、胴部と口縁部の一部にRLが施されている。



Fig. 5 第1次調査「2」出土遺物 (17 ~ 28)



Fig. 6 第1次調査「2」出土遺物（29～36）

25は外面に縄文のみを持つ土器の口縁部であって、丸く収めた口縁部外面を面取りし、そこに筋の太いRLを施す。

26は外面に刺突文のみを持つ土器の口縁部であって、丸く収めた口縁部の外面に、中空の原体で右下から左上に向けて刺突を加えている。

27は無文の土器の口縁部である。口唇部を極僅かに面取りしている。

28は胴下部であり、RL地を沈線で区画して磨消縄文としている。意匠は波頭状文の系譜のものと考えられる。

29は頸胴部であり、「2」と「7」が接合している。接合部分には、「×」等の印がある。頸部は弱く外傾しており、頸胴部との境に沈線を施す。胴部には、三条一対の沈線で逆「V」字様の文様を描くが、胴上部にある可能性が高い最大径部より下に伸びることはない。尚、胴上部の沈線文を描いた後で頸胴部の沈線を施しており、この沈線には頸部と胴部を区切る意図があったと思われる。沈線脇の粘土のはみ出しあは、その上を軽く撫でたのみであって、土手状の盛り上がりとして明瞭に残っている。

30は胴上部である。LRを施した後に沈線で渦文を描く。沈線は、左右から延びてきたものが渦として絡んだものと考えられる。

31と32は底部であり、いずれも凹み底である。31は、弱く外傾しながら胴部へと立ち上がっていくと考えられ、底部内周を卷貝で撫でている。32は、弱く外反しながら胴部へと立ち上がっていくと考えられる。底部外周を卷貝で横位に撫でているが、そこから上は縱位に撫でている。

33はボウル形の器形であって、胴部に最大径を有する。外面は、縄文を施した後に沈線で区画して磨消縄文としている。尚、縄文はRLであり、内面には石灰華が付着している。

34は皿形の器形であり、口縁部に最大径を有する。RL地を沈線で区画して磨消縄文としている。口縁部には、突起ではないものの、際立った文様を施す箇所が4つあると考えられる。その文様は、内側と口唇からそれぞれ一条ずつ沈線が延び、口縁部外面を経由しながら口唇部で絡む。上から見ると「U」字様の沈線を噛み合うように絡ませており、その外に縄文を施している。所々ベンガラと思われる赤色顔料が付着しているため、赤彩されていた土器である。

35・36は口縁部であって、35は内外共にハケで撫でる。外面にタタキが認められるため、弥生時代後期のいわゆるタタキ壺のものとして考えられる。36は頸部外面をハケで縱位に撫で、口縁部内面をハケで横位に撫でる。頸部は口縁部に向かって大きく外反する器形であるため、弥生時代後期の壺のものとして考えられる。

「3」(Fig. 7・8)

「3」は25点を図示した。37から58そして61は縄文時代、59は弥生時代、60は中世のものである。

37から52は深鉢である。37から48は口縁部であって、37から44は縁帶文、45と46は縄文、47と48は無文である。49から52は頸胴部であって、49は沈線文、50と51は縄文、52は無文である。53と54は鉢で、いずれも口縁部である。55から58は浅鉢であり、いずれも口縁部である。

37は波頭部である。口縁部文様は、RL地に主文様と従文様で構成され、主文様は、沈線で描いた「S」字様である。沈線は内面から始まり、口唇に到るものと考えられ、おそらくは欠損した部分に外面から始まる沈線があり、口唇で両者が繋がるものと考えられる。

その文様の左右には短い沈線を3つ施し、主文様を一条の沈線で繋ぐ。頭部には、沈線と縄文が施されており、その意匠は波頭状文の系譜にあるものと考えられる。

38は波頂部である。口縁部文様は、RL地に主文様と従文様で構成され、主文様は円孔ないしは円文であると思われる。それらを繋ぐように並行する二条の沈線を施して従文様としている。口唇部を緩く面取る。

39は波頂部である。口縁部文様は、RL地に主文様と従文様で構成され、主文様は円孔ないしは円文であると思われる。その左右を、少なくとも二条の弧状の沈線で囲む。それらを繋ぐように従文様があり、この土器では並行する二条の沈線である。尚、この土器における沈線の端は、力を抜いて流すように収めているが、上の沈線は口唇、そして下の沈線は頭部に向いて回り込むように収めている。

40は波頂部である。口縁部文様は、主文様と従文様で構成されており、主文様は円形の刺突である。それらを繋ぐように従文様があり、この土器では一条の沈線であって、沈線の端は口唇に向けて跳ね上がるよう収めている。胴部はRL地に沈線で磨消縄文を描いている。

41は平縁であって、口縁部外面に一条の沈線を施す。

42は波頂部である。口唇部は強く面取りし、頭部に刻みと、その左右にRLを施す。外面には、RL地に「V」字を横にして開いた方を向き合わせた文様を沈線で描く。沈線端は巴様に収めて絡ませている。内面はRL地に沈線を施す。

43は波状を呈する。口唇部は強く面取りする。内外面には、RL地に一条の沈線を施す。

44は波状を呈する。口唇部を広く作出して丸く収め、そこにサルボウ等の肋条が顕著な二枚貝の殻腹縁で、鋸歯状文を施す。

45は波状、46は平縁である。いずれも口縁部を厚く作出し、口唇部は面取りする。そこと口縁部外面にRLを施す。

47は平縁である。口縁部は丸く収めるものの、内面は削って段を作出している。

48は平縁である。小形の深鉢である。

49は外面に直線状の沈線文を有する。

50は頭胴部で、RLを横位と縦位を交互に繰り返して施し、羽状縄文としている。

51は胴下部で、下半分は撫で消している。RLを撫する際に折り曲げた原体の部分が明瞭に残る。

52は頭胴部であり、その境に最大径を有すると考えられる。接合部に微隆起を作出しているが、これは接合部分の面積を広くして、接合の強化を意図していると考えられる。

53は波頂部である。口唇は強く面取り、頭部に刻みを施す。口縁部文様は、RL地に主文様と従文様で構成される。主文様の意匠は、沈線で「V」字を描き、それを横にして開いた方を向き合わせたものであって、沈線の端は巴様に収めて絡ませたものであったと考えられる。口縁部文様の下の沈線は、頭部との区画を意図したものとして考えられる。

54は平縁であって、口唇を強く面取る。口縁部文様は、肥厚させた口縁部の外面に有し、主文様と従文様で構成される。主文様は円文であったと考えられ、その両脇に縦位の沈線を施している。それらを繋ぐように、沈線で描いた長條円文を従文様とする。尚、縄文は、巻貝の回転摺縄文である。



Fig. 7 第1次調査「3」出土遺物（37～60）

55と56は鉢形の器形である。いずれもRL地を沈線で区画して磨消繩文としている。

57はボウル形の器形である。口縁部外面直下に横走する沈線を施してから、その下に右斜行の沈線を施す。

58は鉢形の器形である。口唇を強く面取り、口縁部外面にLRを施す。

59は口縁部であって、内外共にハケで撫てる。外面の一部にタタキが認められるため、弥生時代後期のいわゆるタタキ甕のものとして考えられる。

60は口縁部であって、口縁を厚く作出し、口唇を強く面取る。内外面が廻されているため、瓦質の鉢のものとして考えられる。

61は磨製石斧である。石材はホルンフェルスであり、上端は平らに成形して研磨している。表面には線条の敲打痕が認められる。

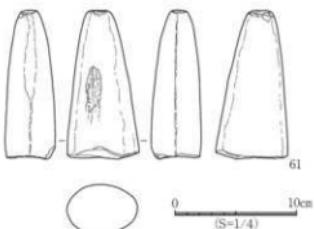


Fig. 8 第1次調査「3」出土遺物（61）

「4」(Fig. 9)

「4」は、11点を図示した。全て縄文時代のものであって、62から69は深鉢、70は鉢、71と72は浅鉢である。

62は突起を有する波頂部であって、突起以外の口縁は口唇を強く面取る。突起には裾を取り巻くように沈線を施す他、頂部上面にも沈線で文様を描いている。突起下の口縁部外面には中空の原体で円形の刺突を施し、その両脇にはRL地に一条の沈線を施す。口縁部内面にも沈線を一条施す。

63と64は平縁であって、いずれも口縁を幅広く作出し、そこに主文様と従文様を描く。63の主文様は、9本程度の幅狭の沈線を1単位し、それを鋸歯状に施したものであって、口縁部に4つ施されていたと考えられる。それらを繋ぐ従文様として一条の沈線を施すが、その端に施された円形刺突は、沈線よりも先に施されている。64の主文様と従文様は63と同様であるが、沈線の端に施された円形刺突は沈線よりも後である。また主文様下の頸部には、12本以上の条線を頸部の下から上に向かって施しており、一部は幅広く作出した口縁部下で刺突様となっている。

65は平縁であって、口唇を強く面取りしてからRLを施している。また、口縁部外面には沈線を一条施すが、それを塞ぐように粘土塊を添付している。

66は胴上部であり、外面にRLを施してから、主文様と従文様を描く。主文様は、先端を渦巻様に収めた沈線文であって、その横には沈線で長楕円文を描き、従文様としている。

67と68は平縁であって、67は口縁部内外面にRLを施し、口唇部を強く面取る。68は口縁部内面にRLを施し、口唇を強く面取りした後に繩文を施す。

69は凹み底である。粘土を上げ底様に作出し、その上に粘土紐を積み上げた結果として、底内面の中央が凸状になると考えられる。

70は平縁であって、口唇部を強く面取りしてからRLを施している。体部外面にもRLを施す。

71は鉢形の器形である。LR地を沈線で区画して磨消繩文としている。沈線内に赤色顔料が残ることから、赤彩されていたことが分かる。

72は皿形の器形である。沈線を施した後に、筋の細かいRLを施している。

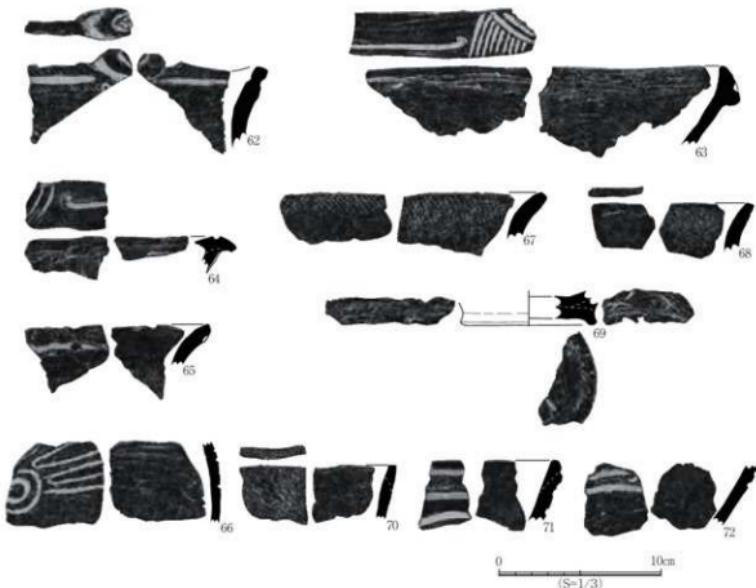


Fig. 9 第1次調査「4」出土遺物 (62～72)

「5」(Fig.10)

「5」は、7点を図示した。全て繩文時代のものであって、73から78は深鉢、79は浅鉢である。

73は、土器の接合部に「○」を付けている。胴部に最大径を持つ寸詰まりの器形であって、内外面にペンガラと思われる赤色顔料が付着しており、赤彩されていた土器である。胎土及び作りは精鍛されたものであって、器面調整のミガキは内外共に光沢を呈するほどに丁寧なものである。

口縁は、やや厚く作出し、外面にRLを施してから沈線を施すが、繩文が残るのは沈線下のみである。突起を有しており、その数は4つであったと考えられる。突起には、上から見ると「U」字様の沈線を噛み合うように絡ませ、その外に繩文を施している他、4つの中空の原体による刺突の後に焼成前穿孔を施している。尚、平縁と突起の沈線は連続せず、それぞれ独立したものである。

胴部は、RL地を沈線で区画して磨消繩文としている。その意匠は、波頭状文であって、口縁部突起の下に配置されていることから、突起と波頭状文は軸を同じくするものと考えられる。

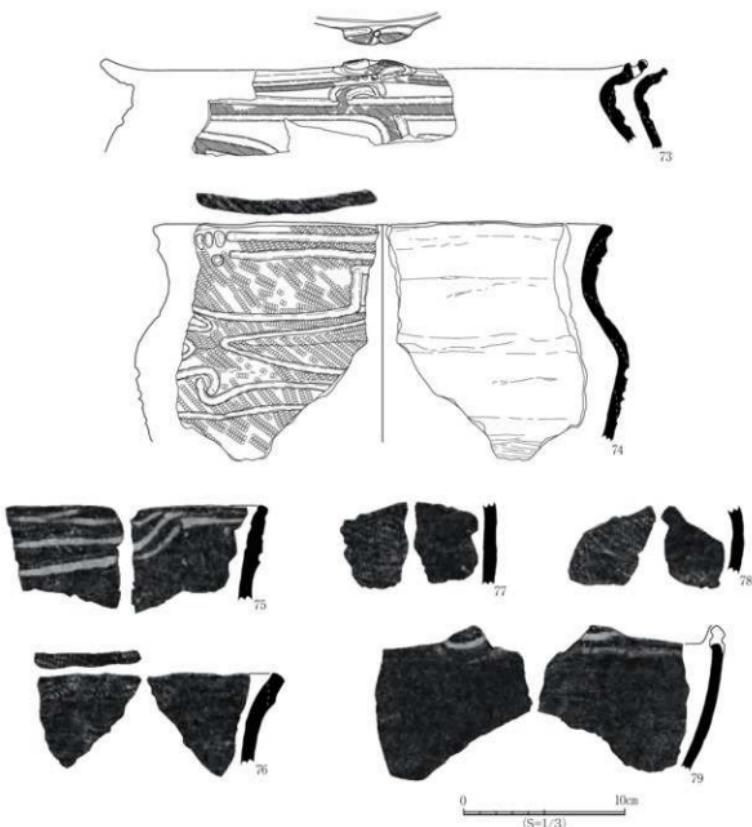


Fig.10 第1次調査「5」出土遺物（73～79）

74は平縁である。口唇部を強く面取り、RLを施す。口縁部文様は主文様と従文様で構成されており、従文様である並行する沈線を二条描き、それから少なくとも3つで一単位となる継位の短沈線と中空の原体を用いた円形刺突を組み合わせたものを主文様としており、器面に4つあったと思われる。

頸部には胴部文様と繋がりのある文様を少なくとも2つ描くと思われ、その意匠は波頭状文の系譜が考えられる。

胴部文様は、下端の沈線で文様帶が区切られ、その上に文様が集約されている。下端の沈線の真上にある沈線は、左右から延びており、それらの端部を巴様に丸めて締ませている。その上にある沈線文の意匠は、波頭状文の系譜にあるものを互いに向き合わせたものであったと考えられる。

75は平縁である。口唇部を強く面取る。口縁部外面に卷貝の回転圧痕による擬縄文を施し、沈線を三条施す。口縁部内面にも文様を有し、主文様と従文様で構成される。

従文様は二条の沈線を並行させたものであるが、主文様においては三条目の沈線の出現ないしは二条の沈線のうち片方が巻き返す意匠で、撓むような文様を描いている。「五」の他に、「中貝（貝中？）」や「H…10…」という墨書がある。

76は平縁である。口唇部を強く面取り、卷貝の回転圧痕による擬縄文を施す。口縁部はやや厚く作出し、外面にも卷貝の回転圧痕による擬縄文を施す。

77と78は胴部であって、いずれも外面に、卷貝の回転圧痕による擬縄文を施す。

79はボウル形の器形である。口縁部は平縁で、そこに粘土を積み上げて突起を作出している。突起は4つあったと考えられ、いずれも内外に沈線とその間にRLを施す。体部は無文であるが、丁寧に磨かれており、赤彩されていたと考えられる。

「6」(Fig.11)

「6」は1点を図示した。

80は縄文時代の深鉢の胴上部である。RL地に三条の沈線を施す。



Fig.11 第1次調査「6」出土遺物 (80)

「7」(Fig.12・13)

「7」は17点を図示した。全て縄文時代のものである。81から93は深鉢であり、81から92はその口縁部、93はその底部である。94から97は浅鉢であり、94から96は口縁部、97は胴部である。

81は突起を有する波頂部であって、口縁部全体を厚く作出している。突起には、「U」字様の沈線を噛み合う様に絡ませ、突起の内面に施された円形刺突に至る。もう1つの沈線は、突起頂部から口唇を跨いで突起下外面で弧状沈線となる。いずれも沈線の外にRLを施す。平縁の口唇部を強く面取り、外面にRLを施した後沈線を施すが、沈線の下にのみ縄文を残す。頭部には、波頭状文の系譜にある意匠を描く。

82は波頂部であって、口縁部全体を厚く作出している。波頂部には焼成前穿孔を有する他、直線的な沈線を絡ませる。波頂部外面には、沈線を一条施すが、これは平縁においても同様であると考えられる。頭部には、波頭状文の系譜にある意匠を描く。

83は波頂部である。口唇部はやや強く面取る。口縁部外面の文様は、主文様と従文様で構成される。主文様は、RLを施した後に中空の原体を用いて円文の刺突をし、その左右を弧状沈線で閉む。それらを繋ぐように従文様を施すが、この土器は一条の沈線であって、その端は上方に跳ね上がる。頭部は基本無文であるが、波頂部下に沈線文を施すと考えられる。

84は波頂部である。口縁部外面の文様は、主文様と従文様で構成される。主文様は、弧状沈線を紡錘状に向き合わせたものとして考えられる。それらを繋ぐように二条の沈線で従文様を施す。



Fig.12 第1次調査「7」出土遺物（81～93）

85は平縁である。口縁部を厚く作出しており、その外面に沈線を一条施す。その下にも沈線を施すが、口縁部のものよりも深いため、口縁部と頸部を区画する意図があると思われる。

86は波頂部近くの口縁である。口唇部を強く面取るが、端は丸く收めている。外面には、LR地に沈線を三条施している。

87から90は平縁であり、口縁部に縄文のみを有する。

87は口唇部を面取り、口唇部と外面にRLを施す。

88は口唇部を面取り、口唇部と外面及び内面に筋が細いLRを施す。

89は口縁部を厚く作出し、口唇部を強く面取る。口唇部と口縁部外面そして胴部にRLを施す。頸部は基本施文されず、丁寧に撫でられている。

90は口縁部外面を面取りし、LRを施す。面取りする前は、玉縁状になっていたと思われる。

91は寸胴形の器形になる可能性が考えられ、厚く作出した口縁部上面に、右斜行の短い沈線で刻みを施す。

92は口縁端部が比較的強く外反する。精選された粘土を使用している。

93は凹み底である。内外ともに丁寧に撫でられている。内面の凹みについてレプリカ法で種実同定を行なった(第Ⅲ章)。

94はボウル形の浅鉢である。平縁に突起を有する。突起には、「U」字様の文様を沈線で描き、噛み合う様に絡ませる他、外面に円形の刺突を施す。沈線の外にはRLを施す。体部外面は磨消繩文となっており、意匠は波頭状文の系譜と考えられる。尚、ベンガラと思われる赤色顔料が残ることから、赤彩されていた土器である。

95はボウル形の浅鉢である。口縁部外面を肥厚させて隆帯様にし、端部を丸めて收めている。

96は皿形の浅鉢である。内外共に巻貝条痕が顯著に残るため、粗製のものである。

97は皿形の浅鉢である。外面に沈線を施した後に、RLを充填して磨消繩文としている。

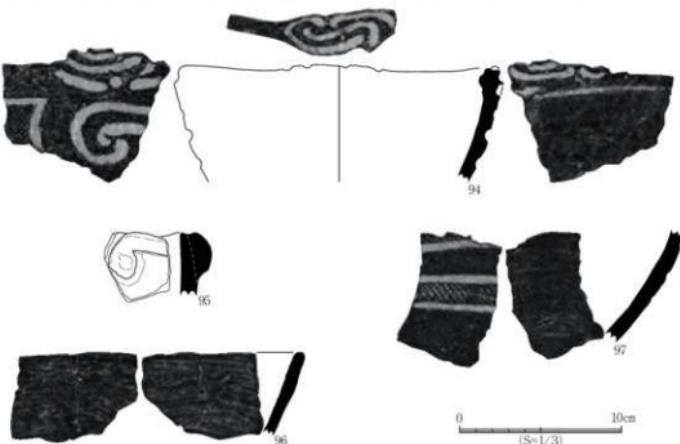


Fig.13 第1次調査「7」出土遺物 (94～97)

「8」(Fig.14~16)

「8」は40点を国示した。98から136は縄文時代、137は弥生時代である。「8」の中には、「8ノ上」、「8ノ下」等と墨書したものがある。

98は深鉢口縁部で、口唇部を強く面取る。口縁部外面に粘土帯を三条貼付して隆帯を作出し、卷貝の回転圧痕で刻みを施している。草創期の隆帯文土器である。

99は深鉢口縁部で、波頂部である。口縁部は厚く作出しており、全体にRLを施す。波頂部には、外面から内面にかけて沈線を絡ませる。平縁の外面にも沈線を施すが、端部を口唇部に向かって丸く収めるため、波頂部の文様とは連続しない。頸部にも沈線を施しており、波頭状文の意匠を描いていたと考えられる。

100は深鉢口縁部で、波頂部である。口縁部は厚く作出しており、全体にRLを施す。波頂部外面には少なくとも7つの涙滴状文を沈線で描いた後、波頂部に沈線を絡ませる。平縁には沈線を施すが、波頂部の沈線とは連続しないと思われる。頸部には、波頂部下に沈線で波頭状文の意匠を描くが、その両脇に垂下する沈線を施している。

101は深鉢口縁部で、波頂部である。口縁部はやや厚く作出しており、全体にRLを施す。波頂部外面には少なくとも3つの涙滴状文を短沈線で描く。波頂部には沈線を絡ませる。平縁には沈線を施すが、波頂部の沈線とは連続しないと思われる。頸部には、波頂部下に弧状の沈線を施しているため、波頭状文の意匠を描いたものと考えられる。

102は深鉢口縁部で、波頂部である。口縁部はやや厚く作出しており、全体にRLを施す。波頂部外面に3つの涙滴状文を短沈線で描いた後、波頂部に沈線を絡ませる。平縁には沈線を施すが、波頂部の沈線とは連続しない。頸部には、波頂部下に沈線を施しており、波頭状文の意匠を描いたものと考えられる。赤色顔料が残るため、赤彩されていた土器である。

103は深鉢口縁部で、波頂部である。口縁部は薄く仕上げられており、外面と面取りした口唇部にはRLを施す。波頂部外面には、沈線で円文を描いたものを弧状の沈線で囲み、主文様としている。従文様は、沈線で長梢円文を描いたと考えられる。口唇部には刻みを施す。波頂部下の頸部には、沈線で波頭状文の意匠を描くが、その脇には垂下する沈線を施しており、それは波頭状文の両脇にあったものと考えられる。口縁部内面には沈線を一条施す。

104は深鉢口縁部で、平縁である。外面には主文様と従文様を配置しており、主文様は沈線で描いた多重円文である。従文様は沈線で長梢円文及び一条の沈線を施す。

105は深鉢口縁部で、平縁である。広く作出した口縁部外面に、主文様と従文様を施す。主文様は円形の刺突文であって、従文様は、端部が口唇に向かって立ち上がる一条の沈線である。精選された粘土を使用しており、器面調整も丁寧な磨きであるため、精製土器として考えられる。

106は深鉢口縁部で、平縁である。口縁部はやや厚く作出しており、全体にRLを施す。外面の文様は主文様と従文様で構成され、主文様は中空の原体を用いた円形刺突文であって、従文様は一条の沈線である。頸部には浅い沈線を施す。

107は深鉢口縁部で、平縁である。口縁部はやや厚く作出しており、全体にRLを施す。外面の文様は主文様と従文様で構成され、主文様は沈線で描いた円文、従文様は長梢円文と考えられる。

108は深鉢口縁部で、波頂部である。外面の文様は主文様と従文様で構成され、主文様は2個の凹点である。これらを繋ぐ従文様は一条の沈線である。



Fig.14 第1次調査「8」出土遺物（98～111）

109と110は深鉢頸胴部である。109は頸胴部間に、沈線を胴部文様を描いた後に施しており、頸胴部を区画する意図があるものと考えられる。胴部は、LR地に沈線で文様を描いており、その意匠は多重の斜行文であった可能性が考えられる。110はLRを施した後に沈線で区画し、磨消縄文としている。

111は深鉢胴下部であって、外面にRLを施した後に沈線で区画し、磨消縄文としている。底部との接合面は、凹凸を作り出して接合面積を増やしている。

112は深鉢口縁部で、突起を有する。口縁部は厚く作出し、丸く収めている。突起は破損しているものの、平縁の外面に施されている沈線が突起まで伸び、クラシック様の沈線文として絡んでいたものと考えられる。頸部は無文であるが、突起下には橋状把手を作り出しており、二条の沈線で渦文を描いているが、口縁部と胴部の文様は連続しない。胴部には沈線でクラシック様の文様を描く。

113は深鉢頸胴部で、外面に二条以上の沈線で文様を描いており、その意匠は平行文と渦文を組み合わせたものである。

114と115は深鉢口縁部で、いずれも平縁である。114は口唇部を強く面取り、卷貝を回転させた擬縄文を施す。口縁部外面直下にも卷貝の回転擬縄文を施し、その下に鋭角な沈線を一条施す。口縁部内面直下にも沈線を一条施す。

115は口唇部を丸く収め、その外面に沈線を二条施して区画している。区画内は無文であるが、その外にはLRを施している。

116から119は深鉢口縁部で、いずれも平縁である。116と117は口唇部に文様を有しており、116は刻みである。117は口唇部から内端への沈線で描いた刻みである。118と119は口縁部外端に文様を有する。118は、外面をやや厚く作出して丸く収めたところへ鋭角な刻みを施している。119は、口唇部を強く面取りし、その外端へ刻みを施す。

120から129は深鉢で、縄文のみ施す。120から126はその口縁部であり、120はやや厚く作出した幅広の口縁部と胴部の外面に、RLを施す。121は緩い波状口縁の波頂部であって、口唇部を面取りし、口縁部外面と胴部外面にRLを施す。122は平縁であり、胴部外面にLRを横位と縱位に交互に施して羽状縄文としている。123は平縁であり、口縁部外端を強く面取りしてRLを施している。124は緩い波状口縁であり、口唇部を緩く面取りする。口縁部外面にRLを施すが拂で消している。125は平縁であり、口唇部を強く面取りしてRLを施し、口縁外面にもRLを施す。126は緩い波状口縁の波頂部である。口唇部を緩く面取り、内外面に卷貝を回転させた擬縄文を施す。127は頸胴部であり、胴部外面にRLを横位と縱位を交互に施して羽状縄文としている。128と129は胴部であり、128は胴部に最大径を有していたと考えられ、外面にLRを横位と縱位を交互に施して羽状縄文としている。129は胴部であり、外面に卷貝を回転させた擬縄文を施す。130は胴部であり、内外面の卷貝条痕が顕著である。131は底部であり、貼付高台である。

132から135は浅鉢である。132と133はボウル形の器形である。132は平縁であるが、文様を有する部分があり、沈線で外面から口唇部まで紡錘状に区画し、その中にRLを施す。文様は4つあったと考えられる。133は口唇部を丸く収め、内面に段を作り出している。外面にRLを施した後に沈線で区画し、磨消縄文としている。赤彩されていた土器であって、内面に石灰華が付着する。134と135は皿形の器形である。134は、口縁の一部に粘土の添付が認められるため、平縁に突起を有していたと考えられる。135は口縁部の外端を丸く収めるが、内端は鋭角になっている。



Fig.15 第1次調査「8」出土遺物 (112 ~ 130)

136は注口付土器の胴上部と考えられ、LR地に沈線で文様を施す。

137は堀口縁部である。外面に粘土帯を添付して突帯を作出し、端部に刻みを施す。

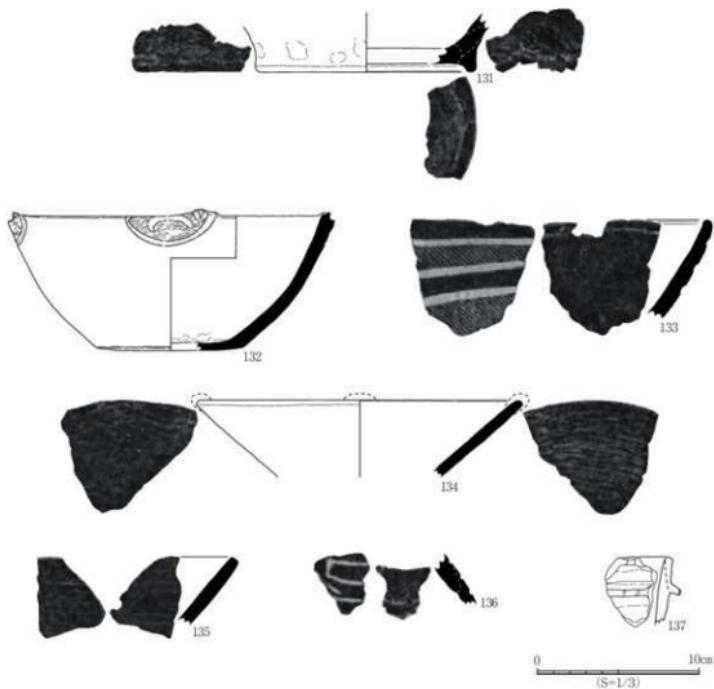


Fig.16 第1次調査「8」出土遺物（131～137）

「101」(Fig.17~20)

「101」は40点を図示した。全て縄文時代のものである。

138は深鉢胴部であり、外面に節の太いLRを施す。幅12mmの粘土帯を一条添付し、その上を半截した竹管状の原体で逆C字状の細かい刺突を施す。

139は深鉢であり、胴上部に最大径を有する寸詰まりの器形である。口縁部はやや厚く作出し、緩い波状で波頂部を有する。平縁は、RLを施した後に沈線を一条施すが、沈線の下のみに縄文が残る。波頂部には沈線を絡ませる。波頂部に絡んだ沈線は、波頂部下に4つの短沈線で施された涙滴状文の1つに繋がるが、平縁と波頂部の文様は連続しない。頸胴部は沈線で区画して磨消縄文としており、その意匠は波頭状文の系譜のものである。尚、胴下部の沈線から下は無文である。

140は小形の深鉢であり、胴上部に最大径を有する寸詰まりの器形である。口縁部はやや厚く作出し、緩い波状を呈するが、波頂部は欠損している。平縁は、外面にRLを施してから沈線を一条施し、その下のみ縄文を残す。この沈線は突起に絡んでいた可能性を考えられ、波頂部下の橋状把手には平縁からの沈線が絡み、胴部文様と連続している。胴部文様は磨消縄文であるが、その意匠は角丸の二等辺三角形である。

141は深鉢であり、胴上部に最大径を有する寸詰まりの器形であって、橋状把手を有する。口縁部は厚く作出し、丸く收めている。平縁には突起を作出しており、口縁に4つあるものと考えられる。突起には、沈線でクランク状文を描いているが、平縁の外面に施されている沈線とは連続しない。橋状把手には二条の沈線で渦文を施している。胴部にも、沈線でクランク様の文様を描く。

142は深鉢であり、胴上部に最大径を有する器形である。口縁部はやや厚く作出し、口唇部を強く面取る。口唇部と口縁部外面にはRLを施し、口縁部外面に主文様と従文様を有する。主文様は三条の短沈線であって、従文様は長楕円文である。頸部は撫でて整えて、上下二段に中空の原体で刺突を施している他、胴部との境に沈線を施しており、頸胴部を区画する意図があると考えられる。胴部はRLを施し、沈線で文様を描く。主たる文様は、左右から延びてきた沈線の端部を巴様に丸めて絡ませたもので、その下の沈線で文様帶の下端を区切ったものと思われる。

143は深鉢であり、胴上部に最大径を有する器形である、口縁部はやや厚く作出し、口唇部を強く面取る。口縁部外面に主文様と従文様を有する。主文様は円形刺突であり、従文様は一条の沈線である。頸部は無文であるが、胴部との境に沈線を施しており、頸胴部を区画する意図があると思われる。胴部には沈線で文様を描く。最も下端の沈線で文様帶が区切られ、その上部に文様が集約されている。真中の沈線は、左右から延びており、それらの端部は巴様に丸めて絡ませている。

144は深鉢であり、口縁部外面にRLを施した後、沈線を一条施す。口唇部は緩く面取り、丸く收めるが、内端は段状となっている。

145は深鉢であり、口縁部外面にRLを施した後、沈線を一条施す。口縁部は緩く面取り、丸く收めている。尚、この土器は波状口縁であって、突起を有していた。その外面には沈線で涙滴状文を施している(PL.10 参照)。

146は深鉢波頂部である。口唇部は緩く面取り、頂部には刻みを施す。口縁部外面にrを施した後、沈線で文様を描く。沈線の端は巴様に収めて絡ませていたと考えられ、その意匠は「V」字を横にして開いた方を向き合せたものであった可能性がある。

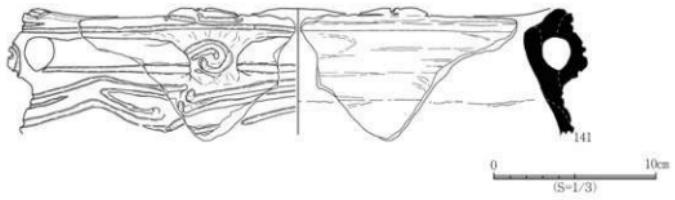
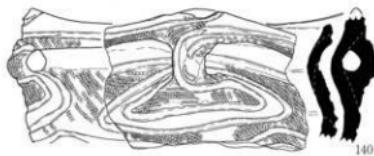
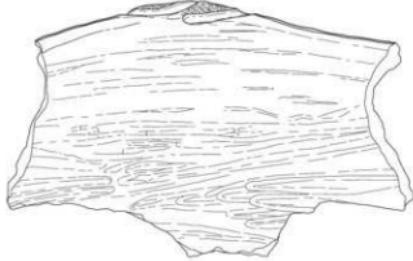
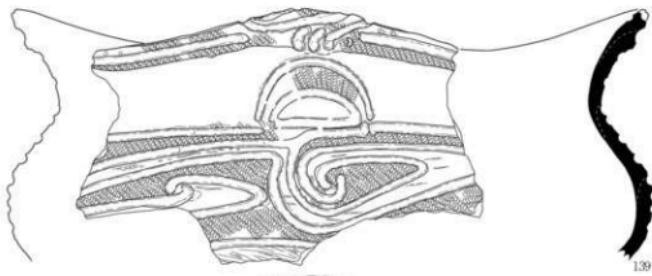


Fig.17 第1次調査「101」出土遺物（138～141）

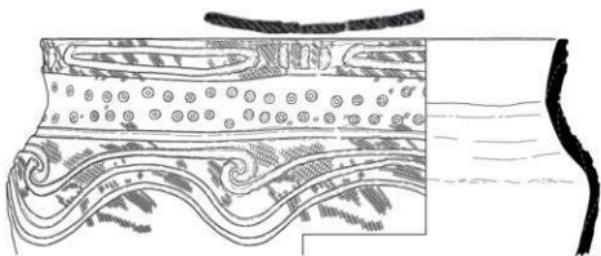


Fig.18 第1次調査「101」出土遺物（142～145）

147は深鉢であり、口唇部を強く面取る。口縁部外面をやや薄く作出し、RLを施した後、沈線を二条施す。

148は深鉢である。口縁部はやや厚く作出しており、外面に沈線を一条施す。口唇部は丸く収めるが、内面に沈線を施す。

149は深鉢波頂部であり、沈線を施した突起を有していた。口縁部はやや厚く作出しており、外面に沈線を一条施してから、その下にRLを施している。頭部には胴部との区画を意図したと考えられる沈線を施し、その一部は突起下で波頭状文の系譜にある意匠を描いていた可能性が高い。

150は深鉢である。口唇部を強く面取り、RLを施す。口縁部をやや厚く作出し、RLを施した後、沈線を一条施す。内面にも沈線を一条施す。

151と152は深鉢であり、いずれも口縁部を肥厚させている。151は外面に二条の沈線を施した後、強く撫である。頭部上端には条線が施されており、文様の可能性がある。152は上面を横断する様に沈線を施しており、主文様の一部であると考えられる。従文様は銳角な沈線である。

153は深鉢である。口唇部は強く面取り、RLを施す。外面には口縁部直下からRLを施し、頭部に沈線を二条施す。胴部にも沈線を有するが、意匠は不明である。

154・155は深鉢胴部であり、いずれも外面に沈線で区画した磨消繩文を有する。154は、LRを施した後に沈線で区画して磨消繩文としている。その意匠は、波頭状文の系譜にあるものと理解できる。尚、精選された粘土を使用しており、磨きも丁寧であって、赤彩されていた土器である。

155は胴下部であり、RLを施した後に沈線で区画して磨消繩文としている。

156から159は深鉢であり、面取りした口唇部に文様を有する。156は口唇と直交する沈線を施す。原体は小動物骨と思われ、関節痕と思われる痕跡が沈線内に残る。157から159は右斜行の沈線を施す。

160から166は深鉢であり、繩文のみを施す。160は口唇部を強く面取り、やや厚く作出した口縁部と胴部外面に筋の太いRLを施す。161と162は口唇部を強く面取り、161はRL、162はLRを施す。163は小形であり、口唇部を強く面取る。口縁部は肥厚させており、その外面と胴部にRLを施す。164から166は頭胴部であり、164は胴部にRLを施した後、頭部を撫でている。165は外面にLR、166は外面に巻貝の回転擬繩文を有する。

167と168は深鉢であり、無文である。167は強く外反し、口唇部は強く面取る。168は口縁部やや厚く作出しており、頭部との間に段を有する。

169は底部であり、貼付高台である。内面には石灰華が3mmほどの厚さで固着している。

170から173は鉢である。170は口縁が花弁状に大きく開く器形である。口縁部は、断面が玉縁状となり、内面に段を作出している。171は口縁部外面に右斜行沈線を有する。172は口縁部外面に粘土帯を添付して肥厚させており、粘土帯下端は段を残している。173は口唇部を緩く面取り、体部外面にRLを施す。

174と175は浅鉢であって。いずれも皿形である。174は有文であって、RLを程した後に沈線で区画して磨消繩文としている。175は精選された粘土を使用しており、丁寧に磨いている。

176は頭部が強く屈曲する土器であり、頭部の無い壺ないしは注口付土器であると考えられる。

177は貝製品である。貝刃であって、ハマグリの右殻の腹縁を内側から打ち欠き、刃部を作り出している。

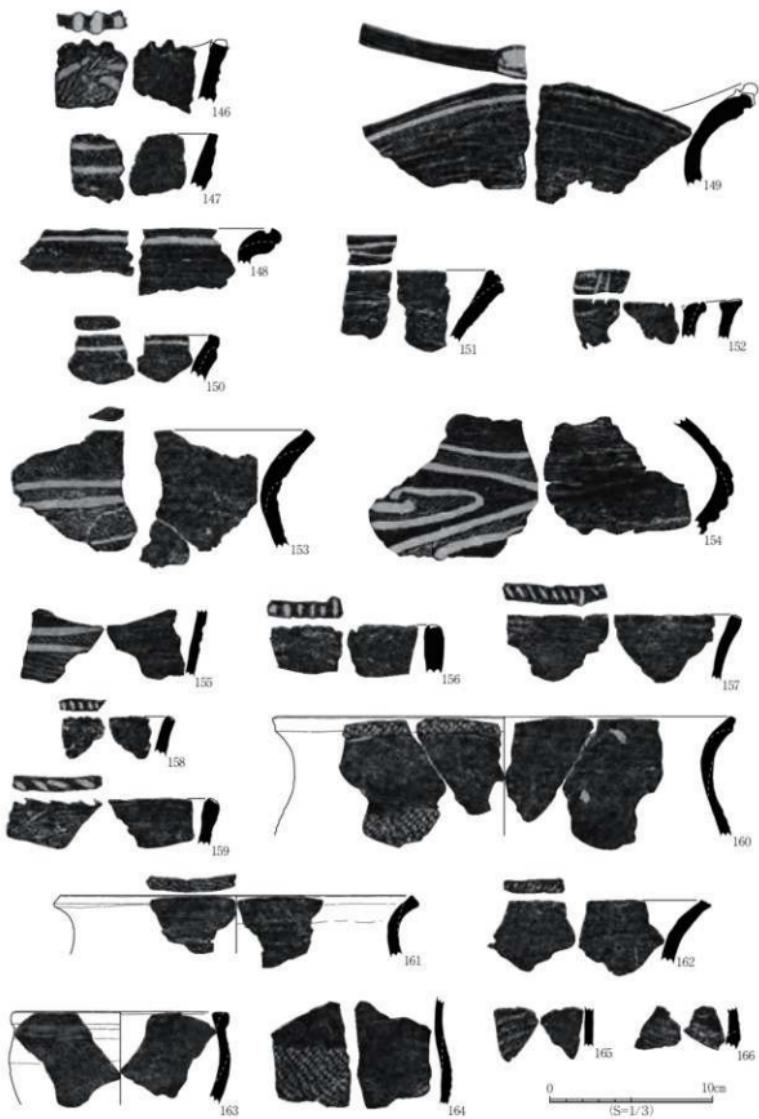


Fig.19 第1次調査「101」出土遺物（146～166）

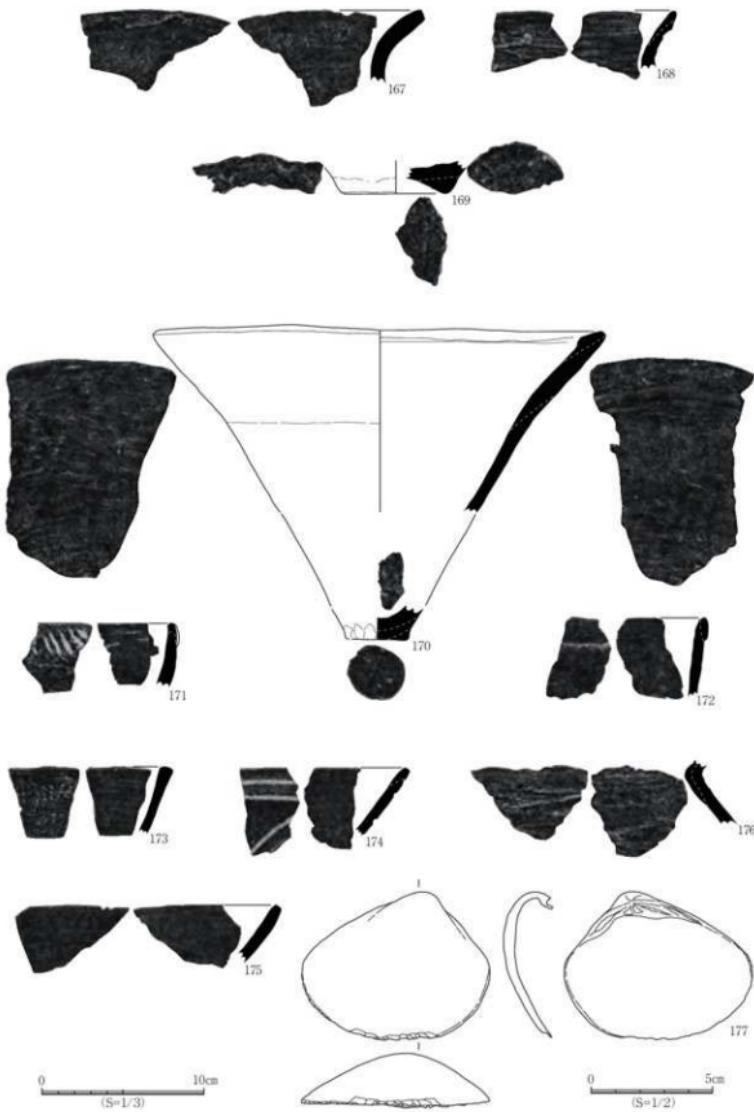


Fig.20 第1次調査「101」出土遺物（167～177）

「102」(Fig.21)

「102」は、11点を図示した。全て縄文時代後期のものである。

178は深鉢であり、口縁は緩い波状を呈する。口縁部はやや厚く作出しており、内面に段を有する。平縁外面に沈線を一条施す。一部に縄文が残るがミガキで消されている。波頂部には沈線をクランク様に絡ませるが、平縁部とは関係しない。頭部には沈線を一条施しており、意匠は波頭状文であると考えられる。

179は深鉢である。口縁は緩い波状を呈しており、胴上部に最大径を有し、寸詰まりの器形である。口縁部はやや厚く作出しており、内面に段を有する。平縁外面には、RLを施してから沈線を一条施す。波頂部に沈線をクランク様に絡ませるが、平縁部とは関係しない。波頂部は4つあったと考えられる。頭胴部は、RLを施して沈線で区画し、磨消縄文としている。波頂部下の頭部だけに文様を有しており、それはその下の胴部文様と連続するが、意匠は波頭状文の系譜のものである。波頭状文の下は、長楕円文を向かい合わせて配して配しており、最も下の沈線は文様帶を区切る意図を示すものとして理解できる。尚、内外面共に丁寧に磨いており、外面を赤彩していた土器である。

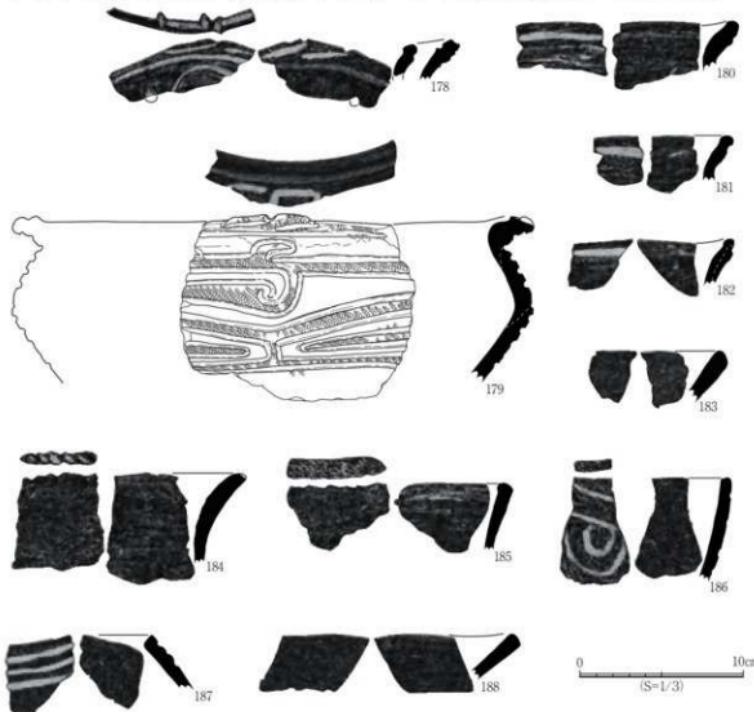


Fig.21 第1次調査「102」出土遺物 (178 ~ 188)

180は深鉢である。口縁部はやや厚く作出しており、内面に明瞭な段を有する。口唇部は強く面取り、口縁部外面に沈線を一条施す。

181は深鉢である。口縁部はやや厚く作出しており、内面に不明瞭な段を有する。口唇部は弱く面取り、口縁部外面にRLを施してから一条の沈線を施す。

182は深鉢であり、口縁部は緩い波状を呈する。口縁部をやや厚く作出しており、内面に不明瞭な段を有する。口縁部外面にRLを施してから、沈線を一条施す。

183は深鉢である。口唇部を緩く面取り、内外面共に丁寧に撫でている。

184は深鉢であり、頸部が大きく外反する。面取りした口唇部に、短沈線で右斜行刻みを施す。

185は深鉢である。口唇部は面取り、RLを施す。

186から188は浅鉢である。186と187はボウル形、188は皿形の器形である。186は口唇部を面取りし、RLを施す。体部外面にはRLを施した後、沈線で渦文を描く。187は口唇部を面取り、口縁部外面直下に、沈線を三条施す。188は口唇部を強く面取り、内外面を丁寧に磨く。

「D70・D90」(Fig.22)

「D70」は2点、「D90」は1点を図示した。全て縄文時代後期のものである。

189は、「D90」と墨書がある鉢の口縁波頂部であり、内面に明瞭な段を有する。波頂部には沈線を絡ませているが、平縁とは連続しないと考えられる。平縁には、外面にRLを施した後に沈線を施す。縄文は、沈線下にのみ明瞭に残る。

190は、「D70」と墨書がある深鉢の口縁であり、平縁に突起を有する。突起は、粘土を短い間隔で蛇行様に折り曲げて作出しており、外面にLRを施した後に沈線を三条巡らせてから貼り付けている。その数は4つと考えられる。

191は「D70」と墨書がある浅鉢の口縁であり、皿形の器形である。外面に沈線を施した後にRLを充填しており、その下は無文帯を挟んで同じ文様が施されていたと考えられる。



Fig.22 第1次調査「D70・D90」出土遺物（189～191）

「E・E 1・E 2」(Fig.23~25)

「E・E 1・E 2」は、28点を図示した。全て縄文時代後期のもので、192から212は深鉢、213から219は浅鉢である。

192は波頂部を有し、口唇部は緩く面取る。胴部の最大径はその上部にある。波頂部は、RL地に沈線で「U」字状文を描き、互いを向き合わせるように口唇部から内外面それぞれにかけて絡みつくように施しているが、波頂部以外の口縁は無文である。頭部には、波頂部下のみ、RL地に比較的幅広い沈線を施して磨消縄文としている。その意匠は波頭状文であるが、端部は渦状となり、反時計回りである。胴部にも波頭状文を描いており、頭部の対として理解できる。尚、精選された粘土を使用しており、極めて薄手で、精緻なつくりである。

193は波頂部を有し、口唇部を強く面取りする。口縁部はやや厚く作出しており、外面に文様を有するが、それはRL地に主文様と從文様で構成される。主文様は波頂部下に施され、紡錘状の弧文を沈線で二重に描く。從文様は、一条の沈線であり、端部はほぼ直角に折れ曲がる。頭部には、波頂部下を沈線で区画し、区画内にRLを残す。その意匠は波頭状文の系譜である。胴部にも沈線を施し区画するが、その意匠は波頭状文の可能性があり、頭部と対になると考えられる。

194は波頂部を有しており、口唇部は強く面取りし、RLを施す。口縁部は下端を厚く作出しており、RLを施した後に「D」字を90度右回転し、断面が「レ点」様になる刺突を4つ以上施す。これが主文様であって、器面の4箇所に施されていたと考えられる。それらを繋ぐ様に從文様があり、沈線を一条施しているが、主文様の刺突の1つを潰している。頭部は比較的幅広い沈線を施して区画しているが、磨消縄文としていない。その意匠は波頭状文の系譜であって、胴部にも対を施していたと考えられる。尚、沈線を施文した時の粘土のはみ出しの処理は撫でる程度であって、土手状の高まりとして沈線脇に残る。

195は胎土及び文様が類似することから194と同一個体と考えられる。

196は波頂部を有し、口唇部を強く面取る。口縁部をやや厚く作出しており、外面に文様を有するが、それはRL地に主文様と從文様で構成される。主文様は波頂部下に施されるが、沈線文である可能性が高い。その意匠は、平線に施される二条の沈線の内、上の沈線が左右から波頂部まで伸びたものであり、それらの端部を巴様に丸めて絡ませたものと考えられる。波頂部下に沈線で施される頭部の文様も、同じ意匠であると考えられる。尚、頭部下に沈線を施しており、頭胴部を区画する意図があると思われる。

197は口唇部を強く面取り、口縁部内面に浅い沈線を有する。口縁部外面には、RLを施した後に沈線を一条施すが、端で力を抜く様に収めている。また、その位置は、頭部に施された沈線が口縁部に至る部位と一致するため、口縁部には主文様を施していた可能性が高い。

198は口唇部を面取り、口縁部内面に不鮮明な段を有する。口縁部外面に沈線を施した後、節の細かいRLを施す。頭部下に沈線を施しており、頭胴部を区画する意図があると思われる。

199は口縁部を広く作出し、巻貝のように表面に細かい凹凸を有する原体で擬縄文を施した後、沈線を一条施す。

200は口縁部を広く作出し、原体は不明であるが擬縄文を施してから沈線を二条施す。

201から203は、口唇部を強く面取り、口縁部内外面に沈線を施す。201は口縁部外面にRLを施した後に沈線を施す。沈線の始端は巴様に丸めている。

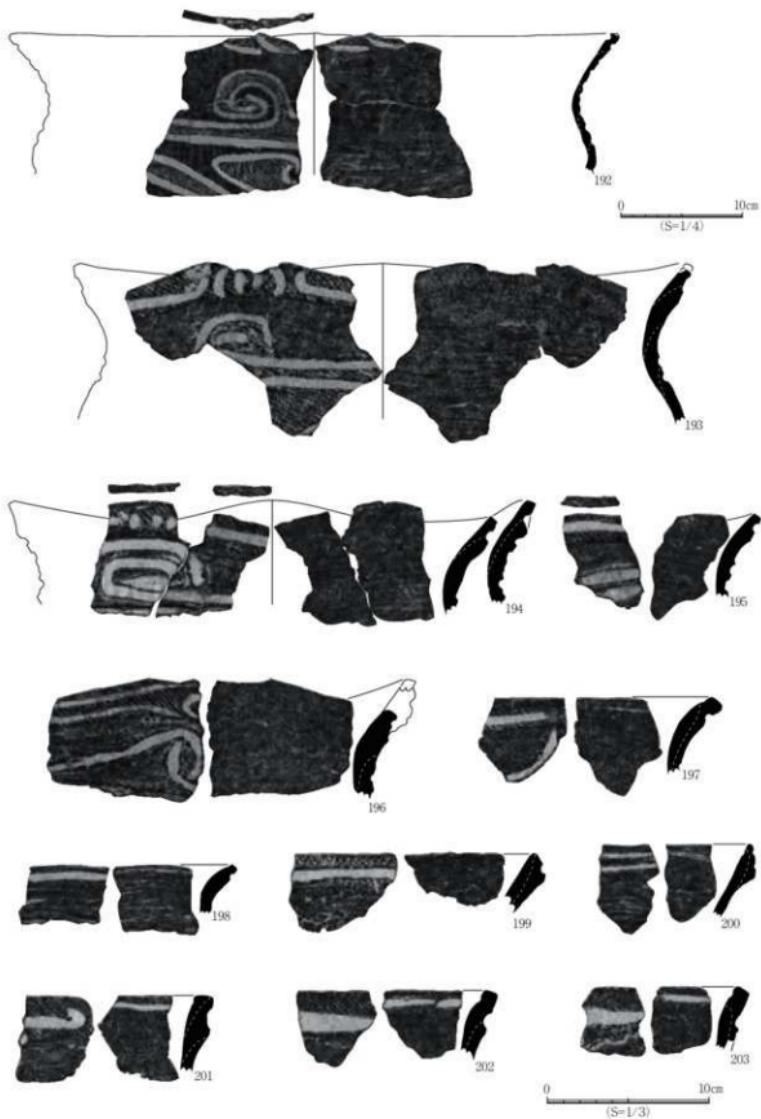


Fig.23 第1次調査「E・E 1・E 2」出土遺物（192～203）



Fig.24 第1次調査「E・E1・E2」出土遺物（204～212）

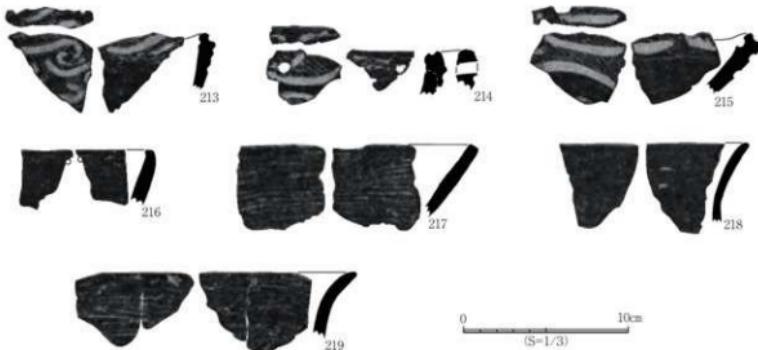


Fig.25 第1次調査「E・E 1・E 2」出土遺物（213～219）

202は口縁部外面にRLを施した後、沈線を一条施す。203は口縁部外面にRLを施した後、沈線を一条施す。

204は、胴上部に最大径を有する寸詰まりの器形であった可能性があり、頭部には橋状把手を有する。口縁部はやや厚く作出して内面に段を有する他、緩い波状で波頂部を有する。平線は、RLを施した後に沈線を一条施すが、沈線の下のみに繩文を残す。波頂部には沈線を絡ませるが、平線の沈線と連続する可能性がある。頭部は無文で、波頂部下に幅広の橋状把手を添付して、沈線で区画して磨消繩文としている。頭胴部は沈線で区画して磨消繩文としている。

205は、口縁部を幅広く作出し、平線である。口縁部には主文様と従文様を施し、主文様は斜行沈線文であって、4つ施されていたと考えられる。従文様間は、全面にLRを施した後、外端に沈線を周回させる。頭部は基本無文であるが、条線文を4つ施す。各条線文下の胴部には、条線文下に集約する条線を左右から施す。尚、頭部下に沈線を一条施しており、頭胴部を区画する意図があると思われる。

206から209は、繩文または擬繩文のみ施す。206は口唇部を強く面取る。RLを口唇部と内外面に施す。207は口唇部を強く面取り、RLを施す。208は口唇部を強く面取り、RLを施す。外面全面に、巻貝の回転擬繩文を施すが、頭部は撫でて消している。209は口縁部外端を強く面取りRLを施す他、口縁部内面と胴部外面にも施す。口縁部内面には沈線を施す。

210は口縁部外端を強く面取り、RLを施す。胴部外面も同様である。頭部下端に沈線を施しており、頭胴部を区画する意図があると思われる。

211は鋭角な波頂部であり、その両脇の口唇部は面取る。

212は底部で、接合部には接合面積を増やすための三日月様の押圧が明瞭に残る。

213から219は浅鉢である。213から215は有文で、沈線で区画して磨消繩文を施す。213はボウル形の器形で、平線である。外面にRLを施した後に沈線を施す。口縁部直下の文様は、左右からの沈線の端部を巴様に丸めて絡ませており、いずれかは口唇部を経由して内面に至る可能性が考えられる。尚、赤彩されていた土器である。214はボウル形の器形であって平線である。RLを施した後に、沈線を口唇部から外面にかけて施して区画している。それらの施文後、口唇部の沈線が交わ

る部分の下に、外面から内面に向けて焼成前穿孔を有する。215は皿形の器形であって、突起を有する。口唇部から外面にかけてRLを施した後に沈線で区画している。外面の沈線は、突起の沈線と連続すると考えられる。尚、ベンガラで赤彩された土器である。

216と217は無文で、前者がボウル形、後者が皿形である。前者は口縁部直下に焼成前穿孔を有する。後者は内外面に巻貝条痕が残るため、粗製のものである。

218と219は鉢であり、前者が精製、後者が粗製である。

「HI 十二、二十三」(Fig.26)

「HI 十二、二十三」は、それぞれ1点、計2点を図示した。220は縄文時代後期、221は古墳時代のものである。220は深鉢底部であり、貼付高台である。外面に「 $r=6$ 」と墨書があるが、高台から底部中央までが概ね6cmであることから、その意味と考えられる。221は鉢形土器の口縁部であり砲弾形を呈する。小形であり、内面の指頭圧痕が顕著であって、器壁が薄いことから、製塙土器である可能性がある。



Fig.26 第1次調査「HI 十二、二十三」出土遺物（220・221）

「一、一ノ右」(Fig.27)

「一、一ノ右」は、16点を図示した。222から235が縄文時代、236が弥生時代、237が古代のものである。縄文時代のものは全て後期のものである。

222から233は深鉢である。222から231は口縁部であり、222から228は口縁部外面、229は口縁部上面にそれぞれ文様を有する。

222の口縁は波状である。胴上部に最大径を有し、寸詰まりの器形になるとされる。口縁部はやや厚く作出しており、RLを施した後に沈線を施す。頸胴部には、RL地に幅広い沈線で区画して磨消縄文としており、その意匠は波頭状文である。尚、波頭状文の左右には長楕円文ないしは二等辺三角形様の沈線文を描き、沈線が交わる際にはそれらの端部を巴様に丸めて絡ませていたものと考えられる。尚、「入口4m右 32cm」という墨書がある。

223と224の口縁は波状である。口縁部を肥厚させ、下端に強い段を作出している。外面に主文様と従文様を有しており、主文様は円文である。223は、主文様をRL地に沈線で描き、従文様は一条の沈線であって、端部を口唇部に向かって緩く折り曲げている。224は、主文様を沈線で円文、従文様を沈線で長楕円紋をそれぞれ描いている。

225の口縁は平縁ないしは緩い波状であって、口唇部を強く面取る。外面には、RL地に二条の沈線を描く。

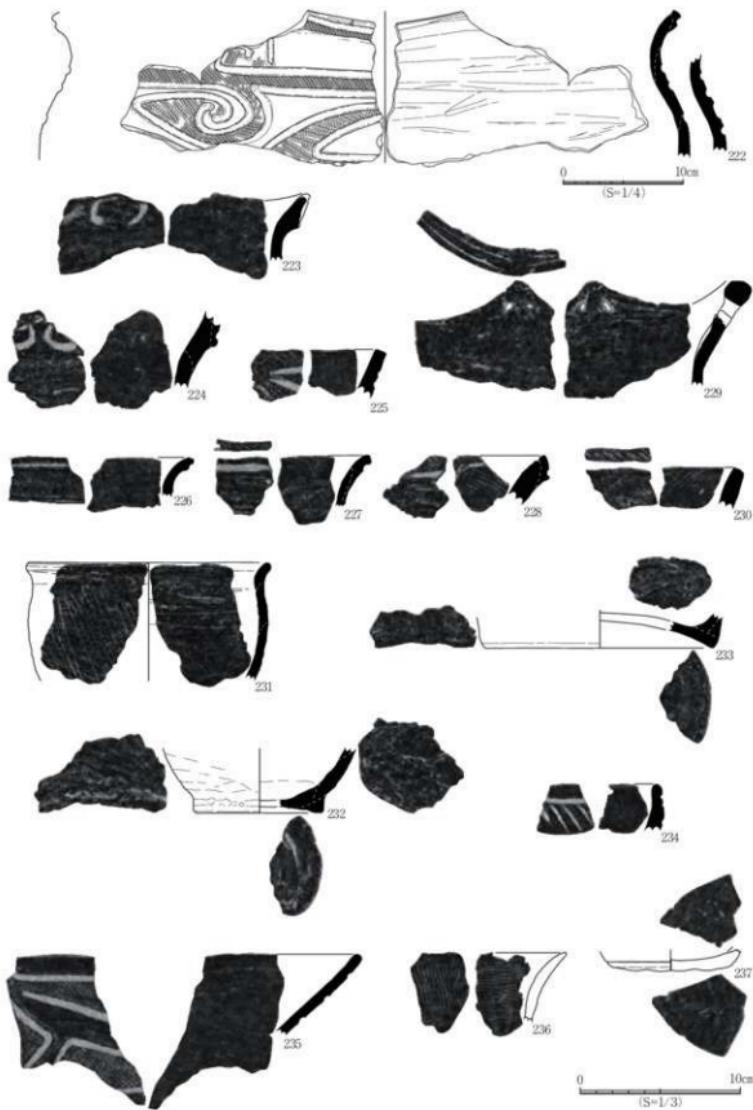


Fig.27 第1次調査「一、一ノ右」出土遺物（222～237）

226と227は、頸部下端に沈線を施しており、頸部と胴部を区画する。226は、RL地に沈線を一条描く。227は、口縁部外端を面取り、RLを施した後、その下に沈線を一条描く。

228は、口縁部を幅広く作出しており、そこにRLを施した後、沈線を一条描く。そして内面にもRL地に沈線を一条描く。尚、内面の文様は主文様と従文様で構成される可能性がある。

229は波状であり、波頂部下に2つの孔を有するが、粘土の接合の隙間を利用したものである。口縁部は内向きに厚く作出しており、その上面に抉る様な沈線を二条施す。尚、波頂部正面左側の口唇部から波頂部へ伸びる沈線の端には、それぞれ1つずつ刺突を施している。

230は平縁であり、口唇部を強く面取り、RLを施す。

231は小形であり、短い頸部が屈曲する。胴部外面にrを施す。

232と233は底部であり、232は貼付高台、233は凹み底である。232は底部外面中央に赤色顔料が付着している。233は精緻な作りで、底部からやや立ち気味に胴部へと上がると考えられる。

234と235は浅鉢であり、234はボウル形、235は皿形である。234は、口縁部外面直下に沈線を一条施した後、右斜行沈線を描く。235はRLを施した後、沈線で区画して磨消繩文としている。

236は甕の口縁部であり、頸部の外面には継位、内面には横位の刷毛目を施す。弥生時代後期のものと考えられる。

237は瓦質土器であり、椀の底部である。粘土紐を巻いて底部を形成している。

「外、外1、外2」(Fig.28)

「外、外1、外2」は15点を図示した。238から251が繩文時代、252が弥生時代のものである。

238から249は深鉢である。238と242は口縁部に文様を有し、243と244は繩文を有する。

238は平縁に突起を有しており、口縁部外面をやや厚く作出している。口縁部外面に沈線を施した後、RLを施す。突起には沈線を絡ませる。頸部は突起下を沈線で区画し、磨消繩文を施すと考えられるが、その意匠は波頭状文と考えられる。239は胴上部であり、その外面を沈線で区画して磨消繩文としており、その意匠は多重渦文であったと考えられる。上の沈線は頸部まで伸びており、文様を区画する沈線があった可能性が高い。尚、内面には石灰華が付着している。

240と241は精緻な作りであり、精選された粘土を使用している。いずれも沈線で区画して磨消繩文としている。その意匠は波頭状文と類似しており、特に240はその祖型となる可能性がある。尚、240の外面の沈線は、内面に緩やかな隆起として影響している。

242は平縁であり、内面をやや厚く作出している。そこに沈線を二条描くが、大半が石灰華の付着で不鮮明となっている。

243と244は外反する頸部を持ち、243は外端を面取りしてからRLを、244は口唇部を面取りしてからLRを、それぞれ施す。

245は胴上部であり、外面に巻貝の回転繩文を施す。

246は頸部が短い鉢であり、口縁部外端にRLを施す。247は砲弾形の鉢であると考えられ、外面に右斜行沈線文を施している。

248と249は底部で、前者は凹み底、後者は貼付高台である。精選された粘土を使用している。

250と251は浅鉢である。ボウル形を呈し、前者は粗製であるが、後者は外面にRLを施した後に沈線を描き、磨消繩文としている。

252は壺の胴上部である。内面では刷毛目が明瞭であるのに対し、外面では撫で消している。

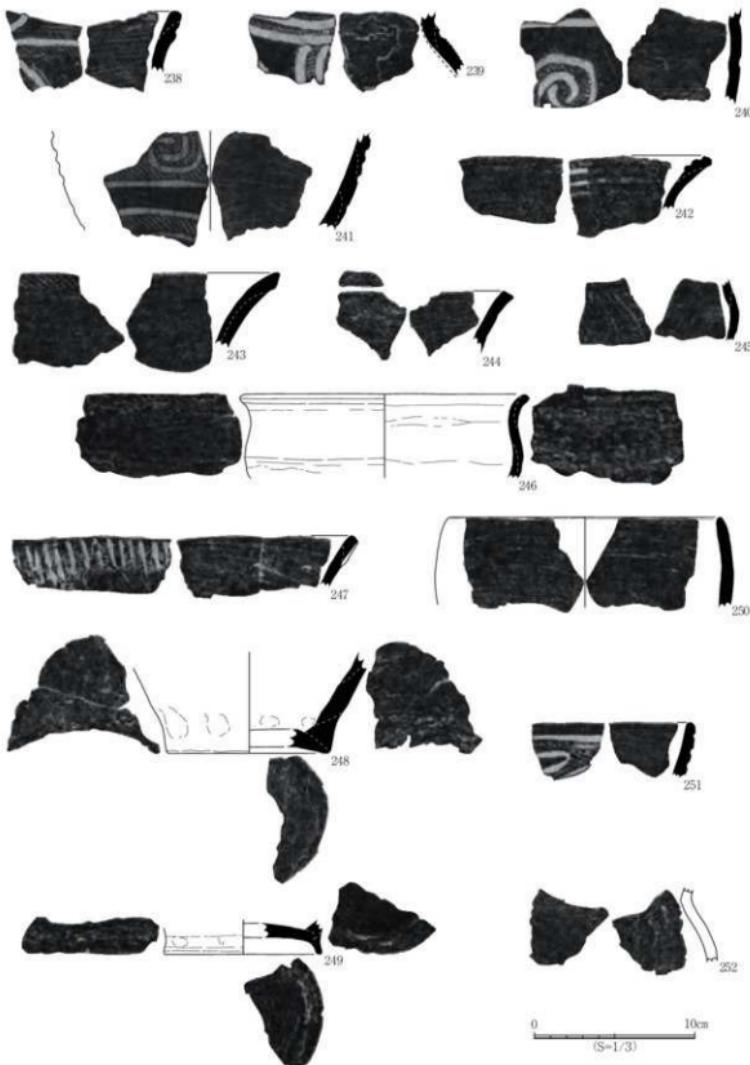


Fig.28 第1次調査「外、外1、外2」出土遺物（238～252）

「雜、雜1」(Fig.29~32)

「雜、雜1」は、31点を図示した。全て縄文時代のものである。

253から275は深鉢である。253から260は口縁部に文様を有する。

253は口縁部をやや厚く作出しており、内面に段を有する。外面には、RL地に沈線を一条施す。胴上部はRLを施した後に沈線で区画し、磨消縄文としている。内外面は磨きが顕著である。

254は口縁部をやや厚く作出している。外面にRLを施した後、沈線を一条施す。胴部外面には、RL地に沈線文を描いており、その意匠は波頭状文の系譜として考えられる。

255は口唇部を強く面取りし、RLを施す。外面直下にもRLを施した後に沈線を二条施す。

256から258は口唇部を強く面取りし、RLを施す。256は、その外面に主文様と従文様を施しており、主文様は中空の原体による刺突であり、その左右に沈線で弧状文を描く。従文様は、沈線で描いた長楕円文である。主文様下の頸部には、沈線で文様を描くが、意匠は波頭状文の系譜のものとして考えられ、その両脇に沈線を施して区画している。257は、その外面にRLを施した後に二条施しており、それらは主文様を繋いでいたと考えられる。頸部には、RLを施した後に沈線を施している。これは頸部文様を区画する沈線であって、その内は縄文地に沈線で波頭状文の系譜にある意匠を描いていたと考えられる。258は、その外面に主文様と従文様を施している。主文様は、その両脇に刺突を有したと考えられ、従文様は一条の沈線である。全体に指頭圧痕が顕著に残る。

259は、その外面にRLを施した後、主文様と従文様を施している。口縁部は緩い波状であり、波頂部外端に短沈線を施す。それを、沈線で描いた弧状文を向き合わせて開み、主文様としている。従文様はそれらを一条の沈線で繋いだもので、その端部は丸く跳ね上げて収めている。

260は、口唇部と口縁部外端を強く面取り、RLを施す。内面にもRLを施した後、一条の沈線を施す。頸部下端にRLを施しているため、頸が短い器形であったと考えられる。

261と262はこれらの胴部として考えられ、261は頸部下端に沈線を施しており、頸胴部を区画する意図があったものと考えられる。尚、胴部外面にはRLを施している。262はRLを施した後、浅い沈線で大ぶりな波状文を描いていたと考えられる。

263から268は縄文または巻貝擬縄文のみを施す。263は、口縁部を幅広く作出し、その外面及び胴部外面にRLを施す。264は口縁部の内外端を面取り、そこと胴部外面にRLを施す。265は口唇部を面取り、RLを施す。頸部外面には巻貝の回転擬縄文を施す。266と267は、口唇部を強く面取りRLを施す。266は口縁部を厚く作出し、267は内端が面取りにより直角となっている。268は波状口縁であり、口縁部を厚く作出し、口唇部を強く面取る。外面全体に巻貝の回転擬縄文を施す。

269は砲弾形の器形であり、口唇部を強く面取る。外端に右に斜行する短沈線を施す。

270は口縁部外面を肥厚させて玉縁状としており、口唇部を強く面取る。

271から275は底部であり、271から273は凹み底、274と275は貼付高台である。271は接地部分を強く撫でて面取る。272は、粘土で円盤を作り、その外に粘土紐を巻いて底部を整形してから胴部へと粘土を積んでいったと考えられ、接地部分は強く撫でて面取る。273は薄手であって、接地部分を強く撫でて面取る。内面は一面黒色であり、油脂様のものが胎土に染み込んだように見受けられる。274は高台の外端を、275は接地部分をそれぞれ撫でて面取る。

276から281は浅鉢である。276から279は外面に文様を有する。276から278はボウル形の器形であり、いずれも沈線で区画している。276は口唇部を強く面取り、体部外面にRLを施した後に

沈線で区画し、磨消繩文としている。277は口唇部を弱く面取り、体部外面にRLを施した後に沈線で区画し、磨消繩文としている。278は口唇部を強く面取り、RLを施す。体部外面にRLを施した後に沈線で区画しており、口縁部直下と体部に文様帯を分ける意匠がうかがえる。口縁部直下の文様は、沈線で長楕円文を描き、その内に沈線を一条施す。体部には沈線を左右から向き合う様に施しており、多重沈線で山形様の文様を描いていたと考えられる。

279から281は皿形の器形であり、279は外面に文様を有するが、280と281は無文である。

279はRLを施した後、沈線文を多重に描き、その意匠は渦文であると考えられる。精選された粘土を使用しており、精緻な仕上がりである。280と281は口唇部を強く面取り、内外面を磨くが、280の磨きは粗い。



Fig.29 第1次調査「雑、雑1」出土遺物 (253～262)

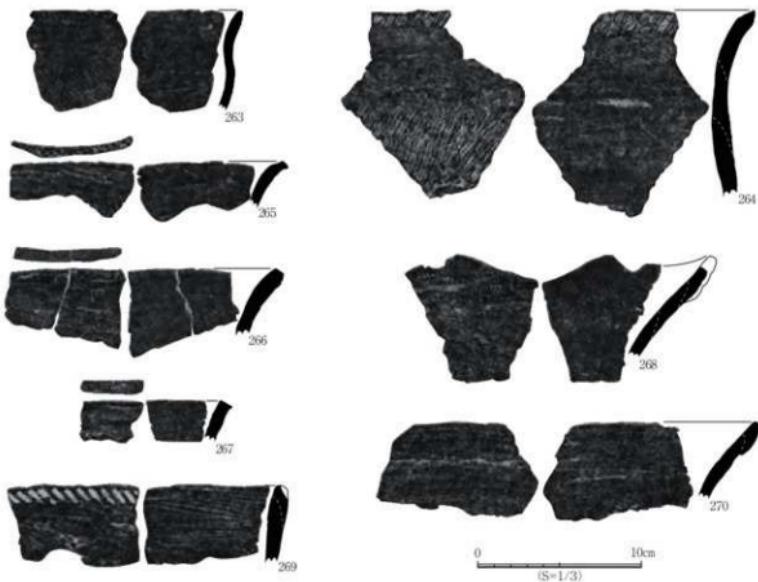


Fig.30 第1次調査「雜、雜1」出土遺物（263～270）

282は壺形の器形であり、頭部は短い。体部に特徴があり、その中央部はほぼ垂直に立ち上がりつており、胴上部及び胴下部に屈曲を有する。

283は磨製石器である。元は乳棒状の石斧であったと考えられるが、破損部の一部が磨滅しているため、破損後に機能が変化していると考えられる。石材は、泥岩が変成を受けたものであると考えられる。

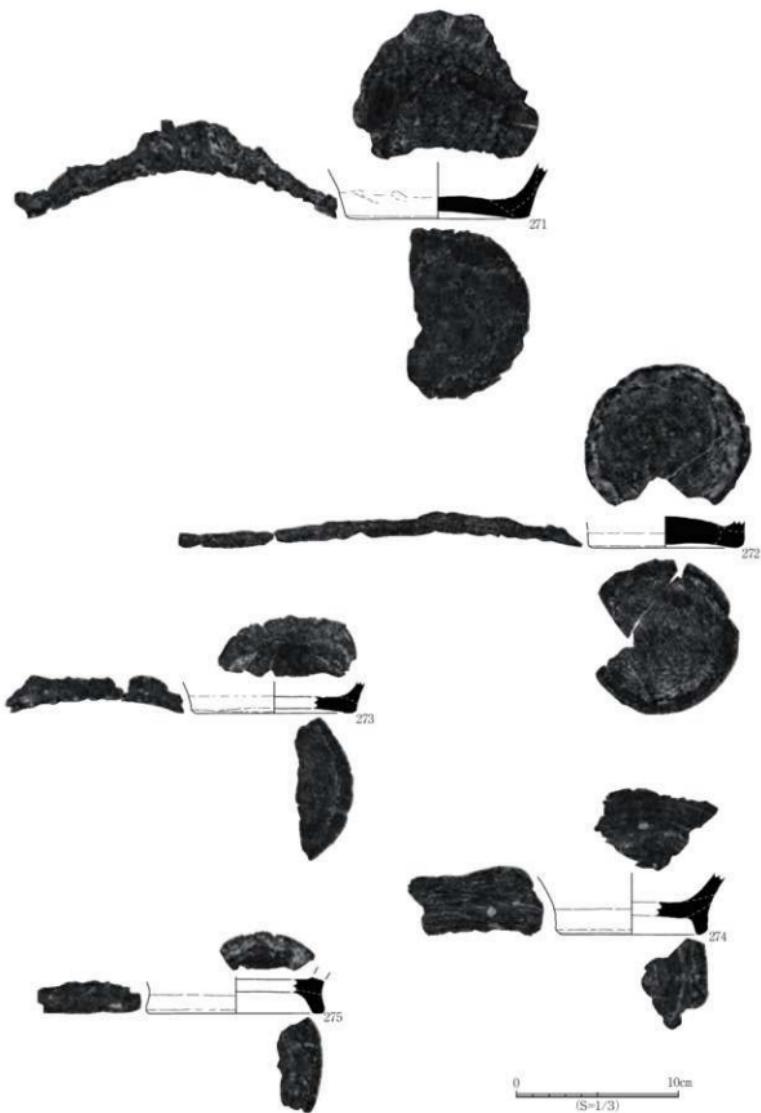


Fig.31 第1次調査「雑、雑1」出土遺物 (271 ~ 275)

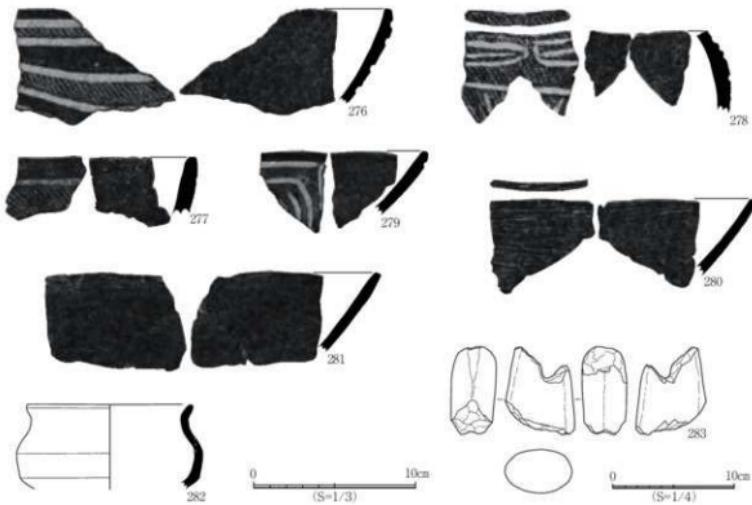


Fig.32 第1次調査「雑、雑1」出土遺物 (276 ~ 283)

「市川」(Fig.33・34)

「市川」は16点を図示した。この墨書がある土器については、調査に参加した南宇和高校教諭の市川学瑞と、彼と一緒に調査に参加した南宇和高校生に関わりがある可能性が高い。

その理由は、鎌本・西田1957の第一期つまり西田1954における第一次の二月二十二日に、南宇和高校生が調査に参加していることにある。このことについて調査日記に、「… 南宇和高校生徒十数名加勢、純貝層と称すべきものを発見しえなかつたが混土貝層より可成り土器片を拾出す。」とあり、この日以外に南宇和高校生の主たる調査への参加は認められない。そして、彼らの参加は教員の引率があってこそものであったと推察される。よって、「市川」と墨書がある土器は、二月二十二日にA区の混土貝層から出土したものである可能性が高い。

さて、284から297は縄文時代、298は古代、299は中世のものである。

縄文時代のものは全て深鉢である。284から291は口縁部に文様を有しており、284から287は平縁に突起を有する。突起は4つあると考えられる。

284は、胴上部に最大径を持ち、大きな個体であって、寸詰まりの器形になると考えられる。口縁部は厚く作出しており、全体にRLを施す。波頂部外面には9つの涙滴状文を短沈線で描いた後、波頂部に沈線を絡ませる。平縁にも沈線を施すが、波頂部の沈線とは連続しない。頭部には、波頂部下を沈線で区画しており、胴上部の区画と対になる可能性が高く、その意匠は波頭状文の系譜にあると考えられる。尚、沈線は直線的である。

285は、突起下に橋状把手を有する。口縁部はやや厚く作出し、RLを施している。突起には沈線で緩いクランク状文を、橋状把手には二条沈線で渦文を施しているが、平縁の外面に施されている沈線とは連続しない。尚、突起直下には、焼成前穿孔を有する。

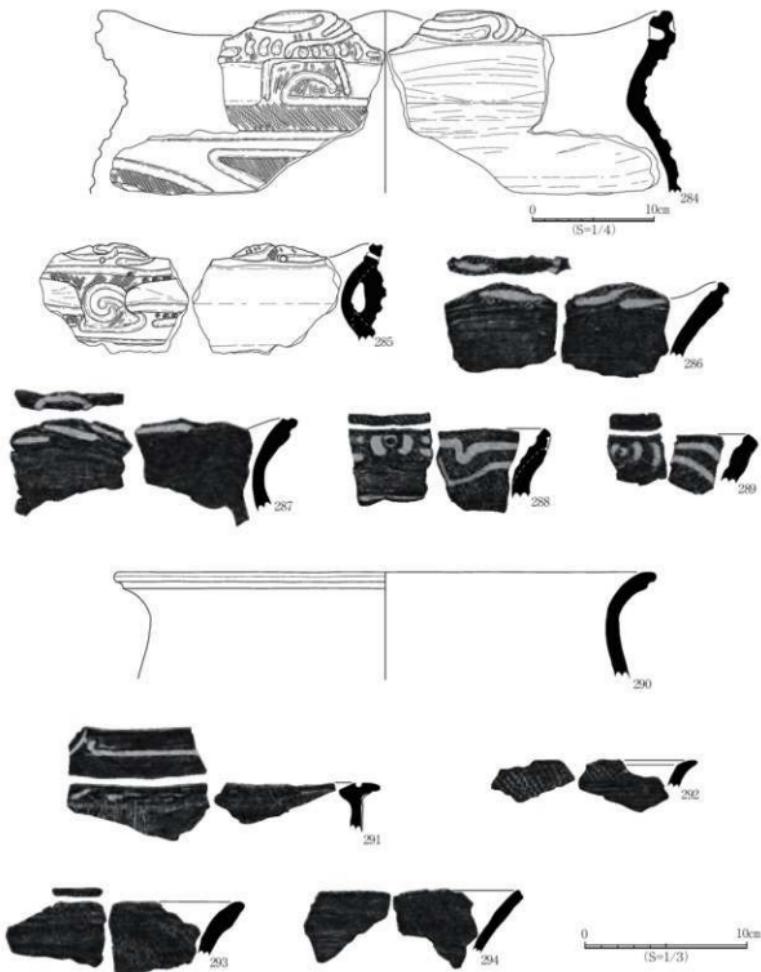


Fig.33 第1次調査「市川」出土遺物（284～294）

286はRLを施した後、「U」字様の沈線を向き合って絡ませている。端部が重なることから「S」字様となっている。尚、平縁の文様と連続する可能性は極めて低い。287は、「U」字様に沈線を向き合って絡ませ、端部が重なっているため「S」字様となっている。突起下には平縁から伸びてくると考えられる沈線が一条施されるが、突起の文様とは連続しない。

288と289は、口唇部を強く面取りしてからRLを施す他、口縁部内外面に文様を施す。

288の外面の文様は、RLを施した後の中空の原体による円形刺突であって、その左右を短沈線で描いた一条の弧状文で囲む。289の外面の文様は、RLを施した後の中空の原体による円形刺突であって、その左右を短沈線で描いた二条の弧状文で囲む。288の従文様は、並行する二条の沈線であるが、289は不明である。いずれも口縁部内面にRLを施した後に、並行する二条の沈線を施し、外面の主文様部分で大きく湾曲させている。288の頭部下端には一条の沈線を施しており、頭胴部を区画する意図があったと考えられる。

290は、短い頸部が強く外反する。口縁部をやや厚く作出しており、外面に一条の沈線を施す。

291は、口縁部を幅広く作出しており、その上面に沈線文を施している。それは主文様と従文様

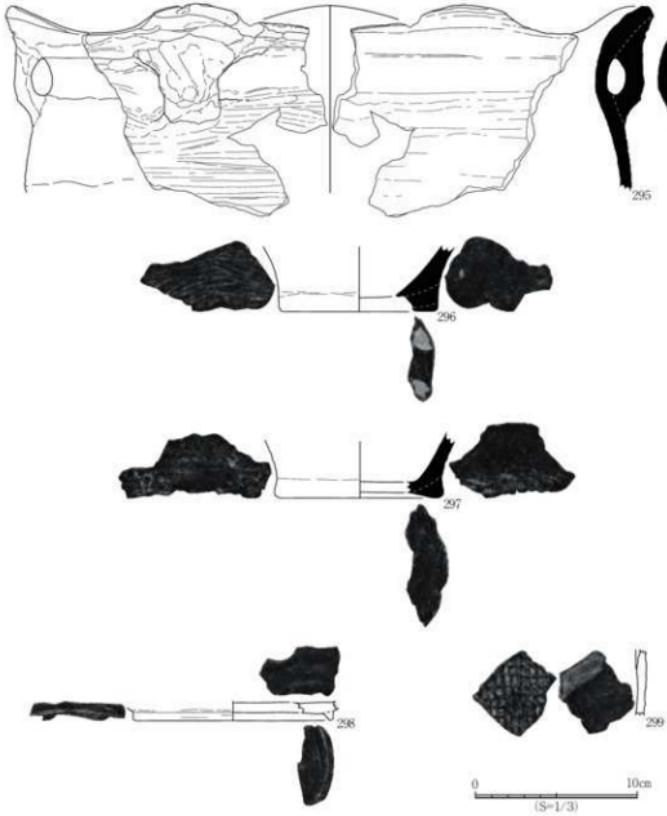


Fig.34 第1次調査「市川」出土遺物（295～299）

で構成されており、主文様は鋭い斜行沈線であって、複数条施されていたと考えられる。それらを繋ぐ従文様は一条の沈線であって、端部を巴様に丸めて収めている。主文様下の頭部だけに、下から上へ向かって条線を施している。

292と293は、縄文または巻貝擬縄文を施す。292は、幅広く面取りした口縁部内端と外面にRLを施す。293は、面取りした口唇部と口縁部内外面に巻貝の回転擬縄文を施しており、口縁部と頭部の境に段を作出している。

294と295は無文であり、294は口唇部を強く面取る。295は平縁に突起を有しており、突起下の頭部には橋状把手を有する。

296と297は底部であり、いずれも凹み底である。296は成形した後、地面と接する部分に薄く粘土を添付している。297は、凹み底を成形してからその外周に粘土帯を添付し、高台様にしている。前者は外面に「 $r=4$ 」、後者は外面に「 $r=5$ 」と朱書きがあり、底径について計算された可能性がある。

298は須恵器の坏底部である。平たく整形した底部の外周に高台を貼り付け、そこから強く屈曲して体部が立ち上がる器形である。

299は瓦質土器の鍋胴部である。外面に方形のタタキ痕を有する。

「十八」(Fig.35)

「十八」は1点を図示した。縄文土器で深鉢である。

300は、外形する頭部から口縁部が屈曲して立ち上がる。口唇部を強く面取り、外面全面にRLを施す。その後、口縁部外面に浅い沈線を施す他、口縁部下端と頭部上端に沈線を一条ずつ施しており、口縁部と頭部を区切る意図があったと考えられる。

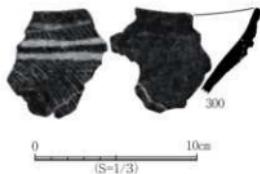


Fig.35 第1次調査「十八」出土遺物 (300)

「八区・一〇一三〇」(Fig.36)

「八区・一〇一三〇」は18点を図示した。全て縄文時代後期のものである。301から313は深鉢、314から318は浅鉢である。

301から310は口縁部であり、口縁部外面に主文様と従文様で構成される文様を有する。

301は突起であって、全体を厚く作出しており、頭部との境に明瞭な段を有する。RLを施した後に沈線を絡みつかせて主文様としている。平縁には従文様として沈線を施しており、それが突起下まで延びているが、突起の沈線とは連続しない。

302は波頂部であり、頭部との境に不明瞭な段を有する。主文様は、外端に短沈線を施し、それを沈線で描いた弧状文で囲み、その下に三条の短沈線を垂下させる。従文様は一条の沈線である。

303は平縁であり、口唇部を強く面取る。頭部との境に明瞭な稜線を有する。主文様は、RLを施した後、その中心を二重の弧状文を沈線で描いて囲んだものである。従文様は一条の沈線であり、端部を巴様に丸めて収めている。頭部は沈線で区画しており、一部にRLが施される。口縁部の主文様下には主たる頭部文様が施され、その脇に隅丸長方形の沈線文が描かれていた可能性がある。



Fig.36 第1次調査「八区・一〇-三〇」出土遺物（301～318）

304は平縁であり、口唇部を緩く面取る。口縁部はやや厚く作出しており、頸部との境に不明瞭な段を有する。主文様は、RLを施した後に中空の原体で円形の刺突を施し、その両脇を沈線で描いた「V」字様の文様が向き合うように開んだものである。従文様は並行する二条の沈線である。

305は波頂部であるが、頂部は摩滅している。主文様は、RLを施した後に一条の沈線で弧状文を描いて頂部を囲み、その下に二条の沈線を垂下させたものである。従文様は二条の沈線であり、上の沈線は波頂部に向かい、下の沈線は垂下させた沈線の脇で円文を描いて収めている。

306は波頂部であり、口唇部を強く面取る。口縁部は厚く作出しており、頸部との境に明瞭な段を有する。主文様は、RLを施した後に中心に沈線文を描き、「V」字様の沈線文を横倒しにしてそれを囲んだものである。従文様は、沈線を一条施したものである。主文様の上の口唇部には沈線で刻みを、内面にはRLを施した後に沈線を施す。波頂部下の頸部には、沈線を二条垂下させる。

307は緩い波状口縁の波頂部である。頸部との境に明瞭な稜線を有する。主文様は、卷貝の回転擬縄文を施した後、沈線で「X」状文を描いたと考えられ、従文様は一条の沈線で丸木舟様の文様を描き、同じ幅の沈線を並行に三条施したと考えられる。

308は平縁である。口唇部を強く面取り、RLを施す。外面には、RLを施した後、並行する沈線を二条施している。

309は平縁であり、口唇部を緩く面取る。口縁部を厚く作出しており、その外面にRLを施した後に並行する沈線を二条施している。

310は波状口縁である。口縁部を厚く作出し、卷貝の回転擬縄文を施した後、並行する浅い沈線を二条施している。

311は胴部であり、外面に卷貝の回転擬縄文を施す。

312と313は底部であり、いずれも凹み底である。312は底部を成形した後、その外周に粘土帯を添付して高台様としており、「r= 7 cm」と墨書されている。313は薄手で、接地部分は強く撫でて面取りしており、「r= 3 cm」と墨書されている。

314から317は口縁部であり、いずれもボウル形の器形である。314と315は有文、316と317は無文である。

314は平縁であり、口縁部内外にRLを施した後、沈線を施す。この文様は口唇部に4箇所施すと考えられる。体部は無文であった可能性が高いが、赤彩されていた土器である。

315が平縁である。口縁部外面直下に沈線を一条施してから、その下にRLを施し、更にその下を沈線で区画して磨消縄文としている。

316は緩い波状口縁であり、口唇部を強く面取る。内面に石灰華が付着している。

317は平縁であり、口唇を緩く面取る。

318は底部であり、丸底である。

「一括」(Fig37~40)

「一括」は48点を図示した。319から359が深鉢、360から366が浅鉢と注口付土器である。

深鉢のうち、319から345が有文のものである。

319から340は口縁部であり、319から321は波頂部または突起に施文するもの、322から331は外面のみに主文様と従文様を持つもの、332と333は外面に沈線のみ持つもの、334と335は寸

胴形で主文様と従文様をもつもの、336と337は内外面に主文様と従文様を持つものであり、338は内面だけに文様をもつ。

319は波頂部である。口縁部をやや厚く作出しており、内面に段を有する。波頂部には沈線を絡ませ、焼成前穿孔を施す。平縁には、外面にRLを施した後に沈線を一条施しており、それは波頂部下まで伸びるが、波頂部の沈線とは連続しない。頸部は、RLを施した後に沈線で区画し、磨消繩文としている。その意匠は波頭状文の系譜であり、胴部にも同様の意匠があったと考えられる。尚、精選された粘土を使用しており、器面は丁寧に磨かれている。

320は波頂部であり、焼成前穿孔を有する。口縁部をやや厚く作出しており、内面には段を有する。波頂部外面には、少なくとも8つの涙滴状文を沈線で描いた後、波頂部に沈線を絡ませる。平縁には、外面にRLを施した後、沈線を一条施す。頸部は、RLを施した後に沈線で区画して磨消繩文としているが、その意匠は波頭状文の系譜のものである。

321は突起を有する。口縁部をやや厚く作出しており、内面に段を有する。突起には、RLを施した後に沈線を絡ませる。突起下には少なくとも4つの涙滴状文を沈線で描く。頸部には沈線を直線様に描いて区画し、磨消繩文としている。その意匠は波頭状文の系譜にあると考えられる。

322は平縁であり、頸部との境に明瞭な段を有する。口唇部を強く面取り、RLを施す。外面にRLを施した後に中空の原体で円形刺突を施し、沈線で2つの弧状文を描いてその両脇を開むと考えられる。従文様は一条の沈線である。主文様の下の頸部には沈線の肩が認められるため、文様を施していた可能性が高い。

323は平縁であり、頸部との境に不明瞭な段を有する。口唇部を緩く面取る。外面にRLを施した後に中空の原体で円形刺突を施し、沈線で2つの弧状文を描いてその両脇を開むと考えられる。従文様は繩文帶である。頸部は無文であるものの、その下端に一条の沈線を施しており、胴部との区画を意図していたと考えられる。

324は平縁であり、頸部との境に明瞭な段を有するが、これは口縁部の肥厚によって生じたものである。外面に巻貝の回転擬繩文を施した後に円形刺突を施し、沈線で2つの弧状文を描いてその両脇を開むと考えられる。従文様は一条の沈線である。

325は口唇部を強く面取る波状口縁であり、頸部との境に明瞭な稜線を有する。主文様は不明であるが、従文様は沈線で描いた長楕円文である。波頂部下の頸部には文様を有しており、その意匠は不明であるが、両脇を垂下する沈線で開っていたと考えられる。

326は突起であり、内面に段を有する。突起と外面にはRLを施した後に沈線で文様を描く。口縁部外面の主文様は、端部を巴様に丸めた沈線であり、少なくとも3つの弧状文を描いてその両脇を開むと考えられる。突起下の頸部には沈線が施されており、その意匠は波頭状文の系譜にあると考えられる。

327は波頂部である。口唇部を強く面取り、波頂部のみに刻みを施す。外面には、主文様として沈線で波頭状文の系譜にある意匠を描いていたと考えられ、従文様は一条の沈線である。波頂部下の頸部には沈線文を施しており、「U」字状になるとを考えられる。

328は口唇部を強く面取る平縁であり、頸部との境に明瞭な段を有する。口縁部外面に施された主文様は、その中心は不明であるものの、それを沈線で囲う。従文様は、並行する二条の沈線である。

329は波頂部であって、頸部との境に明瞭な稜線を有する。平縁の口唇部は強く面取る。主文様は、RLを施した後、多重沈線で山形状文を描く。従文様は二条の並行する沈線である。

330は波頂部である。頂部に刻みを施し、それを一条の沈線で囲む。主文様は、Iを施した後に施した垂下沈線であり、その両脇にクランク状の文様を沈線で描いたものと考えられる。平縁の口唇部は強く面取る。

331は平縁である。頸部との境に明瞭な稜線を有しており、口唇部を強く面取る。口縁部外面に不鮮明な縄文を施した後、一条の沈線を描く。頸部には沈線で山形状文を描いており、主文様を有していた可能性がある。

332は波状口縁であり、内面に段を有する。胴部の最大径はその上部にある。外面にRLを施した後、沈線を施す。胴部には、頸部下端からRLを施した後に沈線で区画し、磨消縄文としている。その意匠は、波頂部下に波頭状文の系譜にあるものを有すると考えられ、その左右には沈線の端部を巴様に丸めて収めて絡ませた意匠を持つ。

333は突起を有しており、緩やかな波状口縁である。口縁部を外面に肥厚させ、その内面に抉るような沈線を一条施す。外面の下端部には沈線を一条施す。頸部は短く、頸部下端に沈線を一条施しており、頸部と胴部を区画する意図があったと考えられる。胴部は直線的な沈線で区画しており、区画1つ1つは極めて横に長い。極めて短い継の沈線様の文様は刺突である。

334と335は砲弾形の器形である。いずれも口縁部外面とその直下に文様を有する。334は緩やかな波状口縁であり、口唇部を強く面取る。波頂部には刻みを施しており、その直下の外面に主文様を有する。主文様は、RLを施した後に施した中空の原体による円形刺突であり、その脇を沈線で描いた弧状文で囲む。従文様は二条の沈線である。主文様下の胴部には、多重の沈線で半紡錘状文を描いており、半紡錘状文の最も外の沈線は器面を一周すると考えられ、口縁部と胴部を区切る意図があったと考えられる。

335は小形であり、口唇部を面取る。口縁部外面に、斜行する沈線を多重に施す。口縁部下端にも沈線を二条施しており、それらの間隔は左の方が広いことから、334の胴部文様と同様の意匠を持つと考えられる。

336と337は、口縁部内面に主文様と従文様で構成される文様を有し、口唇部を強く面取る。

336は内面にRLを施した後、端部を丸く収めた一条の沈線を左右から絡ませて主文様としている。従文様は一条の沈線である可能性が高い。外面の主文様は、RLを施した後に施した中空の原体による円形刺突であり、従文様は一条の沈線である。

337は、頸部との境に明瞭な稜線を有する。内面はLRを施した後、沈線を二条施す。上の沈線は流水文状の主文様であって、従文様は一条の沈線である。それらを囲うように下の沈線があり、その間のみ縄文を残した可能性がある。外面は、LRを施した後、沈線で長楕円文を描く。主文様は長楕円文が向き合う所として考えられ、その下にのみ頸部に文様を有する。

頸部の文様は、LRを施した後、沈線で「U」字状文を描いて間を挟んで向き合わせ、その両脇に沈線を施して区画したものである。

338は内面を厚く作出しており、その下端に段を有する。多重の沈線文であって、主文様は円文、従文様は鋸歯文である。赤彩されていたと考えられる。

339と340は、外傾する頸部から口縁部が短く立ち上がる。いずれも薄手である。339は、口縁部外面にLRを施した後に沈線を二条施し、その間には縄文を残す。胴部にも同様の文様を有しており、沈線の端部に刺突を有する可能性が考えられる。

340は、口縁部外面にLRを施した後、沈線を二条施し、その間に縄文を残す。そこには右からの刺突を施しており、手前は尾を引くような刺突である。口唇部にはレンズ状の刺突を有する。

341は、RLを施した後に端部を丸く取めて絡ませる沈線文であって、その下端を一条の沈線で囲う。上端の沈線は頸部と胴部を区切る意図があったと考えられる。

342は、RLを施した後に沈線を施す、その意匠は、端部を丸く取めて絡ませるものと考えられ、その下端を一条の沈線で囲う。上端の沈線は頸部と胴部を区切る意図があったと考えられ、その上には縄文が残る。

343は、巻貝の回転縊縄文を施した後に沈線で区画して磨消縄文としている。その意匠は波頭状文の系譜にあると考えられるが、波頭状文の脇の沈線は直線的である。

344は、外面に沈線を二条施す。342と似た意匠と考えられる。

345は、LRを施した後に沈線で区画し、磨消縄文としている。意匠は波頭状文の系譜として考えられるが、磨消縄文の中を更に区画し、そこに縄文を残すという、これまで見受けられない意匠となっている。

346から356は縄文のみ施す土器であり、全て口縁部である。

346から349は小形のものである。346は口唇部を強く面取り、胴部外面にRLを施す。347は口唇部と口縁部外端を強く面取り、口縁部外端と胴部にRLを施す。348は口唇部を強く面取り、口縁部外面にRLを施す。349は口縁部外面と胴部の他、口縁部内面にもRLを施す。

350は口縁部を厚く作出しており、外面を強く面取る。口縁部内外面にRLを施すと共に、口唇部の一部には縄文を押圧している。

351は口唇部を強く面取り、口縁部外端と同様にRLを施す。

352は口唇部と口縁部外面を強く面取り、LRを施す。

353は口縁部をやや厚く作出しており、緩く内湾させる。内面を強く指で撫でており、凹線状となっている。口縁部外面の下端にLRを施す。

354は口縁部を厚く作出しており、断面は玉縁状を呈する。外面には巻貝の回転縊縄文を施す。

355と356は口縁部内面に沈線を施す。355は小形であって、頸部で強く屈曲する。沈線は狭くて浅いものである。口唇部は強く面取り、口縁部外端と共にLRを施す。胴部にもLRを施すが、後で撫でているため不鮮明となっている。

356は口唇部と口縁部外面を強く面取り、RLを施す。沈線の下にRLを施すが、石灰華の付着のため不鮮明である。胴部外面にもRLを施す。

357と358は無文である。357は砲弾形の器形になると考えられ、口唇部を強く面取る。口縁部外端に、右斜行の短沈線を口縁部から胴部へ向かって施す。補修孔を有する。

358は口縁部を広く作出しており、口唇部を面取る。

359は小形の壺であり、外反する短い頸部から口縁部に至る。

360と361は浅鉢である。ボウル形であって、いずれも無文である。360は口縁部を断面が玉縁状に作出し、外面直下に沈線を一条施す。



Fig.37 第1次調査「一括」出土遺物（319～331）

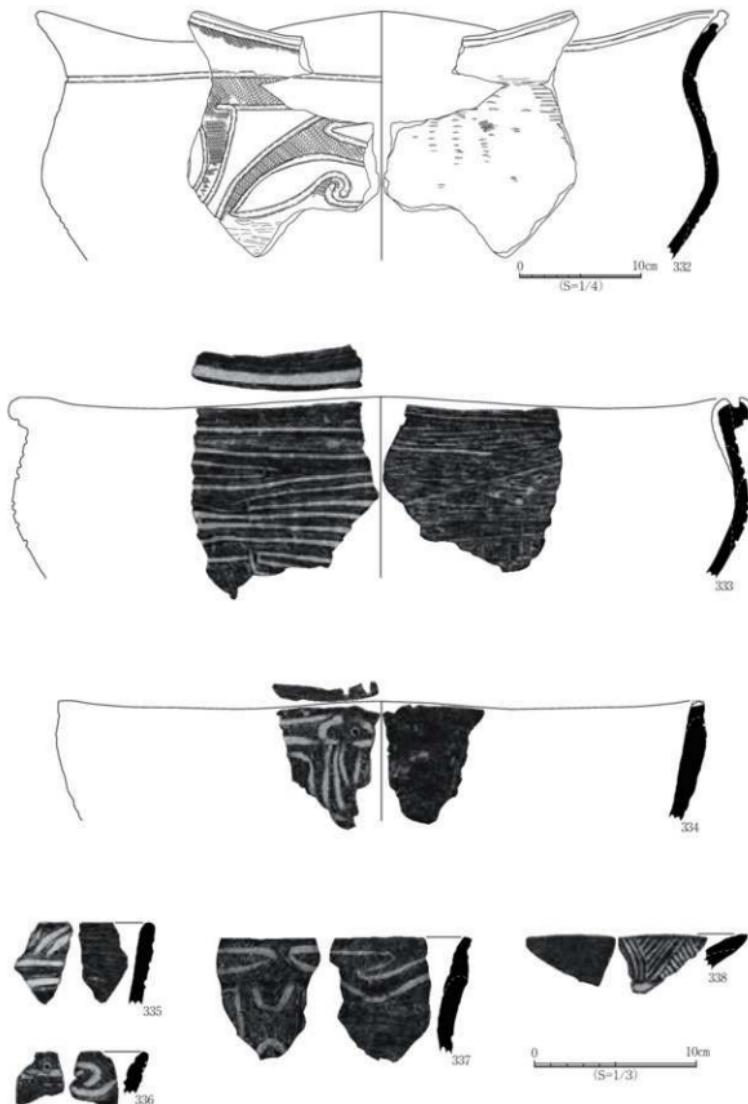


Fig.38 第1次調査「一括」出土遺物 (332 ~ 338)

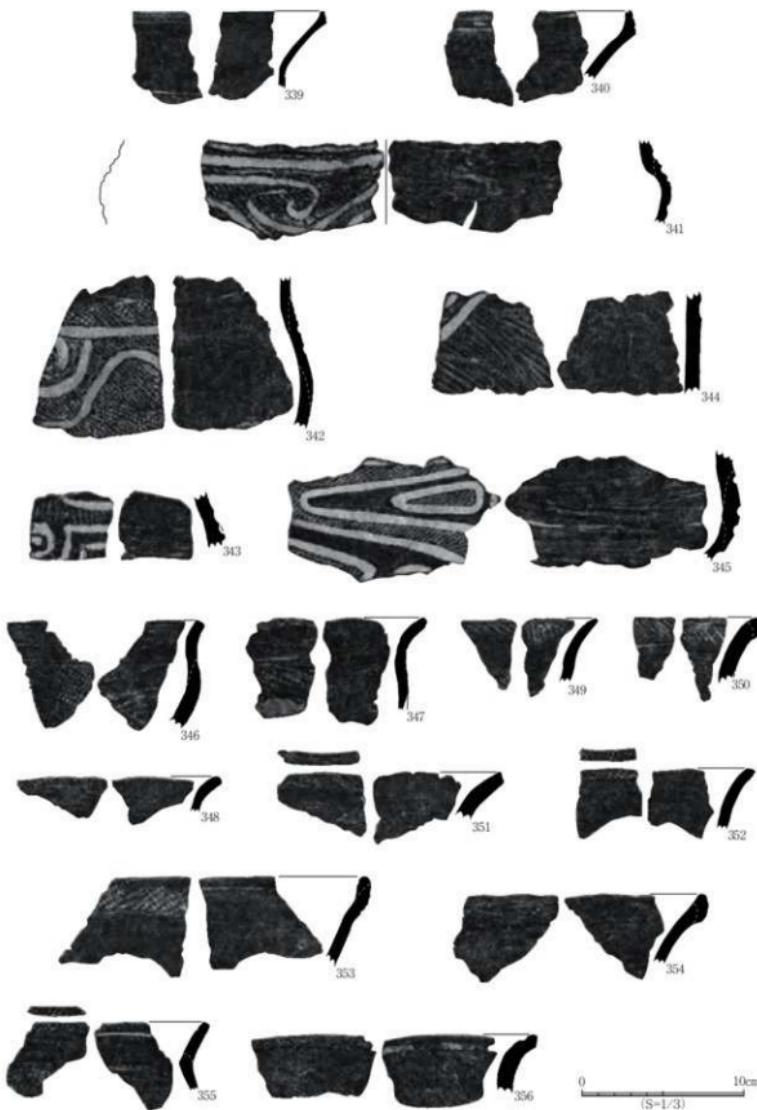


Fig.39 第1次調査「一括」出土遺物（339～356）

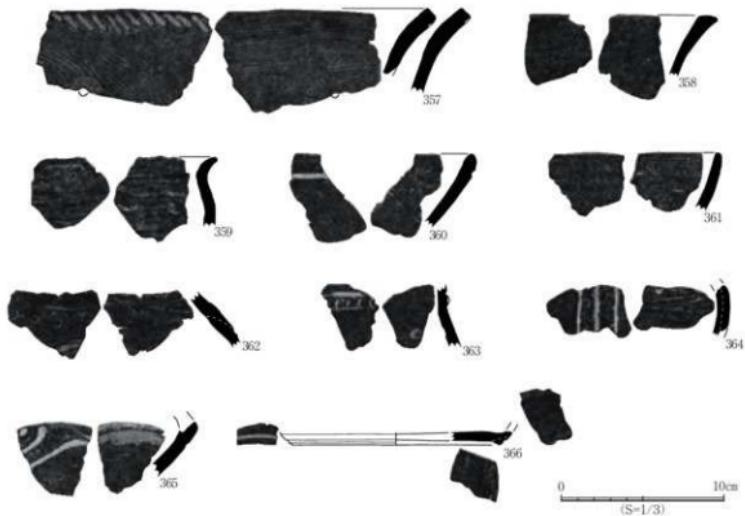


Fig.40 第1次調査「一括」出土遺物（357～366）

362から365は注口付土器として考えられる。362は口径ないしは頭径の小さいものの胴上部として考えられる。外面に、中空の原体で浅い円形刺突を施し、その下に沈線を一条施す。

363は頭胴部の可能性が高く、削り出した隆帯の上に沈線を一条施し、隆帯上を三日月状に刺突している。精選された粘土を使用しており、外面は丁寧に磨いている。364は胴部であり、外面に粘土帯を添付して隆帯を作出している。隆帯の両脇と中央に沈線を施す。365は胴部が算盤玉状に屈曲する器形であり、RLを施した後に沈線で区画して磨消繩文としている。

366は底部であり、貼付高台である。浅鉢または注口付土器のものの可能性が考えられる。外面にRLを施した後、沈線を一条施す。精選された粘土を使用しており、丁寧に磨いている。

4. 第2次調査(Fig.41)

所在地 御荘平城2080

調査面積 14m²

調査原因 民間開発(個人住宅の改築)

調査期間 昭和37年10月28日から同年10月30日まで

調査主体 御荘町

調査担当 野平啓真(御荘町文化財保護委員会代表)

調査参加者 不明

調査記録 野平啓真 1970 「第一編 歴史編 第一章 原始古代の御荘 三 平城貝塚の出土物」

『御荘町史』 20~45頁 御荘町

草地牲自 1986?『平城貝塚発掘調査概報(第2次調査)』(※報告または研究ノートに匹敵する刊行物ではなく、ワードプロセッサーで作成されたメモ)

上記の『平城貝塚発掘調査(第2次調査)』は、下記の通り(原文ママ)である。

I 調査期日 1962(昭和37)年10月28日~30日

II 調査主体 南宇和郡 御荘町 教育委員会

III 調査担当者 南宇和郡 御荘町 文化財保護委員会 代表 野平啓真

IV 調査の概要

この調査は民家の改築工事に伴う緊急調査であり、正式な調査報告書は刊行されていないが、直接担当をされた故野平啓真氏が『御荘町史(古代編)』にその一部を記録に止めているに過ぎない。

これ以後、1972(昭和47)年の第3次、1982(昭和57)^{注1}年の第4次の記録は、調査を担当し指導した元松山市立雄新中学校 草地牲自教諭によって、第4次^{注2}は「愛媛の文化財」^{注3}に、第5次^{注4}は御荘町教育委員会から報告書が出されている記録がある。

今回の調査は、1954(昭和29)年と同じように、民家の改築によって緊急に調査が行われたものであるが、学術的な意義は高いと言える。

この調査は、前田茂男氏(当時御荘町長)や工事関係者の好意によって遂行されたもので、前回に比べて調査期間が短く面積も狭かったが、前回との関連を考えると、意義深いものであった。

発掘は前もって予定したものではなかったが、工事に当たっては、文化財保護委員会が関係者に対して、県指定の『平城貝塚』の地域内での掘り返しについては、工事を慎重に行うよう依頼してあったため、10月28日、人骨発見の報により、直ちに工事を中止させて、発掘調査を開始したものである。

10月30日に発見された人骨は、28日のものより約3m北により、前記コンクリート塀より2.5m、深さは平らに削られた地表より約40cmの位置よりの頭蓋骨であった。これを中心にして他の部分を探したが見当たらず、あるいは前々日のものではないかと考えてみたけれど、頭蓋骨の大きさから観ると未成年のものと考えられることから、別個のものであると判断して取り扱うこととした。

頭蓋骨の大きさは、直径12~13cm、厚さ約5mmで、周辺より貝輪片(サルボウ)が発見された。

今回の調査でも人骨以外に縄文土器片、貝類、獸骨類等多数が出土している。

人骨が発見された場所は、平城商店街のはば中央、旧国道56号線から約8m南に入り、四国銀行御荘支店に東接し、同銀行のコンクリート塀より1mほどの所である。

発見された人骨は、鎖骨から下の部分(左手は一部のみ)で、肋骨をはじめ完全に近いものであった。特に左足のしょ骨は2本もついていて、人骨の全長は1.4mあまり、腰椎から足先までの長さは90cmで、「仰臥伸展葬」の形で発見された。右足は湾曲しており、すねの下部に10cm近い傷痕があった。埋葬状態は前回の昭和29年の場合と同様に拳大以上の川原石を並べ、やや西向きの姿勢ではほぼ水平の状態に置かれ、洪積土である黄褐色土をもって約10cm覆っていた。

V出土遺物（第1次調査時出土分を除く）

1 自然遺物

- (1) 獣骨類 出土した獣骨類は、第1次調査のときと種類はほとんど変わっていない
- (2) 貝類 オオノガイ、アサリ、シジミ、アカニシ、アマオブネ、カワニナの6種の淡水・鹹水産貝類が出土している。
- (3) 魚類 クジラの骨とみられるもの、マイカ^{註1}の2種類が出土

2 文化遺物

- (1) 石器類 姫刃の様式をもつ石斧、川原の自然石に加工がほどこされたもの数点、石鏃1点が出土している。
- (2) 骨角・貝器類 ハマグリ、サルボウの貝輪片各1点、獸骨製ヘラ状(シカ又はイノシシの肩甲骨？長さ5～6cm)、牙製垂飾品2点(イノシシの門歯)
- (3) 土器類 第1次調査のときと形式はほとんど同じである。

VI所感

今回の調査は緊急の調査であり、十分に準備し、計画的に調査された学術調査ではない。また、発掘担当者も未経験者であったため、総合的な見地から調査されたものでもない。そのために、発掘担当者の主觀によって、調査が人骨に限定されたくらいがあり、他の出土遺物について深い注意をはらっていないことから、土器等については細かい分類がされていない。

次回からの調査は、組織だった調査を実施して、偏った観方をしない発掘調査・研究を進めて、「平城貝塚」の真価を問いただしていく必要がある。〔文責 草地牲自〕

註1 第4次調査は、1981(昭和56)年9月25日から10月5日まで、となっている。

註2 正しくは、第3次調査である。

註3 正しくは、『愛媛の文化』である。

註4 正しくは、第4次調査である。

註5 海棲哺乳類のマイルカと思われる。

二次調査の出土物で図示したのは、貝製品3点、骨製品1点、歯牙製品2点である。これらについては上述のメモ及び二次調査出土物として保管された状態があつたため、二次調査出土物として判断した。しかしながら、土器と石器そして埋葬人骨についての实体は不明である。

367から369は貝製品である。全て貝輪の破片であり、ベンケイガイの右殻を使用し、研磨している。367は内側を磨いて丸くし、丁寧に仕上げている。368は縁辺部の裝がほとんど確認できないほど磨かれている。また、中央部を打ち欠いて成形した後、打ち欠いた面を丁寧に研いでいるため、極めて平滑な面を形成している。内側も磨いて丸く仕上げている。369も中央部を打ち欠いて成形した後、打ち欠いた面を丁寧に研いでおり、内側も磨いて丸く仕上げている。縁辺部の裝が全く確認できないほど磨かれている。

370は骨製品である。孔の開け口の径は4mmで、開いた方の口の径は3mmである。垂飾品であった可能性が考えられる。

371と372は歯牙製品である。いずれも猪の下顎の切歯であり、歯根を穿孔している。孔径は、371が4mm、372が2mmである。

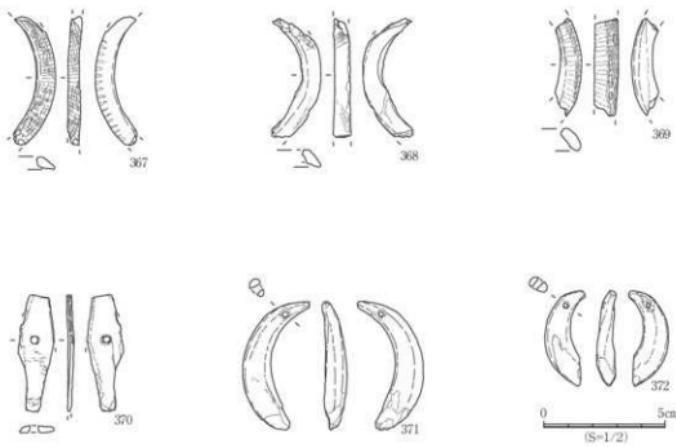


Fig.41 第2次調査出土遺物 (367～372)

5. 昭和40年資料(Fig.42～50)

原因 水道管敷設

昭和40年に、平城貝塚の範囲内で行われた水道管敷設時に中岡修也氏(城辺町文化財保護審議会委員)によって採集され、大切に町内で保管されてきた資料である。

112点を図示した。373から478が縄文時代、479から482が弥生時代、483と484が中世であって、縄文時代のものは全て後期である。

373から398は口縁部であり、いずれも口縁部に文様を有する。

373から375は口縁部をやや厚く作出しており、突起を有する。373は口縁部外面にRLを施した後に涙滴状文と一条の沈線を施す。突起には沈線を絡ませる。頭部にも沈線を施しており、意匠は波頭状文の系譜の可能性が考えられる。374は口縁部外面にRLを施した後に沈線を施し、突起に絡ませる。その上面と内面に沈線を施す。375は口縁部外面にRLを施した後、涙滴状文と一条の沈線を施す。頭部には橋状把手を有しており、二条の沈線で渦文を描いている。一条は突起に絡み、もう一条は平縁外面に施された沈線に繋がると考えられる。

376は口縁部をやや厚く作出しており、突起に至る手前の破片である。口縁部外面に涙滴状文と一条の沈線を施す。頭部に沈線文を施すが、波頭状文の系譜にある意匠を、左右の沈線で区画していたと考えられる。

377は波頂部を有し、頂部に押圧して緩く窪ませている。波頂部には沈線を二条施している。

378 から 383 は口縁部外面に文様を有し、それらは主文様と従文様で構成される。378 は口縁部を厚く作出しており、口唇部を強く面取る。口縁部下に明瞭な稜線を作出している他、その下端に沈線を一条施しており、口縁部と頭部を区画する意図があったと考えられる。主文様は、RLを施した後に沈線を少なくとも二条施したものである。従文様は二条の沈線であり、内側の沈線は端部を丸めて収め、それを開くように外側の沈線を施している。頭部は、RLを交互に縱位横位と施して羽状文としている。

379 は口縁部をやや厚く作出しており、口唇部を強く面取る。口縁部下に不明瞭な段を作出している。主文様は、RLを施した後に施した中空の原体による刺突であるが、半月状となっている。主文様を開む沈線を二条施しているが、外側の沈線は正面左のみである。従文様は一条の沈線であって、端部を「L」字状に折り曲げて収めている。主文様下の頭部には沈線を三条施しており、その意匠は半紡錘状である。尚、頭部下端に沈線を一条施す。

380 は口唇部を強く面取る。主文様は、RLを施した後に施した、中空の原体による円形の2つの刺突である。下の刺突は頭部の文様に潰されている。従文様は、二条の並行する沈線であって、上の沈線は端部を丸めて収めている。頭部には、波頭状文の系譜として考えられる意匠を沈線で描き、その左右に一条の沈線を施したものと考えられる。尚、口縁部下端には沈線を一条施している。

381 は口縁部をやや厚く作出しており、口唇部を強く面取る。口縁部下に明瞭な段を作出している。主文様は、巻貝の回転擬縄文を施した後に施した中空の原体による刺突であって、沈線で「V」字状文を描き、主文様を中心に向き合わせたものを左右に施している。従文様は二条の並行する沈線である。

382 は、中空の原体による刺突とその左右に配した二条の沈線による弧状文である。従文様はRLである。

383 は、沈線で描いた弧状文を向き合わせて生じた円状の部分にLRを施しており、それが主文様として考えられ、その両脇には弧状文を施したと考えられる。

384 から 394 は、口縁部外面に文様を有しているが、従文様の部分である。

384 は口縁部をやや厚く作出しており、口唇部を強く面取る。口縁部下端に明瞭な段を作出している。外面にRLを施した後に沈線を一条施しており、端部を主文様の手前で丸く折り返したと考えられる。頭部上端には沈線を一条施しており、主文様の下に頭部文様を描いていたと考えられる。

385 は口縁部をやや厚く作出しており、口唇部を強く面取る。口縁部外面にはRLを施した後、沈線を一条施す。頭部にも沈線を一条描いており、主文様ないしは突起の下で波頭状の系譜にある意匠を描いていたと考えられる。

386 は口縁部を厚く作出しており、口唇部を緩く面取る。口縁部外面にはRLを施した後、沈線を一条施す。頭部にも沈線を一条施しており、突起下の頭部文様の端を区切っていたと考えられる。

387 は口縁部下端を厚く作出し、稜線を作出している。口縁部外面にはRLを施した後、沈線を一条施し、端部を主文様の手前で丸く折り返したと考えられる。

388 と 389 は、口縁部下端を厚く作出しており、389 は稜線を作出している。いずれも口唇部を強く面取り、388 はRLを施す。口縁部外面は、388 はRL、389 はLRを施した後に沈線を一条施しており、端部を主文様の手前で口唇部へ跳ね上げたと考えられる。

390 は口唇部を強く面取る。口縁部外面にRLを施した後、二条の沈線を並行させる。

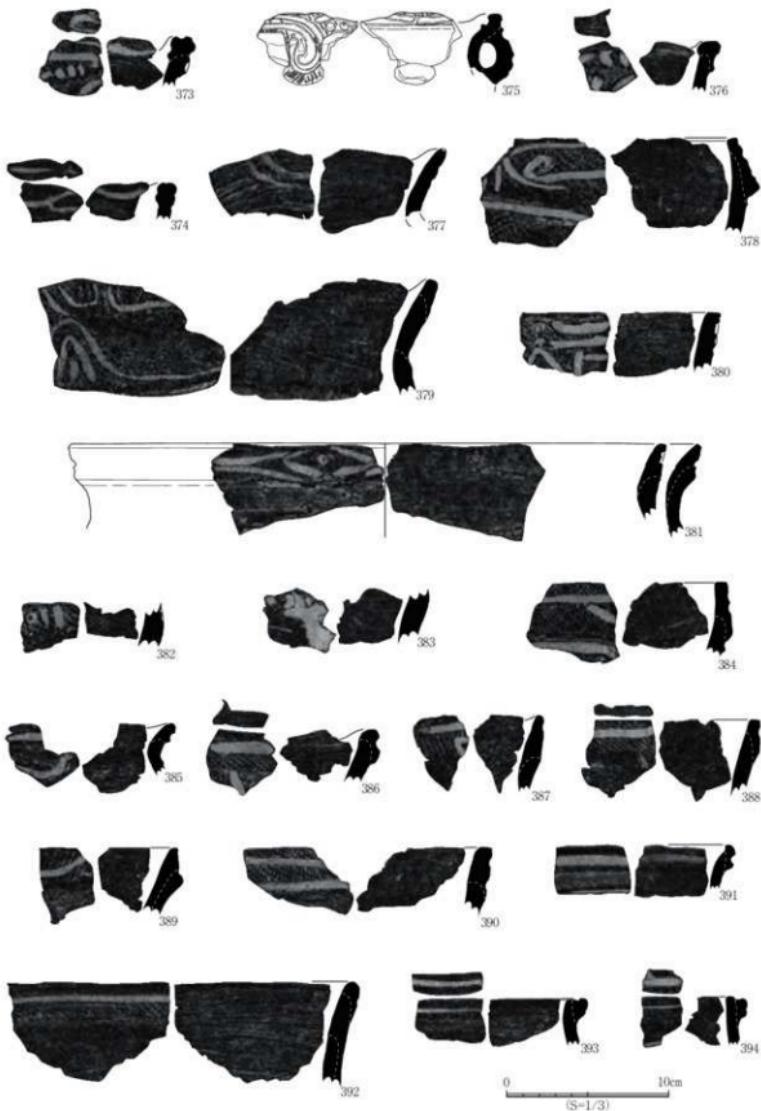


Fig.42 昭和 40 年資料 (373 ~ 394)

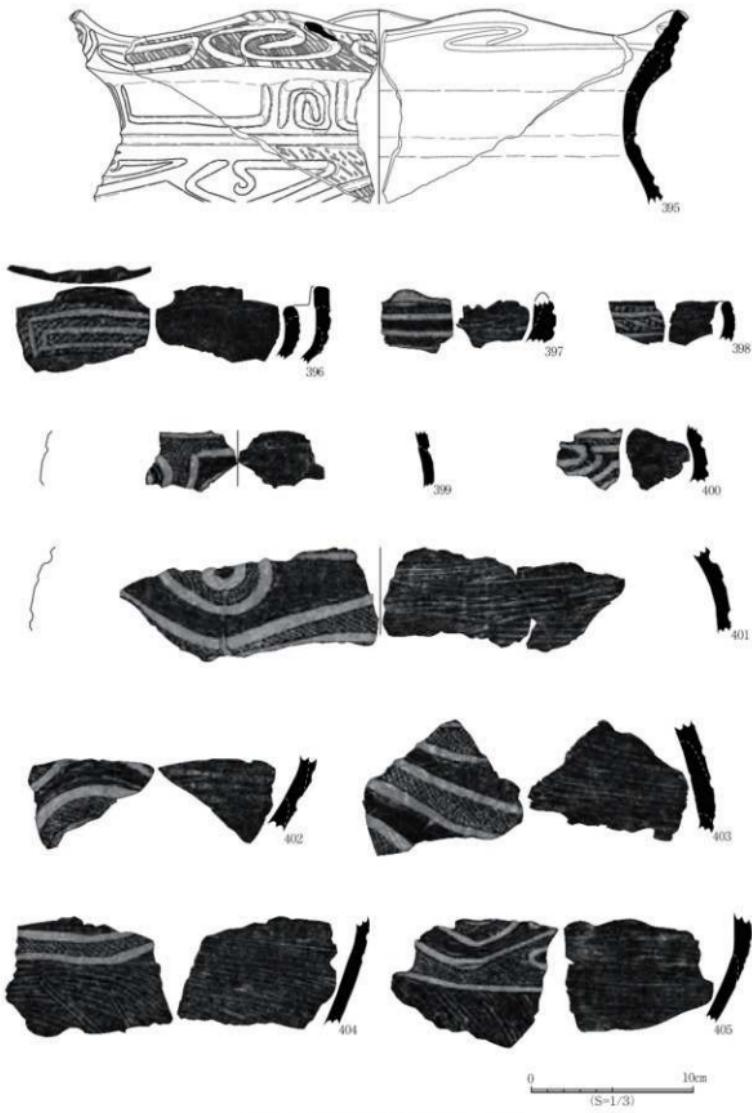


Fig.43 昭和 40 年資料 (395 ~ 405)

391は口縁部をやや厚く作出しており、RLを施した後、沈線を一条施す。

392は口縁部を広く作出しており、内面に段を有する。外面にRLを施した後、沈線を一条施す。頸胴部間にも一条の沈線を施していたと考えられ、赤彩されていた土器である。

393と394は口縁部を厚く作出している。口縁部外面と口唇部にそれぞれ一条の沈線を有する。

395は波状口縁であって、口縁部を厚く作出しており、その内外面に文様を有する。口唇部は強く面取り、波頂部のみに刻みを3つ施す。口縁部外面は主文様と従文様で構成され、波頂部の下に主文様を有し、RLを施した後に沈線で「C」字状文を描いて、端部を絡ませている。従文様は沈線で描いた長梢円文である。口縁部内面も主文様と従文様で構成され、左右から伸びてきた沈線の端部を「V」状に折り曲げて絡ませている。頸部には、主文様下に一条の沈線で渦文を描き、その左右を沈線で開むが、その沈線はかすがい状の意匠であって、渦文の間に施されていると考えられる。胴部はRLを施した後に沈線で区画して磨消繩文としていた可能性が極めて高く、その意匠は波頭状文の系譜にあると考えられる。

396から398は口縁部外面に複数の沈線を施す。396は突起を有しており、細い粘土紐を右回りに捻ったものを口唇部に添付している。外面にLRを施した後に直線的な沈線で文様を描いており、渦状文の意匠であると考えられる。397はRLを施した後に沈線を少なくとも四条施す。398はLRを施した後、沈線を施す。沈線間に右斜行の短沈線を施している。

399から414は磨消繩文の胴部である。399はLRを施した後に沈線で区画する。意匠は波頭状文の系譜と考えられ、赤彩されていた土器である。400はRLを施した後に沈線で区画する。意匠は波頭状文の系譜と考えられ、赤彩されていた土器である。401はRLを施した後、沈線で区画する。意匠は波頭状文の系譜と考えられる。402から410は、RLを施した後に沈線で区画する。410の意匠は波頭状文の系譜として考えられるが、端部を巴様に丸めて取めた沈線を突き合わせるように施している。411は薄手であり、RLを施した後、沈線で区画している。412はRLを施した後、沈線で区画している。413はLRを施した後、沈線で区画している。414はRLを施した後、沈線で区画している。

415は磨消繩文の底部で平底である。RLを施した後、沈線で区画している。

416から426が繩文地沈線文の胴部である。

416は頸部下端が一部残っており、渦文の可能性がある。主たる頸部文様の左右を縱位の沈線で区画していると考えられる。胴部はRLを施した後、沈線を施している。417はRLを施した後、沈線を施している。418は非常に厚く、RLを施した後、沈線を施している。419から423はRLを施した後、沈線を施している。

424はLRを施した後に沈線を多重に施しており、その意匠は三角形を上下交互に配したものと考えられる。425はLRを施した後、多重沈線を並行させ、沈線が交わるところで端部に「レ点」様に跳ね上げるような刺突を施す。426はLRを施した後、浅い多重の沈線を並行させている。沈線を施してから器面を撫でており、沈線脇の粘土のはみ出しと繩文が不鮮明になっている。

427から430が沈線文の胴部である。427は沈線文を施してから器面を磨いている。意匠は波頭状文の系譜にあると考えられる。428は沈線を二条、429は三条以上それぞれ施している。

430は四条の沈線を一単位とし、それを方形に配置したものを施す。

431は条線文の胴部である。頸部下端に沈線を施しており、頸胴部を区画する意図があると考え



0 10cm
(S=1/3)

Fig.44 昭和40年資料 (406 ~ 415)

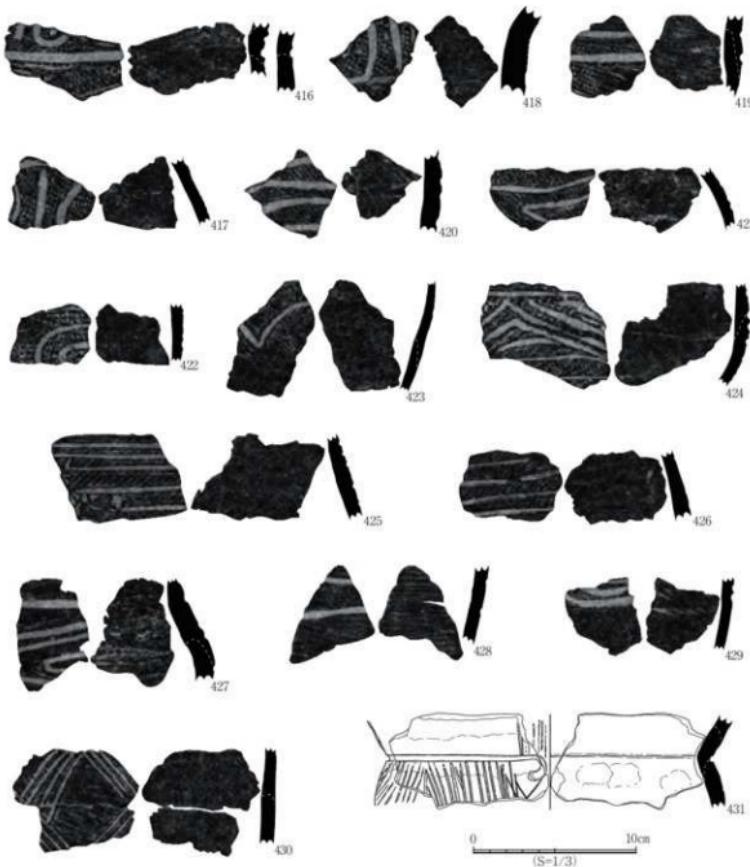


Fig.45 昭和40年資料(416~431)

られるが、その端部は胴上部において丸めて収められたと考えられる。胴部においては、それが主たる文様となり、条線で囲われている。

432から442は縄文または擬縄文のみを有する。432と433は口縁部である。432は口唇部を強く面取り、外面に --- を施す。433は外端にLRを施す。434は内面にRLを施すが、外面に沈線を一条施す。435はLRを交互に縦位横位に繰り返して施しており、羽状文としている。436から439はRLを施す。440はLRを交互に縦位横位に繰り返して施しており、羽状文としているが、拓本右端の縄文はLRLの複節縄文の可能性が考えられる。441と442は巻貝の回転擬縄文である。

443から463は無文である。443から452は口縁部であって、443から445は文様を有する。

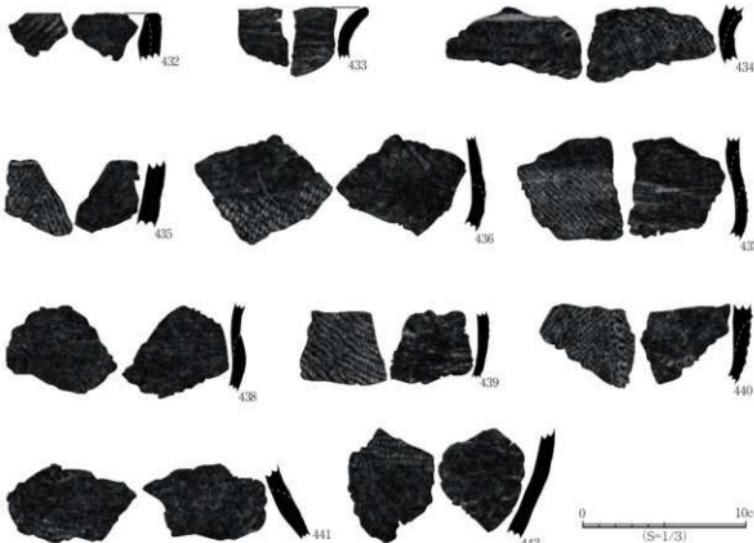


Fig.46 昭和 40 年資料 (432 ~ 442)

443 は口唇部を、444 と 445 は外端を刻む。446 から 452 は無文であるが、451 は赤彩されている。452 は外面をやや厚く肥厚させており、下端の接合が明瞭に残る。453 から 462 は胴部であって、卷貝を用いた器面調整を基調とする。463 は胴部が張る器形になると考えられる。

464 から 466 は底部である。いずれも貼付高台であって、接地部分を強く面取る。

467 から 474 は浅鉢、475 と 476 は壺、477 は鉢である。

467 から 470 はボウル形を呈し、口縁部に文様を有する。467 は口唇部を強く面取り、外端に短沈線を施す。その下に卷貝の回転擬繩文を施した後に沈線を描くが、端部を「U」字状に丸く収めて絡ませたと考えられる。468 は口縁部直下に一条の沈線を、469 は体部に二条の沈線をそれぞれ施す。470 は口縁部直下に沈線を施す。

471 から 473 はボウル形を呈する。471 から 473 は口縁部であって無文のもの、473 は卷貝条痕が顕著に残る。474 は胴部であり、外面に浅い沈線を施す。

475 と 476 は壺の胴上部と考えられ、476 は種子圧痕同定(試料番号 3)を行なった。

477 は小形の鉢である。微細な雲母を多量に含む。

478 は浅鉢の底部である。平底であり、皿形になると考えられる。

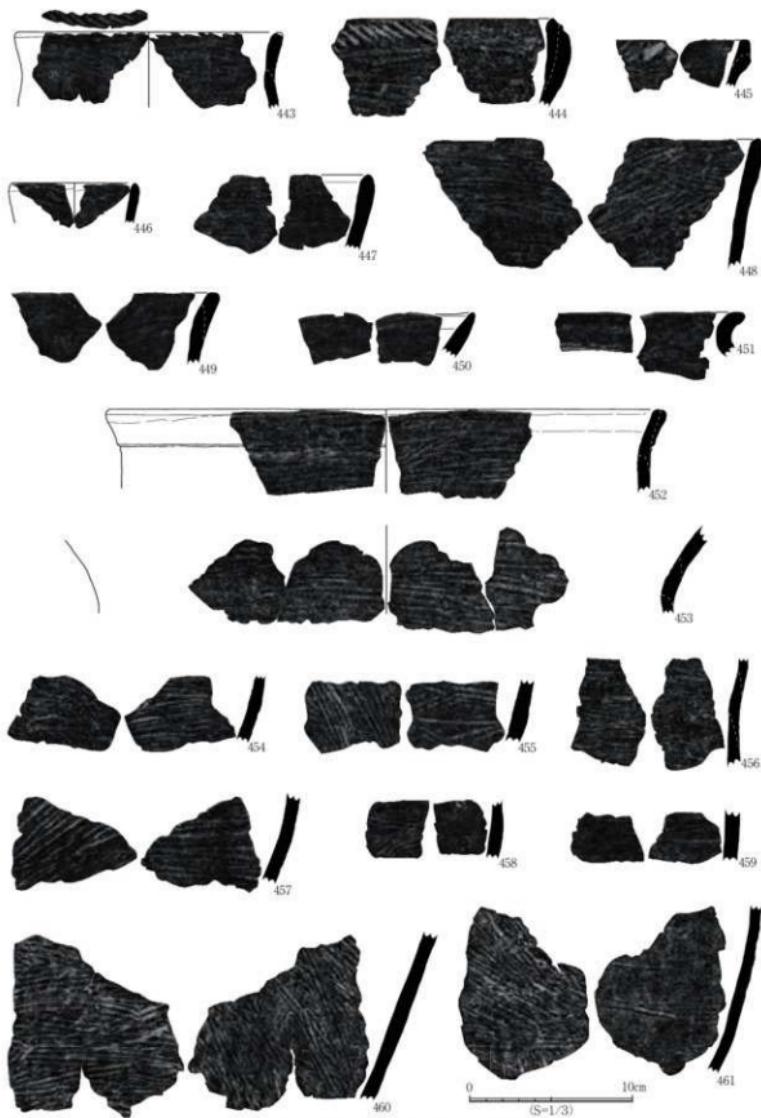


Fig.47 昭和40年資料 (443~461)

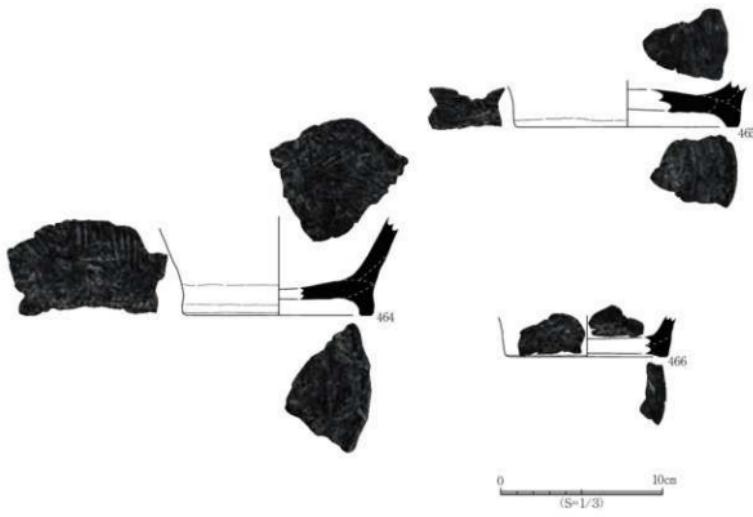


Fig.48 昭和40年資料 (462~466)

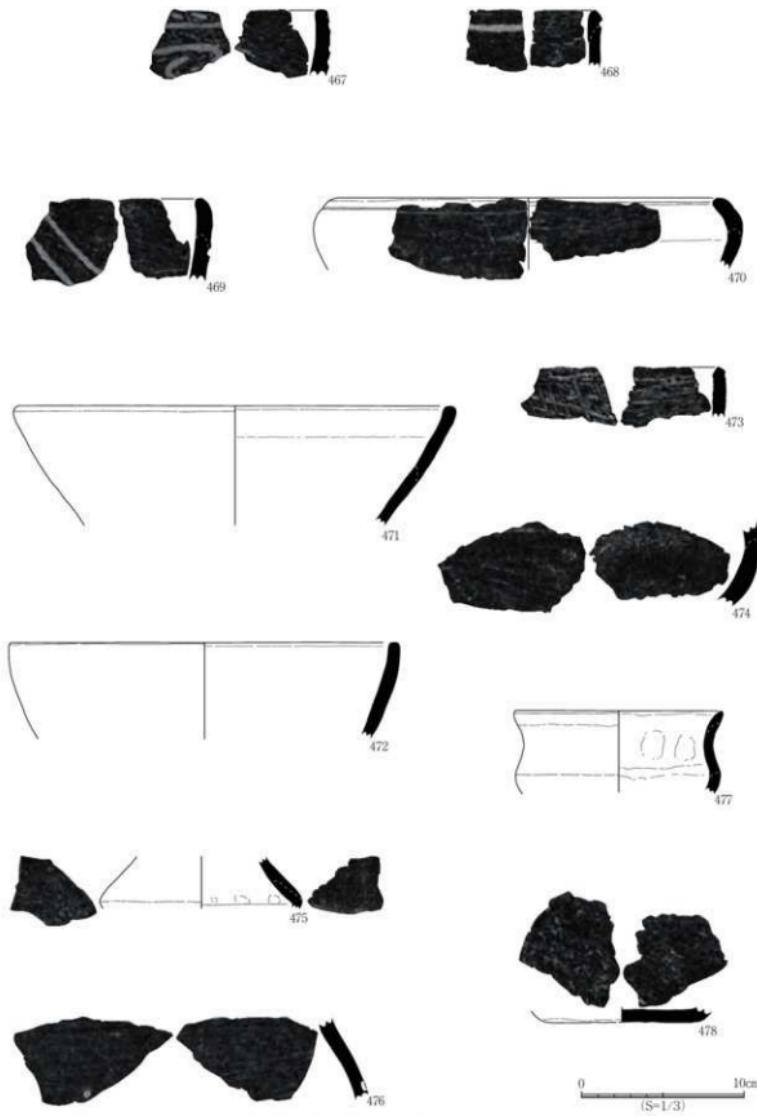


Fig.49 昭和40年資料 (467～478)

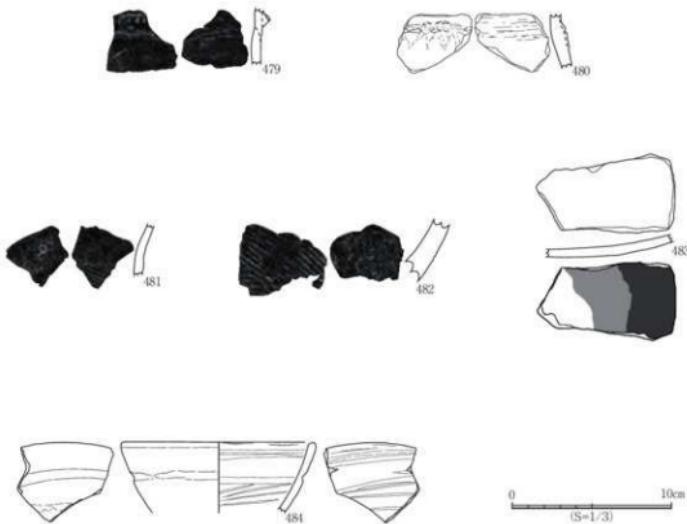


Fig.50 昭和40年資料 (479～484)

479から481は弥生時代後期のもので、壺の頸部である。479は粘土帯を添付して隆帯とし、断面を三角に成形した後にその上面を刺突している。480は粘土帯を添付して微隆帯とし、その下に楔状の微隆帯を作出している。481は外面に下から上へハケで撫でている。

482は弥生時代後期末のもので、壺の胴部である。体部外面には叩いた痕が残る。

483は鍋の底部である。外面には煤が付着しており、その度合いが外になるほど多い。

484は瓦器の碗である。内面に暗文を施す。

6. 第3次調査(Fig.51~64)

所在地 御莊平城2079

調査面積 90m²(調査対象面積140m²)

調査原因 民間開発(金融機関の施設建設)

調査期間 昭和47年10月21日から同年10月25日まで

調査主体 御莊町教育委員会

調査担当 草地牲自(愛媛県教育委員会文化課)

調査参加者 不明

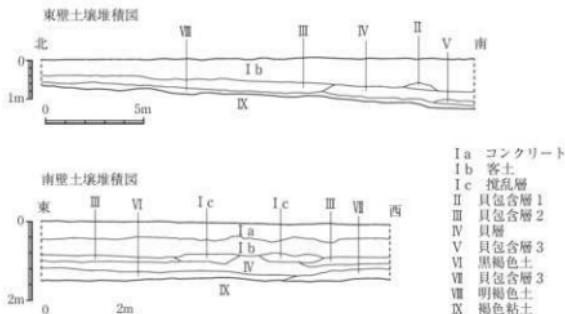
調査記録 草地牲自 1973 「平城貝塚第三次発掘調査概報」『愛媛の文化』第13号 愛媛県文化財保護協会

調査概要

調査記録によると、予備調査と表土除去の際の土壌観察そして時日(※調査可能な期間のことか)や貝包含層の厚さなどを考えて、しかも貝類がこまかく破碎されている状態、調査面積が広くないという諸条件から、調査対象面積のうち、四方二メートルを残して全面発掘調査を行なっている。

調査区の東壁と南壁の土壌堆積図(Fig.51)が作成されており、地形は北から南へ下がっていることが分かる。土壌堆積図と記録から、混土貝層の下に純貝層が所在することが確認された他、南壁においては純貝層を挟んで上下に混土貝層が所在することが確認されている。

出土遺物は、土器・石器・骨角貝器類・貝・獸骨・魚骨である。土器の出土量は「トロ箱10箱分」と記録されており、第一次調査の分類に従って、「平城式土器」第一類から第五類そして無文土器を基本に細分されている。



※この土壌堆積図は、草地牲自 1973 の 200 頁に掲載のある「東壁土壌堆積図」・「南壁土壌堆積図」をそのまま譲り受けし。

一部加筆したものである。併し、各堆積層の名前については、東壁と南壁で統一した。

尚、スケールについては、幅と深さにおいて異なる可能性があるものの、各堆積層とその傾斜については概ね正確であると思われる。

Fig.51 第3次調査土壌堆積図

概要報告に掲載されている遺物の内、その所在が確認できた71点を図示した。そのほとんどが縄文時代のものであって、僅かに弥生時代と古代のものも認められる。縄文時代のものは後期が主体であるが、中期と晩期のものを僅かに含む。

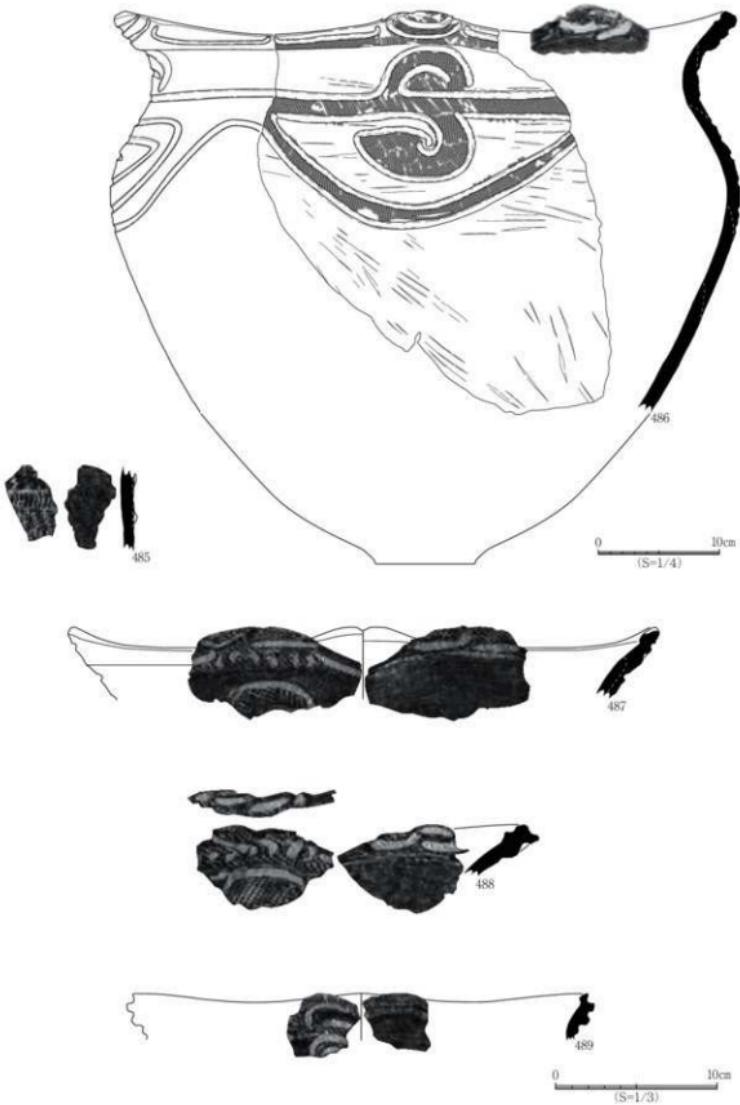


Fig.52 第3次調査出土遺物 (485～489)

485は中期の土器である。深鉢の胴部であって、外面に大ぶりな縄文を施した後に粘土帯を貼り付けて隆帶とし、その上を刺突する。縄文は複節縄文（LRL）と考えられる。

486から522は深鉢であって、有文である。いずれも口縁部外面に文様を有する。

486は緩い波状口縁であり、口縁部をやや厚く作出する。波頂部には沈線を二条施し、内側の沈線は波頂部内面に伸びる。平縁にはRLを施した後、沈線を一条施し、端部を口唇部に向けて曲げて取めており、波頂部の文様とは連続しない。波頂部下の頭部と胴部にはRLを施した後に沈線で区画して磨消縄文としており、その意匠は波頭状文である。

487は緩い波状口縁であり、口縁部をやや厚く作出する。波頂部に沈線を「S」字状に絡ませる。その外面下には、短沈線を6つ施して涙滴状文としている。平縁は、外面に沈線を一条施しているものの、波頂部の文様とは連続しない。波頂部下の頭部は沈線で区画し、磨消縄文としている。その意匠は波頭状文の可能性がある。尚、沈線を施した後にRLを施している。

488は緩い波状口縁であり、口縁部を厚く作出する。波頂部下には、短沈線を少なくとも7つ施して涙滴状文としている。波頂部の2箇所に沈線を施し、それらを「C」字状の沈線で囲む。平縁は外面に沈線を一条施しているが、波頂部の文様とは連続しない。波頂部下の頭部は沈線で区画して磨消縄文とすると考えられ、その意匠は波頭状文の系譜のものと考えられる。

489は極めて緩い波状口縁である。口縁部を厚く作出しており、その下端は明瞭な段となっている。波頂部とその外面は沈線を施したのち、RLを施している。波頂部下の頭部は、沈線で区画して磨消縄文としており、その意匠は波頭状文の系譜のものと考えられる。尚、赤彩されていた土器である。

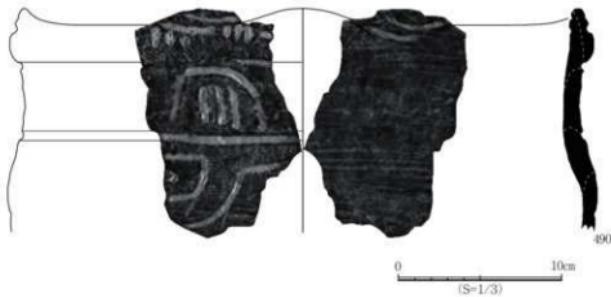


Fig.53 第3次調査出土遺物（490）

490は波状口縁であり、口縁部を肥厚させる。波頂部下に短沈線を6つ施して涙滴状文としているが、3つの涙滴状文を一単位としたものを左右に分けて施している。波頂部にはRLを施した後に沈線を「C」字状に描いて絡ませる。平縁には沈線を一条施すが、波頂部の文様とは連続しない。波頂部下の頭部には沈線を三条施し、それをドーム様の沈線で囲む。頭部下端には沈線を一条施しており、頭胴部を区画する意図があったものと考えられる。胴部はRLを施した後に沈線で区画して磨消縄文としており、その意匠は波頭状文の系譜にあるものと考えられる。

491から499は深鉢の口縁部であり、いずれも口縁部外面に文様を有する。文様は、主文様と従文様で構成される。

491は平縁であり、口唇部を強く面取る。口縁部をやや厚く作出し、その下端に棱線を有する。主文様は、RLを施した後に施した中空の原体による円形刺突であって、その周囲を沈線で描いた弧状文で囲む。従文様は二条の沈線を並行させる。主文様下の頭部には一条の沈線で山形の渦状文を描いており、端部は巴様に丸めて収めている。

492は平縁である。口唇部を強く面取り、内面に段を有する。主文様は、RLを施した後に施した中空の原体による円形刺突であり、従文様は比較的深い一条の沈線である。主文様下の頭部には沈線文を有するが意匠は不明である。脣部は沈線で区画し、磨消絆文とした可能性が考えられるが、その意匠は不明である。

493は緩やかな波状口縁である。主文様は、RLを施した後に波頂部下に施した円形刺突であり、それを抱き込む様に沈線を二条施して、それらを沈線で描いた弧状文で囲む。従文様は沈線文であったと考えられる。

494は平縁である。外反する頭部から口縁部が「く」字状に屈曲して立ち上がる。主文様は、巻貝の回転絆文の後に施した円形刺突であり、それを沈線で弧状文を三条描いて囲む。従文様は並行する三条の沈線である。

495は平縁である。口縁部を強く肥厚させており、断面が三角形を呈する。主文様は、大ぶりなrを施した後に沈線で渦文を描き、それを一条の沈線で弧状文を描いて囲んだと考えられる。従文様は並行する二条の沈線である。

496は口縁部を強く肥厚させており、平縁になると考えられる。主文様は、RLを施した後に施した中空の原体による円形刺突であって、それを沈線で弧状文を二条描いて囲む。従文様は一条の沈線である可能性が高く、その端部は口唇部に向かって折れ曲がる。

497は口縁部を広く作出しており、平縁になると考えられる。主文様は、山形状文を一条の沈線で囲んだものであって、従文様は沈線で描いた長楕円文である。

498は平縁であり、口唇部を強く面取り、RLを施す。主文様は、RLを施した後に沈線を二条描いており、端部を丸く収めて巴様に絡ませたものである。その下には、緩く波打つ沈線を一条施しており、口縁部と頭部の境を意図していたものと考えられる。

499は平縁であり、口唇部を強く面取る。主文様は、RLを施した後に沈線で描いた多重の斜行文であったと考えられ、従文様は並行する二条の沈線である。

500は緩い波状口縁であり、口唇部を強く面取る。外面にRLを施した後に二条の沈線を並行させており、波頂部下に主文様を持っていたと考えられる。頭部下端には、絆文を施した後に一条の沈線を施している。

501は波状口縁であり、口唇部を強く面取る。外面にRLを施した後に沈線を一条施しており、波頂部下に主文様を持っていたと考えられる。頭部下端にも一条の沈線を施している。

502から509は深鉢の口縁で、内面にも文様を有する。文様は主文様と従文様で構成される。

502は波状口縁であって、波頂部に5つの刻みを施す。外面にはRLを施した後、波頂部下に主文様、平縁部に従文様を、それぞれ沈線で弧状文を描き、それらを一条の沈線で繋いでいる。内面にもRLを施した後、波頂部に主文様、平縁部に従文様を、それぞれ沈線で描いている。頭部は無文であるが、脣部はRLを施した後に一条の沈線で「S」字状文を描き、それを多重の沈線で囲んでいる。

503は502と同一個体である。

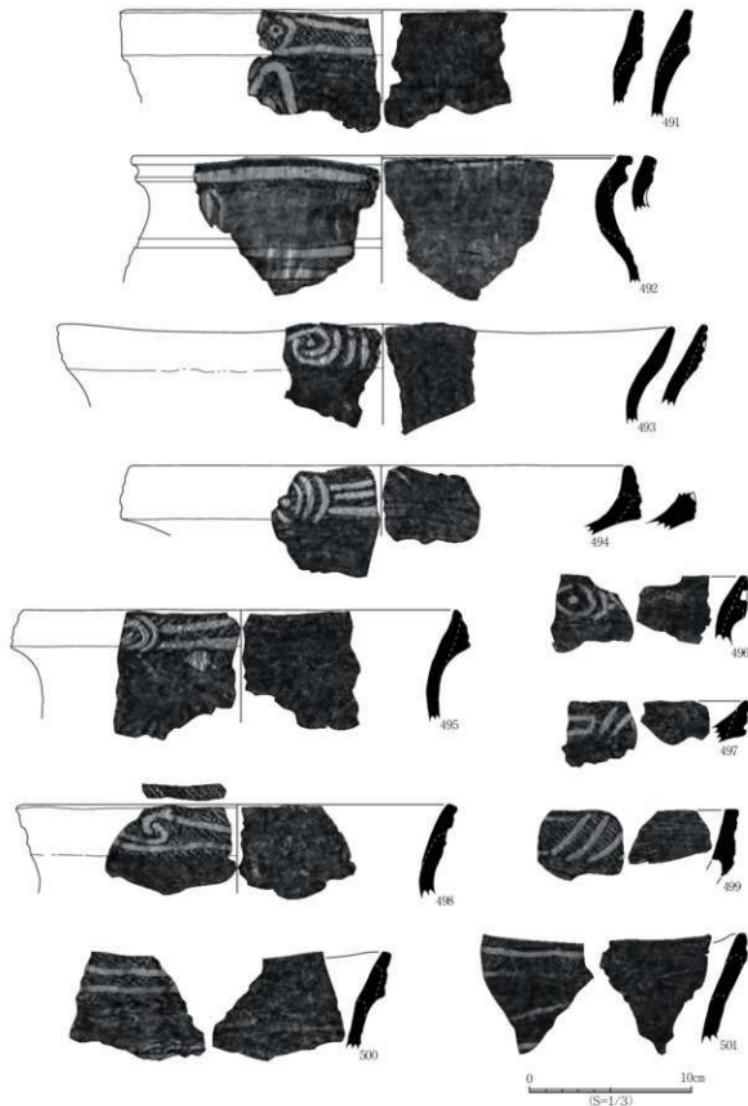


Fig.54 第3次調査出土遺物 (491 ~ 501)



Fig.55 第3次調査出土遺物（502～505）

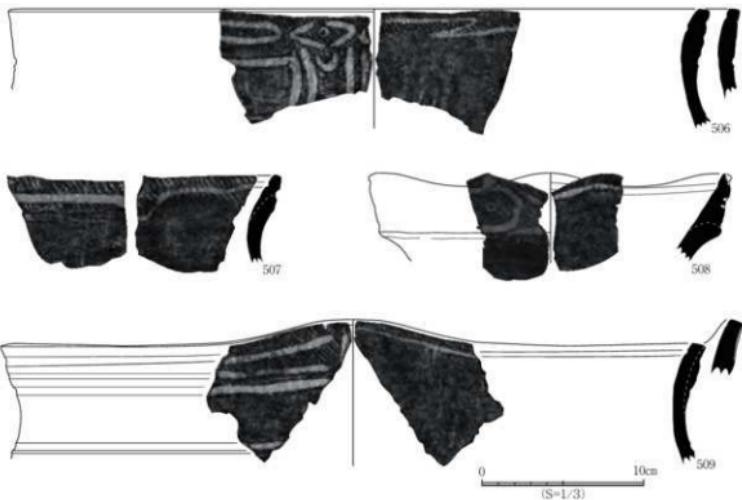


Fig.56 第3次調査出土遺物（506～509）

504は緩い波状口縁であり、口唇部を強く面取る。外面の主文様は、RLを施した後に施した円形刺突とそれを弧状の沈線で囲んだものと考えられ、従文様は沈線で描いた長梢円文である。内面の主文様は左右から伸びてくる一条の沈線の端部を丸めて絡ませたものである。外面主文様下の頸部には、逆「U」字文のような沈線文を施して、その左右を一条の沈線で区画した文様を施す。

505は平縁であり、口唇部を強く面取る。外面の主文様は、RLを施した後に中空の原体による円形刺突を施して、それを沈線で描いた「U」字状文を向き合わせたものであり、従文様は沈線で描いた長梢円文である。内面の主文様は、RLを施した後、一条の沈線で描いたものである。外面主文様下の頸部には沈線文を施し、その左右を一条の沈線で区画するが、その頸部文様の間に長方形の沈線文を配した可能性がある。506は505と同一個体である。

507は平縁であり、口唇部を強く面取る。外面にはRLを施した後、沈線を一条施しており、端部を下方に向けて折り曲げていることから主文様を持っていたと考えられる。内面にもRLを施した後に沈線を一条施しており、506と類似した文様を持っていたと考えられる。

508は波状口縁であり、口唇部を強く面取る。外面の主文様は、RLを施した後に、波頂部下に中空の原体による円形刺突を施して、沈線で囲んだものである。従文様は、並行する二条沈線であって、端部をそれぞれ口唇部と頸部に向けている。内面にも沈線を一条施しており、主文様と従文様の構成であった可能性が考えられる。

509は波状口縁であって、口唇部を強く面取る。外面の主文様は、RLを施した後に継位に施された沈線文であり、従文様は二条の沈線である。口縁部下端には沈線を一条施しており、口縁部と頸部を区画する意図があったと考えられる。頸部下端には二条の沈線を施しており、上の沈線は頸胴部の区画を示すと考えられるが、下のものは頸部文様となる可能性が高い。

510 から 516 は、頸部を跨ぐ橋状把手を有する。

510 は緩い波状口縁である。波頂部には、RL を施した後に沈線を一条絡ませており、その沈線は橋状把手を経由して胴部まで伸びる。平縁にも RL を施した後、円形刺突を始点として沈線を一条施しており、橋状把手を経由してから、その裏を回って胴部まで伸びるように施している。それらの沈線は、頸部下端から胴部に RL を施してから区画して磨消繩文をしている。精選された粘土を使用しており、器面を丁寧に磨いている。赤彩されていた土器である。

511 と 512 は突起を有する。511 は頂部を、RL を施した後に緩く凹め、その根元に沈線を絡ませる。橋状把手の中央から下に RL を施しており、頸胴部を沈線で区画して磨消繩文をしていることから、繩文帶の一部として意識していたと考えられる。512 は頂部を、RL を施した後に「U」字状の沈線を二条施し、その端部を重ねて「S」字状にして絡めている。突起から下は無文であって、器面は磨いている。

513 は小形の土器である。口縁部外面を厚く作出しており、内面に段を有する。橋状把手と口縁が接する部分は広く作出されており、その上面に直線的な「S」字状文を沈線で描いている。口縁部外面には沈線を一条以上施しており、その一部は橋状把手まで延びて渦文を描いている。

514 は剥落した橋状把手であり、513 と同じ手法で渦文を描いている。

515 は突起を有しており、沈線を絡ませていた可能性が考えられる。口縁部には、外面を一周すると思われる沈線を一条施すが、突起と橋状把手とは関係していない。よって橋状把手には、沈線で独立した文様を描いており、その意匠は渦文であると考えられる。

516 は突起を有しており、内面にも文様を有する。突起下外面の文様は主文様として考えられ、中空の原体による円形の刺突であって、少なくとも 8 つ以上施されていたと考えられる。従文様は一条の沈線であって、その端部は渦文様に丸めて収めている。橋状把手にも文様があったと思われるが、独自の文様であったと考えられる。内面の文様の意匠は、端部を「U」字状に丸めた二条の沈線を噛み合わせたものであったと考えられる。

517 と 518 は、口縁部を厚く作出しており、口唇部を強く面取る。517 は、口縁部外面に沈線を一条施し、短い頸部の下端にも深い沈線を施す。胴部の文様も、深い直線的な沈線で幾何学様の意匠を描いている。518 は、口縁部に沈線を二条施す。短い頸部から下にも沈線文を施しており、その意匠は幾何学様のものと考えられる。

519 から 527 は砲弾形の器形を有すると考えられる。

519 は波状口縁であり、口唇部を強く面取る。波頂部には刻みを少なくとも 3 つ施す。口縁部外面に RL を施した後に沈線で区画し、その中に沈線を二条施し、端部を「U」字条に曲げて波頂部下で絡ませたものが主文様になると考えられる。体部にも RL を施した後に沈線を施すが、その意匠は渦文ないしは波頭状文の系譜にあるものと考えられる。注意を要するのは、口縁部と胴部の境の屈曲に施された短沈線であり、ここにのみ右に斜行する短沈線を施す。520 は同一個体と考えられる。

521 は波状口縁であり、口唇部を強く面取りして RL を施す。波頂部の外面に RL を施した後に沈線を複数条重ねて文様を描く他、口縁部下端にも沈線を二条施す。体部には RL のみ施したと考えられる。522 は同一個体の可能性が高い。

523 は波状口縁であり、大ぶりな土器である。口唇部を緩く面取り、波頂部に刻みを少なくとも 8 つ施す。口縁部外面には巻貝の回転擬繩文を施し、沈線文を施す。その意匠は、端部を「U」字状

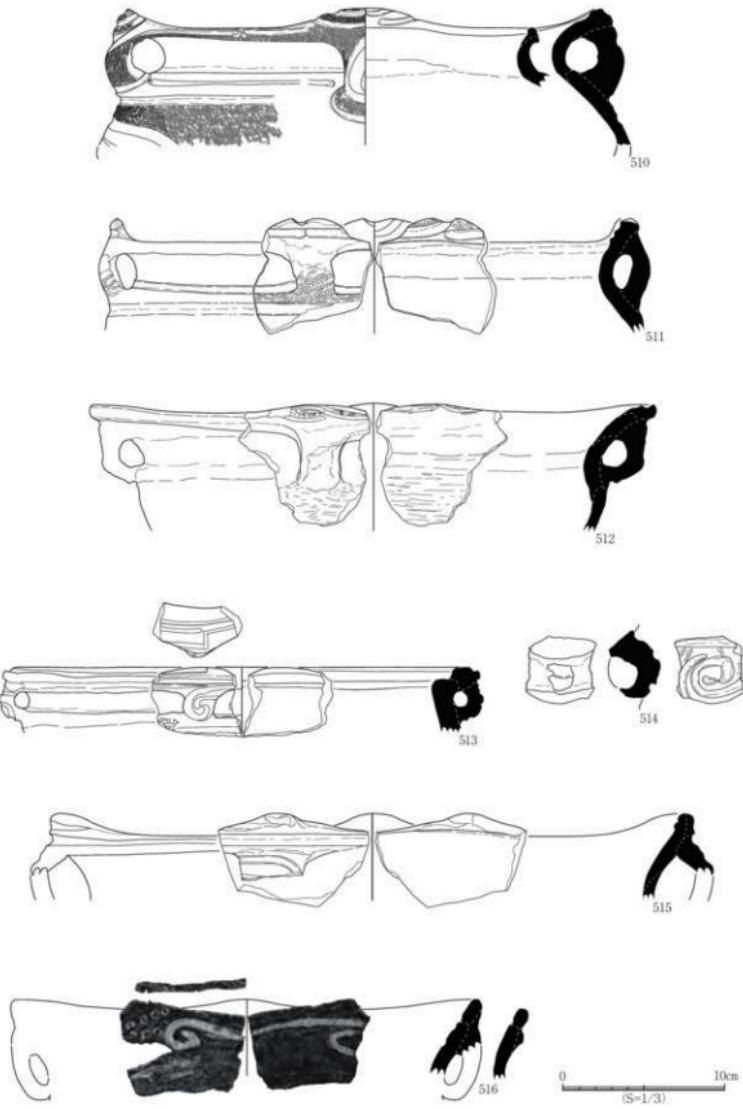


Fig.57 第3次調査出土遺物 (510 ~ 516)

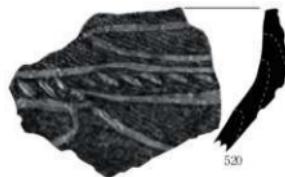
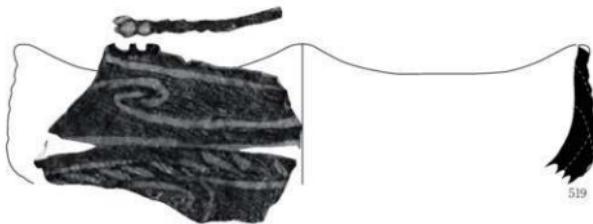
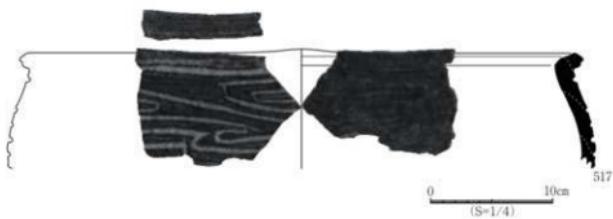


Fig.58 第3次調査出土遺物 (517~522)

に曲げた二条の沈線を絡ませるものと想定され、一部の沈線端部には円形刺突を施している。体部外面及び内面は削りが顯著である。

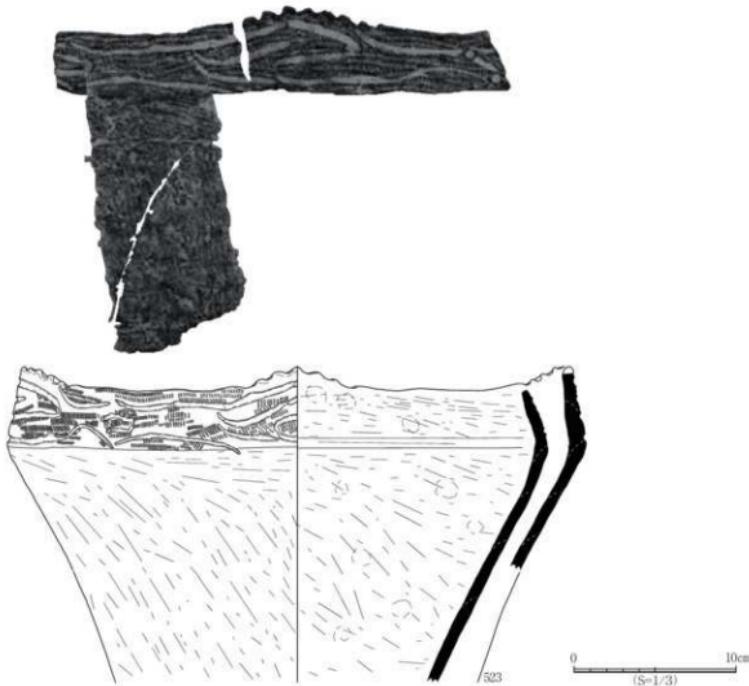


Fig.59 第3次調査出土遺物（523）

524 から 526 は緩い波状口縁であり、口唇部を強く面取る。524 は、口縁部外面に RL を施した後に並行する沈線を二条施す。それらの端に弧状の沈線文があることから、波頂部下に主文様を施していた可能性が考えられる。525 は口縁部を肥厚させており、その下端は明瞭な段を有する。外面に沈線を一条施しており、端部を渦文様に収めたものと考えられる。その後 RL を施す。526 は口縁部をやや厚く作出しており、RL を施した後に、端部を「U」字状に曲げた二条の沈線を波頂部下で絡ませる。その下の体部には、多重の沈線で半紡錘状文を描いている。

527 は小形で、突起を有する。突起には RL を施した後、上面に沈線を施す他、沈線が絡みついており、それらは体部まで伸びて区画して磨消繩文としている。

528 から 538 は深鉢の胴部であって、528 から 532 は磨消繩文、533 から 538 は繩文地沈線文である。

528 は RL を施した後に沈線で区画する。意匠は波頭状文の可能性が考えられ、486 のように文様帶の下端を繩文帶で区切ったと考えられる。

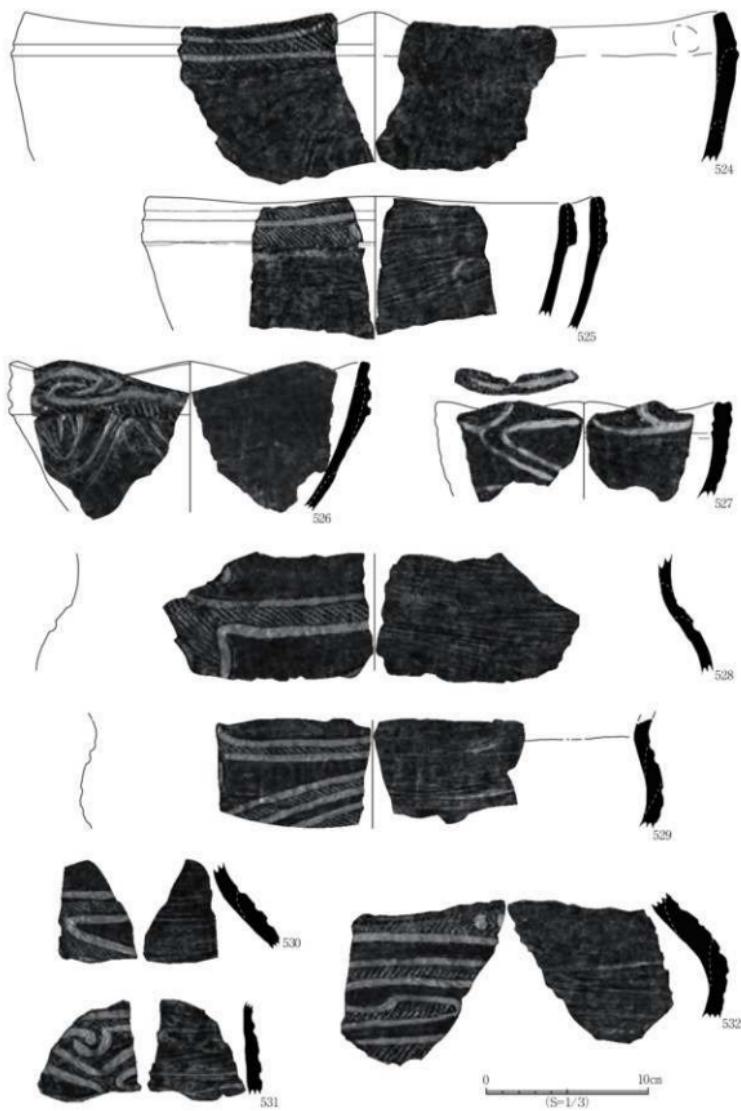


Fig.60 第3次調査出土遺物 (524～532)

529 も 486 や 528 と同様の意匠と考えられるが、波頭状文脇の磨消部分の面積が小さくなっている、磨消部分を沈線で区画した縄文帯の外に、更に文様を施していたと考えられる。

530 と 531 も波頭状文の系譜にある意匠を施していたと考えられるが、530 は磨消を行う際に縄文帯の一部にも影響が及んでいる。531 は波頭状文脇の磨消部分の作業が難であるのに対し、磨消部分を沈線で区画した縄文帯の外の磨消部分を丁寧に行なっている。

532 は LR を施した後に沈線で区画する。破片上部の刺突は、涙滴状文の系譜にあると考えられるが、磨消縄文の意匠は波頭状文の系譜から外れている。

533 は、RL を施した後に沈線文を施しており、主たる文様とそれを囲む沈線で構成されている。

502 と同一個体である可能性が考えられる。

534 は、LR を施した後に沈線文を施しており、主たる文様とそれを囲む沈線で構成されていると考えられるが、その意匠は幾何学的である。

535 は、RL を施した後に沈線文を施す。中空の原体による円形刺突を 2 つ有しており、胸部における主たる文様として理解できる。

536 と 537 は、RL を施した後に沈線文を施す。502 と同一個体である可能性が考えられる。

538 は、RL を施した後、端部を「U」字状に曲げて巴様にした、左右から伸びてきた二条の沈線を絡ませる。その文様の下に、波打つ二条の沈線を施す。

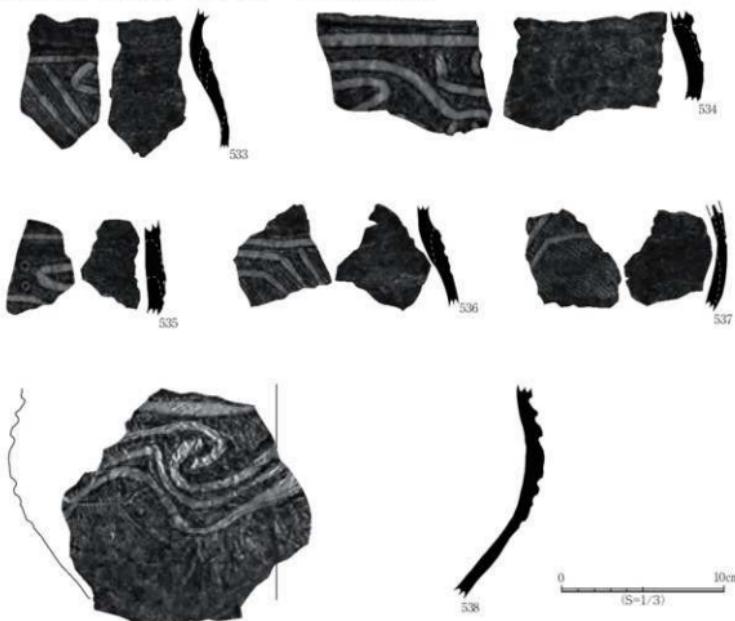


Fig.61 第3次調査出土遺物 (533～538)

539 から 542 は縄文のみ施す。539 は最大径を胴上部に有する深鉢で、寸詰まりの器形になる。胴部外面には節の大きな RL を施しており、内面には石灰華が固着している。

540 と 541 は深鉢の口縁部であり、540 は口縁部外端と口唇部を強く面取り、RL を施す。内面にも RL を施した後に浅い沈線を一条施す。541 は、口縁部外端と口唇部を強く面取る。外端と内面そして頸部に RL を施す。

542 は胴上部に最大径を有する壺の口縁部であり、粘土を渦様に巻いた突起を有する。口縁部を広く作出しており、上面に沈線を一条施しており、その外端及び頸部に RL を施す。赤彩されていた土器である。

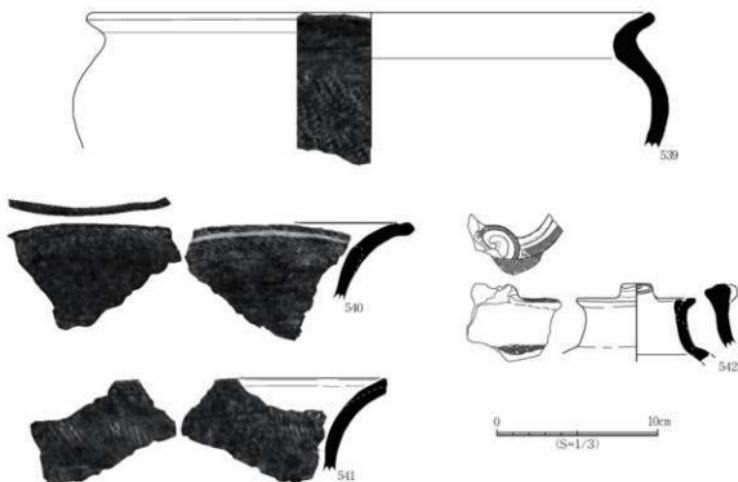


Fig.62 第3次調査出土遺物 (539 ~ 542)

543 から 547 は無土器の口縁部であり、全てが浅鉢であると考えられる。543 は口が広がる器形であるが、それ以外はボウル形である。546 と 547 は口縁部直下に孔を有しており、前者は補修孔、後者は焼成前穿孔である。

548 は底部である。底部の基礎を形作った後、底面に粘土板を貼り付けて成形している。

549 は壺であり、縄文時代晚期のものであると考えられる。頸部は短く、胴部が張る器形であって、内面の接合痕と指頭圧痕が顕著である。口縁部外端に縄文を施した可能性があるが、器面を磨いているため極めて不鮮明である。

550 は壺であり、弥生時代中期のものであると考えられる。外傾する口縁部の外面直下に粘土帯を貼り付け、その上を刻む。

551 は錘であり、土器を転用したものである。長軸の上下端の表裏に切り目を入れている。古代のものと考えられる。

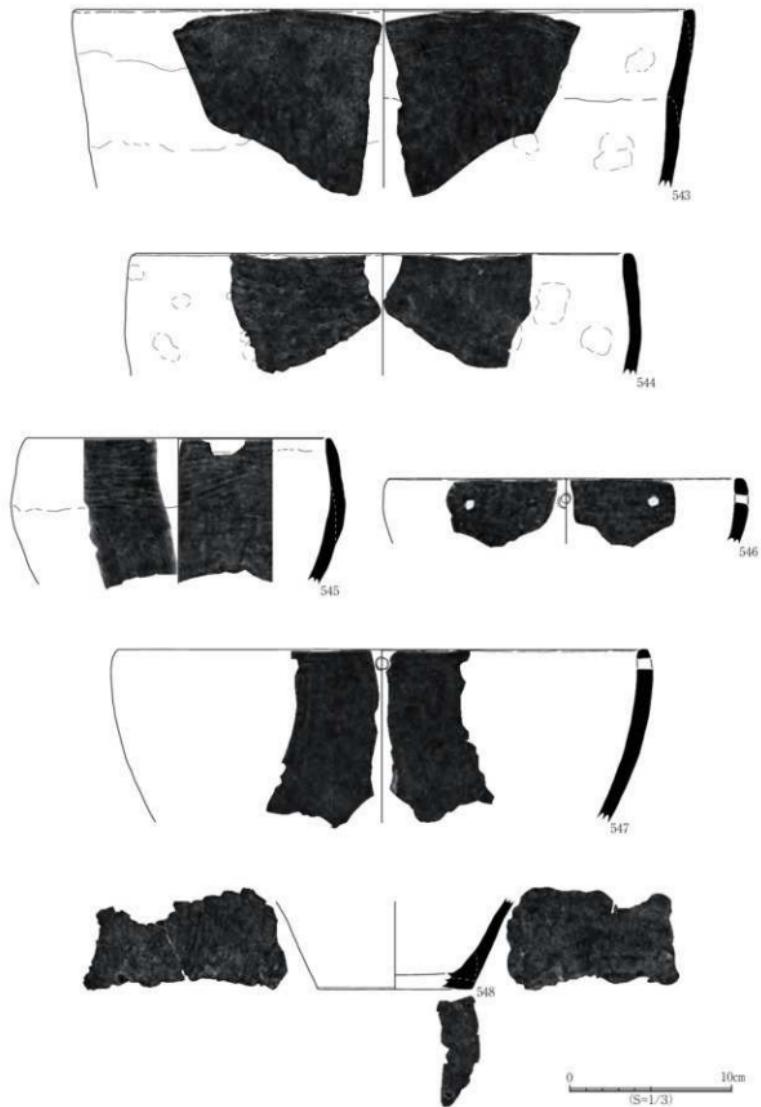


Fig.63 第3次調査出土遺物 (543～548)

552 と 553 は石器である。552 は刃器であり、石材はホルンフェルスである。表裏から加工しており、比較的鋭い刃を作り出す必要があったと考えられる。553 は錘であり、上下端を打ち欠いて紐をかける部分を作っている。

554 は骨角器であり、先端の摩滅具合から、穿孔具として使用されたと考えられる。

555 は貝輪である。ベンケイガイ製であると考えられ、内面の裝が明瞭に残る。外面と打ち割った破断面は丁寧に磨かれている。

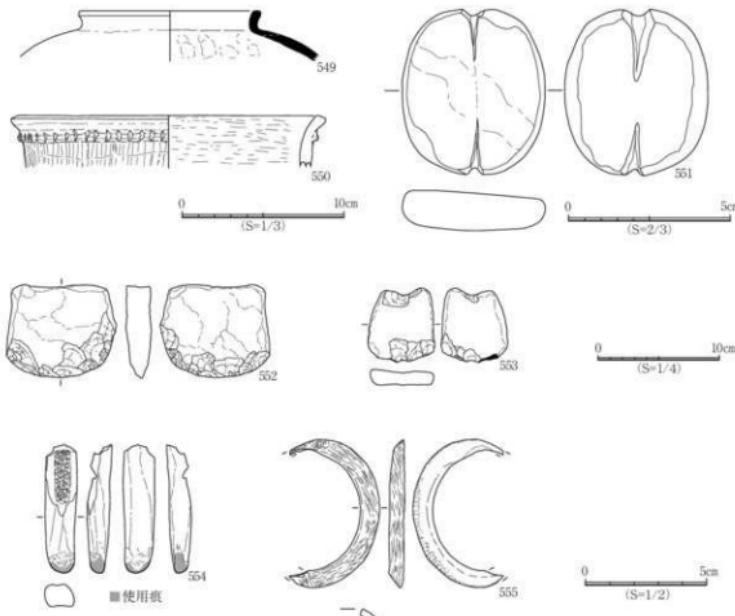


Fig.64 第3次調査出土遺物 (549 ~ 555)

7. 昭和50年5月18日採集資料 (Fig.65)

採集されたもので、磨製石器である。

556 は石斧であり、石材はホルンフェルスである。小形のもので、主として加工を目的とした道具として使用されたと考えられる。

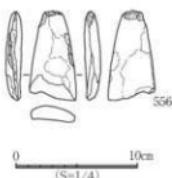


Fig.65 昭和50年5月18日資料 (556)

8. 昭和52年資料(Fig.66~73)

5月28日と6月5日に、それぞれ異なる地点での開発行為において採集されたものである。前者をS52a、後者をS52bとして報告する。

調査記録 犬飼徹夫 1978 「平城上層式土器について」『古代文化』第30号第4巻 古代学協会
225~231頁

S52a資料 (Fig.66~68)

所在地 御荘平城2069等筆界未定地

当時は医院と住宅があった。昭和52年5月28日に、住宅の玄関を補修する際に出土したもので、その規模は1m×1m×1.3mである。出土地点は、調査記録の第1図において「F」とされた地点(Fig.2のS52a)であって、出土した土器の数は200点を数えており、「52.5.28平城岡原」と注記されていた。これらのうち36点を図示した。

557から590は深鉢である。それらのうち、557から577が有文、578から585が繩文、586と587が無文である。

557から567は口縁部である。557は波状口縁であり、口唇部を緩く面取る。波頂部直下の外面に、梢円形の深い押圧を施して主文様としている。従文様は、沈線で描いた長梢円文である。

558と559は緩い波状口縁であり、突起を有する。いずれも屈曲部付近の内面に凹線状の凹みを有しており、指で強く撫でたものと考えられる。558は、外反する頭部から口縁部が「く」の字状に屈曲して立ち上がる。口縁部外面にLRを施した後、平行する沈線を二条施し、その下に沈線で山形文を描く。突起は、粘土を大豆大に丸めたものを5つ並べたものである。

559は、口縁部外面にLRを施した後、平行する沈線を二条施し、その下に沈線で間延びした山形文を描く。突起は、粘土紐を蛇行させたものである。尚、平縁は口唇を強く面取り、屈曲部付近の内面に凹線状の凹みを有している。

560と561は平縁であり、いずれも口縁を厚く作出している。560は屈曲部付近の内面に凹線状の凹みを有している。口唇部を面取りしてからRLを施し、その後に「D」字状の刺突文を施す。外面は、RLを施した後に平行する沈線を二条施し、その下に沈線で波状文を描く。561は、外反する頭部から、内湾する口縁部が「く」の字状に屈曲して立ち上がる。口唇部には、面取りしてからLRを施した後に米粒大の刺突文を施す。外面は、LRを施した後に沈線で上下を区画し、区画の中に斜行する沈線で間延びした山形文を描く。頭部は無文であり、胴部はLRを施した後に斜行する多重の沈線文で三角形の意匠を描くと考えられ、意匠の中央に沈線で、「S」字状文ないしは渦文を描いたと考えられる。

562は小形の土器であり、突起を有する波状口縁である。突起は波頂部に作出されており、粘土紐を時計回りに卷いて、端部を折り返したものである。外面にはLRを施した後に上下を沈線で区画し、区画の中に縦位のものと端部に円形刺突を有する三角形のものを組み合わせた意匠を沈線で描いている。

563は平縁であり、外面にLRを施した後に並行する沈線を二条施す。屈曲部付近の内面に凹線状の凹みを有している。

564は緩い波状口縁であり、突起を有していたと考えられる。口唇部を強く面取り、外面はLRを施した後に並行する沈線を二条施す。その下に緩い山形文を沈線で描く。

565は波状口縁であり、波頂部をやや厚く作出している。口唇部を強く面取る。外面はLRを施した後に綫位の沈線を三条施しており、主文様としている。従文様は、平行する三条の沈線である。

566は平縁であり、口唇部を強く面取る。外面はRLを施した後に沈線文を描く。

567は波状口縁であり、口縁部を厚く作出している。波頂部は、小指の先程度の大きさの突起であったと考えられる。突起の脇に粘土帯を貼付して成形し、強く面取りした口唇部から外面にかけて刺突で鋭角な綫位の山形文を施す。

568から576は頸胴部である。568と569はLRを施した後に、斜行する多重の沈線で三角形の意匠を描いたと考えられる。570と571はRLを施した後に斜行する多重の沈線で三角形の意匠を描いたと考えられ、その隙間の三角形の中には横位の沈線ないしは蛇行する沈線を施したものと考えられる。572はRLを施した後に沈線で長方形の文様を描く。573はLRを施した後に斜行する多重の沈線で三角形の意匠を、そしてその内部に渦文を描いたと考えられる。574はLRを施した後に沈線を複数施すが、意匠は不明である。胴部上端の粘土接合部付近に、彗星様に尾を引く刺突文を施している。575はRLを施した後に沈線を複数条施しており、その一部は渦文となっている。三角形の意匠の中央に所在した文様の可能性が考えられる。576は小形の土器である。波状口縁であり、内面に刺突と沈線を施す。頸部下端を削っており、結果的に厚くなった胴部上端に小さい円形刺突列を施す。胴部には、RLを施した後に斜行する多重の沈線で三角形の意匠を描いている。

577から581は口縁部である。577は口唇部を面取り、外端にrを施す。578は口唇部と外端を強く面取り、外端にはLRを施す。579は精選された粘土を使用しており、口唇部を強く面取る。口唇部と口縁部外面にLRを施す。580は小形の土器である。強く面取りした口唇部と口縁部外端そして胴部にRLを施す。581は口唇部が欠損しているものの、肥厚する口縁部であり、外面にRLを施す。

582から585は胴部であり、582と583はLR、584と585はRLをそれぞれ施す。

586と587は無文土器の口縁部である。586は断面を玉縁様に成形し、587は口唇部を強く面取る。

588から591は底部である。588は粘土の剥離が明瞭であり、円盤状の粘土塊を基礎に胴部を成形していくと考えられる。589は凹み底であり円盤状の粘土塊を基礎に胴部を成形している。

590と591は平底であるが、590は緩く凹む可能性、591は胴部が大きく器形が考えられる。

592は浅鉢である。ボウル形であって、外面にRLを施した後に斜行する多重の沈線で三角形の意匠を描いて区画し、磨消繩文としている。

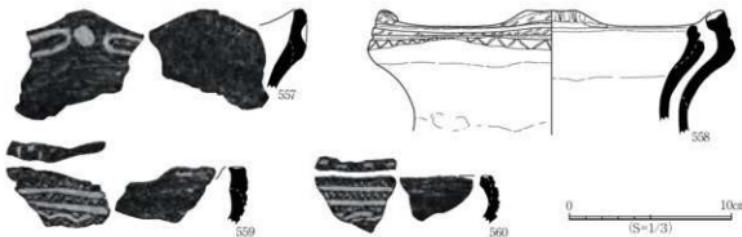


Fig.66 S52a 資料 (557 ~ 560)

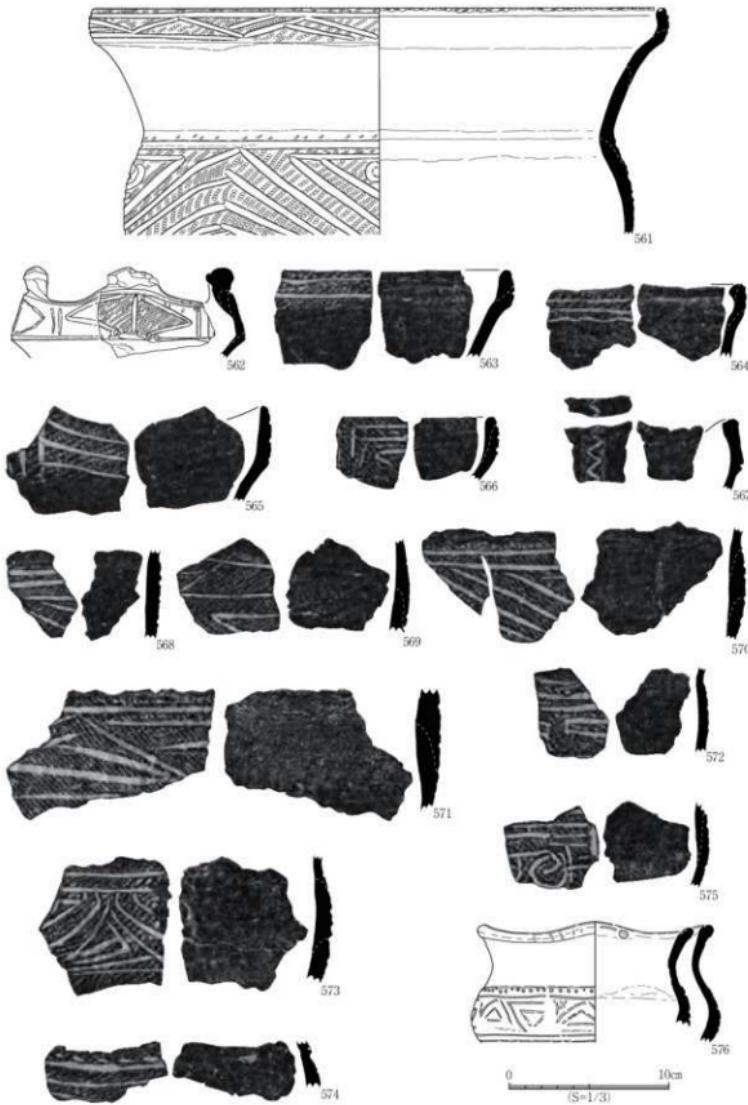


Fig.67 S52a 資料 (561 ~ 576)

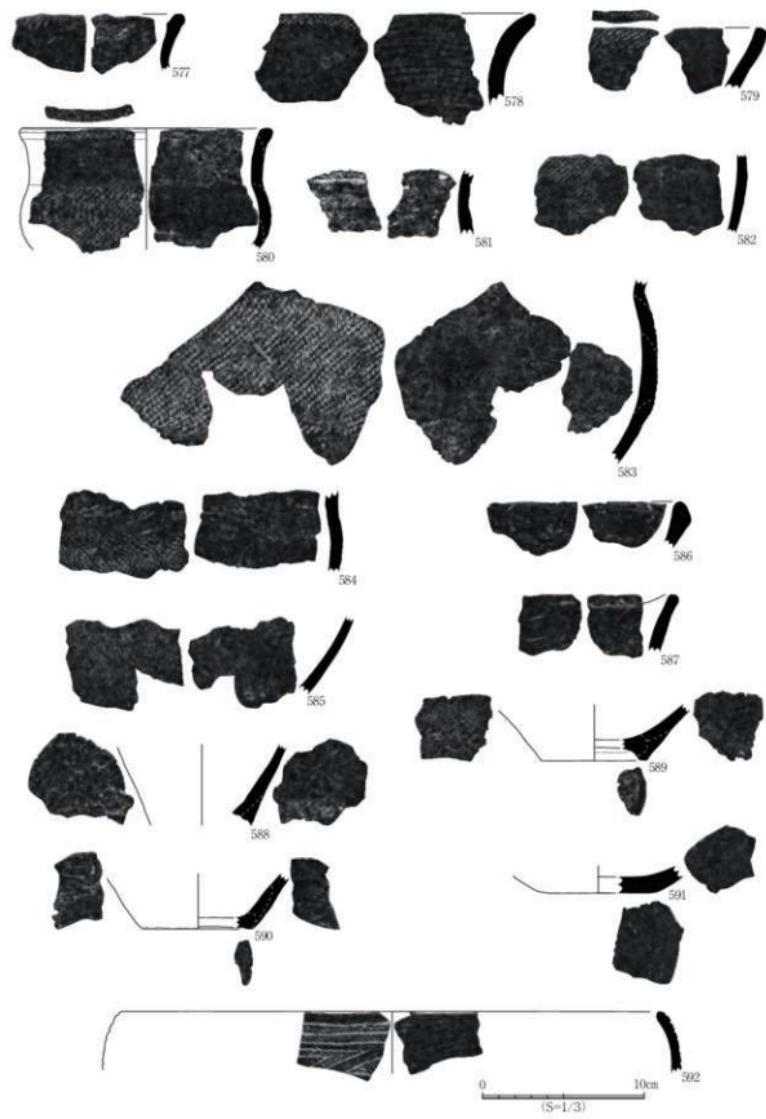


Fig.68 S52a 資料 (577 ~ 592)

S52b資料(Fig.69~73)

所在地 御荘平城2213等筆界未定

現在は駐車場となっている。昭和52年6月5日に民家を改修した際の土壤掘削に伴って出土したもので、その規模は5m×5m×0.5mである。

出土地点は、調査記録の第1図において「G」とされた地点(Fig. 2 のS52b)であって、土器は150点を数えており、「52.6.5(日付の他に、“平城ギンコーマエ”、“平城ホーケスギンコーマエ”、“山本”、“シギンマエ山本”、“ギンコーマエ山本”と注記したものもある。出土地点を示しており、上記所在地と齟齬は生じない。)と注記されていた。これらのうち、63点を図示した。

593から654が縄文時代、655が近世のものである。

593は深鉢の口縁部である。口縁部はやや厚く作出しており、内面に段を有している。外面には沈線を一条施しており、頸部は短い。胴部はRLを施した後に沈線で区画して磨消縄文としている。

594は、RL地を沈線で区画して磨消縄文としており、593の胴部の可能性がある。

595は深鉢の口縁部であり、胴上部に最大径を有する寸詰まりの器形であったと考えられる。口縁部を厚く作出しており、内面に抉り様の沈線を一条有する。口縁部外面にRLを施した後に沈線を一条施す。突起にはクランク様の文様を沈線で描いている。胴部にはRLを施した後に沈線で区画して磨消縄文としていた可能性がある。その意匠は波頭状文の系譜として考えられる。赤彩されていた土器である。

596から602は口縁部外面に文様を有する深鉢口縁部である。596と597は外反する頸部から内湾する口縁が立ち上がり、口縁部内面にも文様を有する。596は、外面にLRを施した後に平行する沈線を二条施し、その下に緩い山形文を沈線で描く。内面は、口唇部内端を面取りしてLRを施した後、丸木舟様の刺突を施す。597は同じ文様であるが、縄文はRLであり、口縁部外面の山形文は波状文、口縁部内面の刺突は豆粒様であって、屈曲部付近の内面に凹線状の凹みを有している。

598から600は、外反する頸部から内湾する口縁が立ち上がる。口縁は突起を有していた可能性がある。598は外面にRLを施した後に沈線を二条施し、その下に沈線で波状文を描いている。屈曲部付近の内面に凹線状の凹みを有している。599は短い頸部であり、口唇部を強く面取る。外面にRLを施した後に平行する沈線を二条施す。屈曲部付近の内面に凹線状の凹みを有している。600は外面にLRを施した後に平行する沈線を二条施す。

601は外反する頸部から内傾する口縁部が立ち上がり、口唇部を強く面取る。外面にRLを施した後に平行する沈線を二条施す。屈曲部付近の内面に凹線状の凹みを有している。

602から608は頸胴部である。602から604はRLを施した後に、斜行する多重の沈線で三角形の意匠を描いている。605から608はLRを施す。605は胴部上端に平行する沈線を二条描いており、606も同様である。606は斜行する多重の沈線で三角形の意匠を描いており、605の二条沈線の下は同様の文様であったと考えられる。607は多重沈線で三角形の意匠を描いていたと考えられる。608は縦位の沈線二条で区画しており、その脇に三角形の意匠を描いていたと考えられる。

609から611は胴下部である。いずれも文様の下端を沈線で区切る。609はLRを施した後に斜行する多重の沈線で三角形の意匠を描いており、下端の沈線の下に縄文を残す。610も同様であり、沈線は浅いものである。611はLRを施した後に斜行する多重の沈線で三角形の意匠を描いているものの、下端の沈線の下に及んでいた文様は撫でて消している。

612 から 631 は縄文を施す深鉢であり、612 から 626 は口縁部、627 から 631 が胴部である。

612 と 613 は口縁部をやや厚く作出しており、波頂部の内面に刺突を有する。いずれも砲弾形の器形になると考えられる。612 は外面にRLを施す。口唇部を強く面取る他、口縁部下端にやや幅広い沈線を一条施す。平縁の口縁部内端も強く面取りしており、波頂部のみにRLと、先端が三叉様の原体で4つの刺突を施している。613 は外面にRLを施し、口縁部内端も強く面取りするが、波頂部のみにRLとその原体で4つの押圧を加えている。

614 は弱く外傾する頸部から内湾する口縁部が立ち上がる。口唇部とその内端を強く面取り、口唇部と口縁部外面そして胴部にRLを施す。屈曲部付近の内面に凹線状の凹みを有しており、615 と同一個体と考えられる。

616 と 617 は口縁部外面にLRを施す。いずれも口唇部を面取る。

618 と 619 は口縁部外面にRLを施す。618 は口縁部を厚く作出しており、強く面取りした口唇部にもRLを施す。619 は精選された粘土を使用しており、丁寧に磨いている。

620 は口縁部を厚く作出しており、外面にRLを施す。口唇部及び内端を面取り、内面に凹線状の凹みを有する。砲弾形の器形になると想われ、内面に僅かに沈線が認められることから、波状口縁になると考えられる。この沈線は波頂部にのみ施されていたものである。

621 は口唇部を強く面取る。口縁部外端と胴部にRLを施す。

622 は口縁部外面にRLを施した後、その下に沈線を一条施す。精選された粘土を使用しており、丁寧に磨いている。赤彩された土器である。

623 は口縁部が弱く内湾しており、砲弾形の器形である。外面にRLを施した後、口縁部直下に沈線を一条施す。624 は同一個体と考えられる。

625 は小形の土器であり、口唇部を強く面取る。内外端と胴部に節が極めて細いLRを施す。

626 は口縁部外端を面取り、RLを施す。

627 から 631 は頸胴部である。全て胴部にRLを施しており、627 と 628 は胴部上端に沈線を一条施す。628 は羽状文で、632 は赤彩されていた土器である。

633 から 635 は無文土器の口縁部である。633 と 634 は頸部から口縁部が外傾して立ち上がっており、口唇部を強く面取る。635 は波状口縁であり、口縁部を肥厚させ、口唇部を強く面取る。波頂部は鰐状になると考えられる。

636 から 642 は深鉢の底部である。636 が貼付高台である他は、凹み底である。637 から 642 は接地部分を強く面取る。642 は、底部から胴部が大きく広がりながら立ち上がっていく器形を考えられる。

643 から 651 は浅鉢であり、651 以外はボウル形である。

643 から 647 は口縁部である。643 は口唇部を強く面取り、体部外面にRLを施した後に平行する沈線を四条施す。644 は体部外面にRLを施した後に沈線で区画して磨消縄文としている。645 は口唇部を強く面取り、体部外面にRLを施した後に沈線で区画して磨消縄文としている。縄文帯には沈線で山形文を描き、その内部を磨消している。646 は口縁部をやや厚く作出しており、口唇部を強く面取る。体部外面はRLを施した後に沈線で区画して磨消縄文としている。赤彩されていた土器である。647 は口縁部がやや強く内湾し、口唇部を面取る。体部外面にRLを施した後に沈線で区画して磨消縄文としている。赤彩されていた土器である。

648から651は体部である。648は外面を沈線で区画しており、区画内には沈線で矢羽状文を描いている。区画外は磨いており、無文である。649は外面にRLを施した後に沈線で区画して磨消繩文としている。磨消部分には刺突を施していたと考えられ、赤彩されていた土器である。650は外面にRLを施した後に沈線で区画して磨消繩文としている。651は皿形であり、外面にRLを施した後に沈線を施す。

652は注口付土器の可能性がある土器である。胴部は算盤玉状に屈曲しており、外面にRLを施した後に沈線で区画して磨消繩文としている。胴上部の繩文帯には二条の沈線で山形文を描いている他、縦位の短沈線文を描いており、複数の文様で繩文帯を区切っていたと考えられる。

653は皿形の浅鉢であり、無文である。口唇部を強く面取る。

654はボウル形の浅鉢の底部と考えられ、RLを施す。精緻な作りである。

655は炉であり、小形のものである。

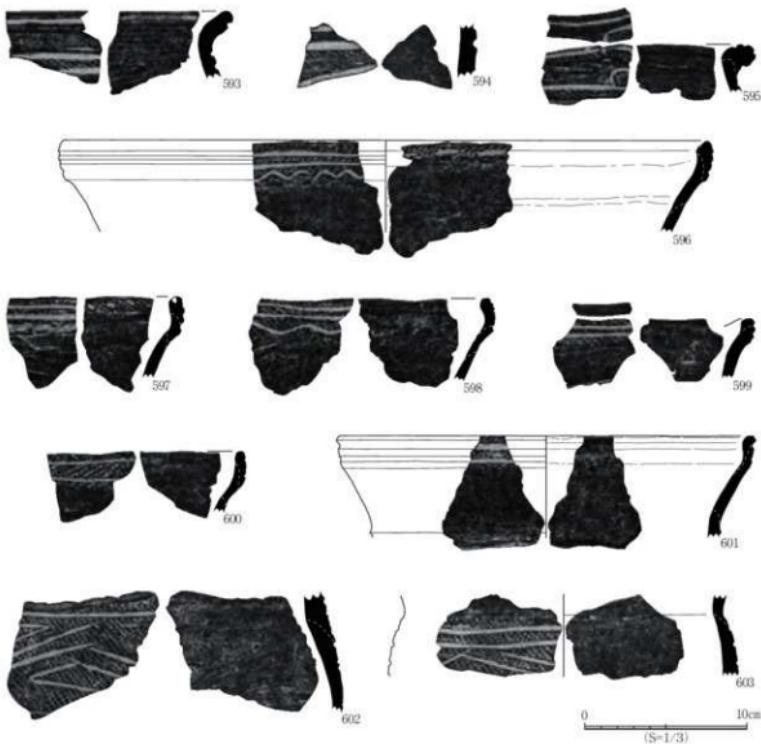


Fig.69 S52b 資料 (593 ~ 603)

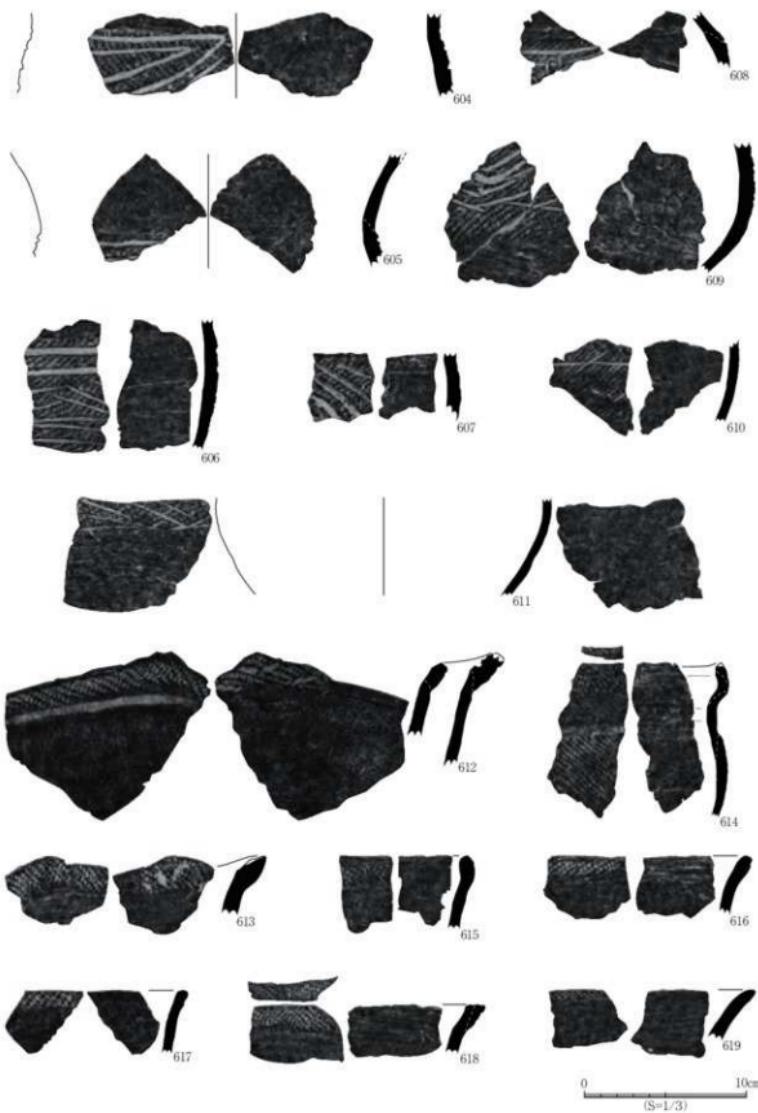


Fig.70 S52b 資料 (604 ~ 619)

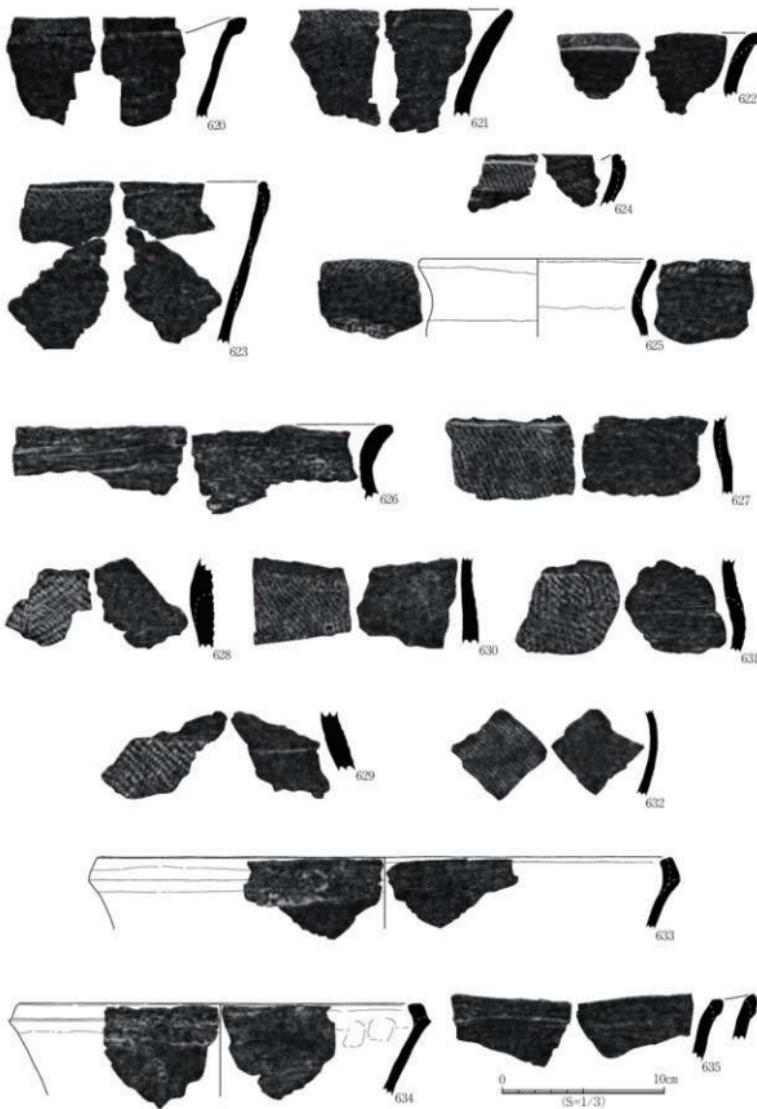


Fig.71 S52b 資料 (620 ~ 635)

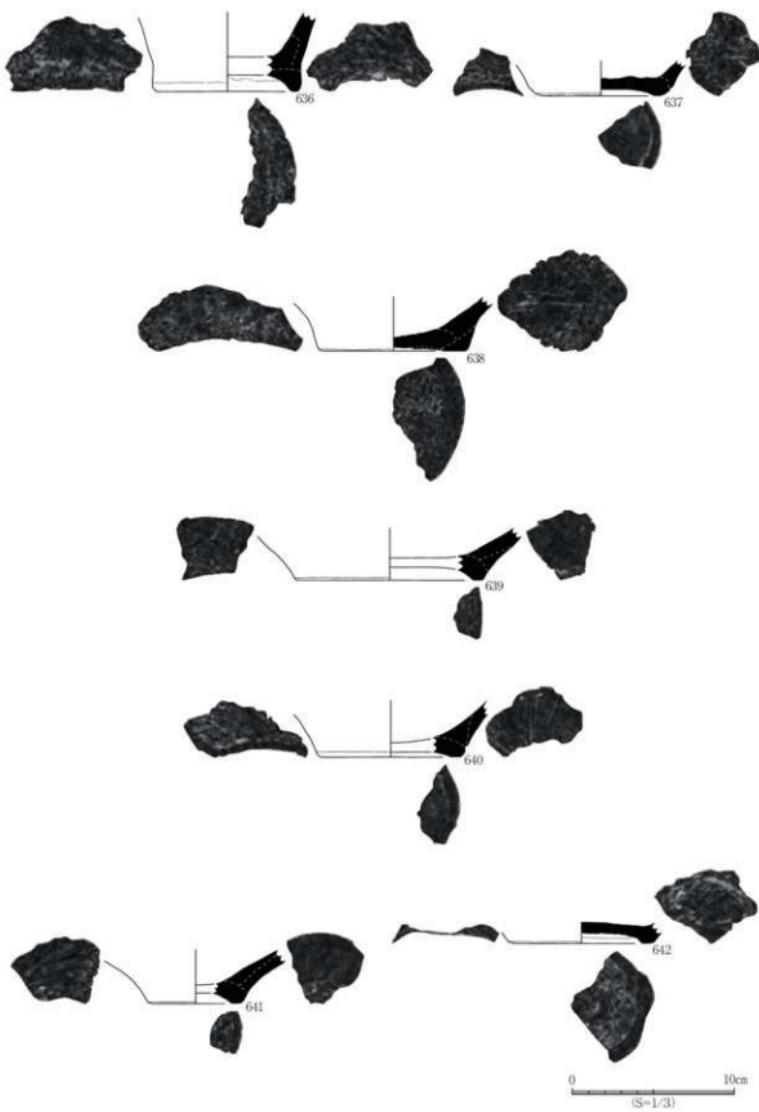


Fig.72 S52b 資料 (636 ~ 642)

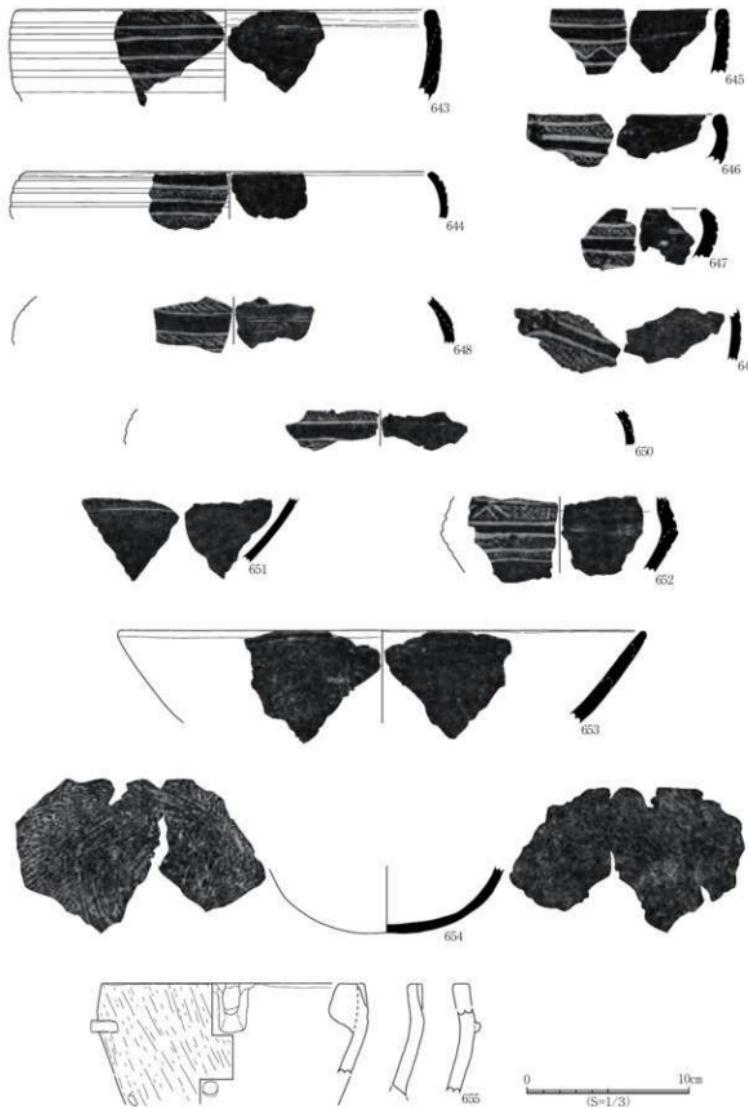


Fig.73 S52b 資料 (643 ~ 655)

9. 昭和 56年 3月 11・12日資料(Fig.74~80)

開発に伴う採集資料と考えられるが、地点は不明である。遺物の特徴と石灰華が付着した遺物の存在から平城貝塚のものとして理解した。95点を図示した。

656 から 677 は深鉢の口縁部であり、外面に文様を有する。

656 から 660 は主文様と従文様で構成される。656 は口唇部を強く面取る。外面に RL を施した後に、波頂部下に「U」状文を沈線で描き、閉じた方を向き合わせて二条の縦位の沈線で左右を区画したものを主文様とする。従文様は、平行する二条の沈線である。波頂部下の頸部にも同様の文様を描くが、左右を区画する沈線は一条であり、それを長大な窓枠状の沈線文で囲む。頸部下端の沈線は頸胴部を区画する意図があったと考えられる。口縁部内面に RL を施した後に沈線を一条施しておらず、波頂部で渦文ないしは「S」字様文を描くと考えられる。657 から 659 は口縁部を厚く作出している。657 は小形の土器であった可能性が考えられ、LR を施した後に縦位の短沈線を二条施して主文様とする。従文様は一条の沈線であり、端部に円形刺突を施す。頸部は LR を施した後、右に斜行する沈線を三条施している。658 の主文様は押圧であり、長径 16mm 短径 13mm の楕円形である。従文様は、沈線で描いた長楕円文である。659 は波状口縁であり、口唇部を強く面取る。口唇部と外面に RL を施した後、波頂部下に一条の沈線と 3 つの涙滴状文を施して主文様としている。従文様は一条の沈線であって、端部を口唇部に向かって丸めて収めている。波頂部下の頸部には、沈線で半紡錘状文を施したと考えられる。660 は口縁部をやや厚く作出し、口唇部を強く面取る。主文様は、口縁部外面に RL を施した後に施した中空の原体による円形刺突と、それを囲う弧状の沈線文であり、従文様は一条の沈線である。

661 は波頂部であり、突起を有する。突起には沈線を絡ませており、その下に RL を施した後、一条の沈線を施している。橋状把手が剥落している。

662 は平縁で主文様を有する。口縁部外面に RL を施した後、円形刺突と考えられる中心文様を施し、それを弧状の沈線で囲む。

663 は波状口縁であり、口唇部を強く面取る。口縁部外面に RL を施した後に沈線を二条施しており、下の沈線は端部を下方に曲げて収めていることから、主文様を有していたと考えられる。

664 と 665 は平縁であり、口唇部を強く面取る。664 は、口縁部外面に RL を施した後に沈線を二条施しており、上の沈線が口唇に向かって曲がると共に、弧状文と思われる沈線を施していることから、主文様を有していたと考えられる。665 は RL を施した後に沈線を一条施している。

666 から 671 は、口縁部外面に一条の沈線を施す。666 は波状口縁であり、沈線を施した後に、その下に RL を施す。667 は平縁であり、口唇部を強く面取る。口縁部をやや厚く作出しており、RL を施した後に沈線を施す。補修孔を有するが、外面から内面に向けての穿孔である。668 は波状口縁である。口縁部をやや厚く作出し、口唇部を強く面取る。RL を施した後に沈線を施しており、沈線端に主文様となる刺突を有する可能性がある。短い頸部であり、その下端に施した沈線は、頸胴部を区画する意図があったと考えられる。669 は口縁部をやや厚く作出しており、内面に段を有する。頸部は短く、その下端に施された沈線は、頸胴部を区画する意図があったと考えられる。670 は平縁であり、RL を施した後に沈線を施す。671 は波状口縁であり、厚く作出した口縁部内面に不明瞭な段を有する。頸部は短く、その下端に施された沈線は、頸胴部を区画する意図があったと考えられる。



Fig.74 昭和 56 年 3 月 11・12 日資料 (656 ~ 677)

672 から 674 は口縁部を厚く作出し、上面に沈線を施す。672 は、外面の沈線脇に刺突を有しており、主文様の可能性が考えられる。その下には沈線で波頭状文の系譜として考えられる意匠を施している。673 は小形の土器であり、口唇部の沈線は比較的深い。674 は、673 と同様、口唇部にも沈線を施している他、外面にも沈線を一条施す。

675 は波状口縁で、口唇部を強く面取る。外面に幅広い凹線の他、鋭い沈線でベン先様の意匠を描いている。

676 は平縁で、口縁部を幅広く作出している。LRを施した後、平行する沈線を三条施すが、中央の沈線の中に小さな刺突文を施す。

677 は波状口縁であり、口縁部内外面に削り出した段を有する。内面にRLを施した後、二条の沈線を施す。頸部外面に施された継位の沈線文は、波頂部下のみに施されたものと考えられる。

678 から 694 は深鉢の胴部であり、外面に文様を有する。678 から 684 は、沈線で区画した磨縄文を有する。678 はRLを施した後に比較的幅の広い沈線で区画しており、上端には涙滴状文の系譜のものと考えられる刺突を有する。679 はRLを施した後に比較的幅の広い沈線で区画しており、意匠は波頭状文の系譜と考えられる。文様間に沈線で弧状文を描いているが、これと対になる弧状文が描かれていたと考えられ、それらは背中が向き合う様に施されていた可能性がある。680 は、RLを施した後に沈線で区画しており、その端部は丸めて巴様に絡ませていた可能性が考えられる。681 はRLを施した後に沈線で区画しており、意匠は波頭状文の系譜と考えられる。682 はRLを施した後に沈線で区画しており、意匠は波頭状文の系譜と考えられる。683 はRLを施した後に沈線で区画している。下端の沈線は、文様帶の下を区切る意図のものとして考えられる。684 はRLを施した後に沈線で区画しており、下端の沈線から下は無文である可能性が考えられる。

685 から 688 は縄文地沈線文である。685 はRLを施した後に、端部を丸めた二条の沈線を施して絡ませている。その下に施された一条の沈線は、文様帶の下端を区切る意図があったものと考えられる。686 はRLを施した後に比較的幅広い沈線を施しており、その意匠は 656 の口縁部と頸部に施されたものと同じと考えられる。687 はRLを施した後に沈線を複数条施しており、その意匠は平行する沈線と三角形の意匠を斜行する沈線で描いたと考えられ、その隙間の三角形の中には横位の沈線ないしは蛇行する沈線を施したものと考えられる。688 はRLを施した後に沈線を施しており、その意匠は多重円文の可能性が考えられる。

689 から 692 は沈線文である。689 は沈線文の他、涙滴状文の系譜として考えられる刺突を有する。690 と 691 の意匠は波頭状文の系譜と考えられる。692 の沈線は浅いもので、三角形の意匠を斜行する沈線で描いたと考えられる。693 の沈線は比較的深いもので、渦文である。

694 は刺突文である。摺鉢状の刺突であって、先の尖った原体を先端が大きく動かない範囲で捏ねて刺突したと考えられる。

695 から 713 は縄文を施す深鉢である。695 から 708 は口縁部、709 から 713 は胴部である。

695 は口縁部を厚く作出しており、内面と口縁部外面直下に沈線をそれぞれ一条施す。強く面取りした口唇部と外端にはRLを施しており、頸部下端の沈線は頸胴部を区画する意図があったと考えられる。696 は小形の土器であり、強く面取りした口縁部外端と胴部にRLを施す。697 は口唇部を強く面取り、外面にRLを施す。698 は削り出した口縁部外面にRLを施す他、内面に溝状の凹みを有する。699 は小形の土器であり、口縁部外端にRLを施す。700 は厚手の作りで、口縁部外端にRLを

施す。701は口唇部と口縁部外面を強く面取り、RLを施す。702は口唇部を強く面取り、口縁部外端にLRを施す。703と704は口唇部と口縁部外端を強く面取り、口縁部外端にLRを施す。705は強く面取りした口唇部と口縁部そして外面にRLを施す。706は強く面取りした口唇部と口縁部外面にLRを施す。707は比較的薄手の土器であり、削り出した口縁部外面と内面そして外面にLRを施す。708は頸部から口縁部が屈曲して立ち上がり、口唇部を強く面取る。口縁部外面には筋の細いRLを施す。

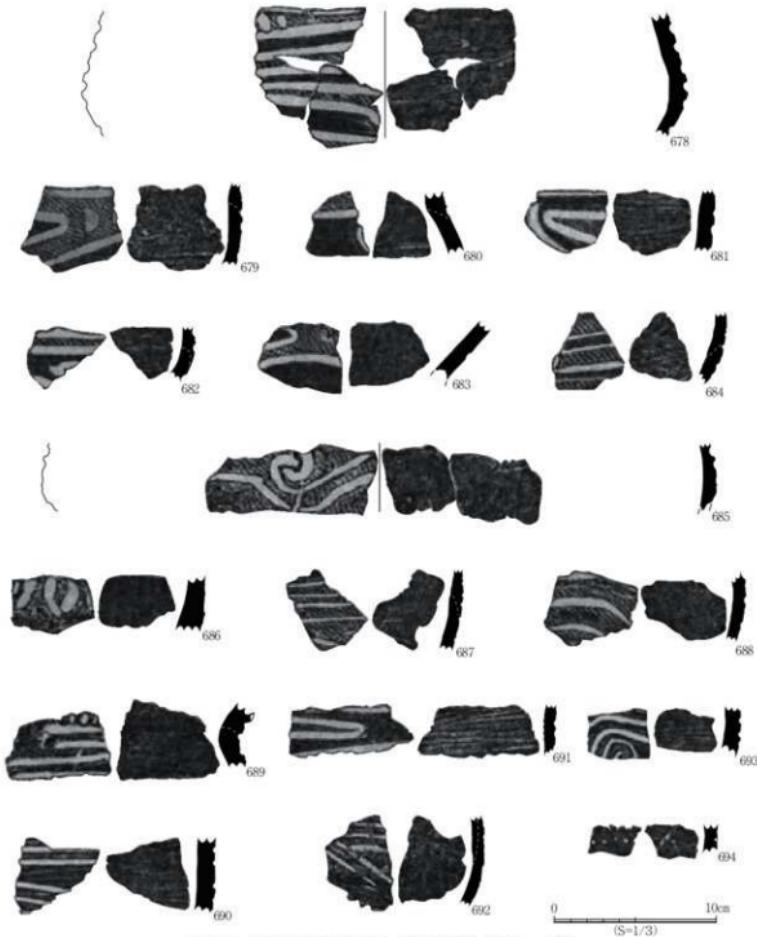


Fig.75 昭和56年3月11・12日資料 (678~694)

709と710は頸胴部であり、胴部にRLを施す。

711から713は胴部であり、711はRLを、712はLRをそれぞれ施す。713は極めて節の細かなRLを施す。

714から717は巻貝の回転擬縄文を施す。714から716は口縁部、717は頸胴部である。714は口縁部内面に沈線を施し、強く面取りした口唇部と口縁部外端そして外面に擬縄文を施す。715は714と同一個体と考えられる。716は幅広の口縁部であり、外面に擬縄文を施す。717は胴部のみに擬縄文を施す。

718から720は無文土器の口縁部である。718は口縁部外端を面取りし、刻みを施す。719は口縁部をやや厚く作出し、口唇部を強く面取る。720はやや厚く作出した口縁部が頭部から外傾して立ちあがる。

721と722は鉢の口縁部であり、いずれも口が大きく開く。

723と724は深鉢ないしは鉢の胴部であり、723は外面にヘラのような工具の圧痕が残る。724は石灰華の付着が認められる。

725は浅鉢の口縁部で、口縁部外面に沈線を一条施す。726から728は注口付土器の胴部と考えられ、外面を沈線で区画し磨消縄文としている。726はRLを施した後に沈線を施す。赤彩していた土器である。727はRLを施した後に沈線を施す。728は算盤玉状の胴部であったと考えられ、RLを施した後に沈線で区画して磨消縄文としている。内面に石灰華が厚く付着する。729はボウル形の浅鉢であり、口唇部を強く面取る。その外端にRLを施す。

730から732は無文の浅鉢であって、いずれもボウル形である。

733から746は底部であって、733から735は底部の基礎との接合痕が明瞭に残る。733は差し込む接合痕、734は板状の接合痕、735は輪積みの接合痕である。736から739は貼付高台であって、739は接地部分を強く面取る。740から742は凹み底であり、740は接合部に半月状の押圧を加えることで、接合面積を増やしていると考えられる。741は底部から体部が大きく開く器形である。742は接地部分を強く面取る。743から746は平底であり、いずれも底部から体部が大きく開く器形である。744から746は浅鉢のものの可能性があり、746は体部にRLと沈線を施す。

747は深鉢の口縁部であり、肥厚させた口縁部外面に沈線を三条施しており、南九州における後期末の土器と類似する特徴を有する。

748は甕の底部で、ソケット状の孔を穿っている可能性があり、器面の調整並びに態度の特徴から、弥生時代後期のものと考えられる。

749と750は石器である。749の石材はホルンフェルスで、刃器と考えられる。風化が進んでいたため、縄文時代後期よりも古い時期のものの可能性がある。750の石材は頁岩で、赤色のものである。円盤形であり、削器として使用されていた可能性が考えられる。

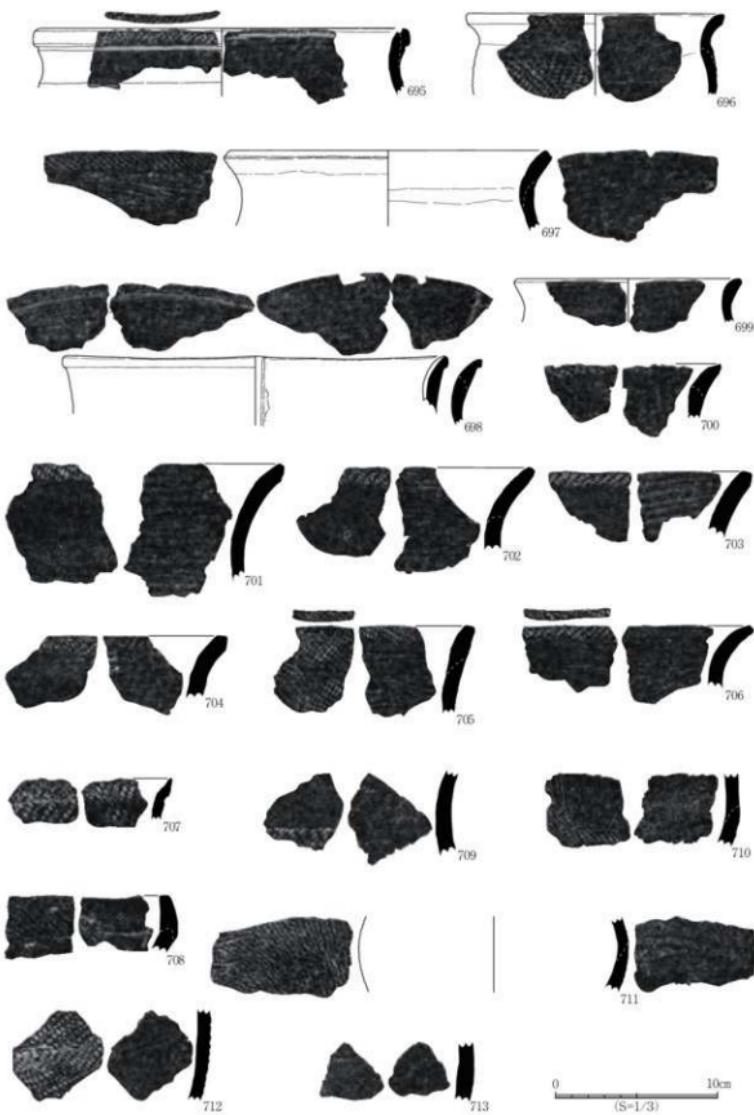


Fig.76 昭和 56 年 3 月 11・12 日資料 (695 ~ 713)

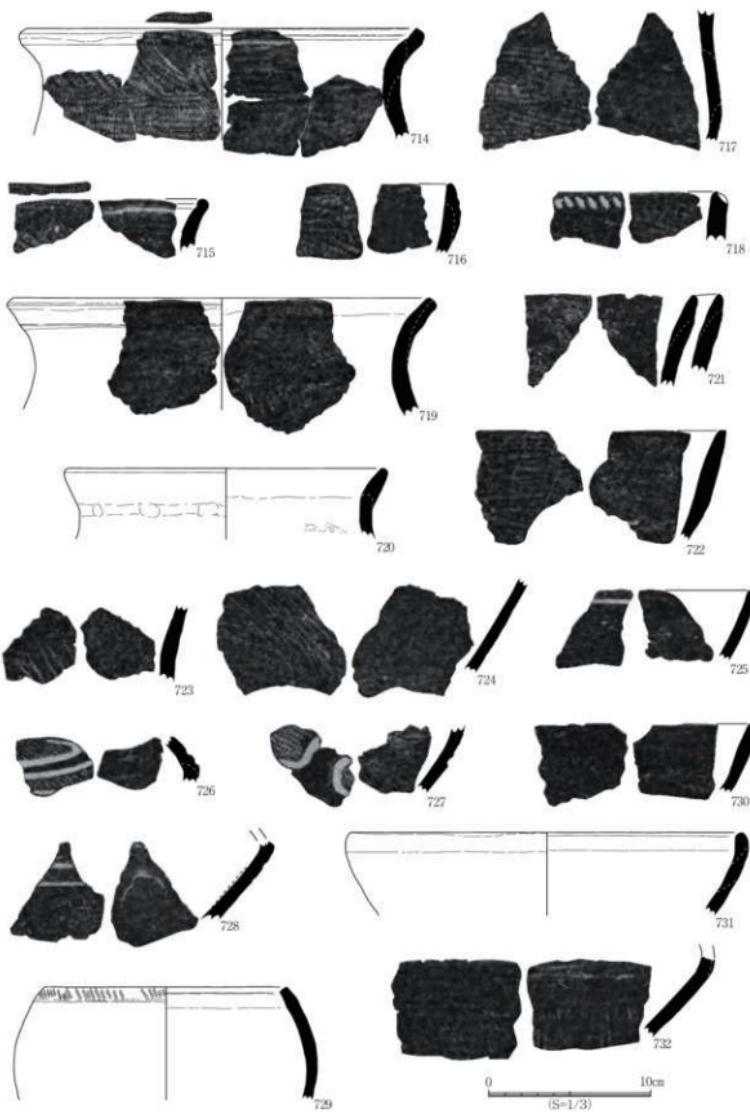


Fig.77 昭和56年3月11・12日資料 (714～732)

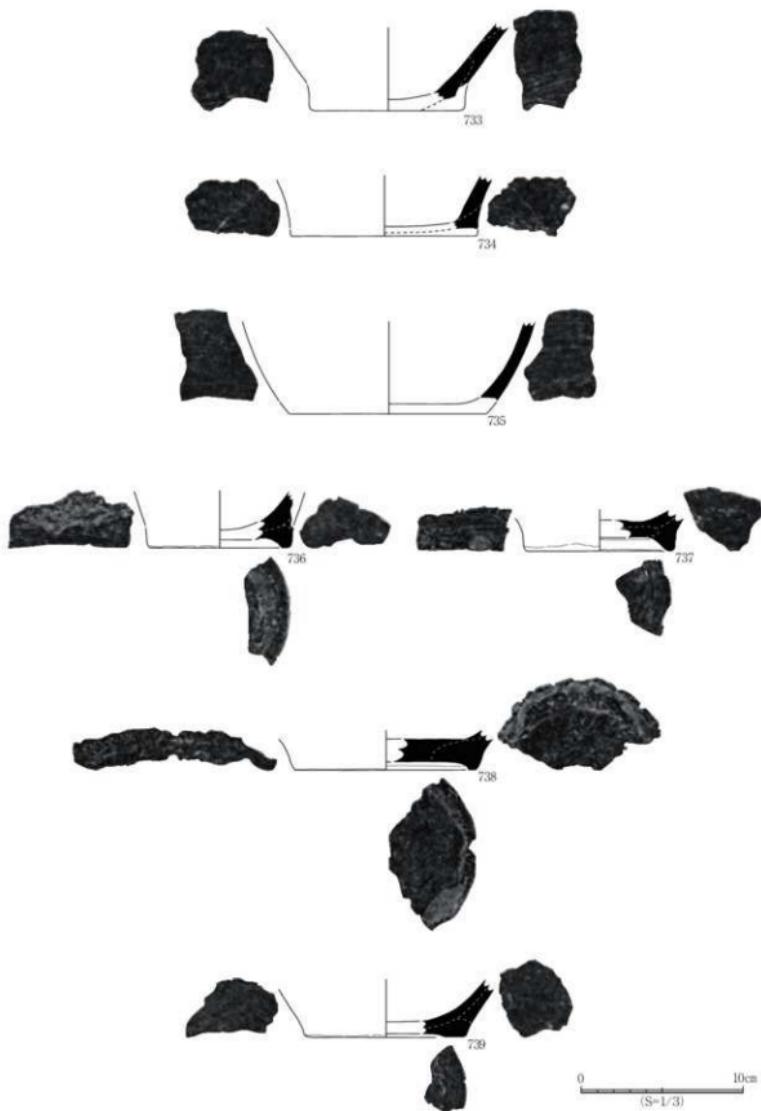


Fig.78 昭和 56 年 3 月 11・12 日資料 (733 ~ 739)

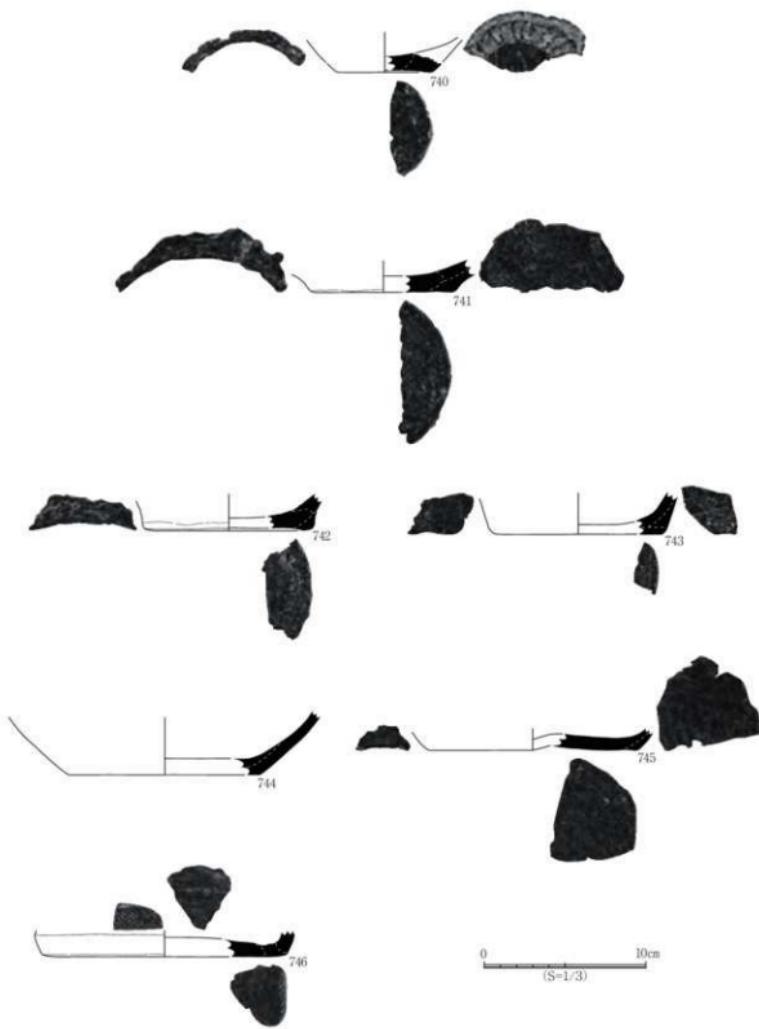


Fig.79 昭和 56 年 3 月 11・12 日 資料 (740 ~ 746)

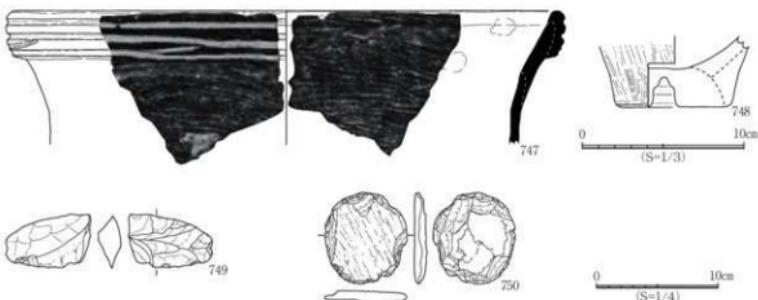


Fig.80 昭和56年3月11・12日資料 (747～750)

10. 第4次調査 (Fig.81～129)

所在地 御荘平城2083等筆界未定地

調査面積 153m²(調査対象面積 172.8m²)

調査原因 民間開発(金融機関の駐車場建設)

調査期間 昭和56年9月25日から同年10月5日まで

調査主体 御荘町教育委員会・御荘町文化財保護審議委員会

調査担当 木村剛朗(日本考古学協会会員)

調査参加者 割愛

調査記録 御荘町教育委員会 1982 「平城貝塚 愛媛県南宇和郡御荘町平城貝塚 第IV次発掘調査報告書」

木村剛朗 1995 「22平城貝塚」『四国西南沿海部の先史文化 旧石器・縄文時代』
362-609頁

調査日誌 御荘町教育委員会 1982(※原文ママ 但し、日誌に記録された遺物については、本報告における遺物番号を付記している。)

調査の着手にあたり、まずその打ち合わせ会を昭和56年9月21日に御荘町教育委員会、同町文化財保護審議委員会、木村剛朗をmajie、御荘町中央公民館にて開催した。

9月25日 調査指導者阪本安光(愛媛県教委職員)同席のなかで2回目の打ち合わせ会を御荘町中央公民館にて午前中行い、午後、小雨降る中を調査区の中央部を幅広く被う建物基礎のセメント剥ぎ取り作業着手。風雨の強まつた16時に現場を引き上げる。

9月26日 前日の作業続行のなかでグリッドの杭打ちを午前中終了。午後から発掘作業開始。まず貝殻散布の最も顕著なC-0区～C-3区までと、貝殻のまばらなB-3区、A-3区を地表から深さ5cm掘り下げる。C-2区で平城式第2群(Fig.107-823)の口縁部が出土し、C-3区では土師質糸切り底杯(Fig.108-827)の出土があった。A-3区では早くも不完全ながら第1号人骨の出土をみた(Fig.83)。各グリッドに出土の土器は、どれも細破片で良好なものは少ない。

- 9月27日 前日の調査区を、さらに10cmの深さで下部へと掘り下げる。貝層はC-0区に最も厚くC-3区に向うにしたがいその層厚も薄くなり、A-3区、B-3区では基盤の茶褐色粘質土層が現れている。当日もC-2区に保存状態が悪いものの第2号人骨を確認し(Fig.7)、それに密接し片端式土器口縁部(Fig.85-754)が出土した。C-3区では姫島産黒曜石剥片も出土している。B-3区では大形石皿(Fig.102-797)の出土があった。これら遺物の他に、堅くしまった茶褐色粘質土層に柱穴をC-3区で1個、B-3区で3個確認した。なお、この日は、これらに平行しD-4区～D-8区までと、E-4区を第1回目の掘り下げ作業を開始した。
- 9月28日 午前中、A-3区第1号人骨を石膏で現形のまま取り上げるに先だって、その囲取りを完了する。午後、人骨周辺を墓壙に平行し約30cm掘り下げ、石膏流し込み完了。掘り下げ作業中、平城式第2群口縁(Fig.84-752)と頸部(Fig.84-753)を検出した。前日から掘り下げ作業続行のD-4区～D-8区とE-4区は、特にE-4区、D-4区、D-5区に遺物が集中し、D-6区～D-8区では、この地が元バチンコ店であったことから、その玉洗器の大きな鉄枠が現われるなど搅乱が著しく遺物も皆無の状態であった。草地牲自來援指導。E-4区では、器形の約2分の1をとどめる保存良好な平城式土器第2群深鉢(Fig.94-770)が出土している。またD-4区からE-4区にかけて直径約1mの円状に疊で埋む配石遺構の出土がみられた(Fig.93)。これらの礫石は、遺構を将来に復原することを考慮し、総てにNo.を記入し写真撮影後取り上げを行なった。D-5区からも平城式土器第2群口縁部(Fig.118-911)の良好なものが出土している。これららの調査区では、わずかな貝殻の出土を部分的に認めた外は、ほとんど貝層の分布をみず、全面が有機質の黒褐色土層で被われていた。当日は、A-6区、B-6区、C-6区を、ユンボを使用して表土を深さ10cm削除した。
- 9月29日 搅乱の明らかなD-6区～D-8区まではそのまま残し、第2回目の掘り下げを遺物の集中するD-4区、D-5区、E-4区にしづらりそれを進行させた。礫石は前日同様、多くの出土を見たが、並びが不規則で遺構らしきものは確認されなかった。それでもD-4区、E-4区で良好な獸・魚骨の出土が見られたり、E-4区では石錘(Fig.118-917)も出土している。
- D-4区東隅では貯蔵穴の存在が明らかとなった(Fig.91)。この中からは炭化種子、平城式第2群土器片多数が検出されている。なお貯蔵穴の泥は黒褐色の泥砂質で、明らかに周辺の土質とはそれを異にしていた。これらの泥は総て水洗し、炭化物、微細な遺物を1つ残らず採取した。
- B-6区、B-7区、C-6区の第1回目の掘り下げも併行し進めた。この地区は、西側に接続するD-6区、D-7区で大幅な搅乱が確認されていたことから、本地区も当然それが予見されたため当初から茶褐色粘質土層の基盤まで深さ約20cm掘り下げている。わずかな平城式土器片の出土を確認したのみであった。C-0区～C-1区に残された貝層を最終的に基盤まで掘り下げ作業も行なった。平城式土器の細片少量と、C-1区で、グリッドを深さ約15cmの段差を持って斜めに緩やかな曲線で横ぎる住居址の一部かと思わせる遺構の確認がなされた(Fig.97)。第2号人骨の取り上げ完了する。

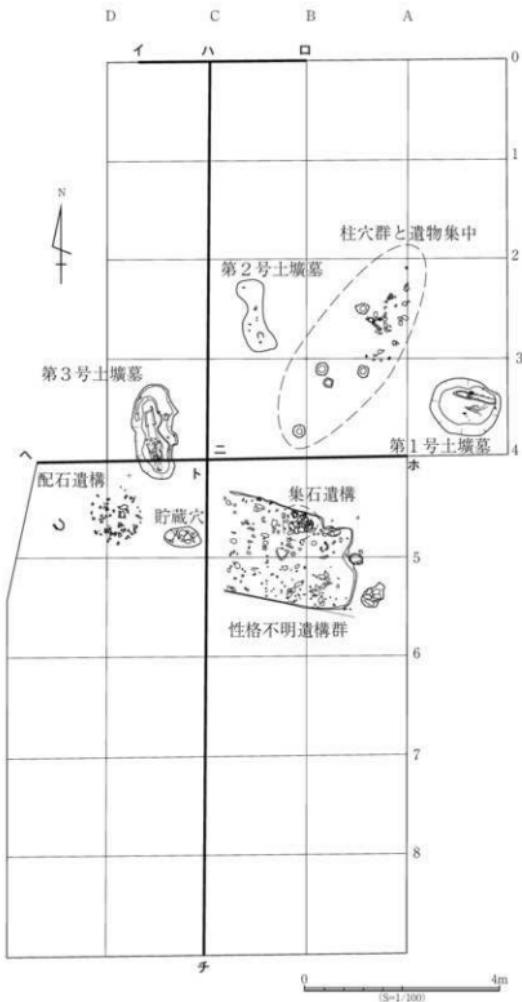
- 9月30日 第1号人骨の取り上げ完了。取り上げ後、墓壙内の泥を全て取り除き、黄褐色粘質土層の床面に木の根跡と、その痕跡に石器剥片、平城式土器片、近代瓦片の流れ込みを確認(Fig.83)。また、床面調整中、層中に張り付いた状態で出土の縄文前期縄B式土器口縁部(Fig.84-751)を検出した。墓壙内の泥は大粒砂を多く混えた黒褐色泥砂土で、中に破碎された貝殻の混入が認められた。
- 貝殻散布の多いD-0区、D-1区の第1回目掘り下げ着手。遺物の多量出土を期待していたが、建物跡の基礎コンクリートや、ガラス、タイル片などが見られ、この地区がほぼ全面搅乱されていることを確かめた。遺物の出土は少ない。またC-1区からの落ち込みをD-2区に追ったが、そこでは確認されてない。
- B-1区、B-2区の第1回目の掘り下げ着手。この調査区は、表土の荒れ具合から搅乱が予測されたため、一撃基盤の茶褐色粘質土層まで掘り下げた。B-1区ではほとんど遺物をみなかったが、B-2区東隅では良好な遺物の出土に恵まれた。(Fig.95) B-2区グリッド中央部に柱穴1個を確認し、その東隣に宿毛式土器(Fig.96-773)が出土している。またA-2区とB-2区境界線に平城式土器第1群胴部土器(Fig.96-772)も出土した。その近くに獸骨(猪下顎)の出土をみた。これら遺物の集中する小範囲は、わずかな落ち込みとなっていて、一面、貝層で被われていた。この貝層を追ってA-2区に拡張したが、このグリッドは搅乱著しく貝層ではなく遺物の出土を全くみなかった。
- B-4区、C-4区の第1回目掘り下げ着手。両グリッドのほぼ中央部に粗石状集石遺構の出土をみた(Fig.92)。この集石の一部疊は、地表面に露出していたものである。疊石の中には石核(Fig.92-769)も含まれていた。C-4区では、不規則に並ぶ多くの疊石が出土している。疊石に混在し多くの石器剥片もみられた。土器は一般的に無文のものを出土している。B-4区では平城式第3群土器(Fig.103-798)が出土している。貝殻の混入は少なく黒褐色有機層をなしていた。
- 10月1日 C-4区、B-4区を2回目の掘り下げ開始。疊石の分布を追ってC-5区、B-5区へ拡張。この調査区からは建物の基礎コンクリート壁がグリッドを東西方向にさえぎっていることが分り、かなりの搅乱が予想された。それでも掘り下げが進むにつれ土器、石器剥片、獸・魚骨片、疊石の出土を増すと共に、ほぼ梢円形に続く落ち込み部が確認され、これらが一種の堅穴住居址である可能性を得た。落ち込み部は、茶褐色粘質土層をほぼ直角に下げたもので、その輪郭は明瞭であった。(Fig.97)。C-4区からは片柏式胴部(Fig.99-787)が出土した。B-4区、B-5区の境界に柱穴1個が検出された。この柱穴内には、破碎された貝殻が詰まっていた。B-5区南隅より伊吹町式土器口縁部が出土している。総体的に、この調査区からの土器は、平城式から伊吹町式までの時間的に幅をもった出土状態が注目された。本区域の調査は10月3日まで続行し、10月4日に日程の都合上から住居址床面を確認せずじまいで作業を打ち切った。
- 10月2日 D-0区～D-2区を2回目の掘り下げ着手。D-4区で第3号人骨(頭部)の露出があったことにより、その下半身を追ってD-3区を1回目の掘り下げ開始。D-3区グリッド中央部に疊石の集中出土を確認(Fig.86)。これに混在し平城式第3群(Fig.90-755)が出土した。

- 第2回目の掘り下げも当日完了した。初回とほぼ同じ個所に重複し礫石、遺物の出土がみられた。平城式第3群土器(Fig.90-759)が出土している。またグリッドの東北隅で柱穴1個が検出された。C-2区第2号人骨墓壙内の泥を取り除く作業終了。泥は大粒砂質で黒褐色をなし、周辺の土質とはそれを異にするものであった。
- 10月3日 D-3区の第3号人骨を被う泥の最終的剥ぎ取り作業終了(Fig.89)。泥は全て水洗した。その作業で小形の石鏃1点(Fig.90-764)と姫島産黒曜石剥片1点を検出した。また細片となった魚骨も多数得た。左胸部に密着したスクレイバー(Fig.90-763)、平城式第4群脇部(Fig.90-762)も検出された。当日は、犬飼徹夫氏・草地牲自両氏の応援があつた。
- 10月4日 第3号人骨の頭蓋骨のみ取り上げ、この作業では森光晴氏の積極的な指導を受けた。頭蓋骨直下に枕石と思われる扁平自然礫を確認。地層断面図作成のため、C-0区～C-3区までの8mを幅50cmで地山まで掘り下げた。その作業で早期押型文土器片を黄褐色粘質土層中にて、佐賀県腰岳産の墨色黒曜石剥片を茶褐色粘質土層で検出した。この個所の地層断面図と貯蔵穴の図取り完了。午後、D-4区～D-8区までの東壁地層断面図作成のため地山まで掘り下げ作業着手。D-5区東壁面に黄褐色粘質土層を基底部とする落ち込み部を確認。この落ち込みはC-5区からの連続と認められた。この個所に平城式第2群(Fig.118-905)を検出する。なお当日は、以下の先輩、諸先生方の来援があった。
西田栄・長井数秋・大山正風・清家直英・十亀幸雄・重松佳久
- 10月5日 D-3区第3号人骨の取り上げ終て完了。墓壙内の泥取り出し作業着手。茶褐色粘質土層を基底部とする床面に平城式第5群土器、石器剥片、若干の礫が出土した。C-0区～D-0区北壁面とD-4区～D-8区までの東壁地層断面図作成終了。午後から全調査区の埋めもどし作業着手。各遺構とグリッド床面には、将来、再調査のされることを考慮し、浜砂でたっぷり被い、その上面を掘りおこしの土で敷きつめ全作業を終了する。

まず、第4次調査区の土壤堆積は、地表より混土貝層(調査時における“貝混土層”と“混貝土層”)と粘質土層そして細礫層を基準とし、地点により暗褐色細礫層や黒褐色有機層が堆積している。貝混土層は貝の密度の高い土壤堆積を、混貝土層は貝の密度が低い土壤堆積をそれぞれ指しており、前者は厚い所で約20cm、後者は8cm程度であったようである。

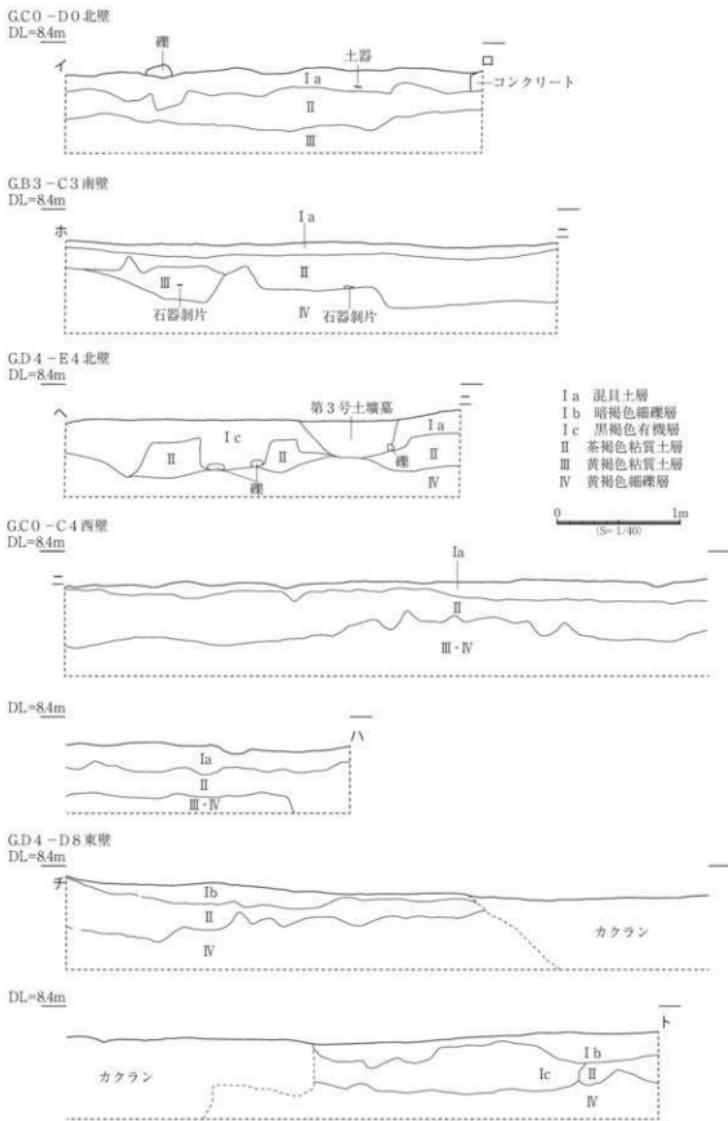
これらの内、主として縄文時代の遺物を含むのは、混土貝層そして茶褐色と黄褐色に分層された粘質土であって、茶褐色粘質土から出土した縄文時代中期の土器と黄褐色粘質土から出土した早期の土器は、平城貝塚が形成される前の歴史を考える上で重要である。

混土貝層は、調査区北端のG.D 0-B 0間から調査区ほぼ中央のG.D 3-B 3間にかけての範囲で検出されている。このことから、第4次調査区は、全体の1/3程度の面積に混土貝層が所在していたと判断できる。



※太線は、土壤堆積図の作成範囲を示し、カタカナはその基準点を意味する。

Fig.81 第4次調査 調査区平面図



第1号土塙墓(Fig.83・84)

G.A 3で検出された遺構である。土塙は、長径1.42m短径1.14m深さ0.45mの楕円形のもので、埋土は黒褐色泥砂土に大粒の砂が混じる。人骨は遺構床面から0.3m上で出土している。尚、遺構床面で樹根の痕跡を検出しており、この中から平城式土器、石器断片、本人骨の一部の可能性がある肋骨残片の他、現代の瓦も出土しており、拔根に伴う擾乱の影響を考慮しておく必要がある。

これについては、調査時において第1号人骨とされたが、掘り方を伴うために本報告においては土塙墓として整理した。

記録保存までの経緯は、最初に1体の人骨を確認し、それを団化した後、石膏で保護して取り上げている。その後、遺構の掘削を進めており、床面は黄褐色粘質土層である。但し、人骨を石膏で保護する作業を行った際に、本来の掘方を損なっている可能性がある。

人骨は、8個の椎骨が緩く湾曲した状態で出土している。下頸骨と上腕骨そして大腿骨の破片が左胸部周辺にかき集められたような状態で出土しているため、東に頭を向けた埋葬が想定されているが、伸展葬か屈葬かについては判断していない。推定ではあるが、埋葬されたのは成人男性であって、強健な体格であったとされる。

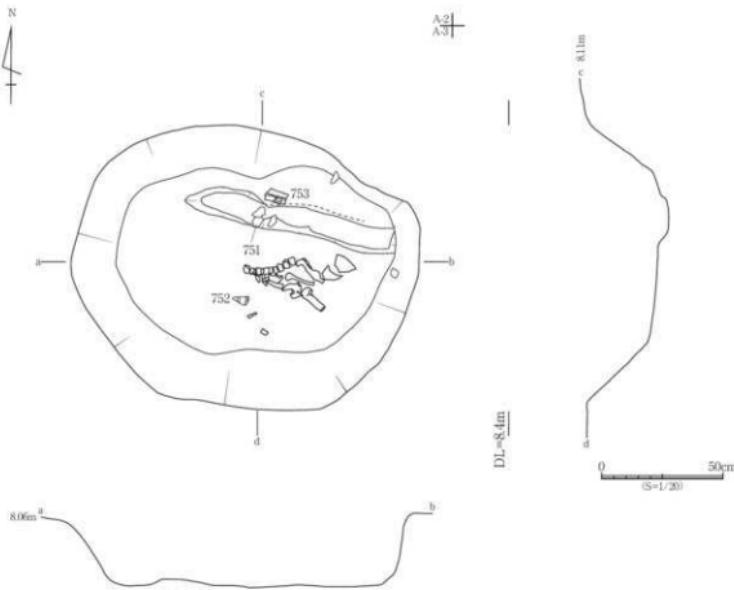


Fig.83 第4次調査 第1号土塙墓遺構図

出土遺物は3点図示した。全て縄文土器であるが、751は草創期の隆起線文土器であり、それ以外は後期である。



Fig.84 第4次調査 第1号土壙墓出土遺物 (751～753)

751は深鉢の口縁部である。口唇部を強く面取り、内面に粘土がはみ出している。口縁部外面直下には幅8mm程度の粘土帯を貼り付け、ミミズ腫れ状の低い隆帯を作出している。これは遺構床の土壤である黄褐色粘質土に張り付くように出土している。この土器は、調査時において前期の森B式土器として理解されていたが、器面に明確な二枚貝条痕を確認することができず、隆帯自体が森B式のものと異なることから、隆起線文土器の一種として判断した。

752は深鉢の口縁部であって、口縁部外端を緩く面取る。外面に浅い沈線を施す他、口縁部内面にもRLを施した後に沈線文を描いており、主文様と従文様の構成が考えられる。753は深鉢の頸胴部である。頸部には沈線文を有しており、波頂部下に施された半鋸鉤状文であった可能性が考えられる。頸部下端には沈線を一条施しており、頸胴部を区画する意図があったと考えられる。胴部はRLと沈線文を施すが、磨消繩文とはならないものと考えられる。

第2号土壙墓(Fig.85)

G.C 2で検出された遺構である。土壤は、長径1.48m短径0.3m深さ0.05mから0.07mの瓢箪形のもので、長軸両端が深く、中央部で最も浅い掘り方であり、埋土は黒褐色泥砂土である。

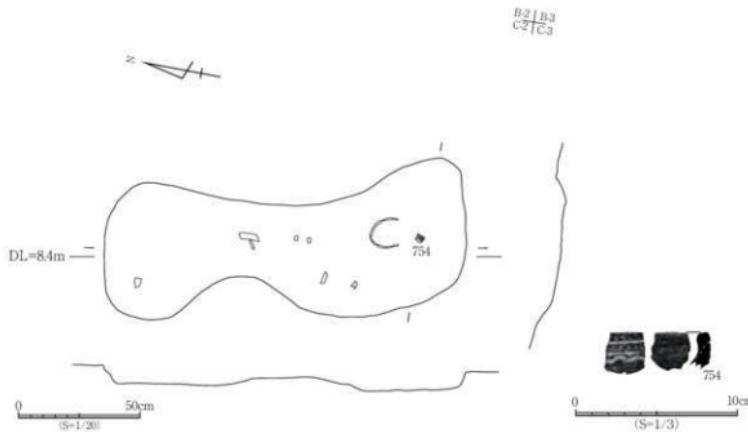


Fig.85 第4次調査 第2号土壙墓遺構図及び出土遺物 (754)

尚、頭蓋骨の一部が出土しているが、これは混貝土層下約5cmからの出土である。これについては、調査時において第2号人骨とされたが、掘り方を伴うために土壤墓として整理した。

記録保存までの経緯は、最初に1体の人骨とそれに密接した縄文土器を検出し、人骨は9月29日に取り上げられている。

人骨は、保存状態が極めて悪いものの、頭蓋骨と大腿骨を確認している。頭蓋骨は土坑の南に、大腿骨は北に出土しており、頭蓋骨は右頭蓋冠のみで顎骨はほとんど原形を保っておらず、大腿骨は細片である。4歳未満の幼児が埋葬されてたと推定されている。

この遺構に近いところから出土した土器を1点図示した。混貝土層からの出土であるため、この遺構の明確な時期を示すものではない。754は縄文時代後期のもので、深鉢の口縁部であり、口唇部を面取る他、口縁部内面に凹線状の凹みを有する。外傾ないしは外反する頸部から強く屈曲してやや内済する口縁部が立ち上がり、外面にRLを施した後、並行する二条の沈線とその下に波状文を施す。

第3号土壤墓(Fig.86~90)

G.D.3とD.4で検出された遺構である。土壤は二段構造とされ、上段(調査時における外周)は長径1.94m短径0.73m深さ約0.1mの不定形な楕円形のもの、下段(調査時における内周)は長径1.54m短径0.23m深さは頭部で0.14m、足下で0.18mを測り、不定形な楕円形のものであって、調査時においては瓢箪形を呈し、第2号人骨(本報告の第2号土壤墓)と共に通する特徴を示唆している。埋土は黒褐色泥砂で、人骨の下には約3cmの泥があり、遺構の床は黄褐色粘質土である。

人骨は、そのほぼ全身を良好に残している。埋葬されていたのは10代半ばの女性であって、妊娠の痕跡は認められず、身長は130cm程度と推定されている。尚、肋骨のAMS年代測定で、縄文時代後期前葉の年代値が得られている(第IV章3参照)。

記録保存までの経緯は、まず頭蓋骨の発見から始まり、全身の遺存が予想されたことから、人骨と遺物の出土状況を4つの段階に分けて記録している。

一段階目(調査時の1回目の掘り下げ:Fig.86)は地表から約5cm掘り下げた時点での出土状況であり、下半身の上方の方に僅かな獸骨の他、礫と土器片が出土している。尚、頭蓋骨の発見時点で、その周囲を7個の砂岩礫で囲んでいたとしている。

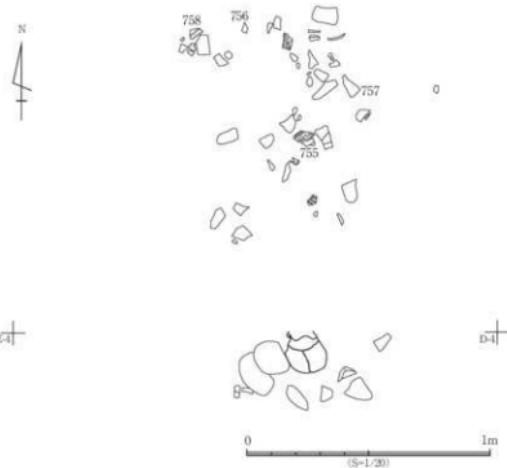


Fig.86 第4次調査 第3号土壤墓検出状況図1

二段階目(調査時の2回目の掘り下げ:Fig.87)では、疊と土器片そして獣骨が胸部付近から集中して出土している。

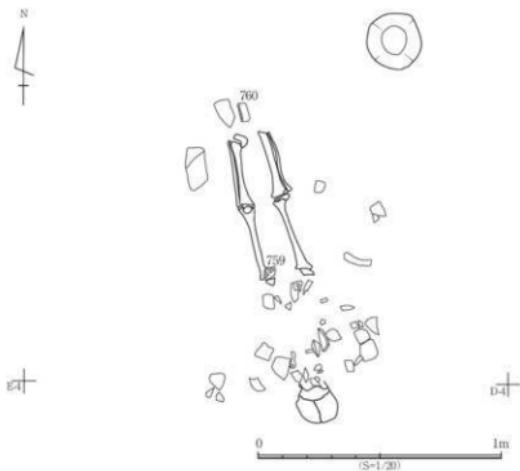


Fig.87 第4次調査 第3号土墳墓検出状況図2

三段階目(調査時の3回目の掘り下げ:Fig.88)では、疊と土器片そして獣骨が右腕上部から出土しているが、その量は二段階目よりも少ない。

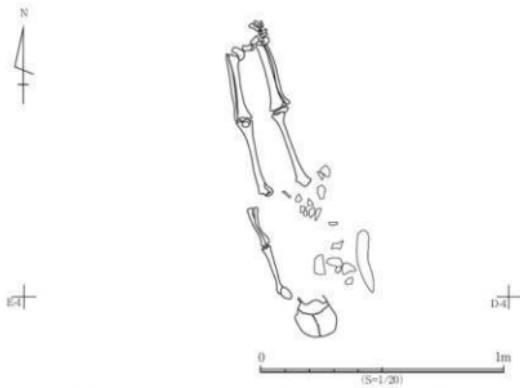


Fig.88 第4次調査 第3号土墳墓検出状況図3

四段階目(調査時の最後の掘り下げ:Fig.89)で、仰臥伸展葬であることを確認している。

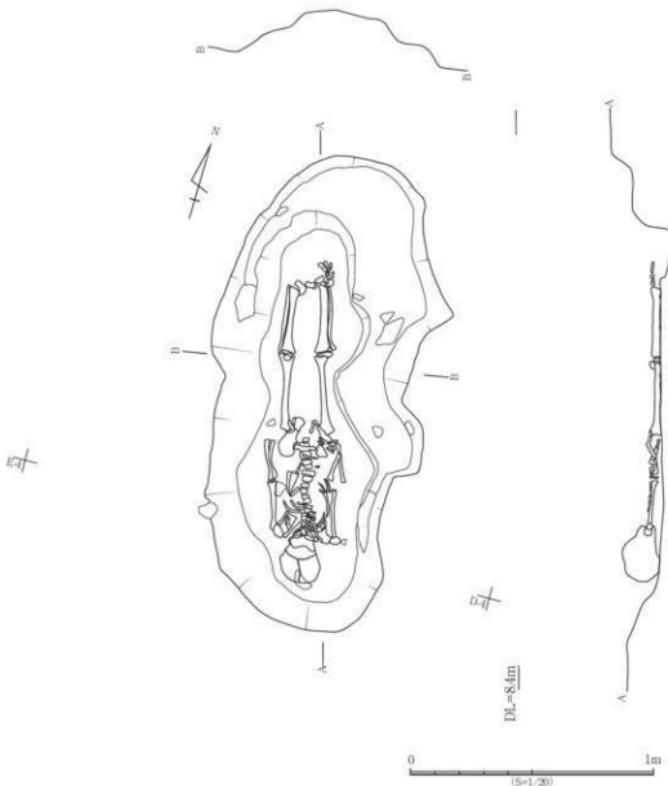


Fig.89 第4次調査 第3号土墳墓遺構図

出土遺物は10点を図示した。土器は全て縄文時代後期のものである。

755から758は検出状況図1(Fig.86)で記録された遺物である。755は深鉢の口縁部であって、砲弾形の器形であり、体部は無文である。口唇部を強く面取り、刻みを施している。756は深鉢の底部であるが、脚状に突出しており、平底や凹み底の範疇から外れたものである。外面に大粒であるが極めて節の細いLRを施しており、胴部が大きく張る器形が考えられる。757は深鉢の胴部であって、外面に抉るような複数の沈線と、「ハ」状の刺突を施す。758は浅鉢の底部で、平底である。

759と760は検出状況図2(Fig.87)で記録された遺物である。いずれも深鉢の口縁部であって、口唇部を面取り、砲弾形の器形になるとされる。759は口縁部下の外面に、右に降る沈線文を施すが、胴部まで及ぶものではない。760は口唇部に刻みを施している。

761は頭蓋骨内から出土したものであり、無文の深鉢の胴部である。

762と763は完掘時に出土したものである。762は縦文のみ施す深鉢の頭胴部であり、胴部にRLを施す。肋骨と腰椎の間に密着して出土している(木村1995)。763は一見国府型ナイフであるが、刃部があるため削器として考えられる。石材はホルンフェルスであって、左肋骨下位に張り付いた状態で出土している(木村1995)。

764は石鑿であり、石材はチャートである。埋土の水洗で確認できたものである。

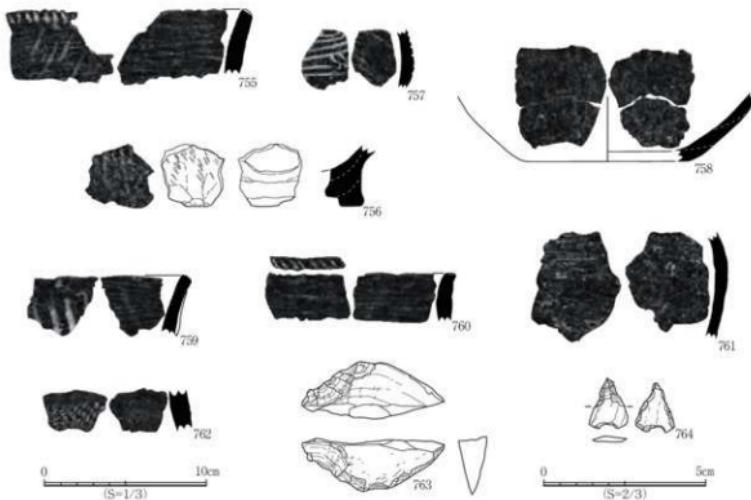


Fig.90 第4次調査 第3号土塙墓出土遺物 (755 ~ 764)

貯藏穴 (Fig.91)

G.D.4で検出された遺構である。地表下約5cmのところで検出されており、長径0.76m短径0.41m深さ最浅0.18m最深0.31mである。掘り方はほぼ垂直であり、断面の一部は袋状となっている。

埋土は黒褐色泥砂質土であって、水洗の結果、ブナ科カシ類の炭化種子が20点確認されている。そして、土器の比較的大きな破片が床から全て裏向きで出土している。

出土遺物を4点図示した。765から768は深鉢の口唇部である。765は口唇部を面取り、口縁部外面に主文様と従文様で構成される文様を有している。主文様は、RLを施した後に中空の原体による円形刺突を施し、それを弧状の沈線二条で囲んだものである。従文様は一条の沈線であり、その端部は口唇部に向かって取めるものと主文様で取まるものがある。頭部は無文と思われるが、その下端ないしは胴上部に、主文様の中心と同じ円形刺突を施していた可能性がある。766は口唇部と口縁部外端を面取り、口縁部外端にはRLを施す。頭部下端には沈線を一条施しており、頭胴部を区画する意図があったと考えられる。胴部には、RLを施した後に多重の沈線で半紡錘状文を描いている。767は波頂部であり、口縁部をやや厚く作出している。768は鉢の口縁部であり、口唇部を強く面取る。波状を呈し、外面にRLを施した後、主文様と従文様で構成される文様を有する。主文様

は波頂部下に施されており、沈線で「U」字状文を描き、それを噛み合わせたものを一条の弧状沈線で囲む。從文様は一条の沈線であり、その端部は口唇部に向かって曲げて取めるものと主文様で手前で胴部に曲げて取まるものである。体部にも文様を有しており、RLを施した後に沈線で半紡錘状文の系譜にある意匠を描いているが、その中心は一条の蛇行文である。

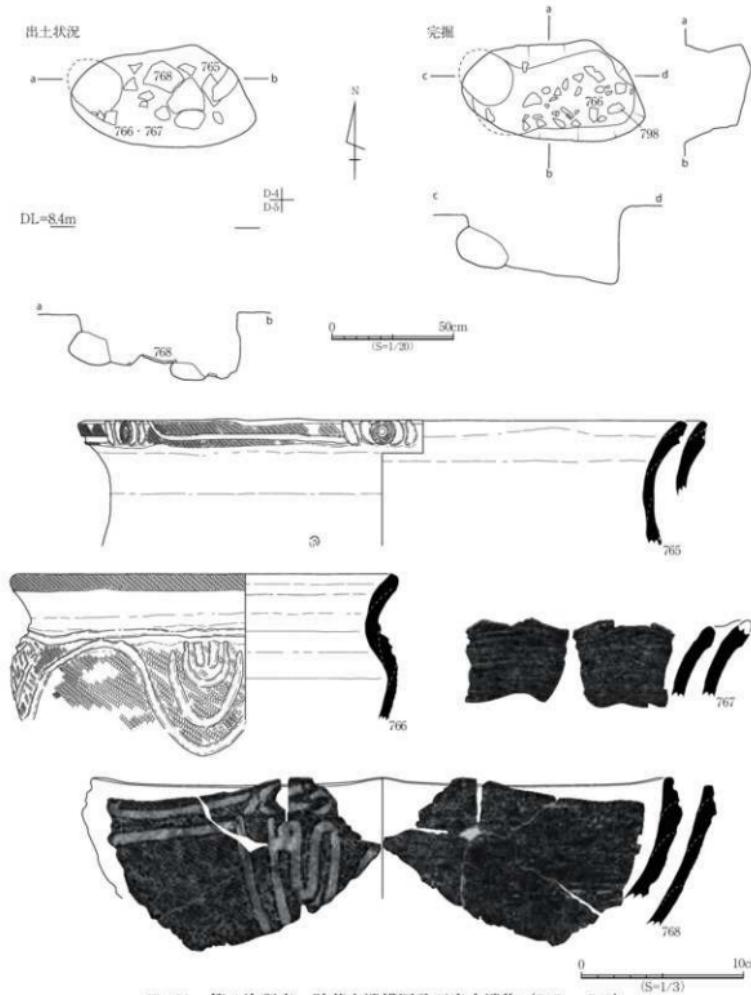


Fig.91 第4次調査 貯蔵穴遺構図及び出土遺物 (765 ~ 768)

集石遺構(Fig.92)

G.C 4 と B 4 に跨って検出された遺構である。直径0.5mで、長径0.15m程度の砂岩礫の他、石核を配している。769はその石核であって、石材はホルンフェルスである。

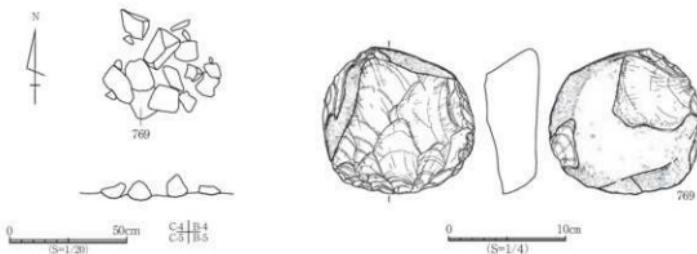


Fig.92 第4次調査 集石遺構図及び出土遺物 (769)

配石遺構(Fig.93・94)

G.E 4 と D 4 に跨って検出された遺構である。直径1.0mで、円礫と角礫を円形に配しており、中心部に直径15cmから20cmの礫、その周間に拳大の礫を配している。砂岩が中心であるが、花崗岩と頁岩(ホルンフェルスと思われる)も含まれる。

土器片、獸骨片、魚骨、石器剥片の他、木炭の細片も出土しているが、礫が被熱した痕跡は確認されていない。

また、出土した土器は、770の他に925があるとされている。770はこの遺構と近接して出土しているため、遺構に伴うものと理解とした。

770は全体の大凡1/2が遺存する小形の深鉢である。波頂部が大小2種類ある波状口縁で、それぞれが対になっている。

口縁部を幅広く作出し、その外面に巻貝の回転摺繩文を施した後、主文様と従文様で構成される文様を施す。大きい波頂部には、頂部外面に沈線で「U」字状文を描き、その下に沈線で釣り針様の文様を描いて向き合わせる。その下にも沈線で「U」状文を描いており、頂部のものと対になると考えられ、これらが主文様1である。小さい波頂部は、四点を一条の沈線で囲んだもので、これが主文様2である。これらを繋ぐ様に、沈線で長楕円文を描いており、これが従文様である。波頂部下の頸部には、垂下する五条の沈線を描き、胴部の主文様である渦文はこれらと対である。尚、底部は剥落しているが、粘土板を貼付した平底であった可能性が高い。

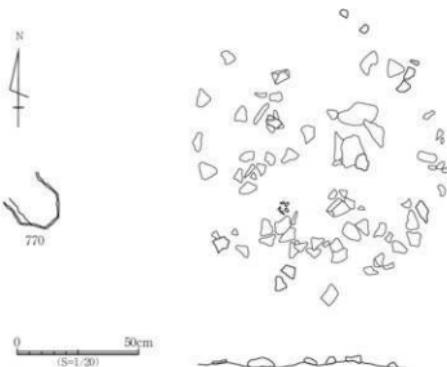


Fig.93 第4次調査 配石遺構図



770
主文様 1



770
主文様 2

0 10cm
(S=1/3)

Fig.94 第4次調査 配石遺構出土遺物 (770)

柱穴群及び遺物集中(Fig.95・96)

G.B 2 と B 3 そして C 3 に跨って検出された遺構である。G.B 2 - Pit 1 には貝殻が充満しており、遺物集中は径 1 m 深さ 7 cm の浅い落ち込みであって、不定形な楕円であった。遺物全体が、約 10 cm の貝層で覆われていたと報告されている。土器の他、猪の下顎骨と思われる獸骨が図化されており、動物遺存体は貝層に保護されて良好な状態で遺存していたことが読み取れる。

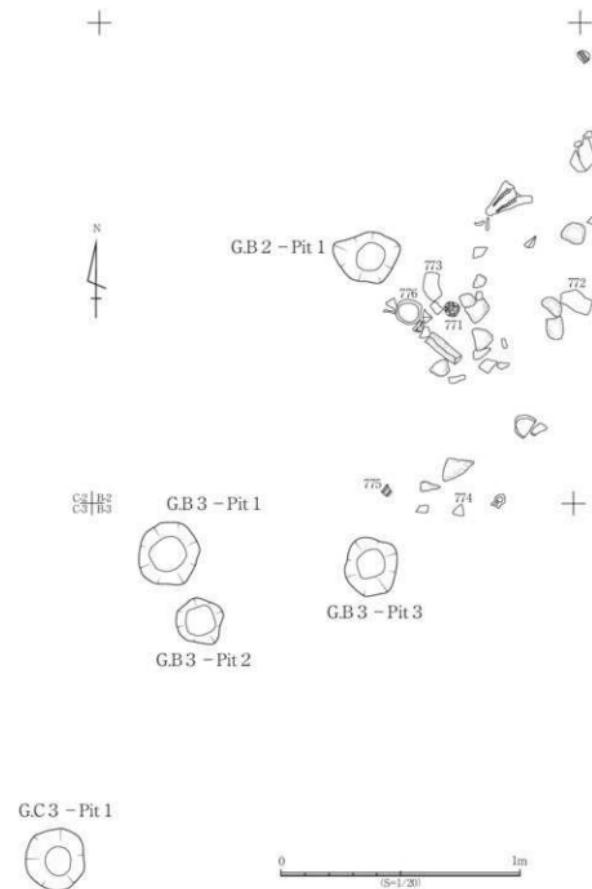


Fig.95 第4次調査 柱穴群及び遺物集中平面図

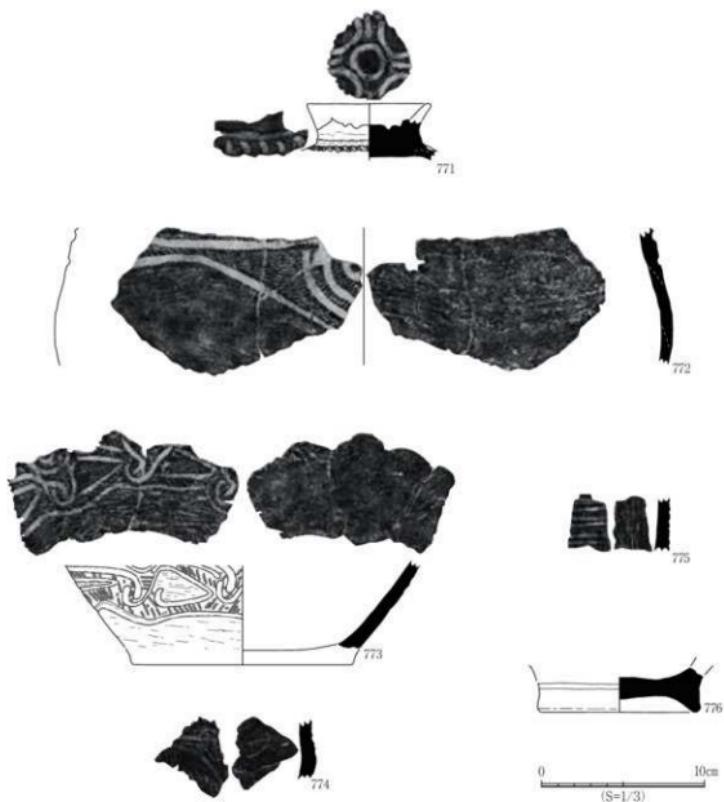


Fig.96 第4次調査 柱穴群及び遺物集中出土遺物 (771～776)

出土した遺物を6点図示した。771は蓋のツマミとして考えられる。その内面にはRLを施した後に一条の沈線で円文を中心描いて区画し、磨消繩文としている。その周囲を四分割して、それぞれに中心の円文と同じ意匠を描いたと考えられる。蓋本体のツマミの付根には、RLを施した後に刺突を施している。772は深鉢の胴部である。RLを施した後に沈線文を施している。その意匠は、中心に渦文を配し、それを囲う文様として考えられる。773は鉢の胴部である。底部間際の部位であって、底部へと繋がる独特の接合痕を有する。外面にRLを施した後に沈線で区画し、磨消繩文としている。その意匠は、波頭状文の系譜にあると考えられる。774は深鉢の頭胴部である。頭部下端に胴部との区画を意図したと考えられる沈線を一条施す。胴部はRLを施した後に沈線文を施しているが、その意匠は半紡錘状になるとと考えられる。775は深鉢の胴部である。外面に平行する沈線を多数施す。776は深鉢の底部である。貼付高台と考えられ、上端に浅い沈線を施す。

性格不明遺構(Fig.97~99)

G.C 4 と B 4 そして G.C 5 と B 5 に跨って検出された遺構である。埋土は黒褐色有機土であり、一部は GD 4 D 8 間の東壁土壤堆積図において黒褐色有機層として反映されている可能性がある。この図において遺構は、茶褐色粘質土層を掘り込んで形成されているが、搅乱を挟んで GD 8 の茶褐色粘質土層から瓦が出土しているため、この遺構の理解には慎重性が求められる。

調査時より竪穴住居が想定されていたが、調査期間の限界により、明確な掘り方と床面が確認できおらず、出土土器には時期幅がある。このため本報告では、性格不明遺構として整理した。

出土遺物を14点図示した。全て深鉢であり、縄文時代後期のものである。

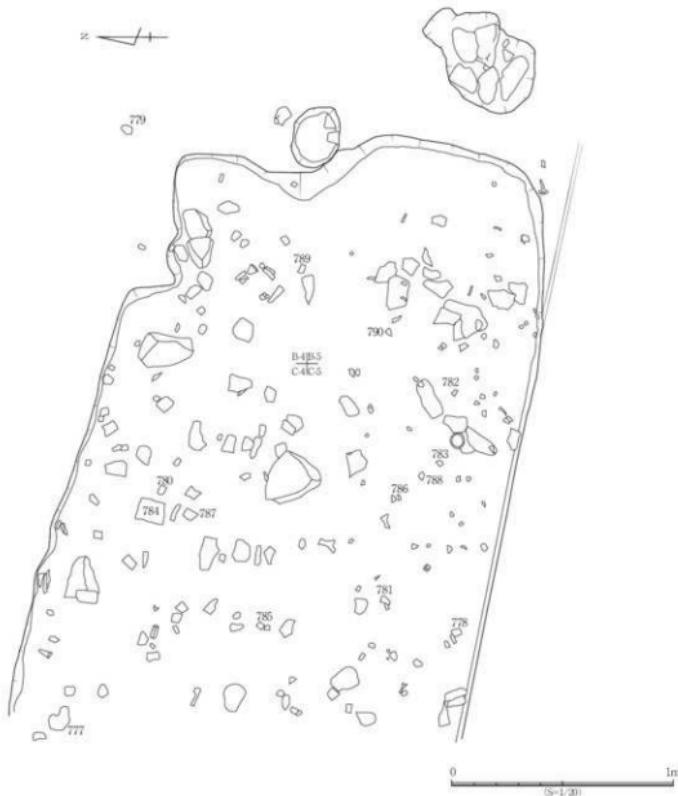


Fig.97 第4次調査 性格不明遺構平面図

777から779は口縁部であり、外面に主文様と従文様で構成される文様を有する。

777は波状口縁であり、口唇部を強く面取る。波頂部下にRLを施した後、沈線で「U」字状文を2つ描いて噛み合わせ、それを沈線で描いた弧状文で囲む。従文様は一条の沈線であり、端部を口唇部の方に折り曲げて取めている。波頂部下の頭部には沈線を二条施したと考えられ、それら頭部文様の間に窓枠様の沈線文を配していた可能性がある。

778は平縁であって、口縁部と頭部にRLを施す。主文様は、円形刺突とそれを囲む沈線文で、従文様は一条の沈線である。

779は平縁であり、強く面取りした口唇部を沈線で刻む。主文様は、沈線で囲まれていたと考えられる。

780は平縁であり、やや厚く作出した口縁部の外面にRLを施した後、沈線を一条施す。

781は頭胴部であり、胴部に沈線を二条施す。

782は無文土器の口縁部で、口縁部を肥厚させて玉縁状に作出している。

783は縄文のみ施す深鉢の頭胴部であり、胴部にLRを施す。

784は無文土器の胴部で、巻貝条痕が顯著である。

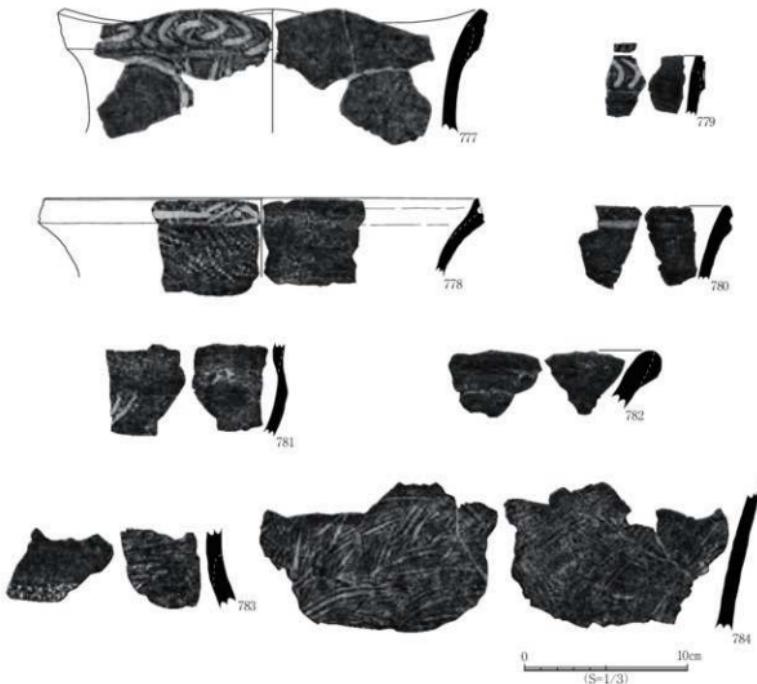


Fig.98 第4次調査 性格不明遺構出土遺物 (777～784)

785と786は、頸部から内湾する口縁部が「く」字状に屈曲して立ち上がる深鉢の口縁部であり、内面に凹線状の凹みを有する。

785は外面にLRを施した後に沈線を三条描く。

786は外面にLRを施した後に、抉る様な沈線を施す。

787と788は頸胴部であり、787はLRを施した後、頸部下端に胴部との区画を意図したと考えられる一条の沈線をほどこす。胴部には、斜行する沈線を複数条施しており、その意匠は三角形様であると考えられる。

788はRLを施した後に沈線を施しており、その意匠は三角形様であると考えられる。

789は胴部であり、LRを施した後に沈線を一条施す。

790は浅鉢の胴部であり、内面を磨く。外面にLRを施した後に沈線を三条施す。赤彩した土器である。

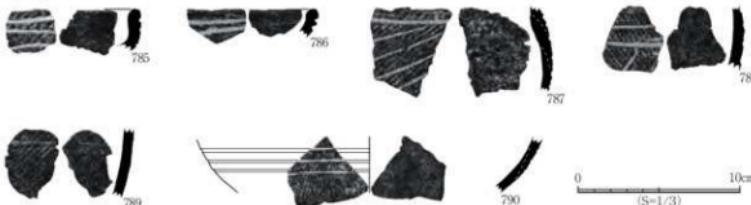


Fig.99 第4次調査 性格不明遺構出土遺物 (785 ~ 790)

包含層出土物(Fig.100~121)

本報告では、グリッドごとに取りまとめて報告する。

土器は、そのほとんどが層厚10cmから20cmの混土貝層ないしは混貝土層から出土している。石器も同様である。

G.A 3 (Fig.100)

第1号土壙墓と同じグリッドである。出土した土器を1点図示した。

791は縄文のみ施す深鉢の口縁部であり、内面にRLを施す。外面は二次焼成のため赤変し、脆くなっている。



Fig.100 第4次調査 G.A 3出土遺物 (791)

G.B 2 (Fig.101)

柱穴群及び遺物集中と同じグリッドである。出土した遺物を3点図示した。

792と793は土器、794は石器であり、いずれも縄文時代のものである。792は口縁部である。平線であって、口唇部を強く面取る。口縁部外面にRLを施した後、平行する沈線を二条施す。下端の沈線は深く、口縁部と頸部を区画するものと考えられる。793は底部で、外側にやや張り出す貼付高台である。794は敲石であり、石材は花崗岩である。円礫を使用し、一部が被熱している。

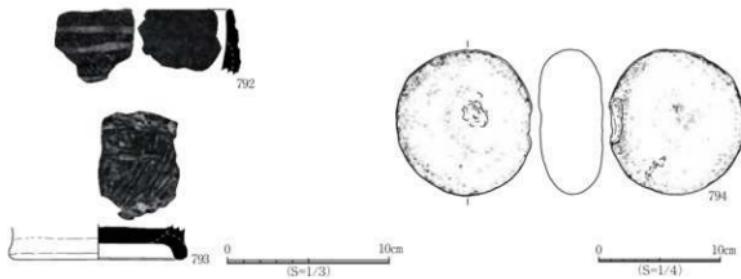


Fig.101 第4次調査 G.B. 2出土遺物 (792～794)

G.B.3 (Fig.102)

柱穴群及び遺物集中と同じグリッドである。出土した遺物を3点図示した。

795は縄文土器の口縁部であり、巻貝の回転擬彫文を施した後に沈線文を施す。主文様と従文様の構成であったと考えられる。796は中世の土師質土器の杯であり、底部外面に回転糸切痕と内面に回転指撫でが残る。797は石皿であり、石材は砂岩である。縄文時代のものと考えられる。

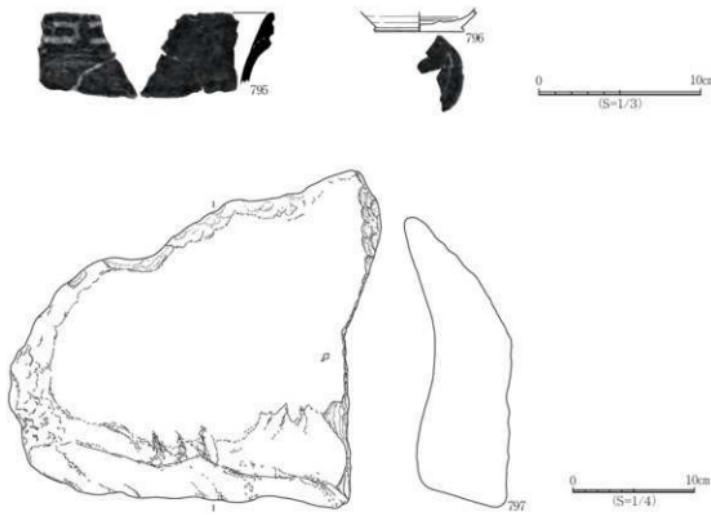


Fig.102 第4次調査 G.B. 3出土遺物 (795～797)

G.B 4 (Fig.103)

性格不明遺構及び集石遺構と同じグリッドである。出土した遺物を6点図示した。全て縄文時代のものである。

798から802は土器であり、798から801が口縁部、802が胴部である。798は平縁であり、口縁部をやや厚く作出している。外面にLRを施した後一条の沈線と、その下に右に斜行する沈線を施す。799と800は口唇部を面取り、799は右に斜行する刻みを、800は刻みをそれぞれ施す。801は縄文のみ施す土器の口縁部で、丸く作出した口縁部にRLを施す。802は胴部であり、LRを施した後、沈線文を描いている。803は骨角器であり、ヤスなどの漁労具として考えられる。素材は鹿角である。

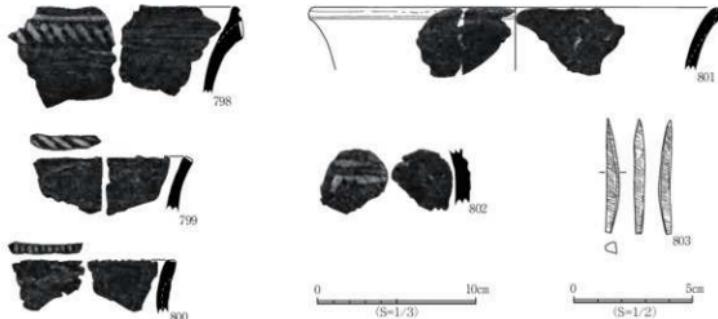


Fig.103 第4次調査 G.B 4 出土遺物 (798 ~ 803)

G.B 6 (Fig.104)

出土した遺物を2点図示した。いずれも縄文時代の土器である。

804は平縁で、口縁部をやや厚く作出している。口唇部を面取り、右に斜行する刻みを施している。805は縄文のみ施される深鉢の頸胴部であり、胴部にはRLを施している。



Fig.104 第4次調査 G.B 6 出土遺物 (804・805)

G.C 0 (Fig.105)

混土貝層が所在するグリッドである。出土した遺物を10点図示した。806から814は縄文土器、815は石鎌である。806から810は口縁部で、806から809は口縁部外面に文様を有する。806は平縁であり、外面にRLを施した後、沈線を一条施す。807は波状口縁であって、口唇部を強く面取る。やや厚く作出した口縁部外面に、浅い沈線を二条施す。808は平縁であり、幅広く作出した口縁部外面に沈線で矢羽状文を施す。809は平縁であり、口唇部を強く面取る。外面にRLを施した後に沈線を一条施す。810は口唇部を強く面取る。外面に縄文を施しているが、撫でて消している。

811から814は胴部である。811はRLを施した後に沈線で区画し、磨消縄文をしている。812と813はRLを施した後に沈線文を描いており、813の縄文は筋が細かく整ったものである。814は縄文のみ施す土器の頸胴部であり、胴部にRLを施す。815の石材はホルンフェルスである。

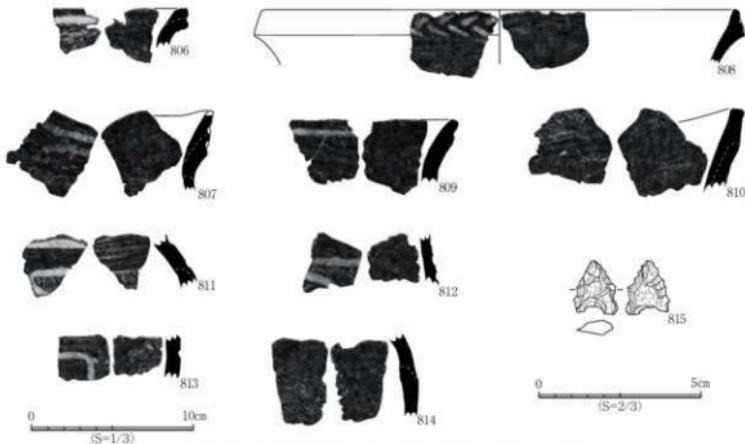


Fig.105 第4次調査 G.C. 0出土遺物 (806 ~ 815)

G.C. 1 (Fig.106)

混土貝層が所在するグリッドである。出土した遺物を5点図示した。816から819は縄文土器、820は敲石である。816はⅢ層つまり黄褐色粘質土層から出土しており、内面にやや間延びした山形文を施している。817はⅡ層つまり茶褐色粘質土層から出土している。外面に筋の太いRLを施した後に細い粘土紐を一条貼付して隆帯を作り出し、その上を半截竹管状の原体で押し引きしている。818は深鉢の頸胴部であり、頸部は沈線文のみで窓枠状の文様を施していたと考えられ、胴部はRLを施した後に沈線文を施す。819は縄文のみ施す土器の頸胴部であり、胴部にRLを施す。820は下端にのみ敲打痕が認められることから、杵のような使い方が考えられる。石材は泥岩である。

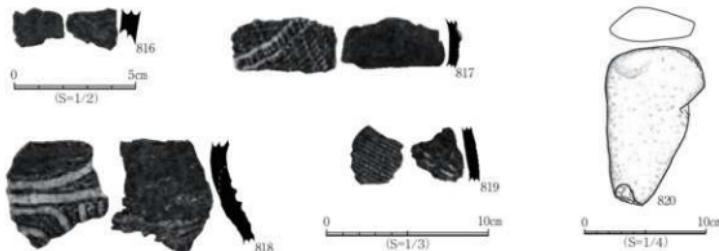


Fig.106 第4次調査 G.C. 1出土遺物 (816 ~ 820)

G.C 2 (Fig.107)

混土貝層と第2号土壤幕が所在するグリッドである。出土した遺物を5点図示した。

821から824は縄文土器で、825は刷片である。821と822は深鉢の口縁部であり、いずれも口唇部を面取り、口縁部外面に文様を有する。821は波頂部であって、口縁部をやや厚く作出する。外面に巻貝の回転擬繩文を施した後、主文様と従文様で構成される文様を描く。主文様は蛇行文と考えられ、従文様は端部を下向きに折り曲げる一条の沈線である。822は二条の平行する沈線を施す。823は鉢の口縁部であって、外傾する体部から強く屈曲して口縁部が立ち上がる。波状口縁であって、外面に主文様と従文様で構成される文様を有する。主文様は、波頂部下の中空の原体による円形刺突であり、それを二条の弧状沈線で閉む。従文様は一条の沈線である。824は底部で貼付高台である。825の石材は黒曜石である。817と同じ茶褐色粘質土層から出土しており、黒色で不純物を含まないことから、佐賀県伊万里市に所在する腰岳が原産地として考えられる。

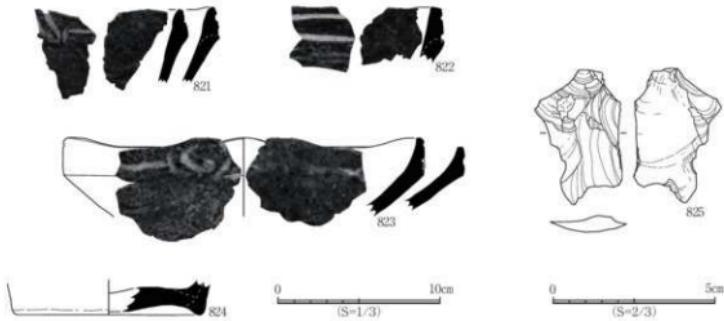


Fig.107 第4次調査 G.C 2出土遺物 (821～825)

G.C 3 (Fig.108)

混土貝層と柱穴が所在するグリッドである。出土した遺物を2点図示した。

826は敲石であり、混土貝層からの出土である。表裏と側縁に敲打痕を有しており、石材は砂岩製である。827は土師質土器の杯底部であって混貝土層からの出土である。外面には回転糸切り痕が残っており、中世のものである。

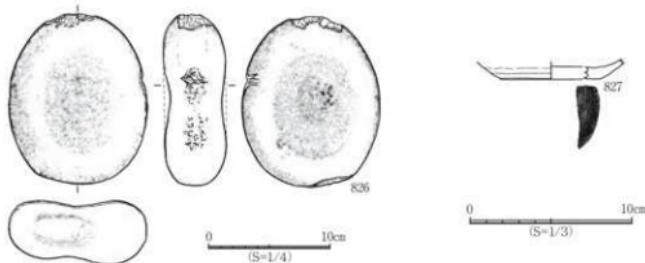


Fig.108 第4次調査 G.C 3出土遺物 (826・827)

G.C 4 (Fig.109・110)

混土貝層と性格不明遺構が所在するグリッドである。出土した遺物を19点図示した。

828から841は土器、842から845は石器、846は骨角器であり、全て縄文時代のものである。

828と829は深鉢の口縁部であり、外面に主文様と従文様で構成される文様を有する。828の主文様は円形刺突であって、従文様は長梢円の沈線文である。829は主文様の中心は不明であるが、RLを施した後にそれを弧状沈線で囲んだものであり、従文様は端部が口唇部に向かって折れ曲がる一条の沈線である。頸部にも文様を有しており、主文様と従文様で構成されると考えられ、従文様は窓枠様の沈線文の可能性がある。830は頸部で、主文様と従文様で構成される文様を有する。従文様は窓枠様の沈線文の可能性がある。831は胴部であり、沈線で主文様と従文様で構成される文様を描く。832から835は縄文のみ施す土器である。832と833は口縁部、834と836は胴部である。832は面取りした口縁部外端と内面にRLを施す。833は緩く面取りした口唇部にRLを施す。834と835は外面にRLを施しており、835は羽状文としている。836から838は無文土器の口縁部である。836と837は小形の土器であると考えられ、836は口唇部に刻みを有する。838は口縁部外端を面取る。839は浅鉢であって、口縁部を厚く作出しており、口唇部を強く面取る。840は橋状把手であるが、小形のものである。壺についていた可能性が考えられ、節の細かいRLを施した後に、円孔を有する小突起を2つ有する。平縁の外面には端部に刺突を有する一条沈線を施す。赤彩されていた土器である。841は底部で、平底である。体部が大きく開く鉢のものと考えられる。

石器は全て混土貝層からの出土である。842は打製石斧であるが、基部が欠損している。石材はホルンフェルスである。843は石錐であり、石材は安山岩と考えられる。844と845は磨石であって、いずれも全面を磨いている。844は側縁の一部に明瞭な敲打痕を、845は表裏に浅い敲打痕をそれぞれ有する。石材は砂岩である。846は混土貝層からの出土である。先端に平滑な面が形成されており、主として研磨に使用されたと考えられる。素材は鹿角である。

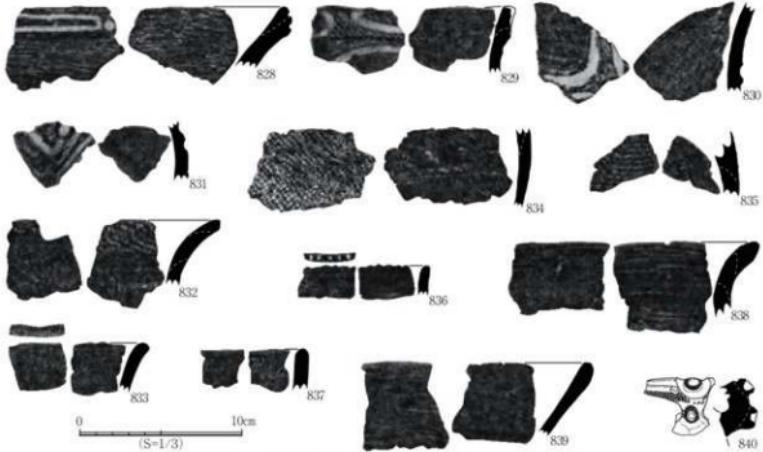


Fig.109 第4次調査 G.C 4 出土遺物 (828～840)

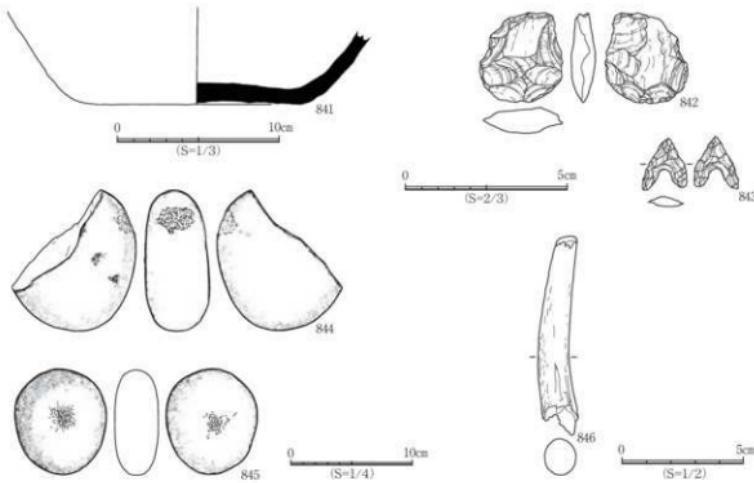


Fig.110 第4次調査 G.C 4出土遺物 (841 ~ 846)

G.C 5 (Fig.111)

混土貝層と性格不明構造が所在するグリッドである。出土した遺物を7点図示した。

847から851が土器、852と853が石器であって、全て縄文時代のものである。

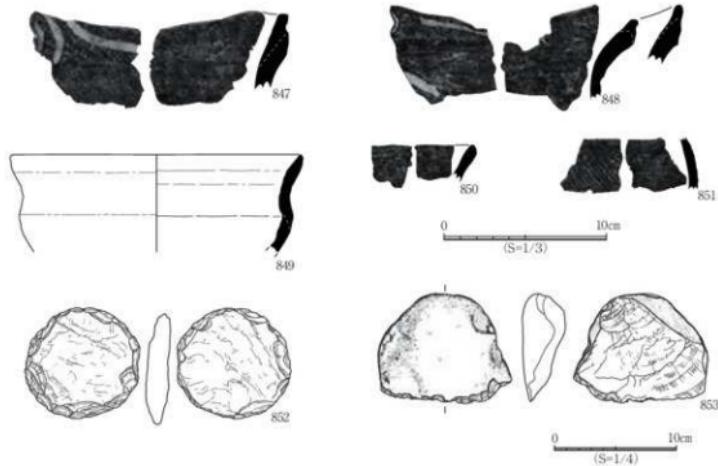


Fig.111 第4次調査 G.C 5出土遺物 (847 ~ 853)

847と848は口縁部であり、いずれも波状口縁であって、口唇部を強く面取る他、口縁部外面に主文様と従文様で構成される文様を有する。847はRLを施した後に施文する。主文様の中心は不明なもの、それを複数の弧状沈線で閉むものであって、従文様は端部を口唇部に向かってせり上がる一条の沈線である。848は主文様の中心は不明なもの、それを弧状沈線で閉むものであって、従文様は一条の沈線である。波頂部下の頸部には沈線文を描いており、その意匠は山形文の可能性がある。849から851は鉢であり、849は胴上部で屈曲し、外反する頸部から口縁部に至る。850は口縁部外端を面取る。851は縄文のみ施しており、胴部外面にRLを施す。石器はいずれも混土貝層からの出土である。852と853は削器の機能が考えられ、852は円盤型石器で、石材は粘板岩である。853の石材はホルンフェルスである。

G.C 雜(Fig.112)

遺物を3点図示した。いずれも深鉢である。854は頸部であり、区画を意図したと考えられる縱位の沈線と、その脇に渦文様になると考えられる沈線文を施す。855は胴部であり、LRを施した後、複数条の沈線を施しており、三角形の意匠と描いたと考えられる。856は口縁部であって、厚く作出している。縄文のみを施した土器のものと考えられ、波状を呈する。外面と内面にLRを施すが、内面は波頂部のみに施し、刺突様に施す縄文原体の圧痕も同様である。

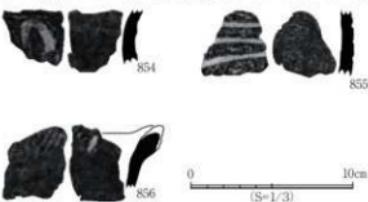


Fig.112 第4次調査 G.C雑出土遺物 (854~856)

G.D O (Fig.113)

混貝土層が所在するグリッドである。出土した遺物を15点図示した。全て土器であり、857から870が縄文時代のもの、871が中世のものである。857から860は深鉢の口縁部であり、いずれも外面に文様を有する。857は厚く作出しており、突起と口縁部内面に段を有する。突起にはLRを施した後に沈線を絡ませる。突起下の外面には涙滴状文を施し、平縁にはRLを施した後、端部を刺突する沈線を一条巡らす。短い頸部にも沈線文を有するが、その意匠は波頭状文の系譜のものと考えられ、胴部はRLを施した後に沈線で区画して磨消縄文としたと考えられる。赤彩されていた土器である。858は平縁であり、強く面取りした口唇部と外面にRLを施した後、外面には一条の抉る様な沈線を施す。口縁部内端の突出は面取りに伴うものである。859は平縁であり、口縁部外端を緩く面取る。外面に三条の平行する浅い沈線を施す。860は、厚く作出した口縁部の外端を面取り、LRを施す。その後一条の沈線を施し、その下にのみ縄文を残す。861から863は深鉢の胴部であり、861はRLを施した後に沈線で区画して磨消縄文としたと考えられ、862も同じ文様を描いた可能性がある。863は沈線文のみ施しており、上の沈線は端部を丸く収めた二条の沈線が絡む意匠であったと考えられ、下の沈線はその文様帶の下端を示すと考えられる。864と865は頸胴部であり、いずれも縄文のみ施す土器である。864はRL、865はLRをそれぞれ頸部に施す。

866から868は浅鉢である。866と867はボウル形であり、866は体部上端の外面に抉る様な沈線を一条施し、その脇に円形刺突を有する。その下は沈線で円文を描いていると考えられる。

867は、体部にRLを施した後に沈線で区画して磨消繩文としている。赤彩されていた土器である。
 868は皿形であったと考えられ、LRを施した後に沈線で区画し、磨消繩文とした可能性が考えられる。
 869は口縁が大きく開く壺形のものである。口唇部に鱗状の突起を有する。
 870は注口付土器の可能性が考えられる。体部は算盤玉状を呈しており、外面にRLを施した後に沈線で区画して磨消繩文としている。意匠は波頭状文の系譜にあるものと考えられる。

871は土師質土器の杯であり、底部に回転糸切り痕が残る。

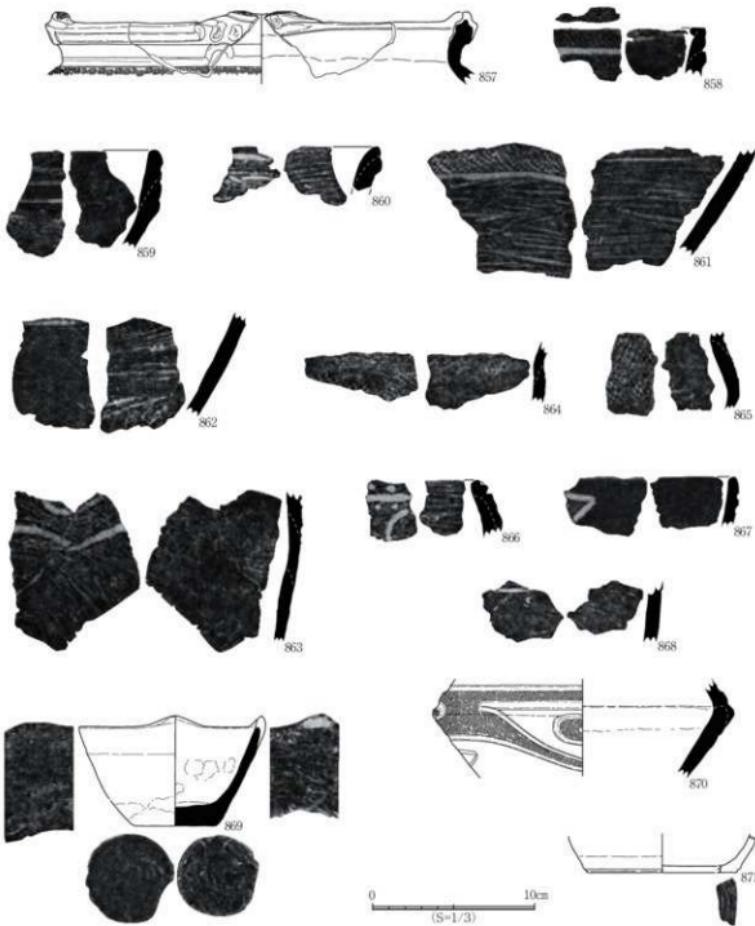


Fig.113 第4次調査 G.D.0出土遺物 (857~871)

G. D 1 (Fig.114)

混貝土層が所在するグリッドである。出土した遺物を11点図示した。872から880が土器、881と882が石器であり、全て縄文時代のものである。872から874は深鉢の口縁部であり、口縁部を厚く作出している。872は波状口縁であって、口唇部を強く面取る他、口縁部外面にRLを施した後に一条の沈線を施す。873と874は口唇部を強く面取り、外面にRLを施す。873の口縁は波状である。875から877は深鉢の口縁部であり、無文のものである。878から880は浅鉢である。878は口縁部で、RLを施した後、外面に主文様と従文様で構成される文様を有する。主文様の中心は不明であるが、それを複数の弧状沈線で囲んでおり、従文様は一条の沈線である。体部はRLを施した後に沈線で区画して磨消縄文をしている。879は体部であって、算盤玉状を呈する。その上半にはRLを施す。880は底部である。体部が大きく開く器形のもので、高台を削り出している。881と882は削器であり、881は貝混土層から出土している。いずれも、石材はホルンフェルスである。

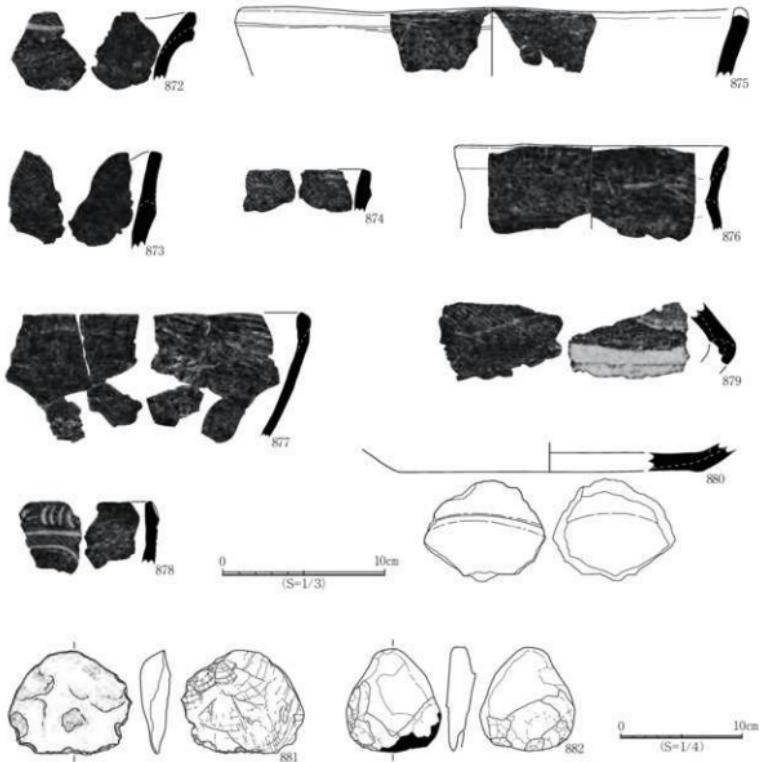


Fig.114 第4次調査 G.D 1 出土遺物 (872～882)

G.D 2 (Fig.115)

混貝土層が所在するグリッドである。出土した遺物を9点図示した。全て土器で、縄文時代のものである。883から886は口縁部であり、外面に文様を有する。883はLRを施した後、一条の沈線を施す。平縁であり、口唇部を強く面取る。884は波状口縁であり、沈線で長楕円文を描く。885はLRを施した後に三条の平行する沈線を施す。886は、外反する頸部から屈曲して口縁部が立ち上がる。RLを施した後に幅広の沈線を一条施す。887は胴部であり、RLを施した後に幅広の沈線文を施す。888は縄文のみ施す土器と考えられ、面取りした口唇部と口縁部外端にRLを施す。889は砲弾形を呈する深鉢の口縁部で、無文であると考えられる。口唇部は強く外反しており、端部に刻みを施す。890は深鉢の底部である。貼付高台であって、接地部分を面取る。891は浅鉢であり、皿形である。口縁部外端から筋の細かいRLを施した後、沈線で区画して磨消縄文としている。赤彩された土器である。



Fig.115 第4次調査 G.D 2 出土遺物 (883 ~ 891)

G.D 3 (Fig.116)

混貝土層が所在するグリッドである。出土した遺物を4点図示した。

892は浅鉢の口縁部であり、口唇部を強く面取る。外面にRLを施しており、その下に浅い沈線を巡らせてている。赤彩されていた土器である。893は削器であり、石材はホルンフェルスである。

894は磨石であり、光沢が出るほど磨かれている。両端に敲打痕を有しており、杵のような使い方もされたと考えられる。石材は砂岩である。

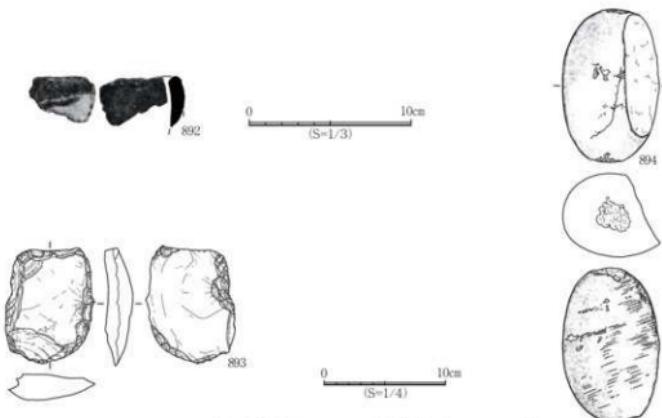


Fig.116 第4次調査 G.D 3 出土遺物 (892 ~ 894)

G.D 4 (Fig.117)

第3号土坑墓と配石遺構そして貯藏穴が所在するグリッドである。

出土した遺物を10点図示した。全て縄文土器の深鉢である。895と896は平縁の口縁部で、外面に文様を有する。口縁部をやや厚く作出しており、口唇部を強く面取る。895は主文様と従文様で構成されており、主文様は沈線で描いた二条の弧状文を向き合わせたものである。従文様は一条の沈線で、端部は口唇部に向けてせり上がる。896は、節の太いRLを施した後、幅広の平行する沈線を二条施す。

897と898は頭部で、外面に文様を有しており、主文様と従文様で構成される。897は、RLを施した後、幅広の沈線文を施す。主文様は渦文と考えられ、その脇に窓格様の沈線文を配して従文様としていた可能性がある。898はRLを施した後、沈線で区画して磨消縄文をしている。主文様は縦位の長楕円文であり、その脇に窓格様の沈線文を配して従文様としていた可能性がある。

899から901は縄文のみ施す土器であり、899と900は平縁の口縁部、901は胴部である。

899は面取りした口縁部外端と内面にRLを施す。900は口唇部を強く面取り、外面にRLを施す。

901は外面にRLを施す。

902から904は無文土器であり、902は平縁に突起を有する。903は口縁部を厚く作出し、口唇部及び口縁部外端を面取り、玉縁状に收めている。904は砲弾形の器形であり、口縁部内端を強く面取る。

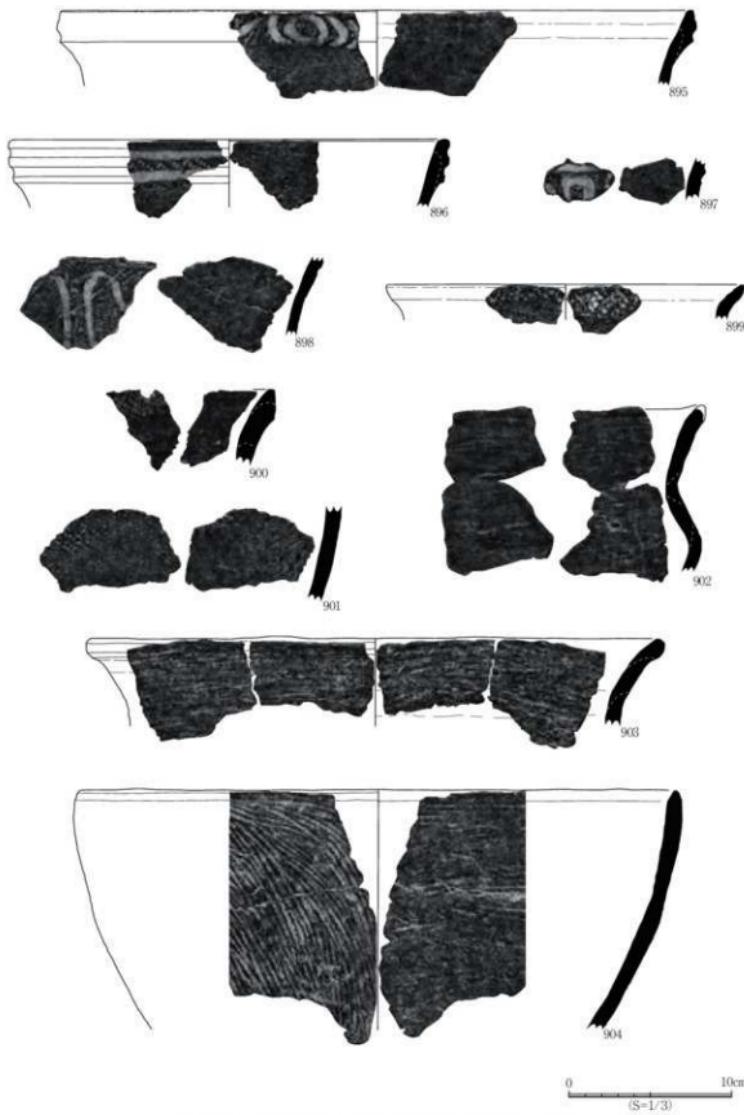


Fig.117 第4次調査 G.D.4出土遺物 (895~904)

G. D 5 (Fig.118)

出土した遺物を13点図示した。905から913が縄文土器、914から916が弥生土器、917が石錘である。

905から912は深鉢である。905は緩い波状口縁であって、口唇部を強く面取り、口縁部外面にRLを施した後、主文様と従文様で構成される文様を有する。主文様は2種あり、波頂部下の主文様は円形刺突を馬蹄形状の沈線で囲んだものである。それを沈線で描いた二条の弧状文で囲う。平縁の主文様は馬蹄形状の沈線で囲んだ円形刺突であるが、それを沈線で描いた一条の弧状文で囲う。従文様はそれらの間に施された一条の沈線であって、端部を口唇部にせり上げて、丸めて収めている。これらの主文様の下の頸部には継位の沈線文を三条施し、それらの間にかすがい状の一条の沈線文を施している。胴部文様も、口縁部の主文様そして頸部文様と軸を同じくしており、RLを施した後に、沈線で半紡錘状文を描いている。

906は厚く作出した口縁部外面に浅いが幅広の平行する沈線を二条描いており、その下端に沈線を施していることから、頸部文様を有していた可能性が考えられる。

907から909は深鉢の胴部である。いずれもRLを施した後に沈線文を施しており、意匠は半紡錘状であると考えられる。

910と911は砲弾形の器形になると考えられ、いずれも口縁部外面に主文様と従文様で構成される文様を有する。910の主文様は、RLを施した後の中空の原体による円形刺突とそれを囲う二条の沈線で描いた弧状文であり、従文様は一条の沈線である。911は、口縁部をやや厚く作出し、口唇部を強く面取る。主文様はRLを施した後の中空の原体による円形刺突とそれを囲う一条の沈線で描いた弧状文である。従文様は、端部を口唇部に向けて折り曲げる一条の沈線である。胴部にはRLを施した後に、口縁部との境に一条の沈線を巡らせている。912は口唇部を強く面取る。口縁部外面に文様を有する可能性があるが、石灰華を含む土壤の付着により不明である。

913は浅鉢の底部であり、削り出して高台を作出している。

914と915は壺であり、914は口縁部、915は頭胴部である。914は大きく外反する頭部の端に粘土紐を貼付し、肥厚させて口縁部を作出している。口唇部を強く面取り、外端をヘラで刻む。

915は頭部に波状の櫛描文と鋸歯状の沈線文を描き、胴部には大ぶりな波状の櫛描文を描く。

916は壺であり、口唇部を強く面取りしたことにより、外側に粘土が突出している。外面には粘土紐を添付して鱗状の隆帯を作出しており、その縁をヘラで刻む。

917は端部を打ち欠いており、下端の打ち欠きに比べて上端の打ち欠きは小さい。これは、櫛の自然の凹みを利用したことによると考えられる。尚、上端には紐ズレが生じており、緩く湾曲する平滑面が確認できる。石材は砂岩である。

これらの他、花崗岩の礫が出土している(PL58)。元々は磨石や敲石のように丸い円礫であったと考えられるが、著しく被熱しており、赤変しているだけでなく、非常に脆い状態となっている。

このことについては、土器の粘土に混和剤として混ぜるための砂礫を獲得するための行為とする見解がある(木村 1982)。

文献 木村剛朗 1982 「第5章 出土遺物」『平城貝塚 愛媛県南宇和郡御荘町平城貝塚 第Ⅳ次発掘調査報告書』御荘町教育委員会 54頁

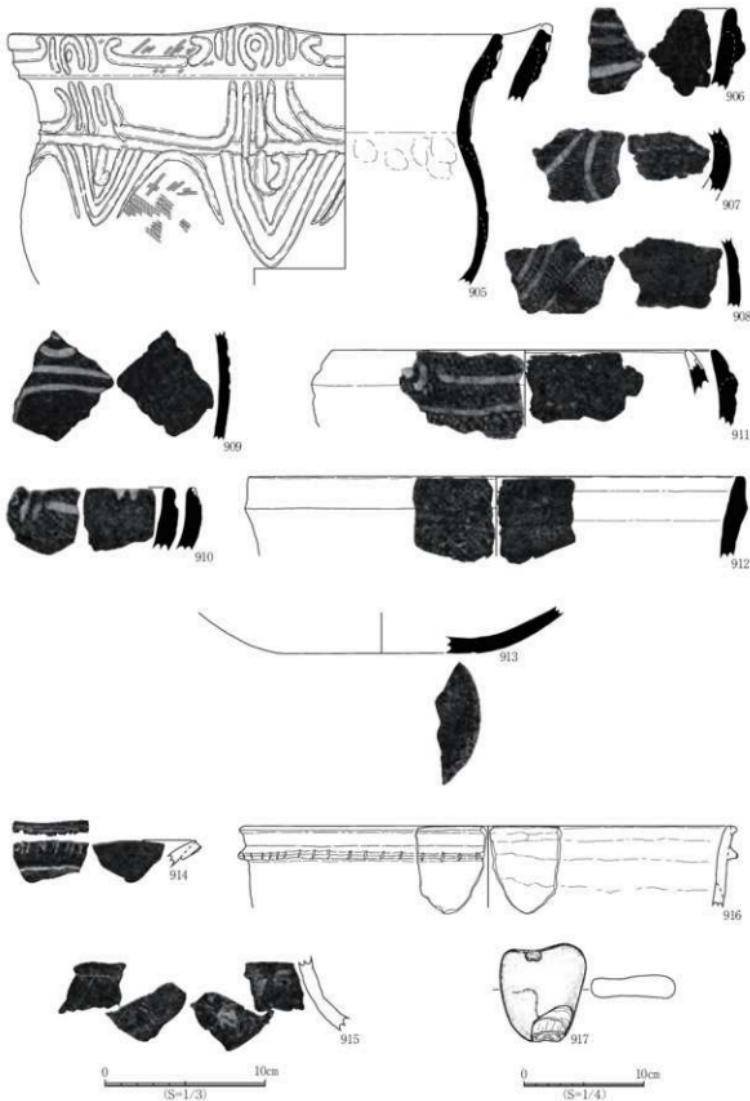


Fig.118 第4次調査 G.D. 5 出土遺物 (905 ~ 917)

G.D 8 (Fig.119)

出土した遺物を2点図示した。いずれも縄文土器の深鉢であり、後期のものである。918は波状口縁であり、口縁部外面に文様を有する。RLを施した後に、その上下を比較的幅の狭い沈線で区画し、波頂部下に2つの凹点を施す。

919は頭部から口縁部が強く屈曲して立ち上がるるものであり、口唇部に突起を有する。外面にLRを施した後に、突起下に沈線で蛇行文を描く他、平縁の外面にも沈線を施しており、沈線端部または屈曲部には刺突を施すと考えられる。

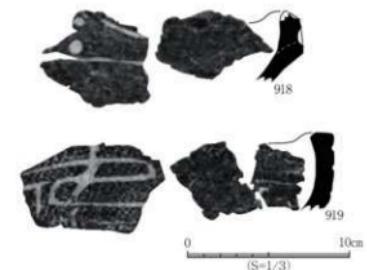


Fig.119 第4次調査 G.D 8 出土遺物 (918・919)

G.E 4 (Fig.120・121)

混土貝層と配石造構が所在するグリッドである。出土した遺物を20点図示した。920から936は土器、937は土器片転用品、938と939は石器である。

920は深鉢の胴部であり、器面調整として二枚貝条痕が認められる。外面には粘土帯を貼付して隆帯を作出しており、その上に小さな二枚貝で圧痕様の押圧を施している。草創期の隆帯文の一種として理解できる。921は深鉢の口縁部であり、内面の器面調整として二枚貝条痕が認められる。外面には粘土紐を縦横に貼付して隆帯を作出している。外面全面を隆帯ごと、幅の広い櫛状の原体で撫でている可能性が高く、口縁部外端もそれと対になる間隔で刻んでいる。922と923は深鉢の口縁部で、波状口縁である。いずれも外面に、主文様と従文様で構成される文様を有する。922はやや厚く作出している。口唇部を緩く面取り、外面全面に巻貝の回転擬縄文を施す。主文様は、波頂部下に一条の沈線で描いた馬蹄形状文とその中央に施された円形刺突であり、従文様は二条の平行する沈線である。ただし、下の沈線は馬蹄形状文と繋がっている。923も厚く作出している。主文様は、波頂部下に一条の沈線で描いた渦文であり、従文様は沈線で描いた窓枠状文である。

924は小形の土器になると考えられ、口縁部をやや厚く作出して玉縁状に成形している。口縁部外端直下に一条の沈線を巡らせる。925と926は外反する口縁部であり、925は面取りした口唇部に刻みを、926は口縁部外端に大ぶりな刻みをそれぞれ施す。927は小形の土器であり、緩く面取りした口唇部にLRを施す。928は小形の土器の口縁部であり、精選された粘土を使用し、精緻な作りである。口唇部を緩く面取りし、口縁部外面直下に巻貝の回転擬縄文を施す。赤彩された土器である。

929から932は深鉢の口縁部であり、無文土器のものと考えられる。929は波状口縁であり、波頂部を厚く作出している。930は胴上部で最大径となり、そこから屈曲して短い頭部が口縁部まで立ち上がる。931は小形の土器であると考えられ、口縁部を厚く作出している。932は口縁部が大きく開く器形であり、口唇部を緩く面取る。933と934は深鉢の胴部である。933は縄文を施した後に沈線で区画して磨消縄文としている。擬縄文の可能性がある。934は屈曲部に右に斜行する細い沈線を施す。935と936は深鉢の底部であって、いずれも貼付高台である。936は接地部分を面取る。937は土器片を転用した円盤であって、破片の縁を面取る。

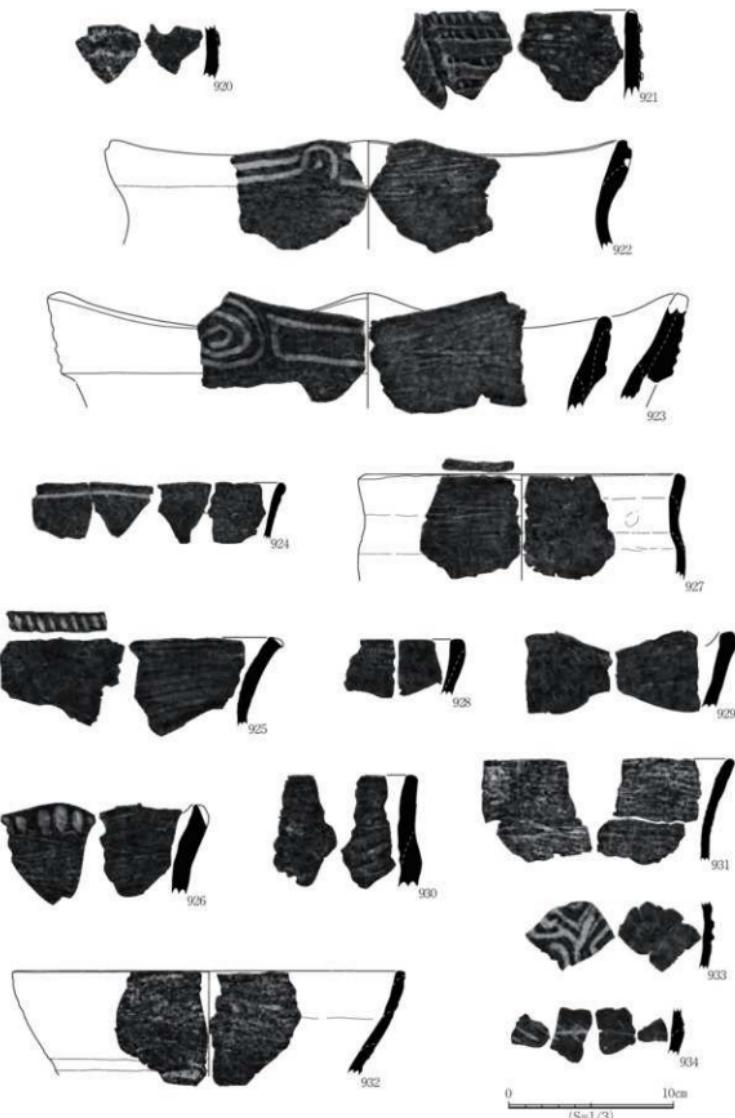


Fig.120 第4次調査 G.E. 4 出土遺物 (920 ~ 934)

938と939は石錐である。938は長軸の上下端を打ち欠いており、石材は砂岩である。939は下半を欠損しているが、上端を打ち欠いている。石材はホルンフェルスである。

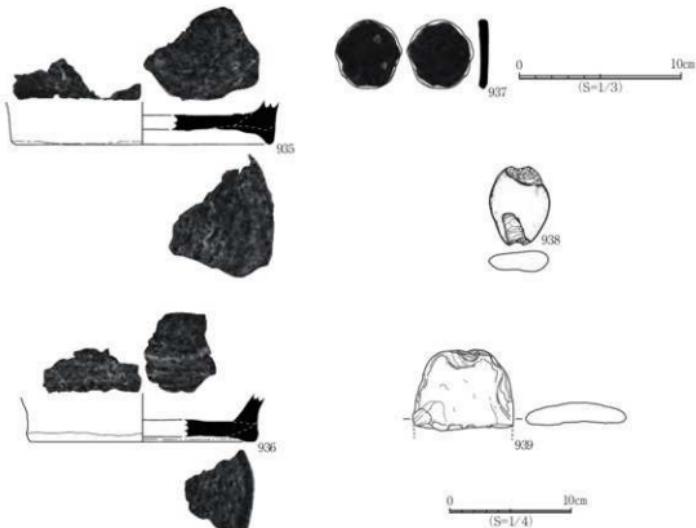


Fig.121 第4次調査 G.E. 4出土遺物 (935 ~ 939)

一括 (Fig.122~128)

出土経緯が不明なものを、一括資料として92点図示した。

940から960は深鉢の口縁部であり、外面に文様を有する。940は突起を有し、そこにLRを施した後、2つの「U」字状の沈線を噛み合う様に絡ませて「S」字状文としている。沈線が絡み合う所の外面に、刺突を2つ施す。941から951は、主文様と従文様で構成される文様を有する。941は波状口縁であり、RLを施した後に波頂部下に円形刺突を施し、それを二重の楕円文を沈線で描いて囲んで主文様としている。従文様は平行する二条の沈線と考えられる。頸部にも文様を有するが、波頂部そして主文様と軸を同じくする。942は平縁であり、口唇部を面取る。RLを施した後、中空の原体で円形刺突を施し、それを沈線で描いた弧状文で囲んで主文様とする。従文様は平行する一条の沈線と考えられる。頸部には、両脇を継位の一条の沈線で区画した楕円様文を施していたと考えられ、主文様と軸を同じくする。943は緩い波状口縁である。口唇部を面取り、波頂部のみ刻む。節の細かいLRを施した後、波頂部下に一条の沈線で描いた馬蹄形状文とその中央に中空の原体で施された円形刺突そしてそれを沈線で描いた弧状文で囲んで主文様とする。従文様は、端部が口唇部へとせり上がる一条の沈線と考えられる。頸部にもLRを施した後に沈線文を施しており、主文様と軸を同じくする。944は緩い波状口縁であって、口唇部を面取る。RLを施した後に幅広の沈線で弧状文を描いて主文様の中心を囲んだと考えられ、従文様は端部を口唇部に向けて曲げて収めた一条



Fig.122 第4次調査 一括出土遺物 (940 ~ 962)

の沈線である。945は波状口縁であり、口唇部を面取る。節の太いRLを施した後、複数条の沈線で弧状文を描いて主文様の中心を囲んだと考えられ、従文様は一条の沈線の可能性がある。946は綫い波状口縁であり、口唇部を緩く面取る。RLを施した後、二条の沈線で弧状文を描いて主文様の中心を囲んだと考えられる。従文様は一条の沈線であって、上の沈線は端部を口唇部に向かって曲げて收めている。947は平縁であり、口唇部を強く面取る。RLを施した後、複数条の短い沈線で弧状文を描いて主文様の中心を囲んだと考えられ、従文様は一条の沈線である。948は平縁であり、口唇部と内面を強く面取る。LRを施した後、中空の原体で円形刺突を施し、それを右に斜行する沈線で囲んだものを主文様とする。従文様は沈線と考えられる。949は平縁であり、口唇部内端を面取る。LRを施した後、斜行する沈線を主文様の中心の脇に施したと考えられ、従文様は一条の沈線である。950は平縁で、口唇部を強く面取る。脇に継位ないしは斜行する沈線文を配する主文様であると考えられ、従文様は一条の沈線である。951は平縁で、沈線で渦文を描く。952から957は口縁部外面に沈線を施しており、従文様として考えられる。952は平縁であって、口唇部を緩く面取る。RLを施した後、幅広の平行する沈線を二条施す。953は平縁であり、口唇部を強く面取る。RLを施した後、平行する沈線を二条施すが、上のものは口唇部に向いてせり上がりしているため、主文様を有すると考えられる。954は波状口縁であり、口唇部を強く面取る。RLを施した後、平行する沈線を二条施すが、下のものは頭部に向いて下がっているため、主文様を有すると考えられる。

955は小形の土器であり、RLを施した後、沈線を一条施す。赤彩されていた土器である。956は平縁であり、口唇部を強く面取る。RLを施した後、沈線を一条施す。957は平縁であり、口唇部を面取る。沈線を二条施しており、上のものは口唇部に向いてせり上がりしているため、二条の沈線の中の一条の沈線は、主文様である可能性が考えられる。

958から960は口縁部外面に文様を有し、口唇部に縄文を施す。958は波状口縁であり、面取りした口唇部と外面にRLを施す。中心を開う弧状文が施されていることから主文様を有しており、従文様は一条の沈線である。959は平縁であって、強く面取りした口唇部と外面そして内面にRLを施し、内外面に一条の沈線を巡らす。960は平縁であって、強く面取りした口唇部と外面そして内面にRLを施す。中心を開う弧状文が施されていることから主文様を有しており、従文様は端部が口唇部へせり上がる一条の沈線である。頭部上端には沈線を一条巡らせており、頭部に大ぶりな弧状文を施していたと考えられる。内面にも沈線を施すが、上の方は不明瞭であり、段になっている。

961と962は頭胴部であり、961は胴部にRLを施した後に沈線で渦文を描いて区画し、磨消縄文としている。962はRLを施した後に沈線文を描いており、波状の意匠が考えられる。

963から966は鉢と注口付土器であり、文様を有する。963と964は同一個体であり、ボウル形である。平底であって、口唇部外端を強く面取る。口縁直下に焼成前穿孔を有しており、少なくとももう1つ有すると考えられる。RLを施した後に沈線で区画して磨消縄文としており、意匠は波頭状文の系譜にあると考えられる。縄文帶に赤色顔料が良好に残る。965は鉢であり、口縁部をやや厚く作出し、口唇部を強く面取る。口縁部外面にRLを施した後に、主文様と従文様で構成される文様を有する。主文様の中心は不明であるが、それを弧状沈線で囲ったと考えられ、従文様は一条の沈線である。体部は、RLを施した後に沈線で区画して磨消縄文としており、二条の沈線の端部を丸めて巴様に絡ませた意匠が考えられる。文様と胎土から、878と同一個体の可能性がある。966は注口付土器の胴上部であり、RLを施した後に沈線で区画して磨消縄文としている。

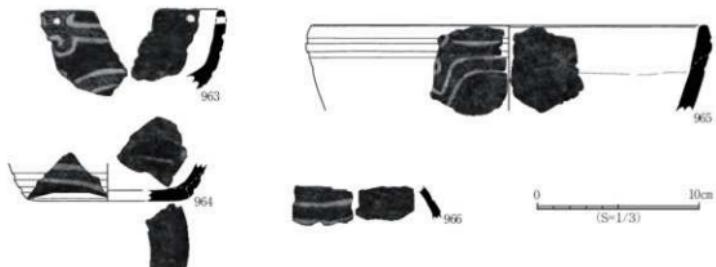


Fig.123 第4次調査 一括出土遺物 (963～966)

967から982は主として縄文のみを施す土器である。

967から977は深鉢の口縁部、978から980は深鉢の頸胴部、981と982は鉢の口縁部である。

967と968は平縁であって、口唇部を強く面取り、外面にLRを施す。969から974は口縁部を厚く作出する。969と970はLR、971から974はRLであって、971は内面に凹線状の凹みを有しており、974は波状口縁である。975はやや小形の土器であり、強く面取った口唇部と胴部に節の細いLRを施す。976と977は内面に沈線を施す。976は口縁部を厚く作出しており、その外面にLRを施し、頸部上端に沈線を一条、そして内面に二条それぞれ巡らす。977は口縁部外面にRLを施す他、内面に巡らせた一条の沈線の下にも施す。978はLR、979はRL、980は卷貝の回転擬縄文である。

981と982は小形の土器であり、982は鉢の可能性が考えられる。981は口縁部の内外面に節の細いLRを施す。982は内湾する口縁部であり、口唇部を強く面取る。内外面に節の太いLRをそれぞれ施す。

983から996は無文の土器である。983から990は口縁部、991から996は頸胴部である。

983と984は、面取りした口唇部に右に斜行する刻みを施す。983は小形の土器である。984は口縁部下に指頭圧痕が明瞭に残り、成形によるものである。985と986は口唇部を面取り、短い頸部を有する。985の面取りは強く、口縁部外面を強く撫でたため、その下端に稜線が生じている。986は精選された粘土を使用しており、壺形であった可能性がある。

987から990は、口縁部が開く砲弾形のものである。987は口縁端部を弱く屈曲させており、口唇部を強く面取る。内面には凹線状の凹みがあり、口縁端部の弱い屈曲はこの影響を受けた可能性がある。988は口唇部を強く面取り、精選された粘土を使用している。989は口唇部を強く面取りしており、口縁部外面を強く撫でている。990は口縁部をやや厚く作出しており、玉縁状に成形している。

991から993は頸胴部であり、その境で屈曲する。991と992の屈曲は内面に稜線として現れている。993の外面は、胴部に卷貝条痕を明瞭に残すが、頭部は撫でている。

994から996は胴部である。994は壺形になると考えられ、体部外面に櫛状の擦痕を有する。

995は外面の卷貝条痕が顕著である。996は底部に近い胴部であって、鋭角に胴部が立ち上がる。

997から1005は、外反または外傾する頭部から屈曲して口縁部が立ち上がる深鉢である。997から1005は口縁部、1006は胴部である。

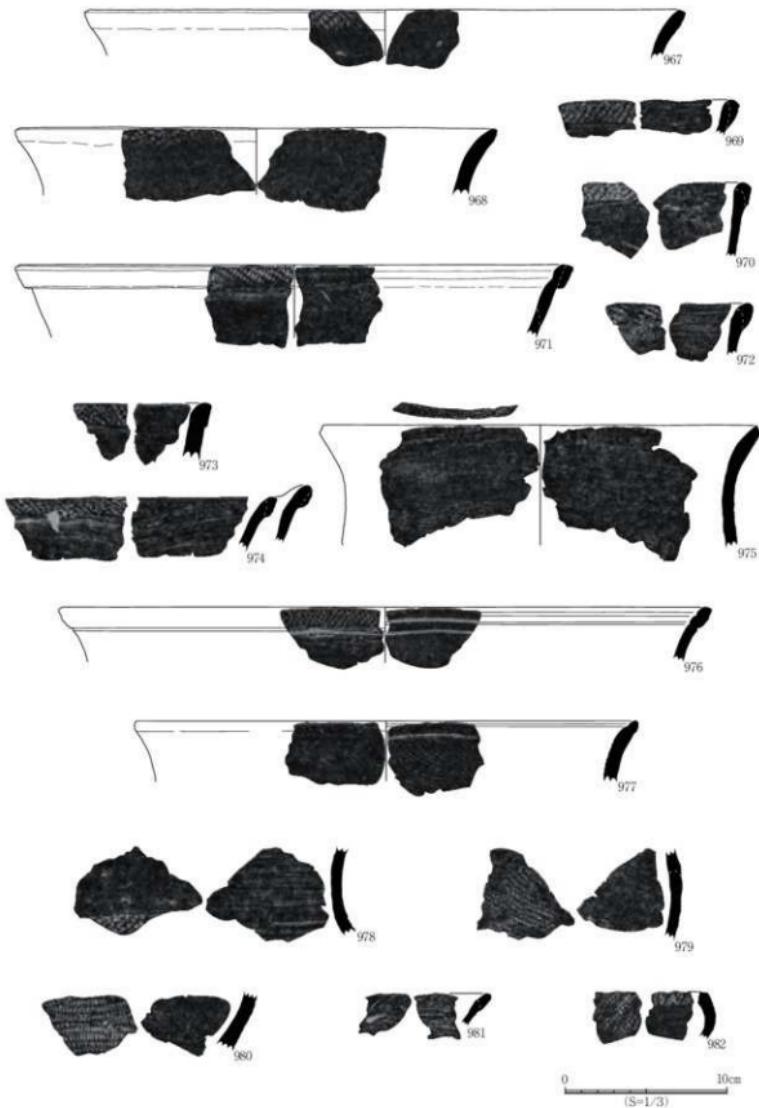


Fig.124 第4次調査 一括出土遺物 (967 ~ 982)



Fig.125 第4次調査 一括出土遺物 (983 ~ 996)

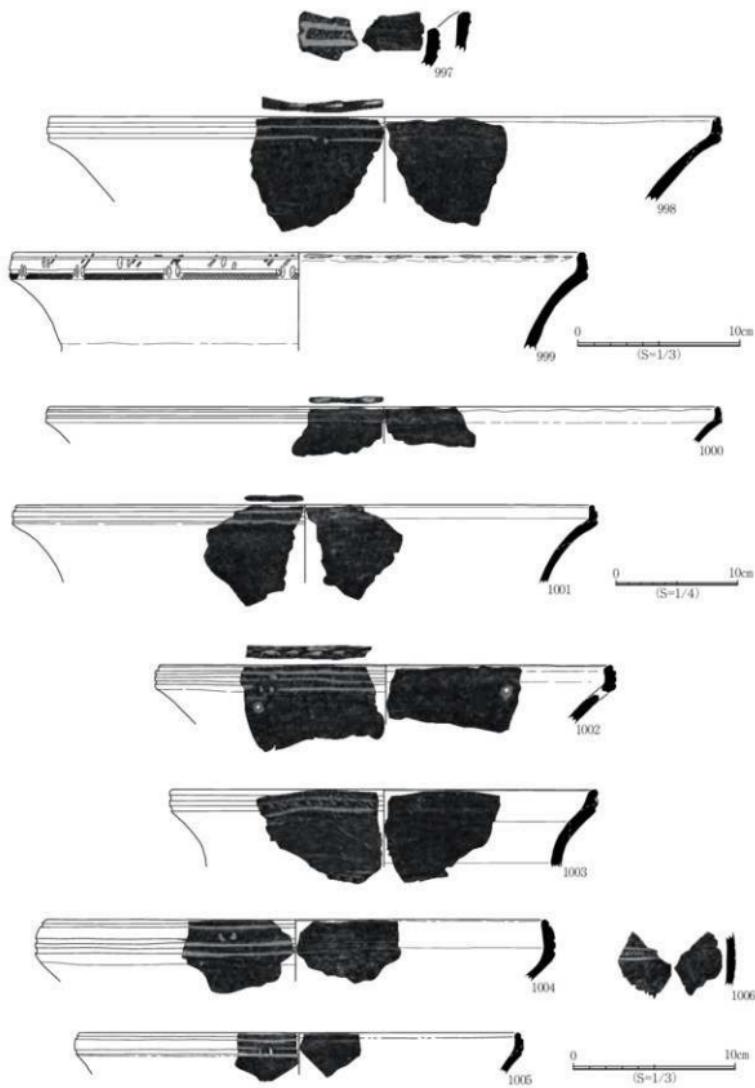


Fig.126 第4次調査 一括出土遺物 (997~1006)

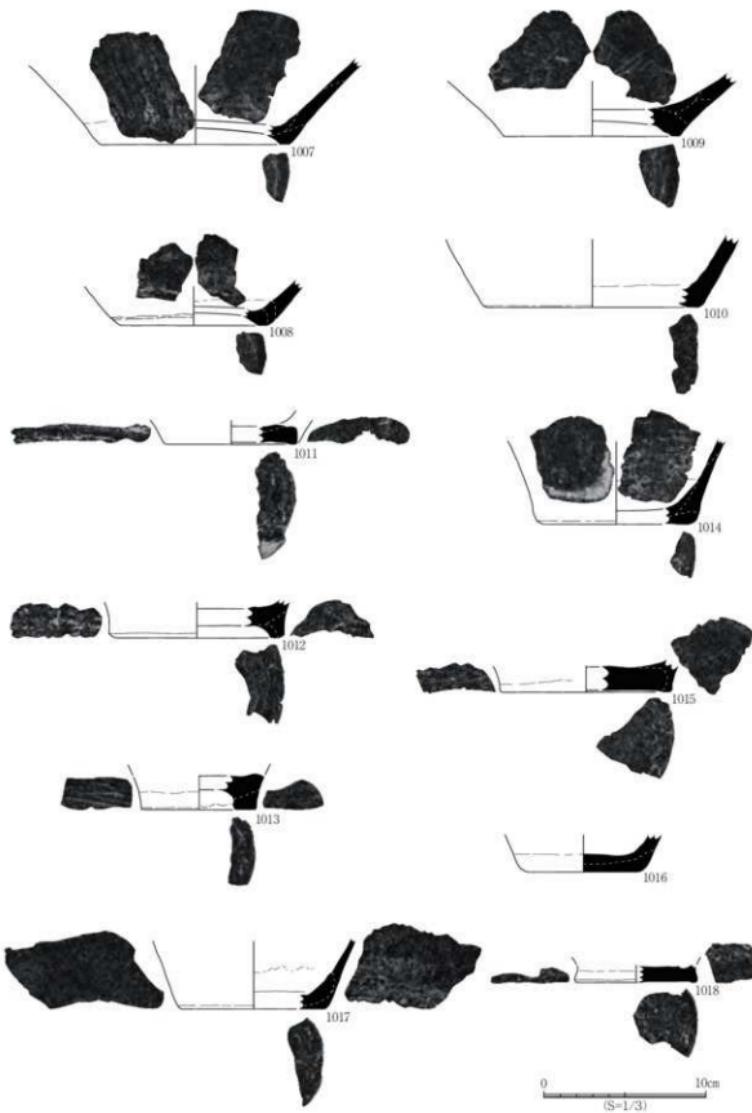


Fig.127 第4次調査 一括出土遺物 (1007 ~ 1018)

997は波状口縁であり、特に平縁の口唇部を強く面取る。外面にはLRを施した後、やや幅広の沈線で文様を施す。

998から1002は、屈曲して直立する口縁部が立ち上がり、口唇部に刺突、外面に沈線と刺突を施す。

998は、強く面取りした口唇部にLRを施した後、彗星様に尾を引く刺突を施す。外面にはLRを施した後に二条の沈線を巡らすが、下の沈線は途切れ途切れであり、端部に刺突を施す。999は、口唇部を丸く成形し、その内端にヘラ状の原体で尾を引く様な刺突を施す。外面にはLRを施した後、二条の沈線を巡らす。下の沈線は、端部に刺突を施す途切れ途切れのものである。また、沈線間の繩文帯に刺突を施すが、2つで一単位となると考えられる。1000は、緩く面取りした口唇部にLRを施した後、沈線状の刺突を施す。外面にはLRを施した後に二条の沈線を巡らすが、下の沈線は途切れ途切れのもので、端部に刺突を施す。1001は、緩く面取りした口唇部にLRを施し、その下に彗星様に尾を引く浅い刺突を施す。外面にはLRを施した後に二条の沈線を巡らす。1002は、強く面取りした口唇部にLRを施した後、その下端に彗星様に尾を引く刺突を施す。外面にはLRを施した後に三条の沈線を施しており、下端の沈線のみが途切れ途切れのもので端部に刺突を施す。補修孔を有する。1003は、屈曲して外傾する口縁部が立ち上がる。外面に二条の沈線とその間に刺突を施す他、頸部下端にも刺突を施す。

1004と1005は、屈曲して内湾する口縁部が立ち上がる。1004は、外面にLRを施した後に三条の沈線を巡らす。上の繩文帯は幅広く、そこに逆「ハ」字状に刺突を施す。1005は、外面にRLを施した後に三条の沈線を巡らし、下の繩文帯に2つで対になる刺突を施したことにより、下二条の沈線が寸断されている。精選された粘土を使用しており、丁寧な作りである。

1006は、外面にRLを施した後、幅の狭い沈線を二条施しており、その間に中空の原体による円形刺突を施す。

1007から1018は、深鉢の底部である。1007から1011は凹み底、1012と1013は貼付高台、1014から1018は平底である。1007から1010は接地部分を丁寧に面取る。1011は底部の基礎となる円盤で、明瞭な接合痕が認められる。1012と1013は接地部分を丁寧に面取る。1012は華奢な作りであるが、底部内周に見られる粘土の接合は補強を目的としたものと考えられる。1013は断面が台形であり、極めて堅牢な作りである。1014は円盤を基礎にして粘土紐を積み重ね、成形している。1015の円盤は比較的厚く、底部内周はやや凹むが歪みの範疇に収まるものである。1016は円盤を基礎にして粘土を積み重ねて成形しているが、二枚重ねの構造である。1017は椀状の粘土塊を基礎にし、その周りに粘土を積み重ねて成形している。1018は円盤を基礎にして粘土紐を積み重ねて成形しているが、底部外周を強く撫でており、底部がやや外傾する。

1019から1028は浅鉢であって、全て無文である。1019から1022は皿形のものであり、1019は内に弱く反り返っており、口唇部を強く面取る。口縁部直下に焼成前穿孔を有する。1020と1021は口唇部を強く面取る。1022は口唇部をやや鋭角に作出している。1023は口唇部を強く面取る。精選された粘土を使用し、丁寧に磨いている。口縁部内面に凹線状の凹みを有する。1024はボウル形で、やや粗雑な作りである。

1025と1026は壺形になると考えられ、1025は内面の接合痕が明瞭に残り、体部外面の上端に沈線を巡らす。1026は頭部を丁寧に撫でたことにより、体部との境に稜線が生じている。1027は体部が強く屈曲しており、算盤玉状になると考えられる。屈曲部上に沈線を施しており、文様を有する可能性がある。1028は口縁部がやや強く屈曲する椀になると考えられ、やや粗野な作りである。

1029から1031は浅鉢ないしは注口付土器の底部である。いずれも凹み底であるが、1029と1030は削り出したもの、1031は底部外面から押圧して凹ませたものである。

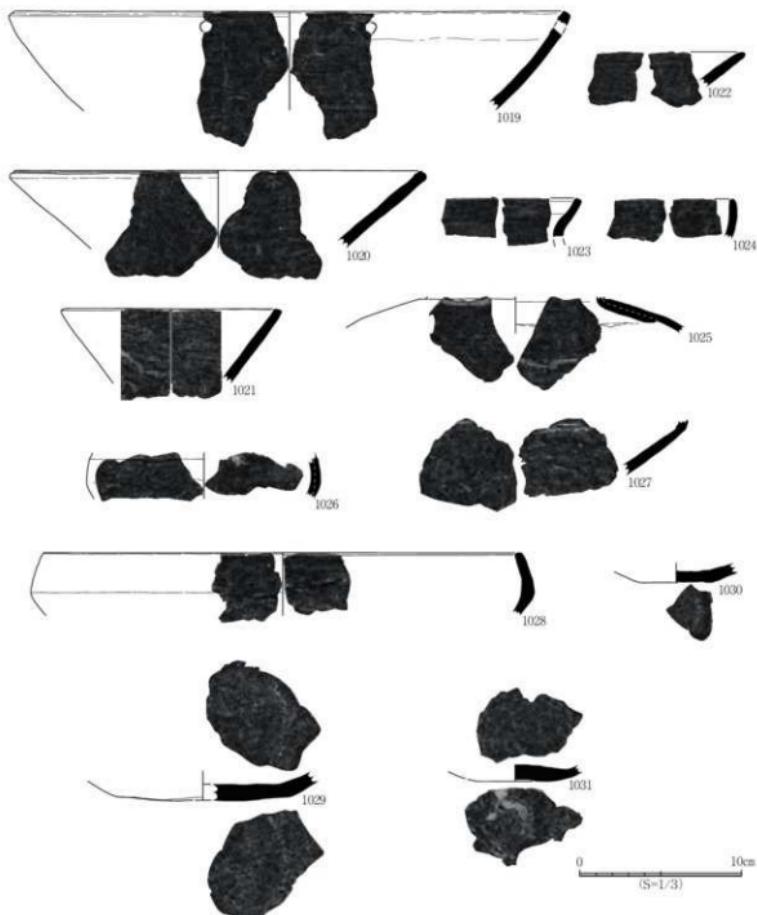


Fig.128 第4次調査 一括出土遺物 (1019 ~ 1031)

表面採集 (Fig.129)

1032から1042は表面採集されたものである。1032と1033は縄文土器、1034と1035は弥生土器、1036から1040は土師質土器、1041と1042は瓦器である。

1032は深鉢の口縁部であり、屈曲を有する。その上下に「C」字状の細かな刺突を施している。

1033は深鉢の口縁部で、波状口縁である。外面にRLを施した後に二条の沈線を巡らしており、從文様である可能性が高い。

1034は壺の口縁部であり、外端を面取る。1035は壺の口縁部で、端部を折り返して厚く作出しており、口唇部を強く面取る。

1036から1039は杯の底部であって、いずれも回転糸切り痕を有する。中世のものである。1036と1037は内面に、器を回しながら指で撫で付けた痕跡が明瞭に残る。

1040は椀の底部であり、静止糸切り痕を有する。近世のものと考えられる。

1041と1042は貼付高台であり、いずれも断面が三角形のものである。1041は二次被熱を受けており、赤変している。1042は焼成不良である。

1043から1045は石器である。4次調査の遺物と共に収納されていたものであるが、確実な根拠は無い。いずれも刃部を有し、削器として考えられる。石材は、1043はホルンフェルス、1044と1045は砂岩である。

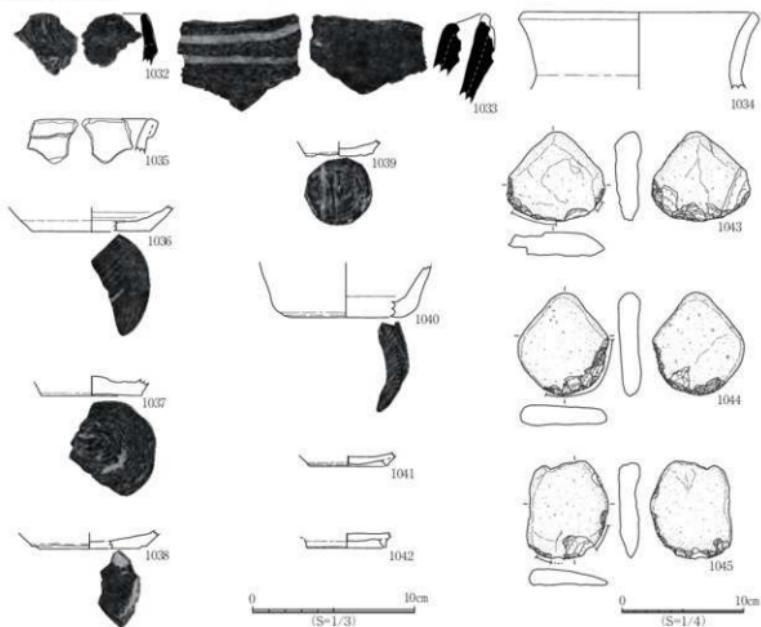


Fig.129 第4次調査 表面採集等遺物 (1032 ~ 1045)

11. 昭和62年11月25日資料(Fig.130~135)

所 在 地 御荘平城2075番地1

調査面積 約30.5m²(調査対象面積150.95m²)

調査原因 民間開発(個人住宅の建築)

調査日 昭和62年11月25日

調査主体 御荘町教育委員会

調査担当 御荘町教育委員会職員

記録類 木村剛朗 1995 「22平城貝塚」『四国西南沿海部の先史文化 旧石器・縄文時代』

幡多埋文研 440頁

個人住宅の建築に先立つ試掘確認調査で得られた資料である。試掘坑を3箇所設定しており、大まかな土壤堆積図が作成されている。それによると、表土から順に、混貝土層そして茶褐色粘質土が堆積していたことが確認できる。また、最も道路に近く、東西を主軸にした試掘坑における表土の厚さは東で5cm、西で10cmである。混貝土層は東で5cm、西で15cmである。土壤堆積図も東から西へ傾斜しており、現地の地形と調和する。

この南には、南北を主軸にした試掘坑が2箇所あり、東側の試掘坑における表土の厚さは北で5cm、南で20cmである。混貝土層は、北で5cm、南で20cmである。西側の試掘坑における表土の厚さは北で10cm、南で20cmである。混貝土層は北で15cm、南で25cmである。いずれの土壤堆積図も北から南へ傾斜しており、現在の地形と調和する。

混貝土層には、貝の比率が多い地点が確認できる。このため、地点貝塚の可能性を考慮する必要があるものの、将来的には土壤分析等を実施し、この土壤の形成について解き明かす必要がある。

出土遺物は土器が主であるが、獸骨と貝も多量に出土している。鹿角製の髪飾り(PL.103)については、その文化財としての価値は極めて高いと思われるものの、所在は不明である。

出土遺物は62点図示した。1046から1105が土器、1106が石器、1107が骨角器である。尚、出土した試掘坑や層位を示す記録は無く、出土物を一括して報告することを了承されたい。

1046は深鉢の口縁部であり、平縁である。口縁部外面にRLを施す。頭部の中央付近からRLを施して沈線で区画し、磨消繩文としている。赤彩された土器であったと考えられる。

1047は深鉢の胴部である。寸詰まりの器形であったと考えられ、外面にRLを施した後、多重の沈線で弧状文を描き、主文様を圍ったと考えられる。赤彩された土器である。

1048から1069は深鉢の口縁部であって、外反または外傾する頭部から屈曲して口縁部が立ち上がる。いずれも口縁部外面に文様を有する。

1048から1051は突起であり、いずれも平縁に粘土を貼付して成形したものである。

1048は、平縁に粘土紐を蛇行様に折り込んで端部を丸めたものを貼付している。外面には節の細かいLRを施した後、沈線を三条巡らすが、下の沈線は山形状文である。口縁部内面に凹線状の凹みを有する。

1049は、平縁に大豆大に丸めた粘土塊を4つ貼付し、その周囲を撹でつけて成形している。外面にはRLを施した後、沈線を三条巡らすが、下の沈線は山形状文である。口縁部内面に凹線状の凹みを巡らす。

1050は、平縁に不定形の粘土塊を3つ貼付し、その周囲を撫でつけて成形している。外面にはLRを施した後、沈線を三条巡らすが、下の沈線は緩やかな波状文と考えられる。口縁部内面に凹線状の凹みを巡らす。

1051は、平縁に大ぶりの粘土塊を1つ貼付し、その周囲を撫でつけて成形している。上面に右に斜行する刺突を施す。外面にはLRを施した後、沈線を三条巡らすが、下の沈線は緩やかな波状文である。口縁部内面に凹線状の凹みを巡らす。

1052は、平縁に大ぶりの粘土塊を1つ貼付し、その周囲を撫でつけて成形している。上面に左に斜行する刺突を施す。外面にLRを施した後、二条の沈線を巡らしており、その間には端部を刺突して横長に「Z」状となる沈線文を複数施す。頸部は無文であり、胴部はLRを施した後に、沈線文を施す。口縁部内面に凹線状の凹みを巡らす。

1053から1057は、内湾する口縁部が立ち上がる。平縁であり、口縁部外面と面取りした口唇部に文様を有する。1053は、外面にLRを施した後、三条の沈線を巡らしており、中央の沈線は緩やかな波状文である。口唇部の面取りは強く、LRを施した後にレンズ状の刺突を施す。口縁部内面に凹線状の凹みを巡らす。

1054は、外面にLRを施した後に三条の沈線を巡らしており、下の沈線は波状文である。口唇部の面取りは幅広く強いもので、LRを施した後に彗星様に尾を引く刺突を施す。口縁部内面に凹線状の凹みを巡らす。

1055は、外面にLRを施した後に三条の沈線を巡らしており、下の沈線は間延びした山形状文である。口唇部の面取りは緩く、LRを施した後に彗星様に尾を引く深い刺突を施す。口縁部内面に凹線状の凹みを巡らす。

1056と1057は平縁であり、口唇部を強く面取る。1056は、外面にLRを施した後に三条の沈線を巡らしており、下の沈線は波状であるが幅広のものである。口縁部内面に凹線状の凹みを巡らす。

1057は、外面にRLを施した後に三条の沈線を巡らしており、下の沈線は波状である。

1058は平縁であり、口唇部を強く面取る。外面にLRを施した後に三条の沈線を巡らしており、下の沈線は波状であるが一筆で描いたものではない。口縁部内端を強く面取り、LRを施す。口縁部内面に凹線状の凹みを巡らす。

1059と1060は平縁であり、口唇部を強く面取る。いずれも外面にLRを施した後に二条の沈線を巡らしており、口縁部内面に凹線状の凹みを巡らす。1059は、口唇部にLRを施した後に円形刺突を施す。その後、口縁部を撫でて仕上げている。1060は口唇部にLRを施した後に彗星様に尾を引く浅い刺突を施す。胴部にも繩文地沈線文を有すると考えられ、LRは筋が細かく整ったものである。

1061は平縁であり、外面に二条の浅い沈線を巡らし、その間に端部に刺突を有する浅い一条の沈線を施す。口唇部内端にレンズ条の刺突を施す。

1062は平縁であり、外面にLRを施した後に二条の沈線を巡らす。ただし、下の沈線には、刺突を所々施していると考えられる。それらの間には両端に刺突を有する一条の沈線を施す他、口唇部内端に彗星様に尾を引く深い刺突を施す。

1063は平縁であり、外面にLRを施した後に二条の沈線を巡らす。下の沈線は、2つの浅い刺突を先に施してから、それらを繋ぐ様に施された沈線である。口縁部は厚く作出して丸めており、口唇部を緩く面取りした後にLRを施す他、内面にレンズ状の刺突を施す。

1064は平縁であり、外面にLRを施した後に三条の沈線を巡らす。下の沈線は、1つ以上の刺突を先に施してから、それらを繋ぐ様に施された沈線である。口唇部に彗星様に尾を長く引く浅い刺突を施す。

1065は平縁であり、口唇部を面取る。外面に極めて節の小さい整ったLRを施した後に二条の沈線を施す。それらの間の縄文帯に、端部を刺突する一条の沈線を施す。縄文帯の中には、中空の原体が手元の狂いで当たった痕跡が認められる。精選された粘土を使用しており、精緻な作りである。

1066と1067は緩い波状口縁である。波頂部は小さい突起であり、刺突を2つ施す。1066は、外面にLRを施した後に二条の沈線を巡らすが、下の沈線は端部に刺突を施すものであるため、複数箇所で途切れている。頭部は無文で、胴部はLRを施した後に沈線で三角形の意匠を描くと考えられ、沈線の一部には、それらが交差する部分において端部に刺突を有すると考えられる。1067は、波頂部の外面直下に主文様を施しており、平縁は従文様を施している。主文様は、両端に刺突を有する一条の沈線と、平縁から伸びる口縁部直下の沈線の端部に巴様の刺突を施して絡ませたものである。口縁部下端に沈線を一条巡らしており、口縁部直下の沈線の間に施された刺突が従文様である。

1068は波状口縁であり、波頂部に円形刺突を施す。外面にはRLを施した後に、四条の縦位の沈線で主文様を描き、それを四条の沈線で従文様として繋いでいる。

1069は平縁であり、口唇部を強く面取る。外面に二条を一単位とする沈線を口縁部の直下と下端に施し、それらの間に縦位の刺突を施す。縦位の刺突の間には、彗星様に尾を引く刺突を施す。精選された粘土を使用しており、精緻な作りである。

1070は緩い波状口縁であり、波頂部は突起と考えられる。突起は、平縁に指頭大の粘土塊を貼付しており、上面にRLを施した後に短沈線を施す。外面にはRLを施す。

1071は内湾する口縁の波頂部であり、頂部に極めて小さな刺突を1つ施す。外面にはRLを施した後に細く抉る様な沈線で区画し、磨消縄文としている。波頂部外面下には渦文を施しており、主文様として考えられる。赤彩されていた土器である。

1072は内湾し、突起を有する口縁である。突起の上面に刺突を施す。外面にLRを施した後に端部を丸めて巴様に収める浅い幅広の沈線で区画し、磨消縄文としている。縄文帯に彗星様に尾を引く浅い刺突を施す。精選された粘土を使用している。

1073から1088は胴部である。1073から1081は沈線で三角形状の意匠を描く。

1073は、擬縄文を施した後に沈線で区画して、磨消縄文としている。区画の意匠は三角形状文と考えられ、擬縄文の原体が、松毬等の表面が規則正しく格子状に凹むものが考えられる。1074は、頭部下端に隆帯を作出している。外面にLRを施した後、沈線で蛇行文を描いたと考えられる。1075は、RLを施した後に沈線で三角形状文を描いている。

1076から1081は、LRを施した後に沈線で三角形状文を描いている。その意匠の中には、1077から1079のように端部が跳ね上がる蛇行文を描くものと、1080のように三角形状文を描くものがある。胴部に見られる文様は、その下端を1081のように沈線で区切っていたと考えられる。

1082から1084は、LRを施した後、端部に刺突を有する沈線文を描く。1082は、施文後に撫でているため縄文が不鮮明になっている。

1085と1086は、LRを施した後、端部に刺突を有する沈線文で横に長い三角形状文を描く他、刺突で「ハ」字状文を施す。

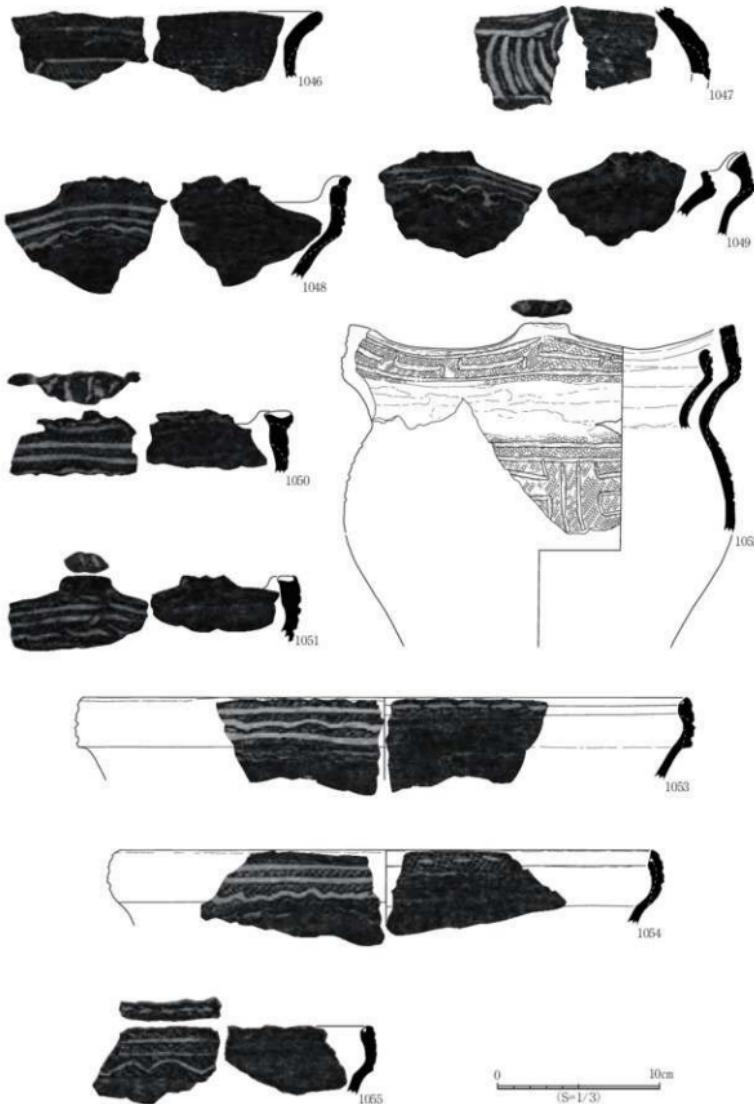


Fig.130 昭和62年11月25日資料(1046~1055)



Fig.131 昭和 62 年 11 月 25 日資料 (1056 ~ 1069)

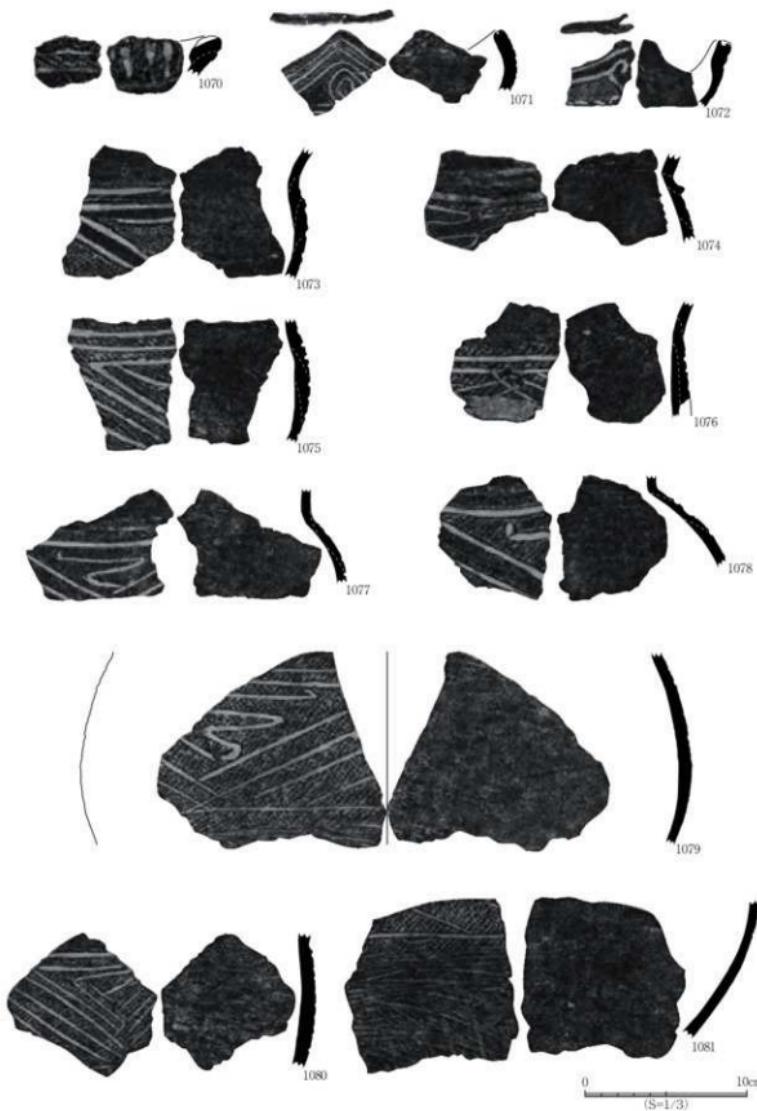


Fig.132 昭和 62 年 11 月 25 日資料 (1070 ~ 1081)



Fig.133 昭和 62 年 11 月 25 日資料 (1082 ~ 1090)

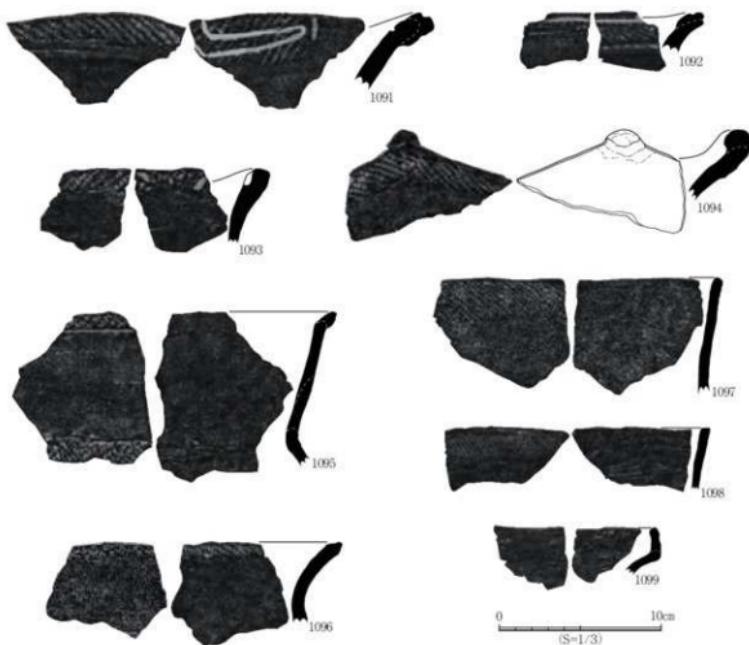


Fig.134 昭和62年11月25日資料（1091～1099）

1087は、LRを施した後に端部に刺突を有する沈線文を描く他、刺突で半月状文を施す。施工後に撫でており、沈線間が広い部分のみに繩文が明瞭に残るが、磨消繩文を意図したものではない。

1088は筋の細いLRを施した後、細く抉る様な沈線で渦文と三角形状文を描く。

1089と1090は深鉢の底部であり、1089は貼付高台、1090は凹み底である。いずれも接地部分を強く面取る。

1091から1098は繩文のみ施す土器で、深鉢の口縁部である。1091は波状口縁であり、厚く作出した口縁部外面にRLを施す。波頂部内面には繩文と、錫先状の文様を沈線で描く。1092は波状口縁になると考えられ、厚く作出した口縁部内面にRLを施した後、口唇部を二条の沈線で圍う。1093は波状口縁であり、厚く作出した口縁部外面にRLを施す。波頂部を面取り、内面にはLRを施した後に2箇所刺突する。1094は波状口縁であり、口縁部をやや厚く作出する。波頂部に瘤状の突起を有し、外面にRLを施す。1095は口縁端部が強く外傾し、胴部に最大径を有すると考えられる。口唇部を強く面取り、口縁部と胴部の外面にLRを施す。1096は口唇部を強く面取り、内外面と胴部外面にRLを施す。1097と1098は口唇部を強く面取り、外面にRLを施す。砲弾形の器形となる。

1099は口縁部で、平縁である。外反する頭部からやや内湾気味に口縁が立ち上がる。小形の土器のものと考えられ、無文である。

1100から1105は浅鉢である。1100と1101はボウル形であり、いずれも外面に文様を有する。1100は、平行する二条の沈線を巡らせて区画し、その中を刺突した文様帶と、それに平行する沈線を一条加えている。口唇部は強く面取り、赤彩されていた土器である。1101は口縁端部をやや厚く作出して内湾させる。節の細かいLRを施した後、細い抉る沈線で三角形状文を描いて区画して磨消繩文としている。1102は、胴部が算盤玉状に屈曲しており、注口付土器の可能性がある。屈曲上部に沈線で蛇行文を施す。1103と1104は皿形と考えられ、いずれも繩文と沈線を施している。1103は、繩文の下で端部を麻手状に丸めた沈線を向き合わせており、文様帶の下端を示すと考えられる。1104は、節の細かいLRを施した後に浅い沈線を施しており、磨消繩文としていた可能性がある。1105はボウル形であり、無文である。

1106は石器であり、小形の打製石斧である。石材は緑色片岩である。1107は骨角器であり、鹿の距骨を利用したものであって、穿孔している。垂飾品と考えられる。



Fig.135 昭和62年11月25日資料 (1100～1107)

12. 第5次調査(Fig.136~196)

所在地 御荘平城2055

調査面積 235m²

調査原因 民間開発(個人住宅の改築)

調査期間 平成7年10月17日から同年11月4日

調査主体 御荘町教育委員会

調査担当 犬飼徹夫(日本考古学協会会員)

調査参加者 中岡修也、藤田儲三、間口昭三、石川裕、今田秀樹、久保克己、山平忠重、

高橋利重、徳永満男、辻内功、石野瑞木、幸泉満夫、林潤也、古谷桂太郎、

成城喜代一、楠本富男、宮本幸枝、山口三千代、布山信子

調査記録 御荘町教育委員会 1996『平城貝塚 平城貝塚第V次発掘調査報告書』

1997『平城貝塚 平城貝塚第V次発掘調査報告書II』

『平城貝塚(H.7.10.17~31)第5次正規発掘調査資料 中岡修也(控) No.1』

『平成7年度 平城貝塚発掘調査カード 御荘町教育委員会(文責 中岡修也)(控)

No.2』

調査日誌

10月17日(火)晴

発掘対象区(235m²)表土面上の精査な遺物採集を調査員全員で実施する。次いで、家屋取り壊しの跡のため、上層部が搅乱しており、重機により表土剥ぎを行う。その後、調査区に2m×2mのグリッドを設定し、遣り方による発掘方法を採るための杭打ち、水糸張りを行う。

10月18日(水)晴

A 0-A 2区のそれぞれに人員を配置し、10cm程度ずつ下部へと振り下げる。しかし純貝層はほとんど認められず、ほとんど搅乱を受けた混貝土層である。その混貝土層の下部は、黒褐色粘土層が存在することを確認する。A 0区より黒色研磨、連弧文を付す滋賀里II式土器の口縁部の採集を始め、多量の伊吹町式土器(西平系)や平城上層式土器(片柏系)を検出する。

10月19日(木)晴

B 0-B 2区のそれぞれに人員を配置し、振り下げを実施する。黒褐色粘土層が貝層の下部に存在し、その下部は暗茶褐色砂質シルト、さらに黄色のローム層と続くことを確認。黄色ローム層のサンプリングを探る。B 0グリッドから復元可能な伊吹町式土器を検出する。またこのグリッドからは、口縁部がやや外反する古閑式土器片の採集を始め、多量の平城上層式土器(片柏系)、石器類を検出する。

10月20日(金)晴

A 2区の土坑状遺構を完掘する。遺構内より平城上層式土器(片柏系)72点を検出する。

B 3区、C 0-C 3区にそれぞれ人員を配置し、振り下げを実施する。B 3区は旧家屋によって完全に破壊されていることを確認する。C 0区は遺物が弱小であった。C 1グリッドから御手洗C式土器(市来系)、C 3グリッドからは平城II式土器、西瀬戸内系の中津式土器、石器類を検出する。初日から石川調査員による貝類の検出・調査が続く。

10月21日(土)快晴

この日は快晴で、また多くの人達の応援を受ける。愛媛埋文センターの中野良一氏・多田仁氏、県立歴史博物館の兵頭氏、また高知県埋文センターからは前田光雄氏を始め5名のセンター員の応援を受ける。純貝層の存在するC 4グリッド及びD0-D4グリッドと作業が進行した。C 4グリッドでは慎重に分層発掘の手法を探る。獸骨・魚骨・土器類を検出する。C 4グリッド黄色のローム層より、繩文中期土器を採集する。またD 2グリッドから平城I式土器を検出するなど成果が挙がった。

10月22日(日)晴

一泊してもらった前田氏ら高知埋文センターの方々の応援を引き続きあずかる。C 4グリッド東壁から貝層のサンプリングを探る。名古屋大学渡辺誠氏宛にて送付する。作業にはEグリッドへと拡大したが、このグリッドは全く破壊されており、Dグリッドの作業を進める。午後1時より現地報告会を実施する。県教委文化財保護課より渡辺豊氏、佐伯氏来訪される。

10月24日(火)雨

御荘町中央公民館で、土器など出土品の水洗い、乾燥した遺物の記名作業を行う。ボランティアとして、宮本幸枝、布山信子、山口三千代の諸氏の協力を受ける。

10月25日(水)晴

土層層序の図面どりを行う。D-0・2区の北壁、A-0区南壁、A2区東壁などを対象場所に選定する。また、A0・1グリッド、B0・1グリッドで混貝土層の剥ぎ取りを行う。(8ケース分)
午後、松山市埋蔵文化財センター梅木謙一氏の来訪を受ける。

10月26日(木)晴

C 0・C 1グリッド、D 0・D 1グリッドの混土貝層8ケースをウォーター・セバレーションによって洗浄する。5mm目、2.5mm目、1mm目によって、沈殿層の4分類に収納し乾燥する。昼前に愛媛大学下條信行教授来訪。これまでの発掘状況を報告するとともに、今後の進め方について指導を受ける。

10月27日(金)晴

F 0-F 3グリッドの掘り下げを実施する。貝層はほとんど認められず、遺物も弱少であった。土器類は32点の検出に留った。ほとんど平城上層式土器(片縫系)であった。

10月28日(土)晴

観察などによって、全調査員で土層の確認を行うとともに、森光晴調査指導員を中心として、C 3グリッド東壁の貝層保存の剥ぎ取りのための、ふきつけ作業を実施する。合成樹脂(トマックNS-10)を使用する。

10月29日(日)晴

この日は快晴で、また多くの人達の応援を受ける。早朝より京都大学埋文センターの千葉豊氏、午後は、愛媛大学学生(考古学専攻)8名、高知県埋文センターの曾我貴行氏の来訪を受ける。千葉氏には出土土器について細かく指導にあずかった。また愛媛大学生には、Gグリッド、Hグリッド、iグリッドの発掘を進めていただいた。ほとんど貝層は認められず、遺物も弱少であったものの、幸泉調査補助員の指導のもと、熱心に作業を進めていただいた。

10月30日(月)晴

30日前に実施したC 3 グリッドの処置作業を行う。保存貝層の固定台(木枠)に、とりつけ作業を行う。-後日、学習会・展示資料として活用する。分層発掘グリッド(B 4 グリッド)のみを残して、発掘完掘区の埋め戻し作業を重機にて行う。

10月31日(火)晴

埋め戻し作業の残りの手作業分の作業を行う。B 4 グリッドについては、犬飼調査指導主任と幸泉調査補助員により、分層発掘を実施する。

このグリッドは、旧家屋の庭部分で全く攪乱されておらず、純貝層に近い状態が確認されている。多量の動物遺体、石器類のほか、表土下のII b 層から伊吹町式土器(西平系)、彦崎K II 式土器を検出し、II c 層から平城上層式(片縫式)の土器のほか、ウチヤマタマツバキガイ製で2孔を貝腹部に穿つ貝笛を発見した。II d 層からは、鐘崎II 式土器、平城II 式土器、犬のものと思われる糞石、IV 層から橋状把手(破損)を持つ平城I 式土器などの検出をみるなど、貴重な成果を挙げた。

11月1日(水)~11月5日(日)

幸泉調査補助員によって、B 4 グリッドの掘り下げを続ける。VII a~c 層は、暗黄褐色粘質シルト層で、アカホヤ火山灰ガラスの可能性のある微粒を確認し、VII 層は、1~3mm程度の小円礫。1~5mm程度の小角礫を含む明黄褐色シルト層となることなど、貝層下の状態を確認する。

11月6日(月)~11月15日(水)

幸泉調査補助員、宮本幸枝・布山信子・山口三千代・楠本富男の諸氏によって遺物の整理、記帳などを進める。この作業には、高知埋文センター中村支所の小野由香、岡村明美の両氏の積極的な協力をいただいた。またこの間、犬飼主任は11月11日(土)~13日(月)開催の日本考古学協会1995年度大会(茨城県ひたちなか市)に出席し、茨城県立歴史館で平城貝塚B 4 グリッド出土の貝製品が貝笛であることを、古代笛の研究家美濃晋平氏によって確認する。

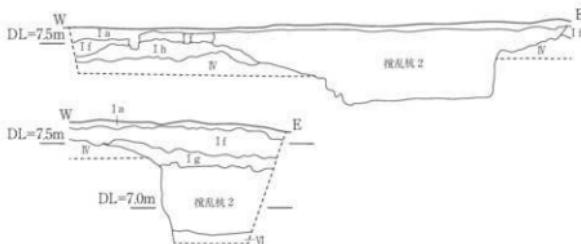
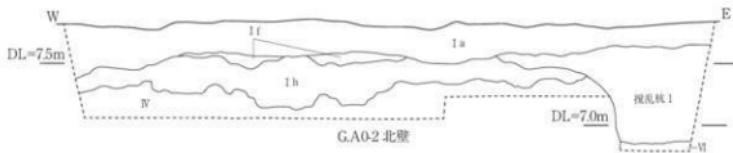
11月17日(金)晴

今次調査で採集した平城貝塚の動物遺体一括を、大分市立博物館の木村幾太郎館長に送付し、鑑定を依頼する。

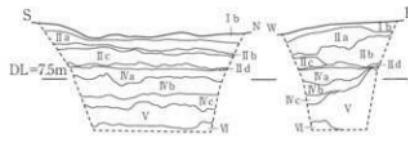
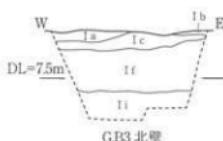
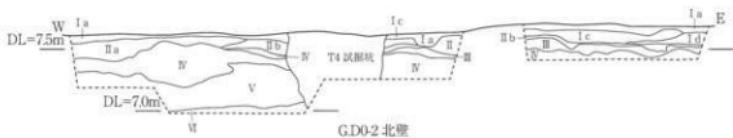
基本層序(Fig.136・137)

I 層は客土及び攪乱であり、近現代の宅地造成に伴うものである。

II 層は、4つに分けられている。II a 層は黒褐色混貝土層で、層の厚さは2cmから15cmである。D 0 区北半からD 2 区南半にかけて顕著に堆積しており、繩文時代後期後半の土器(西平系伊吹町式土器など)の他、破片となった貝殻と骨類を含む。II b 層は黒褐色混土貝層で、層の厚さは20cmから30cmである。調査区中央からB 4 区、C・D 2 ~ 4 区にかけて堆積しており、後期中葉の土器(平城 I 式・鐘崎式など)が出土している。II c 層は純貝層で、層の厚さは10cmから15cmである。B・C 区で堆積しており、土壤は介在しておらず、遺存状態は良好である。B 4 区においては、平城 I 式・鐘崎式土器などと共に、貝笛と考えられる貝製品が出土している。II d 層は黒褐色土層で、層の厚さは2~5cm程度である。B 4 区で堆積しており、獸・魚骨を主体とし、若干の貝と後期中葉の遺物が出土している。



G.A0.2 南壁 (反転トレース)



0 2m
(S=1/40)

- I a 赤褐色客土
- I b 黒褐色耕作土
- I c 明黄褐色客土
- I d オリーブ黒色砂礫
- I e 鹿灰色砂質
- I f 黑褐色混貝土
- I g 明黄褐色客土
- I h 黑色土
- I i 黑色混貝土
- II a 黑褐色混貝土

- II b 黒褐色混貝土
- II c 純貝
- II d 黒褐色混土骨
- III 黑色粘質土
- IV a 赤褐色混貝砂質シルト
- IV b 赤褐色砂質シルト
- IV c 明褐色砂質シルト
- V 黄褐色粘質シルト
- VI 明黄褐色シルト

Fig.136 第5次調査 A～D区東西土壤堆積図

III層は黒褐色粘質土層で、層の厚さは1cmから10cm程度である。D2区北半において厚く堆積していた。B4区II d層に対応する可能性が指摘されているものの、貝・骨類をほとんど含まないことから区別している。

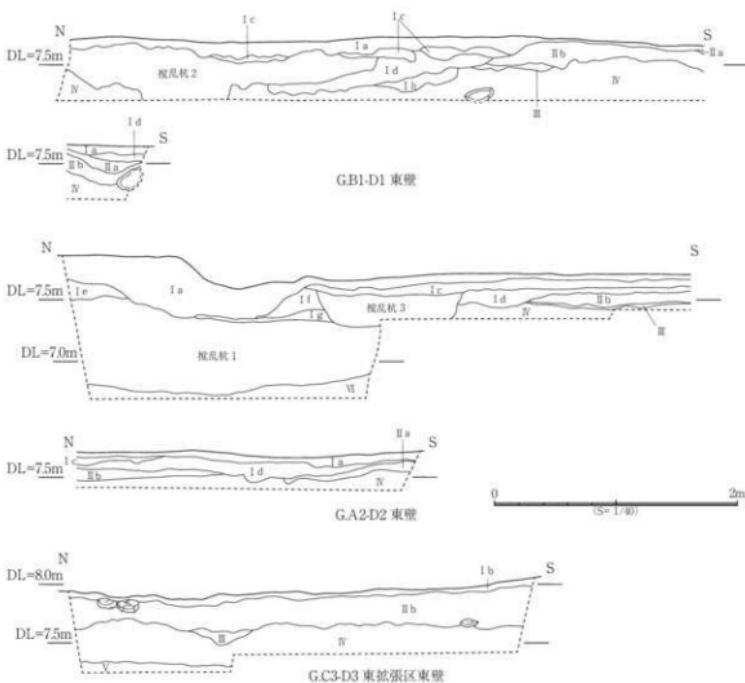


Fig.137 第5次調査 A～D区南北土壤堆積図

IV層は赤褐色砂質シルト層であり、3つに分けられている。IV a層の厚さは、7cmから15cmである。遺存状態の悪い貝・骨類と共に、後期中葉の遺物が少量出土している。二次堆積土層として考えており、調査区外からの貝層の流入によって形成された可能性が指摘されている。IV b層の厚さは、10cmから15cmである。IV a層よりも明るい色調で、粘性も増す他、この層の下部からは円窓を若干含むようになる。B 4区では平城I式の小土器片が数点出土している。IV c層はV層との漸移層として理解されており、明褐色砂質シルト層である。厚さはB 4区で10cmである。V層の小プロックを含み、粘性も強い。B 4区から前期前葉の土器片が出土している。

V層は黄褐色粘質シルト層で、B 4区、C 3区、D 0-1区で深掘りした際に確認している。厚さは15cmから40cmであり、粘性は強く湿り気を帯びていた他、1~5mm程度の小窓を含む。また、火山灰ガラスも少量確認している。尚、D 0区北壁沿いから、厚手無文土器が1点出土している。

VI層は明黄褐色シルト層で、A 2・B 4区で深掘りした際に確認している。無遺物層であって、小窓を多く含み、粘性も弱い。

本報告においては、「区」を「G」つまりグリッドとして読み替え、各グリッドとそこでの層位を優先して報告する。

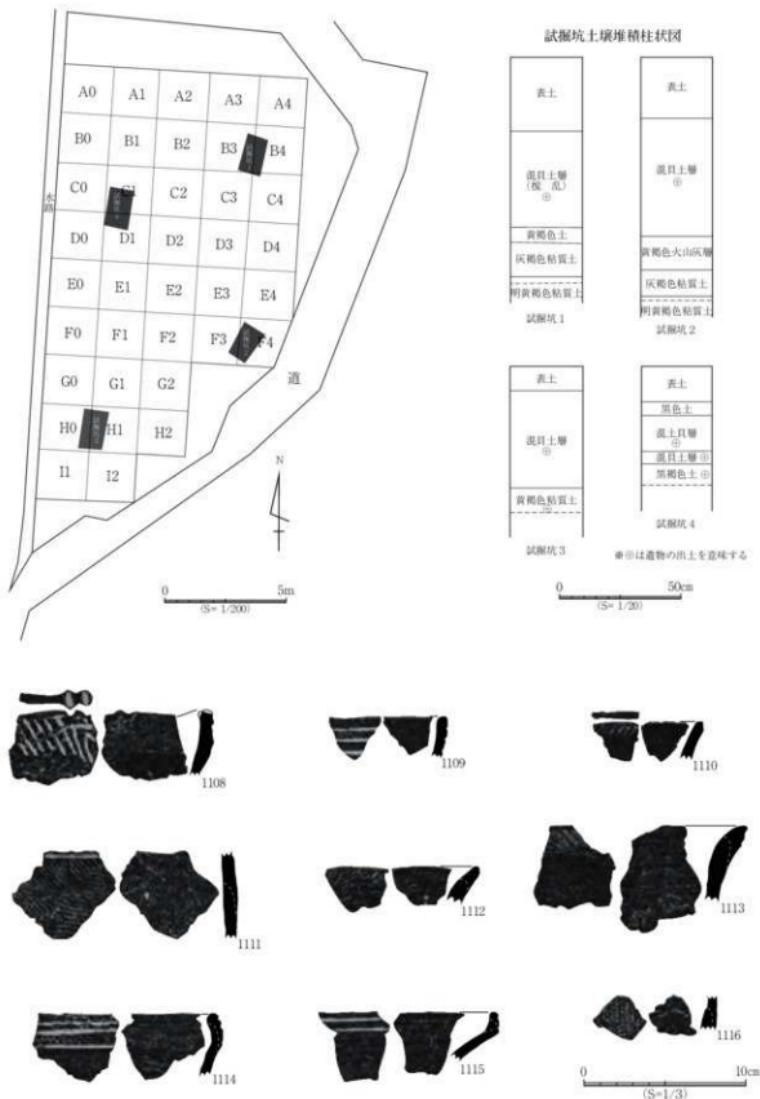


Fig.138 第5次調査 グリッド図及び試掘確認調査面並びに出土遺物 (1108 ~ 1116)

試掘確認調査(Fig.138)

第5次調査に先立って、平成6年11月11日より14日まで調査が行われている。4つの試掘坑を掘削し、貝層(混貝土層と混土貝層)を確認している。

1108から1111は試掘坑1からの出土物である。1108から1111は混貝土層下層からの出土物であって、1108から1110は深鉢の口縁である。1108は緩い波状口縁であり、口唇部を強く面取る他、頂部に刻みを施す。外面に右に斜行する沈線文を施す他、波頂部下に主文様として渦文を施したと考えられる。1109は口唇部を強く面取り、外面にRLを施した後に沈線で区画し、磨消繩文をしている。1110は強く面取りした口唇部と外面にLRを施す。1111は深鉢の胴部であり、RLの羽状文である。

1112と1113は試掘坑2からの出土物である。いずれも混貝土層下部からの出土物で、深鉢の口縁である。1112は口縁部外面にIを、1113はRLを施す。

1114は試掘坑3からの出土物である。混貝土層上部からの出土物で、外反する頭部から屈曲して内湾する口縁が立ち上がる深鉢の口縁部である。口縁部外面にRLを施した後、平行する三条の沈線を施す。

1115と1116は試掘坑4からの出土物である。混貝土層下部からの出土物であり、いずれも深鉢である。1115は、外傾ないしは外反する頭部から屈曲して直立する口縁が立ち上がっており、口唇部を強く面取る。外面には浅い沈線を二条平行させるが、下の沈線の端部には刺突を施している。

1116は外面にRLを施す。

G. A O (Fig.139~143)

205点が出土している。I層からの出土であると考えられる。59点を図示した。

1117から1136は口縁部外面に文様を有する深鉢の口縁部で、外傾ないしは外反する頭部から屈曲して口縁部が立ち上がる。

1117は端部を丸めて収めており、LRを施した後、二条の平行する沈線で区画し、区画内にのみ繩文を残す。区画内には、端部に刺突を有する沈線を一条施しており、口縁部内面には凹線状の凹みを巡らす。

1118はLRを施した後に平行する二条の沈線で区画し、区画内にのみ繩文を残すものの、繩文を施した後に撫でたため、不鮮明になっている。

1119はLRを施した後に平行する二条の沈線を施し、下の沈線は2つの刺突により途絶している。口唇部は強く面取りした後にLRを施す。

1120と1121はLRを施した後に平行する二条の沈線を施す。いずれも、円形そして三日月状の刺突で途絶している。1121は口縁部内面に凹線状の凹みを巡らすが、浅いものである。

1122はLRを施した後に平行する二条の沈線を施す。いずれも、円形そして三日月状の刺突で途絶している。胴部にも口縁部同様の文様が施されたと考えられる。

1123は節の細かいRLを施した後に沈線で長楕円文を施す。長楕円文の中には、沈線文と刺突文を施す。

1124は口唇部を強く面取る。外面に節の細かい整ったRLを施した後に二条の沈線を巡らす。胴部にも繩文を施しており、原体を折り返した部分の回転圧痕が頭胴部の境に認められる。精選された粘土を使用しており、精緻な作りであって、補修孔を有する。

1125は波状口縁である。口唇部を強く面取り、内端は鋭角である。LRを施したのち、平行する三条の沈線を巡らす。胴部もLRを施した後に沈線文を施しており、楔様の継位の短沈線と組み合わせることで長方形の区画が生じていると考えられる。

1126は波状口縁であり、波頂部に刺みを施す。LRを施した後に平行する二条の沈線で区画し、区画内に、両端に巴様の刺突を有する沈線文を施して端部を絡ませている。胴部にも同様の文様を有すると考えられる。

1127は波状口縁であり、LRを施した後に鋭角な沈線を三条巡らせ、強く撫でている。胴部にも同様の文様を有しており、口縁部と同様に施文後に強く撫でたため、沈線間の幅が広い部分だけに明瞭に繩文が残っている。

1128は波状口縁であり、口唇部を強く面取る。LRを施した後、平行する二条の沈線を巡らすが、円形そして三日月状の刺突で途絶している。尚、口縁部内面に凹線状の凹みを有するが浅いものである。

1129は平縁であり、口唇部を緩く面取る。RLを施した後に沈線文を施すが、主文様と従文様で構成されると考えられる。主文様は、蛇行文ないしは円形と三日月状の刺突を組み合せたものと考えられる。従文様は二条の沈線であって、上の沈線は端部を下方に曲げて取めている。

1130は平縁であり、口唇部を強く面取る。外面に節の細かい精緻なRLを施した後に細い抉るような沈線を四条施す。精選された粘土を使用しており、精緻な作りである。小形の土器の可能性が考えられる。

1131から1133は波状口縁になると考えられ、1131はLRを施した後に沈線を施す。幅広の沈線の中には刺突を施す。1132はLRを施した後、平行する沈線を二条巡らすが、下端の沈線は楔状の刺突により途絶している。1133は外面に平行する二条の沈線を巡らせており、端部には刺突を、口唇部には、彗星様に尾を引く刺突を施す。

1134と1135は波状口縁であり、1134は主文様と従文様で構成されると考えられる。RLを施した後に、主文様を継位の沈線で描く。従文様は平行する四条の沈線である。1135は口唇部を強く面取りし、LRを施した後に平行する三条の沈線を巡らす。

1136は平縁であり、口唇部を強く面取る。外面にLRを施した後に平行する二条の沈線を巡らしているが、刺突により途絶している。胴部にも同様の文様を施す。

1137から1144は頸胴部であり、外面に文様を有する。1137はLRを施した後、平行する複数条の沈線を巡らす。施文帯中央部の沈線は、円形ないしは三日月状の刺突により途絶している。繩文は、その施文後に撫でたため、不鮮明になっている。1138は節が極めて細かく整ったLRを施した後、平行する複数条の沈線を巡らす。施文帯中央部の沈線は、米粒状の浅い刺突により途絶している。

1139はLRを施した後に平行する複数条の沈線を巡らしており、沈線脇の粘土のはみ出しが明瞭に残る。1140と1141はLRを施した後、平行する複数条の沈線を巡らしており、下端の沈線から下には繩文が残る。1142はLRを施した後、平行する複数条の沈線を巡らしている。1143は平行する複数条の沈線を巡らしており、下端の沈線から下は丁寧に撫でている。1144は頸部であって、刺突を施している。

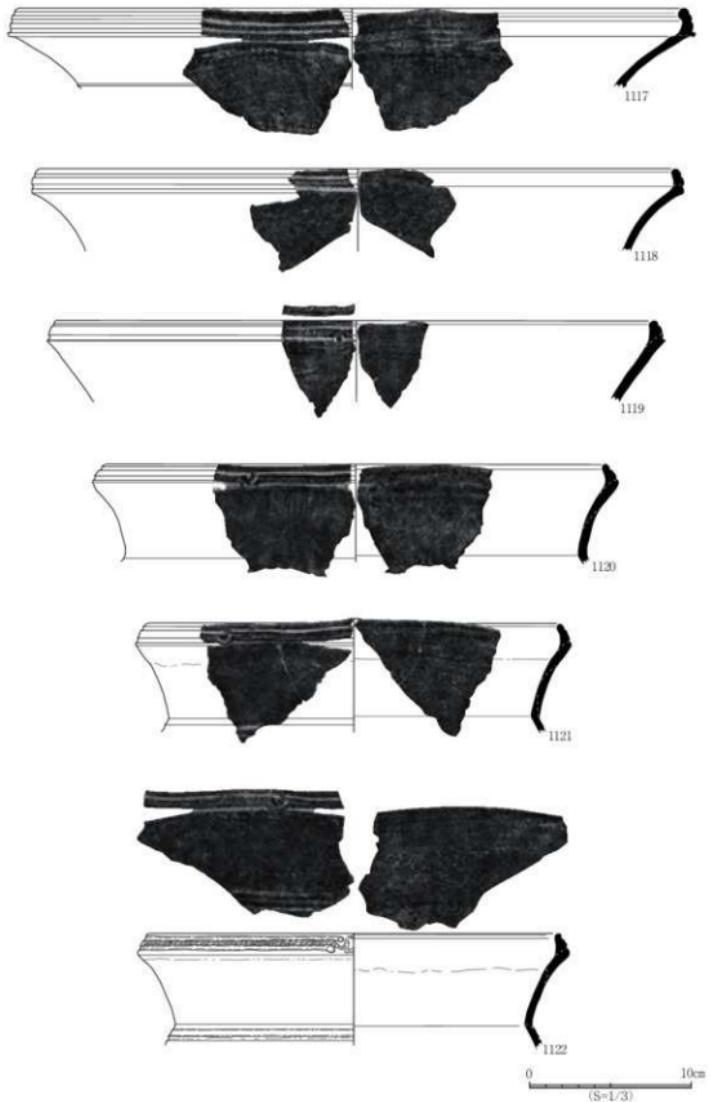


Fig.139 第5次調査 G.A.0 出土遺物 (1117 ~ 1122)

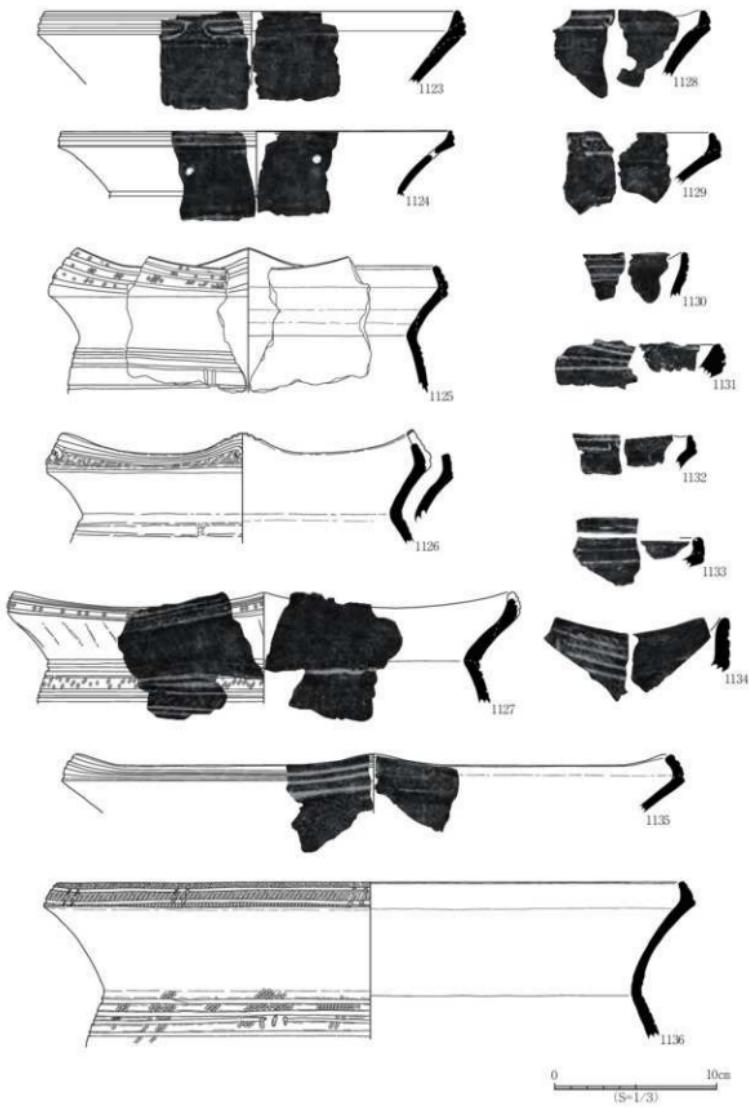


Fig.140 第5次調査 G.A.0 出土遺物 (1123 ~ 1136)



Fig.141 第5次調査 G.A.O出土遺物 (1137~1152)

1145から1151は縄文のみ施す土器である。1145から1149は口縁部、1150と1151は脇部である。

1145と1146は波状口縁であり、1145は波頂部に粘土紐を輪にしたものを貼付しており、その外面にLRを施す。1146は波頂部に粘土塊を貼付しており、その内外にRLを施す他、内面には縄文の圧痕を刻みとして施す。1147は口唇部を強く面取り、その外端にRLを施す。1148は口唇部にRLを施す。1149は肥厚させた口縁部外面にLRを施し、口唇部を強く面取る。1150と1151はRLを施し、1150は羽状文としている。

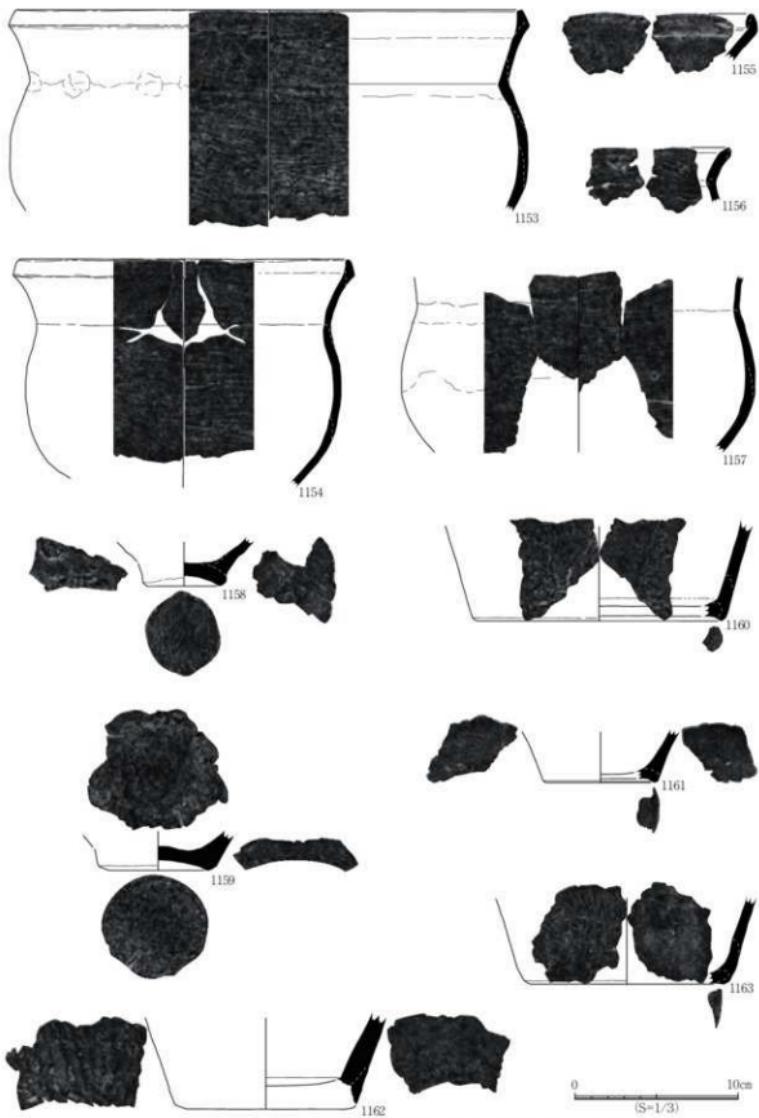


Fig.142 第5次調査 G.A. 0 出土遺物 (1153 ~ 1163)

1152から1157は無文の深鉢である。1152は面取りした口唇部に右に斜行する刻みを施す。1153と1154は外傾ないしは外反する頸部から断面が算盤玉状の口縁部が立ち上がる。内外面を磨くものの粗い。1155は、外傾ないしは外反する頸部から屈曲して内傾する口縁部が立ち上がる。1156は短く外傾する頸部から断面が玉縁状の口縁部へと立ち上がっており、小形の土器となる可能性がある。1157は1153または1154と同一個体になると考えられる。

1158から1163は深鉢の底部である。1158から1162は凹み底である。1159は底部内周を丁寧に撫でており、1159は底部外周を面取る。いずれも小さい底部から大きく膨らむ胴部を有していたと考えられる。1160から1162は底部内周が極めて緩く凹み、底部外周は低いながらも高台状となっている。いずれも植木鉢形の胴部を有している。1163は植木鉢形の胴部を有しており、底部はその内周が緩く凹み、外周は低いながらも高台状となっていたと考えられる。

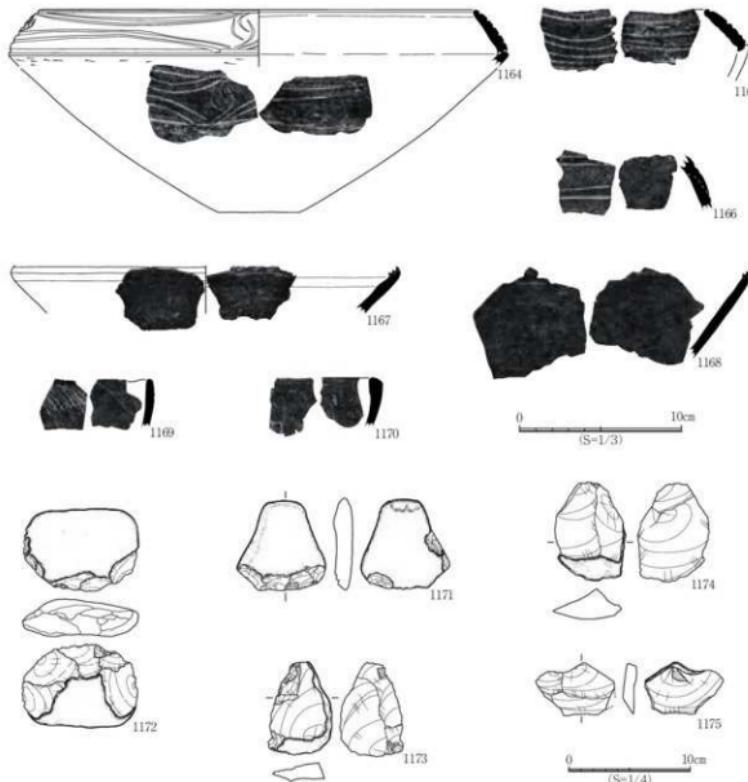


Fig.143 第5次調査 G.A.O 出土遺物 (1164 ~ 1175)

1164から1170は浅鉢である。1164から1168は文様を有する。1164と1165は胴部が強く屈曲し、幅広の口縁部が内傾する。いずれも外面に、細く抉るような沈線で文様を描く。1164は、口縁部の上端と下端に沈線を施して区画し、その内に猫の目状の主文様を描く。その脇に二条の弧状文を上下に背を合わせる様に描いている。丁寧に磨かれているが、体部は削った跡が明瞭に残るため、鉢の可能も考えられる。1165は1164と類似する特徴を持つが、弧状線は下向きであるため、別個体である。丁寧に磨かれているが、これについても鉢の可能性が考えられる。1166はボウル形であり、LRを施した後に沈線で区画し、磨消繩文としている。1167と1168は胴部であり、体部が算盤玉状に屈曲する器形である。1169は繩文のみ施しており、鉢形である。口縁部外面直下にRLを施す。1170は無文であり、鉢形である。口唇部を強く面取り、波状口縁になる可能性がある。

1171から1175は石器である。1171は打製の石斧であり、石材はホルンフェルスである。刃部全体が摩耗している。1172と1173は打製の削器であり、石材はホルンフェルスである。1174と1175は剥片であり、石材はホルンフェルスと考えられるが、風化が著しい。

G.A 1 (Fig.144~146)

153点が出土している。I層からの出土と考えられる。46点を図示した。

1176は深鉢の胴部である。外面に沈線文を有する。

1177から1185は文様を有する深鉢の口縁部である。1177と1178は波状口縁の波頂部であり、いずれも突起である。1177は、外反ないしは外傾する頭部から屈曲して内湾する口縁部が立ち上がる。突起は、粘土紐を蛇行させたものを貼付して作出している。外面はLRを施した後、平行する二条の沈線で区画しており、突起下には垂下する沈線を施す他、その脇の繩文帯には円形刺突列を施している。1178の突起も粘土紐を蛇行させたものを貼付して作出している。外面に沈線文を施す。

1179は口唇部から口縁部外面直下にLRを施す。内面には彗星様の刺突を、外面には二条の平行する沈線をそれぞれ施しており、下の沈線は刺突で途絶する。

1180は口唇部を面取る、外面は平行する二条の沈線で区画しており、その内に刺突を施す。

1181は口縁部を厚く作出しており、その外面にLRを施した後、平行する三条の沈線を巡らす。中央の沈線には円形の押引き刺突を施している。

1182は口唇部を強く面取り、LRを施した後に彗星様の刺突を施す。外面はLRを施した後、一条の沈線で文様を施しているが、端部を丸く収めた沈線を並列した意匠の可能性が考えられる。

1183は波状口縁の波頂部であり、頂部に2つ刺突を施す。外面はLRを施した後、二条の沈線を巡らすが、上の沈線は端部に刺突を施しており、複数箇所で途絶するものと考えられる。

1184は外面にLRを施した後、平行する二条の沈線で区画しており、その中に刺突を施す。

1185は波状口縁であり、LRを施した後に平行する二条の沈線で区画しており、その中に端部に刺突を有する一条の沈線を施す。

1186から1196は文様を有する深鉢の胴部である。1186と1187はLRを施した後、沈線文を施しており、その意匠は三角形状文であると考えられる。1188はRLを施した後、沈線で三角形状文を描いており、端部を刺突する。1189から1194はLRを施した後、沈線文を施す。1190は内面の接合痕が明瞭に残る。1191は施文後に撫でており、繩文が不鮮明となっている。1192は弧状文である。1193は端部を刺突する蛇行文であって、主文様になると考えられる。1195はRLを施した後、二条の平行する

沈線で区画し、磨消繩文としたと考えられ、繩文帯に三日月状の刺突を施す。1196は外面にLRを施した後、沈線で蛇行文を描いている。その後撫でているため、繩文が不鮮明となっている。

1197は強く面取りした口唇部と口縁部外面直下にRLを施す。その後、平行する二条の沈線を施すが、極めて浅く不鮮明なものである。

1198から1200は繩文のみ施す土器である。1198は口縁部、1199と1200は胴部である。1198は口唇部を強く面取り、外面にRLを施す。1199と1200はRLを施しており、1200は羽状文である。

1201から1208は無文の深鉢の口縁部である。1201から1204は外傾ないしは外反する頸部から屈曲して口縁部が立ち上がる。1201の口縁部は内湾する。1202は外面を強く撫でており、緩い四線状となっている。1203と1204は屈曲が鋭角であり、断面が算盤玉状となっている。1205から1207は短い頸部が外反するものあり、比較的小形の土器の可能性がある。1208は砲弾形の器形になる。

1209から1214は底部であり、全て凹み底である。1209から1211は接地部分を強く面取る。1212は底部外周を強く面取る。1213は貼付高台様に作出しており、接地部分を強く面取る。1214は接地部分を強く面取り、比較的幅広の接地部分を有すると考えられる。

1215と1216は浅鉢の口縁部で、いずれもボウル形である。1215は節の細かいRLを施した後に沈線で区画して磨消繩文としており、帶状の意匠と考えられる。1216は口唇部を強く面取り、沈線で弧状文を描くと考えられる。

1217から1221は石器である。1217は打製の石錐であり、石材は結晶片岩である。1218は打製の削器であり、石材はホルンフェルスであるが風化が進んでいる。1219と1220は剥片であり、石材はホルンフェルスである。1221は敲石であり、石材は砂岩である。両面は敲打のため深く凹む。

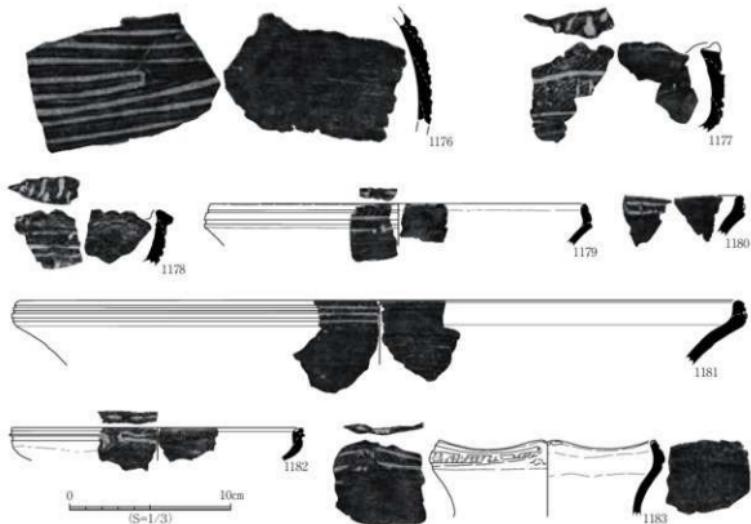


Fig.144 第5次調査 G.A.I出土遺物 (1176 ~ 1183)

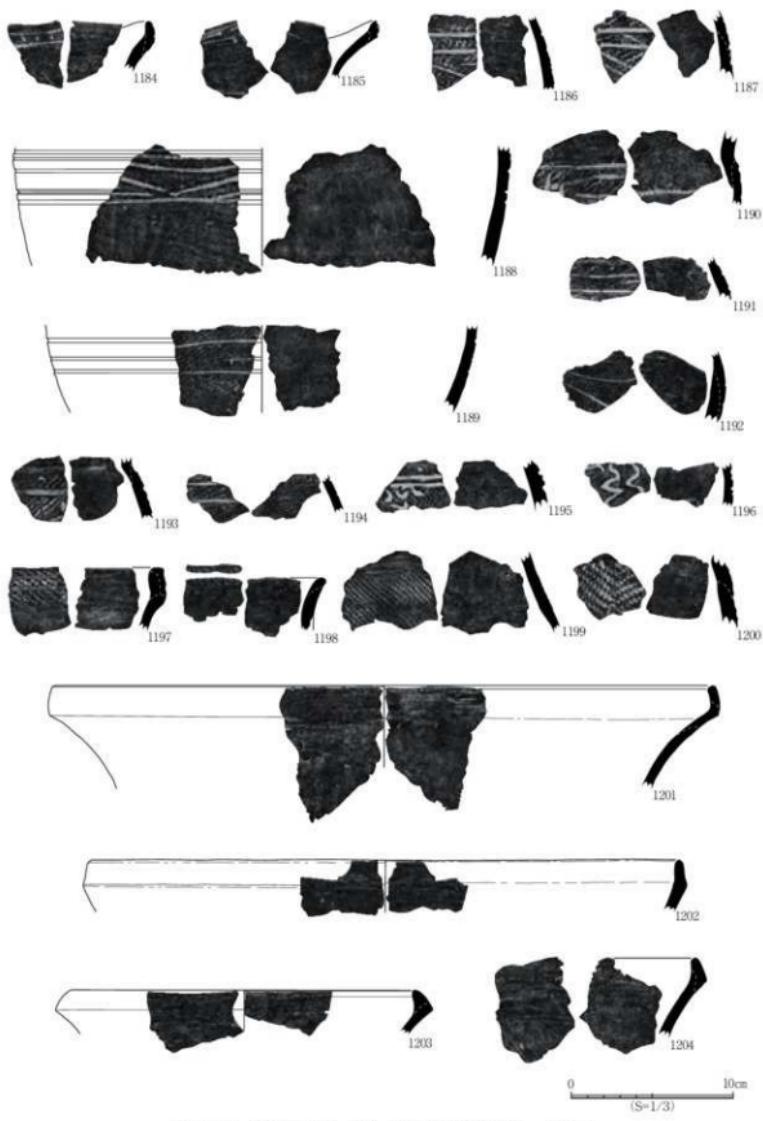


Fig.145 第5次調査 G.A. 1出土遺物 (1184 ~ 1204)

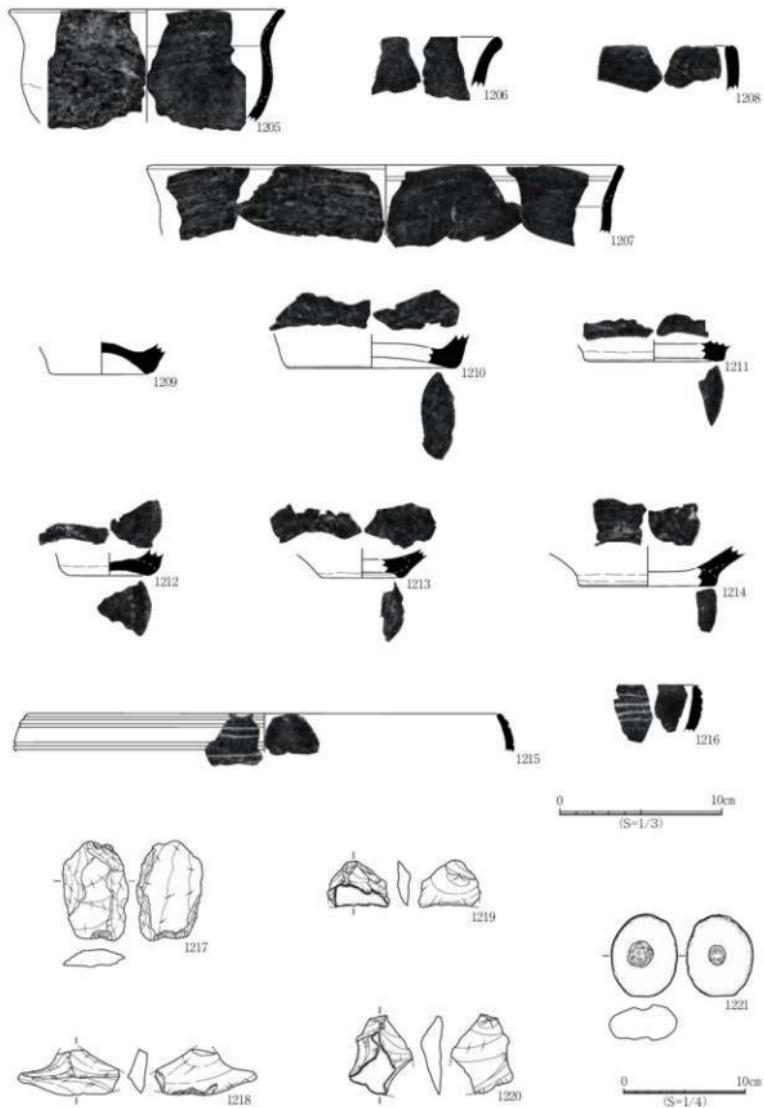


Fig.146 第5次調査 G.A. 1出土遺物 (1205 ~ 1221)

G.A 2 (Fig.147~150)

232 点が出土しており、61点を図示した。性格不明遺構(以下 SX 1)と包含層のものがある。

1222から1235は SX 1 からの出土物である。1222は波状口縁で、キャリバー形の深鉢である。内湾する口縁部の外面にLRを施した後、沈線文を施す。1223は深鉢であり、平線に粘土塊を貼付した突起を有する。外面にRLを施した後、平行する複数条の沈線を巡らす。1224は深鉢であり、やや厚く作出した口縁部外面にRLを施した後、沈線で区画して磨消繩文としている。口縁部内面に凹線状の凹みを巡らす。1225から1227は深鉢の胴部であり、LRを施した後、三角形状文を意匠とする沈線文を施す。1228は小形の鉢であり、頸部が短い。1229は厚く作出した口縁部を有する深鉢であって、外面にRLを施す。1230から1232は繩文のみを施す土器の胴部であって、いずれもRLを施すが、1231は羽状文である。1233と1234は深鉢の底部であり、接地部分を強く面取る凹み底である。1235は浅鉢の胴部であり、LRを施した後、沈線で区画して磨消繩文としている。

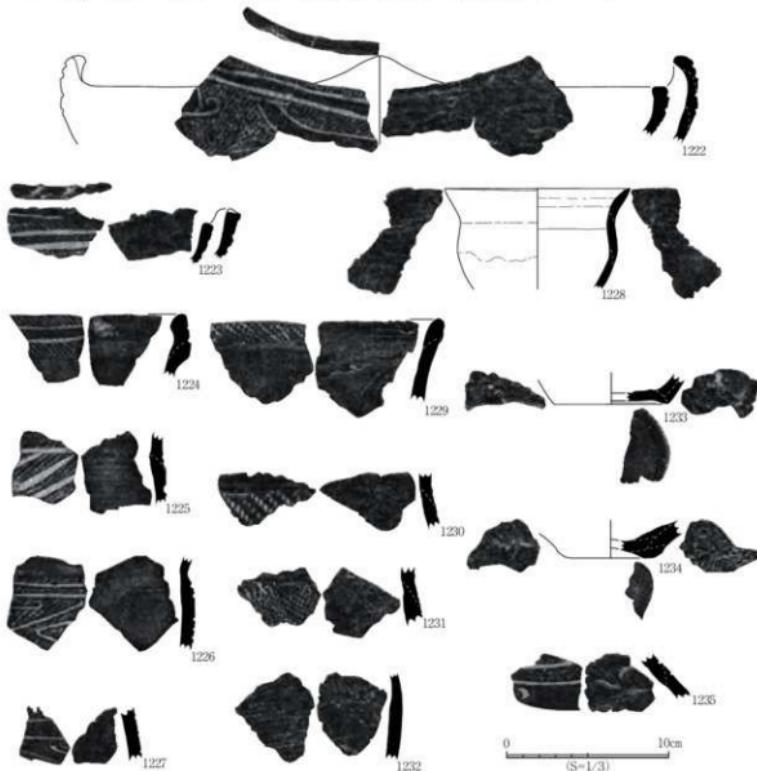


Fig.147 第5次調査 G.A 2 SX 1 出土遺物 (1222 ~ 1235)

1236から1283は包含層からの出土物である。

1236は深鉢の胴部である。内面に二枚貝条痕が認められると共に、外面に粘土紐を貼付してミミズ腫れ様の隆帯を少なくとも四条作出来ている。

1237は深鉢の胴部である。外面に簾状の条線を施した後、粘土紐を貼付して隆帯を少なくとも四条作出来ている。

1238は深鉢の胴部である。外面に沈線文を有しており、沈線脇の粘土のはみ出しが明瞭に残る。

1239は深鉢の口縁部であり、突起を有する。突起にはRLを施した後、その内側から外面にかけて「S」字状の沈線を二条絡ませる。これらの沈線は、平縁部外面の沈線と関係していない。これらの他、突起の外面直下に、少なくとも5つの涙滴状文の系譜にある刺突を施す。突起下の頸部にもRLと沈線が施されており、波頭状文の系譜にある意匠と考えられる。

1240から1246は、外反ないしは外傾する頸部から屈曲して口縁部が立ち上がる。1240はやや内傾して立ち上がり、波状口縁になると考えられ、波頂部には粘土塊を貼付した突起を有する。突起には刺突が認められる。外面にはRLを施した後、幅広の沈線を二条巡らし、その下に円形の刺突を施す。内面に凹線状の凹みを巡らす。1241は平縁に突起を貼付しており、突起は粘土紐を蛇行させたものである。外面にはLRを施した後、沈線を巡らせている。内面に凹線状の凹みを巡らす。1242から1244は屈曲が鋭角である。1242は口縁部外面にLRを施した後、沈線文を施す。1243は口縁部外面にLRを施した後に沈線文を施しており、下の沈線は山形状文である。1244は幅広の口縁部であり、外面にRLを施した後、四条の沈線を巡らす。1245と1246は内湾する口縁が立ち上がる。いずれも外面にLRを施した後に沈線文を施すが、1245は端部に垂直の刺突を有する。1246は波状口縁となる。1247は外反する頸部の先に口縁部があり、内面はRLを施した後に沈線で区画して磨消縄文としている。

1248から1258は深鉢の胴部であり、外面に文様を有する。1248はLRを施した後に沈線で区画して磨消縄文としている。沈線には端部を刺突するものや、沈線内を刺突するものがある。1249はLRを施した後に浅い沈線で区画して磨消縄文としている。意匠は三角形状文である。1250はLRを施した後、端部を刺突する沈線文を施す。刺突で途切れた沈線の間には、三日月様の刺突と端部を渦文様に丸めた沈線が絡む文様を有する。1251はLRを施した後に沈線、1252はRLを施した後に浅い条線、1253はRLを施した後に沈線で三角形状文、1254はLRを施した後に沈線で三角形状文をそれぞれ有する。1255はRLを施した後に沈線で区画を行い、磨消縄文としている。縄文帯の中に、円文とそれを囲う弧状文を沈線で描く。1256と1257はLRを施した後に沈線、1258は沈線をそれぞれ描いている。

1259から1265は縄文のみ施す土器である。1259は波状口縁の波頂部であり、厚く作出した口縁部外面にLRを施す他、波頂部にLRと沈線文を施す。1260は極めて薄手であり、やや内湾する幅広の口縁部外面にLRを施す。1261は、やや厚く作出した口縁部外面にRLを施し、口唇部を強く面取る。

1262は、やや厚く作出した口縁部の内外面にRLを施し、口唇部を緩く面取る。1263は口縁部内面にRLを施す。1264と1265は胴部であり、外面にRLを施す。1264は羽状文としている。

1266から1273は深鉢であり、無文である。1266は極めて薄手であり、砲弾形の器形になると考えられる。1267は、口唇部の一部を面取るため、緩い波状口縁になる可能性が考えられる。1268は砲弾形の器形になると考えられ、補修孔を有する。1269はやや厚い作りである。1270は波状口縁の波頂部であり、波頂部の両脇に浅い沈線を施す。1271は胴部であり、磨いているが粗い。1272は波状

口縁であり、波頂部内面に沈線を施す。1273は砲弾形の器形であり、外面に右に斜行する深い沈線を施す。

1274は浅鉢であり、体部が算盤玉状に屈曲する。外面にLRを施した後、沈線で区画して磨消繩文としている。

1275は弥生土器で、壺の口縁部である。口縁部は大きく外反しており、面取りした口唇部外端にヘラによる刻みを施す。

1276から1283は石器である。1276は打製の石斧である。石材は砂岩で、II層からの出土である。

1277と1278は打ち欠き石錐である。いずれも石材は砂岩で、II層からの出土である。1279は石核、1280は削器、1281は二次加工剥片、1282は剥片であり、いずれも石材はホルンフェルスである。

1283は敲石である。表裏に凹みを有しており、石材は砂岩である。

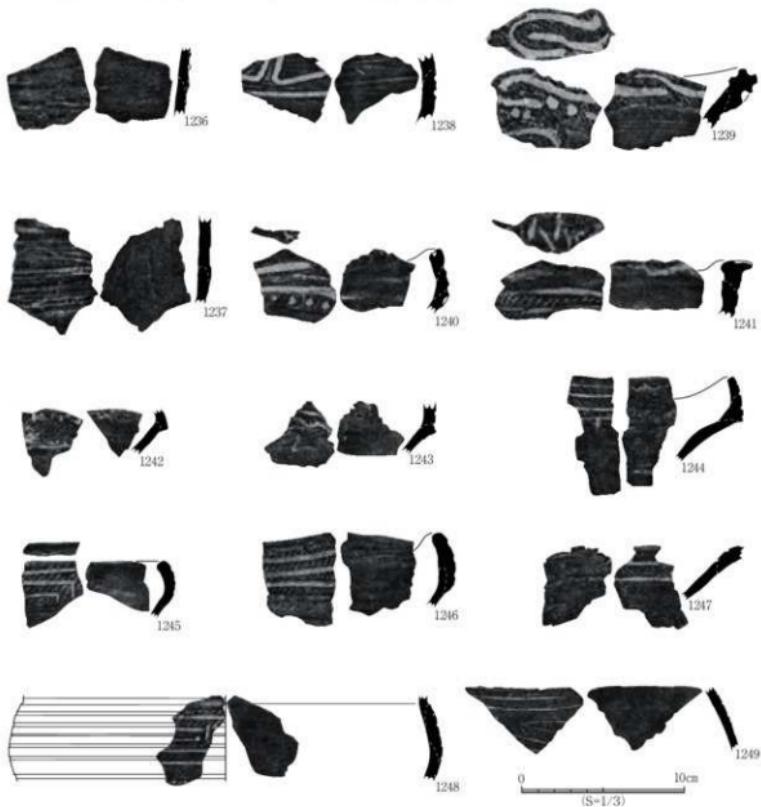


Fig.148 第5次調査 G.A. 2 出土遺物 (1236 ~ 1249)

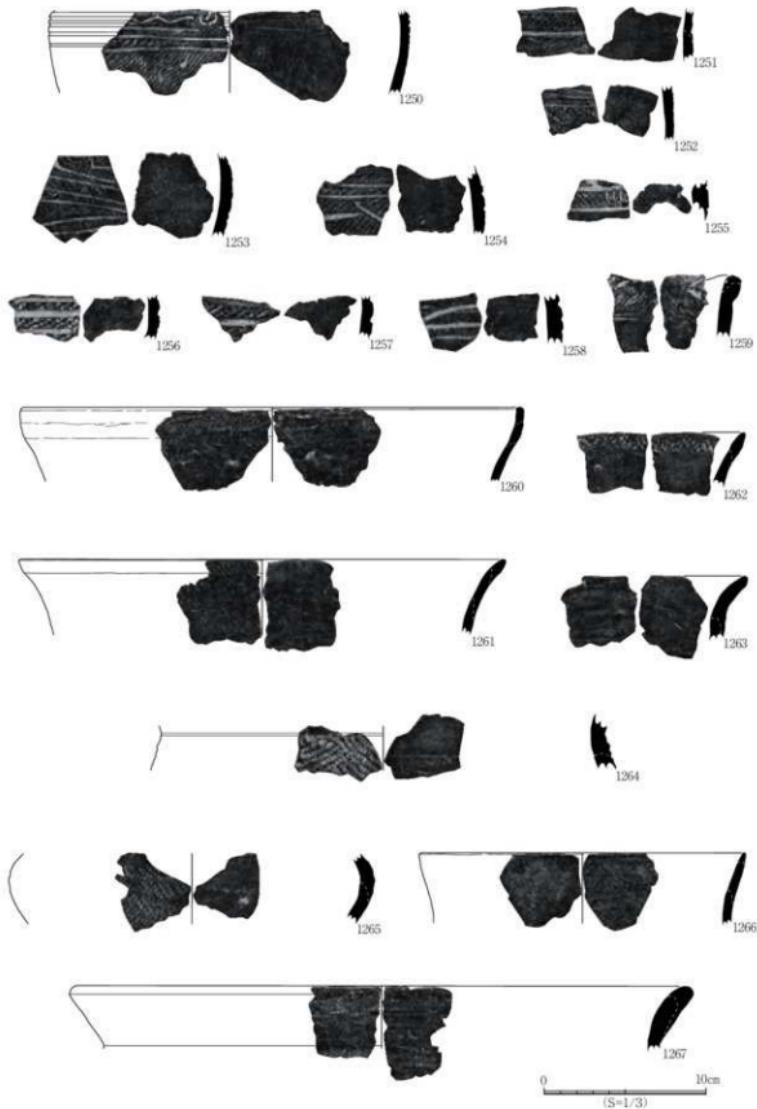


Fig.149 第5次調査 G.A. 2 出土遺物 (1250 ~ 1267)

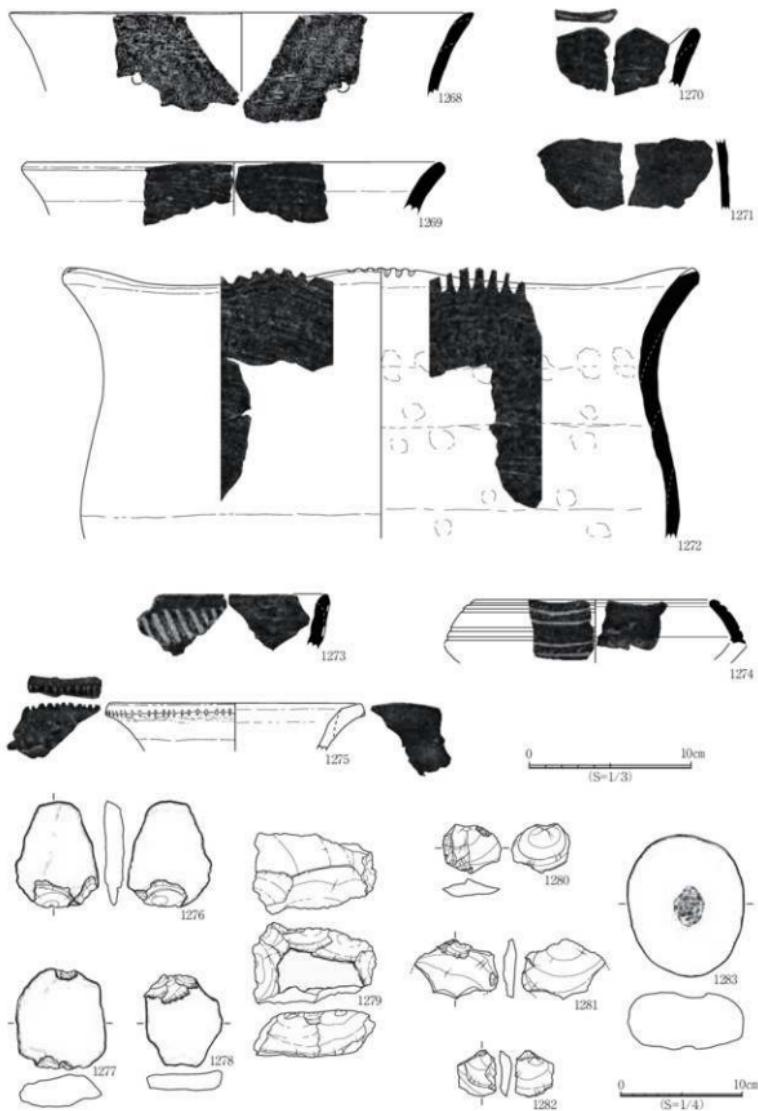


Fig.150 第5次調査 G.A. 2出土遺物 (1268 ~ 1283)

G. B O (Fig.151~154)

135点が出土している。出土物は包含層のものであり、49点を図示した。

1284から1311は深鉢であり、有文のものである。1284から1292は外反ないしは外傾する頭部から屈曲して口縁部が立ち上がる。

1284は、平線に粘土紐を蛇行させた突起を貼付している。外面にLRを施した後、沈線文を描いている。

1285は外面にLRを施した後、平行する三条の沈線を巡らす。1286は波状口縁であり、外面にLRを施した後、平行する二条の沈線を巡らす。1287は外面にLRを施した後、平行する二条の沈線を巡らす。

1288は波状口縁の波頂部であり、頂部に刻みを施す。外面にLRを施した後、平行する沈線を巡らすが、波頂部下で端部を丸めて収めている。1289は口唇部にレンズ状の刺突を施す他、外面にLRを施したのち、平行する二条の沈線で区画し、その間の繩文帯に彗星様に尾を引く刺突を施す。1290は外面に平行する二条の沈線で区画し、その間に「D」字状の刺突を施す。1291は外面にLRを施した後、平行する二条の沈線で区画し、その間の繩文帯に右に斜行する刺突を施す。1292は波状口縁であり、平行する二条の沈線で区画し、その間に刺突を施す。

1293と1294は平縁で、比較的短い頭部から屈曲して内傾する口縁部が立ち上がる。いずれも口縁部外面にLRを施しており、端部に刺突を有し、途絶する沈線を平行させる。途絶部分には半月状の刺突を施す。胴部の文様は胴部の最大径部分の上に施されており、LRを施した後、平行する二条の沈線の間に、端部に刺突を有する途絶する沈線を平行させる。途絶部分には半月状の刺突を施す。1294は1293と同様、頭部に沈線を巡らせ、段状になっている。

1295から1311は深鉢の胴部で、有文である。1295から1297は外面にRLを施した後、沈線を施す。

1295はRLを施した後に沈線で区画して磨消繩文としている。1296は節の大きな繩文、1297は節の細かい整ったものであり、沈線端部に刺突を有する。

1298から1306は外面にLRを施した後、沈線を施す。1298は施文後に撫でており、繩文が不鮮明になっている。1299と1300は端部に刺突を有する沈線を施しており、意匠は三角形状文の可能性が考えられる。1301は磨消繩文としている可能性がある。1302は、端部に刺突を有する沈線を施しており、精緻な作りである。1303は薄手である。1304の沈線は全てで五条であり、二条が対になる沈線を巡らし、その間に山形状の沈線文を施す。下端の沈線は文様帯の下限を示すと考えられるが、繩文はその下に施されている。1305はLRを施した後に沈線を巡らせて磨消繩文としている。繩文帯の下端には、刺突で途絶する沈線文を施す。1306の沈線は全てで五条であり、二条が対になる沈線を巡らしてその間を磨消繩文としている。繩文帯には蛇行文を施す。

1307は節の小さな整ったRLを施した後、沈線で区画して磨消繩文としている。精選された粘土を使用しており、精緻な作りである。

1308と1309は胴下部である。いずれもLRを施した後、沈線を施しており、沈線下は無文である。1310は沈線を巡らせた後、その上に円形刺突を施す。1311は沈線のみを施す。

1312から1315は繩文のみを施す深鉢である。1312と1313は口縁部で、1312は節の細いRLを内外面に、1313は外面のみにそれぞれ施す。1313は擬口縁の可能性がある。1314と1315は胴部であって、いずれもLRで羽状文を施す。

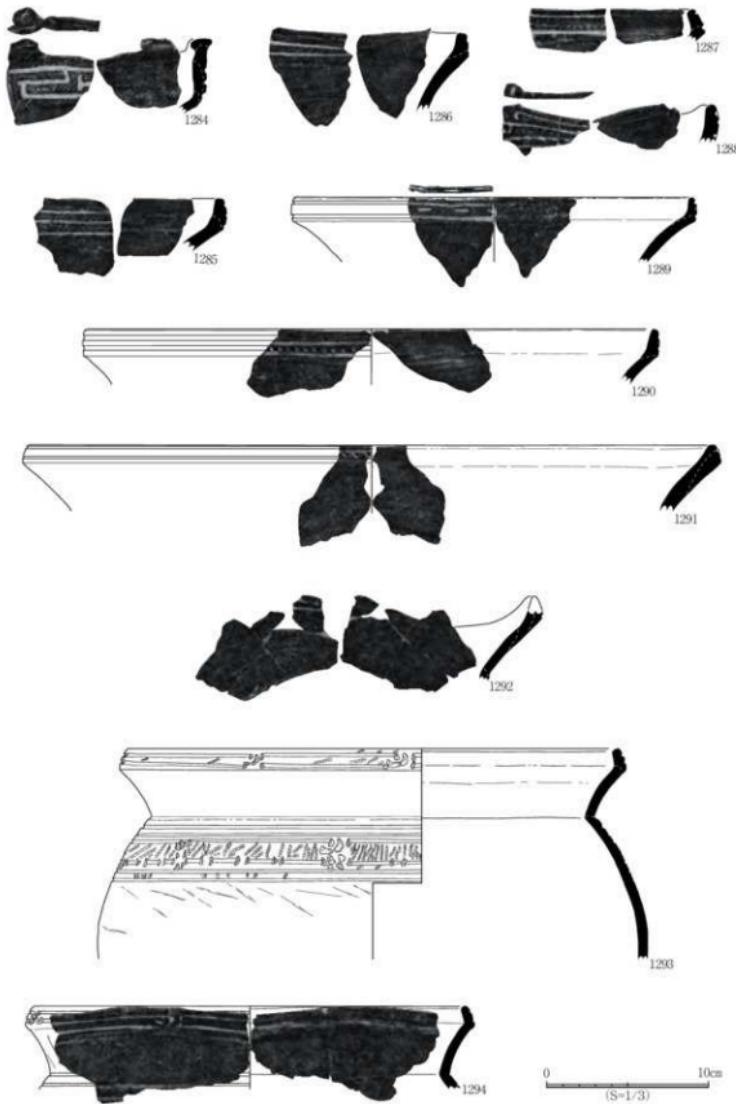


Fig.151 第5次調査 G.B.0出土遺物 (1284~1294)



Fig.152 第5次調査 G.B.0 出土遺物 (1295 ~ 1311)

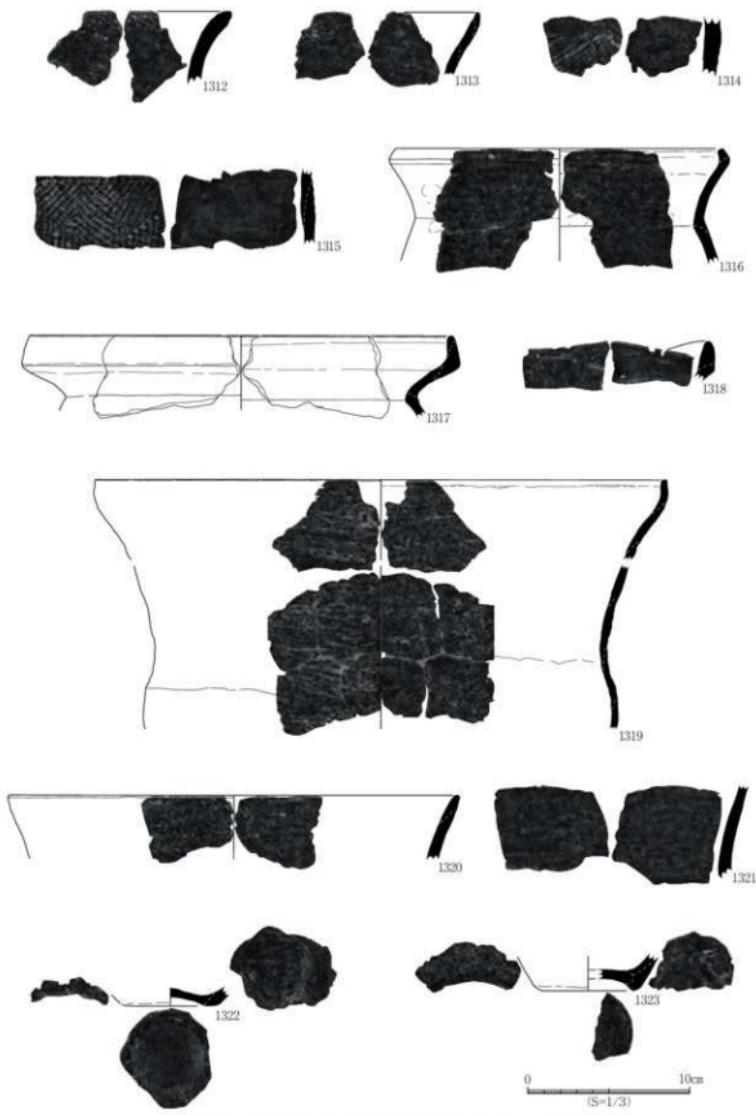


Fig.153 第5次調査 G.B.0出土遺物 (1312~1323)

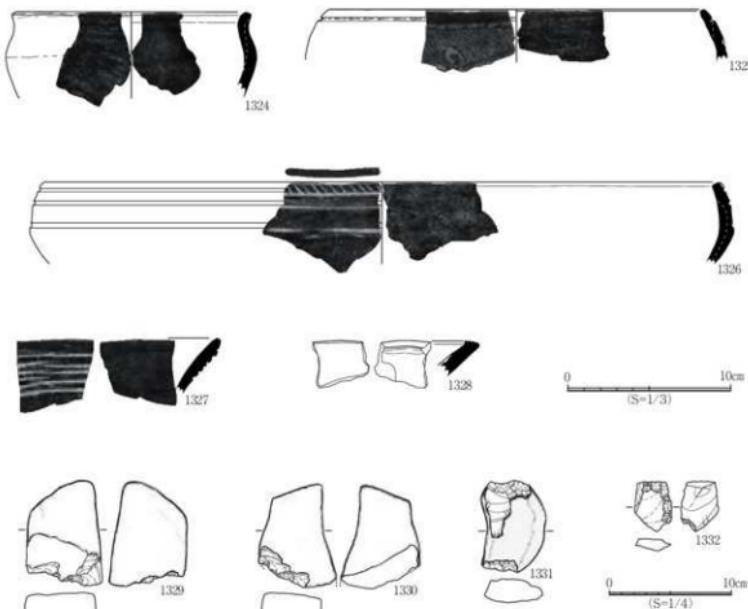


Fig.154 第5次調査 G.B.0出土遺物 (1324～1332)

1316から1321は深鉢で、無文である。1316と1317は外傾する頸部から屈曲して口縁部が立ち上がる。1316は口唇部を強く面取る。1317の口縁部はやや幅広である。1318は波状口縁であり、口唇部を面取る。1319は薄手であり、長い頸部が緩やかに外反して口縁部まで立ち上がる。1320は砲弾形になると考えられ、口唇部を強く面取る。1321は頸部であり、屈曲して口縁部が立ち上がると考えられる。

1322と1323は深鉢の底部である。いずれも凹み底で、1322は接地部分を面取る。

1324は小形の土器であり、鉢になると考えられる。頸部は短く、口唇部を強く面取る。

1325から1328は浅鉢である。1325と1326はボウル形であり、いずれも外面に文様を施す他、口唇部を強く面取る。1325は外面に凹を施した後、口縁部直下に彗星様に尾を引く刺突を押し引いて沈線を巡らす。縄文帯の下に端部が渦文となる沈線が施されており、磨消縄文としていた可能性が考えられる。1326は外面に沈線を三条巡らし、口縁部外面直下に右に斜行する刻みを施す。1327と1328は口縁部が大きく開く器形であり、1327は外面に平行する五条の沈線を施す。1328は断面を算盤玉状に成形しており、内面に段を有する。

1329から1332は石器である。1329と1330は打製の石斧であり、いずれも石材はホルンフェルスである。1331は打ち欠き石錐であり、石材は砂岩である。1332は削器であり、石材はホルンフェルスである。

G.B 1 (Fig.155)

18点が出土している。出土物は包含層のものであり、7点を図示した。

1333は深鉢であり、外傾する頭部から屈曲して内傾する口縁部が立ち上がる。口唇部はやや強く面取る。口縁部外面にはLRを施した後、二条の平行する沈線を巡らして磨消繩文としている。下の沈線は、端部の一方に刺突を施して折り曲げるよう収めているために途絶する。繩文帯には、途絶を繋ぐ様に、かすがい様の沈線文を施す。

1334は深鉢の胴部であり、外面に沈線文を施す。平行する二条の沈線で区画し、その間に端部を刺突し途絶する沈線文と、半月状の刺突を施す。

1335から1338は繩文のみ施す深鉢である。1335と1336は口縁部で、1335は玉縁状に成形した口縁部外面にRLを施す。小形の土器であり、口縁部下端に浅い沈線を一条巡らす。1336は平縁に粘土塊を貼付して突起を作出する。突起の頂部に刻みを施す。口縁部は外面を肥厚させてRLを施す他、その下端に浅い沈線を一条巡らす。1337と1338は胴部であり、いずれも外面にRLを施す。1337は厚く重い。1338は羽状文としている。

1339は石器である。打製の削器であり、石材はホルンフェルスである。

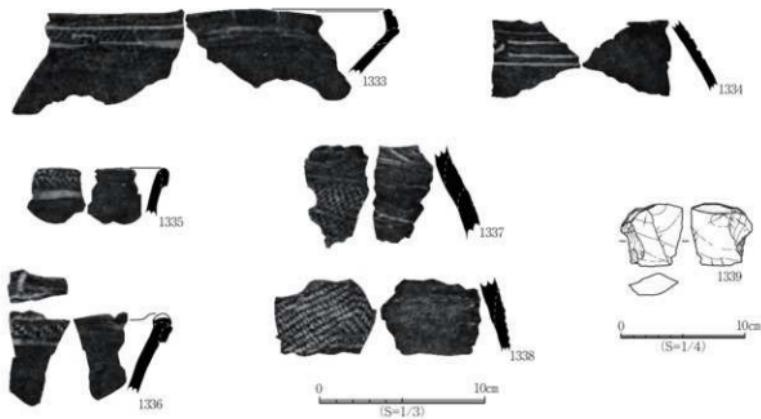


Fig.155 第5次調査 G.B 1 出土遺物 (1333 ~ 1339)

G.B 2 (Fig.156・157)

54点が出土している。出土物は、貝層下と包含層のものがあり、貝層下出土のものを3点、包含層出土のものを16点図示した。尚、包含層の中には、II b層つまり黒褐色混土貝層が所在すると考えられる。

1340から1342は貝層下つまり黒褐色混土貝層(II b層)の下から出土したもので、全て繩文のみ施す深鉢の口縁部である。1340は口唇部を強く面取り、外面にRLを施す。その下に一条の沈線を巡らす。1341は口縁部外面を肥厚させ、口唇部を緩く面取る。外面にLRを施し、その下に一条の沈線を巡らす。1342は口縁部の内外面にLRを施し、その下端を強く撫でて段を作出している。



Fig.156 第5次調査 G.B 2貝層下出土遺物 (1340 ~ 1342)

1343から1358は黒褐色混土貝層(II b層)を含む包含層から出土したものである。

1343から1348は深鉢で、有文である。1343は口縁部外面を肥厚させており、口唇部に沈線を一条巡らす。頭部は短く、胴部にも沈線文を施す。1344は口縁部外面にRLを施した後、幅広の沈線を一条巡らす他、内面に段を作出している。1345は平線に粘土塊を貼付して、瘤状の突起を作出している。突起には刺突の押引きで沈線文を施しており、花弁状を呈する。外面にはRLを施す他、その下に一条の凹線状の凹みを巡らす。1346は平線に粘土塊を貼付して鱗状の突起を作出している。外面にLRを施し、突起の中央に刻みを施す他、三条の沈線を巡らす。1347は口縁部外面を強く面取り、RLを施す。内面に渦文とそれを囲む弧状文を沈線で描いており、波状口縁となる可能性が考えられる。1348は胴部であり、LRを施した後、沈線で三角形状文の意匠を描く。小型の土器である。

1349から1352は繩文のみを施す深鉢である。1349から1351は口縁部で、1349は口唇部と外面を面取り、外面にLRを施す。1350は口唇部と外面を面取り、LRを施す。口縁部下端には一条の沈線を巡らす。1351は口縁部外面を面取り、LRを施す。1352は胴部であり、LRを施す。

1353は深鉢の口縁部で、端部を玉縁状に成形する。

1354は土器の胴部と考えられ、極めて厚い。粘土紐を蛇行させたものを外面に貼付している。

1355と1356は浅鉢である。1355はボウル形であり、口唇部を強く面取る。外面にRLを施した後、平行する二条の沈線を巡らせ、その間の繩文帯に二条の平行する沈線で波状文を描いて区画し、磨消繩文としている。1356は胴部であり、算盤玉状に屈曲する器形と考えられる。外面にRLを施した後、平行する沈線で区画し、磨消繩文としている。屈曲部には、継位の短沈線4つを対とする文様を施しており、文様帯を区画していたと考えられる。

1357と1358は石器である。石材はいずれもホルンフェルスであって、黒褐色混土貝層から出土している。1357は削器、1358は二次加工剥片である。

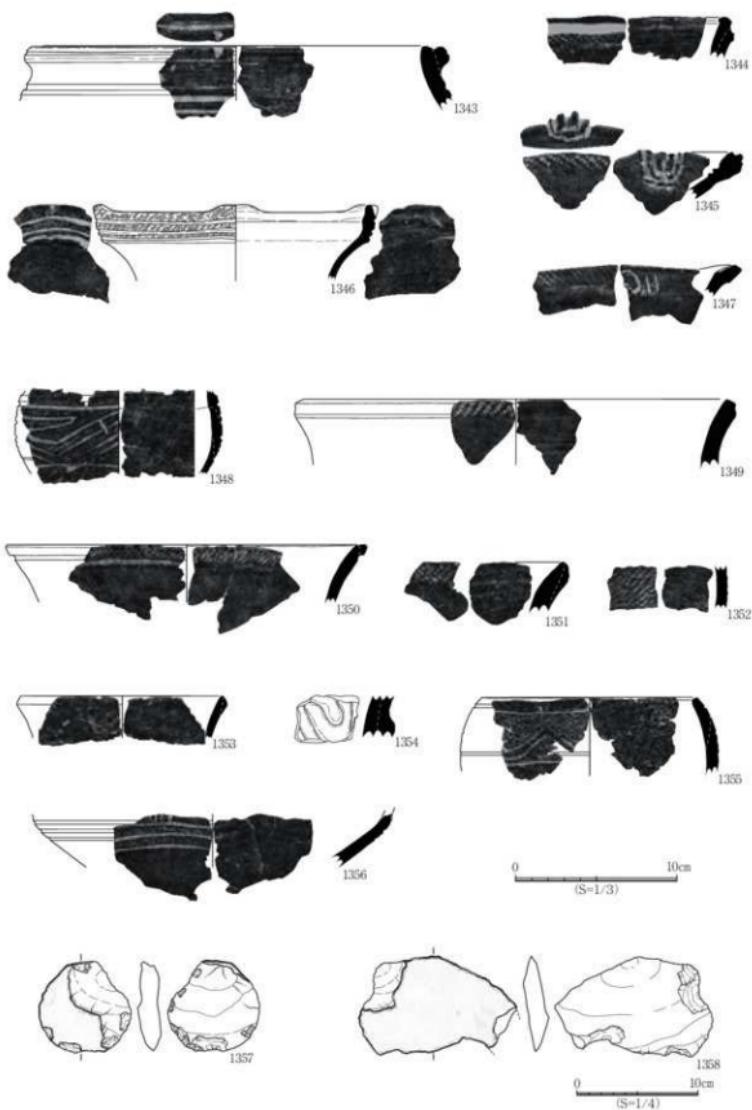


Fig.157 第5次調査 G.B. 2出土遺物 (1343～1358)

G.B 4 (Fig.158~163)

分層に基づき発掘されたグリッドであって、343点が出土している。層序は、I層(表土)・II a層(黒褐色混貝土層)・II b層(黒褐色混土貝層)・II c層(純貝層)・II d層(黒褐色混貝土層)・IV a層(赤茶褐色混貝土層)・IV b層(赤褐色砂質シルト層)・IV c層(明褐色砂質シルト層)・V層(黄褐色砂質シルト)であり、他のグリッドで堆積しているIII層は確認していない。66点を図示した。

1359から1364はI層からの出土物である。1359から1361は縄文のみ施す深鉢の口縁部であり、1359は小形の土器で、面取りした外面にLRを施す。1360は外面にLRを施し、内面を幅広く面取る。1361は内外面に筋の細いLRを施す。1362は壺の口縁部であり、断面を玉縁状に成形している。精選された粘土を使用しており、精緻な作りである。1363は浅鉢であり、ボウル形の器形である。口縁部をやや厚く作出しており、外面にRLを施した後に沈線で区画して磨消縄文としている。1364は浅鉢であり、ボウル形の器形である。外面にRLを施した後に沈線で区画して磨消縄文としている。

1365はII a層からの出土物である。縄文のみ施す深鉢の口縁部であり、口唇部を強く面取る。内外面にRLを施す。



Fig.158 第5次調査 G.B 4 I層・II a層出土遺物 (1359 ~ 1365)

1366から1372はII b層からの出土物である。1366から1369は縄文のみ施す深鉢の口縁部であり、いずれも口唇部を強く面取る。1366は外面にRLを施し、外面には施文部の下に一条の極めて浅い沈線を施す。1367は内外面にLRを施す。1368は、やや厚く作出した口縁部外面にRLを施す。1369は口唇部にRLを施す。

1370は深鉢であり、小形である。やや厚く作出した口縁部外面にRLを施し、胴部にはその上半にRLを施した後に沈線で長梢円文を描いて区画して磨消縄文としている。精選された粘土を使用しており、精緻な作りである。

1371は深鉢の胴部、1372は深鉢の底部である。いずれも“集中”という注記があることから、遺物が集中していた地点があったと考えられる。1371は胴上部に最大径を有しており、その部分に巻貝の回転縄文を施す。1372は凹み底であり、円盤に成形した粘土塊を基礎にして整形している。

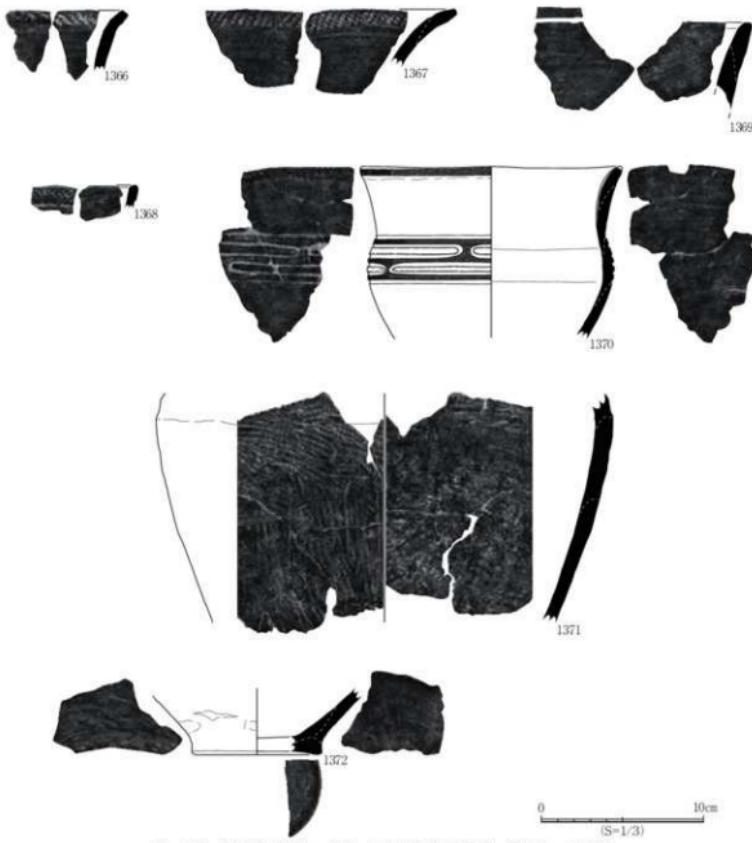


Fig.159 第5次調査 G.B. 4 II b 層出土遺物 (1366 ~ 1372)

1373から1389はII c層からの出土物である。1373から1375は深鉢の胴部で、有文である。1373は外面に幅広の沈線で施文する。1374はRLを施した後に沈線で区画して磨消繩文としている。1375はLRを施した後に沈線で区画し、磨消繩文としている。

1376から1381は繩文のみを施す深鉢である。1376と1377は口縁部で、面取りした口唇部と外面にLRを施す。1378から1381は頸胴部であり、1378から1380はLR、1381はRLを施す。

1382と1383は深鉢で、無文である。1382は口縁部で、外面に右に斜行する沈線文を施す。1383は胴部であり、内面に右下から左上に向かう巻貝条痕が残る。

1384と1385は深鉢の底部であり、いずれも平底である。1386は浅鉢の底部であり、平底であったと考えられる。



Fig.160 第5次調査 G.B. 4 II c層出土遺物 (1373～1386)

1387と1388は石器である。1387は石鏃の未製品と考えられ、石材はホルンフェルスである。

1388は磨面が認められるが、極めて小さい範囲である。また、全体的に赤みを帯びており、被熱していると考えられる。石材は砂岩である。

1389は貝製品である。巻貝であって、ウチヤマタマツバキガイと同定されている。外唇を研磨して面取りしている他、体部に2箇所の孔を有する。孔は、外側から擦り切るように加工工具を動かして開けており、擦り切り痕には土壌及び石灰華の付着が認められる。穴の形状は円形と梢円形で、それらの間の貝殻の部分には擦れた痕跡が認められるため、紐を通していった可能性が高い。

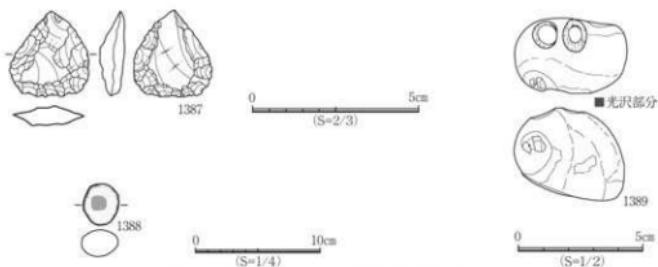


Fig.161 第5次調査 G.B 4 II c層出土遺物 (1387 ~ 1389)

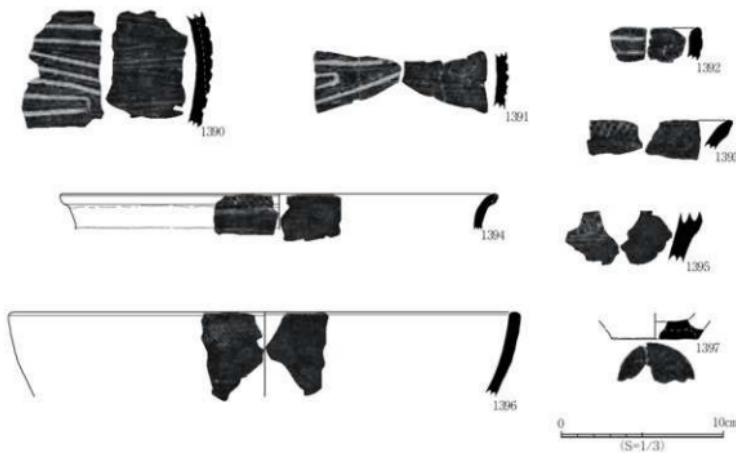


Fig.162 第5次調査 G.B 4 II d層出土遺物 (1390 ~ 1401)

1390から1401はⅡ d 層からの出土物である。1390と1391は深鉢の胴部で、外面に沈線文を描く。1392は深鉢の口縁部で、外面に縄文を施した後、平行する二条の沈線を施す。1393から1395は縄文のみ施す深鉢の口縁部である。1393は口唇部を強く面取り、外面にRLを施す。1394は玉縁状に成形した口縁部の外端を面取り、RLを施す。頭部が短い小形の器形であって、精選された粘土を使用しており、精緻な作りである。1395は厚く作出した口縁部外面にRLを施す。

1396と1397は浅鉢であり、同一個体であった可能性がある。1396は口縁部で、ボウル形である。口唇部を強く面取り、外面直下に筋の細いRLを施す。1397は底部で平底であるが、内周の外側を強く撫でており、極めて緩い凹みとなっている。粘土の接合痕も顕著であり、規則正しく指頭圧痕様の押圧を加えている。

1398から1401は石器である。1398は打製の石鎌であり、先端は欠損している。1399は打製の石鎌であるが、未製品である。1400は石核である。これらの石材はホルンフェルスであるが、1399は他の2つに比べて、若干風化が進んでいる。1401は敲石であり、石材は砂岩である。河川の転石を磨いて卵状に成形してから使用しており、表裏と側縁に敲打痕を有する。

1402から1419はIV 層上面の出土物である。1402から1405は深鉢の口縁部である。1402は玉縁状に成形した口縁部直下に一条の沈線を巡らす。1403は口縁部内面を肥厚させ、その上面に中空の原体で円形刺突の押し引きを二条施しており、沈線状となっている。口縁部外面直下に一条の沈線を巡らす。1404は強く面取りした口唇部と外面にRLを施し、外面には平行する二条の沈線を巡らす。

1405から1408は深鉢の胴部である。1405と1406は、外面にRLを施した後に沈線で区画して磨消縄文としている。1405は橋状把手が剥離した痕跡が認められ、1406の沈線は幅広いものである。1407は右に斜行する沈線、1408は三角形状文の意匠を、それぞれ描く。

1409から1412は縄文のみ施す深鉢の口縁部である。1409は波状口縁であり、玉縁状に成形した口縁部外面にRLを施す。口唇部には浅い沈線を施しており、内面に段を作出している。1410と1411は口唇部を強く面取り、縄文を施す。1410は外面にもRL、1411は外面にもLRと内面に沈線を、それぞれ施す。1412は口唇部と外面を面取り、外面に筋の細かい整ったRLを施す。小形の土器であって、精緻なつくりである。

1413は深鉢で、無文の口縁部である。精選された粘土を使用している。

1414は深鉢の底部であり、凹み底である。

1415から1419は浅鉢である。1415は波状口縁の波頂部であり、頂部は面取りした後にRLと刻みを施す。波頂部には沈線を絡ませており、刻みを巻き込んでいる。外面にもRLを施した後に沈線で区画して磨消縄文としている。精選された粘土を使用し、ボウル形の器形になる。赤彩されていた土器である。1416と1417は胴部であり、1416は沈線で区画した後にRLを施し、充填縄文としている。

1417は算盤玉状に屈曲する器形であり、RLを施した後に沈線で区画し、磨消縄文としている。1418はボウル形の器形であると考えられ、外面に三条以上の沈線を施して、平行させたと考えられる。1419は底部であり、体部が大きく開く皿形の器形が考えられる。

1420と1421はIV a 層からの出土物である。いずれも深鉢の頸胴部で、1420は胴部外面に整ったRLを施す。1421は無文である。

1422はIV b 層からの出土物で、深鉢の口縁部である。口唇部を強く面取り、RLを施した後に幅の広い沈線を二条以上施すと考えられる。

1423はIV c層からの出土物であり、深鉢の胴部で無文である。

1424はIV d層からの出土物であり、深鉢の口縁部である。外面に沈線様の文様を有する。

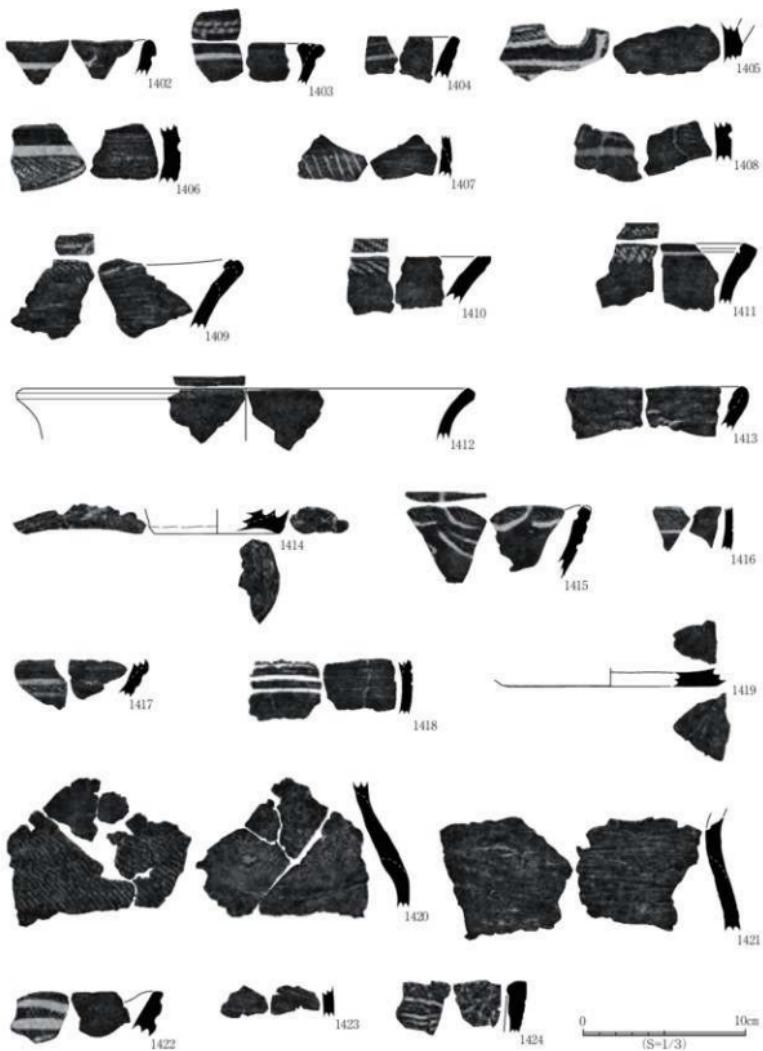


Fig.163 第5次調査 G.B. 4 IV層出土遺物 (1402 ~ 1424)

G.C 0 (Fig.164・165)

74点が出土している。出土物は包含層のものであり、20点を図示した。

1425から1435は深鉢で、有文である。1425は口唇部を強く面取り、内端を突出させる。外面に巻貝の殻頂を原体とする刺突列を2つ有する。1426から1429は、外反または外傾する頭部から屈曲して口縁部が立ち上がり、口縁部外面に文様を有する。1426は平線に粘土塊を貼付して突起を作出している。突起の外端を刻む他、LRを施す。1427は口唇部に右に斜行する刺突の他、外面に平行する二条の沈線を巡らす。1428は平線であり、LRを施した後に平行する二条の沈線を巡らせるが、それぞれ円形刺突を有するため途絶していたと考えられる。1429はLRを施した後、外面に平行する二条の沈線を巡らす。沈線の間に刺突を施す他、短い頭部の下端にも刺突を施す。

1430から1435は深鉢の胴部である。1430は筋の太いLRを施した後に、平行する二条の沈線を巡らす。1431は外面にLRを施した後に、沈線でヤツデの葉様に区画して磨消繩文としており、薄手である。1432から1434はLRを施した後、沈線文を施す。1434は端部に刺突を施しており、意匠は三角形状文である。1435は平行する二条の沈線を施す。

1436は浅鉢の胴部である。ボウル形であり、外面にLRを施した後、沈線で区画して磨消繩文をしている。

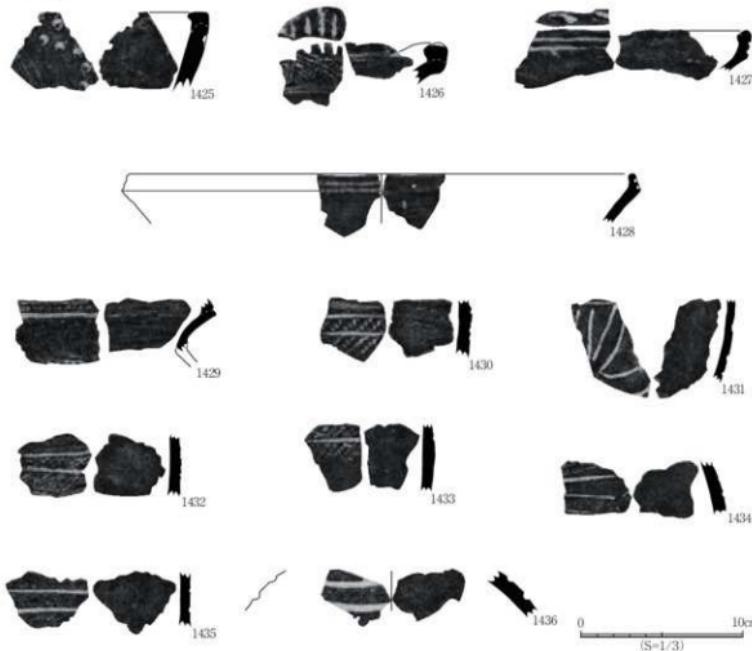


Fig.164 第5次調査 G.C 0 出土遺物 (1425～1436)

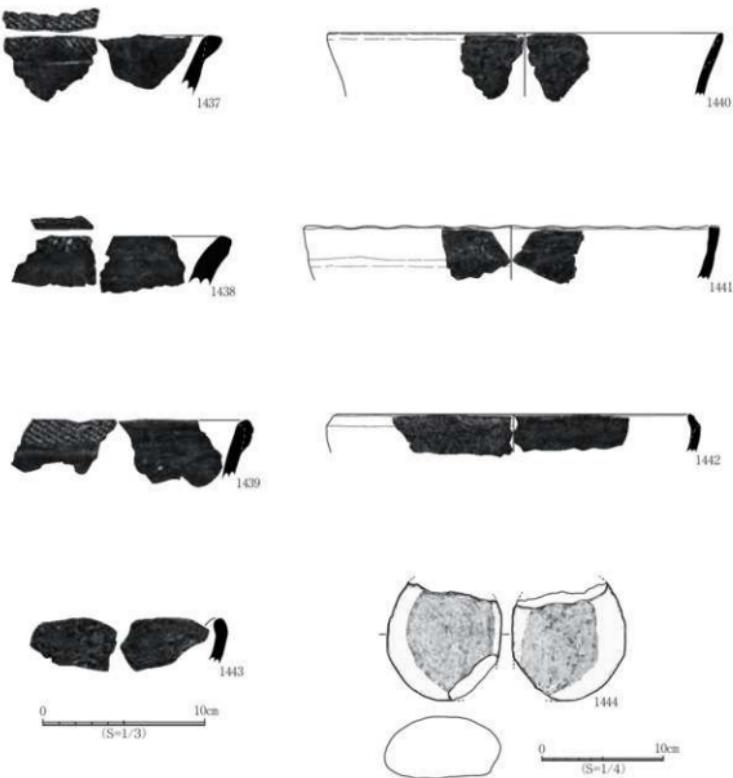


Fig.165 第5次調査 G.C. 0出土遺物 (1437 ~ 1444)

1437から1439は縄文のみ施す深鉢の口縁部である。1437と1438は口唇部を強く面取り、1437は口唇部と外面にRLを、1438は外面に筋の太いRLをそれぞれ施す。1439は強く面取りした外面にRLを施し、口唇部を緩く面取る。

1440と1441は深鉢の口縁部で、無文である。1440は口縁部外面直下を緩く面取り、1441は口唇部を面取りした後に細かく押圧している。いずれも小形の土器である。

1442と1443は浅鉢の口縁部である。1442は口唇部を緩く面取り、端部を内傾させる。外面にRLを施す。1443は端部を渦様に丸めた粘土紐を内面に貼付しており、突起様になっている。

1444は石器である。磨石であり、光沢があるのは、使い込まれた結果と考えられる。石材は砂岩である。

G.C 1 (Fig.166)

24点が出土している。出土物は包含層のものであり、10点を図示した。

1445から1447は深鉢の口縁部である。1445は口縁部外面に粘土帯を貼付し、断面を三角形に成形している。口縁部外面を撫でて整えた後に、その下に右に斜行する刺突を施す。口唇部を強く面取る。1446は波状口縁であり、口縁部を厚く作出している。外面にRLを施す他、波頂部内面にもRLを施した後に沈線で弧状文を描いている。1447は外反または外傾する頭部から屈曲して口縁が立ち上がる。外面にLRを施した後に二条の沈線を施すが、下のものは波状である。

1448と1449は深鉢の胴部である。1448はLRを施した後、平行する複数条の沈線を施す。1449はやや幅広の沈線文を描いており、下の沈線は文様帶の下端を示すと考えられる。

1450から1453は縄文のみ施す深鉢である。1450と1451は口縁部であり、いずれも口唇部と外面を強く面取る。1450は口唇部と外面にLRを施す。1451は外面にRLを施し、精選された粘土を使用している。精緻な作りである。1452と1453は胴部であり、1452はLR、1453はRLを施しており、1453は羽状文としている。

1454は深鉢の底部である。凹み底であり、体部が大きく開く器形である。

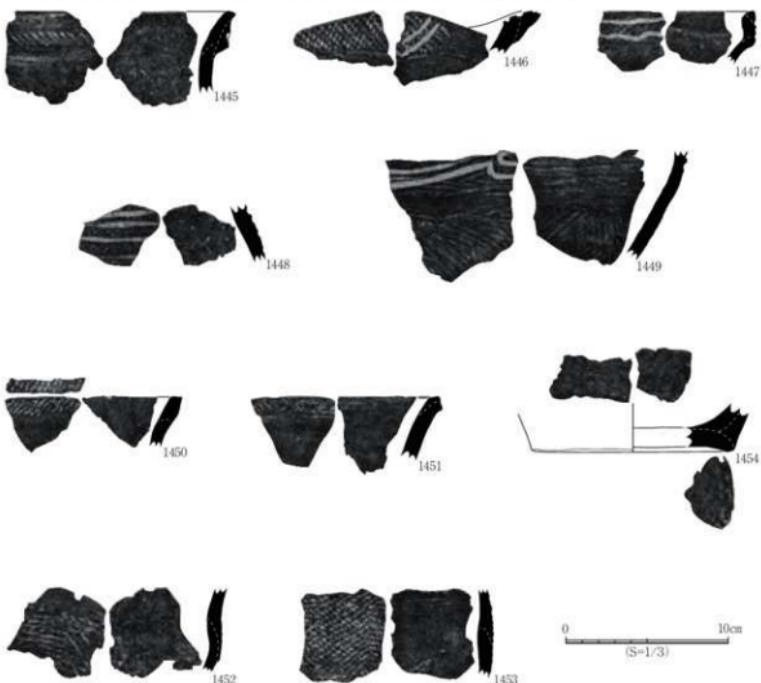


Fig.166 第5次調査 G.C 1出土遺物 (1445～1454)

G.C.2 (Fig.167・168)

132点が出土している。出土物は包含層のものであり、34点を図示した。

1455から1457は深鉢の口縁部であり、いずれも口縁部外面に文様を施す。1455と1456は波状口縁の波頂部である。1455は口唇部と口縁部外面を緩く面取る。口縁部外面と波頂部下に刺突文を有しており、それを深い沈線で区画している。1456は卷貝の回転擬繩文を施した後、主文様と従文様で構成される文様を施す。主文様は円文で、従文様は沈線文である可能性が考えられ、施文具は卷貝の腹縁である。1457はRLを施した後、平行する二条の沈線を巡らす。

1458と1459は深鉢の胴部であり、いずれも外面に文様を施す。1458はRL、1459はLRを施した後、沈線文を施す。1459は沈線文の下の繩文を羽状文としている。

1460から1476は繩文のみを施す深鉢である。1460から1470は口縁部であり、1460は内外面にLRを施す。1461は内外面にLRを施し、外面に一条の沈線を巡らす。突起を有すると考えられる。1462は口唇部と外面を強く面取り、外面にLRを施す。1463から1465は口唇部を強く面取る。1463は口唇部にLRを施し、頸部下端に一条の沈線を巡らす。1464は口唇部と外面にRLを施す。1465は口唇部と外面にRLを施す。内面に一条の沈線を巡らしており、波状口縁となる。1466は外面にRLを施し、内面に沈線文を有する。1467は外面と胴部にRLを施しており、胴部上端が羽状文である。精選された粘土を使用し、精緻な作りである。1468は口唇部を面取り、外面と胴部にRLを施す。1469は、やや厚く作出した口縁部の口唇部と内端そして外面を強く面取り、外面にLRを施す。1470は口唇部を強く面取り、外面と胴部にRLを施す。1471から1476は頸胴部であり、1471は胴部にRLを施し、羽状文としている。1472は頸部下端を削り出しており、胴部にRLを施す。1473は胴部にRLを施し、羽状文としている。施文部の下は磨いており、精緻な作りである。精選された粘土を使用している。1474はRLを施し、原体の折り返しの痕跡が明瞭に残る。1475はRLを施し、羽状文としている。1476は節の太いRLを施している。

1477から1480は深鉢で、無文である。1477と1478は波状口縁で、口唇部を面取る。1478は極めて緩い波状口縁である。1479は口縁部であり、外面に卷貝条痕が残る。1480は胴部であり、表裏に二枚貝条痕が残る。

1481から1486は浅鉢である。1481は口縁部で、ボウル形である。外面に節が細かく整ったRLを施した後に沈線で区画し、磨消繩文としている。赤彩されていた土器である。1482と1483は胴部であり、算盤玉状に屈曲する。1482はRLを施した後に沈線と刺突穴で区画して磨消繩文としている。

1483は屈曲の上部にLRを施した後に沈線で区画して磨消繩文としている。1484は口縁部外面直下に卷貝の回転擬繩文を施す。1485と1486は底部であり、いずれも平底である。

1487と1488は石器である。1487は打製の石斧の可能性があり、中央付近から先の刃部は欠損している。1488は削器である。いずれも石材はホルンフェルスである。

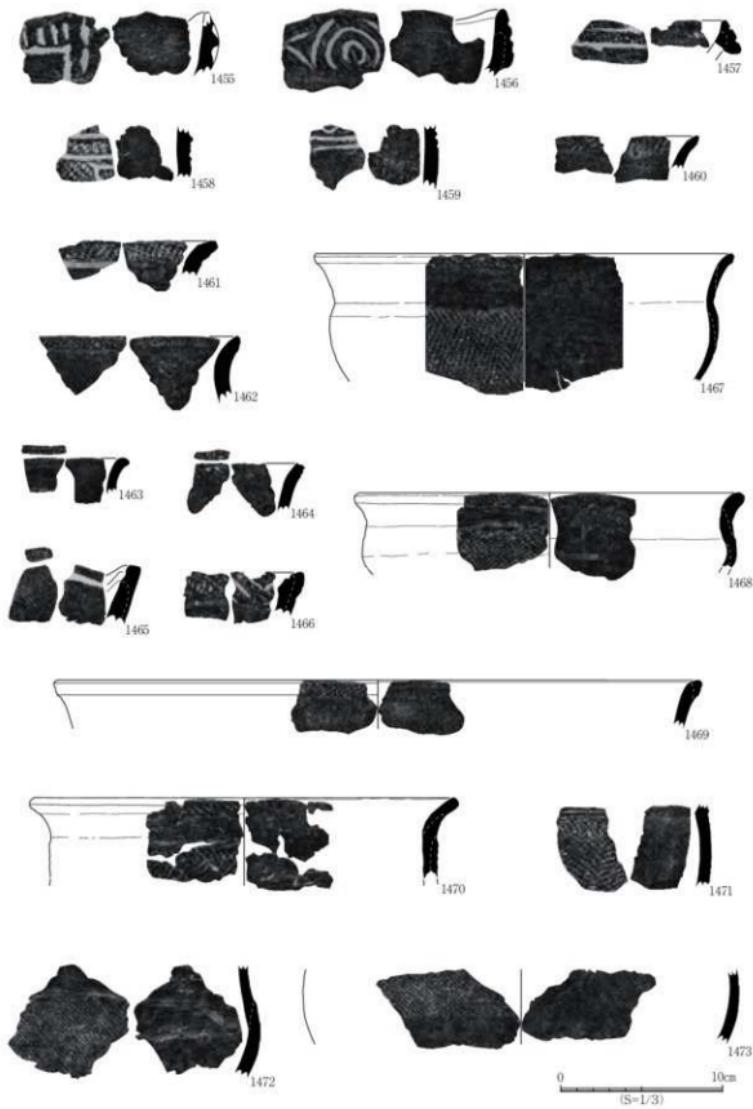


Fig.167 第5次調査 G.C. 2出土遺物 (1455 ~ 1473)

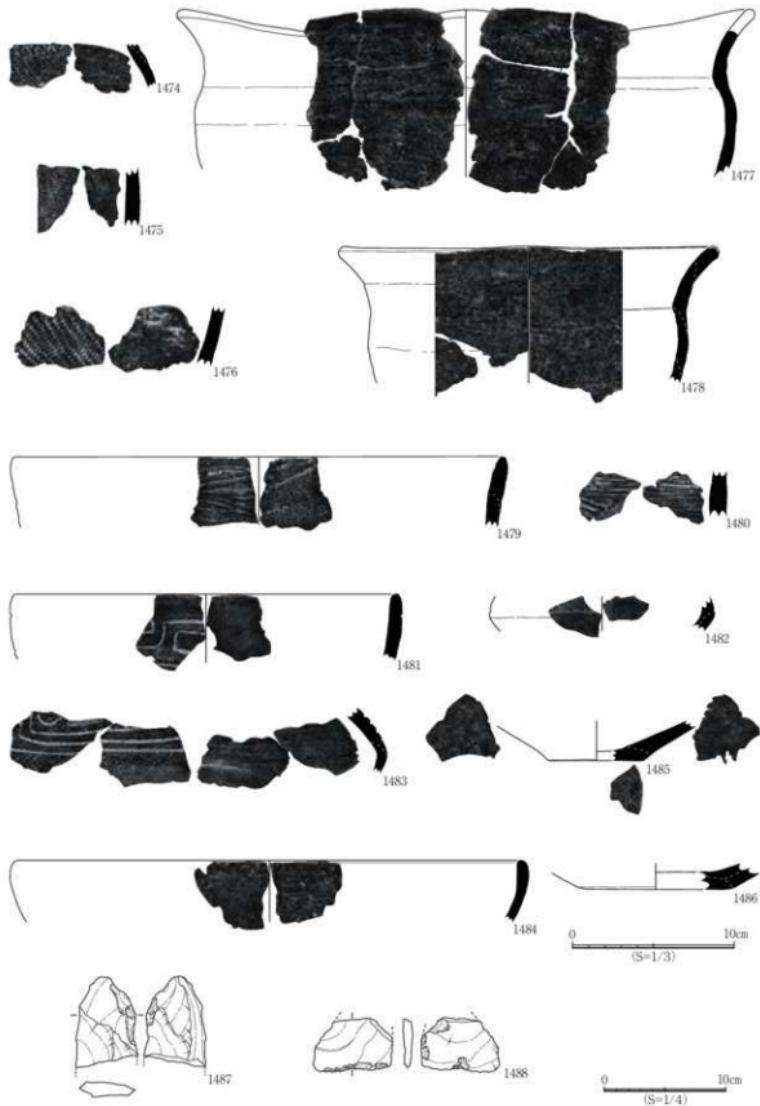


Fig.168 第5次調査 G.C.2出土遺物 (1474 ~ 1488)

G.C 3 (Fig.169)

30点が出土している。包含層からの出土物であり、10点を図示した。

1489は深鉢の口縁部であり、外面に粘土帯を貼付して肥厚させている。口唇部に一条の沈線を這らせ、その中に円形の刺突を施す。1490から1495は縄文のみを施す深鉢の胴部である。1490と1491はLR、1492から1495はRLを施す。1495は羽状文としており、赤彩されていた土器である。

1496と1497は深鉢の底部であり、いずれも凹み底である。1497はⅣ層中からの出土である。

1498は石核であり、石材はホルンフェルスである。

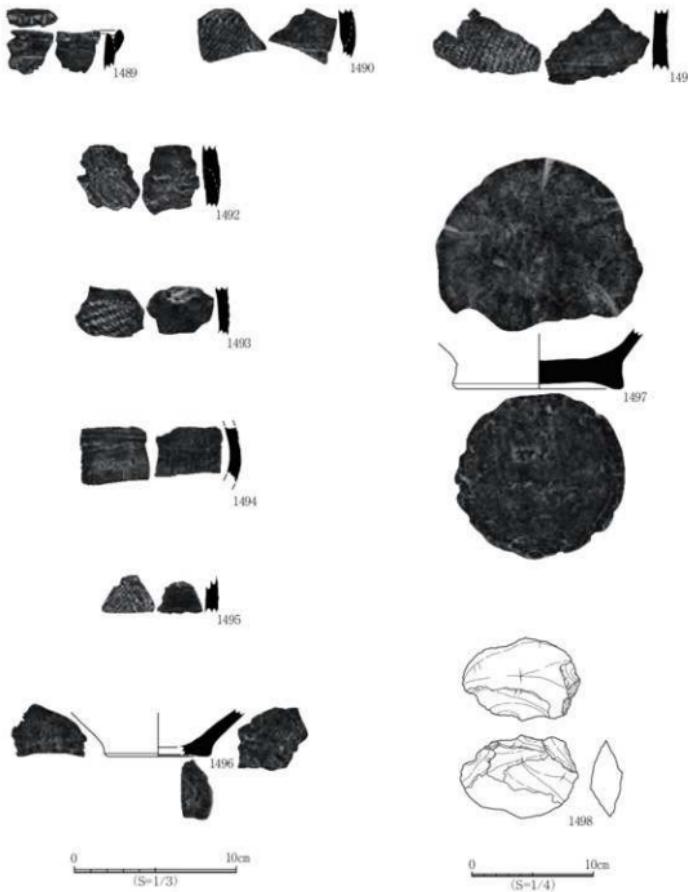


Fig.169 第5次調査 G.C 3 出土遺物 (1489 ~ 1498)

G.C 4 貝層(Fig.170~172)

グリッド全体で 153 点が出土している。貝層の厚さは 35cm 程度であり、調査の際には上層・中層・下層・最下層、そして貝層下に分けて調査を行っている。貝層内の分層は、10cm 刻みの人工層位である。しかしながら、出土した土器の特徴から、それらの人工層位に有意性があるとは言えないため、貝層一括資料として理解し、その中に分類した。38 点を図示した。

1499 と 1500 は深鉢の口縁部であり、有文である。1499 は波状口縁であり、口唇部を強く面取る。口縁部外面に RL を施した後、主文様と從文様で構成される文様を施す。主文様は波頂部下に施されており、その中心を囲むと考えられる弧状文を沈線で描いている。從文様は平行する二条の沈線であり、上のものは口唇部に向かって巴様に丸めて收め、下のものは頭部へせり下がる。1500 は貝層最下層からの出土である。平縁に低い突起を作出し、突起の上面には沈線文を描く。外面には平縁とひと続きの一条の沈線を巡らす。頭部は短く、橋状把手を有するが、そこに施される文様は口縁部や胴部と連続しない。頭部下端及び胴部にも文様を有し、口縁部内面に段を作出している。

1501 から 1503 は深鉢の胴部であり、有文である。1501 は RL を施した後、頭部下端に一条の沈線を巡らす。1502 は複数条の幅広い沈線を巡らした後、RL を施す部分と施さない部分に分けて、充填繩文としている。1503 は複数条の沈線を巡らす。

1504 から 1528 は繩文のみを施す深鉢である。1504 から 1519 は口縁部であり、1504 から 1506 は面取りした口唇部と外面に繩文を施す。1504 と 1505 は RL、1506 は LR をそれぞれ施す。1507 は面取りした口唇部と外面に卷貝の回転擬繩文を施す。1508 は面取りした口唇部に巻貝条痕、そして外面に RL を施す。1509 は面取りした口唇部と内外面に LR を施す。1510 から 1512 は内外面に繩文を施す。

1510 は RL を施し、口唇部を強く面取る。1511 は外面のみ強く面取り、LR を施す。1512 は RL を施し、口唇部を強く面取る。1513 は内外面に RL を施し、内面には繩文の下に一条の浅い沈線を巡らす。口唇部を強く面取る。1514 は内外面に RL を施し、内面には繩文の下に二条の浅い沈線を巡らす他、口縁部外面は削り出したと考えられ、その結果、一条の沈線を巡らした様に見える。1515 は口唇部を面取り、RL を施す。1516 は口唇部を面取り、1 を施す。1517 から 1519 は、玉縁状に形成した口縁部の外面を面取りし、RL を施す。1517 は胴部にも RL を施す。1518 と 1519 は同一個体であり、胴部にも RL を施すが、羽状文である。口縁部下端は削り出したと考えられ、底部付近は磨いている。

1520 から 1526 は頭胴部である。1520 から 1523 は RL、1524 は LR をそれぞれ胴部に施しており、1523 は羽状文としている。1525 と 1526 は巻貝の回転擬繩文を施している。1527 と 1528 は小型の土器であり、1527 は口縁部を玉縁状に作出し、胴部外面には RL を施す。1528 は波状口縁の波頂部であり、頂部に凹みを有する。波頂部脇の口唇部は面取りし、RL を施す。

1529 と 1530 は深鉢で、無文である。1530 は口唇部を面取り、砲弾形の器形になると考えられる。

1531 は深鉢の胴部であり、焼成前穿孔を有する。

1532 と 1533 は深鉢の底部であり、いずれも凹み底である。1532 は内周を丁寧に撫で、1533 は接地部位を面取る。

1534 は浅鉢の口縁部であり、突起を有すると考えられる。外面に RL を施した後、複数条の平行する沈線で区画して磨消繩文としている。赤彩されていた土器であり、内面に段を有する。貝層最下部から出土している。

1535 は壺の胴部と考えられ、内傾する短い頭部から外傾する口縁部が立ち上がると思われる。

1536は石器であり、打製の石鎌である。石材はホルンフェルスである。



Fig.170 第5次調査 G.C. 4 貝層出土遺物 (1499 ~ 1514)

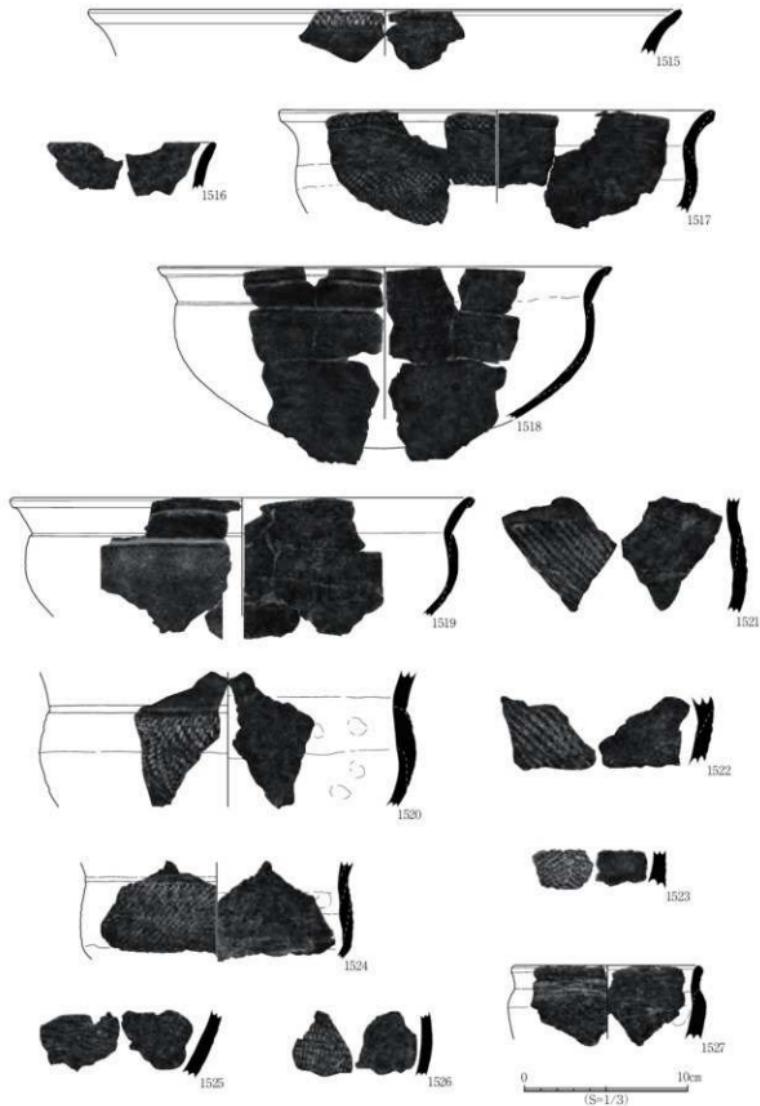


Fig.171 第5次調査 G.C.4貝層出土遺物 (1515~1527)



Fig.172 第5次調査 G.C. 4 貝層出土遺物 (1528 ~ 1536)

G.C 4 CD 間ベルト II c層中位(Fig.173・174)

10点を図示した。

1537と1538は深鉢の口縁部で、外面に一条の沈線を巡らす。1537は、RLを施した後に沈線を巡らす。口唇部を強く面取り、内面に低い段を有する。1538は波状口縁になると考えられ、口唇部を強く面取り、内面に明瞭な段を有する。

1539から1543は縄文のみを施す土器である。1539と1540は小形で、1539は面取りした口唇部と口縁部外面そして胴部に、筋の小さなLRを施す。1540は平縁に突起を作出していた可能性がある。口縁部外面と胴部にLRを施す。口唇部を面取り、口縁部と頸部の下端には削り出しによる段を有する。1541はRL、1542はLRをそれぞれ施して羽状文としている。1543はRLを施しており、底部付近は磨いている。

1544と1545は浅鉢であり、ボウル形である。いずれも口唇部を面取る。



Fig.173 第5次調査 G.C 4 CD 間ベルト II c層中位出土遺物 (1537 ~ 1545)

1546は貝製品で、貝輪である。素材はベンケイガイであり、殻頂部を打ち欠いて孔を穿っている。

穿った後は磨いて面取りしており、側縁には二条を対とする刻みで鋸歯状文を描いている。

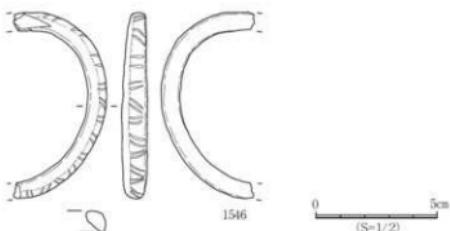


Fig.174 第5次調査 G.C 4 CD間ベルト II c層中位出土遺物 (1546)

G.C 4 CD間ベルト II c層下層 (Fig.175・176)

12点を図示した。

1547は深鉢の口縁部であり、有文である。口唇部を強く面取り、口縁部外面にRLを施した後、一条の沈線を巡らせる。頭部に沈線文を有する。

1548から1550は深鉢の胴部であり、有文である。1548は外面にRLを施した後、沈線で溝文を描いたと考えられる。1549と1550は沈線文を描く。

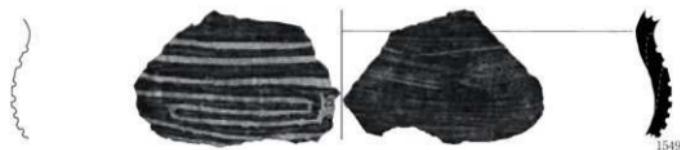


Fig.175 第5次調査 G.C 4 CD間ベルト II c層下層出土遺物 (1547 ~ 1550)

1551から1554は縄文のみ施す土器である。1551から1553は口縁部であり、1551は強く面取りした口唇部と口縁部外面にRLを施す。小形の土器である。1552は口唇部と口縁部外面を強く面取り、口縁部外面にLRを施す。1553は口唇部と口縁部外面を強く面取り、口縁部外面にRLを施す。頸部下端に一条の沈線を巡らす他、内面に段を有する。1554は頸胴部であり、胴部外面にLRを施して羽状文としている。1555は鉢の口縁部であり、無文である。口唇部を強く面取る。

1556は脚付土器の脚の可能性が考えられ、外面に一条の沈線を巡らす。

1557と1558は深鉢の底部である。いずれも極めて緩い凹み底であり、接地部分を強く面取る。

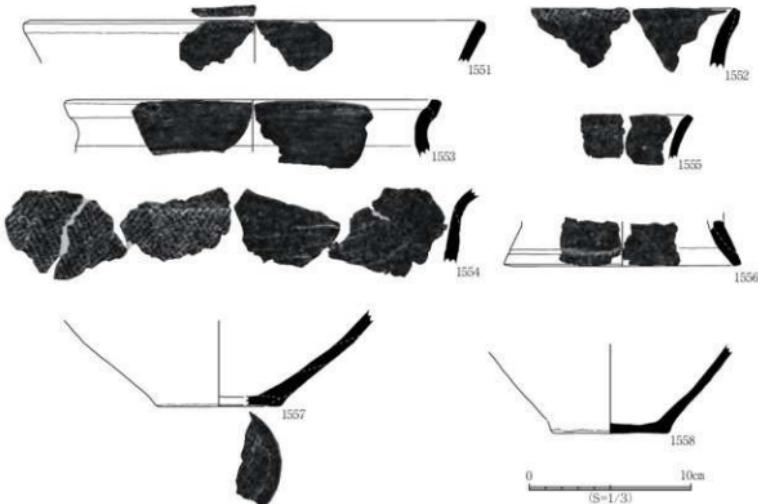


Fig.176 第5次調査 G.C. 4 CD ベルト II c 層下出土遺物 (1551 ~ 1558)

G.C. 4 (Fig.177・178)

17点を図示した。包含層からの出土である。

1559は深鉢の胴部である。ハイガイ等の放射肋が顕著な二枚貝で外面を整えた後、鋭角な山形様の粘土紐を貼付して隆帯を作出し、菱形の刻みを施す。貝層下からの出土である。

1560は深鉢の胴部であり、外面に瘤状の突起を作出している。突起を二条の沈線で囲んだと考えられ、LRを施しており、施文している部分としていない部分を分けた充填縄文としている。

1561から1566は縄文のみを施す深鉢である。1561から1563は口縁部であり、1561は強く面取りした口唇部と外面にRLを施す他、口縁部内面に一条の沈線を巡らす。1562は口唇部を強く面取り、内外面にRLを施す。1563は口唇部と外面を強く面取り、外面にRLを施す。精緻な作りである。1564から1566は頸部である。いずれも胴部にRLを施しており、1565は胴上部は横位に施すが、それから下は縱位に施している。1566は羽状文としている。

1567は深鉢の口縁部であり、内面に段を有する。

1568と1569は深鉢の底部である。1568は貼付高台で、内周を幅広く面取る。1569は平底である。1570から1573は浅鉢である。1570は口縁部で、波状口縁である。ボウル形の器形である。強く面取りした口唇部と外面にLRを施した後、外面に巻貝を原体とする浅く幅広の三条の沈線を施す。1571から1573は胴部であり、1571は胴部が算盤玉状に屈曲すると考えられ、外面にRLを施した後、沈線で区画して磨消繩文としている。1572は外面にLRで羽状文を施した後に沈線で区画し、磨消繩文としている。ボウル形になると考えられ、赤彩されていた土器である。1573は外面にRLを施した後、浅く細い沈線で山形状文の意匠を描くと考えられる。



Fig.177 第5次調査 G.C.4 出土遺物 (1559～1573)

1574は貝製品で、貝輪である。素材はベンケイガイであって、殻頂部を打ち欠いて孔を穿っている。穿った後は磨いて面取りしており、側縁には三条を対とする刻みで間隔の広い鋸歯状文を描いている。

1575は石器であり、打ち欠き石錐である。石材は砂岩である。

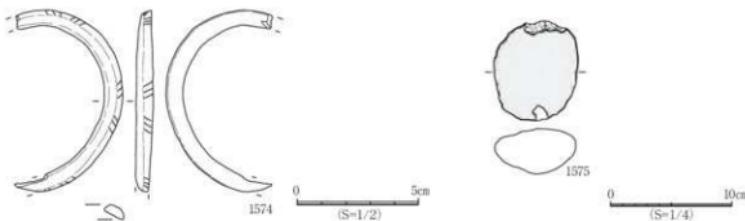


Fig.178 第5次調査 G.C 4 出土遺物 (1574・1575)

G. CD 区間 (Fig.179)

5点を図示した。1576は、CD 2区間ベルトのIV層上面(注記は“4層上面”)から出土している。

縄文のみ施す深鉢の頸胴部であり、胴部外面にRLを施す。1577はCD間ベルトのII b層(注記は“混土具層内”)から出土している。縄文のみ施す深鉢の頸胴部であり、節の細いLRを施して羽状文としている。

1578と1579は縄文のみ施す深鉢である。1578は、厚く作出した口縁部の面取りした口唇部と内外端と胴部外面にLRを施す。胴部は羽状文としている。1579は面取りした口唇部と外面にRLを施す。

1580は浅鉢の底部であり、平底である。

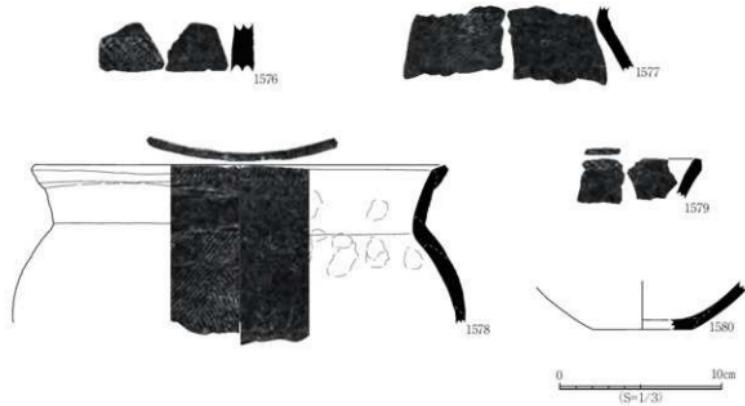


Fig.179 第5次調査 G.CD 区間出土遺物 (1576～1580)

G.D 0 (Fig.180・181)

47点出土している。21点を図示した。

1581から1587は深鉢の口縁部であり、有文である。

1581は口唇部を強く面取り、やや厚く作出了の口縁部外面にRLを施した後、その下端に一条の沈線を巡らす。頸部に文様を施していたと考えられる。

1582から1585は外反または外傾する頸部から屈曲して口縁部が立ち上がり、口縁部外面に文様を施す。1582はLRを施した後に平行する沈線を二条巡らし、口唇部を強く面取る。波状口縁の可能性がある。1583は繩文を施した後に平行する沈線を二条巡らせて、その間に沈線でやや鋭角な山形状文を巡らす。口唇部を強く面取る。1584は繩文を施した後に平行する沈線を二条巡らせ、その間に端部に刺突を有し途絶する沈線文を施す。1585はLRを施した後、平行する沈線を二条巡らすが、下の沈線は刺突を有するため、途絶する。その間の繩文帯には、2つで対になる刺突文を施す。

1586と1587は内湾する口縁部である。いずれも波状口縁であり、口唇部を緩く面取る他、波頂部に刻みを施す。1586は外面にLRを施した後、二条が対になる沈線を口縁部外面の上端と下端に施して区画し、磨消繩文としている。二条が対になる沈線の間は繩文帯となっており、波頂部下の繩文帯には蛇行文を描いている。先端には「U」字状の原体を用いた刺突を施す。1587はLRを施した後、平行する三条の沈線を巡らす。

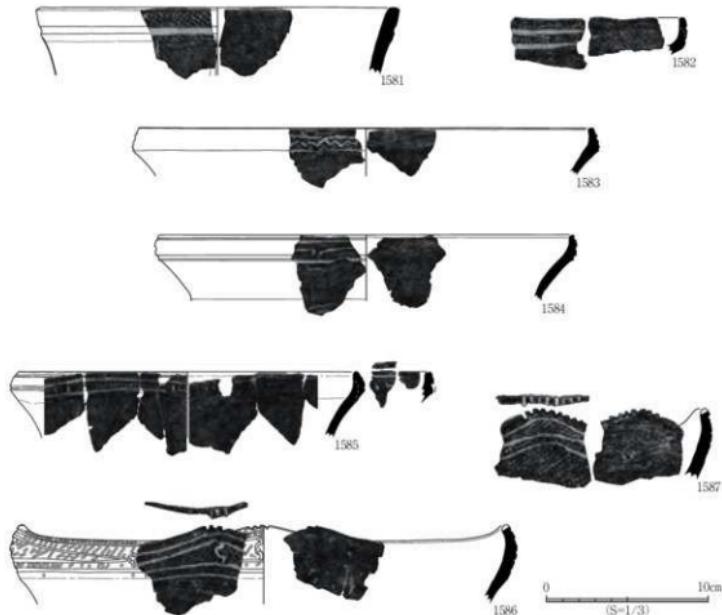


Fig.180 第5次調査 G.D 0 出土遺物 (1581～1587)

1588から1591は深鉢の胴部であり、有文である。1588はRLを施した後に沈線で区画して磨消繩文としている。意匠は波頭状文を継承したものとして理解できるが、頭部のものは形骸化してかすがい状となっており、胴部のものは渦文となっている。1589は外面に平行する沈線文を施す。橋状把手が剥離している。1590は繩文を施した後、端部を丸めて收める沈線文を文様を施す。1591はRLを施した後に沈線で三角形状文を描くと考えられる。

1592から1594は繩文のみ施す深鉢の口縁部である。1592は口縁部を厚く作出し、その外面にLRを施す。1593は外に突出する口縁部を作出しており、面取りした口唇部と外面にLRを施す。1594は、やや厚く作出した口縁部を玉縁状に成形し、面取りした口唇部と内外面にLRを施す他、外面の口縁部直下に一条の沈線を巡らす。

1595はⅦ層からの出土である。深鉢の胴部で、無文である。内面に二枚貝条痕が残る。

1596と1597は浅鉢の胴部として考えられる。1596は、平行する二条の沈線を対とした文様を外面に描く。1597は筋の細かい整ったLRを外面に施した後に沈線を巡らす他、沈線で区画した中に刺突を施したと考えられる。

1598は須恵器である。甕の胴部と考えられ、内面に同心円タタキ、外面に平行タタキとカキメを有する。

1599から1601は石器である。いずれもⅡ層からの出土である。1599は敲石で、全面に敲打痕を有するが、側縁のものが顯著である。石材は砂岩である。1600は打ち欠き石錐であり、石材は砂岩である。1601は打製の石斧であり、その基部である。石材はホルンフェルスである。

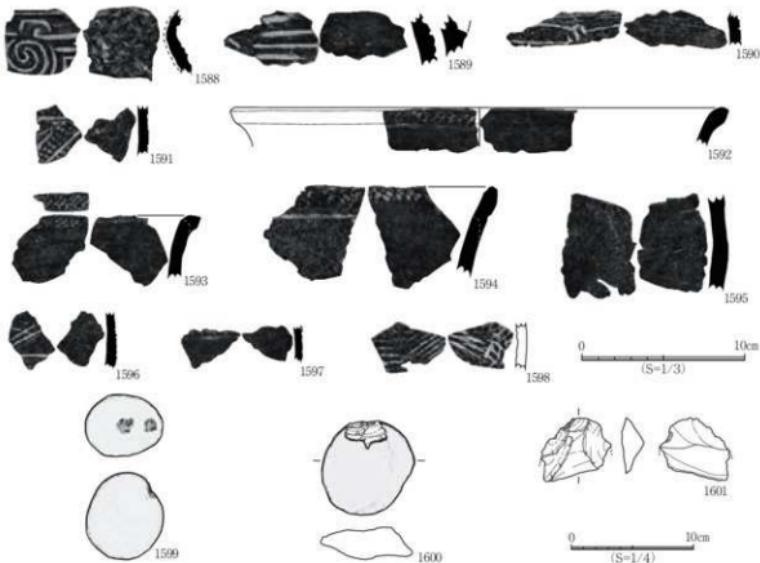


Fig.181 第5次調査 G.D.O出土遺物 (1588～1601)

G.D 1 C 1 南ベルト (Fig.182)

1602は深鉢の脇部で、その下部である。外面に節の細かい整ったLRを施した後、端部に刺突を有する沈線で、三角形状文を描くと考えられる。



Fig.182 第5次調査 G.D 1 C 1 南ベルト出土遺物 (1602)

G.D 1 (Fig.183)

70点出土している。包含層から出土しており、11点図示した。

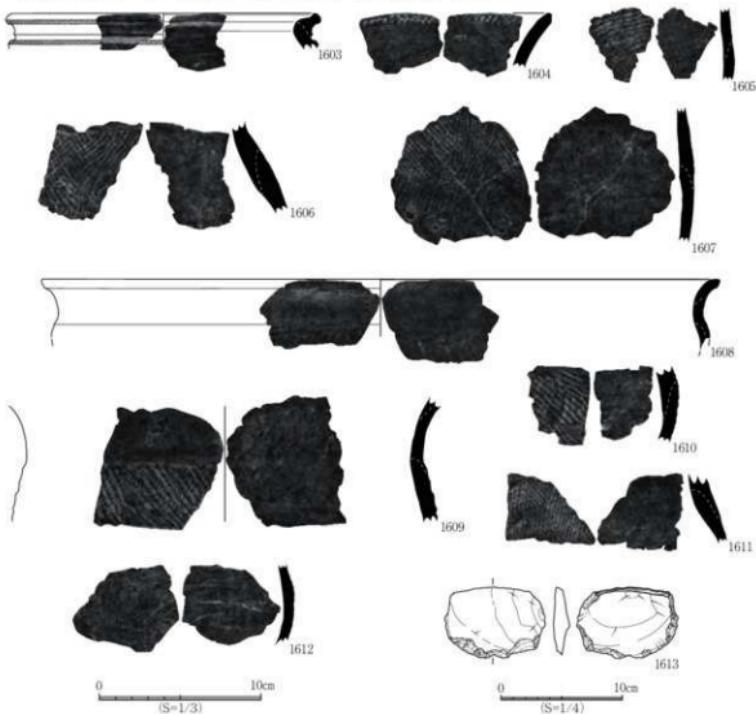


Fig.183 第5次調査 G.D 1 出土遺物 (1603 ~ 1613)

1603と1604はⅡ層(注記は“貝層中”)からの出土物である。1603は小形の土器であり、頸部が短い壺の可能性が考えられる。やや厚く作出した口縁部外面にLRを施す他、内面に段を有する。胴部にはLRを施した後に沈線を巡らしており、磨消繩文であった可能性もある。1604は繩文のみ施す深鉢であり、口唇部を強く面取る。内外面にLRを施す。

1605から1612は繩文のみ施す深鉢である。1605から1607は外面にLRを施す胴部である。1608から1612はRLを施す。1608は面取りした口縁部外面と胴部に施しており、胴部は羽状文である。1609から1612は頸胴部であり、1611と1612は羽状文である。

1613は石器で、Ⅱ層からの出土物である。打製の削器であり、石材はホルンフェルスである。

G.D 2南北ベルト (Fig.184)

3点図示した。

1614は繩文のみ施す深鉢の胴部であり、外面にRLを施す。胴部下半から底部は無文であると考えられる。内面に石灰華が付着している。

1615と1616は貝製品である。いずれも貝刃で、素材はハマグリである。1615は右殻、1616は左殻であり、それぞれの腹縁を内側から打ち欠いて刃部を作出している。

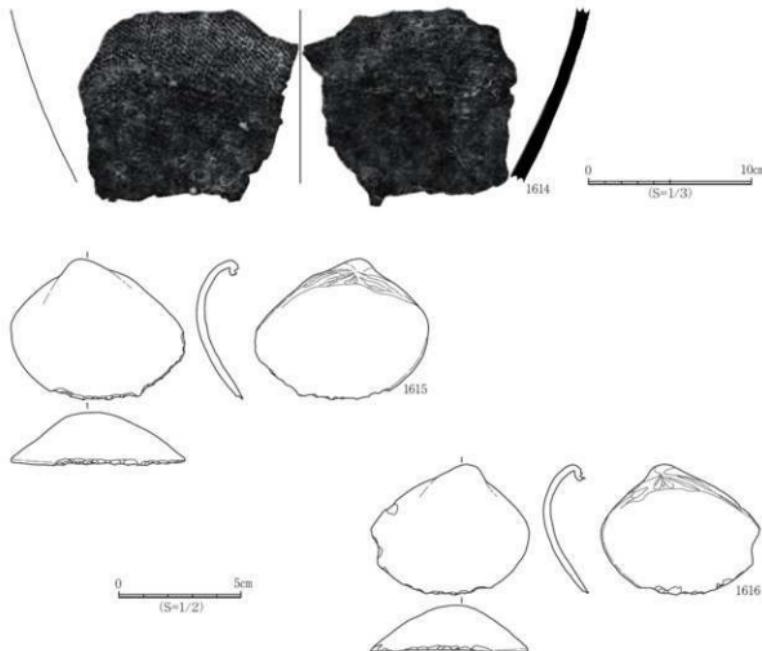


Fig.184 第5次調査 G.D 2南北ベルト出土遺物 (1614 ~ 1616)

G.D 2 (Fig.185・186)

92点出土している。包含層から出土しており、その内38点を図示した。

1617と1618は深鉢の頸胴部であって、有文である。1617はIV層(注記は“C・D 2 区間ベルト 4 層上面”)からの出土物である。RLを施した後、幅広の沈線で波頭状文を描いて区画して磨消繩文としている。1618はRLを施した後、沈線を施している。

1619から1641は繩文のみを施す土器である。

1619から1630はLRを施しており、1619から1621は面取りした口縁部外面に施す。1621は小形の土器であり、精緻なつくりである。1622と1623は内外面に施しており、1623は口唇部を強く面取る。1624は強く面取りした口唇部と内外面に施す。1625と1626は面取りした口唇部と外面に施す。1627から1630は頸胴部であり、1627と1628は胴部に施す。1629は胴部と内面にも施しており、内面のものは帶状に施されていたと考えられる。

1631から1641はRLを施しており、1631は面取りした口縁部外面に施しており、口縁部直下の種子の抜けたと見られる穴について種子圧痕同定を行った(試料番号No.2)。1632は波状口縁の波頂部で

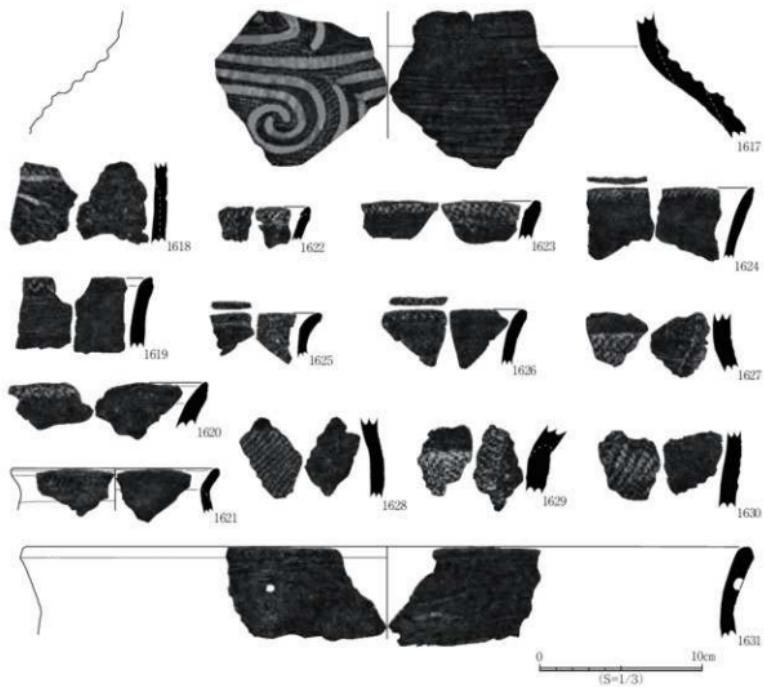


Fig.185 第5次調査 G.D 2 出土遺物 (1617 ~ 1631)

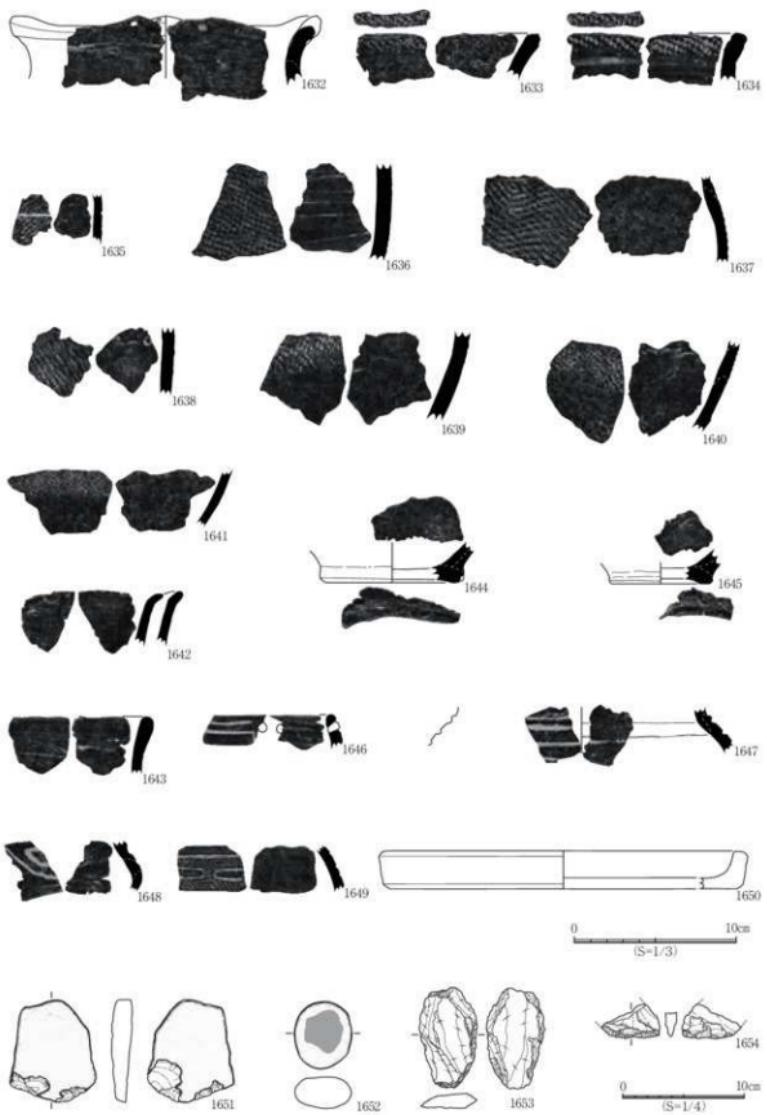


Fig.186 第5次調査 G.D.2出土遺物 (1632 ~ 1654)

あり、面取りした口縁部外面に施す。1633は強く面取りした口唇部と口縁部外面に施す。1634は、口縁部をやや厚く作出しており、強く面取りした口唇部と外面そして内面に施す、1635から1641は胴部であり、外面に施す。1637は羽状文にしており、1639から1641は胴下部から底部は無文であると考えられる。

1642と1643は鉢の口縁であり、無文である。1642は端部を外傾させており、小形の土器である。

1644と1645は深鉢の底部である。いずれも凹み底であって、底部内周を丁寧に撫でている他、接地部分を強く面取る。

1646から1649は浅鉢である。1646は口縁部であり、ボウル形であって、外面にLRを施した後に沈線で区画して磨消繩文としている。焼成前穿孔を有しており、赤彩されていた土器である。1647から1649は胴部であり、1647はRLを施した後に沈線で区画して磨消繩文としている。内面の接合痕が顕著であるため、壺や注口付土器の可能性も考えられる。1648は最大径部に浅い沈線を巡らし、その上は沈線文、その下はRLを施す。1649はRLを施した後に沈線で区画し、磨消繩文としている。更に繩文帯の中に、沈線で隅丸長方形を描いて区画して磨消繩文としている。赤彩されていた土器である。

1650は瓦質土器であり、焰烙の可能性が考えられる。

1651から1654は石器である。1651は打製石斧であり、II層からの出土である。石材は砂岩であって、摩滅が著しい。1652は磨石であり、IIc層からの出土である。石材は砂岩で、全体的に磨かれている。赤みを帯びているため、被熱している可能性が高い。1653は打ち欠き石錐であり、石材は結晶片岩である。1654は二次加工剥片であり、石材はホルンフェルスである。

G.D 3 (Fig.187・188)

140点出土している。包含層からの出土であり、29点図示した。

1655と1656は、外面に条線文を有する。いずれも胎土は同じであって、同一個体の可能性が高いものの、1655の条線は弧状、1656の条線は間延びした山形様である。

1657から1661は深鉢であり、文様を有する。全て胴部であり、1657はRLを施した後に沈線で区画し、磨消繩文としている。1658はRLを施した後に比較的幅広の沈線を巡らす。1659から1661は沈線文を有する。1659は長方形の意匠を描いていると考えられ、中央の継位の短沈線は、沈線端部に施される刺突の可能性がある。1660は比較的深い沈線である。1661の沈線は、文様帶の下端を示すものである。

1662は深鉢で、口縁部である。面取りした口唇部に、右に斜行する刻みを施しており、補修孔を有する。

1663から1673は、繩文ないしは擬繩文を施す土器である。1663から1666はLRを施す。1663から1665は口縁部であり、1663は強く面取りした口唇部に刻みを施しているが、波頂部のみに施していた可能性が高い。1664は、強く面取りした口唇部と内外面に施文しているが、筋は太く大振りなものである。1665は小形の土器である。内面を肥厚させており、接合部が段状に残されている。口唇部をやや強く面取り、内外面に比較的整った繩文を施文している。赤彩されていた土器である。

1666から1668は胴部であって、1666と1667は比較的整った原体を使用している。1667と1668はRLを施しており、1668は羽状文としている。



Fig.187 第5次調査 G.D 3 出土遺物 (1655 ~ 1673)

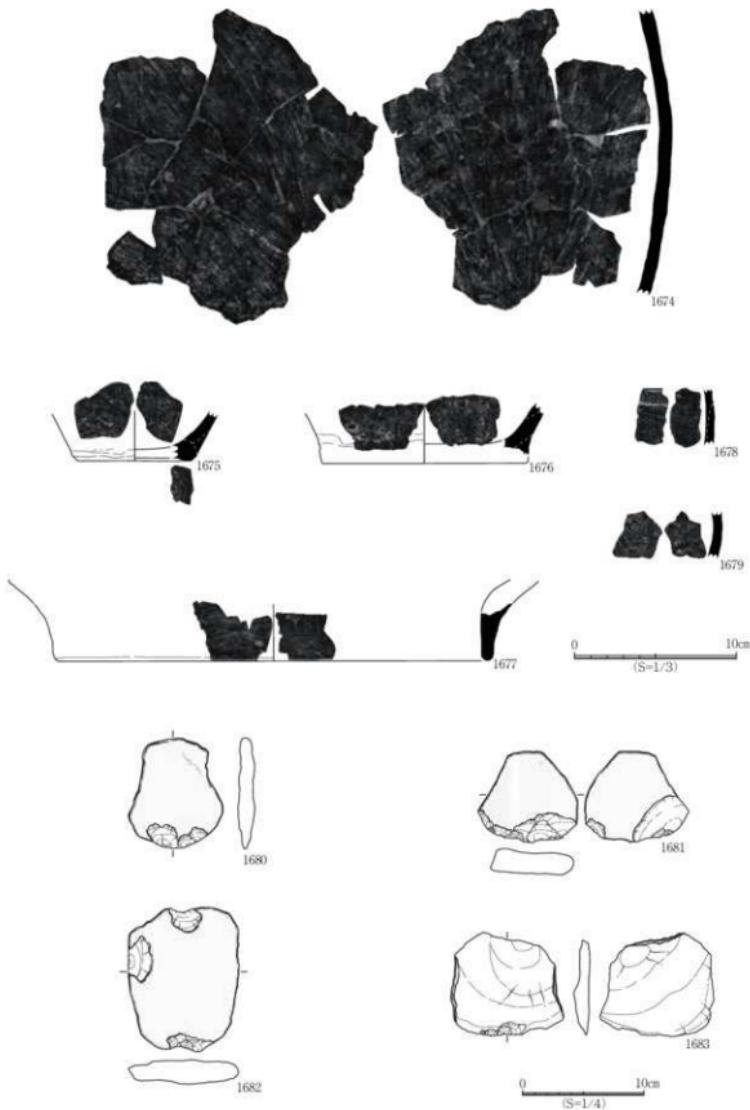


Fig.188 第5次調査 G.D 3出土遺物 (1674 ~ 1683)

1669から1672はRLを施す。1669は節が小さく整った縄文を口縁部外面に施し、その下端に一条の沈線を巡らす。頭部下端にも一条の沈線を巡らしたと考えられ、精緻なつくりである。1670は小形の土器である。壺の可能性があるが、胎土に砂礫が多く含んでおり、粗野な作りである。口縁部を玉縁状に作出しており、強く面取りした口唇部と口縁部外面そして胴部に縄文を施す。頭部下端に一条の沈線を巡らす。1671は縄文の一部を撫で消しており、器面を一周する可能性がある。1672は、節は太いものの整った縄文である。1673は卷貝の回転擬縄文を施す。

1674は深鉢で、胴部である。無文のもので、砲弾形の器形になると考えられる。

1675から1677は深鉢で、底部である。1675は凹み底であり、接地部分を強く面取る。1676は接合面を広く作出すると共に、底部外周に粘土紐を積み上げて補強している可能性がある。1677は貼付高台であり、これまで見てきた高台よりも遥かに高いものである。体部が大きく開く器形を考えられる。

1678と1679は浅鉢である。1678はRLを施した後、平行する二条の沈線を巡らしており、磨消縄文であった可能性がある。1679は節の細いLRを施しており、赤彩されていた土器である。

1680から1683は石器であって、1680から1682はⅡ層からの出土である。1680は石斧であり、打製である。刃部は磨耗しており、石材は砂岩である。1681は削器である。打製であって、石材はホルンフェルスである。1682は石錘であり、長軸の端部を打ち欠いている。石材は砂岩である。1683は剥片であり、二次加工を有する。石材はホルンフェルスである。

G. D 4 (Fig.189・190)

197点出土している。包含層からの出土であり、29点を図示した。

1684から1689は深鉢で、有文である。1684から1686は口縁部である。1684は、波状口縁の波頂部であり、波頂部には内外面を跨ぐ平行する二条の沈線を絡ませる。頭部には、RLを施した後に二条の沈線で波頭状文の意匠を描いて区画し、磨消縄文としている。1685は波状口縁であり、口唇部を強く面取る。口縁部外面には沈線で横円文を描いたと考えられ、その下端には幅広で深い一条の沈線を巡らす。1686は波状口縁であり、口唇部を強く面取る。口縁部外面には幅広の一条の沈線を巡らす。1687から1689は胴部である。1687はRLを施した後、比較的幅の広い平行する二条の沈線で区画し、磨消縄文としている。縄文帯の幅は狭い。1688と1689はLRを施した後、沈線文を施す。多重のものである。

1690から1704は縄文のみ施す土器である。1690から1697はLRを施す。1690から1693は口縁部であり、1690と1691は外端に施す。いずれも精緻なつくりであり、小形の土器である。1692は口唇部を強く面取り、内外端に施す。1693は強く面取りした口唇部と外端に施す。1694は頭部下端に一条の沈線を巡らしており、羽状文としている。1695は、節が細かく整った原体であり、羽状文としている。精選された粘土を使用しており、精緻なつくりである。1696は羽状文としており、内面の接合痕が明瞭である。1697は節の太い原体である。

1698から1704はRLを施す。1698は幅広く作出した口縁部の口唇部を強く面取り、施文する。頭部が強く外傾するため、壺の可能性が考えられる。1699は口縁部がやや強く外傾しており、強く面取りした口唇部に施文する。比較的精緻なつくりである。1700は口唇部を強く面取り、内外端に施文する。1701は強く面取りした口唇部と外端に施文する他、内面に一条の沈線を巡らす。1702は頭部

下端に一条の沈線を巡らし、胴部を羽状文としているが、重複しているため不鮮明になっている。1703と1704は、筋は太いものの整った原体を使用している。

1705から1708は無文である。1705と1706は砲弾形の器形であり、1705は比較的精緻なつくりである。1706は厚いつくりであって、後期よりも古い時期のものの可能性がある。1707は波状口縁であり、短い頭部が外傾する。1708は右下から左上への巻貝条痕が顕著である。

1709と1710は深鉢の底部であり、1709は凹み底である。接地部分を強く面取る。1710は貼付高台であり、体部が大きく開く器形である。

1711は浅鉢の胴部である。LRを施した後、平行する三条の沈線を巡らす。

1712は石器で、石錘である。石材は砂岩であって、長軸の端部を打ち欠いている。

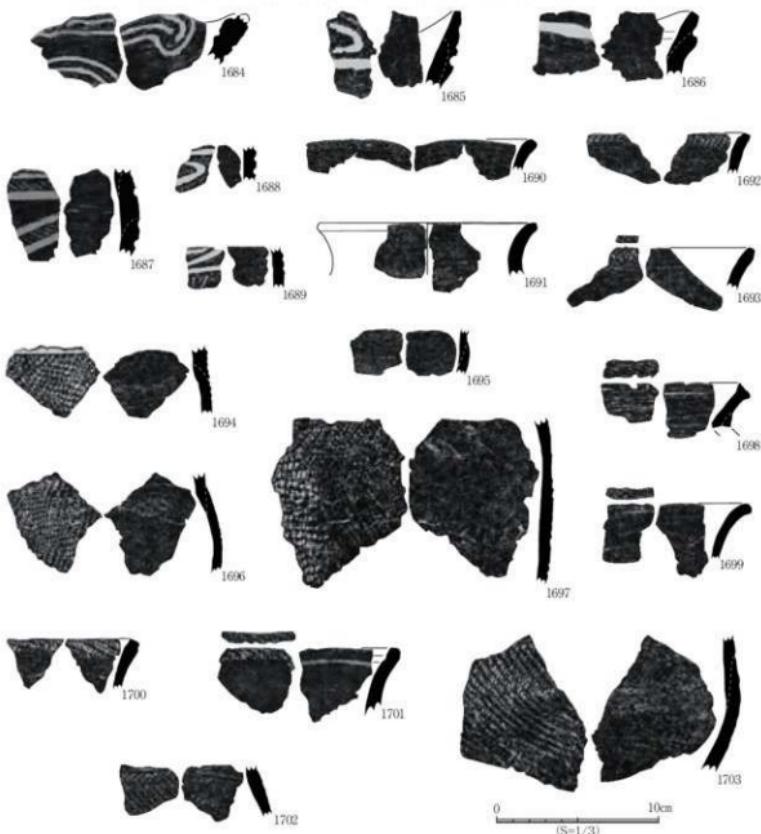


Fig.189 第5次調査 G.D. 4 出土遺物 (1684 ~ 1703)

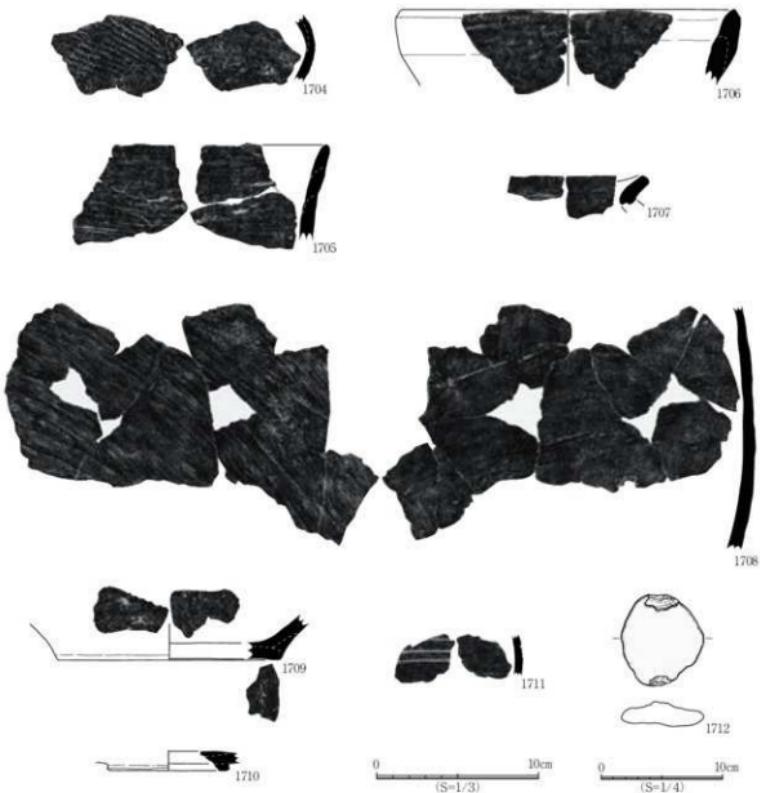


Fig.190 第5次調査 G.D. 4 出土遺物 (1704～1712)

G.E. 1 (Fig.191)

搅乱の影響が大きいグリッドである。1点を図示した。

1713は石器である。打製の石斧の基部として考えられ、石材はホルンフェルスである。

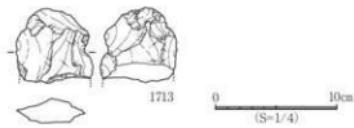


Fig.191 第5次調査 G.E. 1 出土遺物 (1713)

G.F 1 (Fig.192)

5点図示した。1714から1716は深鉢で、有文のものである。1714は口縁部であり、口唇部を強く面取る。外面にLRを施した後、平行する二条の沈線を巡らす。1715と1716は胴部であり、外面に沈線文を施す。

1717と1718は縄文のみ施す深鉢であり、1717は口唇部と口縁部外面を強く面取り、口縁部外面にRLを施す。1718は胴部であり、外面にRLを施す。



Fig.192 第5次調査 G.F 1出土遺物 (1714 ~ 1718)

G.F 2 (Fig.193)

8点図示した。1719から1723は深鉢の口縁部である。1719は緩い波状口縁であり、内面に段を有する。外面にRLを施した後、幅広の一条の沈線を巡らす。1720は口縁部外面を肥厚させており、口唇部と外面に一条の沈線を巡らす。頭部下端にも一条の沈線を巡らす。1721は、口縁部外面に縄文を施した後に三条の沈線を巡らす。1722は波状口縁の波頂部である。波頂部は、蛇行させた粘土紐を平縁に貼付した突起である。口縁部外面にLRを施した後、抉るような沈線文を施す。1723は無文のもので、口唇部を強く面取る。1724は胴部であり、縄文を施した後に沈線で区画し、磨消縄文をしている。磨消部は三角形状の意匠と考えられ、その中で沈線の一部の端部が丸めて取まると考えられる。

1725と1726は縄文のみ施す深鉢である。1725は厚く作出した口縁部の外面を面取り、RLを施す。内端を幅広く面取り、その下に浅い凹線状の凹みを巡らす。1726はRLを施しており、胴部上端には原体の折り返しの痕跡が残る。

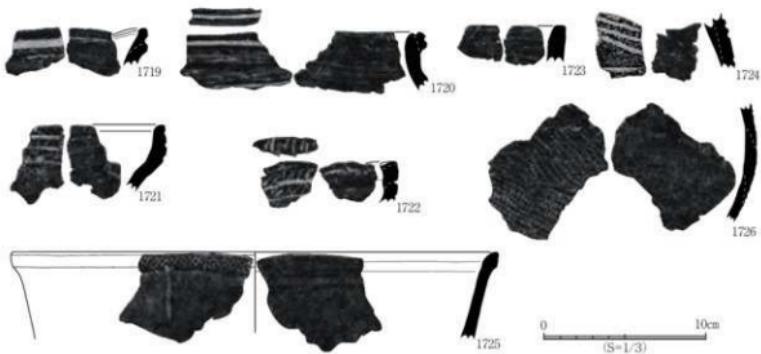


Fig.193 第5次調査 G.F 2出土遺物 (1719 ~ 1726)

G. F 3 (Fig.194)

3点図示した。

1727は口縁部であり、外面にRLを施す。口唇部には、主文様と従文様で構成される文様を施しており、主文様はその中心を短沈線で囲んだものである。従文様は、それらを繋ぐように巡る一条の沈線である。1728と1729は縄文のみ施す土器である。1728はやや厚く作出した口縁部外面を面取りした後にRLを施す他、口唇部を強く面取る。1729は頭胴部であり、胴部外面にRLを施しており、比較的整った原体である。



Fig.194 第5次調査 G.F 3 出土遺物 (1727 ~ 1729)

G. I 0 (Fig.195)

2点を図示した。1730と1731は胴部であり、1730は外面にRLを施した後に幅広の沈線で区画し、磨消縄文としている。1731は縄文のみ施す小形の土器であり、外面にRLを施す。



Fig.195 第5次調査 G.I 0 出土遺物 (1730 · 1731)

G. I 1 (Fig.196)

1点を図示した。1732は縄文のみ施す深鉢の胴部であり、外面にLRを施す。



Fig.196 第5次調査 G.I 1 出土遺物 (1732)

13. 平城貝塚一括資料 (Fig.197~204)

平城貝塚展示室において、長らく「平城貝塚出土物」として保管されてきた資料である。採集されたものばかりではなく、二次調査の出土物を含む可能性が少なからずある。これらの中には、石灰華の付着が認められるものも多く、貝塚由来の遺物であることは間違ひ無いと思われる。

1733から1735は、「6/15 中川サンバツ」・「中川」と注記された土器である。昭和30年代頃に、旧国道を挟んで北の街区に所在が確認できる理容店の敷地内で採集された可能性がある。

1733は浅鉢と考えられ、平縁に粘土塊を貼付して、刺突を有する注口様の突起を作出しており、主文様としての役割があると考えられる。従文様は口唇部に施された一条の沈線と、その内側に施された短沈線である。頭部は短く、突起下に橋状把手を貼付しており、胴部には繩文を施す。尚、これと同じ特徴を持つ土器が、鹿児島県南さつま市金峰町芝原遺跡で出土している。1734と1735は繩文のみ施す土器である。1734は強く面取りした口唇部と内面にRLを、1735は面取りした口縁部外面にRLを施す。



Fig.197 平城貝塚一括資料 (1733～1735)

1736は、粘土帯を貼付して隆帯を作出し、その上を小形の二枚貝で圧痕を加えている。

1737は、面取りした口唇部を細かく刻み、外面に細い粘土紐を貼付してミミズ腫れ状の隆帯を作出している。内面には二枚貝条痕が残っている。

1738は口唇部を強く面取り、内端を突出させる。外面に巻貝の殻頂を原体とする刺突列を2つ有する。1425と同一個体の可能性がある。

1739は口縁部を玉縁状に成形し、その下端に一条の沈線を巡らす他、その下には少なくとも二条の斜行する沈線が施されている。植木鉢形の器形であった可能性が高い。補修孔を2つ有する。

1740から1748は、繩文を施した後に沈線で区画し、磨消繩文をしている。1740から1743は口縁部であり、いずれも突起を有する。1740は突起にRLを施した後に沈線を絡ませるが、沈線の幅が内外で異なることから連続しないものと考えられる。その下には涙滴状文の系譜を引くと考えられる刺突を有する。頭部にもRLと沈線そして無文の部分が認められるため、波頭状文の系譜を引く意匠が施されていたと考えられる。1741は突起にRLを施した後に沈線を絡ませる。内外で連続するが、平縁を巡る一条の沈線とは連続しない。突起下には涙滴状文の系譜を引くと考えられる刺突を有する他、頭部にも波頭状文の系譜を引く意匠が施されており、胴部も波頭状文となる可能性が極めて高い。赤彩されていた土器である。1742と1743は波状口縁であり、1742は口唇部を強く面取る。口縁部外面にはRLを施した後、一条の沈線を巡らす。頭胴部にもRLを施した後、沈線で区画して磨消繩文としており、意匠は波頭状文の系譜である。1743は小形の土器である。口唇部を強く面取り、内面に段を有する。波頂部は突起であり、口縁部外面にRLを施した後に一条の沈線を巡らしており、それが突起まで延びて絡みつく。頭胴部にはRLを施して沈線で区画し、磨消繩文としているが、波頂部下の頭部には波頭状文を施すものの、胴部には認められない。1744から1748は胴部であり、RLを施した後に沈線で区画し、磨消繩文としている。1744から1747は波頭状文の系譜にある意匠を描いていると考えられ、1747は赤彩された土器である。1748は小形の土器であり、節の細かい整った原体を使用している。

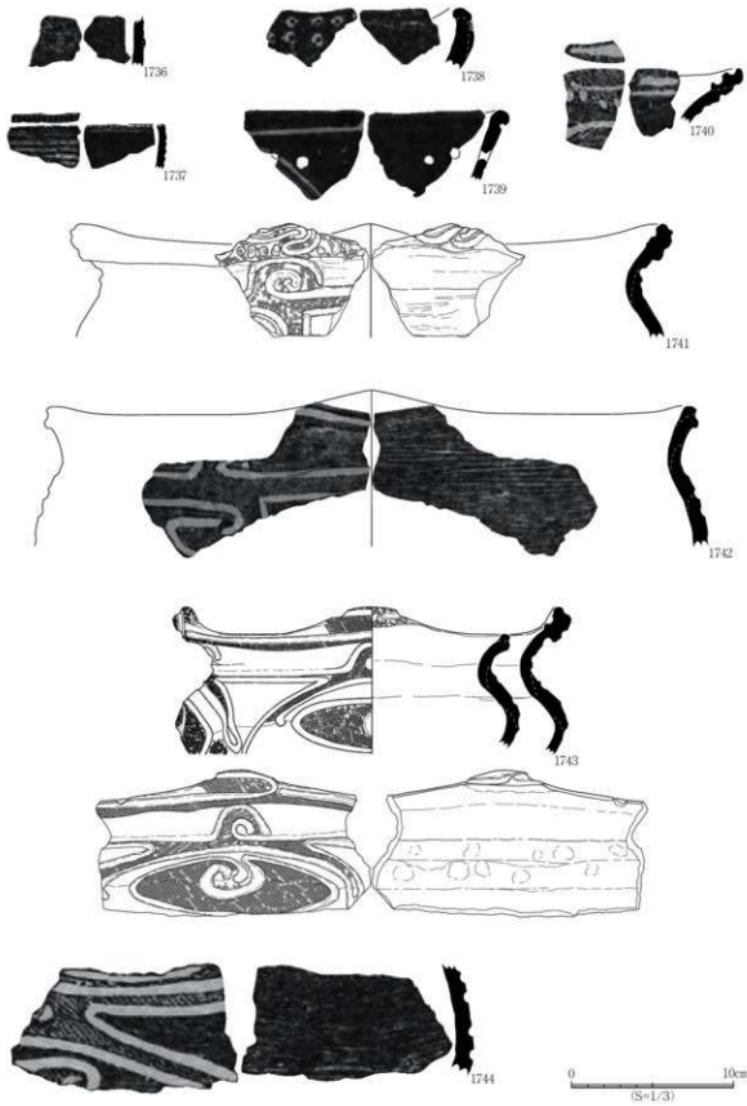


Fig.198 平城貝塚一括資料 (1736 ~ 1744)



Fig.199 平城貝塚一括資料 (1745 ~ 1748)

1749から1767は口縁部であり、いずれも外面に文様を施す。1749は、RLを施した後に主文様と従文様で構成される文様を施す。主文様の中心は中空の原体による円形刺突であり、それを一条の沈線で囲う。従文様は平行する二条の沈線である。1750はLRを施した後、平行する二条の沈線を巡らす。1751はRLを施した後、平行する二条の沈線を巡らす。1752はRLを施した後、平行する二条の沈線を巡らす。口唇部を強く面取り、頸部にも沈線文を有する。1753は波状口縁であり、頂部に刻みを施す。RLを施した後に主文様と従文様で構成される文様を施しており、主文様は中心を弧状の沈線で囲んだものであって、従文様は一条の沈線である。波頂部下の頸部にも文様を有しており、左右を縦位の沈線で囲むと考えられる。1754はやや幅広の口縁部であり、RLを施した後、一条の沈線を巡らす。1755はRLを施した後、一条の沈線を巡らすが、途絶するものである。1756はRLを施した後、一条の沈線を巡らす。口唇部を強く面取る。1757はRLを施した後、主文様と従文様で構成される文様を施しており、主文様は中心を弧状の沈線で囲んだものであって、従文様は一条の沈線である。1758は節の太いRLを施した後、一条の沈線を巡らす。口唇部を強く面取る。1759と1760は波状口縁であり、1759はRLを施した後、主文様と従文様で構成される文様を施す。主文様は中心を刺突で囲んだものと考えられ、従文様は一条の沈線である。1760はRLを施した後、一条の沈線を巡らすが、端部を口唇部に向けて丸めて収めている。1761は平縁であり、RLを施した後、主文様と従文様で構成される文様を施す。主文様は縦位の沈線であり、それを矢羽状の重沈線文で囲うと考えられる。口唇部を強く面取る。1762は波状口縁であり、節の細かいLRを施した後に、一条の沈線を巡らす。頸部にもLRを施した後、沈線文を施す。1763は波状口縁であり、口唇部を強く面取る。波頂部には3つの刻みの他、平縁部も含めてRLを施す。外面にはRLを施した後に沈線文を描いており、胴部にもRLを施した後に左右を縦位の沈線で囲む文様を施す。1764は波状口縁の波頂部であり、外傾する口縁部外面に波頂部から派生するような沈線文を描く。

1765と1766は口縁部内面にも文様を施す。いずれもRLを施した後、外面に沈線で描いた弧状文を向い合わせた文様を施して主文様としており、従文様は端部を丸めて収める一条の沈線である。1765の内面には、RLを施した後に一条の沈線を巡らしており、外面の主文様と対応するように波状の意匠を描いている。1766の内面には、RLを施した後に一条の沈線を巡らしており、外面の主文様と対応するように波状の意匠を描くが、その中に更に一条の沈線を施す。

1767は砲弾形の器形であり、外面に中空の原体による円形刺突を中心とし、それを沈線で描いた弧状文で囲んだものをLRを施した後に施して主文様とする。従文様を伴うものと考えられる。口縁部以下はLRを施す。

1768から1773は繩文のみを施す深鉢である。1768は波状口縁の波頂部であり、粘土紐を時計回りに巻いたものを貼付して突起としている。突起も含めてLRを施す。1769は厚く作出した口縁部外面にRLを施しており、口唇部を強く面取る。1770は強く面取りした口唇部と外面にRLを施しており、口縁部外面には一条の沈線を巡らす。1771は強く面取りした口唇部と外面に1を施す。1772は厚く作出した口縁部外面と胴部にRLを施す。1773は節の細かい整ったLRを、口縁部外面と胴部上半に施す。

1774は鉢の口縁部であり、外面にRLを施した後に沈線で区画し、磨消繩文としている。1775は深鉢の胴部であり、RLを施した後、沈線で三角形状文を描く。

1776から1778は、口縁部外面に沈線文を施す。1776は沈線で多重の弧状文を描くと考えられ、一

部にLRが認められる。1777は沈線で矢羽状文を描いている。1778は砲弾形の器形であり、口縁部外面直下に刻みを施す。

1779と1780は深鉢の口縁部で、外端を面取る。1779は頭部にハイガイ等の肋が発達した二枚貝の腹縁で刺突し、矢羽状文を施す。1780は外面に右に斜行する沈線を施す。

1781から1783は鉢の口縁部である。1781はやや厚く作出した口縁部外面を面取りし、体部に平行する二条の沈線で波状文を描く。1782はやや厚く作出した口縁部外面にRLを施した後、一条の沈線を巡らしておき、口唇部を強く面取る。体部には沈線で多重の弧状文を描く。1783は口縁部を厚く作出しており、外面に主文様と従文様で構成される文様を施す。主文様はRLを施した後、中心を沈線で囲んだものであり、従文様は一条の沈線である。口縁部の下端には一条の沈線を巡らす他、体部にはRLを施した後に沈線で区画し、磨消繩文としている。

1784から1791は浅鉢である。1784から1786は皿形のものである。1784はRLを施した後に沈線で区画し、磨消繩文としている。1785は口縁部内面に段を有する。外面はRLを施した後に沈線で区画して、磨消繩文としている。1786はRLを施した後に沈線で区画し、磨消繩文としている。一部の沈線は口唇部を経て内面まで及んでおり、その部分には焼成前穿孔を有する。精選された粘土を使用しており、精緻なつくりであって、赤彩されていた土器である。1787から1789はボウル形のものである。1787は外面にRLを施した後、沈線で区画して磨消繩文としている。口唇部を強く面取る。赤彩されていた土器である。1788は波状口縁であり、外面にRLを施した後、沈線で区画して磨消繩文としている。一部の沈線は波頂部に絡ませており、精選された粘土を使用し、精緻なつくりであって、赤彩された土器である。1789は小形の土器であり、外面にRLを施した後に沈線で区画し、磨消繩文としている。赤彩されていた土器である。1790は胴部が算盤玉状に屈曲する。注口付土器の可能性も考えられる。屈曲上にRLを施し、沈線で区画して磨消繩文としている。1791は無文のものであって、口唇部を強く面取る。

1792と1795は貝製品である。1792から1794は貝刃であって、素材はハマグリである。1792と1793は左殻、1794は右殻であり、いずれも内側から打ち欠いて刃部を作出している。

1795は貝輪である。素材はベンケイガイと考えられ、全体を磨いているものの、粗雑である。

1796から1802は骨角器である。1796から1799は刺突具の可能性が考えられる。素材は鹿の尺骨であって、先端を磨いてヘラの先の様に尖らせている。元々は1796程の長さだったものが、使用することによって鈍くなり、調整つまり研ぎ直しを繰り返した結果、1798の長さになるまで使い込まれたと考えられる。

1800と1801は斧のように振り下ろして使用されたと考えられるもので、素材は鹿の角である。いずれも一番目の枝角を使用しており、1800は全体が摩耗している。1801は内側にのみ磨面が形成されている。

1802は歯牙製品である。猪の下顎の切歯であり、歯根を穿孔している。孔の径は2mmである。垂飾品と考えられる。

1803と1804は石器である。1803は石斧であり、磨製である。両端部に刃部を作出しており、両頭石斧に分類されるものである。石材はホルンフェルスであって、加工を目的とする斧の可能性が考えられる。1804は石包丁であり、打製である。石材はホルンフェルスであって、両端に抉りを作出している。繩文時代後期のものであれば、糸巻き形石器の系譜の可能性が考えられる。

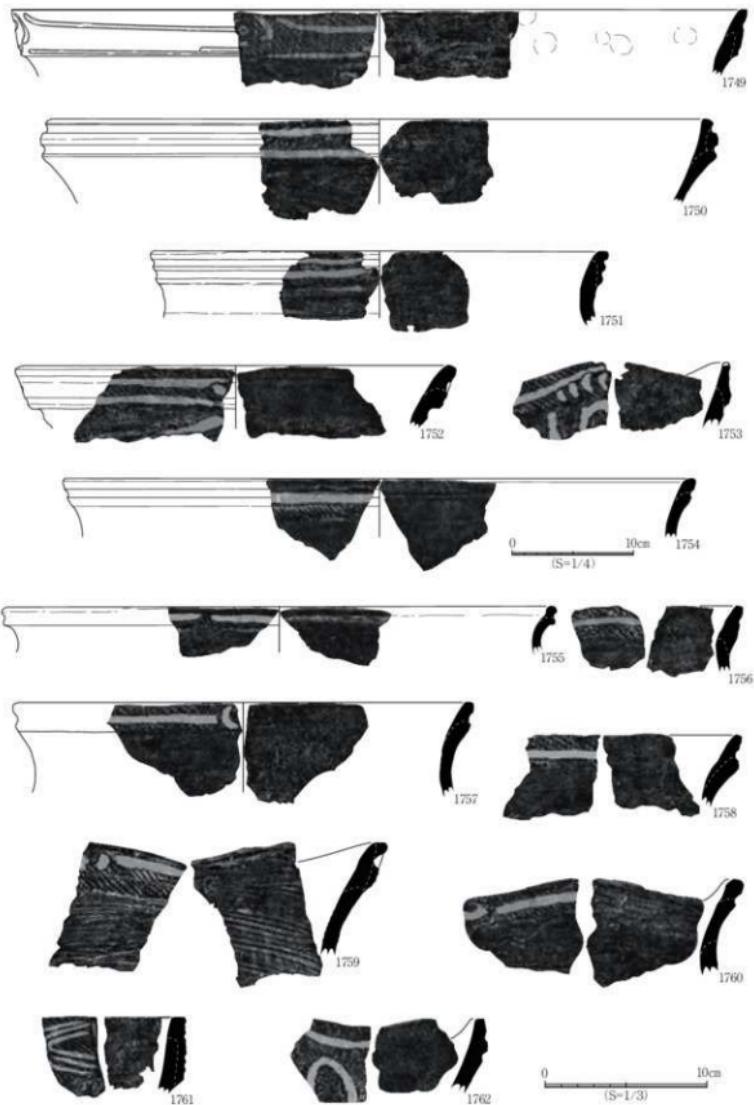


Fig.200 平城貝塚一括資料 (1749 ~ 1762)

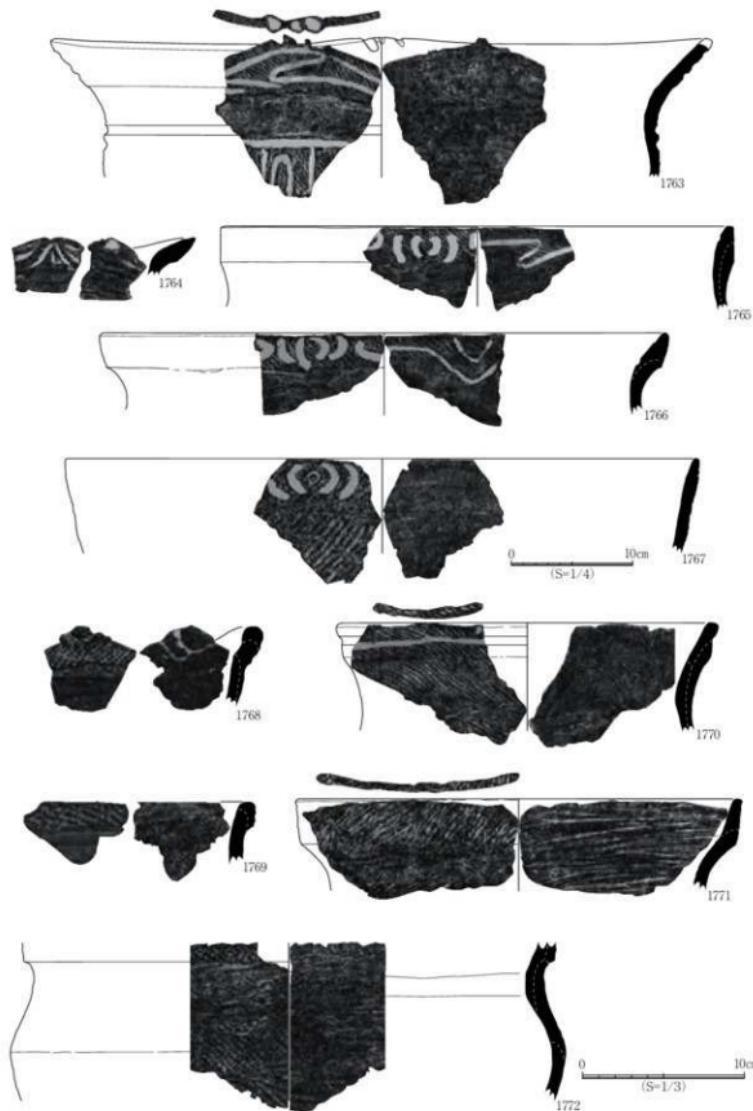


Fig.201 平城貝塚一括資料 (1763 ~ 1772)

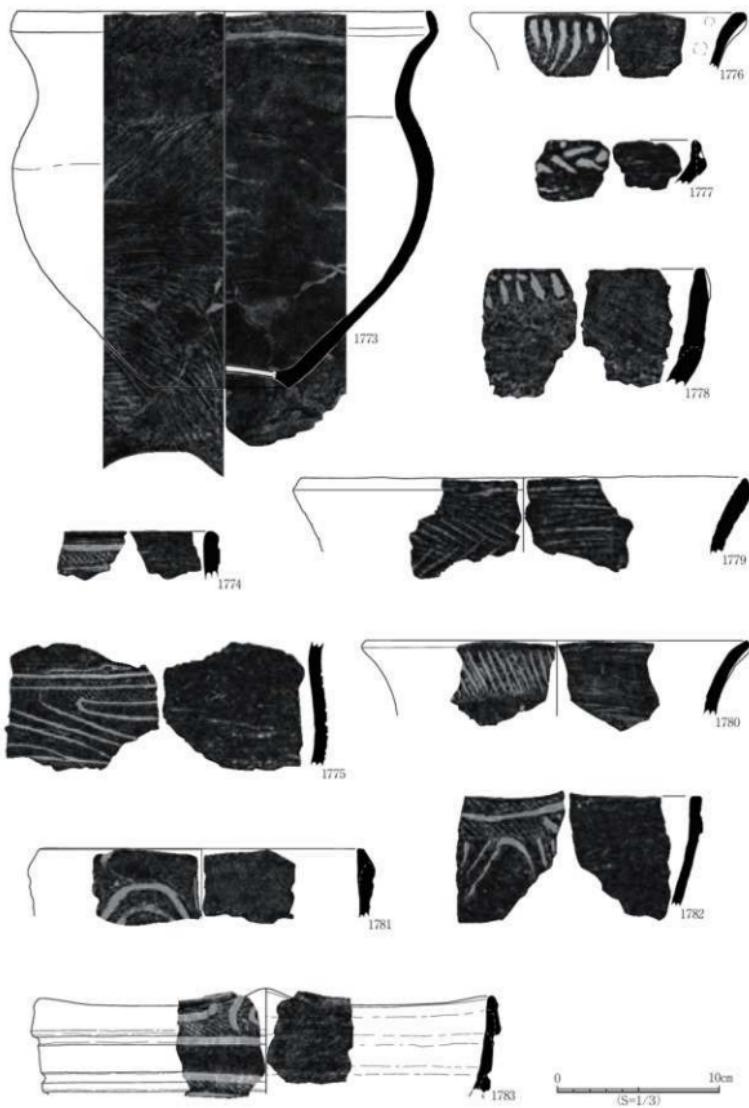


Fig.202 平城貝塚一括資料 (1773 ~ 1783)

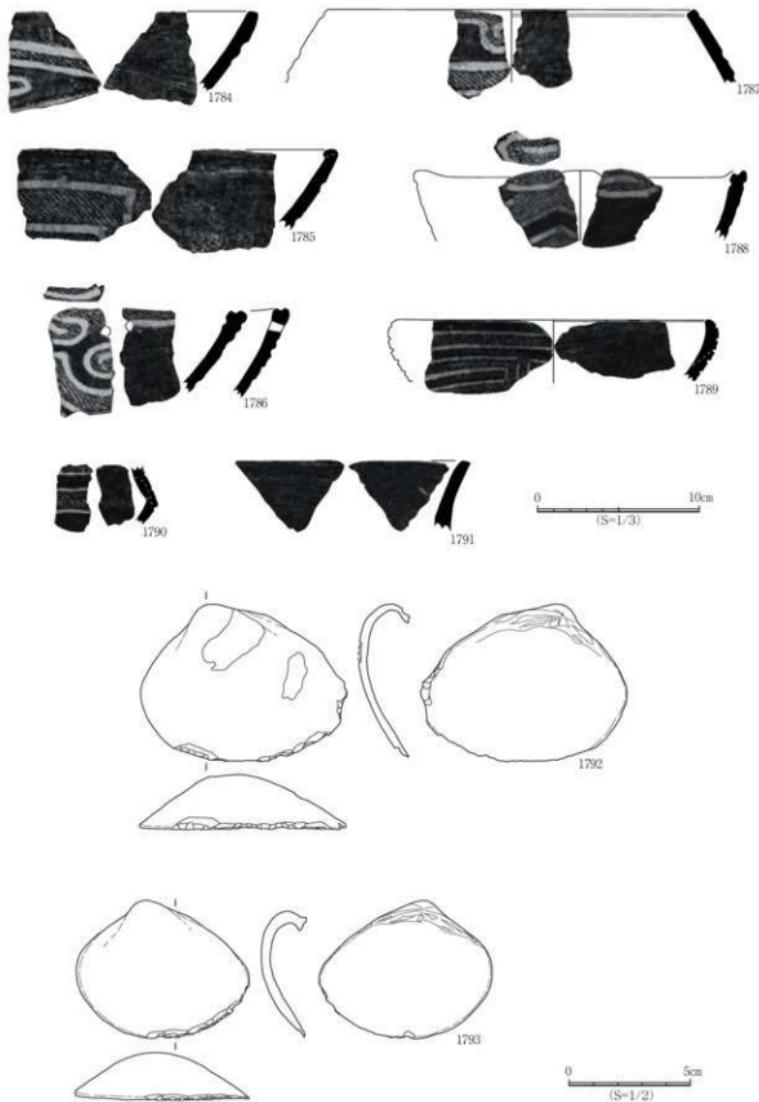
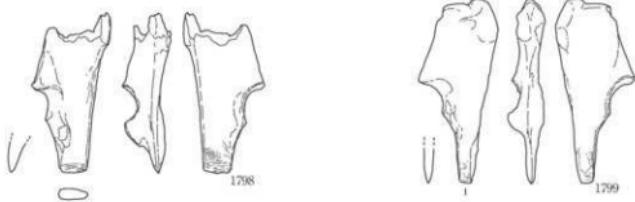
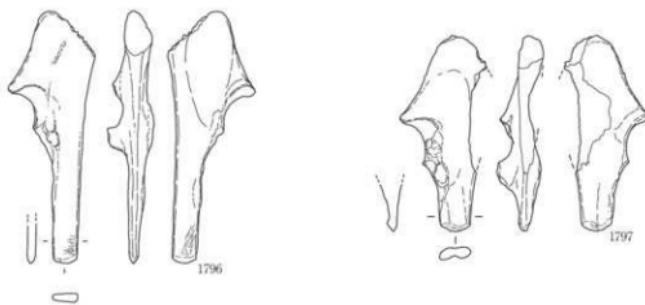
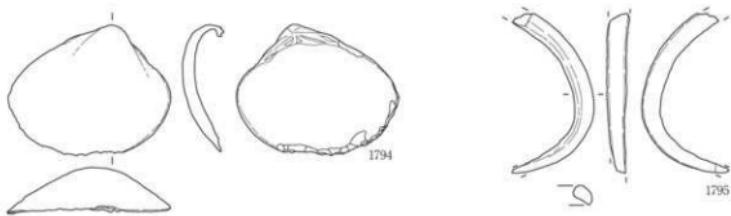


Fig.203 平城貝塚一括資料 (1784 ~ 1793)



0 5cm
(S=1/2)

Fig.204 平城貝塚一括資料 (1794 ~ 1799)

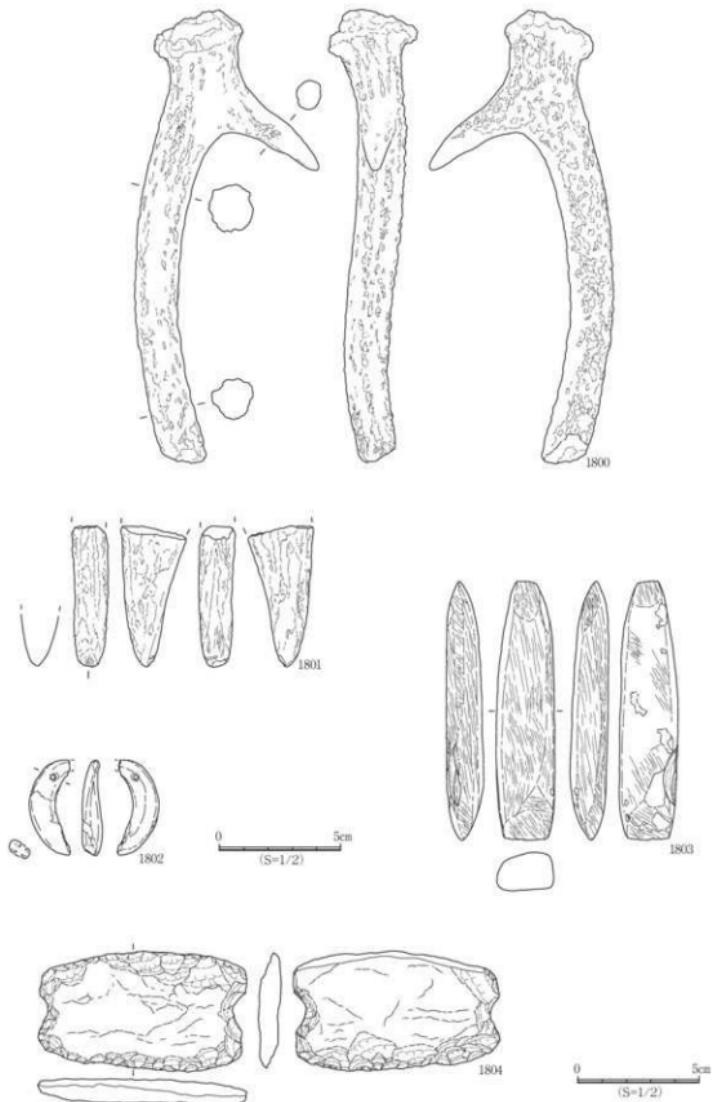


Fig.205 平城貝塚一括資料 (1800 ~ 1804)

14. 第6次調査(Fig.206~230)

所在地 御荘平城2073等筆界未定地

調査面積 15m²

調査原因 学術調査

調査期間 平成24年3月14日から同年3月26日まで

調査主体 愛南町

調査担当 幸泉満夫(愛媛大学准教授)

調査参加者 亀澤一平(愛媛大学学部生)、小泉翔多(京都大学修士)、白川泰嵩(愛媛大学学生)、(五十音順) 福永将太(九州大学学部生)、高野紗奈江(立命館大学学部生)、ダシポンツアグ・グルラグチャー(愛媛大学修士)、前川瑞貴(愛媛大学学生)

調査記録 幸泉満夫 2013 「愛媛・愛南町・平城貝塚 - 第6次発掘調査速報現地説明会資料から -」『文化財発掘出土情報』2013.8 ジャパン通信情報センター 126-129頁

広報あいなん2013年6月号 「地中に眠る古代のロマン～平城貝塚第6次発掘調査で多大な成果～」(https://www.townainan.ehime.jp/kurashi/chosei/koho/kohoainan/files/123_4.pdf)

調査概要 平城貝塚6次調査日誌(原文ママ)

2013/3/14 晴

・午前 愛媛大学出発

・午後 基準杭打没 A1 → B1 → C1 杭指示

第1調査区周辺除草、現場環境整備

第1調査区設定作業

・夕方、中岡修也氏来訪、氏個人の第5次調査日誌を幸泉に託される。

⇒2016年7月、幸泉より愛南町に寄贈する。

・夜19:00～ミーティング

幸泉よりメンバー全員に当該学術発掘に係る全体計画の説明

注) 小泉翔多…京都大大学院生修士1年生 福永将太…九州大4年生

高野紗奈江…立命館大3年生

2013/3/15 晴

・第1調査区周辺調査前写真撮影

・第1調査区南東側にL字の先行トレ設定、幅80cm。先行トレの人力掘削開始。表土直下にコンクリート敷が広がることが判明。午後、コンクリートを破碎(～16時過ぎ迄)。

・先行トレは表土下約50～60cmまで一部掘り下げて終了。全てカクランである。近現代の瓦・御荘焼片・ビー玉等

2013/3/16 晴

・第1調査区L字先行トレンチの掘下げ(続き)。カクランが続く。ギンタカハマ貝2点など。

・第2調査区を倉庫前に設定、1×3m。やはり表土下にコンクリート敷があらわれる。

16:30 作業終了

2013/ 3/17 晴のち曇

・第1調査区 L字先行トレントの掘下げ(続き)

すべてカクラン層、地山面に一部遺構が存することを確認。年代は不明。本掘まで保留。

調査区中央東側で現代の配管。廃土中より縄文土器小片。

先行トレ完掘状況写真撮影(14:30)

本掘(人力)開始。現代の配管(パイプ)は調査区中央を東西に貫くことが判明。

生きているか否かを町教委が確認。カクランが続く。石皿片、貝殻が極少量、近現代遺物にまじる。

・第2調査区の掘削を開始

カクラン層しか認められない。17:00 終了

2013/ 3/18 雨

終日雨天の為、現場は中止。

・合流した石丸先生より、幸泉研究費で新規購入の水洗選別機(183円負担)をもとに、テスト用のカクラン層(1区)土壤サンプルを用いたフローテーションのご指導。

5mm→3mm→1mm→0.5mmで実施。

・資料整理

・午後、幸泉、石丸先生と他大学生3名(福永・小泉・高野)で縄文遺物の露呈が心配される近くの室手遺跡の現地踏査を行う。雨天のなか、2時間ほど作業。数10点の遺物(広瀬上層前後)を採集。

⇒2014年 愛南町に全点寄贈済

2013/ 3/19 晴

・第1調査区

第1調査区中央で検出された配管パイプは、町の調査で生きていることが判明。残念ながら、第1調査区は配管部分を残し、北と南に2分して掘り下げをつづける。

縄文包含層と呼べるもののは皆無で、全てカクラン(近現代層)。

石皿片(時代不明)や縄文土器破片が極少量含まれる程度。ただし、地山面に高密度の遺構群の残ることを確認(南半)。検出ののち、一部に仮遺構No.を付す。

⇒作図時にNo.訂正済 SK 5基、SP 6基ほどとみられる。

・第2調査区

こちらも地山面まで掘り下げを完了。残念ながら全てカクラン(近現代)。縄文包含層は残っていない。

地山面で遺構検出。写真撮影(検出状況)。土壤をST3001とする。その他、SP 2~3基ほど。ST3001の東縁に先行トレント(幅20cm)掘り下げ開始。埋土中に遺物は無い。

17:00 終了

☆石丸先生には郷土館内にて水洗選別、遺物洗浄を進めて頂く。(以後3/22迄)

2013/ 3/20 雨ときどき曇

再び雨天である。

・やむなく、午前中は郷土館で待機。石丸氏の水洗作業を手伝う等。ただ、3/23(土)には早く

も現説があり、調査を完了させる必要あり。つまり実働日数は本日を含め、あと3日しかないというシビアな工程。やむなく、午後は時折小雨のなか、現場で発掘を再開。学生達には申し分けなく思う。

・第1調査区

北半部掘り下げ、全てカクラン。地山面を雨のなか精査し、遺物を検出。清掃後、雨天のコンディションながら撮影(検出状況)を強行。一部の遺構内半截をはじめる。(14:30頃)

・第2調査区

SPとST内の掘り下げ。夕方18時まで調査をつづけ、STの土層断面図を福永君、高野さんにがんばってもらう。

2013/3/21 晴

・第1調査区

遺構の半截を学生総出で順々に終わらせる。時間がない。新たにSP3基、SK1基を検出。

これらも即、掘り下げていく。半截状況を1つ1つ写真撮影する時間はない。

・第2調査区

日程の都合、STのベルトを残したまま、2区の全景写真を強行。(快晴すぎでコントラスト強いが仕方なし)写真終了(10:30)後、即、STのベルト除去。15時までにSTを完掘させ、急ぎ、STの写真撮影を終える。終了後、即、2区の平面図作成にかかる。S=1/10 学生達ががんばってくれて、18時になんとか2区の平面図を完成させる。調査区の土層図などが残っているが、時間がない。

明日3/22には、早くも現説の準備も考えねばならない。

2013/3/22 曇時々雨

実働最終日である。天候は悪いが調査を終える他ない。

・第1調査区

遺構半截を急ぐ。併行して、遺構断面図を進める。不備多し。急ぎ、完掘をめざす。

15:00前、翌日の町民その他の関係者の為の現説を予定している為、まえ翌々日は調査班解散・撤収の為、ここで1区の完掘(ではないが)状況写真の撮影を強行。(~15:00)

15:00~学生達には苦労させるが、即、平面図作成準備に移ってもらう。雨が強くなるが、なんとか作図を進めてもらう。併行して、一部メンバーで現説準備。

・第2調査区

10時迄にSTの完掘写真をもう一度行う。終了後、即、調査区土層図の作成に移ってもらう。

・午後、高知大の三宅尚先生が同大の学生4名をつれて合流(翌日迄)。現場で簡単な打合せ。

時間がないので、明日、現説を見学して頂いたのち、土壤サンプリングを行ってもらう予定。

・18:15、暗くて周囲が見えなくなる迄、作図作業、現説準備を進める。

2013/3/23 晴

本日は現説日。前日より徹夜で成果資料(一般配布用)を作成。朝、データを町教委にわたし、カラー印刷をお願いする。

朝から現説会場の設営。学生達は朝10時頃まで平面図の残りを進める。現説は盛況、無事終了。

午後の現説終了後、高知大の三宅先生による土壤サンプリングを幸泉とグルラグチャーで補助。

1区のSK3001と、2区のST3001埋土で行って頂く。時間にゆとりがなく、充分な対応ができなかったことを申し訳なく思う。併行して、現場の片付け。道具類の洗浄など撤収準備を進める。夕方、現場機材、道具類を全て郷土館へ運ぶ。

→翌日は調査団の撤収日。3/24が愛大の卒業式なので、延期はできない。3/24、幸泉のみ自費でビジネスホテルを予約し、1区の掘り残し(SK3002,3003,SP3001等)と調査区四壁の土層図を何とか仕上げる予定。本日はこのあと、打上げの宴会が予定されている。

2013/ 3/24 晴

撤収日

郷土館内の清掃、資料、道具類一式をまとめ、午前中に学生達を全員撤収させる。石丸先生も解散。幸泉一人が残る都合、車を出せないので、一部学生はバスで帰ることになる。

午後、1区のSK3002を一人で掘り下げる。思いのほか深く、すぐに夕方になってしまう。未完。仕方なく夜、ビジネスホテルにもう1泊する。翌日も幸泉一人、調査を進めることとする。

2013/ 3/25 晴

- ・1区 SK3002 の掘り下げつづき。午前中に何とか完掘。
- ・つづいて1区 SK3003, SP3001 を完掘させる。一人で清掃するも、落葉が舞い込み、どうにもならない。また昨日と一転、快晴で日差しが強く、コントラストの強い写真にしかならないが、仕方なく上記3遺構の撮影を15時迄に済ませる。メモレベルの平面図 S=1/20 を記録。
- ・1区調査区土層図(四壁) S=1/20 を、急ぎ、1人で作成する。18時までに何とかメモレベルで終了させる。

夜、藤本氏(愛南町)、幸崎氏、宮本幸枝さん、布山信子さんと5名で、最後の打ち上げ(宴会)。幸泉は調査の完了をメンバーに告げる。

最後まで関係良好、メンバーに恵まれたことを感謝する。

ビジネスホテルで一泊、明日は埋戻し後、幸泉も帰学予定。

2013/ 3/26 晴

午前中、藤本氏と現場の埋戻し作業。遺構面直上を保護する為、全面にドノウ袋を敷く。

11:30に完了。

教育委員会に菓子を持参、ご挨拶後、松山へ帰る。

発掘契約は以上で完了。

愛南町と愛媛大学は、平成20年3月11日に、「国立大学法人愛媛大学と愛南町との連携に関する協定書」を締結し、相互の関係と地域の発展に資するための連携関係にある。このことにより、水産資源の研究開発や地域課題の解決等の成果に繋がっている。

第6次調査は、この協定書の理念に基づき、平成25年2月19日に愛南町と愛媛大学との間で締結された受託研究契約に基づく学術調査である。調査費用は、愛南町が全額負担し、その期間は契約締結日から平成25年3月31日までであった。

契約終了後、報告書刊行に向けての作業に関しては、愛南町が主体となって取り組むこととしたため、平成29年に愛媛大学から愛南町へ、第6次調査の出土遺物と調査記録全てが返却された。

尚、写真撮影についてはデジタルカメラを使用しており、保存形式はjpegであった。

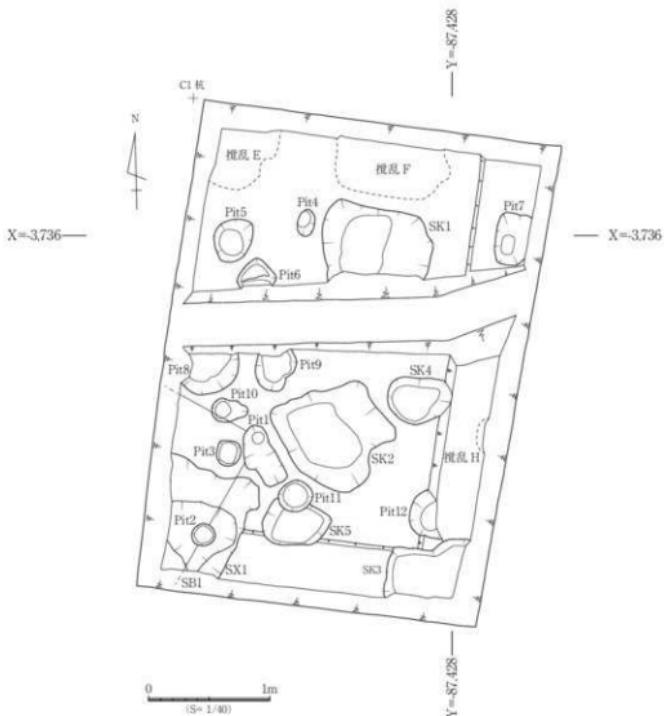
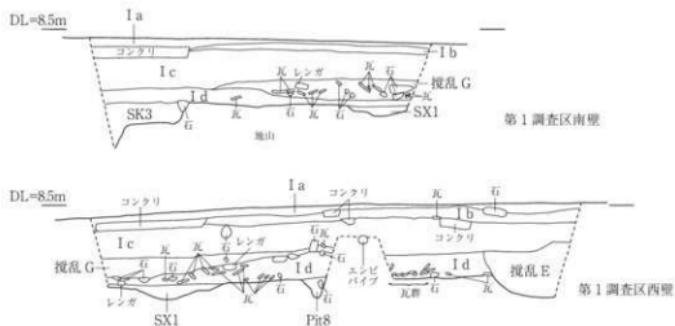


Fig.206 第6次調査 第1調査区平面図

調査日誌及び土壤堆積図(Fig.207)からは、近現代以前の遺物を含む包含層を確認することは出来ない。つまり、遺構を検出した土壤(土壤堆積図の“地山”)の上に堆積していた土壤は近現代のものであって、検出された遺構については近現代のものを含む危険性をはらんでいる。

第1調査区において検出された“遺構”は、柱穴12基、土坑3基、性格不明遺構1基の他、3基の搅乱である。尚、柱穴2基については掘立柱建物が想定されている。

以下、“遺構”とそこから出土した遺物について報告を進める。



Ia層 灰黃褐色 (10YR6/2) 現代クラッシャー蹠を多量に含む。

1b層 揭灰 (10YR5/1)

Ic層 暗褐色 (10YR3/3) 砂質シルト

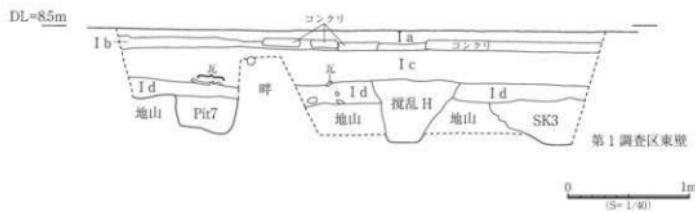
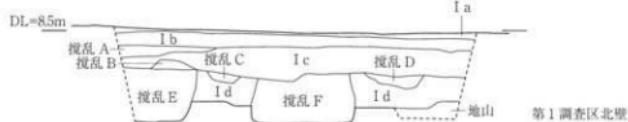
1-2cm ほどの小蝶を 10% ほど含む
トトロ 暗闇 / 123322 (4) 露地栽培

I d 層 暗褐色 (10YR3/4) 痢粘性砂質シルト
3-3mm ホビの小礫を5% ホビ含む

2~3cmほどの小塊を5%ほど含む。瓦・レンガ片を多量に含む。貝殻碎片を1~2%含む。

に於ける粘性質の量を多く含む。

現成り替に並い向(751KG/4)相性好異工此・レンガ・磚を多量に古び。



Ia層 厚黄褐色 (10YR6/2) 現代クラッシャー礫を多量に含む。

1b層 褐灰 (10YR5/1)

Ic 層 暗褐色 (10YR3/3) 砂質シルト

1~2cmほどの小砾を10%ほど含

I d 層 暗褐色 (TOYR3/4) 硬粘性砂質シルト

2-3cmほどの小礫を5%ほど含む。瓦・レンガ片を多量に含む。貝殻碎片を1-2%含む。

現状 C 感染黒(10YR2/1)
D 銀(7.5VR4/4)
現段 D 砂質シルル
砂質弱シルル
砂質弱シルル

搅乱 D 層 高 (75YR4/4) 砂質シルト
搅乱 E 層 高 (10YR3/3) 砂質シルト 橙 (75YR6/6) 粘質シルトブロック ($\phi 3\sim 5$ cm)

近現代の瓦片を含む。貝殻碎片を

擾乱 G 層 にぶい褐 (7.5YR5/4) 粘性砂質土 瓦・レンガ・礫を多量に含

搅乱H層 にぶい褐(7.5YR)

Fig. 207 第6次調査 第1調査区土壤堆積圖

第1調査区 SB 1 (Pit 1・2) (Fig.208)

Pit 1 から出土したものは、全て時期不詳の土器の細片である。

Pit 2 から出土したものも、全て土器の細片である。かろうじて縄文時代のものの可能性が考えられる一片を除いては、時期不詳である。柱痕や根石は認められなかった。

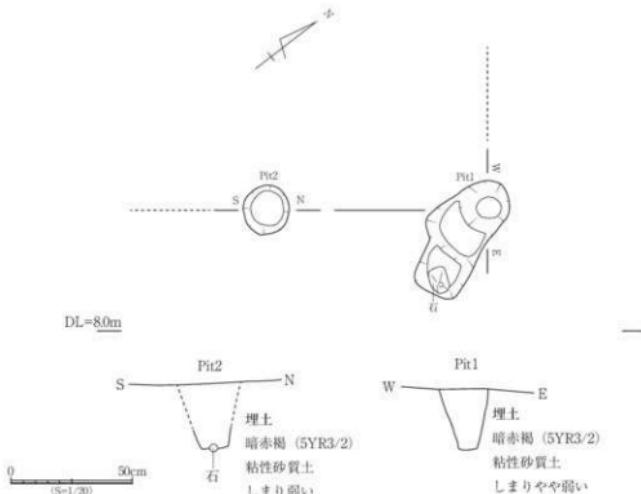


Fig.208 第6次調査 第1調査区 SB 1 (Pit 1・2) 遺構図

第1調査区 Pit 3 (Fig.209)

Pit 3 から出土したものは、全て土器の細片である。中世の土師質土器のものと考えられる2片を除いては、時期不詳のものである。



Fig.209 第6次調査 第1調査区 Pit 3 遺構図

第1調査区 Pit 4 (Fig.210)

Pit 4 から出土したものは確認できなかった。掘方は斜めとなっており、工作物に関係する遺構の可能性は低いと思われる。

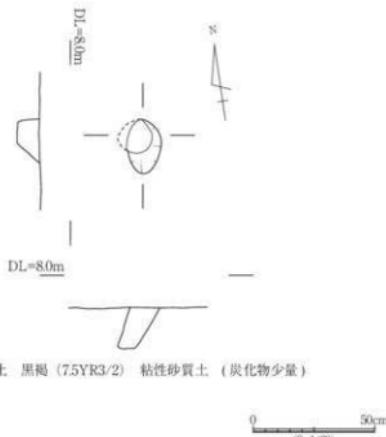


Fig.210 第6次調査 第1調査区 Pit 4 遺構図

第1調査区 Pit 5 (Fig.211)

Pit 5 から出土したものは、全て土器の細片であり、時期不詳である。

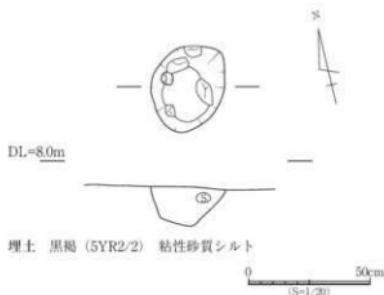


Fig.211 第6次調査 第1調査区 Pit 5 遺構図

第1調査区 Pit 6 (Fig.212)

Pit 6 から出土したものは、かろうじて縄文時代のものの可能性が考えられる一片であって、摩滅が著しいものである。

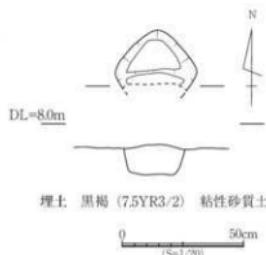
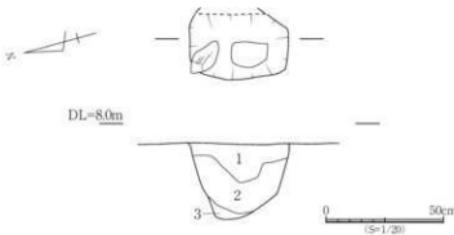


Fig.212 第6次調査 第1調査区
Pit 6 遺構図

第1調査区 Pit 7 (Fig.213)

Pit 7 から出土したものは確認できなかった。



埋土 1層 黒褐 (5YR3/1) 粘性土 しまりやや弱い。3~5cm 大の礫を 20% 程含む。
2層 にぶい褐 (7.5YR5/4) 粘性シルト
3層 明褐 (7.5YR5/8) 粘性シルト

Fig.213 第6次調査 第1調査区 Pit 7 遺構図

第1調査区 Pit 8 (Fig.214)

Pit 8 からは、一片の土器が出土している。

1805は磨滅が著しい。外面に粘土紐を二条貼付して隆帯を作出しており、その上に刻みを施す。内面にかろうじて二枚貝条痕を認められるため、縄文土器として考えられる。



Fig.214 第6次調査 第1調査区 Pit 8 遺構図及び出土遺物 (1805)

第1調査区 Pit 9 (Fig.215)

Pit 9から出土したものは確認できなかつた。

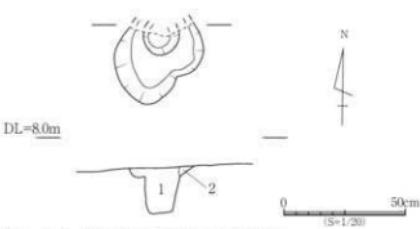


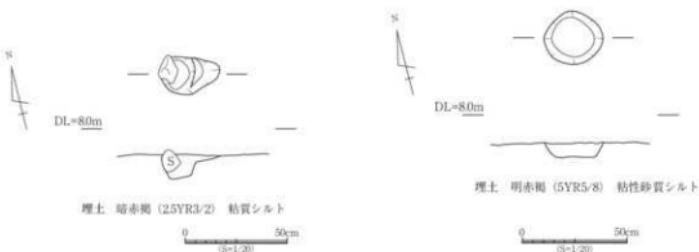
Fig.215 第6次調査 第1調査区 Pit 9 遺構図

第1調査区 Pit10(Fig.216)

Pit10からは、土師器の細片、ホルンフェルス剥片、自然礫剥片がそれぞれ1点出土している。

第1調査区 Pit11(Fig.217)

Pit11からは、礫2点が出土している。加工は認められない。それらの内1つは、地山である黄褐色または赤褐色に近い色調の土壌が付着している。

Fig.216 第6次調査
第1調査区 Pit10 遺構図Fig.217 第6次調査
第1調査区 Pit11 遺構図

第1調査区 Pit12(Fig.218)

Pit12から出土したものは確認できなかつた。

第1調査区 SK 1 (Fig.219)

SK 1からは、弥生土器の細片が2点出土している。底部と頸部であつて、外面にタタキを有することから、後期末のものである。2点の自然礫は円礫で、地山の土壌と似通つた赤褐色の土壌が付着している。これらの他31点の土器の細片が出土しているものの、全て時期不詳である。尚、遺構床からの遺物は確認できなかつた。



Fig.218 第6次調査 第1調査区 Pit12 遺構図

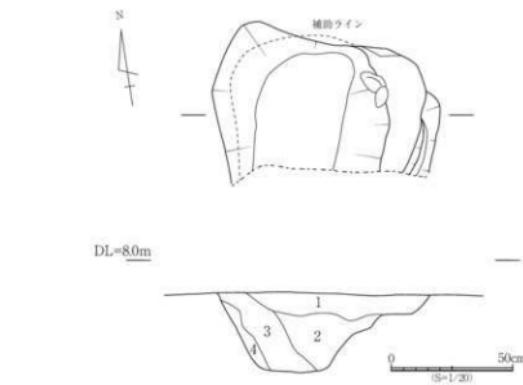
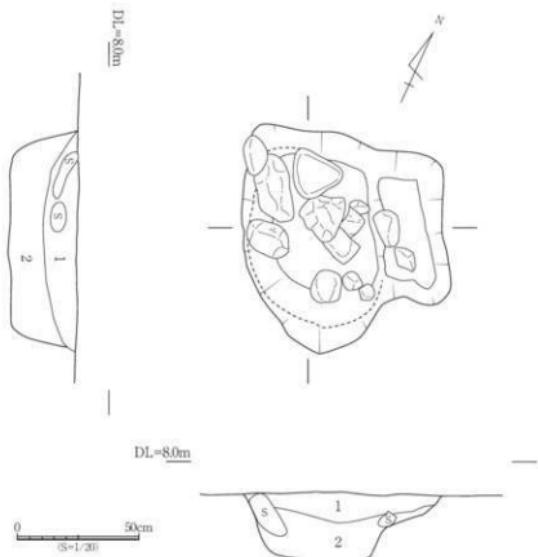


Fig.219 第6次調査 第1調査区 SK 1 遺構図

第1調査区 SK 2 (Fig.220)

SK 2 からは、土師器の細片4点と時期不詳の土器細片16点の他、石核の可能性がある礫と被熱礫が出土している。遺構床面からの遺物は確認できなかった。尚、貯蔵穴として公表された。

遺構の平面形態と土壤の堆積状況が他遺跡の縄文時代の貯蔵穴と異なる。また、土師器の混入があることから、縄文時代の遺構として理解するのは困難である。



埋土 1層 黒褐 (7.5YR3/2) 粘性砂質土(炭化物を少量含む)
2層 喜赤褐 (2.5YR3/2) 粘質シルト (炭化物を少量含む)

Fig.220 第6次調査 第1調査区 SK 2 遺構図

第1調査区 SK 3 (Fig.221)

SK 3からは、縄文土器の細片が5点出土しているが、摩滅が著しい。この他、土師器の細片1点と疊3点が出土している。遺構床面からの遺物は確認できなかった。

第1調査区 SK 4 (Fig.222)

SK 4からは、縄文土器の破片が1点出土しているが、時期不詳である。

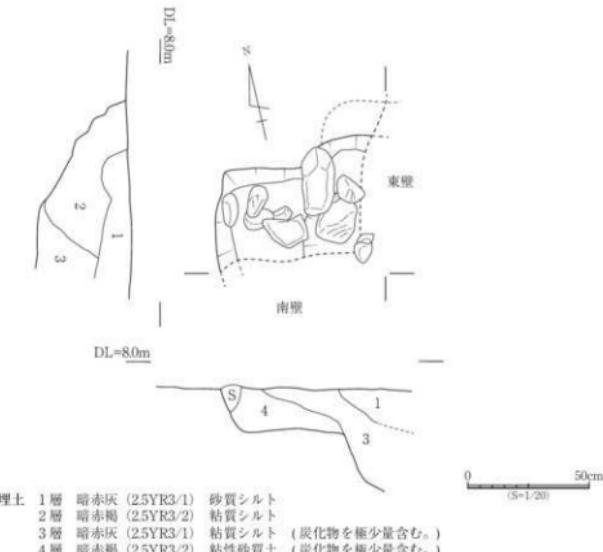


Fig.221 第6次調査 第1調査区 SK 3 遺構図

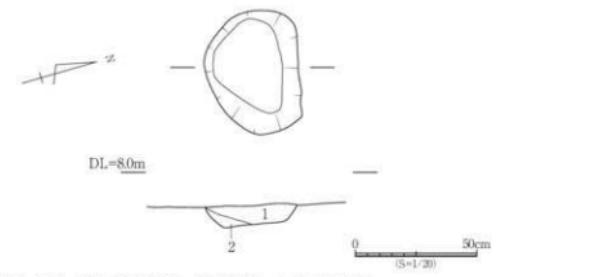


Fig.222 第6次調査 第1調査区 SK 4 遺構図

第1調査区 SK 5 (Fig.223)

SK 5 からは土器の細片が2点出土している。時期不詳である。

第1調査区 SX 1 (Fig.224)

SX 1 からは、縄文土器の細片5点の他、土師器の細片5点、そして時期不詳の細片1点が出土している。遺構床面からの遺物は確認できなかった。

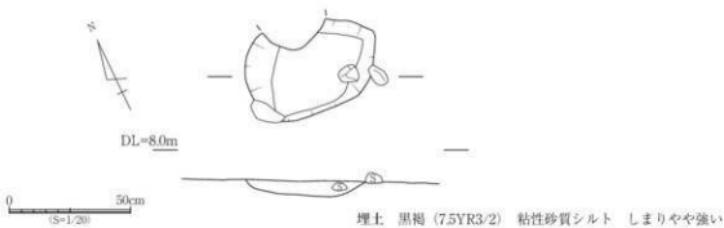


Fig.223 第6次調査 第1調査区 SK 5 遺構図

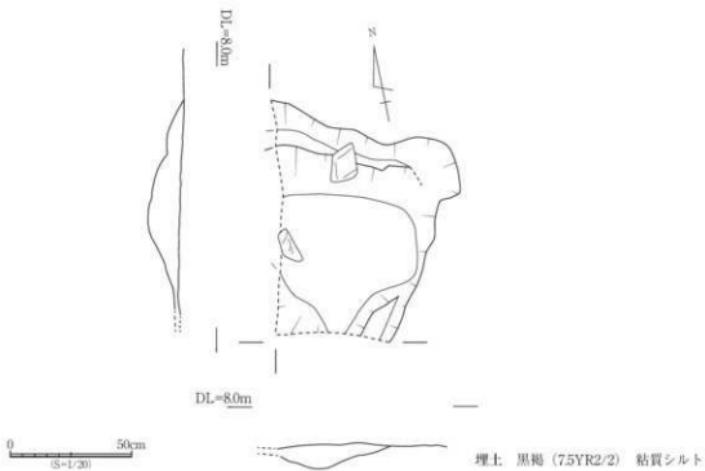


Fig.224 第6次調査 第1調査区 SX 1 遺構図

第1調査区包含層出土物 (Fig.225)

1806はI c層下部からの出土物であり、鉢の口縁部である。口縁部を緩く面取り、外面に右に斜行する沈線を施す。1807はI c層上層からの出土物であり、打製の石錐である。未製品であって、素材はホルンフェルスである。



Fig.225 第6次調査 第1調査区出土遺物 (1806・1807)

第2調査区は、第1調査区同様に近現代以前の遺物を含む包含層を確認することが出来ない。つまり、遺構を検出した土壤の上に堆積していた土壤は近現代のものであり、検出された遺構については近現代のものを含む危険性をはらんでいる。

当該調査区において検出された“遺構”は、柱穴3基、性格不明遺構1基である。性格不明遺構については、配石土壙墓として公表されたものである。

以下、“遺構”とそこから出土した遺物について報告を進める。

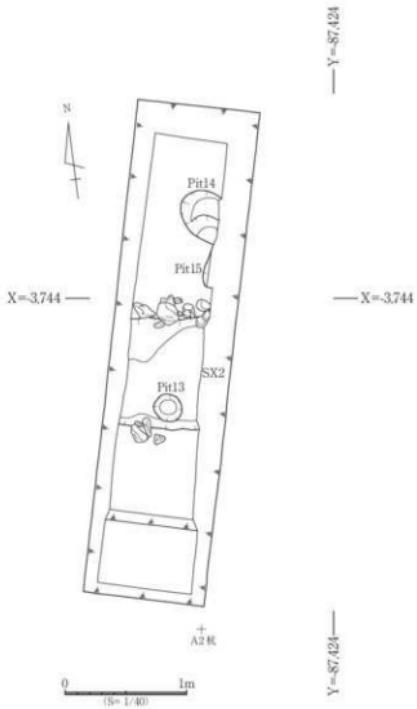


Fig.226 第6次調査 第2調査区平面図

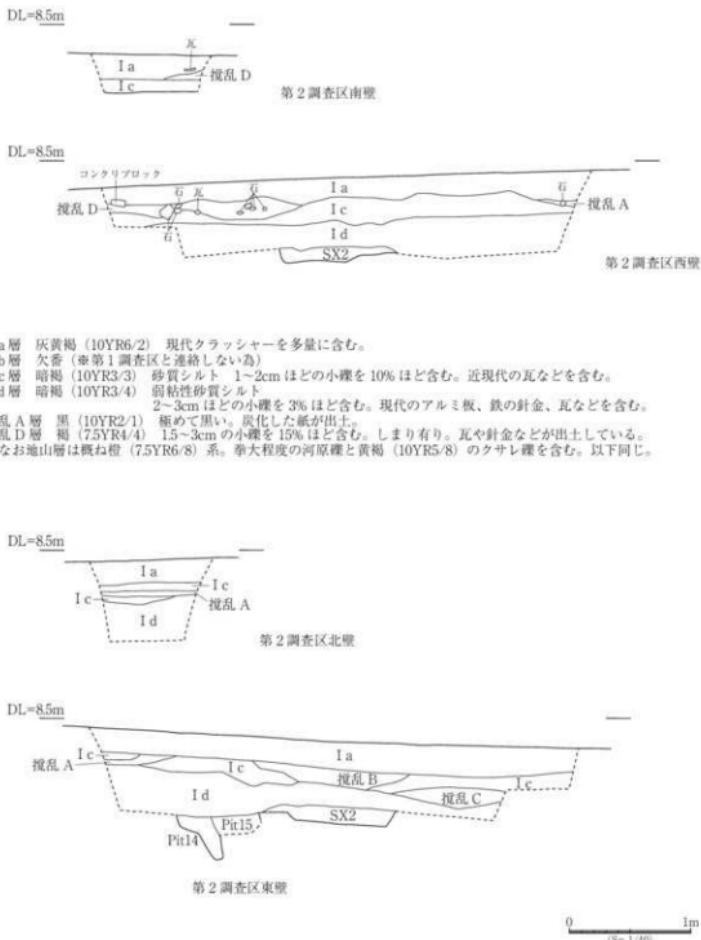
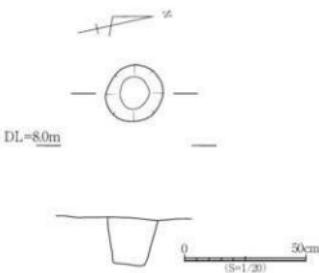


Fig.227 第6次調査 第2調査区土壤堆積図

第2調査区 Pit13(Fig.228)

Pit13からの出土物は確認できなかった。



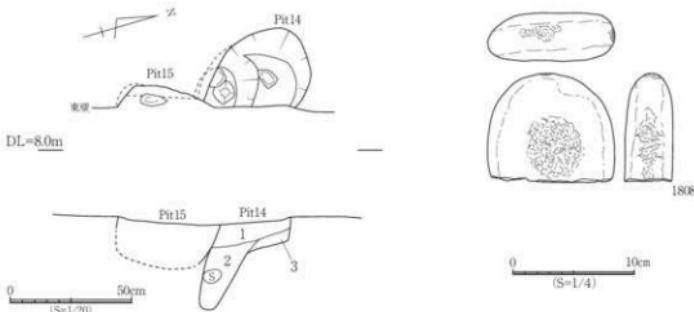
埋土 黒 (10YR2/1) 粘質シルト しまり強い。

Fig.228 第6次調査 第2調査区 Pit13 遺構図

第2調査区 Pit14・15(Fig.229)

Pit14と15は先後関係にある遺構である。前者からは時期不詳の土器細片が4点出土しており、平地式住居の柱穴として公表されたものである。

後者は、その主体が調査区外に所在するため実態が不明であるものの、敲石が出土している。1808は敲石である。表裏と側縁に敲打痕を有する。石材は砂岩であって、黒色の礫を多く含む。



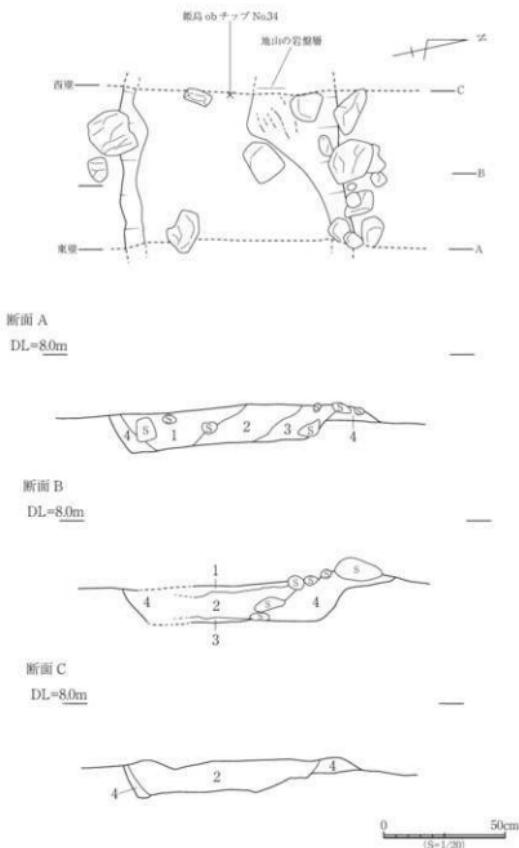
Pit15 埋土
黒褐色 (10YR2/2)
弱粘性砂質シルト
しまり強い。

Pit14 埋土
1層 黑褐色 (10YR2/2) 弱粘性砂質シルト
3cm以下の7.5YR6/8橙色粘質シルトブロックを5%未満含む。
炭化物無し。
2層 黑褐色 (10YR2/2) 粘質シルト 炭化物無し。礫(S)を含む。
3層 黑褐色 (10YR2/2) 粘性砂質シルト しまり強い。炭化物無し。

Fig.229 第6次調査 第2調査区 Pit14・15 遺構図及び出土遺物 (1808)

第2調査区 SX 2 (Fig.230)

SX 2 からは、縄文土器の破片1点の他、時期不詳の土器片9、そして姫島産黒曜石の微細剝片が1点出土している。



- 埋土
- 1層 埋褐 (7.5YR3/4) 弱粘性砂質シルト しまりよし。1~8cm 大の橙 (7.5YR6/8) ブロックを 10% 程含む。
 - 2層 褐 (7.5YR4/6) 弱粘性砂質シルト しまりよし。1~5cm 大の橙 (7.5YR6/8)~赤 (10R5/8) ブロックを 5% 未満含む。
 - 3層 褐 (7.5YR4/6) 粘質シルト しまりよし。1~3cm 大の橙 (7.5YR6/8)~赤 (10R5/8) ブロックを 5% 未満含む。
 - 4層 埋褐 (7.5YR4/3) 粘性砂質シルト 特にキメが細かい。

Fig.230 第6次調査 第2調査区 SX 2 遺構図

15. 第7次調査(Fig.231~233)

所在地 御莊平城2073等筆界未定地

調査面積 12m²

調査原因 民間開発

調査期間 令和元年8月21日から同年9月5日まで

調査主体 愛南町

調査担当 松本安紀彦(愛南町教育委員会)

調査参加者 無し

調査記録 広報あいなん2019年10月号

「マチヤクバ便り お知らせ 平城貝塚第7次発掘調査の成果について」(<https://www.townainan.ehime.jp/kurashi/chosei/koho/kohoainan/files2/201910koho11-17.pdf>)

調査概要

第7次調査区は、第4次調査区のすぐ南に位置している。現地形においては、第4次調査が所在する平坦面から僧都川に向かって下がっていく傾斜の始まりにあたり、第4次調査の成果及び第6次調査の成果から、立会調査では見逃す遺構等の存在が危惧された。

このため、浄化槽設置部分について発掘調査を実施した結果、柱穴2基を検出した。

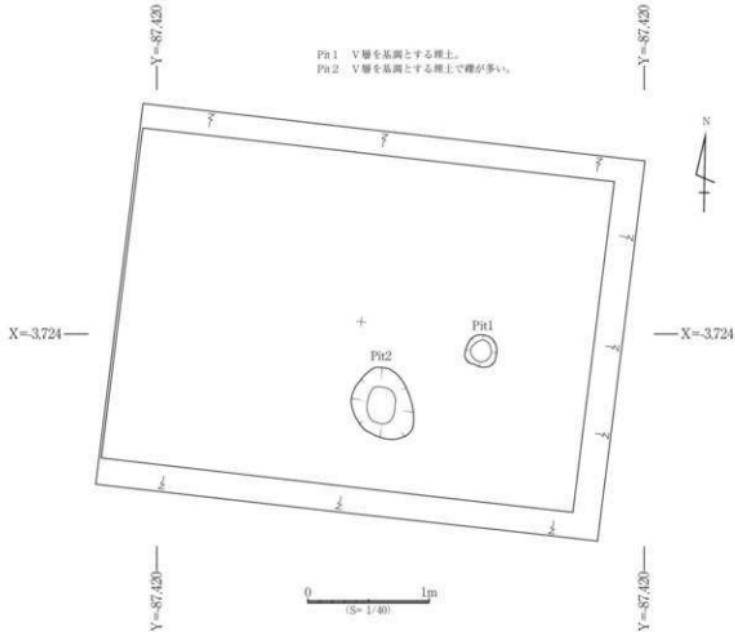
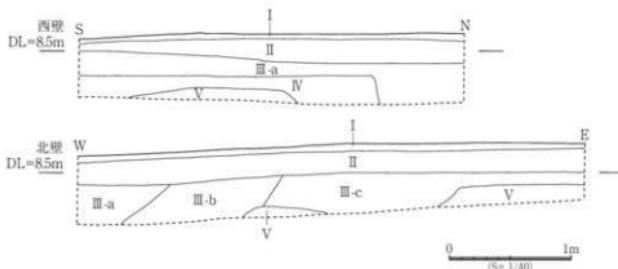


Fig.231 第7次調査 調査区平面図



- I層 アスファルト
 II層 造成砂礫土
 III-a層 2.5YR2/1 赤黒色細粒砂混シルト 三和土 レンガ破片、瓦破片、礫を多量に含む。しまり良、粘性低。
 III-b層 7.5YR3/1 黒褐色混細粒砂 ガラス片、コンクリート破片を多量に含む。しまり良、粘性低。
 III-c層 2.5YR3/1 暗赤灰褐色混細粒砂 灰色地に三和土を含む。
 IV層 7.5YR3/1 黑褐色細混細粒砂 ガラス片、瓦破片を含む。しまり良、粘性低。
 V層 7.5YR3/2 黑褐色シルト混細粒砂 古代から中世の包含層。しまり良、粘性強い。

Fig.232 第7次調査 土壌堆積図

Pit 1 (Fig.233)

1809は土師質土器の杯である。

Pit 2 (Fig.233)

1810は繩文土器で、深鉢の口縁部である。口唇部を強く面取り、外面にLRを施した後、平行する二条の沈線を巡らす。1811は弥生土器で、甕の胴部である。外面に粘土帯を貼付し、その上を押圧している。

北壁III-2層(Fig.233)

1812は土師器で、手捏のものである。1813は須恵器であり、蓋の可能性が高い。



Fig.233 第7次調査 出土遺物 (1809 ~ 1813)

16. 木村剛朗氏の資料 (Fig.234)

1814と1815は、愛媛県歴史文化博物館(西予市宇和町)において「木村剛朗氏寄贈資料」として収蔵展示されている資料の一部である。平城式土器の成立と展開について理解を深める上で重要な資料であるため、館の許可を得て図化し、掲載した。

1814は、裏面に「平城貝塚出土」と注記されているものの、出土または収集に関する経緯は不明である。しかしながら、胎土の色調や含有する鉱物等、平城貝塚から出土する土器によく見られる特徴を示していることから、平城貝塚以外の遺跡から出土したものである可能性は低いと判断した。

口縁部は波状口縁であって、口唇部を緩く面取る。外面をやや厚く作出し、RLを施した後に主文様と従文様で構成される文様を有する。主文様は、平縁部に施した二条の沈線のうち、上の沈線を波頂部まで伸ばして「U」字状に下方に折り曲げ、それに向かい合うように三条の沈線を継位に施したものである。尚、下の沈線が上の沈線と繋がっていた痕跡は確認できない。

また、内面にも文様を施しており、平縁部では並行すると考えられる二条の沈線のうち、上の沈線の端部を波頂部で丸めて収めている。下の沈線は、内面の文様の下端を区画すると考えられる。

頸部は基本的に無文であるが、外面の主文様下にのみ、左右から伸びてくる二条の沈線で波頭状文の系譜にある可能性が極めて高い意匠を描いている。ただし、磨消縄文とはしていない。左右から伸びてくる沈線は、基本的に頸胴部の境に施されていたと考えられる。

1815は、第1次調査の出土物である。裏には「7」と墨書きがあり、Fig. 12並びに13の遺物と同じ出土経緯にあると考えられる。

口縁部は、緩い波状口縁であって、幅広かつ厚く作出しており、外面に主文様と従文様で構成される文様を施した後にRLを施す。主文様は、波頂部下に施しており、その意匠は円形の刺突とそれを抱き込むように右回りの一条の沈線で描いた渦文である。従文様は、沈線で描いた矢羽状文であって、上の斜行沈線を描いた後に下の斜行沈線を描いて組み合わせ、主文様を中心に向き合うよう施されている。尚、波頂部の口唇部には、右斜行の浅い刻みを従文様と対にして施している。

頸部は基本的に無文であるが、主文様下のみに舌状の意匠を沈線で描いており、左右から伸びてくる沈線が絡む部分にはRLを施している。全体的に石灰華が付着しており、破断面にも付着している。また、僅かではあるものの、縄文の節の中等に白く固着したものが見受けられる。

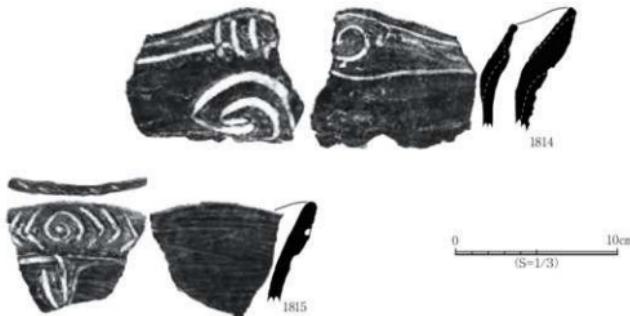


Fig.234 木村剛朗氏の資料 (1814・1815)

第Ⅲ章 自然科学分析について

年代測定と種子圧痕並びに樹種同定を令和元年度に実施した。年代測定は、第4次調査で得られた鹿の骨と第5次調査で得られた炭化材について実施し、前者は東京大学総合研究博物館放射性炭素年代測定室(プロジェクトID:P-19045)に、後者は株式会社パレオ・ラボに委託した。

東京大学総合研究博物館放射性炭素年代測定室で行ったのは、第4次調査G.D.2・D.4で得られた鹿の骨の年代測定である。

G.D.2 のものの取上番号は 478 で、シカの右肩甲骨である。G.D.4 のものの取上番号は 308 で、シカの右距骨である。骨の同定は既に行われていた状態であったため、編者が『動物考古学』(松井2008) を参考に、確認を行った。



鹿骨年代測定試料

1. 鹿骨の年代

米田穂・尾崎大真・大森貴之（東京大学総合研究博物館）

1-1. 分析試料 骨 2点

試料名	試料ID	種別	注記
D-4 No.308	S-14437	獸骨	
D-2 No.478	S-14438	獸骨	

表2. 受付分析試料のリスト

1-2. 前処理方法：ゼラチン抽出 (Longin 1971; Yoneda et al. 2002)

- ①サンドブラストおよび超音波洗浄(純水中)10分間
- ②脱灰: 0.4M HCl 40時間
- ③中性化: 純水 77時間30分
- ④アルカリ処理: 0.1M NaOH 20分
- ⑤中性化: 純水 2時間30分
- ⑥ゼラチン化 (0.0001M HCl(pH 4) 中 90°C) 45時間
- ⑦吸引ろ過 (Whatman GF/F)
- ⑧凍結乾燥>秤量 (ゼラチン)

1 - 3. 前処理結果

試料名	前処理 ID	処理前試料	ゼラチン	回収率
D- 4 No.308	PCO-3983	0.2105 g	10.07 mg	4.8%
D- 2 No.478	PCO-3984	0.3847 g	20.82 mg	5.4%

ゼラチン回収率が1%未満の場合、コラーゲンが変性している可能性がある (van Klinken 1999)。

表3. 前処理の結果

1 - 4. EA-IRMS 測定結果

炭素および窒素の重量含有率および安定同位体比の測定は、放射性炭素年代測定室において、Thermo Fisher Scientifics 社製の Flash2000 元素分析を前処理装置として、ConFlo IV インター府フェースを経由して、Delta V 安定同位体比質量分析装置で測定する、EA-IRMS 装置を用いて行った。約0.5mg の精製試料を錫箔に包み取り、測定に供した。測定誤差は、同位体比が値付けされている二次標準物質(アラニン等)を試料と同時に測定することで標準偏差を計算した。通常の測定では、 $\delta^{13}\text{C}$ の測定誤差は0.2‰、 $\delta^{15}\text{N}$ の誤差は0.2‰である。

試料名	測定 ID	$\delta^{13}\text{C}$	$\delta^{15}\text{N}$	炭素濃度	窒素濃度	C/N 比
D- 4 No.308	YL35832	-21.5‰	5.8‰	41.0%	14.8%	3.2
D- 2 No.478	YL35833	-22.0‰	5.1‰	40.7%	14.4%	3.3

表4. 元素および安定同位体比の分析結果

コラーゲンの場合、炭素濃度(重量)が13%未満、窒素濃度(重量)が4.8%未満、C/N比(原子数)が正常値(2.9 ~ 3.6)を外れる場合は、コラーゲンの変性あるいは外部有機物の混入の可能性がある (DeNiro 1985, van Klinken 1999)。今回分析した資料2点では保存状態のよいコラーゲンが回収されたと考えられる。

1 - 5. 炭素精製およびグラファイト化

試料は、銀カップに秤量し、elementar 社製 vario ISOTOPE SELECT 元素分析計に導入し、燃焼後、精製された二酸化炭素を真空ガラスラインに導入し、あらかじめ鉄触媒約2mgを秤量したコック付き反応管に水素ガス(炭素モル数の2.2倍相当)とともに封入して、650°Cで6時間加熱して実施した(Omori et al. 2017)。

試料名	グラファイト ID	試料重量	グラファイト化率	グラファイト重量	Fe 重量	C/Fe 比
D- 4 No.308	GR-9807	2.75 mg	87.5%	1.00 mg	1.93 mg	0.518
D- 2 No.478	GR-9808	2.75 mg	77.8%	0.91 mg	2.10 mg	0.433

表5. グラファイト化の結果

1 - 6. AMS測定結果

グラファイト化した炭素試料における放射性炭素同位体比の測定は、東京大学総合研究博物館が所有する加速器質量分析装置(AMS)を用いて測定した。慣用¹⁴C年代(BP年代)を算出するためには、同位体比分別の補正に用いるδ¹³C値はAMSにて同時測定した値を用いている(Stuiver and Polach 1977)。

試料名	測定ID	¹⁴ C年代	補正用δ ¹³ C
D-4 No.308	TKA-21997	3715 ± 22 BP	-20.4 ± 0.4 ‰
D-2 No.478	TKA-21998	3687 ± 22 BP	-22.5 ± 0.3 ‰

¹⁴C年代の誤差は1標準偏差を示す。

表6. 放射性炭素年代測定の結果

試料名	較正年代(1 SD)	較正年代(2 SD)	較正データ	注記
D-4 No.308	4137 cal BP(2.3%)4133 cal BP 4090 cal BP(16.7%)4070 cal BP 4043 cal BP(49.2%)3991 cal BP	4145 cal BP(12.6%)4118 cal BP 4096 cal BP(82.8%)3983 cal BP	IntCal13	
D-2 No.478	4081 cal BP(45.7%)4033 cal BP 4007 cal BP(22.5%)3982 cal BP	4090 cal BP(92.5%)3966 cal BP 3945 cal BP(2.9%)3930 cal BP	IntCal13	

表7. 推定される較正年代と注記(cal BP表記)

試料名	較正年代(1 SD)	較正年代(2 SD)	較正データ	注記
D-4 No.308	2188BC(2.3%)2184BC 2141BC(16.7%)2121BC 2094BC(49.2%)2042BC	2196BC(12.6%)2169BC 2147BC(82.8%)2034BC	IntCal13	
D-2 No.478	2132BC(45.7%)2084BC 2058BC(22.5%)2033BC	2141BC(92.5%)2017BC 1996BC(2.9%)1981BC	IntCal13	

較正年代の算出には、OxCal4.2(Bronk Ramsey, 2009)を使用し、較正データにはIntCal13(Reimer et al. 2013)を用いた。

表8. 推定される較正年代と注記(BC/AD表記)

引用文献

- Bronk Ramsey, C. (2009). Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon 51(4), 337-360.
- DeNiro, M.J. (1985). Postmortem preservation and alteration of invivo bone-collagen isotope ratios in relation to paleodietary reconstruction. Nature 317, 806-809.
- Longin, R. (1971). New method of collagen extraction for radiocarbon dating. Nature, 230, 241-242.
- Omori, T., Yamazaki, K., Itahashi, Y., Ozaki, H., Yoneda, M. (2017) Development of a simple automated graphitization system for radiocarbon dating at the University of Tokyo. The 14th International Conference on Accelerator Mass Spectrometry.

Reimer, P.J., E. Bard, A. Bayliss, J.W. Beck, P.G. Blackwell, C. Bronk Ramsey, C.E. Buck, H. Cheng, R.L. Edwards, M. Friedrich, P.M. Grootes, T.P. Guilderson, H. Haflidason, I. Hajdas, C. Hatte, T.J. Heaton, D.L. Hoffmann, A.G. Hogg, K.A. Hughen, K.F. Kaiser, B. Kromer, S.W. Manning, M. Niu, R.W. Reimer, D.A. Richards, E.M. Scott, J.R. Southon, R.A. Staff, C.S.M. Turney, and J. van der Plicht (2013). IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0–50,000 years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869–1887.

Stuiver, M., and H.A. Polach (1977). Discussion: Reporting of ^{14}C data. Radiocarbon 19(3), 355–363.
van Klinken, G.J. (1999). Bone collagen quality indicators for palaeodietary and radiocarbon measurements. Journal of Archaeological Science 26, 687–695.

2. 炭化材の年代

株式会社パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

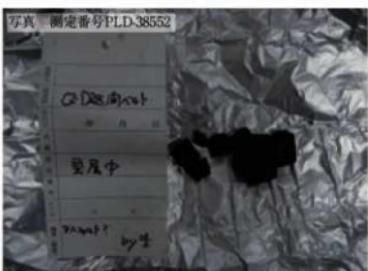
伊藤 茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・Zaur Lomtatidze

はじめに

愛南町に位置する平城貝塚より検出された試料について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。

2-1. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表9のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS : NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。



炭化材年代測定試料

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-38552	調査区：C 2・D 2区間 ベルト 層位：貝層中 試料 mol/Lo. 1 その他：形状：丸木（直径 2 cm、年輪数不明）	種類：炭化物・材（コナラ 属アカガシ亜属） 試料の性状：最終形成年輪 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸：1.2mol/L 水酸化ナ トリウム：1.0mol/L 塩酸： 1.2mol/L)

表9 測定試料および処理

2-2. 結果と考察

表10に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代、Fig. 234に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代(yrBP)の算出には、 ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差($\pm 1\sigma$)は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い(^{14}C の半減期5730±40年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP ± 1 σ)	^{14}C 年代 (yrBP ± 1 σ)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-38552 試料 No. 1	-29.55 ± 0.28	227 ± 20	225 ± 20	Post-bomb NH2 2013: 1652-1666 cal AD (37.2%) 1784-1796 cal AD (31.0%)	1644-1674 cal AD (49.7%) 1778-1799 cal AD (39.0%) 1941-1951 cal AD (6.4%) 1952-1954 cal AD (0.3%)

表10 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

^{14}C 年代の暦年較正にはOxCal4.3(較正曲線データ：Post-bomb atmospheric NH 2)を使用した。なお、1 σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2 σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

今回の試料の暦年代値較正值は、17世紀半ば～20世紀半ばとなる。

年代試料の炭化材片は、縄文時代の貝層からの検出と認定されている。ただし、年代値からは、上位からなんらかの理由で混在した炭化材片と判断できる。

参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

Hua, Q., Barbetti, M., Rakowski, A.Z. (2013) Atmospheric Radiocarbon for the Period 1950–2010. Radiocarbon, 55(4), 1-14.

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C 年代編集委員会編「日本先史時代の¹⁴C 年代」: 3-20. 日本第四紀学会.

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50.000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.

3. 炭化材の樹種同定

黒沼保子 (パレオ・ラボ)

はじめに

愛媛県愛南町の平城貝塚から出土した炭化材の樹種同定を行った。なお、同じ試料を用いて年代測定も行われている。

3 - 1. 試料と方法

試料は、5次調査でC2D2区間ベルトの貝層中から出土した炭化材(試料No. 1)である。1試料内に破片9点がみられた。

樹種同定に先立ち、肉眼観察と実体顕微鏡観察による形状の確認と、残存年輪数および残存径の計測を行った。その後、カミソリまたは手で3断面(横断面・接線断面・放射断面)を割り出し、試料台に試料を両面テープで固定した。次に、イオンスパッタで金コーティングを施し、走査型電子顕微鏡(KEYENCE社製 VHX-D510)を用いて樹種の同定と写真撮影を行った。

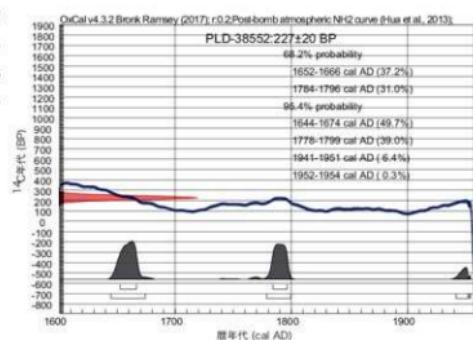


Fig.235 曆年較正結果

3-2. 結果

樹種同定の結果、広葉樹のコナラ属アカガシ亜属(以下、アカガシ亜属)が確認された。破片は9点ともアカガシ亜属であった。形状は丸木で、直径2cmであった。年輪数は不明である。

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、走査型電子顕微鏡写真を図版に示す。

- (1) コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 1a-1c 写真:274頁(試料No.1)

円形でやや大型の道管が、単独で放射方向に配列する放射孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は單一である。放射組織は同性で、単列と広放射組織がある。

アカガシ亜属は主に暖帯に分布する常緑高木で、アカガシやシラカシ、ツクバネガシ、アラカシなど8種がある。イチイガシ以外は木材組織からは識別困難なため、イチイガシを除いたアカガシ亜属とする。材は、きわめて堅硬および強靭で、水湿に強い。

試料No.	調査次	出土位置	樹種	形状	直径	年輪数	年代測定番号
1	第5次	C 2D 2区間 ベルト貝層中	コナラ属アカガシ亜属	丸木	2 cm	不明	PLD-38552

表11 樹種同定結果

3-3. 考察

試料内の破片は、9点ともアカガシ亜属であった。直径もほぼ同じであり、元は同じ1つの炭化材であった可能性がある。

この炭化材片は、年代測定の結果、17世紀半ば～20世紀半ばの曆年代値を示し、上位からのコンタミネーションと判断できる。

なお、下記に愛媛県下での本遺跡の貝層の時期である縄文時代後期の木材の分析例を参考として示す。県下では、同定結果が少なく、木製品でクスノキやアオキ、サカキなどが確認されているのみである(伊東・山田編, 2012)。四国地方でみると、香川県で縄文時代後期・晩期の自然木にアカガシ亜属やムクノキ、ムクロジなど多様な常緑および落葉の広葉樹と、イヌガヤやヒノキ、カヤなどの針葉樹が確認されている。

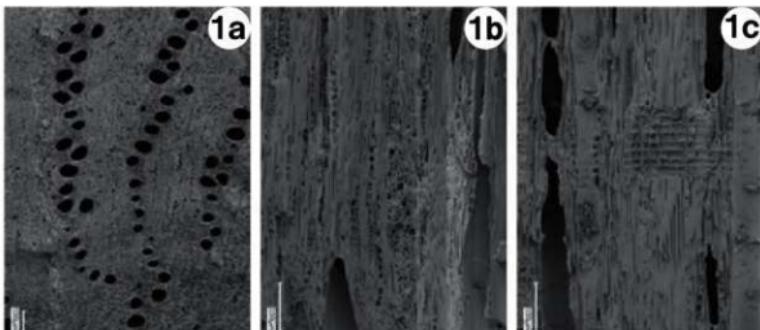
現在の森林植生によると、平城貝塚の周辺地域は、現在は常緑広葉樹林帶であり、アカガシ亜属が分布している地域である(福島, 2017)。本地域では、花粉分析結果等の古植生情報に乏しいが、縄文時代後期においても、遺跡周辺の自然環境をふまえると、平城貝塚周辺にアカガシ亜属などの常緑広葉樹が分布していたと推測される。

引用・参考文献

福島 司編 (2017) 図説日本の植生. 186p. 朝倉書店.

平井信二 (1996) 木の大百科. 394p. 朝倉書店.

伊東隆夫・山田昌久編 (2012) 木の考古学－出土木製品用材データベース－. 449p. 海青社.



1a-1c. コナラ属アカガシ亜属 (試料 No.1) a : 横断面、b : 接線断面、c : 放射断面
炭化材の走査型電子顕微鏡写真

4. レプリカ法による土器圧痕の同定

山本 華・佐々木由香(パレオ・ラボ)

はじめに

愛媛県愛南町に位置する平城貝塚は、縄文時代後期中葉の遺跡である。ここでは、土器に確認された種実の可能性がある圧痕を同定した。

4-1. 試料と方法

試料は、あらかじめ愛南町教育委員会によって種実の圧痕の可能性がある土器として抽出された4点の土器片(試料番号2、3、4、5)である。土器の時期は、いずれも縄文時代後期中葉である。

レプリカの作製方法は、丑野・田川(1991)などを参考にした。はじめに、圧痕内を水で洗い、パラロイドB72の9%アセトン溶液を離型剤として圧痕内および周辺に塗布した後、シリコン樹脂(JMシリコンレギュラータイプ)を圧痕部分に充填した。レプリカ作製後は、アセトンを用いて圧痕内および周囲の離型剤を除去した。

次に、作製したレプリカについて実体顕微鏡下で観察し、同定の根拠となる部位が残っている圧痕レプリカを同定した。その後、走査型電子顕微鏡(KEYENCE社製 超深度マルチアングルレンズVHX-D500/D510)で撮影を行った。

土器と圧痕レプリカは、愛南町教育委員会に保管されている。

4-2. 結果

圧痕4点のレプリカのうち、3点が種実の圧痕と同定され、1点は種実ではなかった。種実の内訳は、木本植物のクロモジ属近似種とクスノキ科近似種が1点ずつと、分類群を絞り込むための特徴的な部位が残存しておらず、科以上の詳細な同定が困難であった不明A種実が1点であった(表12)。以下に、種実の圧痕について分類群ごとに記載を行う。

(1) クロモジ属近似種 c.f. *Lindera* sp. 果実(試料番号4)

球体で、両端がやや突出する。端部から、やや太い稜線が伸びるほか、細かい隆線が不規則に見られる。大きさと形態は、クロモジ属クロモジなどの果実が乾燥した状態に似る。

(2) クスノキ科近似種 c.f. *Lauraceae* 種子(試料番号2)

ややいびつな球体。表面には微細な凹凸がある。一端がわずかに突出するが、腫かどうかは不明瞭。大きさと形態がクスノキ科のクロモジやシロモジ、シロダモなどの種子に似るが、明らかな腫など同定の根拠となる部位は残存していない。

(3) 不明 A Unknown A 種実(試料番号3)

完形ならば球体か。半分程度が欠損し、変形していると考えられる。やや大きめの、円形で平坦な部分があり、腫の可能性があるが、一部しか残存していない。表面は平滑で、中空。一部果皮が剥けた状態か。

試料番号	調査年次	図版番号	遺構	時期	土器の部位	圧痕位置	同定結果		法量(mm)			備考
							分類群	部位	長さ / 長軸	幅 / 短軸	厚さ	
2	第5次	1631	D 2 グリッド出土	縄文時代	口縁部	外面	クスノキ科近似種	種子	7.13	6.52	(6.16)	-
3	-	476	昭和40年資料 道路舗装水道管埋込時採集遺物	後期	胴部	外面	不明 A	種実	(6.88)	(4.16)	(4.79)	球体としての復元推定直径は約5mm
4		93	-	中期	底面	内面	クロモジ属近似種	果実	5.80	4.66	4.62	-
5	第1次	250	-	葉	口縁部	内面	種実ではない	-	-	-	-	-

括弧内は残存値または変形した状態の計測値

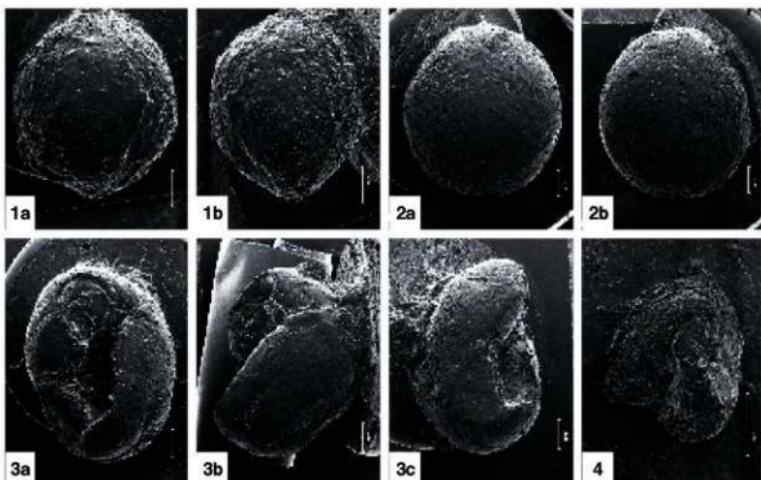
表12 平城貝塚出土土器の圧痕の同定結果

4-3. 考察

縄文時代後期中葉の土器に確認された圧痕4点について、レプリカを作製して観察したところ、クロモジ属近似種とクスノキ科近似種、不明A種実が得られた。いずれも鱗などの特徴的な部位が残っていないか、破損、変形して本来の形態とは異なる状態であった。2点は常緑広葉樹のクスノキ科の種子と考えられた。近現代では、クスノキ科の種子は採油や蠟燭の材料として利用されている。いずれの圧痕もオーバーハングしており、土器製作時か、それ以前に種実が粘土に入ったといえる。

引用文献

丑野 穎・田川裕美(1991) レプリカ法による土器圧痕の観察. 考古学と自然科学, 24, 13-36.



1. クロモジ属近似種果実（試料番号4）、2. クスノキ科近似種種子（試料番号2）、3. 不明A種実（試料番号3）、4. 種実ではない（試料番号5）

平城貝塚出土土器の圧痕レプリカの走査型電子顕微鏡写真

第IV章 平城貝塚の既往調査等の成果

1. 平城貝塚の面積と貝塚の形成について

平城貝塚は、発見当初からその面積と貝塚の形成について考察されてきた。

平城貝塚を発見した寺石の報告(寺石1891)では、面積について“貝塚ハ中尾氏邸南田圃ヲ以テ中央トス面積七八畝許リ…”と記述しており、約700m²から800m²の広がりを想定している。貝塚の形成については“…貝層ノ厚サハ一間内外ニ及ブ…”と記述しており、それが純貝層なのか貝殻混じりの土壌なのは判断できないものの、約1.8mの厚さを有する土壌堆積として認識していたと推察できる。そして寺石の、貝殻の小破片が散らばり、東京近郊に所在する貝塚と同じように貝殻の分量が多く、土器の破片も少なくないという指摘や、人骨と思われる骨が出土してそれを改葬した、という地元の声を記録として拾い上げていることは、寺石自身が人類学と考古学に立脚した視点を持って平城貝塚を見ていたという証左であり、寺石の報告は十分に信用に足るものである。

長山源雄の調査報告(長山1924)では、面積について“約五反歩程”と記述している。これは、5,000m²弱の規模となり、寺石の記録よりも6倍程度広い面積となる。貝層については、地表から一尺、つまり約30cmのところに所在し、その厚さは二尺八寸、つまり80cmを超えるものであったことが記録されている。そしてその記録からは、貝層に含まれる貝の中で牡蠣が最も目立っており、土器と石器そして獸骨が混在していたことをうかがい知ることができる(長山1938)。

現在においては、平城貝塚の面積は東西約60m南北約90mの規模のもので、橢円形様に広がっているものとして広く認識されている。その初出は、平城貝塚第1次調査の略報(西田1954)であり、面積に関する記述と共に、その範囲が図示されている(本報告書の例言末に図示)。この面積と範囲の根拠として、西田は地表面に見られる貝殻の散布を挙げている。

この略報において、西田は純貝層の所在に關し、この範囲の中において断続的に存在する可能性を指摘している。このことは、西田が平城貝塚について、古東京湾等の沿岸で見られるような広く厚い貝層を有する大規模な貝塚ではなく、後に“地点貝塚”または“点列貝塚”として注目されることとなる小規模の貝塚が、代を重ねることで形成してきた可能性に気付いていたことを意味する。

さて、平城貝塚の純貝層は、大きく分けて4地点で確認されていたことが今回明らかとなった。

1 地点目は、第1次調査A地点(西田1955)である。西田の言う“試掘壕”的西北部に偏って所在していたようで、“純粹貝層はこの試掘壕と斜交して約二十粁の厚さで東西の方向に走つてゐた。そして西の方ではこの層の深化を見たに拘らず…”と記録されている。そして“純粹貝層には土器片少なく骨角類の方が多かった”という記録から、純粹貝層中に含まれる遺物、特に土器は少なかつた可能性が高いことを考慮しておく必要がある。尚、この純粹貝層における主たる貝は、潮間帯に広がる葦原等の砂泥干潟を主な生息域とするフトヘナタリであったことが読み取れる(西田1954)。

2 地点目は、長山の2回目の調査地点と第1次調査B・C地点である。これらは極めて近い距離にあり(Fig.2)、主たる貝はいずれの地点においても牡蠣である(長山1924・1928、西田1954)。

のことから、本報告書で2地点目とする貝塚は、牡蠣を主とする1つの貝塚であり、現在確認されている平城貝塚の純貝層を有する貝塚の中で、最も大きな規模のものとなる可能性が高い。

しかしながら長山の調査では、鐘崎式土器等の後期前葉から中葉にかけての土器を中心に遺物が出土しているが(富田1999)、後の西田らの調査では遺物をほとんど確認できていない(西田1954)。

この差異については、長山の調査では地表から約30cmで牡蠣を主とする貝層に到達していたのに對し、西田らの調査では約30cmの表土と40cmから45cmの“混貝層(西田1955における混土貝層と混貝土層の総称)”が純貝層の上に堆積していたことに注意を払う必要がある。

つまり、西田らの調査地点は、長山の調査地点に比べて純貝層の上に堆積した土壤が厚かったため、純貝層に耕作等の開発作用が大きくは及んでいなかったと考えられる。これに対して長山の調査地点では、牡蠣を主とする貝層の上に堆積した土壤が西田らの調査地点よりも薄く、そこに開発作用が及んだ結果、後期前葉から中葉の土器を含む貝混じりの土壤が生成されたと考えられる。この現象には、地形が大きく影響している可能性が極めて高い。

第1章の2で述べたように、平城貝塚は僧都川に向かって傾斜する地形に形成されている。その地形の一部には河岸段丘が良好に残っており、長山と西田らが調査した地点はその縁辺にあたる。西田らの調査した地点は、長山の調査した地点よりもやや南つまり僧都川寄りであって、標高も低かったことが想像できる。そのような地形を示す地点に集中して牡蠣を投棄した結果、“牡蠣塚”が形成された可能性が高い。また、傾斜地である以上、安定した地形を安価に得るには盛土を行うしかなく、狹地直し等に先立って、盛土造成が行われたと考えられる(巻頭図版1下段)。これは結果的に、“牡蠣塚”が保護されてきたことを意味する。つまり現在の平城貝塚においてもなお、牡蠣を主とする純貝層つまり“牡蠣塚”と、それに関連する土壤堆積に期待を持つことができる。

3地点目は、第3次調査地点(草地1973)である。この地点の南部で純貝層を検出しておらず、南東隅に設定した掘削坑においては、純貝層の下にも混貝土層を確認している。この混貝土層が人為的作用によって生成されたものであるとすれば、純貝層はその人為的作用よりも新しい時期に形成されたものとなる。残念ながらこの調査においては、土壤堆積に則した調査を行う事は困難であったため、堆積したそれぞれの土壤の時代または時期について知る術はない。しかしながら、この純貝層を目撃した人物がおり、その主たる貝はハマグリで、その厚さは約1mであったとする記録を残している(木村1982)。この記録によって、先に指摘した西田の気付きは補完されたと言える。

最後に4地点目であるが、第4次調査(木村1982)のB-2区の遺構、本報告書のGB-2における柱穴群及び遺物集中(Fig.95)である。ここでは、貝殻が充満した柱穴の他、約10cmの貝層で被われていた遺物集中を検出している。貝の種類及びその組成は不明であるものの、これまで見てきた3地点のものとは明らかに異なる特徴を示している。そして、近くには3つの土壤墓を設けていたことから、縄文時代の祭祀に關係する可能性があり、“地点貝塚”的一類型として考えるべきである。

これまで見てきたとおり、平城貝塚には純貝層が確實に所在しており、牡蠣を中心とする純貝層を有する貝塚は、まだ現地に保存されていると考えられる。そして、牡蠣の他にフトヘナタリやハマグリを主とする純貝層がそれぞれ異なる地点に所在していたことは、縄文時代における時期差と環境の変化はもちろんのこと、それらを採取した季節の異なりを考慮していく必要を示している。

そして、後述する平城式土器等の、縄文時代後期の遺物を主として包蔵する混土貝層や混貝土層の生成について考えてみれば、遺物が混らない純貝層の存在があり、その上位に混土貝層や混貝土層の堆積がある以上、縄文時代後期以降に純貝層を破壊する縄文人らの営みがあった可能性を考えておく必要がある。つまり、平城貝塚の貝塚とりわけ純貝層自体は、必ずしも縄文時代後期のものに限らないことを意味する。貝塚の範囲確認調査を進める際には、まずは堆積学や土壤学を基本とし、土壤中の貝種の同定と組成、それらの成長線分析と年代測定を行う必要がある。

2. 遺物から見る平城貝塚の時間幅

平城貝塚については、これまで縄文時代後期前葉から中葉にかけての土器の研究に焦点が当てられてきたことから、平城貝塚はその時期の遺跡として理解されてきた。

しかしながら、平城貝塚の北約2kmには、後期旧石器時代の和口西の駄場遺跡が所在しており、風化が進んだホルンフェルス製の刃器(Fig.80-749)は、後期旧石器時代のもの可能性がある。

そして、平城貝塚出土物の再整理を進める中で、今回初めて平城貝塚における縄文時代草創期の存在を明らかにすることができた。隆帶文土器(Fig.14-98・Fig.120-920・Fig.198-1736)は、鹿児島県や宮崎県を中心とする南九州との関わりを考える上で重要な資料である(松本2019)。また、Fig.214-1805を、松山市北梅本乙井遺跡から出土した土器(幸泉2019)と類似した資料とするならば、隆帶文土器として理解することもできる。更に隆起線文土器(Fig.84-751)については、口縁部の形態から、久万高原町上黒岩岩陰遺跡(国立歴史民俗博物館2009)のものよりも時期が新しくなると考えられ、四国における隆起線文土器の広がりの一端を示す資料として位置付けることができる。

これら草創期の土器は、貝塚の形成には関係しない可能性が高いが、これらの包蔵を考える上で重要となるのは、第4次調査の際に山形押型文土器(Fig.106-816)が出土した黄褐色土壌と、黒色の黒曜石(Fig.107-825)が出土した茶褐色粘質土層である。この土壌は、第3次調査において記録された褐色土及び褐色粘土層に相当すると考えられ、平城貝塚における縄文時代の始まりだけでなく、後期旧石器時代の存在を考える上で鍵となる土壌である可能性を考慮しておく必要がある。

早期に関しては、前述した山形押型文土器の他、その時期に帰属すると考えられる土器が第4次調査(Fig.120-921)と第5次調査(Fig.120-921, Fig.177-1559, Fig.187-1655-1656)において少なからず出土している。これらについては、管見の限り相当する土器型式が見当たらないものの、これから先においては、九州との関係性において解決していく課題になると思われる。

前期に関しては、九州系の土器である轟B式土器(Fig.148-1236・Fig.198-1737)が僅ながら出土している。この土器は、愛南町一本松に所在する茶堂I遺跡(木村1995)でも採集されている。これに対して、瀬戸内系の土器である羽島下層式土器や北白川下層式土器等を確認することはできないが、宇和島市無月遺跡(木村1995)において羽島下層式土器が地下約6mの深さから出土し、彦崎Z1式土器が愛南町一本松に所在する広見遺跡(木村1995)で採集されている。Fig.129-1032は隆帯の上下に半截竹管状の工具で微細かつ密な「C」字刺突を施しているが、二枚貝条痕を認めることができないため、北白川下層式土器の系譜を引く前期末の土器の可能性が考えられる。

中期に関しては、前葉の瀬戸内系の土器である船元式土器(Fig.17-138・Fig.52-485・Fig.106-817)、そして中期末の北白川C式土器に相当すると考えられる土器(Fig.147-1222)が1点だけ出土している。尚、条線地に極細の微隆起帯を有する土器(Fig.148-1237)については、中期末のもの可能性が考えられる。

後期に関しては、初頭の中津式土器(Fig.148-1238・Fig.163-1402)が僅かに出土している。沈線文のみであり、磨消縄文のものは確認できていない。また、沈線で区画された刺突文を有する土器(Fig.167-1455)や、巻貝の殻頂を用いた刺突文を有する土器(Fig.164-1425・Fig.198-1738)については、高知県宿毛貝塚で型式された宿毛式土器に繼承される文様として理解し、中津式土器と同じ時期のものか、それよりも若干降る時期のものとして位置付け、特に後者については地域色である可能性を考慮する必要があると思われる。

次に、平城貝塚で型式設定された平城式土器(鎌木・西田1957、御荘町教委1957)である。この土器については、第Ⅱ章の1のとおり、型式設定の後に細分されている(犬飼1976・1982)。

問題となってきたのは平城Ⅰ式土器と平城Ⅱ式土器であって、前者は磨消縄文を有するもの、後者は口縁部に際立った文様帯を有するもの、つまり縄帶文土器である。それぞれ、全く異なる土器製作の技術のもとに形作られた土器であり、製作した集団の異なりに起因するものと考えられる。

これらの土器は、第1次調査や第3次調査において、混土層または混貝土層とされた土壤から共に出土しており、平城貝塚の時期を考慮するにおいて、両者は同時に存在するのか、それとも先後関係にあるのかを解決する必要があった。その研究過程にあるのが、所謂“平城論争”である。

さて、平城Ⅱ式土器として理解すべき土器は、第4次調査でまとまって出土しており、高い一括性を有すると判断できる。貯蔵穴出土遺物(Fig.91)、違う時代または時期の遺物を極僅かに含んでいるもののG.D.5出土遺物(Fig.118)・GE.4出土遺物(Fig.120)は、その典型事例である。これらの典型事例における深鉢口縁部の外面文様は、主文様と従文様で構成されており、縄帶文土器の特徴を示している。このことからすると、配石造構から出土した小形の深鉢(Fig.94-770)もこの典型事例に含めることが可能である。ただし、主文様下の頸部に文様を有する土器と、貯蔵穴から出土したもの(Fig.91-765)のように頸部が無文の土器については、時期差を考慮する必要がある。

これら平城Ⅱ式土器の胴部文様は、基本的に“沈線文”である。“縄文地沈線文”が主であり、沈線で区画して縄文施文部分と無文部分に分ける“磨消縄文”的ものは確認できない。第4次調査において平城Ⅰ式土器と平城Ⅱ式土器は同時に出土していないため、両者は先後すると判断できる。

四国における縄文時代後期の土器文様は、磨消縄文を多用する中津式土器に始まり、縄文地沈線文を多用する片柏式土器に至るという、磨消縄文から縄文地沈線文への変遷を示す。この変遷の中で、平城Ⅱ式土器は極めて“縄文地沈線文”に近い特徴を持つ土器型式として理解する必要がある。

次に平城Ⅰ式土器であるが、これについては一括性が高い資料は確認できなかった。よって、第1次調査と第3次調査の出土物の中から、沈線で区画する磨消縄文を有し、かつ縄帶文土器ではない土器を抽出せざるを得ない。遺存状態が良く、これまで平城Ⅰ式土器として理解されてきた土器の代表例として、Fig.23-192・Fig.33-284・Fig.52-486等がある。これらについては、波頭状文を有することから、大分県大分市に所在する小池原貝塚で型式設定された小池原上層式土器(乙益・前川1969)と同一視されることがある。しかし小池原上層式土器は、口縁波頭部下の外面に涙滴状文、胴部の波頭状文の脇に文様を有するものが目立つため、平城Ⅰ式土器とは分別すべきである。

このことより、平城貝塚における平城Ⅰ式土器を、Fig.23-192・Fig.52-486に代表されるものとして再定義する。小池原上層式土器は、Fig.33-284を類型として理解していくのが適切である。

平城Ⅰ式土器と小池原上層式土器の差異は、頸部の波頭状文の変容にも顕著に現れており、饅頭様になったもの(Fig.17-139)や、波頭状文の系譜にある意匠の両脇を区画するもの(Fig.14-100)がある。よって平城Ⅰ式土器の波頭状文は、継承していく中で変容していくと理解できる。

変容のきっかけが平城Ⅰ式土器とは異なる土器型式であるとしても、変容自体は根本的に時間差を示していると考えざるを得ず、特にFig.23-193は時間差を明確に示す土器である。口縁部は縄帶文土器、頸部は波頭状文の変容したものであって、胴部文様は縄文地沈線文となる可能性が高い。

平城式土器変遷の結論として、平城Ⅰ式土器がまず先に成立し、文様が変容していくと共に縄文地沈線文を受容して、平城Ⅱ式土器つまり縄帶文土器へと変遷したと考えられる(松本2020)。

平城II式土器以降は、昭和52年5月28日・6月5日採集資料、昭和62年11月25日採集資料に見られる様に、片柏式土器が主となる。この土器を主として出土した地点の多くが、平城式土器が多く見つかった地点の外帶で見られるのは極めて興味深い現象である。また、片柏式土器を包蔵する土壤の中にも貝殻が含まれるが、先に指摘した純貝層が確認できた4地点とは距離が離れている。このため、片柏式土器を使用する時期にも貝塚が形成されていた可能性を考慮しなければならない。

この片柏式土器の出自については、平城II式土器の系譜にあるFig.55-502を祖型とする指摘があり(林1997)、この土器に見られる波頂部の華美な外面文様と内面文様そして頂部の刻みが、片柏式土器の口縁部突起に変容したと考えれば、妥当性が高い指摘であったと言える。

片柏式土器以降の広瀬上層式土器や伊吹町式土器は、破片が出土しているものの、平城式土器から片柏式土器にかけての時期に見られたような量ではなく、貝塚や遺構を形成するものではない。よって、平城貝塚における縄文時代後期の主たる存続時期は、片柏式土器までとして理解できる。

晩期は、断片的に土器(Fig.154-1328)が確認できるものの、不鮮明な状況である。しかし、晩期初頭の滋賀里II式土器とされた土器(Fig.143-1164・1165)については、その意匠から、近畿地方から東で数多く見られる“三爻文”との関係性を考慮していく必要がある。

弥生時代については、突帯を有する前期の土器(Fig.17-137・Fig.118-916)の他、中期から後期の土器(Fig.6-35・Fig.118-914、Fig.150-1275等)が散見される程度である。

古墳時代は不明である。古代は須恵器(Fig.34-298等)、中世は底部に回転糸切痕を有する土師質土器(Fig.129-1036等)の他、瓦器椀(Fig.50-484)がある。瓦器椀については畿内から搬入された可能性が高い。これらについては、四国靈場四〇番札所觀自在寺の建立と関係すると考えられる。

3. 放射性炭素年代測定について

本報告書の刊行に先立ち、第4次調査で出土した鹿骨と第5次調査で出土した炭化材について放射性炭素年代測定とそれに付随する分析を行った(第III章)。また、第4次調査に関する年代測定を行っていた他、埋葬人骨についても年代測定が行われたため、それらを下記の表に取りまとめた。

No.	測定機関コード	年代値	試料	備考
1	Gak-11961	3,660 ± 150B.P. 1,710B.C.	Soil from Hiraiyoo Site E-4区 No.235 -35cm	試料は、E-4区地表下35cmから出土した、取上No.235(本報告 Fig.94-770)の内部に遺存していた魚骨を含む土壤。魚骨はサバ科ソウダガツオ属、エイ等。
2	Gak-11962	3,310 ± 110B.P. 1,360B.C.	Soil from Hiraiyoo Site D-4貯藏穴	試料は、D-4区地表下50cmで検出した貯藏穴(本報告 Fig.91)に遺存していた黒灰色土壤。ドングリ炭化骨含む。
3	Gak-12358	3,940 ± 160B.P. 1,990B.C.	Soil from Hiraiyoo-kaizuka	試料は、第3号人骨(本報告での第3号土壤墓 Fig.86-90)の頭蓋骨内の土壤。
4	TKA-18417	3,850-3,685 (95.4%)	平城貝塚第4次調査 第3号土壤墓被葬者	単位は cal BP で、補正是 Marine13 を使用。 試料は、第3号人骨として認識されてきた10代半ばの女性の左第4肋骨(山田 2017)。
5	TKA-21997	4,145-4,118 (12.6%) 4,096-3,983 (82.8%)	第4次調査 鹿骨 (試料ID: S-14437)	単位は cal BP で、補正是 IntCal13 を使用。 G.D. 4 (=D-4区) 出土物。詳細は第Ⅳ章。
6	TKA-21998	4,090-3,966 (92.5%) 3,945-3,930 (2.9%)	第4次調査 鹿骨 (試料ID: S-14438)	単位は cal BP で、補正是 IntCal13 を使用。 G.D. 2 (=D-2区) 出土物。詳細は第Ⅳ章。
7	PLD-38552	225 ± 20 BP	第5次調査 炭化材	“貝層”出土物。詳細は第Ⅳ章。

※学習院大学年代測定室(測定機関コード Gak-11961-11962-12358)の内容は、学習院大学の著作物である。
※学習院大学放射性炭素年代測定室 HP(https://www.gakushuin.ac.jp/univ/sci/top/nendai_data/html/index6.htm)のデータと、町で保管されてきた「学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書」を充合して掲載した。

表13 平城貝塚における放射性炭素年代測定一覧

表13の年代値は、No.7を除き、概ね縄文時代後期前半の年代値に収まるものと判断できる。

しかし、No.1からNo.3については、測定技術と試料の取り扱いに関する知見が著しく進んだ現代においては、参考値として取り扱うのが適切と考える。

その参考値の中においては、No.1の年代値を示した土壌が内部に詰まっていた土器(Fig.94-770)に比べて、No.2の年代値を示した貯蔵穴(Fig.91)から出土した土器がNo.1よりも新しい特徴を示している可能性が高いことを考えてみると、両者の年代値には有意な差があると思われる。

次に、No.4からNo.6である。No.5とNo.6は混貝土層からの出土物、No.4は第3号土壌墓の被葬者であって、第3号土壌墓は土壤堆積図(Fig.82)より、混貝土層(Ia層)と黒褐色有機層(Ic層)に跨って掘り込まれていることが確認できる。このことより、混貝土層と黒褐色有機層の新旧関係は不明であるものの、第3号土壌墓の被葬者の年代は、混貝土層よりも新しいものである必要がある。

較正年代の値において、No.4はNo.5とNo.6よりも新しい値であるため、土壤堆積図で確認できた混貝土層と第3号土壌墓の新旧は、較正年代で得られたそれぞれの値から裏付けられたと言える。

そしてNo.5とNo.6から、平城II式土器の年代を絞り込むことができた。このことは、全国の縄文土器の年代序列の中に平城II式土器を組み込んでいく上で、重要な目安を持ったことを意味する。

最後に表4のNo.7であるが、これは近世から現代にかけての年代値を示している。上位から混入したものとして片付けるのは簡単ではあるが、調査地の遺跡としての保存状況、そして試料の保管状況が必ずしも良好であったとは言えず、調査地が貝塚が所在する段丘から一段下がった地勢である以上、試料が採取された“貝層”については、貝塚本体が近世から近代の段階に部分的に崩落し、それが広がっていく過程で形成された土壌の中に含まれた“貝の圍着ブロック”として理解し、そこに年代測定と樹種同定を行った試料が巻き込まれたと解釈するのが適切と思われる。

4. 平城人の生活史～貝塚形成から墓域形成まで

貝塚では、貝殻から供給されるカルシウムにより、有機質の遺物が酸性土壤等による溶融作用から保護される。このため、平城貝塚においても動物遺存体はもとより、それらを活用した骨角器や貝製品が良好に残っていた。今回報告した資料は、大きく分けて生活用具と装身具に分けられる。

生活用具は、貝刃6点(Fig.20-177, Fig.184-1615・1616, Fig.203-1792・1793, Fig.204-1794)、穿孔具1点(Fig.64-554)、漁労具1点(Fig.103-803)、研磨具1点(Fig.110-846)、刺突具4点(Fig.204-1796～1799)、掘削具2点(Fig.205-1800・1801)がある。釣り針はまだ確認できていないが、これまで確認されている魚骨の中に大形の魚類のものがあるため、その存在を想定しておくべきであり、これから調査を進める際は、土壤の水洗選別を行う必要がある。

しかしながら、これら生活道具は、廃棄された当時の原位置を保っていない可能性が高く、その使用痕分析も課題として残っている。このため、現時点では用途が不明なものが多い。

ただし、掘削具とした鹿角(Fig.205-1800)は、第1枝角全体が著しく摩耗しており、土壤の掘削に使用した可能性が考えられる。

装身具は、垂飾品6点(Fig.41-370～372, Fig.135-1107, Fig.161-1389, Fig.205-1802)、貝輪7点(Fig.41-367～369, Fig.64-555, Fig.174-1546, Fig.178-1574, Fig.204-1795)がある。

これらの他、鹿角製の髪飾り(PL.103)と考えられるものが昭和62年11月25日採集資料と共に出土している。片舶式土器の時期のものとして位置付けられるが、残念ながら所在不明である。

貝輪と猪牙製垂飾品については、平城貝塚においては埋葬人骨に伴って出土していないものの、第5次調査地点から出土したものを除き、その他全てが第5次調査地点より上位の段丘から出土している。しかもそれらの出土地点は、埋葬人骨が確認された地点と概ね重なることから、貝輪と猪牙製垂飾品は、縄文人の装身具であったと判断できる。

また、第4次調査第3号土壙墓の被葬者を除き、第1次調査から第3次調査における埋葬人骨の遺存状態は必ずしも良好ではなく、下肢欠損等の不完全体が多い傾向にある。このことから、埋葬人骨は、混土貝層や混貝土層が生成された後に行われた開発等の人为的作用に巻き込まれ、装身具と共に土壤中に包蔵された可能性が高い。

尚、装飾品の性差については、福岡県遠賀郡芦屋町に所在する山鹿貝塚(山鹿貝塚調査団1972)の埋葬人骨の事例より、貝輪は女性の装身具、猪牙製垂飾品は男性の装身具であったと考えられる。

そして、第5次調査で“貝笛”とされた貝製の遺物については、その出土以後現在に至るまで、類例が確認できていない。改めて穿たれた2つの孔を観察した結果、それらの間の貝殻部分には、減磨した部分と光沢を示す部分そして穿孔の際の摺り切り痕が消えている部分を確認することができた(卷頭図版3)。これらは、孔の間の貝殻部分のみに確認できるため、紐擦れによって生じた使用痕である可能性が高い。のことより、首からぶら下げて胸元を飾る装飾品として考えられる。

同じ調査で見つかった貝輪と併せて考えてみると、それらは女性の所有物で、死者と共に埋葬された可能性が高い。また、その女性は妊婦であった可能性も考えられる(春成2020)。

群	No.	性別	出典: 小片 1985		備考
			推定年齢	観察	
A	1	男性	壮年期終わり頃	仰臥位、破損多し、変形性脊椎症、縄文人的特徴が多く見る人骨	新潟大学医学部保管 (小片保コレクション)
	2	男性	壮年期か老年期	頭蓋破片のみ、1の人骨と著しい差はない	新潟大学医学部保管 (小片保コレクション)
	3	女性	壮年期か老年期	頭蓋破片のみ	新潟大学医学部保管 (小片保コレクション)
	4	女性	壮年期か老年期	頭蓋破片のみ	新潟大学医学部保管 (小片保コレクション)
	5	女性?	壮年の終りか老年期	頭蓋破片のみ	新潟大学医学部保管 (小片保コレクション)
	6	不明	成人骨	頭蓋の一小破片	新潟大学医学部保管 (小片保コレクション)
	7	不明	老年期	下顎骨破片、歯槽部は全く萎縮 歯牙は全く生前に脱落	新潟大学医学部保管 (小片保コレクション)
B	8	女性?	12~13才(少年期)	仰臥伸展位、破損多し	新潟大学医学部保管 (小片保コレクション)
C	9	男性	老年期の終り頃	頭蓋破片その他	新潟大学医学部保管 (小片保コレクション)
	10	男性	壮年か老年期	頭蓋破片その他	新潟大学医学部保管 (小片保コレクション)
	11	女性	老年期	頭蓋破片その他、下顎骨破片	新潟大学医学部保管 (小片保コレクション)

* A群 No. 1は、第1次調査(昭和29年)で得られたもの。同群 No. 2から7は、第1次調査地点の東西で出土したものと“前田バチンコ店跡(第4次調査地点の真南)”で収拾されたものが混在している。

* B群 No. 8については出土経緯が不明であるが、第2次調査で得られていた人骨の可能性がある。

* C群は、城辺中学校(現 愛南町所在)で保管されていたものであるが、保管に至る経緯は不明。(以上、西田 1985 より)

群	No.	性別	出典: 山田・山本 1982		備考
			推定年齢	観察	
第4次	12	男性	成人	強健な体つき	本報告書の、第4次調査 “第1号土壙墓”的被葬者。愛南町所蔵。
	13	不明	幼児(4歳未満)	骨質が非常に脆弱、乳歯が完全で水久歯が未萌出	本報告書の、第4次調査 “第2号土壙墓”的被葬者。愛南町所蔵。
	14	女性	若年(10代半ば)	身長130cm程度、骨に折れや切傷または病変は確認できず。	本報告書の、第4次調査 “第3号土壙墓”的被葬者。愛南町所蔵。

表14 平城貝塚より出土した埋葬人骨一覧

平城貝塚においては、現在のところ14体の埋葬人骨が確認されている（表14）。先程述べた女性の装飾品を副葬品として理解し、貝塚発見時の寺石の聞き取りと併せて考えてみれば、埋葬人骨の数は16体となる。貝塚の広がりを考えると、その数はまだ増える可能性が高い。

埋葬形態については、埋葬姿勢や遺構の掘方が分かるものは土壙墓として理解できる。おそらくは、幼児以上の年齢の平城人は土壙墓で埋葬するのが、この地域における当時の風習であった可能性がある。

埋葬姿勢については、被葬者を仰向けにして体を伸ばして埋葬する“仰臥伸展葬”が主であったと考えられる。B群No.8や第4次調査第3号土壙墓被葬者のように、10代半ばであったにも関わらず、“仰臥伸展葬”で葬られながらも装身具を持っていなかった事例は、縄文人の“成人”的認知に関する事象として考えられることから、“成人”的認知に関する種々の学界において、重要な資料になると思われる。

さて最後に、平城貝塚における貝塚の形成から墓域の形成まで、そしてこの地に遺跡を形成した要因について考察を加え、平城貝塚総括報告書1のまとめとする。

本章の1で考察したように、牡蠣を中心とする遺物を含まない純貝層で成り立つ貝塚と、その上に堆積した遺物を含む混貝土層や混貝土層から、牡蠣を中心とする貝塚は、平城式土器よりも古い時期に形成された可能性がある。この貝塚が形成された時期については、明確な目的を持ち、適切な手段によって行われる発掘調査と、炭素14年代測定により明らかにできる。

次に平城式土器の時期であるが、これがI式とII式に分けられる以上、それなりの時間幅を持つ時期として理解する必要がある。

この時期においては、ハマグリを中心とする純貝層で成り立つ貝塚と、フトヘナタリを中心とする純貝層で成り立つ貝塚の形成が見られるが、両者がどの土器型式と関係するのかについては、情報が不足している。

しかしながら、第4次調査地点において平城Ⅱ式土器の段階で貯蔵穴等が形成されていることから、それらの貝塚の近くに集落が所在した可能性を考慮する必要がある。

その後、混土貝層や混貝土層が生成されるが、それらの中に含まれるのが平城式土器で、それらを掘り込んで第3号土坑墓が形成され、土坑墓群によって墓域が形成されたと考えた場合、墓域は平城式土器よりも新しい時期に形成されたとして理解できる。また実際に、第4次調査地点で行われてきた炭素14年代測定値も時間差を示していることは、その裏付けとして理解できる。

その後、片舟式土器の時期にも貝塚が形成されていた可能性が大きいが、それが平城式土器が出土する地点の外帯に所在し、鹿角製髪飾りが出土していることを鑑みると、片舟式土器を使用した縄文人の意図的な形成が考えられ、彼らの埋葬も行われていたことを考慮する必要がある。

さて、長期間にわたって形成され続けてきた平城貝塚は、その地勢より、平城人が生活を営むにあたって大きな魅力を有していたことは明らかである。また、舟を利用した移動が可能であったことも魅力の一つであったと考えられる。

しかし、このような地勢は四国西南地域沿海部の至る所で見られることから、平城貝塚において長期間にわたり生活が営まれた根拠として地勢のみに目を向けるのは、説明として不十分である。

それを補う説明として、ホルンフェルスという石器石材が挙げられる（多田2018）。この石材は、愛南町の山地に豊富に所在しており、後期旧石器時代から使用されている。

そして、僧都川や和口川で河原石として入手できることからその獲得に労を要しない。つまり平城貝塚は、石器石材の獲得に極めて適した地点に形成されており、それがこの地点において、長期間にわたって生活を営むことを可能にしたと考えられる。

平城貝塚は、その形成からして極めて個性的であり、西日本の縄文時代を語る上で欠かせない遺跡であるが、地勢と石材両方に恵まれた稀な環境が支えた希少な遺跡として理解する必要がある。

引用・参考文献

- 犬飼徹夫 1976 「愛媛県平城貝塚の再評価」『考古学ジャーナル』129 ニューサイエンス社
17-20頁
- 犬飼徹夫 1982 「第二章 猿狹・漁撈の生活と文化 第一節 縄文時代の自然環境と縄文式土器の編年 2 縄文式土器の編年と概要」『愛媛県史』原始・古代 I 愛媛県
51-100頁
- 犬飼徹夫 1997 「愛媛県南宇和郡平城貝塚出土土器の総括とその課題」『愛媛考古学』14
愛媛考古学協会 30-44頁
- 小片保 1985 「愛媛県南宇和郡御荘町平城貝塚(縄文後期)人骨所見概報」『愛媛考古学』8
愛媛考古学会 1-4頁
- 乙益重隆・前川威洋 1969 「縄文後期文化 九州」『新版考古学講座』3 雄山閣 269-289頁
- 鎌木義昌・西田栄 1966 「伊豫平城貝塚」『瀬戸内考古學』創刊号 瀬戸内考古学会 1-16頁
- 木村剛朗 1982 「第2節 自然遺物」『平城貝塚 愛媛県南宇和郡御荘町平城貝塚第IV次発掘調査報告書』御荘町教育委員会 57-59頁
- 木村剛朗 1995 「27 広見遺跡」『四国西南沿海部の先史文化 旧石器・縄文時代』
幡多埋文研 687-712頁
「28 茶堂 I 遺跡」『四国西南沿海部の先史文化 旧石器・縄文時代』
幡多埋文研 713-726頁
「43 無月遺跡」『四国西南沿海部の先史文化 旧石器・縄文時代』
幡多埋文研 788-791頁
- 幸泉満夫 2016 「中国・四国地方における縄文貝塚の多様性に関する基礎的考察」『愛媛大学法文学部論集人文学科編』第40号 愛媛大学法文学部 75-118頁
- 幸泉満夫 2019 「瀬戸内最古の土器」『愛媛大学法文学部論集人文学科編』第47号 愛媛大学法文学部 1-34頁
- 幸泉満夫 2020 「未評価出土文化財をめぐる博物館資料学の実践研究(2)-縄文文化解体期の南四国域における粗製深鉢群の再検証(前編)-」
『愛媛大学法文学部論集人文学科編』第48号 愛媛大学法文学部 127-150頁
- 草地牲自 1973 「平城貝塚第三次発掘調査概報」『愛媛の文化』第十三号
愛媛県文化財保護協会 198-206頁
- 多田仁 2018 「愛南町における先史時代の石材伝統」『愛南町史』 愛南町 735-758頁
- 寺石正路 1891 「四国島貝塚の発見」『東京人類学会雑誌』第17卷第67号 東京人類学会
17-21頁

- 富田尚夫 1999 「長山源雄氏収集考古資料」『研究紀要』第4号 愛媛県歴史文化博物館
92-114頁
- 直良信夫 1984 「IV 日本產馬類の遺体 1 繩文式文化期の馬齒・馬骨」
『日本馬の考古学的研究』校倉書房 69・70頁
- 長山源雄 1924 「平城貝塚調査報告」『考古学雑誌』第14卷第11號 日本考古学会
703-712頁
- 長山源雄 1928 「上編 通史 第1章 先史時代 第一節 石器時代に於ける繩文式系文化」
『南宇和郡史』南宇和郡町村長會 1-8頁
- 西田栄 1954 「平城貝塚調査略報告」『愛媛大学紀要第一部人文科学』第二卷第1号 愛媛大学
119-132頁
- 西田栄 1955 「平城貝塚の発掘について－中間報告－」『伊豫史談』第139號 伊豫史談会
1-12頁
- 西田栄 1985 「追記：愛媛県南宇和郡御荘町平城貝塚（繩文後期）人骨所見概報」
『愛媛考古学』8 愛媛考古学会 4頁
- 春成秀爾 2020 「序章 上黒岩岩陰と繩文草創期」『季刊考古学・別冊32 上黒岩岩陰と繩文草
創期』雄山閣 3-8頁
- 林潤也 1997 「2. 平城上層式土器(片柏式土器)の性格とその分布」『平城貝塚 平城貝塚第V
次発掘調査報告書Ⅱ』御荘町教育委員会 12-26頁
- 松本安紀彦 2019 「四国西南地域の繩文文化1 - 草創期・土器の始原の頃について -」
『繩文時代』第30号 繩文時代文化研究会 163-178頁
- 松本安紀彦 2020 「平城式土器の今」『関西繩文研論集』4 関西繩文研究会 39-54頁
- 山鹿貝塚調査団 1972 「山鹿貝塚 福岡県遠賀郡芦屋町山鹿貝塚の調査」
- 山崎真治 2003 「縁帶文土器の編年的研究」『東京大学考古学研究室研究紀要』第18号
東京大学考古学研究室 35-109頁
- 山田康弘 2017 「平城人に迫る！」～平城貝塚の繩文人骨の再検討～
平成29年度愛南なんでも講座
※講座の際に公表された年代測定値は、測定の速報値である。
※年代測定値は、下記の研究成果に基づくものである。
科学研究費補助金 基盤研究(A) 課題番号18H03593
研究課題名：考古学・人類学・文化財科学の学際的研究による繩文社会論の
再構築
研究代表者：山田康弘
- 山田正興・山本恵三 1982 「第6章 人骨の所見」『平城貝塚 愛媛県南宇和郡御荘町平城貝塚
第IV次発掘調査報告書』御荘町教育委員会 60-63頁
- 御荘町教育委員会 1957 「伊豫平城貝塚-繩文式土器を中心として-」
- 国立歴史民俗博物館 2009 「国立歴史民俗博物館研究報告第154集 [共同研究]愛媛県上黒岩遺
跡の研究」

遺物觀察表

遺物番号	調査次第等	出土緯	遺物種	器種	部位	法量				色調			焼成	備考	
						口径(cm)	頭径(cm)	胴径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	器厚(mm)	内面	外面		
1	1	1	繩文土器	深鉢	口縁部	31.0				6~18	にい・黒 GYR 5-4)	明赤褐 GYR 5-6)	明赤褐 GYR 5-6)	良	粘土は緻密。1mm大の砂粒を含む。
2	1	1	繩文土器	深鉢	頭縫部					8~9	にい・黒 GYR 5-4)	にい・黒褐 (GYR 5-6)	相 GYR 6-6)	良	粘土は緻密。微細な角閃石を僅かに含む。
3	1	1	繩文土器	深鉢	側部					12~15	にい・黒 GYR 5-4)	にい・黒褐 (GYR 5-6)	相 GYR 6-6)	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。微細な金雲母と角閃石を僅かに含む。
4	1	1	繩文土器	注口付土器	胴 部					8~9	褐灰 (GYR 4-1)	にい・黄褐 (GYR 6-4)	にい・黄褐 (GYR 5-7)	良	粘土は緻密。0.5~1mm大の砂粒を含む。微細な角閃石を僅かに含む。
5	1	1	繩文土器	深鉢	側 部					7.5~8.5	褐 GYR 4-3)	にい・黒 GYR 5-6)	にい・黒 (GYR 5-7)	良	粘土は緻密。1mm大の砂粒を僅かに含む。
6	1	1	繩文土器	深鉢	口縁部					6.5~12	明赤褐 GYR 5-6)	相 GYR 6-6)	明赤褐 GYR 5-6)	不良	粘土は緻密。0.5~2mm大の砂粒を多く含む。微細な金雲母を多く含む。
7	1	1	繩文土器	深鉢	口縁部					8~16	明赤褐 GYR 5-6)	にい・黒 GYR 5-6)	相 GYR 6-6)	良	粘土は緻密。0.5~1mm大の砂粒を含む。微細な金雲母を多く含む。
8	1	1	繩文土器	深鉢	口縁部					6.5~8	相 GYR 6-6)	にい・黄褐 (GYR 7-8)	相 GYR 6-6)	良	粘土は緻密。0.5~1mm大の砂粒を含む。微細な角閃石を僅かに含む。
9	1	1	繩文土器	深鉢	口縁部					4~8	明赤褐 GYR 5-8)	相 GYR 4-6)	明赤褐 GYR 5-6)	良	粘土はやや粗。0.5~1mm大の砂粒を多く含む。微細な金雲母を多く含む。
10	1	1	繩文土器	深鉢	口縁部					8~11	相 (GYR 4-7)	にい・黒 GYR 5-6)	にい・黒 GYR 5-6)	良	粘土は緻密。微細な金雲母を少し含む。
11	1	1	繩文土器	深鉢	口縁部					4.5~6.5	明赤褐 GYR 5-6)	明赤褐 GYR 5-6)	にい・黄褐 (GYR 6-7)	良	粘土はやや粗。0.5mm大の砂粒を多く含む。微細な金雲母を含む。
12	1	1	繩文土器	深鉢	頭縫部					6.5~9	褐灰黄 (GYR 5-2)	にい・黒 (GYR 5-4)	褐灰黄 (GYR 5-4)	良	粘土はやや粗。0.5~1mm大の砂粒を含む。微細な金雲母を含む。
13	1	1	繩文土器	深鉢	口縁部					5.5~7.5	相 GYR 6-6)	にい・黄褐 (GYR 6-6)	にい・黒 GYR 5-2)	良	粘土はやや粗。0.5~1mm大の砂粒を多く含む。微細な金雲母を含む。
14	1	1	繩文土器	深鉢	底 部	10.0				4~12.5	にい・黄褐 (GYR 6-4)	明赤褐 (GYR 6-6)	黒 GYR 2-1)	良	粘土はやや粗。0.5~1mm大の砂粒を多く含む。
15	1	1	繩文土器	鉢	口縁部					6.5~8.5	相 GYR 5-6)	相 GYR 6-6)	相 GYR 6-6)	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。微細な金雲母を多く含む。
16	1	1	瓦質土器	浅鉢	底 部	13.0				7.5~12	褐灰 (GYR 4-1)	1.2~い・黒 (GYR 4-1)	1.2~い・黒 GYR 6-4)	良	粘土は緻密。微細な金雲母を含む。
17	1	2	繩文土器	深鉢	口縁部					6~15	黒 GYR 2-1)	褐灰 GYR 4-2)	にい・黒 GYR 5-5)	良	粘土は緻密。0.5~1mm大の砂粒を含む。微細な金雲母を含む。
18	1	2	繩文土器	深鉢	口縁部					6.5~15	にい・黒 GYR 5-4)	にい・黄褐 (GYR 6-4)	にい・黄褐 (GYR 6-4)	良	粘土はやや粗。1~1.5mm大の砂粒を含む。
19	1	2.4	繩文土器	深鉢	口縁部					8~20	にい・黄褐 (GYR 6-4)	相 GYR 6-6)	褐灰褐 (GYR 6-2)	良	粘土はやや粗。0.5~1mm大の砂粒を多く含む。微細な金雲母を僅かに含む。
20	1	2	繩文土器	深鉢	口縁部					6~9	にい・黒 GYR 5-4)	相 GYR 6-6)	相 GYR 6-6)	良	粘土はやや粗。0.5~1mm大の砂粒を含む。微細な金雲母を含む。
21	1	2	繩文土器	深鉢	口縁部					7.5~11.5	にい・黒 GYR 5-5)	にい・黄褐 GYR 6-2)	にい・黄褐 GYR 6-2)	良	粘土は緻密。0.5~1.5mm大の砂粒を含む。微細な角閃石を含む。
22	1	2	繩文土器	深鉢	口縁部					5~9	相 GYR 6-6)	相 GYR 6-6)	にい・黄褐 (GYR 7-6)	良	粘土はやや粗。0.5~1mm大の砂粒を多く含む。微細な金雲母を含む。
23	1	2	繩文土器	深鉢	口縁部					7~10	にい・黒 GYR 5-4)	明赤褐 (GYR 5-6)	にい・黒褐 GYR 5-6)	良	粘土は緻密。0.5~1mm大の砂粒を含む。微細な金雲母を含む。
24	1	2	繩文土器	鉢	口縁部					6.5~11.5	にい・黒 GYR 6-4)	にい・黒 GYR 6-4)	にい・黒 GYR 6-4)	良	粘土は緻密。微細な金雲母を含む。
25	1	2	繩文土器	深鉢	口縁部					9~11.5	にい・黒 (GYR 6-4)	相 GYR 6-6)	にい・黒 GYR 6-6)	良	粘土は緻密。0.5mm大の砂粒を多く含む。微細な金雲母を僅かに含む。

遺物番号	調査次第等	出土緯	遺物種	器種	部位	法量				色調			焼成	備考	
						口径(cm)	頭径(cm)	胴径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	器厚(mm)	内面	外面		
26	1 2	繩文土器	深鉢	口縁部						10.5 ~ 12	相 G5YR 6/3)	に赤い黄褐色 (GYR 6/3)	に赤い褐色 (GYR 6/3)	良	粘土は緻密。0.5 ~ 2mmの大砂粒を多く含む。
27	1 2	繩文土器	浅鉢	口縁部						6 ~ 8	灰褐色 (GYR 4/2)	灰褐色 (GYR 4/2)	相 G5YR 6/3)	良	粘土は緻密。0.5 ~ 1mmの大砂粒を含む。微細な金雲母を含む。
28	1 2	繩文土器	深鉢	胴 部	29.0					6 ~ 9	に赤い黄褐色 (GYR 6/3)	相 G5YR 6/3)	に赤い黄褐色 (GYR 6/3)	良	粘土は緻密。0.5 ~ 2mmの大砂粒を含む。微細な金雲母を含む。
29	1 2	繩文土器	深鉢	頭縁部	37.4					5.5 ~ 10.5	明赤褐色 (GYR 5/8)	明赤褐色 (GYR 5/8)	明赤褐色 (GYR 5/8)	良	粘土は緻密。0.5 ~ 1mmの大砂粒を含む。微細な金雲母を多く含む。
30	1 2	繩文土器	深鉢	胴 部						5 ~ 6.5	黒 (GYR 1.7/1)	に赤い褐色 (GYR 5/4)	に赤い褐色 (GYR 5/4)	良	粘土は緻密。0.5 ~ 1mmの大砂粒を含む。微細な金雲母を含む。
31	11 2	繩文土器	深鉢	底 部	11.8					10.5 ~ 13.5	明赤褐色 (GYR 5/8)	相 G5YR 6/3)	明赤褐色 (GYR 5/8)	良	粘土は相。0.5 ~ 2mmの大砂粒を多く含む。
32	1 2	繩文土器	深鉢	底 部	9.4					7.5 ~ 15.5	に赤い黄褐色 (GYR 7/2)	に赤い黄褐色 (GYR 7/4)	に赤い黄褐色 (GYR 7/2)	良	粘土は緻密。0.5 ~ 2mmの大砂粒を含む。
33	1 2	繩文土器	浅鉢	口縁部						6.5 ~ 7.5	明赤褐色 (GYR 5/6)	明赤褐色 (GYR 5/6)	に赤い褐色 (GYR 5/3)	良	粘土は緻密。
34	1 2	繩文土器	浅鉢	口縁部						6 ~ 10.5	に赤い黄褐色 (GYR 6/3)	に赤い褐色 (GYR 6/4)	黒 (GYR 2/1)	良	粘土は緻密。0.5 ~ 1mmの大砂粒を含む。微細な金雲母を多く含む。
35	1 2	繩文土器	鉢	口縁部						4.5 ~ 6.5	相 (GYR 6/6)	黒 (GYR 1.7/1)	相 G5YR 6/3)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を保たない。微細な角閃石を僅かに含む。
36	1 2	先史土器	壺	口縁部						9.5 ~ 10	に赤い褐色 (GYR 6/4)	に赤い褐色 (GYR 6/4)	灰褐色 (GYR 6/2)	良	粘土は緻密。1.5mmの大砂粒を保たない。微細な金雲母を含む。
37	1 3	繩文土器	深鉢	口縁部						9 ~ 14	相 (GYR 6/6)	相 (GYR 6/6)	相 (GYR 6/6)	良	粘土は緻密。0.5 ~ 4mmの大砂粒を含む。微細な角閃石を含む。
38	1 3	繩文土器	深鉢	口縁部						6 ~ 14	に赤い褐色 (GYR 5/4)	明赤褐色 (GYR 5/8)	に赤い黄褐色 (GYR 7/4)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な金雲母を多く含む。
39	1 3	繩文土器	深鉢	口縁部						5 ~ 10	に赤い黄褐色 (GYR 6/4)	に赤い黄褐色 (GYR 6/4)	に赤い黄褐色 (GYR 6/3)	良	粘土はやや相。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な角閃石を僅かに含む。
40	1 3	繩文土器	深鉢	口縁部						7.5 ~ 15	に赤い褐色 (GYR 5/4)	明赤褐色 (GYR 5/6)	に赤い褐色 (GYR 5/4)	良	粘土は相。0.5 ~ 2mmの大砂粒を多く含む。微細な金雲母を多く含む。
41	1 3	繩文土器	深鉢	口縁部						7.5 ~ 10.5	相 (GYR 6/6)	相 (GYR 6/6)	相 (GYR 6/6)	良	粘土は緻密。1 ~ 2mmの大砂粒を含む。微細な角閃石を含む。
42	1 3	繩文土器	深鉢	口縁部						7 ~ 8.5	に赤い黄褐色 (GYR 5/3)	に赤い黄褐色 (GYR 6/4)	灰褐色 (GYR 6/2)	良	粘土は緻密。0.5 ~ 1mmの大砂粒を含む。微細な金雲母を含む。
43	1 3	繩文土器	深鉢	口縁部						6 ~ 13	相 (GYR 6/6)	明赤褐色 (GYR 5/6)	明赤褐色 (GYR 5/6)	良	粘土はやや相。0.5 ~ 1mmの大砂粒を多く含む。微細な金雲母を多く含む。
44	1 3	繩文土器	深鉢	口縁部						6.5 ~ 10.5	灰褐色 (GYR 5/5)	に赤い黄褐色 (GYR 6/4)	に赤い褐色 (GYR 5/4)	良	粘土は緻密。0.5 ~ 1mmの大砂粒を多く含む。微細な角閃石を僅かに含む。
45	1 3	繩文土器	深鉢	口縁部						4.5 ~ 7	に赤い黄褐色 (GYR 5/3)	に赤い褐色 (GYR 5/3)	に赤い褐色 (GYR 5/3)	良	粘土は緻密。1mmの大砂粒を含む。
46	1 3	繩文土器	深鉢	口縁部						6.5 ~ 8.5	明赤褐色 (GYR 5/6)	明赤褐色 (GYR 5/6)	明赤褐色 (GYR 5/6)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な金雲母を僅かに含む。
47	1 3	繩文土器	深鉢	口縁部						8 ~ 10	に赤い黄褐色 (GYR 5/3)	に赤い褐色 (GYR 5/4)	に赤い褐色 (GYR 5/4)	良	粘土は緻密。1.5 ~ 4mmの大砂粒を含む。微細な角閃石を含む。
48	1 3	繩文土器	鉢	口縁部						5 ~ 9	に赤い黄褐色 (GYR 5/4)	明赤褐色 (GYR 4/1)	明赤褐色 (GYR 4/1)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。
49	1 3	繩文土器	深鉢	胴 部						6.5 ~ 8	に赤い黄褐色 (GYR 7/3)	灰褐色 (GYR 7/3)	黒褐色 (GYR 3/1)	良	粘土は緻密。0.5 ~ 1mmの大砂粒を含む。微細な石英を含む。
50	1 3	繩文土器	深鉢	頭縁部						5.5 ~ 9	相 (GYR 6/6)	相 (GYR 6/6)	に赤い褐色 (GYR 5/3)	良	粘土は緻密。Immの大砂粒を含む。微細な角閃石を多く含む。

遺物番号	調査次第等	出土緯経	遺物種類	器種	部位	法量					色調			焼成	備考	
						口径(cm)	頭径(cm)	胴径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	器厚(mm)	内面	外面	断面		
51	1	3	繩文土器	深鉢	胴部					7~85	に赤い黄褐 G5YR 5~3	褐灰 G5YR 4/1	に赤い黄褐 G5YR 7/4	良	胎土は緻密、微細な角閃石および石英を多く含む。	
52	1	3	繩文土器	鉢	頭胴部					6~10	灰黄褐 G5YR 6~2	に赤い黄褐 G5YR 7/3	に赤い黄褐 G5YR 7/3	良	胎土は粗、3~7mmの大石を多く含む。微細な全雲母を多く含む。	
53	1	3	繩文土器	鉢	口縁部					6~12	に赤い黄褐 G5YR 5~4	に赤い黄褐 G5YR 5~4	に赤い黄褐 G5YR 5~4	良	胎土は緻密、0.5mmの大砂粒を僅かに含む。微細な全雲母を多く含む。	
54	1	3	繩文土器	浅鉢	口縁部					5~75	に赤い黄褐 G5YR 4/3	明褐 G5YR 5~6	に赤い黄褐 G5YR 6~2	良	胎土は緻密、0.5mmの大砂粒を含む。微細な全雲母を含む。	
55	1	3	繩文土器	鉢	口縁部					8~10	明黄褐 G5YR 7/6	褐 G5YR 6~6	に赤い黄褐 G5YR 6~6	良	胎土は緻密、精選された胎土を使用。微細な全雲母を含む。	
56	1	3	繩文土器	浅鉢	口縁部	18.0				5~6	褐 G5YR 4/3	褐 G5YR 5~6	褐 G5YR 4/3	良	胎土は緻密、1mmの砂粒を僅かに含む。微細な角閃石を含む。	
57	1	3	繩文土器	鉢	口縁部					6.5~8	に赤い黄褐 G5YR 6~4	明赤褐 G5YR 5~6	に赤い黄褐 G5YR 5~6	良	胎土はやや粗、0.5~1mmの大砂粒を多く含む。微細な全雲母を僅かに含む。	
58	1	3	繩文土器	鉢	口縁部					5.5~8	に赤い褐 G5YR 6/4	褐灰 G5YR 4/1	に赤い褐 G5YR 6/4	良	胎土は緻密、1mmの大砂粒を僅かに含む。微細な角閃石を含む。	
59	1	3	繩文土器	鉢	口縁部					5.5~8	に赤い褐 G5YR 5/4	に赤い褐 G5YR 5/4	に赤い褐 G5YR 5/4	良	胎土は緻密、1~4mmの大砂粒を含む。微細な全雲母を僅かに含む。	
60	1	3	瓦質土器	鉢	口縁部					5~8	褐灰 G5YR 5/1	褐灰 G5YR 5/1	に赤い黄褐 G5YR 7/3	良	胎土は緻密、微細な全雲母を多く含む。	
61	1	3	石器	磨製石斧	全体	延長 12.3	最大幅 5.9	最大幅 4.0	重量 300g							
62	1	4	繩文土器	深鉢	口縁部					6~11	に赤い褐 G5YR 5/4	に赤い褐 G5YR 5~4	に赤い黄褐 G5YR 5~3	良	胎土はやや粗、0.5~1mmの大砂粒を多く含む。微細な全雲母を含む。	
63	1	4	繩文土器	深鉢	口縁部					6~15.5	灰黄褐 G5YR 5~2	灰黄褐 G5YR 6/2	黑 G5YR 2/1	良	胎土はやや粗、0.5~2mmの大砂粒を多く含む。微細な全雲母を含む。	
64	1	4	繩文土器	深鉢	口縁部					6~95	に赤い黄褐 G5YR 6/2	に赤い黄褐 G5YR 7/4	に赤い黄褐 G5YR 6/2	良	胎土は緻密、0.5~3mmの大砂粒を含む。	
65	1	4	繩文土器	深鉢	口縁部					7~9	に赤い黄褐 G5YR 5~3	に赤い黄褐 G5YR 5~3	に赤い黄褐 G5YR 5~3	良	胎土はやや粗、0.5~2mmの大砂粒を多く含む。微細な全雲母を多く含む。	
66	1	4	繩文土器	鉢	胴部					5~7	褐 G5YR 6~6	褐 G5YR 6~6	褐 G5YR 6~6	良	胎土は緻密、0.5~1mmの大砂粒を僅かに含む。微細な角閃石を多く含む。	
67	1	4	繩文土器	深鉢	口縁部					7~95	黑 G5YR 2/1	灰黄褐 G5YR 4/2	褐灰 G5YR 4/1	良	胎土はやや粗、0.5~15mmの大砂粒を多く含む。微細な全雲母を多く含む。	
68	1	4	繩文土器	深鉢	口縁部					5.5~7.5	に赤い黄褐 G5YR 5~3	に赤い黄褐 G5YR 6/3	に赤い黄褐 G5YR 6/3	良	胎土は緻密、0.5~1mmの大砂粒を含む。微細な全雲母を含む。	
69	1	4	繩文土器	深鉢	底部					7.6	10~14	に赤い黄褐 G5YR 5~6	褐 G5YR 4/6	明褐 G5YR 5~6	良	胎土はやや粗、1~2mmの大砂粒を含む。微細な角閃石を含む。
70	1	4	繩文土器	鉢	口縁部					5~7	に赤い褐 G5YR 5~4	に赤い褐 G5YR 5~3	に赤い褐 G5YR 5~3	良	胎土は緻密、0.5~1mmの大砂粒を僅かに含む。微細な全雲母を含む。	
71	1	4	繩文土器	浅鉢	口縁部					7~9	に赤い褐 G5YR 6/4	に赤い褐 G5YR 5~3	に赤い褐 G5YR 6/4	良	胎土はやや粗、0.5~1mmの大砂粒を含む。微細な全雲母を含む。	
72	1	4	繩文土器	深鉢	胴部					7~8	褐 G5YR 6~6	褐 G5YR 6~6	褐 G5YR 6~6	良	胎土は緻密、微細な全雲母を僅かに含む。	
73	1	5	繩文土器	鉢	口縁部	36.0				6~9	に赤い黄褐 G5YR 5~6	赤褐 G5YR 4/6	褐灰 G5YR 4/1	良	胎土は緻密、0.5~3mmの大砂粒を多く含む。微細な全雲母と角閃石を含む。	
74	1	5	繩文土器	深鉢	口縁部	27.4				6~12	明褐 G5YR 5~6	明赤褐 G5YR 5~6	明褐 G5YR 5~6	良	胎土は緻密、0.5~1mmの大砂粒を含む。微細な全雲母を含む。	
75	1	5	繩文土器	鉢	口縁部					7~10.5	に赤い黄褐 G5YR 5~6	明褐 G5YR 5~6	に赤い黄褐 G5YR 5~6	良	胎土は緻密、0.5~1mmの大砂粒を含む。微細な全雲母を含む。	

遺物番号	調査次第等	出土緯経	遺物種類	器種	部位	法量					色調			焼成	備考
						口径(cm)	頭径(cm)	胴径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	器厚(mm)	内面	外面	断面	
26	1	5	繩文土器	鉢	口縁部					7.5～12	G5YR 6-6	G5YR 6-6	G5YR 6-6	良	粘土は緻密。0.5～3mmの大砂粒を含む。微細な全雲母を僅かに含む。
27	1	5	繩文土器	深鉢	胴 部					7～8	褐(G5YR 6-8)	褐(G5YR 6-8)	褐(G5YR 6-8)	良	粘土は粗。0.5～2mmの大砂粒を多く含む。
28	1	5	繩文土器	深鉢	胴 部					6～7	明褐色(G5YR 5-6)	明褐色(G5YR 5-6)	明褐色(G5YR 5-6)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を僅かに含む。微細な全雲母を含む。
29	1	5	繩文土器	鉢	口縁部					6.5～9	に赤い赤褐色(G5YR 4-3)	に赤い赤褐色(G5YR 4-3)	に赤い赤褐色(G5YR 4-3)	良	粘土は緻密。微細な全雲母を含む。
30	1	6	繩文土器	深鉢	胴 部					6～8	に赤い黄褐色(G5YR 6-4)	褐(G5YR 6-6)	に赤い黄褐色(G5YR 6-3)	良	粘土はやや粗。0.5～1mmの大砂粒を多く含む。微細な全雲母を多く含む。
31	1	7	繩文土器	深鉢	口縁部					7～15	に赤い黄褐色(G5YR 5-6)	明褐色(G5YR 5-6)	明褐色(G5YR 4-3)	良	粘土は緻密。0.5～1.5mmの大砂粒を多く含む。微細な角閃石・石英を多く含む。
32	1	7	繩文土器	深鉢	口縁部					6～14	明褐色(G5YR 6-6)	に赤い黄褐色(G5YR 6-4)	に赤い黄褐色(G5YR 5-6)	良	粘土は緻密。0.5～1mmの大砂粒を含む。微細な角閃石を僅かに含む。
33	1	7	繩文土器	深鉢	口縁部					7～11	褐(G5YR 6-6)	明褐色(G5YR 5-6)	に赤い黄褐色(G5YR 6-3)	良	粘土はやや粗。0.5～1.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全雲母を含む。
34	1	7	繩文土器	鉢	口縁部					6.5～10.5	褐(G5YR 4-6)	褐(G5YR 4-6)	褐(G5YR 4-6)	良	粘土は粗。1～2mmの大砂粒を多く含む。
35	1	7	繩文土器	鉢	口縁部	199				6～9	灰褐色(G5YR 6-2)	褐(G5YR 5-1)	黑褐色(G5YR 3-1)	不良	粘土は粗。1mmの大砂粒を多く含む。
36	1	7	繩文土器	深鉢	口縁部					6～75	明褐色(G5YR 5-6)	褐(G5YR 6-6)	褐(G5YR 6-6)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を僅かに含む。
37	1	7	繩文土器	深鉢	口縁部					6～8	明褐色(G5YR 5-6)	に赤い黄褐色(G5YR 5-3)	に赤い黄褐色(G5YR 5-4)	良	粘土は緻密。0.5～1mmの大砂粒を含む。微細な全雲母を含む。
38	1	7.2	繩文土器	深鉢	口縁部					4～85	灰褐色(G5YR 4-2)	灰褐色(G5YR 4-2)	に赤い黄褐色(G5YR 5-2)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。
39	1	7	繩文土器	深鉢	口縁部					5～65	褐(G5YR 4-3)	褐(G5YR 4-3)	黑褐色(G5YR 3-2)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。
40	1	7	繩文土器	深鉢	口縁部					5～8	に赤い褐(G5YR 5-4)	に赤い褐(G5YR 5-4)	褐(G5YR 6-6)	良	粘土は緻密。微細な角閃石を多く含む。
41	1	7	繩文土器	深鉢	口縁部					9～14	に赤い黄褐色(G5YR 6-2)	に赤い黄褐色(G5YR 6-2)	不規則(G5YR 6-2)	不良	粘土はやや粗。0.5～1mmの大砂粒を多く含む。石英・長石が目立つ。
42	1	7	繩文土器	鉢	口縁部					8～9	に赤い黄褐色(G5YR 6-3)	に赤い黄褐色(G5YR 6-3)	褐(G5YR 5-1)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。精選された粘土を使用。微細な角閃石を含む。
43	1	7	繩文土器	深鉢	底 部					79	に赤い黄褐色(G5YR 6-3)	に赤い黄褐色(G5YR 6-3)	褐(G5YR 6-6)	良	粘土は緻密。1.5～5mmの大砂粒を含む。
44	1	7	繩文土器	鉢	口縁部	190				7.5～13.5	灰褐色(G5YR 4-2)	明褐色(G5YR 5-6)	灰褐色(G5YR 5-2)	良	粘土は緻密。0.5～3mmの大砂粒を含む。微細な角閃石・石英を含む。赤彩
45	1	7	繩文土器	深鉢	底 部					10～19	灰褐色(G5YR 4-2)	明褐色(G5YR 5-6)	明褐色(G5YR 5-6)	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。全雲母と角閃石を多く含む。
46	1	7	繩文土器	浅鉢	口縁部					6～8	褐(G5YR 6-6)	褐(G5YR 4-3)	褐(G5YR 6-6)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。精選された粘土を使用。
47	1	7	繩文土器	浅鉢	胴下部					9～10	灰褐色(G5YR 4-2)	に赤い褐(G5YR 5-4)	明褐色(G5YR 5-6)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。精選された粘土を使用。全雲母と角閃石を多く含む。
48	1	E8	繩文土器	深鉢	口縁部	442				6～11	串褐(G5YR 4-6)	串褐(G5YR 4-6)	赤褐色(G5YR 4-6)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全雲母を含む。
49	1	8ノ下	繩文土器	深鉢	口縁部					9～13	褐(G5YR 6-6)	に赤い褐(G5YR 6-6)	灰褐色(G5YR 5-2)	良	粘土はやや粗。0.5～2mmの大砂粒を多く含む。微細な角閃石を含む。
50	1	8ノ下	繩文土器	深鉢	口縁部					7～15	に赤い黄褐色(G5YR 5-6)	に赤い褐(G5YR 5-6)	明褐色(G5YR 5-6)	良	粘土はやや粗。0.5～2mmの大砂粒を多く含む。微細な角閃石を含む。

遺物番号	調査次第等	出土経緯	遺物種	器種	部位	法量				色調			焼成	備考	
						口径(cm)	頭径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	器厚(mm)	内面	外面	断面		
101	1	8	織文土器	深鉢	口縁部					6~11	に赤い黄褐 (GYR 6~4)	明赤褐 (GYR 5~6)	に赤い黄褐 (GYR 6~4)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。
102	1	8ノ下	織文土器	深鉢	口縁部					5~10	灰黄褐 (GYR 5~2)	灰黄褐 (GYR 5~3)	灰黄褐 (GYR 6~2)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な角閃石を僅かに含む。
103	1	8	織文土器	深鉢	口縁部					9~12.5	明赤褐 (GYR 5~6)	明赤褐 (GYR 5~6)	に赤い黄褐 (GYR 5~3)	良	胎土は緻密。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。
104	1	8ノ上	織文土器	深鉢	口縁部					6~11	に赤い黄褐 (GYR 6~4)	に赤い黄褐 (GYR 7~4)	灰黄褐 (GYR 5~2)	良	胎土はやや粗。0.5~2mmの大砂粒を多く含む。微細な全雲母を多く含む。
105	1	8	織文土器	鉢	口縁部					5~8.5	に赤い黄褐 (GYR 6~4)	に赤い黄褐 (GYR 6~4)	に赤い黄褐 (GYR 6~4)	良	胎土は緻密。精選された粘土を使用。微細な角閃石を多く含む。
106	1	8ノ上	織文土器	深鉢	口縁部					5.5~30	褐 (GYR 6~6)	褐 (GYR 6~6)	に赤い黄褐 (GYR 6~4)	良	胎土は緻密。1~3mmの大砂粒を含む。微細な角閃石を含む。
107	1	8ノ上	織文土器	深鉢	口縁部					8~11	褐 (GYR 6~6)	灰褐 (GYR 4~2)	褐 (GYR 6~6)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全雲母を含む。
108	1	8	織文土器	深鉢	口縁部					7~19	に赤い黄褐 (GYR 5~4)	に赤い黄褐 (GYR 6~3)	に赤い黄褐 (GYR 6~3)	不	胎土は粗。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。微細な全雲母を多く含む。
109	1	8	織文土器	深鉢	口縁部					4.5~7.5	明赤褐 (GYR 5~6)	褐 (GYR 4~6)	明褐 (GYR 5~6)	良	胎土はやや粗。0.5~1.5mmの大砂粒を含む。微細な全雲母を含む。
110	1	8	織文土器	深鉢	肩上部					8.0	に赤い黄褐 (GYR 5~4)	に赤い黄褐 (GYR 5~4)	に赤い黄褐 (GYR 5~4)	良	胎土は緻密。精選された粘土を使用。
111	1	8	織文土器	深鉢	肩下部					5.5~10.5	灰黄褐 (GYR 5~2)	褐 (GYR 6~6)	灰黄褐 (GYR 5~2)	良	胎土は緻密。精選された粘土を使用。
112	1	8ノ上	織文土器	深鉢	口縁部					8~12	褐灰黄 (GYR 5~2)	褐灰黄 (GYR 5~2)	に赤い黄褐 (GYR 7~3)	良	胎土は粗。0.5~1.5mmの大砂粒を含む。微細な角閃石を含む。
113	1	8	織文土器	鉢	頭胴部					5~7	明褐 (GYR 5~6)	明褐 (GYR 5~6)	明褐 (GYR 5~6)	良	胎土はやや粗。0.5~1mmの大砂粒を含む。微細な角閃石を含む。
114	1	8ノ上	織文土器	深鉢	口縁部					6~9.5	に赤い黄褐 (GYR 6~5)	に赤い黄褐 (GYR 6~5)	褐灰黄 (GYR 5~2)	良	胎土は緻密。1~3mmの大砂粒を含む。微細な全雲母を含む。
115	1	8ノ上	織文土器	鉢	口縁部					5.5~6.5	明褐 (GYR 5~6)	明褐 (GYR 5~6)	明褐 (GYR 5~6)	良	胎土は緻密。微細な全雲母を多く含む。
116	1	8ノ上	織文土器	深鉢	口縁部					7~8	灰褐 (GYR 4~1)	灰褐 (GYR 5~2)	灰褐 (GYR 5~2)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を僅かに含む。
117	1	8	織文土器	鉢	口縁部					7~9	灰黄褐 (GYR 4~2)	に赤い黄褐 (GYR 6~1)	灰褐 (GYR 6~1)	良	胎土は緻密。精選された粘土を使用。微細な全雲母を多く含む。
118	1	8	織文土器	鉢	口縁部					4.5~7	に赤い黄褐 (GYR 5~3)	に赤い黄褐 (GYR 5~3)	に赤い黄褐 (GYR 5~3)	良	胎土は緻密。2mmの大砂粒を含む。
119	1	8ノ上	織文土器	深鉢	口縁部					5.5~7	明赤褐 (GYR 5~6)	に赤い赤褐 (GYR 5~6)	に赤い赤褐 (GYR 5~6)	良	胎土は緻密。精選された粘土を使用。
120	1	8ノ下	織文土器	深鉢	口縁部	20.2				6~8	に赤い黄褐 (GYR 6~4)	に赤い黄褐 (GYR 6~4)	に赤い黄褐 (GYR 6~4)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を僅かに含む。
121	1	8	織文土器	深鉢	口縁部	18.0				6~10	に赤い黄褐 (GYR 5~6)	に赤い黄褐 (GYR 5~6)	に赤い黄褐 (GYR 5~6)	良	胎土は緻密。0.5~1mmの大砂粒を含む。微細な全雲母を多く含む。
122	1	E8上	織文土器	深鉢	口縁部					6~10	明赤褐 (GYR 5~6)	明赤褐 (GYR 5~6)	赤黒 (GYR 2~1)	良	胎土は緻密。精選された粘土を使用。0.5mmの大角閃石を多く含む。
123	1	8ノ上	織文土器	深鉢	口縁部					8~10	褐灰 (GYR 4~1)	褐灰 (GYR 4~3)	に赤い褐 (GYR 5~4)	良	胎土はやや粗。0.5~1mmの大砂粒を含む。微細な全雲母を多く含む。
124	1	8	織文土器	深鉢	口縁部					5.5~10	に赤い黄褐 (GYR 5~3)	に赤い黄褐 (GYR 5~3)	に赤い黄褐 (GYR 5~3)	良	胎土は緻密。0.5~1mmの大砂粒を含む。微細な全雲母を多く含む。
125	1	8ノ上	織文土器	深鉢	口縁部					7~8	明赤褐 (GYR 5~6)	に赤い赤褐 (GYR 4~6)	明赤褐 (GYR 5~6)	良	胎土は緻密。精選された粘土を使用。微細な全雲母を僅かに含む。

遺物番号	調査次第等	出土緯	遺物種	器種	部位	法量					色調			焼成	備考
						口径 (cm)	頭径 (cm)	胴径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	器厚 (mm)	内面	外面	断面	
126	1	8 ノ上	織文土器	深鉢	口縁部					11～13	明赤褐色 (SYR 5-6)	明赤褐色 (SYR 5-6)	褐 (SYR 6-8)	良	胎土は緻密。0.5mm大の砂粒を含む。
127	1	8	織文土器	深鉢	頭胴部					5～8	にい・黄褐色 (GYR 5-4)	明赤褐色 (GYR 5-6)	褐 (GYR 4-6)	良	胎土はやや粗。0.5～1.5mm大の砂粒を多く含む。微細な全雲母を多く含む。
128	1	8	織文土器	深鉢	胴 部					3～11	にい・黄褐色 (GYR 6-4)	明赤褐色 (SYR 5-6)	にい・黄褐色 (GYR 5-6)	良	胎土は緻密。0.5～1mm大の砂粒を含む。
129	1	8	織文土器	深鉢	胴 部					5～7.5	灰褐色 (GYR 4-2)	にい・黄褐色 (GYR 4-6)	にい・黄褐色 (GYR 6-2)	良	胎土は緻密。精選された胎土を使用。微細な全雲母を含む。
130	1	8	織文土器	深鉢	胴 部					5～7.5	灰褐色 (GYR 5-2)	にい・黄褐色 (GYR 5-6)	灰褐色 (GYR 5-2)	良	胎土は緻密。0.5～2mm大の砂粒を含む。微細な全雲母を僅かに含む。
131	1	8 ノ下	織文土器	深鉢	底 部	130				9～10	にい・黒褐色 (GYR 5-4)	黒褐色 (GYR 3-1)	明赤褐色 (GYR 5-6)	良	胎土は緻密。0.5mm大の砂粒を多く含む。
132	1	8	織文土器	浅鉢	口～底部	90					にい・黄褐色 (GYR 5-0)	灰褐色 (GYR 4-2)	灰褐色 (GYR 4-2)	良	胎土は緻密。精選された胎土を使用。微細な角閃石をまばらに含む。
133	1	8 ノ下	織文土器	浅鉢	口縁部					7～9	灰褐色 (GYR 4-1)	にい・黄褐色 (GYR 6-4)	黒褐色 (GYR 3-1)	良	胎土は緻密。0.5mm大の砂粒を含む。
134	1	8	織文土器	浅鉢	口縁部	200				5～7	明褐色 (GYR 5-6)	褐 (GYR 6-6)	明赤褐色 (GYR 5-6)	良	胎土は緻密。1～2.5mm大の砂粒を含む。微細な角閃石を含む。
135	1	8	織文土器	浅鉢	口縁部					5～8	にい・黄褐色 (GYR 6-0)	灰褐色 (GYR 4-1)	にい・黄褐色 (GYR 6-0)	良	胎土は緻密。1.5mm大の砂粒を多く含む。微細な全雲母を含む。
136	1	8 ノ上	織文土器	深鉢	胴上部					8～11	未確認 (GYR 4-8)	未確認 (GYR 4-8)	未確認 (GYR 4-8)	良	胎土はやや粗。0.5mm大の砂粒を多く含む。微細な全雲母を含む。
137	1	8 ノ上	洪生土器	甕	口縁部					5～8	灰褐色 (GYR 6-2)	褐 (GYR 6-6)	灰褐色 (GYR 5-2)	良	胎土は緻密。0.5mm大の砂粒を含む。
138	1	101	織文土器	深鉢	口縁部 底下					4～9	明赤褐色 (GYR 5-6)	明赤褐色 (GYR 5-6)	明赤褐色 (GYR 5-6)	良	胎土は緻密。角閃石を多量に含む。
139	1	101 外1	織文土器	深鉢	口～頭部	390				6～14.5	にい・黒褐色 (GYR 5-4)	未確認 (GYR 4-4)	未確認 (GYR 4-4)	良	胎土は緻密。1～4mmの大砂粒を含む。微細な全雲母・角閃石・石英を含む。
140	1	101	織文土器	深鉢	口縁部					7～15	明赤褐色 (GYR 5-8)	明赤褐色 (GYR 5-8)	明赤褐色 (GYR 5-8)	良	胎土はやや粗。0.5～2mm大の砂粒を含む。微細な石英を僅かに含む。
141	1	101	織文土器	深鉢	口縁部	320				8.5～29	褐 (GYR 4-3)	明赤褐色 (GYR 5-6)	褐 (GYR 4-3)	良	胎土は緻密。0.5～5mm大の砂粒を含む。微細な全雲母・角閃石を含む。
142	1	101	織文土器	深鉢	口～胴部	324				6～10	灰褐色 (GYR 4-2)	灰褐色 (GYR 4-2)	灰褐色 (GYR 4-2)	良	胎土はやや粗。0.5～25mm大の砂粒を含む。微細な全雲母を含む。
143	1	101	織文土器	深鉢	口～頭部	322				7.5～12	明褐色 (GYR 5-6)	明赤褐色 (GYR 5-6)	明赤褐色 (GYR 5-6)	良	胎土は緻密。0.5～2.5mm大の砂粒を含む。微細な全雲母・石英を僅かに含む。
144	1	101	織文土器	深鉢	口縁部	368				5～7.5	にい・黄褐色 (GYR 6-0)	にい・黄褐色 (GYR 6-0)	にい・黄褐色 (GYR 6-0)	良	胎土は緻密。0.5～1mm大の砂粒を含む。微細な角閃石を含む。
145	1	101	織文土器	深鉢	口～胴部	294				8～10	灰褐色 (GYR 4-2)	灰褐色 (GYR 4-2)	灰褐色 (GYR 4-2)	良	胎土はやや粗。0.5～1mm大の砂粒を含む。
146	1	101	織文土器	深鉢	口縁部					7～11	灰褐色 (GYR 4-2)	灰褐色 (GYR 4-2)	灰褐色 (GYR 5-3)	良	胎土は緻密。0.5～1.5mm大の砂粒を多く含む。微細な全雲母を含む。
147	1	101	織文土器	深鉢	口縁部					6～10	にい・黄褐色 (GYR 6-0)	灰褐色 (GYR 5-2)	にい・黄褐色 (GYR 6-0)	不良	胎土は粗。0.5～1.5mm大の砂粒を多く含む。微細な全雲母を含む。
148	1	101	織文土器	深鉢	口縁部					7.5～14.5	にい・黄褐色 (GYR 6-0)	にい・黄褐色 (GYR 6-0)	灰褐色 (GYR 5-5)	良	胎土は緻密。0.5～2mm大の砂粒を含む。微細な角閃石を含む。
149	1	101	織文土器	深鉢	口縁部					8～13	褐 (GYR 6-6)	褐 (GYR 6-6)	褐 (GYR 6-6)	良	胎土は粗。0.5～1mm大の砂粒を含む。
150	1	101	織文土器	甕	口縁部					6.5～10.5	灰褐色 (GYR 5-2)	にい・黄褐色 (GYR 5-3)	灰褐色 (GYR 5-2)	良	胎土はやや粗。0.5～1.5mm大の砂粒を多く含む。微細な全雲母を含む。

遺物番号	調査次第等	出土緯	遺物種	器種	部位	法量				色調			焼成	備考			
						口径(cm)	頭径(cm)	胴径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	器厚(mm)	内面	外面				
151	1	101	繩文土器	深鉢	口縁部					6~14	褐(GSYR 4-6)	褐(GSYR 4-6)	にぶい褐(GSYR 5-4)	良	粘土は緻密。0.5mm大の砂粒を含む。微細な全雲母を僅かに含む。		
152	1	101	繩文土器	深鉢	口縁部					4.5~12.5	褐灰(GSYR 4-1)	褐灰(GSYR 4-1)	黒褐(GSYR 3-1)	良	粘土はやや粗。0.5~3mm大の砂粒を含む。波状部は主に柱+波文様		
153	1	101	繩文土器	深鉢	口縁部					7~11.5	黒(GSYR 2-1)	明褐色(GSYR 5-6)	にぶい黄褐色(GSYR 6-3)	良	粘土は緻密。0.5~1mm大の砂粒を僅かに含む。微細な全雲母を僅かに含む。		
154	1	101	繩文土器	浅鉢	胴 部					6~11	褐灰(GSYR 4-2)	黒褐(GSYR 3-1)	黒褐(GSYR 3-1)	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。微細な全雲母と角閃石を含む。		
155	1	101	繩文土器	鉢	胴 部					5.5~6	明褐色(GSYR 5-6)	褐(GSYR 7-6)	褐(GSYR 7-6)	良	粘土は緻密。1mm大の砂粒を僅かに含む。微細な全雲母を含む。		
156	1	101	繩文土器	鉢	口縁部					8.5~12.5	(GYR 3-1)	褐(GSYR 4-2)	にぶい黄褐色(GSYR 6-2)	良	粘土はやや粗。0.5~1.5mm大の砂粒を含む。微細な全雲母を多く含む。		
157	1	101	繩文土器	鉢	口縁部					5~8	黒(GSYR 2-1)	にぶい褐(GSYR 5-4)	にぶい黄褐色(GSYR 6-3)	良	粘土は緻密。1~1.5mm大の砂粒を含む。		
158	1	101	繩文土器	鉢	口縁部					6~7	明褐色(GSYR 5-6)	明褐色(GSYR 5-6)	にぶい黄褐色(GSYR 5-6)	良	粘土はやや粗。0.5~1mm大の砂粒を多く含む。		
159	1	101	繩文土器	鉢	口縁部					5~10	にぶい黄褐色(GSYR 6-4)	にぶい黄褐色(GSYR 6-4)	黒褐(GSYR 3-1)	良	粘土は緻密。0.5mm大の砂粒を含む。微細な全雲母を含む。		
160	1	101	繩文土器	深鉢	口縁部	27.8				5~8	にぶい黄褐色(GSYR 5-7)	明褐色(GSYR 5-6)	黒(GSYR 2-1)	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。微細な全雲母を多く含む。		
161	1	101	繩文土器	深鉢	口縁部	21.6				5.5~6.5	にぶい黒(GSYR 5-4)	にぶい黒(GSYR 5-4)	にぶい黄褐色(GSYR 6-3)	良	粘土は緻密。0.5~1mm大の砂粒を含む。微細な全雲母を僅かに含む。		
162	1	101	繩文土器	深鉢	口縁部					6~9	明褐色(GSYR 5-6)	褐(GSYR 4-6)	にぶい黄褐色(GSYR 6-3)	良	粘土は緻密。0.5~1mm大の砂粒を含む。微細な全雲母を含む。		
163	1	101	繩文土器	鉢	口縁部	12.0				5.5~7	にぶい黒(GSYR 5-3)	灰褐(GSYR 4-2)	褐(GSYR 6-6)	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。微細な角閃石を含む。		
164	1	101	繩文土器	深鉢	頭胴部					4~6	褐灰(GSYR 4-1)	にぶい黒(GSYR 5-4)	褐灰(GSYR 4-1)	良	粘土は緻密。微細な全雲母を含む。		
165	1	101	繩文土器	鉢	胴 部					4.5~5	明褐色(GSYR 5-6)	褐灰(GSYR 4-2)	にぶい黄褐色(GSYR 6-3)	良	粘土はやや粗。0.5~1mm大の砂粒を多く含む。		
166	1	101	繩文土器	鉢	胴 部					5~8	明褐色(GSYR 5-6)	褐灰(GSYR 5-6)	にぶい黄褐色(GSYR 6-3)	良	粘土はやや粗。0.5~1mm大の砂粒を含む。微細な全雲母を含む。		
167	1	101	繩文土器	深鉢	口縁部					9~10.5	にぶい赤褐色(GSYR 4-0)	にぶい赤褐色(GSYR 4-0)	明褐色(GSYR 5-6)	良	粘土はやや粗。0.5~1.5mm大の砂粒を多く含む。微細な全雲母を含む。		
168	1	101	繩文土器	深鉢	口縁部					4.5~9	褐灰(GSYR 4-1)	褐灰(GSYR 4-1)	褐灰(GSYR 4-1)	良	粘土は緻密。微細な角閃石を多く含む。		
169	1	101	繩文土器	深鉢	底 部					6.3	6~14	灰白(GSYR 5-8)	にぶい黄褐色(GSYR 7-6)	にぶい黄褐色(GSYR 7-6)	良	粘土はやや粗。2~7mm大の石を含む。	
170	1	101	繩文土器	鉢	口頭・底部	37.4				34	19.2	6~11	褐(GSYR 6-6)	にぶい褐(GSYR 5-4)	褐黄褐(GSYR 5-2)	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。微細な全雲母を含む。
171	1	101	繩文土器	鉢	口縁部					6.5~8	褐(GSYR 6-6)	褐(GSYR 6-6)	褐(GSYR 6-6)	良	粘土は緻密。0.5~2mm大の砂粒を僅かに含む。微細な全雲母を含む。		
172	1	101	繩文土器	鉢	口縁部					5~7	にぶい褐(GSYR 5-4)	にぶい褐(GSYR 5-4)	にぶい褐(GSYR 5-3)	良	粘土は緻密。微細な全雲母を僅かに含む。		
173	1	101	繩文土器	鉢	口縁部					5~8	にぶい黄褐色(GSYR 7-0)	にぶい黄褐色(GSYR 5-4)	にぶい黄褐色(GSYR 7-0)	良	粘土は緻密。2mm大の砂粒を僅かに含む。微細な全雲母を多く含む。		
174	1	102	繩文土器	深鉢	口縁部					4.5~6.5	黒褐(GSYR 3-1)	にぶい褐(GSYR 5-4)	黒褐(GSYR 3-1)	良	粘土は緻密。微細な全雲母を含む。		
175	1	101	繩文土器	深鉢	口縁部					5.5~7	褐灰(GSYR 4-1)	にぶい黄褐色(GSYR 6-3)	にぶい黄褐色(GSYR 6-4)	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。微細な角閃石を含む。		

遺物番号	調査次第等	出土緯経	遺物種	器種	部位	法量					色調			焼成	備考	
						口径(cm)	頭径(cm)	胴径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	器厚(mm)	内面	外面	断面		
176	1	101	織文土器	壺	口縁部					6.5～10.5	にぶい褐色 G5YR 6/4)	明褐色 G5YR 5/6)	にぶい黄褐色 G5YR 6/4)	良	粘土は緻密。2mmの大砂粒を僅かに含む。微細な角閃石を僅かに含む。	
177	1	101	貝製品	貝壳	実形	殻長5.9	殻幅7.6	殻高2.1	重さ33g							
178	1	102	織文土器	深鉢	口縁部					5～10	褐色 G5YR 6/4)	褐色 G5YR 6/4)	褐色 G5YR 6/8)	良	粘土は緻密。2mmの大砂粒を僅かに含む。微細な角閃石を僅かに含む。	
179	1	102	織文土器	浅鉢	口縁部	30.0				8.5～14	明褐色 G5YR 5/6)	明褐色 G5YR 5/6)	明褐色 G5YR 5/6)	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。微細な角閃石を僅かに含む。	
180	1	102	織文土器	深鉢	口縁部					8～11	褐色 G5YR 6/6)	灰褐色 G5YR 4/2)	にぶい褐色 G5YR 7/4)	良	粘土はやや粗。1～3mmの大砂粒を含む。微細な角閃石を僅かに含む。	
181	1	102	織文土器	深鉢	口縁部					5.5～7.5	褐色 G5YR 3/1)	にぶい褐色 G5YR 5/4)	にぶい褐色 G5YR 5/4)	良	粘土は緻密。0.1mmの大砂粒を含む。微細な金雲母を含む。	
182	1	102	織文土器	深鉢	口縁部					6.5～8.5	黒褐色 G5YR 3/2)	褐灰色 G5YR 4/1)	黄褐色 G5YR 5/3)	良	粘土は緻密。微細な角閃石を僅かに含む。	
183	1	102	織文土器	浅鉢	口縁部					7.5～10.5	にぶい褐色 G5YR 5/4)	にぶい褐色 G5YR 5/4)	にぶい褐色 G5YR 5/4)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。	
184	1	102	織文土器	深鉢	口縁部					6～11	赤褐色 G5YR 4/6)	明褐色 G5YR 5/6)	にぶい褐色 G5YR 5/4)	良	粘土はやや粗。0.5～1mmの大砂粒を含む。	
185	1	102	織文土器	深鉢	口縁部					5～8	明褐色 G5YR 5/6)	にぶい褐色 G5YR 5/4)	にぶい褐色 G5YR 5/4)	良	粘土はやや粗。0.5～1mmの大砂粒を含む。微細な金雲母を含む。	
186	1	102	織文土器	鉢	口縁部					6.5～8	にぶい黄褐色 G5YR 5/4)	黒褐色 G5YR 3/2)	にぶい黄褐色 G5YR 5/4)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を少し含む。微細な金雲母を多く含む。	
187	1	102	織文土器	浅鉢	口縁部					6～8	灰褐色 G5YR 4/2)	灰黄褐色 G5YR 4/2)	明褐色 G5YR 5/6)	良	粘土は緻密。微細な全雲母を多く含む。	
188	1	102	織文土器	鉢	口縁部					6～9	にぶい褐色 G5YR 5/4)	にぶい黄褐色 G5YR 6/3)	にぶい黄褐色 G5YR 7/4)	良	粘土は緻密。微細な全雲母を多く含む。	
189	1	D90	織文土器	深鉢	口縁部					8～10.5	にぶい褐色 G5YR 5/4)	にぶい褐色 G5YR 5/4)	にぶい黄褐色 G5YR 6/4)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。	
190	1	D70	織文土器	深鉢	口縁部					5.5～10	赤褐色 G5YR 4/6)	赤褐色 G5YR 4/6)	赤褐色 G5YR 4/6)	良	粘土は緻密。微細な全雲母を多く含む。	
191	1	D70	織文土器	浅鉢	口縁部					6.5～8	にぶい褐色 G5YR 5/4)	にぶい褐色 G5YR 5/4)	にぶい褐色 G5YR 5/4)	良	粘土は緻密。1mmの大砂粒を僅かに含む。微細な角閃石・石英を多く含む。	
192	1	E1	織文土器	深鉢	口縁部	50.2				4.5～7	にぶい褐色 G5YR 5/4)	灰褐色 G5YR 4/2)	灰褐色 G5YR 4/2)	良	粘土は緻密。1.5mmの大砂粒を僅かに含む。精選された粘土を使用。微細な角閃石を多く含む。	
193	1	E1 E2	織文土器	深鉢	口縁部	38.0				6.5～12	にぶい褐色 G5YR 5/4)	にぶい褐色 G5YR 5/4)	明褐色 G5YR 5/6)	良	粘土は緻密。0.5～1.5mmの大砂粒を含む。微細な全雲母を含む。	
194	1	E	織文土器	深鉢	口縁部					8～13	明褐色 G5YR 5/6)	にぶい褐色 G5YR 5/0)	褐色 G5YR 4/6)	良	粘土は緻密。0.5～1mmの大砂粒を全く含む。微細な全雲母を含む。	
195	1	E1	織文土器	深鉢	口縁部					7～9.5	にぶい褐色 G5YR 5/4)	黒褐色 G5YR 3/1)	にぶい褐色 G5YR 6/4)	良	粘土は緻密。0.5～2mmの大砂粒を全く含む。微細な全雲母を多く含む。	
196	1	E1	織文土器	深鉢	口縁部					8～16.5	明褐色 G5YR 5/6)	にぶい褐色 G5YR 5/0)	明褐色 G5YR 5/6)	良	粘土は緻密。0.5～1.5mmの大砂粒を含む。微細な全雲母・石英を含む。	
197	1	E2	織文土器	深鉢	口縁部					7～12.5	にぶい黄褐色 G5YR 6/3)	褐色 G5YR 6/6)	にぶい黄褐色 G5YR 6/3)	良	粘土はやや粗。0.5～1mmの大砂粒を多く含む。微細な全雲母を多く含む。	
198	1	E1	織文土器	鉢	口縁部					6.5～9	にぶい赤褐色 G5YR 5/4)	にぶい赤褐色 G5YR 4/2)	黑褐色 G5YR 3/1)	良	粘土は緻密。1mmの大砂粒を僅かに含む。微細な全雲母・角閃石を僅かに含む。	
199	1	E2	織文土器	深鉢	口縁部					11～15.5	黒褐色 G5YR 3/1)	にぶい黄褐色 G5YR 6/3)	にぶい黄褐色 G5YR 6/3)	良	粘土はやや粗。0.5～1mmの大砂粒を多く含む。微細な全雲母を多く含む。	
200	1	E2	織文土器	深鉢	口縁部					5.5～13	にぶい黄褐色 G5YR 5/4)	にぶい褐色 G5YR 5/3)	にぶい褐色 G5YR 5/3)	良	粘土は緻密。微細な全雲母を僅かに含む。	

遺物番号	調査次第等	出土緯	遺物種	器種	部位	法量					色調			焼成	備考
						口径(cm)	頭径(cm)	胴径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	器厚(mm)	内面	外面	断面	
201	1 E1	繩文土器	深鉢	口縁部						8 ~ 15	に赤い褐 GYR 5~3	相 GYR 6~6	相 GYR 6~6	良	粘土は緻密。0.5 ~ 15mmの大砂粒を含む。微細な全芸母を多く含む。
202	1 E2	繩文土器	深鉢	口縁部						9 ~ 14	相 GYR 6~6	相 GYR 6~6	相 GYR 6~6	良	粘土はやや粗。0.5 ~ 1mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母を含む。
203	1 E1	繩文土器	深鉢	口縁部						5 ~ 12	相 GYR 6~6	相 GYR 6~6	に赤い黄褐 GYR 7~4	良	粘土はやや粗。0.5 ~ 2mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母を含む。
204	1 E1	繩文土器	深鉢	口縁部	45.2					7 ~ 11	に赤い褐 GYR 5~3	明赤褐 GYR 5~6	明赤褐 GYR 5~6	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を僅かに含む。微細な角閃石を僅かに含む。
205	1 E2	繩文土器	深鉢	口縁部	24.2					8 ~ 11	に赤い黄褐 GYR 5~3	に赤い黄褐 GYR 5~3	に赤い黄褐 GYR 5~3	良	粘土は緻密。0.5 ~ 2mmの大砂粒を僅かに含む。
206	1 E2	繩文土器	深鉢	口縁部						5 ~ 10	明赤褐 GYR 5~6	明赤褐 GYR 5~6	明赤褐 GYR 5~6	良	粘土はやや粗。0.5mmの大砂粒を含む。
207	1 E2	繩文土器	深鉢	口縁部						9 ~ 10	明赤褐 GYR 5~6	明赤褐 GYR 5~6	明赤褐 GYR 5~6	良	粘土はやや粗。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全芸母を含む。
208	1 E1	繩文土器	鉢	口縁部	15.0					4 ~ 8	明赤褐 GYR 5~6	明赤褐 GYR 5~6	明赤褐 GYR 5~6	良	粘土は緻密。微細な全芸母を含む。
209	1 E1	繩文土器	深鉢	口～側部	41.8					8 ~ 10.5	黒褐 GYR 3~1	黒褐 GYR 3~2	に赤い褐 GYR 5~4	良	粘土はやや粗。0.5 ~ 15mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母を多く含む。
210	1 E2	繩文土器	鉢	口縁部						7 ~ 11	灰黄褐 GYR 6~2	灰黄褐 GYR 6~2	灰黄褐 GYR 6~2	良	粘土はやや粗。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母を多く含む。
211	1 E1	繩文土器	深鉢	口縁部						9 ~ 10.5	灰灰褐 GYR 4~2	に赤い赤褐 GYR 5~3	に赤い赤褐 GYR 5~4	良	粘土は緻密。微細な全芸母を僅かに含む。
212	1 E2	繩文土器	深鉢	底 部						10.5 ~ 13	灰褐 GYR 4~2	に赤い赤褐 GYR 4~4	灰褐 GYR 4~2	良	粘土は緻密。微細な角閃石を多く含む。
213	1 E	繩文土器	浅鉢	口縁部						5.5 ~ 9	に赤い黄褐 GYR 6~3	に赤い黄褐 GYR 6~3	に赤い黄褐 GYR 6~3	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。微細な角閃石をまばらに含む。
214	1 E1	繩文土器	浅鉢	口縁部						9.5 ~ 13	相 GYR 6~6	相 GYR 7~6	相 GYR 6~6	良	粘土はやや粗。0.5 ~ 1mmの大砂粒を含む。微細な角閃石・石英を僅かに含む。
215	1 E1	繩文土器	浅鉢	口縁部						8 ~ 12	に赤い褐 GYR 5~3	に赤い褐 GYR 6~4	に赤い黄褐 GYR 5~3	良	粘土は緻密。微細な角閃石を僅かに含む。
216	1 E2	繩文土器	鉢	口縁部						6 ~ 8.5	相 GYR 6~6	相 GYR 7~6	に赤い黄褐 GYR 6~3	良	粘土は緻密。微細な全芸母を多く含む。
217	1 E1	繩文土器	浅鉢	口縁部						6.5 ~ 8	に赤い褐 GYR 6~4	明赤褐 GYR 5~6	に赤い褐 GYR 6~6	良	粘土は緻密。Im大の砂粒を僅かに含む。微細な全芸母を僅かに含む。
218	1 E1	繩文土器	深鉢	口縁部						4 ~ 5.5	に赤い褐 GYR 5~3	灰褐 GYR 4~2	に赤い黄褐 GYR 6~3	良	粘土は緻密。微細な角閃石を多く含む。
219	1 E2	繩文土器	深鉢	口縁部						5 ~ 7.5	相 GYR 4~3	に赤い褐 GYR 5~4	に赤い褐 GYR 5~4	良	粘土は緻密。微細な全芸母を僅かに含む。
220	1 HI	繩文土器	深鉢	底 部		13.2				7 ~ 14.5	暗褐 GYR 3~3	に赤い褐 GYR 5~4	に赤い褐 GYR 5~3	良	粘土は緻密。0.5 ~ 1mmの大砂粒を含む。微細な全芸母を僅かに含む。
221	1 HI	沸生土器	鉢	口縁部	6.8					5 ~ 7	相 GYR 6~8	相 GYR 6~6	に赤い黄褐 GYR 7~3	良	粘土は緻密。微細な角閃石を含む。
222	1 ノ ノ	繩文土器	深鉢	口縁部	64.4					8 ~ 12	明赤褐 GYR 5~6	に赤い赤褐 GYR 4~3	明赤褐 GYR 5~6	良	粘土は緻密。0.5 ~ 15mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母・角閃石を僅かに含む。
223	1 ノ ノ	繩文土器	深鉢	口縁部						6.5 ~ 12.5	に赤い黄褐 GYR 6~3	に赤い黄褐 GYR 5~4	に赤い黄褐 GYR 6~3	良	粘土はやや粗。0.5 ~ 1mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母を含む。
224	1 ノ ノ	繩文土器	深鉢	口縁部						8 ~ 14	に赤い褐 GYR 5~3	に赤い褐 GYR 5~4	に赤い褐 GYR 5~4	良	粘土はやや粗。0.5 ~ 15mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母を含む。
225	1 ノ ノ	繩文土器	深鉢	口縁部						7 ~ 10	灰褐 GYR 4~2	に赤い赤褐 GYR 5~4	灰褐 GYR 4~2	良	粘土はやや粗。0.5 ~ 15mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母を含む。

調査 番号	出土 経緯 発 見 方 次 等	遺 物 種 類	器種	部位	法量				色調			焼 成	備考		
					口徑 (cm)	頸径 (cm)	胴径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	厚 (mm)	内面	外面	断面		
226	1	ノ 縄文土器	深鉢	口縁部					5 ~ 6.5	に赤い霜 (GYSR 5-3)	明赤褐色 (GYSR 5-6)	に赤い霜 (GYSR 5-4)	良	胎土は緻密。0.5 ~ 1mmの大粒砂を多く含む。微細な角閃石を含む。	
227	1	ノ 縄文土器	深鉢	口縁部					4.5 ~ 7	灰黄褐色 (GYR 5-2)	に赤い霜 (GYSR 5-4)	に赤い霜 (GYR 6-3)	良	胎土はやや粗。0.5 ~ 1mmの大粒砂を多く含む。微細な金雲母を含む。	
228	1	ノ 縄文土器	深鉢	口縁部					11 ~ 14	に赤い霜 (GYR 6-4)	に赤い霜 (GYR 6-4)	に赤い霜 (GYR 6-4)	良	胎土はやや粗。0.5 ~ 1mmの大粒砂を多く含む。微細な金雲母を含む。	
229	1	ノ 縄文土器	深鉢	口縁部					6 ~ 10	浅黃褐色 (GYSR 7-3)	浅黃褐色 (GYSR 7-3)	浅黃褐色 (GYSR 7-3)	不良	胎土はやや粗。0.5 ~ 2mmの大粒砂を多く含む。微細な角閃石を含む。	
230	1	ノ 縄文土器	深鉢	口縁部					8 ~ 10	橙 (GYR 6-6)	橙 (GYR 6-6)	橙 (GYR 6-6)	良	胎土は緻密。0.5 ~ 1mmの大粒砂を優しく含む。微細な金雲母を含む。	
231	1	一 縄文土器	深鉢	口～側部					5 ~ 6.5	明赤褐色 (GYSR 5-6)	明赤褐色 (GYSR 5-6)	明赤褐色 (GYSR 5-6)	良	胎土はやや粗。0.5 ~ 2mmの大粒砂を優しく含む。微細な金雲母を多く含む。	
232	1	ノ 縄文土器	深鉢	底部	7.6				4 ~ 11	灰黄褐色 (GYR 5-2)	橙 (GYR 6-6)	に赤い霜 (GYR 6-3)	良	胎土はやや粗。0.5 ~ 15mmの大粒砂を多く含む。微細な角閃石を含む。	
233	1	ノ 縄文土器	深鉢	底 部					14.0	灰褐色 (GYR 4-2)	明褐色 (GYSR 5-6)	灰褐色 (GYR 4-2)	良	胎土は緻密。1mmの大粒砂を含む。微細な金雲母を含む。	
234	1	ノ 縄文土器	深鉢	口縁部					6 ~ 9	橙 (GYR 6-6)	橙 (GYR 6-6)	に赤い霜 (GYR 7-3)	良	胎土は緻密。0.5 ~ 1mmの大粒砂を含む。微細な金雲母を含む。	
235	1	一 縄文土器	浅鉢	口縁部					5.5 ~ 6	に赤い霜 (GYR 6-4)	橙 (GYR 6-6)	に赤い霜 (GYR 6-6)	良	胎土は緻密。微細な角閃石を多く含む。	
236	1	ノ 縄文土器	深鉢	裏	口縁部				5 ~ 7	に赤い霜 (GYR 6-4)	に赤い霜 (GYR 6-4)	に赤い霜 (GYR 7-4)	良	胎土は緻密。3mmの大粒砂を優しく含む。微細な金雲母を含む。	
237	1	ノ 縄文土器	深鉢	底 部					7.8	灰褐色 (GYSR 6-1)	灰褐色 (GYSR 6-1)	灰褐色 (GYSR 6-1)	良	胎土は緻密。	
238	1 外1	ノ 縄文土器	深鉢	口縁部					6 ~ 9	に赤い霜 (GYSR 5-3)	に赤い霜 (GYR 6-3)	に赤い霜 (GYR 6-3)	良	胎土は緻密。0.5mmの大粒砂を優しく含む。微細な金雲母・角閃石を優しく含む。	
239	1	外1	縄文土器	鉢	側上部				9.0	明黄褐色 (GYR 6-6)	に赤い霜 (GYR 6-3)	に赤い霜 (GYR 6-3)	良	胎土は緻密。精選された粘土を使用。	
240	1	外	縄文土器	深鉢	側上部				6 ~ 7	に赤い霜 (GYR 6-4)	明赤褐色 (GYR 5-4)	に赤い霜 (GYR 6-4)	良	胎土は緻密。精選された粘土・角閃石を含む。比較的粗選された粘土を使用。	
241	1	外1	縄文土器	鉢	側部				8 ~ 9.5	暗褐色 (GYR 3-4)	に赤い霜 (GYR 5-4)	赤褐色 (GYR 4-6)	良	胎土は緻密。精選された粘土を使用。微細な金雲母を多く含む。	
242	1	外1	縄文土器	深鉢	口縁部				5.5 ~ 8	黑褐色 (GYR 3-2)	黑褐色 (GYR 3-2)	に赤い霜 (GYR 5-4)	良	胎土は緻密。0.5mmの大粒砂を優しく含む。	
243	1	外1	縄文土器	深鉢	口縁部				8 ~ 10	に赤い霜 (GYR 5-3)	に赤い霜 (GYR 5-3)	に赤い霜 (GYR 5-3)	良	胎土はやや粗。0.5 ~ 15mmの大粒砂を含む。微細な金雲母を多く含む。	
244	1	外1	縄文土器	深鉢	口縁部				6 ~ 7	黑褐色 (GYR 3-2)	黑褐色 (GYR 3-1)	に赤い霜 (GYR 5-3)	良	胎土はやや粗。0.5 ~ 15mmの大粒砂を含む。微細な金雲母を含む。	
245	1	外1	縄文土器	鉢	側 部				4 ~ 6.5	橙 (GYR 4-6)	橙 (GYR 4-6)	橙 (GYR 4-6)	良	胎土は緻密。微細な金雲母を含む。	
246	1	外1	縄文土器	鉢	口縁部				6 ~ 6.5	に赤い霜 (GYSR 5-3)	に赤い霜 (GYSR 5-3)	に赤い霜 (GYR 5-3)	良	胎土は緻密。微細な金雲母を多く含む。	
247	1	外	縄文土器	深鉢	口縁部				5.5 ~ 8	明褐色 (GYR 5-4)	に赤い霜 (GYR 5-4)	明褐色 (GYR 5-4)	良	胎土はやや粗。1 ~ 15mmの大粒砂を含む。微細な角閃石を優しく含む。	
248	1	外1	縄文土器	深鉢	底 部				10.0	9 ~ 11	黑褐色 (GYR 3-1)	明赤褐色 (GYSR 5-8)	赤黒褐色 (GYR 5-4)	良	胎土は緻密。0.5mmの大粒砂を含む。
249	1	外2	縄文土器	深鉢	底 部				9.7	橙 (GYR 6-6)	明赤褐色 (GYSR 5-8)	暗赤褐色 (GYR 3-1)	不良	胎土は緻密。精選された粘土を使用。微細な金雲母を多く含む。	
250	1	外1	縄文土器	鉢	口縁部				5.5 ~ 7	黑褐色 (GYR 3-1)	に赤い霜 (GYR 5-4)	に赤い霜 (GYR 6-3)	良	胎土は緻密。微細な金雲母を含む。	

遺物番号	調査次第等	出土緯経	遺物種類	器種	部位	法量					色調			焼成	備考
						口径(cm)	頭径(cm)	胴径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	器厚(mm)	内面	外面	断面	
251	1	外1	織文土器	鉢	口縁部					5~7	にぶい褐色 G5YR 6~4)	にぶい褐色 G5YR 6~4)	にぶい褐色 G5YR 6~4)	良	粘土は緻密。微細な全雲母を多く含む。
252	1	外1	弥生土器	斐	肩 部					60	明赤褐色 G5YR 5~8)	明赤褐色 G5YR 5~8)	明赤褐色 G5YR 5~8)	良	粘土は緻密。
253	1	雄	織文土器	深鉢	口縁部					7~11	灰褐色 G5YR 4~2)	にぶい褐色 G5YR 5~4)	にぶい褐色 G5YR 5~4)	良	粘土は緻密。稍焼された粘土を焼成用。0.5~1mm大の砂粒を含む。微細な角閃石を含む。
254	1	雄1	織文土器	鉢	口縁部	246	232			4.5~6.5	明赤褐色 G5YR 6~4)	明赤褐色 G5YR 5~8)	明赤褐色 G5YR 5~8)	不良	粘土はやや粗。0.5~1mm大の砂粒を多く含む。微細な全雲母を含む。
255	1	第1	織文土器	深鉢	口縁部					6.5~10	橙 G5YR 6~6)	橙 G5YR 6~6)	にぶい褐色 G5YR 6~4)	良	粘土はやや粗。0.5~1mm大の砂粒を多く含む。微細な全雲母を多く含む。
256	1	雄1	織文土器	深鉢	口縁部					10.5~13	にぶい褐色 G5YR 6~4)	にぶい褐色 G5YR 6~4)	にぶい褐色 G5YR 7~4)	良	粘土はやや粗。0.5~1mm大の砂粒を多く含む。
257	1	雄1	織文土器	深鉢	口縁部					6~12	にぶい褐色 G5YR 6~3)	にぶい褐色 G5YR 5~4)	明赤褐色 G5YR 5~6)	良	粘土はやや粗。0.5~1mm大の砂粒を多く含む。微細な全雲母を多く含む。
258	1	雄	織文土器	深鉢	口縁部					5~10	にぶい褐色 G5YR 7~3)	にぶい褐色 G5YR 5~4)	にぶい褐色 G5YR 7~3)	良	粘土はやや粗。0.5~2mm大の砂粒を含む。
259	1	雄1	織文土器	深鉢	口縁部	572				8~18	明赤褐色 G5YR 5~6)	にぶい褐色 G5YR 6~4)	にぶい褐色 G5YR 6~4)	良	粘土はやや粗。0.5~2mm大の砂粒を多く含む。微細な全雲母を多く含む。
260	1	雄	織文土器	鉢	口縁部					5.5~7	灰褐色 G5YR 4~2)	にぶい赤褐色 G5YR 5~4)	橙 G5YR 6~6)	良	粘土はやや粗。0.5~1mm大の砂粒を含む。微細な全雲母を含む。
261	1	雄	織文土器	深鉢	頭胴部					4.5~8.5	にぶい褐色 G5YR 6~4)	にぶい褐色 G5YR 6~3)	にぶい褐色 G5YR 7~3)	良	粘土は緻密。微細な角閃石を含む。
262	1	雄	織文土器	深鉢	肩 部					5~7.5	灰褐色 G5YX 5~2)	灰褐色 G5YR 5~2)	にぶい褐色 G5YR 6~3)	良	粘土はやや粗。0.5~1mm大の砂粒を含む。
263	1	雄	織文土器	深鉢	口縁部					5~6	橙 G5YR 6~6)	橙 G5YR 6~6)	橙 G5YR 6~6)	良	粘土は緻密。微細な全雲母を多く含む。
264	1	雄	織文土器	深鉢	口縁部					7.5~11.5	にぶい褐色 G5YR 6~4)	にぶい褐色 G5YR 6~4)	にぶい褐色 G5YR 6~4)	良	粘土は緻密。0.5~1mm大の砂粒を僅に含む。微細な全雲母を多く含む。
265	1	雄	織文土器	深鉢	口縁部					5~7	明赤褐色 G5YR 5~6)	明赤褐色 G5YR 5~6)	明赤褐色 G5YR 5~6)	良	粘土は緻密。0.5mm大の砂粒を含む。微細な全雲母を含む。
266	1	雄	織文土器	深鉢	口縁部					7.5~9.5	橙 G5YR 6~6)	にぶい褐色 G5YR 5~3)	橙 G5YR 6~6)	良	粘土はやや粗。0.5~1mm大の砂粒を含む。微細な全雲母を含む。
267	1	雄	織文土器	鉢	口縁部					6.5~8	灰褐色 G5YR 4~1)	灰褐色 G5YR 4~1)	にぶい褐色 G5YR 6~3)	良	粘土は緻密。0.5mm大の砂粒を含む。微細な全雲母を僅に含む。
268	1	雄	織文土器	深鉢	口縁部					7~11	橙 G5YR 6~3)	橙 G5YR 6~3)	橙 G5YR 6~3)	不良	粘土はやや粗。0.5~1mm大の砂粒を多く含む。微細な全雲母を僅に含む。
269	1	雄1	織文土器	深鉢	口縁部					7~11	灰褐色 G5YR 4~2)	にぶい褐色 G5YR 5~4)	にぶい褐色 G5YR 6~4)	良	粘土は緻密。2mm大の砂粒を僅に含む。微細な全雲母を多く含む。
270	1	雄	織文土器	深鉢	口縁部					6.5~9.5	にぶい褐色 G5YR 6~4)	にぶい褐色 G5YR 6~4)	にぶい褐色 G5YR 6~4)	良	粘土は粗。0.5~2.5mm大の砂粒を多く含む。
271	1	第1	織文土器	深鉢	底 部	112				6.5~13	明赤褐色 G5YR 5~6)	明赤褐色 G5YR 5~6)	明赤褐色 G5YR 5~6)	良	粘土は緻密。0.5~1mm大の砂粒を含む。微細な全雲母を含む。
272	1	第1	織文土器	深鉢	底 部	96				6~17.5	にぶい褐色 G5YR 5~3)	明赤褐色 G5YR 5~6)	灰褐色 G5YR 4~1)	良	粘土はやや粗。0.5~1mm大の砂粒を含む。微細な全雲母を多く含む。
273	1	雄	織文土器	深鉢	底 部	96				5~9	黑 G5Y 2~1)	橙 G5Y 6~6)	灰褐色 G5YR 6~2)	不良	粘土は粗。1~5mm大の砂粒を含む。微細な角閃石、石英を僅に含む。
274	1	第1	織文土器	深鉢	底 部	82				6.5~12	にぶい褐色 G5YR 5~4)	明赤褐色 G5YR 5~6)	にぶい褐色 G5YR 5~4)	不良	粘土は緻密。0.5~1mm大の砂粒を含む。微細な全雲母・石英を僅に含む。
275	1	雄1	織文土器	深鉢	底 部	10.8				8~11	橙 G5YR 6~6)	明赤褐色 G5YR 5~6)	明赤褐色 G5YR 5~6)	不良	粘土は緻密。0.5~1mm大の砂粒を含む。微細な全雲母・石英を僅に含む。

遺物番号	調査次第等	出土緯経	遺物種	器種	部位	法量			色調			焼成	備考			
						口径(cm)	頭径(cm)	胴径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	厚さ(mm)	内面	外面	断面		
276	1	縄文土器	浅鉢	口縁部						5.5 ~ 7.	にふい黄褐色 (GYR 7/4)	にふい黄褐色 (GYR 6/4)	にふい黄褐色 (GYR 7/4)	良	胎土は緻密。微細な金雲母を含む。	
277	1	縄文土器	鉢	口縁部						8.5 ~ 10.	褐 (GYR 6/6)	褐 (GYR 6/6)	灰黄褐色 (GYR 5/2)	不良	胎土は緻密。微細な金雲母を含む。	
278	1	縄文土器	浅鉢	口縁部						6 ~ 10.	明赤褐色 (GYR 5/6)	明赤褐色 (GYR 6/6)	褐 (GYR 7/6)	良	胎土は緻密。0.5mm大の砂粒を僅かに含む。微細な金雲母を含む。	
279	1	縄文土器	浅鉢	口縁部						5.5 ~ 7.	褐灰 (GYR 4/1)	にふい黄褐色 (GYR 6/3)	にふい黄褐色 (GYR 6/3)	良	胎土は緻密。稍度された胎土を用。微細な角閃石を僅かに含む。	
280	1	縄文土器	浅鉢	口縁部						5 ~ 6.	にふい黄褐色 (GYR 7/4)	灰黄褐色 (GYR 6/2)	にふい黄褐色 (GYR 7/3)	良	胎土は緻密。0.5 ~ 1mm大の砂粒を含む。微細な金雲母を僅かに含む。	
281	1	縄文土器	浅鉢	口縁部						4.5 ~ 6.5	灰 (GYR 5/4)	にふい褐 (GYR 5/4)	にふい褐 (GYR 6/3)	良	胎土は緻密。微細な金雲母を多く含む。	
282	1	縄文土器	鉢	口縁部	10.0		11.4			4 ~ 6	にふい褐 (GYR 5/3)	褐 (GYR 6/6)	にふい黄褐色 (GYR 5/3)	良	胎土は緻密。0.5 ~ 1mm大の砂粒を含む。微細な金雲母を多く含む。	
283	1	石器	磨製石器	体部	最大 diameter 7.2 最小 diameter 5.5 厚さ 3.6 重量 184g					9 ~ 19.5	にふい黄褐色 (GYR 5/3)	にふい黄褐色 (GYR 5/3)	にふい黄褐色 (GYR 5/3)	良	胎土はやや粗。0.5 ~ 1.5mm大の砂粒を多く含む。微細な石英を多く含む。	
284	1	南	縄文土器	深鉢	口縁部	468										
285	1	市	縄文土器	深鉢	口縁部					8 ~ 13	褐 (GYR 6/6)	褐 (GYR 6/6)	にふい黄褐色 (GYR 6/3)	良	胎土はやや粗。1 ~ 3mm大の砂粒を含む。	
286	1	市川	縄文土器	深鉢	口縁部					8 ~ 11	にふい黄褐色 (GYR 6/4)	灰褐色 (GYR 5/2)	褐 (GYR 6/6)	良	胎土は緻密。0.5mm大の砂粒を含む。微細な金雲母・角閃石を含む。	
287	1	市川	縄文土器	深鉢	口縁部					7 ~ 11	にふい褐 (GYR 6/4)	にふい褐 (GYR 6/4)	にふい褐 (GYR 6/4)	良	胎土は緻密。1.5mm大の砂粒を含む。微細な角閃石を含む。	
288	1	市川	縄文土器	深鉢	口縁部					11.0	明赤褐色 (GYR 5/8)	明赤褐色 (GYR 5/8)	赤褐色 (GYR 4/9)	良	胎土はやや粗。0.5mm大の砂粒を多く含む。微細な金雲母を多く含む。	
289	1	市川	縄文土器	深鉢	口縁部					9 ~ 11	にふい黄褐色 (GYR 6/3)	灰黄褐色 (GYR 5/2)	灰黄褐色 (GYR 6/3)	良	胎土はやや粗。0.5 ~ 1mm大の砂粒を多く含む。	
290	1	市川	縄文土器	深鉢	口縁部	334				8 ~ 10	褐灰 (GYR 4/1)	灰黄褐色 (GYR 5/2)	明赤褐色 (GYR 6/6)	良	胎土は緻密。稍度された胎土を用。微細な金雲母を含む。	
291	1	市川	縄文土器	深鉢	口縁部					6.5 ~ 10.5	浅黄 (GYR 7/4)	浅黄 (GYR 7/4)	浅黄 (GYR 7/4)	良	胎土は緻密。1 ~ 2mm大の砂粒を含む。微細な金雲母を僅かに含む。	
292	1	市川	縄文土器	深鉢	口縁部					7.0	黒褐色 (GYR 4/3)	非褐 (GYR 4/6)	非褐 (GYR 4/6)	良	胎土は緻密。0.5mm大の砂粒を含む。	
293	1	市川	縄文土器	深鉢	口縁部					7 ~ 12	褐 (GYR 6/6)	にふい赤褐色 (GYR 7/6)	明赤褐色 (GYR 7/6)	良	胎土はやや粗。0.5 ~ 1mm大の砂粒を多く含む。微細な金雲母を含む。	
294	1	市川	縄文土器	深鉢	口縁部					5 ~ 7	にふい黄褐色 (GYR 6/3)	にふい黄褐色 (GYR 6/3)	にふい黄褐色 (GYR 6/3)	良	胎土は緻密。0.5mm大の砂粒を僅かに含む。	
295	1	市川	縄文土器	深鉢	口縁部					6.5 ~ 20	半褐 (GYR 4/6)	にふい赤褐色 (GYR 4/6)	半褐 (GYR 4/6)	良	胎土は緻密。1 ~ 4mm大の砂粒を含む。微細な金雲母・角閃石を僅かに含む。	
296	1	市川	縄文土器	深鉢	底 部					9.4	にふい黄褐色 (GYR 5/3)	にふい黄褐色 (GYR 5/4)	にふい黄褐色 (GYR 5/3)	良	胎土は緻密。0.5mm大の砂粒を僅かに含む。微細な角閃石を多く含む。	
297	1	市川	縄文土器	深鉢	底 部					9.7	7 ~ 10.5	明褐色 (GYR 5/6)	にふい褐 (GYR 5/6)	にふい褐 (GYR 5/6)	良	胎土はやや粗。0.5 ~ 2mm大の砂粒を多く含む。微細な金雲母を含む。
298	1	市川	縄文土器	环	底 部					12.0	5 ~ 7	灰黄褐色 (GYR 6/2)	明赤褐色 (GYR 6/1)	灰黄褐色 (GYR 6/2)	良	胎土は緻密。
299	1	市川	瓦質土器	調 制 部						5 ~ 6	灰 (GY 4/3)	灰 (GY 4/1)	灰 (GY 4/1)	良	胎土は緻密。	
300	1	十八	縄文土器	深鉢	口縁部					5 ~ 8.5	褐 (GY 6/6)	にふい赤褐色 (GYR 5/4)	褐 (GY 6/6)	良	胎土はやや粗。0.5 ~ 1mm大の砂粒を多く含む。微細な金雲母を含む。	

遺物番号	調査次第等	出土緯経	遺物種	器種	部位	法量			色調			焼成	備考			
						口径(cm)	頭径(cm)	胴径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	厚さ(mm)	内面	外面	断面		
301 1	ANR -D -H0	繩文 土器	深鉢	口縁部						7 ~ 15.5	にふい・黒 (G5YR 5-3)	黒灰 (D0YR 4-1)	灰黄褐 (D0YR 5-2)	良	胎土は緻密。0.5mm大の砂粒を含む。微細な角閃石を多く含む。	
302 1	ANR -D -H0	繩文 土器	深鉢	口縁部						8 ~ 13	にふい・黄褐 (D0YR 6-3)	にふい・黄褐 (D0YR 6-3)	明黄褐 (D0YR 7-6)	良	胎土は緻密。	
303 1	ANR -D -H0	繩文 土器	深鉢	口縁部						5.5 ~ 14	黒 (G5YR 4-3)	にふい・黒 (G5YR 5-3)	にふい・黒 (G5YR 5-4)	良	胎土はやや粗。0.5 ~ 1mm大の砂粒を多く含む。微細な全雲母を多く含む。	
304 1	ANR -D -H0	繩文 土器	深鉢	口縁部						5.5 ~ 12.5	黒灰 (D0YR 4-1)	にふい・黄褐 (D0YR 5-2)	にふい・青褐 (G5YR 5-4)	良	胎土はやや粗。0.5 ~ 1mm大の砂粒を多く含む。微細な全雲母を僅かに含む。	
305 1	ANR -D -H0	繩文 土器	深鉢	口縁部						8 ~ 14	黒褐 (G5YR 3-1)	黒灰 (D0YR 4-1)	にふい・黄褐 (D0YR 6-3)	良	胎土は緻密。0.5mm大の砂粒を僅かに含む。微細な全雲母を多く含む。	
306 1	ANR -D -H0	繩文 土器	深鉢	口縁部						7 ~ 11	にふい・黒 (G5YR 5-3)	にふい・黒 (G5YR 5-3)	灰黄褐 (D0YR 5-2)	良	胎土は粗。0.5 ~ 2mm大の砂粒を多く含む。微細な全雲母を多く含む。	
307 1	ANR -D -H0	繩文 土器	深鉢	口縁部						7 ~ 15	明褐 (G5YR 5-6)	にふい・黒 (G5YR 5-6)	にふい・黄褐 (D0YR 5-6)	良	胎土は緻密。微細な全雲母を多く含む。	
308 1	ANR -D -H0	繩文 土器	深鉢	口縁部						8 ~ 9.5	にふい・黒 (G5YR 5-0)	明赤褐 (G5YR 5-0)	明赤褐 (G5YR 5-0)	良	胎土はやや粗。0.5 ~ 1mm大の砂粒を多く含む。微細な全雲母を僅かに含む。	
309 1	ANR -D -H0	繩文 土器	深鉢	口縁部						6 ~ 12	黒褐 (G5YR 3-1)	灰黄 (G5YR 6-2)	浅黄 (G5YR 7-2)	良	胎土はやや粗。0.5 ~ 1mm大の砂粒を含む。微細な全雲母を僅かに含む。	
310 1	ANR -D -H0	繩文 土器	深鉢	口縁部						6 ~ 11	にふい・黄褐 (D0YR 6-3)	にふい・黒 (G5YR 5-6)	にふい・黄褐 (D0YR 6-3)	良	胎土はやや粗。0.5 ~ 1mm大の砂粒を多く含む。	
311 1	ANR -D -H0	繩文 土器	鉢	胴 部						5.5 ~ 6.5	灰黄 (G5YR 6-2)	にふい・黒 (G5YR 5-3)	灰褐 (G5YR 4-2)	良	胎土は緻密。0.5mm大の砂粒を僅かに含む。微細な全雲母を僅かに含む。	
312 1	ANR -D -H0	繩文 土器	深鉢	底 部						11.0	にふい・黄褐 (D0YR 5-3)	にふい・黒 (G5YR 6-3)	にふい・黄褐 (D0YR 5-3)	良	胎土は緻密。微細な全雲母を多く含む。	
313 1	ANR -D -H0	繩文 土器	深鉢	底 部						5.8	4 ~ 10	赤褐 (GYR 4-0)	赤褐 (GYR 4-0)	赤褐 (GYR 4-0)	良	胎土は緻密。1mmの大砂粒を僅かに含む。微細な全雲母を含む。
314 1	ANR -D -H0	繩文 土器	鉢	口縁部						7 ~ 10	にふい・黄褐 (D0YR 6-3)	にふい・黄褐 (D0YR 6-3)	にふい・黄褐 (D0YR 6-3)	良	胎土は緻密。微細な角閃石を含む。	
315 1	ANR -D -H0	繩文 土器	深鉢	口縁部						6 ~ 7	にふい・黒 (G5YR 5-3)	褐 (G5YR 6-6)	褐 (G5YR 6-6)	良	胎土は緻密。0.5mm大の砂粒を含む。微細な全雲母を僅かに含む。	
316 1	ANR -D -H0	繩文 土器	鉢	口縁部						5 ~ 9	明黄褐 (GYR 6-6)	明黄褐 (GYR 6-6)	明赤褐 (D0YR 6-6)	良	胎土は緻密。微細な全雲母を含む。	
317 1	ANR -D -H0	繩文 土器	鉢	口縁部						7.5 ~ 9.5	にふい・黄褐 (D0YR 6-3)	にふい・黄褐 (D0YR 6-3)	にふい・黄褐 (D0YR 6-3)	良	胎土は緻密。微細な全雲母を含む。	
318 1	ANR -D -H0	繩文 土器	鉢	胴 部						6.5 ~ 8.5	にふい・黄褐 (D0YR 5-3)	にふい・黒 (G5YR 5-0)	にふい・黄褐 (D0YR 5-3)	不良	胎土はやや粗。15mmの大砂粒を僅かに含む。微細な全雲母を含む。	
319 1	一 植	繩文 土器	深鉢	口縁部						7 ~ 11	にふい・黄褐 (D0YR 4-0)	にふい・黒 (G5YR 5-0)	にふい・黄褐 (D0YR 6-0)	良	胎土は緻密。精選された粘土を使用。	
320 1	一 植	繩文 土器	深鉢	口縁部						6 ~ 13	明赤褐 (GYR 5-6)	褐 (GYR 6-8)	にふい・黒 (D0YR 7-0)	良	胎土はやや粗。0.5 ~ 1mm大の砂粒を多く含む。微細な全雲母を含む。	
321 1	一 植	繩文 土器	深鉢	口縁部						8 ~ 12	褐 (G5YR 6-6)	にふい・黄褐 (GYR 7-0)	にふい・黄褐 (GYR 7-0)	良	胎土はやや粗。0.5 ~ 1mm大の砂粒を多く含む。微細な角閃石を含む。	
322 1	一 植	繩文 土器	鉢	口縁部						7.5 ~ 11	明赤褐 (GYR 5-6)	にふい・黄 (G5YR 6-2)	にふい・黄 (G5YR 6-2)	良	胎土はやや粗。0.5 ~ 1mm大の砂粒を多く含む。微細な角閃石を含む。	
323 1	一 植	繩文 土器	鉢	口縁部	420					7.5 ~ 13.5	明黄褐 (GYR 6-6)	明赤褐 (GYR 5-6)	黒灰 (G5YR 5-1)	良	胎土はやや粗。0.5 ~ 2mm大の砂粒を多く含む。微細な全雲母を多く含む。	
324 1	一 植	繩文 土器	鉢	口縁部						5 ~ 12	赤褐 (GYR 4-0)	黒褐 (G5YR 3-1)	明赤褐 (GYR 5-4)	良	胎土は緻密。0.5mm大の砂粒を多く含む。微細な全雲母を多く含む。	
325 1	一 植	繩文 土器	深鉢	口縁部						9 ~ 13	にふい・黄褐 (D0YR 6-3)	にふい・赤褐 (GYR 5-4)	にふい・赤褐 (GYR 5-4)	良	胎土はやや粗。0.5 ~ 1mm大の砂粒を多く含む。	

遺物番号	調査次第等	出土緯	遺物種	器種	部位	法量					色調			焼成	備考
						口径(cm)	頭径(cm)	胴径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	器厚(mm)	内面	外面	断面	
326	1 一括	繩文土器	鉢	口縁部						9 ~ 12.5	褐灰 (GYR 4/1)	にぶい黄褐 (GYR 7/3)	褐灰 (GYR 4/1)	良	粘土は緻密。0.5mm大の砂粒を含む。微細な角閃石を多く含む。
327	1 一括	繩文土器	深鉢	口縁部						8 ~ 20	水灰 (GYR 4/6)	褐 (GYR 4/6)	赤褐 (GYR 4/6)	良	粘土は緻密。0.5 ~ 1mm大の砂粒を含む。微細な全雲母を多く含む。
328	1 一括	繩文土器	深鉢	口縁部						7 ~ 13	褐 (GYR 6/6)	褐 (GYR 6/6)	にぶい黄褐 (GYR 6/6)	良	粘土はやや粗。0.5 ~ 1mm大の砂粒を多く含む。
329	1 一括	繩文土器	鉢	突起						6 ~ 16	灰黄褐 (GYR 5/2)	灰黄褐 (GYR 5/2)	褐灰 (GYR 4/1)	不具	粘土は粗。0.5 ~ 1mm大の砂粒を多く含む。石墨・長石多し。微細な全雲母を多く含む。
330	1 一括	繩文土器	鉢	口縁部						9 ~ 16	にぶい黄褐 (GYR 6/6)	にぶい黄褐 (GYR 5/3)	にぶい黄褐 (GYR 6/6)	良	粘土はやや粗。0.5 ~ 1mm大の砂粒を多く含む。微細な全雲母を僅かに含む。
331	1 一括	繩文土器	深鉢	口縁部						9 ~ 13	明赤褐 (GYR 5/6)	明赤褐 (GYR 5/6)	明赤褐 (GYR 5/6)	良	粘土はやや粗。0.5 ~ 1mm大の砂粒を多く含む。微細な全雲母を含む。
332	1 一括	繩文土器	深鉢	口～側部	57.0					9 ~ 11	明赤褐 (GYR 5/6)	明赤褐 (GYR 5/6)	明赤褐 (GYR 5/6)	良	粘土は緻密。0.5 ~ 1mm大の砂粒を含む。微細な全雲母を含む。
333	1 一括	繩文土器	深鉢	口縁部	46.0					6.5 ~ 8.5	褐灰 (GYR 4/1)	にぶい黄褐 (GYR 6/3)	にぶい黄褐 (GYR 6/3)	良	粘土は緻密。微細な角閃石を僅かに含む。
334	1 一括	繩文土器	鉢	口縁部	40.0					8 ~ 13	灰黄褐 (GYR 4/2)	褐 (GYR 6/6)	黑褐 (GYR 3/1)	良	粘土は緻密。0.5mm大の砂粒を含む。微細な角閃石を含む。
335	1 一括	繩文土器	深鉢	口縁部						7 ~ 10	にぶい赤褐 (GYR 5/4)	にぶい赤褐 (GYR 5/4)	にぶい赤褐 (GYR 5/4)	良	粘土は緻密。微細な角閃石をまばらに含む。
336	1 一括	繩文土器	深鉢	口縁部						6 ~ 10	にぶい黄褐 (GYR 5/4)	褐 (GYR 4/6)	にぶい黄褐 (GYR 5/3)	良	粘土は緻密。0.5 ~ 1mm大の砂粒を含む。微細な全雲母を僅かに含む。
337	1 一括	繩文土器	鉢	口縁部						5.5 ~ 13	黑褐 (GYR 3/1)	明赤褐 (GYR 5/4)	にぶい黄褐 (GYR 6/3)	良	粘土はやや粗。0.5 ~ 1mm大の砂粒を含む。微細な全雲母を多く含む。
338	1 一括	繩文土器	深鉢	口縁部						7 ~ 12	にぶい赤褐 (GYR 5/4)	にぶい赤褐 (GYR 5/4)	にぶい赤褐 (GYR 5/4)	良	粘土は緻密。微細な全雲母をまばらに含む。
339	1 一括	繩文土器	深鉢	口縁部						3.5 ~ 6	明赤褐 (GYR 5/6)	にぶい赤褐 (GYR 5/4)	にぶい黄褐 (GYR 6/3)	良	粘土は緻密。微細な角閃石を僅かに含む。
340	1 一括	繩文土器	深鉢	口縁部						6 ~ 8.5	明赤褐 (GYR 5/6)	明赤褐 (GYR 5/6)	明赤褐 (GYR 5/6)	良	粘土は緻密。微細な全雲母を含む。
341	1 一括	繩文土器	深鉢	胴 部						5.5 ~ 8.5	褐灰 (GYR 4/1)	明赤褐 (GYR 5/6)	にぶい黄褐 (GYR 6/3)	良	粘土は緻密。微細な全雲母を多く含む。
342	1 一括	繩文土器	深鉢	頭胴部						6 ~ 8	明赤褐 (GYR 5/6)	明赤褐 (GYR 5/6)	灰褐褐 (GYR 6/2)	良	粘土はやや粗。0.5 ~ 1.5mm大の砂粒を多く含む。
343	1 一括	繩文土器	鉢	頭胴部						7 ~ 11	灰黄褐 (GYR 5/2)	にぶい黄褐 (GYR 7/4)	にぶい黄褐 (GYR 7/4)	良	粘土は緻密。0.5 ~ 1mm大の砂粒を含む。微細な全雲母を僅かに含む。
344	1 一括	繩文土器	深鉢	胴 部						8 ~ 10	明赤褐 (GYR 5/6)	明赤褐 (GYR 5/6)	褐 (GYR 6/6)	良	粘土は緻密。0.5mm大の砂粒を含む。
345	1 一括	繩文土器	深鉢	胴 部						7 ~ 11	褐 (GYR 6/6)	にぶい黄褐 (GYR 6/6)	にぶい黄褐 (GYR 6/6)	良	粘土は緻密。微細な角閃石を僅かに含む。
346	1 一括	繩文土器	深鉢	口縁部						6 ~ 9	明褐 (GYR 5/8)	にぶい赤褐 (GYR 5/4)	にぶい黄褐 (GYR 6/3)	良	粘土はやや粗。0.5 ~ 3mm大の砂粒を多く含む。微細な全雲母を含む。
347	1 一括	繩文土器	深鉢	口縁部						6 ~ 6.5	にぶい赤褐 (GYR 5/6)	にぶい赤褐 (GYR 5/4)	明赤褐 (GYR 5/6)	良	粘土は緻密。微細な全雲母を含む。
348	1 一括	繩文土器	深鉢	口縁部						4.5 ~ 6	にぶい赤褐 (GYR 4/3)	にぶい赤褐 (GYR 4/3)	にぶい赤褐 (GYR 4/3)	良	粘土は緻密。
349	1 一括	繩文土器	深鉢	口縁部						5 ~ 7	褐 (GYR 6/6)	明赤褐 (GYR 5/6)	褐 (GYR 6/6)	良	粘土は緻密。0.5mm大の砂粒を僅かに含む。微細な全雲母を多く含む。
350	1 一括	繩文土器	深鉢	口縁部						9 ~ 12	明赤褐 (GYR 5/6)	にぶい赤褐 (GYR 4/3)	灰黄褐 (GYR 5/2)	良	粘土は緻密。0.5mm大の砂粒を含む。

遺物番号	調査次第等	出土経緯	遺物種	層級	部位	法量				色調			焼成	備考		
						口径(cm)	頭径(cm)	胴径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	器厚(mm)	内面	外面			
351	1	一括	繩文土器	深鉢	口縁部					65 ~ 90	に赤い褐 G5YR 5-3	に赤い褐 G5YR 5-4	に赤い褐 G5YR 5-4	良	粘土は緻密。0.5 ~ 1mm大の砂粒を含む。微細な金雲母を含む。	
352	1	一括	繩文土器	深鉢	口縁部					6 ~ 7	に赤い褐 G5YR 5-4	明赤褐 G5YR 5-6	明赤褐 G5YR 5-6	良	粘土は緻密。微細な金雲母を含む。	
353	1	一括	繩文土器	深鉢	口縁部					7 ~ 9	に赤い赤褐 G5YR 5-4	明赤褐 G5YR 5-6	に赤い黄褐 G5YR 6-4	良	粘土は緻密。微細な金雲母を僅かに含む。	
354	1	一括	繩文土器	深鉢	口縁部					7 ~ 11	灰黄褐 G5YR 5-2	灰黄褐 G5YR 6-2	灰黄褐 G5YR 6-2	良	粘土は緻密。0.5 ~ 1mm大の砂粒を含む。	
355	1	一括	繩文土器	深鉢	口縁部					5 ~ 8	に赤い黄褐 G5YR 6-3	に赤い黄褐 G5YR 6-3	に赤い黄褐 G5YR 6-3	良	粘土はやや粗。0.5 ~ 1mm大の砂粒を含む。微細な角閃石・金雲母を僅かに含む。	
356	1	一括	繩文土器	深鉢	口縁部					6 ~ 10	黒褐 G5Y 3-1	明赤褐 G5YR 5-6	に赤い黄褐 G5YR 5-6	良	粘土は緻密。微細な金雲母を含む。	
357	1	一括	繩文土器	深鉢	口縁部					7 ~ 10	根 G5YR 6-6	根 G5YR 6-6	根 G5YR 6-6	良	粘土を多く含む。0.5 ~ 1mm大の砂粒を含む。微細な金雲母を含む。	
358	1	一括	繩文土器	深鉢	口縁部					5 ~ 9	灰褐 G5YR 5-1	に赤い黄褐 G5YR 7-4	灰灰 G5YR 5-1	良	粘土は緻密。微細な金雲母を多く含む。	
359	1	一括	繩文土器	鉢	口縁部					5 ~ 7	灰黄褐 G5YR 6-2	灰黄褐 G5YR 6-2	に赤い黄褐 G5YR 6-3	良	粘土は緻密。微細な金雲母を僅かに含む。	
360	1	一括	繩文土器	浅鉢	口縁部					55 ~ 85	に赤い黄褐 G5YR 6-7	に赤い黄褐 G5YR 6-7	に赤い黄褐 G5YR 6-7	良	粘土は緻密。微細な金雲母を多く含む。	
361	1	一括	繩文土器	浅鉢	口縁部					5 ~ 65	に赤い黄褐 G5YR 6-4	に赤い黄褐 G5YR 6-4	に赤い根 G5YR 6-4	良	粘土はやや粗。0.5 ~ 1.5mm大の砂粒を多く含む。	
362	1	一括	繩文土器	壺	側部					85	黒褐 G5YR 3-1	明赤褐 G5YR 5-6	明赤褐 G5YR 5-6	良	粘土はやや粗。0.5mm大の砂粒を含む。	
363	1	一括	繩文土器	浅鉢	頭頂部					55 ~ 65	に赤い赤褐 G5YR 4-3	黒褐 G5YR 3-1	に赤い黄褐 G5YR 6-3	良	粘土は緻密。微細な角閃石・金雲母を多く含む。壺形?	
364	1	一括	繩文土器	鉢	腹 部					4 ~ 7	に赤い黄褐 G5YR 7-3	に赤い黄褐 G5YR 7-3	に赤い黄褐 G5YR 7-3	良	粘土はやや粗。0.5mm大の砂粒を多く含む。微細な金雲母を僅かに含む。	
365	1	一括	陶臼付土器	頭 部						7 ~ 10	明褐 G5YR 5-6	明褐 G5YR 5-6	明褐 G5YR 5-6	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。	
366	1	一括	繩文土器	浅鉢	底 部					126	4 ~ 6	に赤い赤褐 G5YR 4-3	に赤い赤褐 G5YR 4-3	に赤い赤褐 G5YR 5-3	良	粘土は緻密。微細な金雲母を僅かに含む。
367	2	一括	貝製品	貝輪	3/4欠損	最大径 5.1	最大幅 2.2	最大厚 0.16	重量 3g							
368	2	一括	貝製品	貝輪	3/4欠損	最大径 4.6	最大幅 1.8	最大厚 0.6	重量 4g							
369	2	一括	貝製品	貝輪	4/5欠損	最大径 5.1	最大幅 1.1	最大厚 0.8	重量 4g							
370	2	一括	骨角器	彫飾品	定形	最大径 4.7	最大幅 1.4	最大厚 0.2	重量 1g							
371	2	一括	骨角器	彫飾品	定形	最大径 5.1	最大幅 1.2	最大厚 0.85	重量 6g							
372	2	一括	骨角器	彫飾品	定形	最大径 3.7	最大幅 1.1	最大厚 0.6	重量 3g							
373	S40	一括	繩文土器	深鉢	口縁部					7 ~ 15	黒褐 G5YR 3-1	黒褐 G5YR 3-1	明褐 G5YR 5-6	良	粘土はやや粗。0.5 ~ 1mm大の砂粒を含む。	
374	S40	一括	繩文土器	鉢	口縁部					8 ~ 12	根 G5YR 6-6	根 G5YR 6-6	根 G5YR 6-6	不良	粘土は緻密。0.5mm大の砂粒を含む。	
375	S40	一括	繩文土器	鉢	口縁部					6 ~ 10	明褐 G5YR 5-6	明褐 G5YR 5-6	明褐 G5YR 5-6	良	粘土は緻密。微細な金雲母と含む。	

遺物番号	調査次第等	出土緯	遺物種類	器種	部位	法量				色調			焼成	備考	
						口径(cm)	頭径(cm)	胴径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	器厚(mm)	内面	外面		
376 S40	一括	繩文土器	深鉢	口縁部						7 ~ 13	に赤い黄褐色 (G5YR 6/4)	明赤褐色 (G5YR 5/6)	明赤褐色 (G5YR 5/6)	良	胎土はやや細。0.5 ~ 1mmの大砂粒を含む。微細な全芸母を含む。
377 S40	一括	繩文土器	深鉢	口縁部						7 ~ 9	明赤褐色 (G5YR 5/8)	明赤褐色 (G5YR 5/8)	明赤褐色 (G5YR 5/8)	良	胎土は緻密。精選された胎土を使用。微細な全芸母を含む。
378 S40	一括	繩文土器	鉢	口縁部						9 ~ 17	に赤い黄褐色 (G5YR 5/4)	明赤褐色 (G5YR 5/8)	明赤褐色 (G5YR 5/8)	良	胎土はやや粗。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母を多く含む。
379 S40	一括	繩文土器	深鉢	口縁部						10 ~ 12	褐 (G5YR 6/6)	褐 (G5YR 6/6)	灰褐色 (G5YR 6/2)	良	胎土はやや粗。0.5 ~ 1mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母を僅かに含む。
380 S40	一括	繩文土器	深鉢	口縁部						10 ~ 11	明赤褐色 (G5YR 5/8)	赤褐色 (G5YR 4/6)	に赤い黄褐色 (G5YR 6/3)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全芸母を多く含む。
381 S40	一括	繩文土器	深鉢	口縁部	384					7 ~ 12	明赤褐色 (G5YR 5/8)	明赤褐色 (G5YR 5/8)	明赤褐色 (G5YR 5/8)	良	胎土はやや粗。0.5 ~ 1mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母をまばらに含む。
382 S40	一括	繩文土器	深鉢	口縁部						12.0	灰褐色 (G5YR 4/2)	明赤褐色 (G5YR 5/8)	に赤い黄褐色 (G5YR 7/3)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を多く含む。
383 S40	一括	繩文土器	鉢	口縁部付近						12.0	に赤い黄褐色 (G5YR 6/3)	に赤い黄褐色 (G5YR 6/4)	褐色 (G5YR 4/1)	良	胎土は緻密。0.5 ~ 1mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母を多く含む。
384 S40	一括	繩文土器	深鉢	口縁部						8 ~ 12	に赤い黄褐色 (G5YR 6/4)	灰褐色 (G5YR 4/2)	に赤い黄褐色 (G5YR 6/4)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を多く含む。
385 S40	一括	繩文土器	鉢	口縁部						7 ~ 8	明赤褐色 (G5YR 5/6)	明赤褐色 (G5YR 5/6)	に赤い赤褐色 (G5YR 5/6)	良	胎土は緻密。0.5 ~ 1mmの大砂粒を含む。微細な全芸母を含む。
386 S40	一括	繩文土器	深鉢	口縁部						10 ~ 13	明赤褐色 (G5YR 5/6)	に赤い黄褐色 (G5YR 6/4)	に赤い黄褐色 (G5YR 6/4)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全芸母を含む。
387 S40	一括	繩文土器	深鉢	口縁部						6 ~ 11	灰褐色 (G5YR 4/1)	に赤い黄褐色 (G5YR 5/4)	灰褐色 (G5YR 5/2)	良	胎土はやや粗。0.5 ~ 1mmの大砂粒を含む。微細な全芸母を含む。
388 S40	一括	繩文土器	深鉢	口縁部						8 ~ 11	明赤褐色 (G5YR 5/8)	褐色灰褐色 (G5YR 3/1)	灰褐色 (G5YR 6/2)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母を多く含む。
389 S40	一括	繩文土器	深鉢	口縁部						10 ~ 16	明赤褐色 (G5YR 5/6)	明赤褐色 (G5YR 5/6)	明赤褐色 (G5YR 5/6)	良	胎土はやや粗。0.5 ~ 1mmの大砂粒を含む。微細な全芸母を含む。
390 S40	一括	繩文土器	深鉢	口縁部						10 ~ 12	褐 (G5YR 2/1)	に赤い黄褐色 (G5YR 7/2)	に赤い黄褐色 (G5YR 7/2)	良	胎土は緻密。0.5 ~ 1mmの大砂粒を含む。微細な角閃石を多く含む。
391 S40	一括	繩文土器	鉢	口縁部						5 ~ 10	褐 (G5YR 6/6)	に赤い黄褐色 (G5YR 6/6)	灰褐色 (G5YR 5/2)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全芸母・角閃石を僅かに含む。
392 S40	一括	繩文土器	深鉢	口縁部						11.0	灰褐色 (G5YR 4/1)	に赤い黄褐色 (G5YR 6/4)	灰褐色 (G5YR 6/2)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全芸母・角閃石を含む。
393 S40	一括	繩文土器	鉢	口縁部						8 ~ 14	に赤い赤褐色 (G5YR 5/4)	に赤い赤褐色 (G5YR 5/4)	に赤い赤褐色 (G5YR 5/4)	良	胎土はやや粗。0.5 ~ 1mmの大砂粒を含む。角閃石を多く含む。
394 S40	一括	繩文土器	深鉢	口縁部						6 ~ 13	浅褐色 (G5YR 7/0)	浅褐色 (G5YR 7/0)	灰褐色 (G5YR 4/1)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全芸母・角閃石を含む。
395 S40	一括	繩文土器	深鉢	口縁部	368					7 ~ 16	黑褐色 (G5YR 3/1)	に赤い黒褐色 (G5YR 5/3)	黑褐色 (G5YR 3/1)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。角閃石を含む。全芸母・角閃石を多く含む。
396 S40	一括	繩文土器	深鉢	口縁部						5 ~ 10	明赤褐色 (G5YR 5/8)	明赤褐色 (G5YR 5/8)	明赤褐色 (G5YR 5/8)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母・角閃石を含む。
397 S40	一括	繩文土器	深鉢	口縁部						14.0	褐 (G5YR 6/6)	褐 (G5YR 6/6)	褐 (G5YR 6/6)	良	胎土は緻密。0.5 ~ 1mmの大砂粒を含む。
398 S40	一括	繩文土器	深鉢	口縁部						7.0	黑褐色 (G5YR 3/2)	黒褐色 (G5YR 3/2)	黒褐色 (G5YR 3/2)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全芸母を含む。
399 S40	一括	繩文土器	鉢	胴上部		24.2				6 ~ 9	褐褐色 (G5YR 6/6)	黒褐色 (G5YR 3/1)	黒褐色 (G5YR 3/1)	良	胎土は緻密。0.5 ~ 1mmの大砂粒を含む。微細な全芸母を多く含む。
400 S40	一括	繩文土器	鉢	胴上部						6 ~ 9	褐褐色 (G5YR 6/6)	に赤い黄褐色 (G5YR 7/3)	灰白色 (G5YR 7/1)	良	胎土は緻密。0.5 ~ 1mmの大砂粒を含む。

遺物番号	調査次第等	出土緯経	遺物種類	器種	部位	法量				色調			焼成	備考	
						口径(cm)	頭径(cm)	胴径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	器厚(mm)	内面	外面		
401	S40	一括	繩文土器	深鉢	胴上部		43.2			8 ~ 10	褐灰(G5YR 4/1)	褐灰(G5YR 4/1)	褐灰(G5YR 4/1)	良	粘土はやや粗。0.5 ~ 1mmの大砂粒を多く含む。繩網な全表面、角開口を多く含む。
402	S40	一括	繩文土器	鉢	胴下部					9 ~ 10	水灰(G5YR 4/8)	水灰(G5YR 4/8)	に赤い黄(G5YR 6/3)	良	粘土は緻密。0.5 ~ 1mmの大砂粒を多く含む。
403	S40	一括	繩文土器	深鉢	胴上部					8 ~ 11	黄灰(G5Y 6/1)	に赤い黄(G5Y 6/4)	に赤い黄(G5Y 6/4)	良	粘土は緻密。0.5 ~ 1mmの大砂粒を多く含む。微細な角開口を多く含む。
404	S40	一括	繩文土器	深鉢	胴下部					7 ~ 8	明赤褐(G5YR 5/6)	明赤褐(G5YR 5/8)	明赤褐(G5YR 5/8)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。繩網な全表面、角開口を多く含む。
405	S40	一括	繩文土器	鉢	胴下部					7 ~ 10	に赤い黄橙(G5YR 6/4)	に赤い黄橙(G5YR 6/4)	黒褐(G5YR 3/1)	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。0.5 ~ 5mmの大砂粒を僅かに含む。全表面・角開口を含む。
406	S40	一括	繩文土器	深鉢	胴 部					9 ~ 10	明赤褐(G5YR 3/4)	明赤褐(G5YR 3/4)	灰褐(G5YR 5/2)	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。~ 0.5mmの大砂粒を含む。
407	S40	一括	繩文土器	浅鉢	胴下部					7 ~ 8	褐(G5YR 6/6)	褐灰(G5YR 5/2)	褐(G5YR 6/6)	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。微細な全表面を含む。
408	S40	一括	繩文土器	鉢	胴 部					7.0	黑(G5Y 2/1)	に赤い黄橙(G5YR 6/4)	に赤い黄橙(G5YR 6/4)	良	粘土はやや粗。0.5mmの大砂粒を含む。
409	S40	一括	繩文土器	深鉢	胴下部	38.8				8 ~ 10	明赤褐(G5YR 5/8)	に赤い褐(G5YR 5/4)	褐灰(G5YR 4/1)	良	粘土は緻密。0.5 ~ 1mmの大砂粒を多く含む。繩網な全表面、角開口を多く含む。
410	S40	一括	繩文土器	鉢	胴下部	21.7				6.5 ~ 8.5	に赤い黄(G5YR 6/4)	褐(G5YR 6/6)	褐(G5YR 6/6)	良	粘土は緻密。0.5 ~ 1mmの大砂粒を多く含む。繩網な全表面・角開口を多く含む。
411	S40	一括	繩文土器	浅鉢	胴下部					6 ~ 7	明赤褐(G5YR 5/6)	明赤褐(G5YR 5/6)	明赤褐(G5YR 5/6)	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。微細な角開口を含む。
412	S40	一括	繩文土器	鉢	胴下部					8 ~ 9	に赤い黄(G5YR 6/4)	に赤い黄橙(G5YR 6/4)	に赤い黄橙(G5YR 6/4)	良	粘土は緻密。0.5 ~ 1mmの大砂粒を含む。繩網な全表面・角開口を含む。
413	S40	一括	繩文土器	鉢	胴下部					7 ~ 7.5	明赤褐(G5YR 5/6)	明赤褐(G5YR 5/6)	明赤褐(G5YR 5/6)	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。~ 0.5mmの大砂粒を含む。
414	S40	一括	繩文土器	鉢	胴下部					6 ~ 8	黑褐(G5YR 3/1)	水灰(G5YR 4/4)	黑褐(G5YR 2/1)	良	粘土は緻密。0.5 ~ 1mmの大砂粒を含む。繩網な全表面・角開口を含む。
415	S40	一括	繩文土器	鉢	底 部	8.8				6 ~ 8	褐(G5YR 6/6)	に赤い褐(G5YR 5/4)	褐灰(G5YR 3/1)	良	粘土はやや粗。0.5mmの大砂粒を多く含む。繩網な全表面を多く含む。
416	S40	一括	繩文土器	深鉢	胴脚部					7 ~ 11	黄灰(G5Y 6/1)	明赤褐(G5YR 5/3)	灰黄(G5Y 6/2)	良	粘土はやや粗。0.5 ~ 1mmの大砂粒を多く含む。石英・長石が多い。
417	S40	一括	繩文土器	深鉢	胴上部					7 ~ 8	明赤褐(G5YR 5/6)	明赤褐(G5YR 5/6)	明赤褐(G5YR 5/6)	良	粘土はやや粗。0.5 ~ 1mmの大砂粒を多く含む。金剛石を多く含む。
418	S40	一括	繩文土器	深鉢	胴 部					11 ~ 15	明赤褐(G5YR 5/8)	明赤褐(G5YR 5/8)	明赤褐(G5YR 5/8)	良	粘土はやや粗。0.5mmの大砂粒を多く含む。繩網な全表面を多く含む。
419	S40	一括	繩文土器	深鉢	頭脚部					6 ~ 11	に赤い赤褐(G5YR 5/4)	に赤い赤褐(G5YR 4/4)	明赤褐(G5YR 5/8)	良	粘土は緻密。0.5 ~ 1mmの大砂粒を含む。繩網な全表面をまばらに含む。
420	S40	一括	繩文土器	深鉢	胴 部					9 ~ 10	黑褐(G5Y 3/1)	灰黄褐(G5YR 4/2)	灰黄褐(G5YR 4/2)	良	粘土はやや粗。0.5mmの大砂粒を多く含む。角開口を多く含む。
421	S40	一括	繩文土器	深鉢	胴上部					6.0	黑(G5YR 2/1)	に赤い褐(G5YR 4/4)	明赤褐(G5YR 3/8)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を多く含む。繩網な全表面をまばらに含む。
422	S40	一括	繩文土器	鉢	胴上部					5 ~ 7.5	水灰(G5YR 4/6)	に赤い褐(G5YR 5/4)	に赤い褐(G5YR 5/4)	良	粘土はやや粗。0.5 ~ 1mmの大砂粒を多く含む。繩網な全表面をまばらに含む。
423	S40	一括	繩文土器	深鉢	胴下部					4 ~ 7	褐灰(G5YR 4/1)	明赤褐(G5YR 5/6)	明赤褐(G5YR 5/6)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。繩網な全表面を含む。
424	S40	一括	繩文土器	鉢	胴上部					6 ~ 9	水灰(G5YR 4/6)	明赤褐(G5YR 3/3)	水灰(G5YR 3/3)	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。
425	S40	一括	繩文土器	鉢	胴上部					6 ~ 10	明赤褐(G5YR 5/8)	明赤褐(G5YR 5/8)	明赤褐(G5YR 5/8)	良	粘土はやや粗。0.5 ~ 1mmの大砂粒を多く含む。繩網な全表面を多く含む。

遺物番号	調査次第等	出土緯	遺物種	器種	部位	法量				色調			焼成	備考	
						口径(cm)	頭径(cm)	胴径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	器厚(mm)	内面	外面		
426 S40	一括	繩文土器	鉢	胴部						7~10	明赤褐色 (GYR 5-8)	明赤褐色 (GYR 5-8)	明赤褐色 (GYR 5-8)	良	胎土は緻密。0.5mm大の砂粒を含む。微細な全赤母をまばらに含む。
427 S40	一括	繩文土器	鉢	胴上部						5~12	に赤い黄褐色 (GYR 6-4)	灰青褐色 (GYR 5-2)	灰青褐色 (GYR 5-2)	良	胎土は緻密。0.5~2mm大の砂粒を含む。微細な全赤母・角閃石を含む。
428 S40	一括	繩文土器	鉢	胴部						7.0	に赤い黄褐色 (GYR 6-4)	に赤い黄褐色 (GYR 6-5)	に赤い黄褐色 (GYR 6-5)	良	胎土は緻密。微選された粘土を用意。微細な全赤母を含む。
429 S40	一括	繩文土器	鉢	胴部						6~7	黒褐色 (GYR 3-7)	黒褐色 (GYR 3-7)	黒褐色 (GYR 3-7)	良	胎土は緻密。0.5mm大の砂粒を含む。
430 S40	一括	繩文土器	深鉢	胴部						7~8	に赤い黄褐色 (GYR 7-3)	に赤い黄褐色 (GYR 7-3)	に赤い黄褐色 (GYR 7-3)	良	胎土は緻密。0.5~2mm大の砂粒を含む。
431 S40	一括	繩文土器	鉢	胴側部		21.4				8~10	に赤い黄褐色 (GYR 6-4)	に赤い黄褐色 (GYR 5-3)	黒 (GYR 2-1)	良	胎土はやや粗。0.5~1mm大の砂粒を多く含む。石英・長石が多い。
432 S40	一括	繩文土器	深鉢	口縁部						11~13	明赤褐色 (GYR 5-6)	明赤褐色 (GYR 3-2)	明赤褐色 (GYR 5-6)	良	胎土は緻密。0.5mm大の砂粒を多く含む。微細な全赤母を多く含む。
433 S40	一括	繩文土器	鉢	口縁部						6~8	赤褐色 (GYR 4-6)	に赤い赤褐色 (GYR 5-4)	に赤い赤褐色 (GYR 5-4)	良	胎土は緻密。0.5mm大の砂粒を含む。
434 S40	一括	繩文土器	深鉢	頭部						8~12	明赤褐色 (GYR 5-6)	明赤褐色 (GYR 5-6)	明赤褐色 (GYR 5-6)	良	胎土はやや粗。0.5~1mm大の砂粒を含む。微細な全赤母を含む。
435 S40	一括	繩文土器	深鉢	胴上部						11.0	明赤褐色 (GYR 5-6)	明赤褐色 (GYR 5-6)	明赤褐色 (GYR 5-6)	良	胎土は緻密。0.5mm大の砂粒を含む。微細な全赤母を含む。
436 S40	一括	繩文土器	鉢	頭側部						5~8	明褐色 (GYR 5-6)	明褐色 (GYR 5-6)	黒褐色 (GYR 3-1)	良	胎土はやや粗。0.5mm大の砂粒を多く含む。微細な全赤母・角閃石を含む。
437 S40	一括	繩文土器	鉢	頭側部						6~8	明赤褐色 (GYR 5-6)	灰褐色 (GYR 4-2)	黒褐色 (GYR 3-1)	良	胎土は緻密。0.5~1mm大の砂粒を含む。微細な全赤母・角閃石をまばらに含む。
438 S40	一括	繩文土器	鉢	頭側部						5~8	明赤褐色 (GYR 6-6)	明赤褐色 (GYR 6-6)	灰褐色 (GYR 6-2)	良	胎土はやや粗。0.5~1mm大の砂粒を多く含む。微細な全赤母を含む。
439 S40	一括	繩文土器	鉢	胴部						6~6.5	灰褐色 (GYR 4-2)	に赤い黄褐色 (GYR 5-2)	に赤い黄褐色 (GYR 5-2)	良	胎土はやや粗。0.5mm大の砂粒を多く含む。
440 S40	一括	繩文土器	深鉢	胴部						6~11	に赤い黄褐色 (GYR 6-4)	明赤褐色 (GYR 5-8)	灰褐色 (GYR 5-2)	良	胎土はやや粗。0.5~2mm大の砂粒を多く含む。微細な全赤母を含む。
441 S40	一括	繩文土器	深鉢	頭側部						6~10	赤褐色 (GYR 4-6)	黒褐色 (GYR 3-1)	黒褐色 (GYR 3-1)	良	胎土はやや粗。0.5~2mm大の砂粒を多く含む。微細な全赤母をまばらに含む。
442 S40	一括	繩文土器	深鉢	胴下部						8~9	褐 (GYR 4-3)	明赤褐色 (GYR 5-6)	明赤褐色 (GYR 5-6)	良	胎土はやや粗。0.5mm大の砂粒を多く含む。微細な全赤母を多く含む。
443 S40	一括	繩文土器	鉢	口縁部	16.0					6~8	褐 (GYR 6-6)	褐 (GYR 6-6)	褐 (GYR 6-6)	不良	胎土はやや粗。0.5mm大の砂粒を含む。微細な全赤母を含む。
444 S40	一括	繩文土器	鉢	口縁部						6~15	灰褐色 (GYR 3-1)	明褐色 (GYR 5-6)	黒褐色 (GYR 3-1)	良	胎土は緻密。0.5~1mm大の砂粒を含む。微細な角閃石をまばらに含む。
445 S40	一括	繩文土器	深鉢	口縁部						5~10	灰褐色 (GYR 3-1)	灰青褐色 (GYR 5-2)	明赤褐色 (GYR 5-6)	良	胎土は粗。0.5~1mm大の砂粒を多く含む。微細な全赤母を含む。
446 S40	一括	繩文土器	鉢	口縁部	7.4					5.0	明赤褐色 (GYR 5-6)	明赤褐色 (GYR 5-6)	明赤褐色 (GYR 5-6)	良	胎土は緻密。0.5mm大の砂粒を含む。角閃石をまばらに含む。
447 S40	一括	繩文土器	深鉢	口縁部						8~10	に赤い黄褐色 (GYR 6-4)	に赤い黄褐色 (GYR 6-4)	灰褐色 (GYR 5-2)	良	胎土は緻密。0.5mm大の砂粒を多く含む。微細な角閃石を多く含む。
448 S40	一括	繩文土器	深鉢	口縁部						7~10	明赤褐色 (GYR 5-6)	明赤褐色 (GYR 5-6)	明赤褐色 (GYR 5-6)	良	胎土はやや粗。0.5mm大の砂粒を多く含む。角閃石を多く含む。
449 S40	一括	繩文土器	深鉢	口縁部						6~10	明赤褐色 (GYR 6-4)	に赤い赤褐色 (GYR 4-0)	に赤い赤褐色 (GYR 4-0)	良	胎土はやや粗。0.5mm大の砂粒を多く含む。微細な全赤母・角閃石を多く含む。
450 S40	一括	繩文土器	浅鉢	口縁部						9.0	に赤い黄褐色 (GYR 6-4)	に赤い黄褐色 (GYR 6-4)	に赤い黄褐色 (GYR 6-4)	良	胎土は緻密。精選された粘土を使用。微細な全赤母を含む。

遺物番号	調査次第等	出土緯	遺物種	器種	部位	法量				色調			焼成	備考	
						口径(cm)	頭径(cm)	胴径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	器厚(mm)	内面	外面		
451 S40	一括	繩文土器	鉢	口縁部						10.0	明褐 GYR 5-6	明褐 GYR 5-6	明褐 GYR 5-6	良	粘土は緻密。0.5mm大の砂粒を含む。歩道。
452 S40	一括	繩文土器	深鉢	口縁部	34.0					7~9	にじみ・褐色 GYR 5-4	明赤褐 GYR 5-6	暗赤褐 GYR 6-6	良	粘土は緻密。0.5mm大の砂粒を含む。微細な全雲母・角閃石を含む。
453 S40	一括	繩文土器	深鉢	腹部	39.4					6~9	にじみ・赤褐色 GYR 5-6	にじみ・黄褐色 GYR 6-4	褐灰 GYR 4-1	良	粘土は緻密。0.5~1mm大の砂粒を含む。微細な全雲母・角閃石を含む。
454 S40	一括	繩文土器	鉢	胴 部						6~7	明赤褐 GYR 5-5	褐 GYR 6-3	灰黄 GYR 6-2	良	粘土は緻密。0.5mm大の砂粒を含む。微細な全雲母・角閃石を多く含む。
455 S40	一括	繩文土器	深鉢	胴 部						7~9	にじみ・黄褐色 GYR 6-4	褐 GYR 6-6	褐 GYR 6-6	良	粘土は緻密。0.5mm大の砂粒を含む。微細な全雲母・角閃石を含む。
456 S40	一括	繩文土器	深鉢	胴 部						5~7	赤褐 GYR 4-6	赤褐 GYR 4-6	黑褐 GYR 2-1	良	粘土は粗。0.5~1mm大の砂粒を多く含む。微細な全雲母を多く含む。
457 S40	一括	繩文土器	鉢	胴 部						7~8	黒褐 GYR 3-1	にじみ・褐 GYR 6-4	黒褐 GYR 3-1	良	粘土はやや粗。0.5mm大の砂粒を多く含む。角閃石を多く含む。
458 S40	一括	繩文土器	鉢	胴上部						6~8	褐 GYR 7-6	褐 GYR 6-6	褐 GYR 6-6	良	粘土は緻密。2~3mmの複数をまばらに含む。微細な全雲母を多く含む。
459 S40	一括	繩文土器	浅鉢	胴 部						8~9	灰褐 GYR 4-2	灰褐 GYR 4-2	灰褐 GYR 4-2	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。微細な全雲母を含む。
460 S40	一括	繩文土器	深鉢	胴下部						8~9	黒褐 GYR 3-1	黒褐 GYR 3-1	褐 GYR 6-6	良	粘土は緻密。0.5mm大の砂粒を含む。
461 S40	一括	繩文土器	深鉢	胴下部						6.0	黒 GYR 2-1	黒 GYR 2-1	黒 GYR 2-1	良	粘土は緻密。比較的精選された粘土を使用。微細な全雲母を含む。
462 S40	一括	繩文土器	深鉢	胴下部						9~11	明赤褐 GYR 5-5	明赤褐 GYR 5-5	黑褐 GYR 2-1	良	粘土はやや粗。0.5~1mm大の砂粒を含む。微細な全雲母・角閃石を多く含む。
463 S40	一括	弥生土器	甕	頭胴部	32.8					7~9	明黄褐 GYR 6-6	褐 GYR 6-6	にじみ・黄 GYR 6-4	良	粘土はやや粗。0.5~1mm大の砂粒を多く含む。微細な全雲母を含む。
464 S40	一括	繩文土器	深鉢	底 部		11.4				6.5~9	褐 GYR 6-6	褐 GYR 6-6	褐 GYR 6-6	良	粘土はやや粗。0.5~1mm大の砂粒を含む。微細な全雲母・角閃石を含む。
465 S40	一括	繩文土器	深鉢	底 部		13.6				10~12	赤褐 GYR 4-8	明赤褐 GYR 5-6	明赤褐 GYR 5-6	良	粘土は緻密。0.5mm大の砂粒を多く含む。微細な全雲母を多く含む。
466 S40	一括	繩文土器	深鉢	底 部		10.0				5.5~8	褐灰 GYR 4-5	明赤褐 GYR 5-5	明赤褐 GYR 5-5	良	粘土はやや粗。0.5mm大の砂粒を多く含む。
467 S40	一括	繩文土器	鉢	口縁部						8~10	明赤褐 GYR 5-6	明赤褐 GYR 5-6	明赤褐 GYR 5-6	良	粘土は緻密。0.5~1mm大の砂粒を含む。
468 S40	一括	繩文土器	鉢	口縁部						6~8	黄褐 GYR 6-4	にじみ・黄褐色 GYR 6-4	褐灰 GYR 4-1	良	粘土は緻密。0.5~1mm大の砂粒を含む。微細な全雲母・角閃石を含む。
469 S40	一括	繩文土器	鉢	口縁部						9.0	黒褐 GYR 3-2	褐 GYR 6-6	褐 GYR 6-6	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。微細な全雲母・角閃石を多く含む。
470 S40	一括	繩文土器	浅鉢	口縁部	22.4	36.2				7~10	にじみ・黄褐色 GYR 7-2	明黄褐 GYR 6-6	褐灰 GYR 4-1	不良	粘土は緻密。微細な全雲母を保有しています。
471 S40	一括	繩文土器	鉢	口縁部	26.6					6~8	褐 GYR 6-6	褐 GYR 6-6	褐 GYR 4-1	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。微細な全雲母を多量に含む。
472 S40	一括	繩文土器	浅鉢	口縁部	24.0					8~9	明赤褐 GYR 5-6	明赤褐 GYR 5-6	明赤褐 GYR 5-6	不良	粘土は緻密。1~3mm大の複数を保有しています。
473 S40	一括	繩文土器	深鉢	口縁部						8.0	にじみ・赤褐 GYR 4-1	にじみ・黄褐色 GYR 6-4	にじみ・黄褐色 GYR 6-4	良	粘土は緻密。0.5~1mm大の円錐を含む。
474 S40	一括	繩文土器	鉢	胴上部						9~11	にじみ・赤褐 GYR 5-6	にじみ・赤褐 GYR 5-6	黑褐 GYR 3-1	良	粘土を含む。微細な全雲母・角閃石を多く含む。
475 S40	一括	繩文土器	甕口付土器?	胴 部		12.4				5~8	灰黄褐 GYR 5-2	灰黄褐 GYR 5-2	にじみ・黄褐色 GYR 7-4	良	粘土は緻密。0.5mm大の砂粒をまばらに含む。

遺物番号	調査次元等	出土経緯	遺物種類	器種	部位	法量				色調			焼成	備考	
						口径(cm)	頭径(cm)	胴径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	器厚(mm)	内面	外面		
476 S40	一括	繩文土器	鉢	胴上部						8~9	に赤い黄褐色 GYR 5~6	に赤い黄褐色 GYR 5~6	に赤い黄褐色 GYR 5~6	良	粘土は緻密。~3mm大の砂粒を含む。精選された粘土を使用。金雲母・角閃石が多く含む。
477 S40	一括	繩文土器	壺	口縁部	126	126				6~7	暗褐色 GYR 6~7	暗褐色 GYR 6~7	暗褐色 GYR 6~7	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。徐めて微細な全雲母を多く含む。
478 S40	一括	繩文土器	浅鉢	底 部					10.0	9.0	オレンジーブラウン GYR 3~4	橙褐色 GYR 6~7	に赤い黄褐色 GYR 7~8	良	粘土は緻密。0.5mm大の砂粒を含む。
479 S40	一括	弥生土器	壺	胴 部						5~6	明ホタル GYR 5~6	明ホタル GYR 5~6	明ホタル GYR 6~7	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。
480 S40	一括	弥生土器	壺	胴上部						6~10	明ホタル GYR 5~6	明ホタル GYR 5~6	橙褐色 GYR 6~7	良	粘土は緻密。1mm大の砂粒を多く含む。
481 S40	一括	弥生土器	壺	胴 部						5~6	明ホタル GYR 5~6	明ホタル GYR 5~6	明ホタル GYR 5~6	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。画面左に金雲母・角閃石を含む。
482 S40	一括	弥生土器	壺	底部付近						11~14	明ホタル GYR 5~6	明ホタル GYR 5~6	明ホタル GYR 5~6	良	粘土は緻密。0.5~3mm大の砂粒を含む。微細な全雲母・角閃石を含む。
483 S40	一括	土器	壺	底 部						4~5	明ホタル GYR 5~6	に赤い橙 GYR 6~7	に赤い橙 GYR 6~7	良	粘土は緻密。0.5mm大の砂粒を多く含む。微細な全雲母を含む。
484 S40	一括	瓦器	壺	口縁部	11.8					4.5~5	灰白 GY 7/1	灰白 GY 7/1	灰白 GY 7/1	不良	粘土は緻密。
485 3	一括	繩文土器	鉢	胴 部						6~9	に赤い黄褐色 GYR 7~7.5	に赤い黄褐色 GYR 7~7.5	に赤い黄褐色 GYR 7~7.5	良	粘土は緻密。0.5mm大の砂粒を多く含む。
486 3	一括	繩文土器	深鉢	口縁部	51.0					9~13	に赤い黄褐色 GYR 6~6.5	に赤い黄褐色 GYR 5~5.5	に赤い黄褐色 GYR 5~5.5	良	粘土は緻密。微細な全雲母を保有する。
487 3	一括	繩文土器	鉢	口縁部	36.0					8~10	に赤い黄褐色 GYR 5~5.5	黒褐色 GYR 3~3.5	黒褐色 GYR 3~3.5	良	粘土は緻密。0.5mm大の砂粒を多く含む。3mm大の雜有物。角閃石を多く含む。
488 3	一括	繩文土器	鉢	口縁部	48.0					7~14	黒褐色 GYR 3~3.5	灰褐色 GYR 4~4.5	黒褐色 GYR 3~3.5	良	粘土は緻密。0.5mm大の砂粒を多く含む。精選された粘土を使用。
489 3	一括	繩文土器	鉢	口縁部	38.0					7~10.5	黒褐色 GYR 3~3.5	黒褐色 GYR 3~3.5	黒褐色 GYR 3~3.5	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。画面左に角閃石を含む。
490 3	一括	繩文土器	深鉢	口~胴部	34.0					7.5~13.5	に赤い黄褐色 GYR 5~5.5	灰褐色 GYR 4~4.5	灰褐色 GYR 4~4.5	良	粘土は緻密。0.5~1mm大の砂粒を含む。微細な全雲母を多く含む。
491 3	一括	繩文土器	鉢	口縁部	31.0					6~15	褐 GYR 6~6.5	褐 GYR 6~6.5	褐 GYR 6~6.5	良	粘土は緻密。0.5mm大の砂粒を多く含む。長石及び微細な全雲母が目につく。
492 3	一括	繩文土器	鉢	口縁部	29.0					5~12.5	明ホタル GYR 5~5.5	明ホタル GYR 5~5.5	明ホタル GYR 2~2.5	良	粘土は緻密。0.5mm大の砂粒を多く含む。微細な全雲母が多い。
493 3	一括	繩文土器	鉢	口縁部	40.0					4.5~10.5	褐 GYR 6~6.5	褐 GYR 4~4.5	褐 GYR 4~4.5	良	粘土は緻密。0.5~1mm大の砂粒を多く含む。長石・金雲母が多い。
494 3	一括	繩文土器	鉢	口縁部	30.4					6~18	灰褐色 GYR 5~5.5	に赤い黄褐色 GYR 4~4.5	灰褐色 GYR 4~4.5	良	粘土は緻密。0.5mm大の砂粒を多く含む。
495 3	一括	繩文土器	鉢	口縁部	36.4					6~17	に赤い黄褐色 GYR 6~6.5	灰褐色 GYR 4~4.5	灰褐色 GYR 6~6.5	良	粘土は緻密。0.5mm大の砂粒を多く含む。微細な全雲母が非常に目につく。
496 3	一括	繩文土器	深鉢	口縁部						9~15	明ホタル GYR 5~5.5	明ホタル GYR 5~5.5	明ホタル GYR 5~5.5	良	粘土は緻密。0.5~1mm大の砂粒を含む。微細な全雲母を含む。
497 3	一括	繩文土器	深鉢	口縁部						10.0	灰褐色 GYR 7~7.5	灰褐色 GYR 7~7.5	灰褐色 GYR 7~7.5	良	粘土は緻密。0.5mm大の砂粒を多く含む。角閃石が目立つ。
498 3	一括	繩文土器	深鉢	口縁部	36.0					8~10.5	赤褐色 GYR 4~4.5	黒褐色 GYR 3~3.5	明ホタル GYR 5~5.5	良	粘土は緻密。0.5~1mm大の砂粒を多く含む。微細な全雲母を保有する。
499 3	一括	繩文土器	鉢	口縁部						8~14	明ホタル GYR 5~6	に赤い黄褐色 GYR 5~5.5	赤褐色 GYR 4~4.5	良	粘土は緻密。0.5~1mm大の砂粒を多く含む。長石及び金雲母が目につく。
500 3	一括	繩文土器	深鉢	口縁部						8~13.5	灰褐色 GYR 4~4.5	明ホタル GYR 5~6	明ホタル GYR 5~6	良	粘土は緻密。0.5~1mm大の砂粒を多く含む。

遺物番号	調査次第	出土経緯	遺物種	器種	部位	法量				色調			焼成	備考	
						口径(cm)	側径(cm)	胴径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	器厚(mm)	内面	外面		
501	3	一括 縄文土器	深鉢	口縁部						9~11	にぶい赤褐 (GYR 5/4)	黒灰 (GYR 4/1)	灰青褐 (GYR 4/2)	良	胎土はやや粗。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。石英・長石並びに微細な金雲母を多く含む。
502	3	一括 縄文土器	深鉢	口~胴部	330	270	318			7~9	にぶい褐色 (GYR 5/4)	明赤褐 (GYR 5/5)	明赤褐 (GYR 5/6)	良	胎土は緻密。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。微細な金雲母を多く含む。
503	3	一括 縄文土器	鉢	口縁部	30.4					65~125	にぶい褐色 (GYR 5/3)	にぶい褐色 (GYR 5/3)	明赤褐 (GYR 5/6)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。長石が目立つ。
504	3	一括 縄文土器	鉢	口縁部	27.2					8~11.5	にぶい黄褐 (GYR 6/4)	にぶい黄褐 (GYR 4/4)	黒褐 (GYR 3/1)	良	胎土は緻密。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。微細な金雲母・角閃石を多く含む。
505	3	一括 縄文土器	鉢	口縁部	32.3					65~135	にぶい褐色 (GYR 5/4)	にぶい褐色 (GYR 6/4)	にぶい黄褐 (GYR 6/4)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を多く含む。
506	3	一括 縄文土器	鉢	口縁部	43.6					7~12.5	にぶい赤褐 (GYR 5/4)	明赤褐 (GYR 5/5)	にぶい黄褐 (GYR 6/4)	良	胎土はやや粗。0.5mmの大砂粒を多く含む。長石が多い。
507	3	一括 縄文土器	鉢	口縁部						6~11.5	黒褐 (GYR 3/1)	黒 (GYR 4/6)	灰 (GYR 2/1)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を多く含む。焼造された粘土を使用。微細な金雲母を多く含む。
508	3	一括 縄文土器	鉢	口縁部	21.0					7~17	明赤褐 (GYR 5/6)	明赤褐 (GYR 5/6)	黒褐 (GYR 3/1)	良	胎土はやや粗。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。微細な金雲母を多く含む。
509	3	一括 縄文土器	鉢	口縁部	43.2					7~12	にぶい黄褐 (GYR 6/3)	にぶい黄褐 (GYR 6/3)	にぶい黄褐 (GYR 6/3)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を多く含む。
510	3	一括 縄文土器	鉢	口縁部	29.0					6.5~18	にぶい黄褐 (GYR 6/4)	にぶい黄褐 (GYR 4/3)	黒灰 (GYR 5/1)	良	胎土は緻密。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。焼造された粘土を使用。
511	3	一括 縄文土器	鉢	口縁部	31.8					8~10	橙 (GYR 6/6)	橙 (GYR 6/6)	にぶい黄褐 (GYR 7/4)	不良	胎土は粗。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。角閃石をばらばらに含む。
512	3	一括 縄文土器	鉢	口縁部	34.4					5.5~15	暗赤褐 (GYR 3/2)	暗赤褐 (GYR 3/2)	灰 (GYR 3/2)	良	胎土は緻密。
513	3	一括 縄文土器	鉢	口縁部	36.0					9.5~14.5	にぶい褐色 (GYR 6/3)	にぶい褐色 (GYR 6/3)	にぶい褐 (GYR 6/3)	良	胎土はやや粗。0.5mmの大砂粒を多く含む。
514	3	一括 縄文土器	鉢	把手						9~19	暗赤褐 (GYR 3/2)	にぶい赤褐 (GYR 5/3)	黒褐 (GYR 5/3)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な角閃石を含む。
515	3	一括 縄文土器	鉢	口縁部	38.0					6~9	黒灰 (GYR 4/1)	黒褐 (GYR 4/1)	灰 (GYR 4/2)	良	胎土は緻密。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。微細な金雲母・角閃石を多く含む。
516	3	一括 縄文土器	鉢	口縁部	28.4					6.5~20	にぶい黄褐 (GYR 4/4)	橙 (GYR 4/3)	灰 (GYR 5/3)	良	胎土は緻密。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。長石が多い。微細な金雲母・角閃石を多く含む。
517	3	一括 縄文土器	鉢	口縁部	46.0					11~13	浅黄 (GYR 7/4)	黄褐 (GYR 4/1)	暗黄褐 (GYR 4/2)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。角閃石・金雲母を多く含む。
518	3	一括 縄文土器	鉢	口縁部	33.4					6~12.5	黒褐 (GYR 3/1)	暗赤褐 (GYR 6/2)	黒灰 (GYR 5/1)	良	胎土は緻密。0.5~2mmの大砂粒を多く含む。
519	3	一括 縄文土器	鉢	口縁部	34.2					7~20	灰褐 (GYR 5/2)	にぶい橙 (GYR 6/3)	橙 (GYR 6/6)	良	胎土はやや粗。0.5mmの大砂粒を多く含む。角閃石を多く含む。
520	3	一括 縄文土器	鉢	口縁部						同上	同上	同上	同上	同上	
521	3	一括 縄文土器	鉢	口縁部	24.8					6.5~12.5	橙 (GYR 6/6)	橙 (GYR 6/6)	橙 (GYR 6/6)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。
522	3	一括 縄文土器	鉢	口縁部						9.5~15	にぶい黄褐 (GYR 5/3)	灰黄褐 (GYR 5/2)	灰黄褐 (GYR 5/2)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。金雲母を僅かに含む。
523	3	一括 縄文土器	深鉢	口~胴部	33.6					6~10	明赤褐 (GYR 5/6)	にぶい褐色 (GYR 5/4)	にぶい褐色 (GYR 6/4)	良	胎土は粗。0.5~1.5mmの大砂粒を多く含む。
524	3	一括 縄文土器	鉢	口縁部	43.0					8~13	明黄褐 (GYR 6/6)	黒褐 (GYR 3/1)	灰褐 (GYR 6/2)	良	胎土はやや粗。~0.5mmの大砂粒を多く含む。
525	3	一括 縄文土器	鉢	口縁部	27.8					5~12	にぶい黄褐 (GYR 7/3)	灰黄褐 (GYR 6/2)	灰黄褐 (GYR 6/2)	良	胎土は緻密。精選された粘土を使用。0.5mmの大砂粒を含む。角閃石及び金雲母を含む。

遺物番号	調査次第等	出土緯	遺物種	器種	部位	法量				色調			焼成	備考	
						口径(cm)	頭径(cm)	胴径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	器厚(mm)	内面	外面		
526	3 一括	繩文土器	鉢	口縁部	21.2					5.5 ~ 13	黒褐 (G5Y 3/1)	にぶい黄褐 (GYR 5~6)	黒褐 (G5Y 3/1)	良	粘土は緻密、精選された粘土を使用。微細な全玉母を含む。
527	3 一括	繩文土器	鉢	口縁部	17.8					8 ~ 11.5	にぶい黄褐 (GYR 5~6)	にぶい黄褐 (GYR 5~6)	灰黄 (GYR 6~7)	良	粘土は緻密、精選された粘土を使用。微細な全玉母を多く含む。
528	3 一括	繩文土器	深鉢	頭胴部		41.6				6.5 ~ 8	褐 (GYR 6~7)	褐 (GYR 6~7)	褐 (GYR 5~7)	良	粘土は緻密、精選された粘土を使用。微細な全玉母を含む。
529	3 一括	繩文土器	鉢	胴 部		35.8				9 ~ 10	褐 (GYR 6~7)	黒褐 (GYR 5~7)	明赤褐 (GYR 5~6)	良	粘土は緻密、1mmの大砂粒を僅かに含む。微細な全玉母を多く含む。
530	3 一括	繩文土器	鉢	胴 部						8 ~ 11	にぶい褐 (GYR 6~7)	黒褐 (GYR 3~4)	灰褐 (GYR 5~6)	良	粘土は緻密、精選された粘土を使用。微細な全玉母を含む。
531	3 一括	繩文土器	鉢	胴 部						5.5 ~ 9	褐 (GYR 5~6)	黄褐 (GYR 5~6)	黒褐 (GYR 3~4)	良	粘土は緻密。
532	3 一括	繩文土器	鉢	胴 部		56.8				9.5 ~ 15	にぶい黄褐 (GYR 7~8)	にぶい黄褐 (GYR 6~7)	にぶい黄褐 (GYR 6~7)	良	粘土は緻密、精選された粘土を使用。極めて大きな空隙。
533	3 一括	繩文土器	深鉢	胴 部						4.5 ~ 11	灰黄褐 (GYR 5~6)	にぶい赤褐 (GYR 5~6)	明赤褐 (GYR 5~6)	良	粘土はやや粗。0.5 ~ 1mmの大砂粒を多く含む。微細な全玉母、角凹石を多く含む。
534	3 一括	繩文土器	鉢	胴 部						8 ~ 13	灰黄褐 (GYR 5~6)	明赤褐 (GYR 5~6)	明赤褐 (GYR 5~6)	良	粘土をやや粗。0.5 ~ 1mmの大砂粒を多く含む。
535	3 一括	繩文土器	鉢	胴 部						6.5 ~ 10	明赤褐 (GYR 5~6)	明赤褐 (GYR 5~6)	明赤褐 (GYR 5~6)	良	粘土は緻密。
536	3 一括	繩文土器	深鉢	胴 部						6 ~ 11.5	にぶい黄褐 (GYR 6~7)	黒褐 (GYR 3~4)	赤 (GYR 5~6)	良	粘土は緻密。0.5 ~ 1mmの大砂粒を含む。
537	3 一括	繩文土器	深鉢	胴 部						5 ~ 8	灰褐 (GYR 4~5)	灰褐 (GYR 4~5)	明赤褐 (GYR 5~6)	良	粘土はやや粗。0.5 ~ 1mmの大砂粒を多く含む。微細な全玉母、角凹石を多く含む。
538	3 一括	繩文土器	鉢	胴 部		32.8				5.5 ~ 11	赤褐 (GYR 4~5)	赤褐 (GYR 4~5)	赤褐 (GYR 4~5)	良	粘土をやや粗。0.5mmの大砂粒を多く含む。
539	3 一括	繩文土器	鉢	口縁部	34.4					7 ~ 14.5	灰褐 (GYR 4~5)	明赤褐 (GYR 5~6)	にぶい褐 (GYR 7~8)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を僅かに含む。
540	3 一括	繩文土器	鉢	口縁部	48.6					6.5 ~ 9	黄褐 (G5Y 4/1)	灰褐 (GYR 4~2)	黄褐 (G5Y 4/1)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を多く含む。角凹石が立つ。
541	3 一括	繩文土器	鉢	口縁部	48.0					6 ~ 10	黒 (GYR 2~3)	明赤褐 (GYR 5~6)	にぶい黄褐 (GYR 6~7)	良	粘土は緻密。0.5 ~ 1mmの大砂粒を多く含む。長石が立つ。
542	3 一括	繩文土器	鉢	口縁部	7.2					6 ~ 7	にぶい黄褐 (GYR 7~8)	灰褐 (GYR 4~5)	にぶい黄褐 (GYR 7~8)	良	粘土は緻密。1mmの大粒を僅かに含む。
543	3 一括	繩文土器	深鉢	口縁部	38.0					7 ~ 10	浅黄 (G5Y 7~8)	褐 (GYR 6~7)	褐 (GYR 6~7)	良	粘土は緻密、精選された粘土を使用。
544	3 一括	繩文土器	鉢	口縁部	28.6					7.5 ~ 9	褐 (GYR 6~7)	褐 (GYR 6~7)	褐 (GYR 4~5)	良	粘土は緻密、精選された粘土を使用。微細な全玉母を多く含む。
545	3 一括	繩文土器	浅鉢	口縁部	18.6					6 ~ 10.5	にぶい褐 (GYR 5~6)	にぶい褐 (GYR 5~6)	黒褐 (GYR 3~4)	良	粘土は緻密、精選された粘土を使用。
546	3 一括	繩文土器	碗	口縁部	23.0					7 ~ 8	にぶい褐 (GYR 5~6)	にぶい褐 (GYR 5~6)	褐 (GYR 6~7)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を僅かに含む。精選された粘土を使用。微細な全玉母を多く含む。
547	3 一括	繩文土器	浅鉢	口縁部	32.2					7 ~ 10	にぶい褐 (GYR 7~8)	にぶい褐 (GYR 6~7)	黒褐 (GYR 3~4)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を僅かに含む。精選された粘土を使用。全玉母、角凹石を多く含む。
548	3 一括	繩文土器	深鉢	底 部		9.4				5 ~ 11.5	にぶい褐 (G5Y 6~7)	明赤褐 (GYR 5~6)	明赤褐 (GYR 5~6)	良	粘土は緻密。0.5 ~ 1mmの大砂粒を含む。
549	3 一括	繩文土器	洋口付土器?	口縁部	11.2					3 ~ 5.5	褐 (GYR 4~5)	にぶい褐 (GYR 6~7)	にぶい褐 (GYR 5~6)	良	粘土は緻密。0.5 ~ 1mmの大砂粒を含む。角凹石・全玉母を含む。
550	3 一括	繩文土器	甕	口縁部	18.2					6.5 ~ 8	褐 (GYR 6~7)	褐 (GYR 6~7)	にぶい褐 (GYR 6~7)	良	粘土は緻密。

遺物番号	調査次第等	出土緯経	遺物種類	器種	部位	法量				色調			焼成	備考	
						口径(cm)	頭径(cm)	胴径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	器厚(mm)	内面	外面		
551	3	一括	土製品	土瓶	完形	最大径 5.1	最大幅 4.4	最大厚 1.2	-	重量 28g	-	-	-	-	土器の破片を転用した様。
552	3	一括	石器	削器	完形	最大径 7.6	最大幅 9	最大厚 2.1	-	重量 276g	-	-	-	-	-
553	3	一括	石器	打丸石磨	完形	最大径 5.6	最大幅 5.2	最大厚 1.5	-	重量 68g	-	-	-	-	-
554	3	一括	骨角器	穿孔具	完形	残存長 5.4	残存幅 1.2	残存厚 0.9	-	重量 4g	-	-	-	-	-
555	3	一括	骨角器	貝輪	半分欠損	最大径 5.6	最大幅 3.7	最大厚 0.6	-	重量 4g	-	-	-	-	-
556	S.18	不明	石器	磨製石斧	体部	最大径 7.4	最大幅 3.8	最大厚 1.2	-	重量 40g	-	-	-	-	-
557	S.28	西原	織文土器	深鉢	口縁部					5~11	黒 G5YR 2/1)	黒 (G5YR 2/1)	黒 (G5YR 2/1)	良	粘土はやや粗。0.5mm以上の砂粒を多く含む。微細な全芸母を多く含む。
558	S.28	西原	織文土器	鉢	口縁部	18.2				4~6	赤褐色 (G5YR 3/2)	赤褐色 (G5YR 4/6)	赤黒 (G5YR 2/1)	良	粘土は緻密。0.5mm以上の砂粒を含む。微細な全芸母を多く含む。
559	S.28	西原	織文土器	深鉢	口縁部					6~11	暗赤褐色 (G5YR 3/2)	暗赤褐色 (G5YR 3/2)	暗赤褐色 (G5YR 3/2)	良	粘土はやや粗。0.5mm以上の砂粒を含む。微細な全芸母を多く含む。
560	S.28	西原	織文土器	深鉢	口縁部					5~7	赤褐色 (G5YR 4/8)	暗赤褐色 (G5YR 3/2)	暗赤褐色 (G5YR 3/2)	良	粘土はやや粗。0.5mm以上の砂粒を含む。
561	S.28	西原	織文土器	深鉢	口縁部	35.4				5~10	黒褐色 (G5YR 3/1)	明赤褐色 (G5YR 5/8)	黒褐色 (G5YR 5/8)	良	粘土は緻密。0.5~1mmの砂粒を含む。微細な全芸母にまばらに含む。
562	S.28	西原	織文土器	鉢	口縁部	12.0				4.0	赤褐色 (G5YR 4/8)	赤褐色 (G5YR 4/8)	赤黒 (G5YR 2/1)	良	粘土は緻密。0.5mm以上の砂粒を含む。
563	S.28	西原	織文土器	深鉢	口縁部					7~8	明赤褐色 (G5YR 5/8)	暗赤褐色 (G5YR 3/2)	明赤褐色 (G5YR 5/8)	良	粘土は緻密。0.5mm以上の砂粒を含む。微細な全芸母を含む。
564	S.28	豆	織文土器	深鉢	口縁部					5.5~8	灰褐色 (G5YR 5/2)	赤褐色 (G5YR 4/8)	灰褐色 (G5YR 5/4)	良	粘土は緻密。0.5~1mmの砂粒を含む。微細な全芸母を含む。
565	S.28	西原	織文土器	深鉢	口縁部					6~9	明赤褐色 (G5YR 5/6)	暗赤褐色 (G5YR 5/6)	明赤褐色 (G5YR 5/6)	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。微細な全芸母を多く含む。
566	S.28	西原	織文土器	深鉢	口縁部					5~9	黒褐色 (G5YR 3/1)	赤褐色 (G5YR 4/8)	赤褐色 (G5YR 4/8)	良	粘土は緻密。0.5mm以上の砂粒を含む。微細な全芸母を含む。
567	S.28	西原	織文土器	深鉢	口縁部					5~9	赤褐色 (G5YR 4/6)	赤褐色 (G5YR 4/6)	赤褐色 (G5YR 4/6)	良	粘土は緻密。0.5mm以上の砂粒を含む。微細な全芸母を僅に含む。
568	S.28	西原	織文土器	深鉢	胴 部					6~9	暗赤褐色 (G5YR 3/2)	暗赤褐色 (G5YR 3/2)	暗赤褐色 (G5YR 3/2)	良	粘土は緻密。0.5~1mmの砂粒を含む。微細な全芸母を僅かに含む。
569	S.28	西原	織文土器	深鉢	胴 部					5~10	明赤褐色 (G5YR 5/8)	明赤褐色 (G5YR 5/8)	明赤褐色 (G5YR 5/8)	良	粘土は緻密。0.5mm以上の砂粒を多く含む。微細な全芸母を多く含む。
570	S.28	西原	織文土器	深鉢	胴 部					5~10	赤褐色 (G5YR 4/8)	赤褐色 (G5YR 4/8)	赤褐色 (G5YR 4/8)	良	粘土はやや粗。0.5~1mmの砂粒を多く含む。微細な全芸母を含む。
571	S.28	西原	織文土器	深鉢	胴 部					6.5~15	赤褐色 (G5YR 4/8)	赤褐色 (G5YR 4/8)	黒褐色 (G5YR 2/1)	良	粘土は緻密。0.5~1mmの砂粒を多く含む。煥めて微細な全芸母を多基に含む。
572	S.28	西原	織文土器	鉢	胴 部					4~6	灰褐色 (G5YR 3/1)	明赤褐色 (G5YR 5/8)	黒褐色 (G5YR 3/1)	良	粘土は緻密。0.5~1mmの砂粒を多く含む。微細な全芸母を縮めて多く含む。
573	S.28	西原	織文土器	深鉢	胴 部					5~11	明赤褐色 (G5YR 5/8)	明赤褐色 (G5YR 5/8)	明赤褐色 (G5YR 5/8)	良	粘土は緻密。0.5~1mmの砂粒を多く含む。微細な全芸母・角雲母を多く含む。
574	S.28	西原	織文土器	鉢	胴 部					6~9	灰褐色 (G5YR 5/4)	灰褐色 (G5YR 5/4)	灰褐色 (G5YR 5/4)	良	粘土はやや粗。0.5~1mmの砂粒を多く含む。微細な全芸母を多く含む。
575	S.28	西原	織文土器	鉢	胴 部					5~7	明褐色 (G5YR 5/6)	赤褐色 (G5YR 3/1)	黒褐色 (G5YR 3/1)	良	粘土は緻密。0.5mm以上の砂粒を含む。微細な全芸母・角雲母を含む。

遺物番号	調査次第等	出土経緯	遺物種類	器種	部位	法量					色調			焼成	備考
						口径(cm)	頭径(cm)	胴径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	器厚(mm)	内面	外面	断面	
576	S50 5.28	西原	繩文土器	鉢	口～肩部	14.6	128	15.6		4～75	明赤褐色 GYR 5-6	明赤褐色 GYR 5-6	灰褐色 GYR 5-2	不良	胎土は緻密。0.5～1mmの大砂粒を含む。
577	S50 5.28	西原	繩文土器	鉢	口縁部					5～7	水褐色 GYR 4-8	赤褐色 GYR 4-8	赤褐色 GYR 4-8	不良	胎土は粗。0.5～1mmの大砂粒を多く含む。
578	S50 5.28	西原	繩文土器	鉢	口縁部					5～8	灰褐色 GYR 4-2	明赤褐色 GYR 5-6	明赤褐色 GYR 5-8	良	胎土はやや粗。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な金雲母を含む。
579	S50 5.28	西原	繩文土器	深鉢	口縁部					10～11	明褐色 GYR 5-8	明褐色 GYR 5-8	黒褐色 GYR 3-7	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な金雲母を多く含む。
580	S50 5.28	西原	繩文土器	鉢	口縁部					80	褐灰色 GYR 4-1	褐色 GYR 4-6	黑色 GYR 2-1	良	胎土は緻密。精選された胎土を使用。微細な金雲母を含む。
581	S50 5.28	西原	繩文土器	鉢	口縁部					6～8	にぶい黄褐色 GYR 5-3	にぶい黄褐色 GYR 6-3	にぶい褐色 GYR 6-4	良	胎土はやや粗。0.3mmの大砂粒を多く含む。微細な角閃石を僅かに含む。
582	S50 5.28	西原	繩文土器	鉢	胴 部					5～6	にぶい赤褐色 GYR 5-6	明赤褐色 GYR 5-8	赤褐色 GYR 2-1	良	胎土は緻密。0.5～1mmの大砂粒を含む。微細な金雲母を含む。
583	S50 5.28	西原	繩文土器	深鉢	胴 部					6～10	にぶい黄褐色 GYR 4-1	赤褐色 GYR 4-8	明黄色 GYR 6-6	良	胎土は粗。0.5～1mmの大砂粒を多く含む。微細な金雲母を多く含む。
584	S50 5.28	西原	繩文土器	深鉢	胴 部					6～7	褐灰色 GYR 4-1	黄褐色 GYR 5-6	黄褐色 GYR 5-6	良	胎土は緻密。0.5～1mmの大砂粒を多く含む。微細な金雲母を含む。
585	S50 5.28	西原	繩文土器	鉢	胴 部					5～7	灰褐色 GYR 4-2	赤褐色 GYR 4-6	赤褐色 GYR 4-6	良	胎土は緻密。精選された胎土を使用。微細な金雲母をまばらに含む。
586	S50 5.28	西原	繩文土器	鉢	口縁部					7～12	にぶい赤褐色 GYR 4-0	にぶい赤褐色 GYR 4-0	にぶい赤褐色 GYR 4-0	良	胎土は緻密。精選された胎土を使用。微細な金雲母を多く含む。
587	S50 5.28	西原	繩文土器	鉢	口縁部					6～7	赤褐色 GYR 4-6	赤褐色 GYR 4-6	赤褐色 GYR 4-6	不良	0.5mmの大砂粒を含む。微細な金雲母をまばらに含む。
588	S50 5.28	西原	繩文土器	鉢	胴下部	10.4				45～13	暗赤褐色 GYR 3-2	明褐色 GYR 5-6	赤褐色 GYR 4-8	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な金雲母を含む。
589	S50 5.28	西原	繩文土器	鉢	底 部					64	5～6 (GYR 3-1)	黑褐色 GYR 4-6	赤褐色 GYR 4-6	良	胎土は緻密。精選された胎土を使用。微細な金雲母を僅かに含む。
590	S50 5.28	西原	繩文土器	鉢	底 部	68				6～8	赤褐色 GYR 4-6	明赤褐色 GYR 5-6	灰褐色 GYR 4-2	良	胎土はやや粗。0.5mmの大砂粒を含む。微細な金雲母を多く含む。
591	S50 5.28	西原	繩文土器	浅鉢	底 部	7.8				8～10	褐色 GYR 5-6	明赤褐色 GYR 5-6	明赤褐色 GYR 5-6	良	胎土は緻密。精選された胎土を使用。微細な金雲母を多く含む。
592	S50 5.28	西原	繩文土器	浅鉢	口縁部	32.8				5～6	褐色 GYR 6-0	明赤褐色 GYR 5-6	にぶい赤褐色 GYR 6-3	良	胎土は緻密。精選された胎土を多量に含む。
593	SS2 6.5	ギンゴマニ	繩文土器	深鉢	口縁部					8～10	にぶい黄褐色 GYR 5-3	灰褐色 GYR 5-2	灰褐色 GYR 5-2	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を僅かに含む。微細な金雲母・角閃石をまばらに含む。
594	SS2 6.5	ギンゴマニ 山本	繩文土器	鉢	胴 部					9～10	にぶい黄褐色 GYR 5-3	灰褐色 GYR 5-2	灰褐色 GYR 5-2	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。
595	SS2 6.5	ギンゴマニ	繩文土器	鉢	口縁部					6.0	にぶい褐色 GYR 5-4	にぶい褐色 GYR 5-4	にぶい褐色 GYR 5-4	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な金雲母・角閃石をまばらに含む。
596	SS2 6.5	ギンゴマニ 森田	繩文土器	深鉢	口縁部	39.6				6～9	明赤褐色 GYR 5-6	黑褐色 GYR 3-1	黑褐色 GYR 3-1	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な金雲母を多く含む。
597	SS2 6.5	ギンゴマニ	繩文土器	深鉢	口縁部					5.5～9	明赤褐色 GYR 5-6	暗赤褐色 GYR 3-2	暗赤褐色 GYR 3-2	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な金雲母を僅かに含む。
598	SS2 6.5	ギンゴマニ	繩文土器	深鉢	口縁部					4～7	明赤褐色 GYR 5-6	灰褐色 GYR 4-2	にぶい褐色 GYR 6-4	良	胎土はやや粗。0.5～1mmの大砂粒を含む。微細な金雲母を多く含む。
599	SS2 6.5	ギンゴマニ	繩文土器	深鉢	口縁部					7～8	黒 (GYR 2-1)	黑褐色 (GYR 3-1)	黑褐色 (GYR 3-1)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な金雲母を僅かに含む。
600	SS2 6.5	ギンゴマニ	繩文土器	深鉢	口縁部					4～7	明赤褐色 GYR 5-6	明赤褐色 GYR 5-6	明赤褐色 GYR 5-6	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な金雲母を僅かに含む。

遺物番号	調査次第	出土経緯	遺物種類	器種	部位	法量				色調			焼成	備考	
						口径(cm)	頭径(cm)	胴径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	器厚(mm)	内面	外面		
601	S52 6.5	サンゴマス ホタルイ	織文土器	深鉢	口縁部	25.0				5~6.5	明赤褐色 (2SYR 5~6)	明赤褐色 (2SYR 5~6)	明赤褐色 (2SYR 5~6)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な金雲母を僅かに含む。
602	S52 6.5	サンゴマス ホタルイ	織文土器	深鉢	胴 部					6~13	暗赤褐色 (GYR 3~3)	暗赤褐色 (GYR 5~6)	暗赤褐色 (GYR 4~5)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な金雲母を僅かに含む。
603	S52 6.5	サンゴマス ホタルイ	織文土器	深鉢	頭部		21.6			5~9	赤褐色 (2SYR 4~6)	に赤い赤褐色 (2SYR 4~6)	に赤い赤褐色 (2SYR 4~6)	良	胎土はやや粗。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な金雲母を多く含む。
604	S52 6.5	サンゴマス ホタルイ	織文土器	深鉢	胴 部		26.8			8~10	赤褐色 (GYR 3~6)	赤褐色 (GYR 3~6)	赤褐色 (GYR 4~6)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な金雲母をまばらに含む。
605	S52 6.5	サンゴマス ホタルイ	織文土器	深鉢	頭部		23.4			6~10	暗赤褐色 (2SYR 3~3)	明赤褐色 (2SYR 5~6)	明赤褐色 (2SYR 5~6)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を僅かに含む。微細な金雲母・角閃石をぼんやりに含む。
606	S52 6.5	サンゴマス ホタルイ	織文土器	深鉢	胴 部					6~8	明赤褐色 (2SYR 5~6)	暗赤褐色 (2SYR 5~6)	明赤褐色 (2SYR 5~6)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な金雲母を多く含む。
607	S52 6.5	サンゴマス ホタルイ	織文土器	深鉢	胴 部					7~8	黒 (GYR 2~1)	暗赤褐色 (2SYR 3~1)	赤褐色 (2SYR 4~8)	良	胎土はやや粗。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な金雲母を含む。
608	S52 6.5	サンゴマス ホタルイ	織文土器	深鉢	胴 部					6~9	黒 (GYR 2~1)	灰褐色 (GYR 4~2)	明赤褐色 (2SYR 5~6)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な金雲母に混じる。
609	S52 6.5	サンゴマス ホタルイ	織文土器	深鉢	胴 部					6~9	黒褐色 (GYR 3~1)	明赤褐色 (SYR 5~8)	明赤褐色 (GYR 5~6)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な金雲母を多く含む。
610	S52 6.5	サンゴマス ホタルイ	織文土器	深鉢	胴 部					50	暗赤褐色 (GYR 3~6)	明赤褐色 (2SYR 5~8)	赤黒 (2SYR 2~1)	良	胎土は緻密。Intraの砂粒をぼんやりに含む。石英が目立つ。
611	S52 6.5	サンゴマス ホタルイ	織文土器	鉢	胴 部		20.6			50	暗赤褐色 (2SYR 3~1)	暗赤褐色 (SYR 3~2)	暗赤褐色 (GYR 3~2)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な金雲母を多く含む。
612	S52 6.5 山本	サンゴマス ホタルイ	織文土器	深鉢	口縁部					55~115	明赤褐色 (2SYR 5~6)	に赤い赤褐色 (GYR 4~5)	暗灰 (GYR 5~1)	良	胎土は緻密。0.5~1mmの大砂粒を含む。微細な金雲母を多く含む。
613	S52 6.5	サンゴマス ホタルイ	織文土器	深鉢	口縁部					9~10	明赤褐色 (GYR 5~6)	明赤褐色 (2SYR 5~6)	明赤褐色 (GYR 5~6)	良	胎土はやや粗。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。微細な金雲母を含む。
614	S52 6.5 山本	サンゴマス ホタルイ	織文土器	鉢	口縁部					4~7	灰褐色 (GYR 4~2)	褐 (GYR 4~3)	黒 (GYR 2~1)	良	胎土はやや粗。0.5~1mmの大砂粒を含む。微細な金雲母をまばらに含む。
615	S52 6.5	サンゴマス ホタルイ	織文土器	深鉢	口縁部					6~7	黒褐色 (GYR 3~1)	明赤褐色 (SYR 5~6)	黑褐色 (GYR 3~1)	良	胎土は緻密。稍選された胎土を使用。
616	S52 6.5	サンゴマス ホタルイ	織文土器	深鉢	口縁部					7~8	赤褐色 (GYR 4~4)	暗赤褐色 (2SYR 3~2)	明赤褐色 (2SYR 5~6)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な金雲母を多く含む。
617	S52 6.5	サンゴマス ホタルイ	織文土器	深鉢	口縁部					60	黒 (GYR 2~1)	赤褐色 (2SYR 4~6)	黒褐色 (GYR 2~1)	良	胎土はやや粗。0.5mmの大砂粒を含む。微細な角閃石を含む。
618	S52 6.5	サンゴマス ホタルイ	織文土器	深鉢	口縁部					7~9	明褐色 (GYR 5~6)	明赤褐色 (GYR 5~6)	明褐色 (GYR 5~6)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な金雲母を多く含む。
619	S52 6.5	サンゴマス ホタルイ	織文土器	鉢	口縁部					7~8	黒褐色 (GYR 2~1)	に赤い赤褐色 (GYR 6~6)	に赤い赤褐色 (GYR 6~6)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な金雲母を含む。
620	S52 6.5	サンゴマス ホタルイ	織文土器	深鉢	口縁部					5~6	明赤褐色 (2SYR 5~6)	明赤褐色 (2SYR 5~6)	に赤い赤褐色 (2SYR 4~4)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な金雲母を含む。
621	S52 6.5	サンゴマス ホタルイ	織文土器	深鉢	口縁部					9~10	黒褐色 (GYR 2~1)	黒褐色 (GYR 3~1)	黒褐色 (GYR 3~1)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な金雲母を僅かに含む。
622	S52 6.5 山本	サンゴマス ホタルイ	織文土器	鉢	口縁部					8~9	暗褐色 (GYR 3~4)	暗褐色 (GYR 3~4)	暗褐色 (GYR 3~4)	良	胎土は緻密。0.5~1mmの大砂粒を含む。微細な金雲母を含む。
623	S52 6.5 山本	サンゴマス ホタルイ	織文土器	深鉢	口縁部					5~7	灰褐色 (GYR 4~2)	暗褐色 (GYR 2~1)	黒 (GYR 2~1)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を多く含む。角閃石を僅かに含む。
624	S52 6.5	サンゴマス ホタルイ	織文土器	深鉢	口縁部					7~8	灰褐色 (GYR 4~2)	黒 (GYR 2~1)	黒 (GYR 2~1)	良	胎土は緻密。0.5~1mmの大砂粒を含む。
625	S52 6.5	サンゴマス ホタルイ	織文土器	鉢	口縁部	14.0				5~6	に赤い赤褐色 (GYR 6~7)	明赤褐色 (2SYR 5~6)	明赤褐色 (2SYR 5~6)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な金雲母を僅かに含む。

遺物番号	調査次第	出土緯経	遺物種	器種	部位	法量					色調			焼成	備考	
						口径(cm)	頭径(cm)	胴径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	器厚(mm)	内面	外面	断面		
626	S52 S5	ガシ コマ 山本	織文 土器	深鉢	口縁部	34.2				7 ~ 10	にぶい・黄褐色 (G5YR 6-4)	黒褐 (G5YR 3-1)	褐灰 (G5YR 4-1)	良	胎土は粗。0.5 ~ 2mmの大粒砂を多く含む。微細な全芸母・角閃石をばらに含む。	
627	S52 S5	ガシ コマ 山本	織文 土器	深鉢	胴 部					6 ~ 8	にぶい・褐 (G5YR 5-3)	明赤褐 (G5YR 5-3)	黒褐 (G5YR 3-1)	良	胎土はやや粗。0.5 ~ 1mmの大粒砂を多く含む。微細な全芸母を僅かに含む。	
628	S52 S5	ガシ コマ 山本	織文 土器	深鉢	胴 部					7.5 ~ 14	灰 (G5YR 4-1)	明赤褐 (G5YR 5-6)	明赤褐 (G5YR 5-6)	良	胎土はやや粗。0.5 ~ 1mmの大粒砂を多く含む。微細な全芸母をまばらに含む。	
629	S52 S5	ガシ コマ 山本	織文 土器	深鉢	胴 部					10 ~ 12	黒褐 (G5YR 3-2)	明赤褐 (G5YR 5-8)	明赤褐 (G5YR 5-8)	良	胎土は緻密。0.5 ~ 1mmの大粒砂を含む。微細な全芸母を僅かに含む。	
630	S52 S5	ガシ コマ 山本	織文 土器	深鉢	胴 部					6 ~ 10	にぶい赤褐 (G5YR 4-4)	にぶい赤褐 (G5YR 4-0)	にぶい赤褐 (G5YR 4-0)	良	胎土はやや粗。0.5mmの大粒砂を多く含む。微細な全芸母を多く含む。	
631	S52 S5	ガシ コマ 山本	織文 土器	深鉢	胴 部					6 ~ 9	黒褐 (G5YR 3-1)	明赤褐 (G5YR 5-6)	黒褐 (G5YR 3-1)	良	胎土はやや粗。0.5 ~ 1mmの大粒砂を多く含む。微細な全芸母・角閃石を含む。	
632	S52 S5	ガシ コマ マエ	織文 土器	鉢	胴 部					4 ~ 5	灰褐 (G5YR 4-2)	灰褐 (G5YR 4-2)	灰褐 (G5YR 4-2)	良	胎土は緻密。0.5mmの大粒砂を含む。	
633	S52 S5	シダ エヌ 山本	織文 土器	深鉢	口縁部	35.2				5 ~ 6	灰褐 (G5YR 4-2)	灰褐 (G5YR 4-2)	黑 (G5YR 2-1)	良	胎土は粗。0.5mmの大粒砂を多く含む。微細な全芸母を多く含む。	
634	S52 S5	ガシ コマ マエ	織文 土器	鉢	口縁部	23.2				5 ~ 6	黒褐 (G5YR 3-1)	にぶい褐 (G5YR 5-3)	黒褐 (G5YR 3-1)	良	胎土はやや粗。0.5mmの大粒砂を多く含む。	
635	S52	山	織文 土器	深鉢	口縁部					7 ~ 8	にぶい黄褐色 (G5YR 6-7)	明赤褐 (G5YR 5-6)	明赤褐 (G5YR 5-6)	良	胎土は緻密。0.5mmの大粒砂を含む。微細な全芸母を多く含む。	
636	S52 S5	ガシ コマ マエ	織文 土器	深鉢	底 部					8.6	8 ~ 11	灰黄褐 (G5YR 6-2)	灰黄褐 (G5YR 4-2)	黑 (G5YR 2-1)	良	胎土は粗。0.5 ~ 1mmの大粒砂を多く含む。微細な全芸母・角閃石を多く含む。
637	S52 S5	ガシ コマ マエ	織文 土器	鉢	底 部	7.4				5 ~ 7	明赤褐 (G5YR 5-6)	明赤褐 (G5YR 5-6)	黑褐 (G5YR 3-1)	良	胎土はやや粗。0.5mmの大粒砂を含む。微細な全芸母をまばらに含む。	
638	S52 S5	ガシ コマ マエ 山本	織文 土器	深鉢	底 部					8.8	6 ~ 7	褐灰 (G5YR 4-1)	にぶい赤褐 (G5YR 5-4)	褐灰 (G5YR 4-1)	良	胎土はやや粗。0.5 ~ 1mmの大粒砂を多く含む。微細な全芸母を含む。
639	S52 S5	ガシ コマ マエ	織文 土器	深鉢	底 部	11.4				8.0	褐灰 (G5YR 5-1)	にぶい赤褐 (G5YR 5-1)	黑褐 (G5YR 2-1)	良	胎土は緻密。0.5mmの大粒砂を含む。微細な全芸母を含む。	
640	S52 S5	ガシ コマ マエ	織文 土器	鉢	底 部					8.6	6 ~ 9	灰褐 (G5YR 3-1)	赤褐 (G5YR 4-8)	褐灰 (G5YR 3-1)	良	胎土は緻密。0.5mmの大粒砂を含む。微細な全芸母・角閃石を多く含む。
641	S52 S5	ガシ コマ マエ	織文 土器	鉢	底 部					5.8	6 ~ 9	にぶい褐 (G5YR 5-3)	明赤褐 (G5YR 5-3)	赤褐 (G5YR 2-1)	良	胎土は緻密。0.5mmの大粒砂を含む。微細な全芸母を僅かに含む。
642	S52 S5	ガシ コマ マエ	織文 土器	鉢	底 部					9.0	6 ~ 8	黑褐 (G5YR 3-1)	明赤褐 (G5YR 5-3)	黑褐 (G5YR 3-1)	良	胎土は緻密。0.5mmの大粒砂を僅かに含む。微細な全芸母を含む。
643	S52 S5	ガシ コマ マエ	織文 土器	深鉢	口縁部	25.0				9 ~ 10	にぶい・褐 (G5YR 5-4)	褐 (G5YR 4-3)	褐 (G5YR 4-2)	良	胎土は緻密。0.5mmの大粒砂を含む。微細な全芸母を含む。	
644	S52 S5	ガシ コマ 山本	織文 土器	浅鉢	口縁部	24.8				5.0	灰黄褐 (G5YR 5-2)	にぶい・黄褐色 (G5YR 6-3)	にぶい・黄褐色 (G5YR 6-3)	良	胎土は緻密。精選された胎土を使用。微細な全芸母・角閃石を含む。	
645	S52 S5	ガシ コマ マエ	織文 土器	深鉢	口縁部					7 ~ 8	明赤褐 (G5YR 5-6)	明赤褐 (G5YR 5-6)	明赤褐 (G5YR 5-6)	良	胎土は緻密。0.5mmの大粒砂を含む。微細な全芸母を含む。	
646	S52 S5	ガシ コマ 山本	織文 土器	深鉢	口縁部					6.5 ~ 8.5	黑 (G5YR 2-1)	赤褐 (G5YR 4-0)	赤褐 (G5YR 4-0)	良	胎土はやや粗。0.5mmの大粒砂を多く含む。微細な全芸母をまばらに含む。	
647	S52 S5	山	織文 土器	深鉢	口縁部					6 ~ 9	明赤褐 (G5YR 5-8)	暗赤褐 (G5YR 3-1)	暗赤褐 (G5YR 3-1)	良	胎土は緻密。0.5mmの大粒砂を含む。微細な全芸母を僅かに含む。半彩。	
648	S52 S5	山	織文 土器	浅鉢か 往口付 土器	胴 部	37.2				4 ~ 7	黑褐 (G5YR 3-1)	にぶい赤褐 (G5YR 5-3)	明赤褐 (G5YR 5-6)	良	胎土は緻密。0.5mmの大粒砂を含む。微細な全芸母をまばらに含む。	
649	S52 S5	ガシ コマ マエ	織文 土器	浅鉢か 往口付 土器	胴 部					5 ~ 6	黑 (G5YR 2-1)	にぶい赤褐 (G5YR 4-3)	赤褐 (G5YR 4-6)	良	胎土は緻密。0.5mmの大粒砂を含む。微細な全芸母をまばらに含む。	
650	S52 S5	ガシ コマ マエ	織文 土器	浅鉢か 往口付 土器	胴 部					31.4	にぶい・黄褐色 (G5YR 7-0)	にぶい・黄褐色 (G5YR 7-0)	不 良	胎土はやや粗。0.5 ~ 4mmの大粒砂を多く含む。		

遺物番号	調査次第等	出土緯経	遺物種	器種	部位	法量				色調			焼成	備考	
						口径(cm)	頭径(cm)	胴径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	器厚(mm)	内面	外面		
651	S52 B-5	ガシ ヨコエ 山本	織文土器	浅鉢	胴部					4~5	に赤い赤褐色 G5YR 4-3	赤褐色 G5YR 4-8	赤褐色 G5YR 3-1	良	粘土は緻密。0.5mm大の砂粒を含む。
652	S52 B-5	ガシ ヨコエ マコニ	織文土器	浅鉢	胴部	14.6				7~9	黒褐色 G5YR 2-1	黒褐色 G5YR 2-1	黒褐色 G5YR 2-1	良	粘土は緻密。0.5mm大の砂粒を含む。
653	S52 B-5	山本	織文土器	浅鉢	口縁部	32.4				90	に赤い黄褐色 G5YR 5-1	黒褐色 G5YR 6-4	黒褐色 G5YR 5-1	良	粘土は緻密。0.5mm大の砂粒を含む。微細な金芸母を内面に含む。
654	S52 B-5	山本	織文土器	鉢	底部	14.4				5~6	暗赤褐色 G5YR 3-2	暗赤褐色 G5YR 3-2	暗赤褐色 G5YR 3-6	良	粘土は緻密。0.5mm大の砂粒を含む。微細な金芸母を底面に含む。
655	S52 B-5	ガシ ヨコエ マコニ	瓦質土器	風炉か火鉢	口縁部	16.6				6~8	黒褐色 G5YR 5-1	に赤い黄褐色 G5YR 6-4	に赤い黄褐色 G5YR 6-4	良	粘土は緻密。選択された粘土を使用。微細な金芸母を多く含む。
656	2 B-2	赤孫	織文土器	深鉢	口縁部					7~12	に赤い赤褐色 G5YR 6-4	に赤い赤褐色 G5YR 5-0	に赤い赤褐色 G5YR 7-3	良	粘土は緻密。0.5~1mm大の砂粒を含む。微細な金芸母を底面に含む。
657	2 B-2	-	織文土器	鉢	口縁部					5~10	暗赤褐色 G5YR 3-6	暗赤褐色 G5YR 3-9	暗赤褐色 G5YR 3-6	良	粘土は緻密。選択された粘土を使用。微細な金芸母を内面に含む。
658	2 B-2	-	織文土器	深鉢	口縁部					5~17	黒褐色 G5YR 3-2	に赤い黄褐色 G5YR 5-4	黒褐色 G5YR 3-1	良	粘土は緻密。0.5mm大の砂粒を含む。
659	2 B-2	-	織文土器	深鉢	口縁部					11~30	灰褐色 G5YR 5-2	赤褐色 G5YR 4-6	赤褐色 G5YR 4-6	不良	粘土は粗。1mm大の砂粒を多く含む。石英・長石多し。
660	2 B-2	-	織文土器	深鉢	口縁部					5~10.5	に赤い赤褐色 G5YR 5-3	に赤い赤褐色 G5YR 4-4	に赤い赤褐色 G5YR 4-4	良	粘土はやや粗。0.5~1mm大の砂粒を多く含む。微細な金芸母を内面に含む。
661	2 B-2	-	織文土器	鉢	口縁部					90	明褐色 G5YR 5-8	明褐色 G5YR 5-8	明褐色 G5YR 5-8	良	粘土は緻密。0.5mm大の砂粒を含む。微細な角閃石をまばらに含む。
662	2 B-2	-	織文土器	深鉢	口縁部					9~14	暗褐色 G5YR 3-3	に赤い赤褐色 G5YR 4-4	暗褐色 G5YR 4-2	良	粘土は緻密。0.5mm大の砂粒を含む。微細な金芸母を底面に含む。
663	2 B-2	-	織文土器	深鉢	口縁部					8~12	黒褐色 G5YR 2-1	黒褐色 G5YR 2-1	赤褐色 G5YR 4-6	良	粘土はやや粗。0.5~1mm大の砂粒を多く含む。微細な金芸母を含む。
664	2 B-2	-	織文土器	深鉢	口縁部					9~13	に赤い黄褐色 G5YR 5-3	赤褐色 G5YR 5-3	赤褐色 G5YR 4-6	良	粘土はやや粗。0.5~1mm大の砂粒を含む。微細な金芸母を底面に含む。
665	2 B-2	-	織文土器	深鉢	口縁部					15.0	褐色 G5YR 4-3	暗赤褐色 G5YR 3-3	暗赤褐色 G5YR 5-8	不良	粘土は粗。0.5~1mm大の砂粒を多く含む。石英・長石・微細な金芸母を含む。
666	2 B-2	-	織文土器	深鉢	口縁部					6~9	暗赤褐色 G5YR 3-4	明褐色 G5YR 5-6	暗褐色 G5YR 5-2	良	粘土は緻密。1mm大の砂粒を底面に含む。
667	2 B-2	-	織文土器	深鉢	口縁部					8~12	暗赤褐色 G5YR 4-6	明褐色 G5YR 5-6	明褐色 G5YR 5-6	良	粘土はやや粗。0.5mm大の砂粒を多く含む。微細な金芸母を含む。
668	2 B-2	-	織文土器	鉢	口縁部					8~10	赤褐色 G5YR 4-8	赤褐色 G5YR 4-8	赤褐色 G5YR 4-8	良	粘土は緻密。0.5mm大の砂粒を含む。
669	2 B-2	-	織文土器	鉢	口縁部					6~13	明褐色 G5YR 5-6	明褐色 G5YR 5-6	明褐色 G5YR 5-6	良	粘土は緻密。0.5~1mm大の砂粒をまばらに含む。微細な金芸母・角閃石を含む。
670	2 B-2	-	織文土器	深鉢	口縁部					7~9	に赤い赤褐色 G5YR 5-3	暗褐色 G5YR 4-1	暗褐色 G5YR 4-1	良	粘土は緻密。0.5mm大の砂粒を多く含む。微細な金芸母・角閃石を多く含む。
671	S56 B-2	-	織文土器	深鉢	口縁部					9~12	黒褐色 G5YR 3-1	に赤い赤褐色 G5YR 5-4	に赤い赤褐色 G5YR 5-4	良	粘土は緻密。0.5mm大の砂粒を含む。微細な金芸母・角閃石を含む。
672	2 B-2	-	織文土器	深鉢	口縁部					6~13	に赤い赤褐色 G5YR 5-4	に赤い赤褐色 G5YR 5-4	に赤い赤褐色 G5YR 5-4	良	粘土はやや粗。0.5~1mm大の砂粒を含む。微細な金芸母を含む。
673	2 B-2	-	織文土器	鉢	口縁部	17.0				9~10	黒褐色 G5YR 2-1	明褐色 G5YR 2-1	明褐色 G5YR 5-6	良	粘土は緻密。0.5~3mm大の砂粒を含む。微細な金芸母・角閃石を含む。
674	2 B-2	-	織文土器	深鉢	口縁部					7~11	暗赤褐色 G5YR 5-6	明褐色 G5YR 5-6	明褐色 G5YR 5-6	不良	粘土は緻密。0.5mm大の砂粒を含む。微細な金芸母を底面に含む。
675	S56 B-2	-	織文土器	深鉢	口縁部					8~9	に赤い赤褐色 G5YR 5-4	黒褐色 G5YR 4-3	黒褐色 G5YR 4-3	良	粘土は緻密。0.5mm大の砂粒を多く含む。微細な金芸母を底面に含む。

遺物番号	調査次第等	出土経緯	遺物種	器種	部位	法量			色調			焼成	備考		
						口径(cm)	頭径(cm)	胴径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	厚さ(mm)	内面	外面	断面	
676	3 B-22	-	繩文土器	深鉢	口縁部					6~16	赤褐色 GYR 4/8	赤褐色 GYR 4/8	赤褐色 GYR 4/8	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全芸母を多く含む。
677	3 B-22	-	繩文土器	深鉢	口縁部					4~6	黒褐色 (GYR 3/1)	に赤い黄褐色 (GYR 5/3)	に赤い黄褐色 (GYR 5/3)	良	胎土は緻密。精選された粘土を使用。極めて微細な全芸母を多く含む。
678	3 B-22	-	繩文土器	鉢	胴 部					10~11	黒褐色 GYR 3/1	黒褐色 GYR 4/3	黒褐色 GYR 4/3	良	胎土は緻密。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母・角閃石を含む。
679	3 B-22	-	繩文土器	深鉢	胴 部					7~8	赤褐色 (GYR 4/8)	赤褐色 (GYR 3/2)	赤褐色 (GYR 3/2)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。
680	3 B-22	-	繩文土器	鉢	胴 部					9~10	に赤い黄褐色 (GYR 7/2)	に赤い黄褐色 (GYR 7/2)	暗灰褐色 (GYR 4/1)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母・角閃石を含む。
681	2 B-22	-	繩文土器	深鉢	胴 部					6~10	赤褐色 (GYR 4/6)	に赤い黄褐色 (GYR 4/6)	赤褐色 (GYR 4/6)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全芸母を僅かに含む。
682	3 B-22	-	繩文土器	鉢	胴 部					7~8	に赤い黄褐色 GYR 5/4	黒褐色 GYR 2/1	黒褐色 GYR 4/2	良	胎土は緻密。精選された粘土を使用。微細な全芸母を僅かに含む。
683	3 B-22	-	繩文土器	浅鉢	胴 部					8~9	灰褐色 (GYR 6/6)	褐 (GYR 6/6)	褐 (GYR 6/6)	良	胎土は緻密。精選された粘土を使用。微細な全芸母・角閃石を多く含む。
684	3 B-22	-	繩文土器	浅鉢	胴 部					6~9	灰褐色 (GYR 2/1)	黒褐色 (GYR 2/1)	に赤い黄褐色 GYR 5/3	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全芸母・角閃石を含む。
685	2 B-22	-	繩文土器	深鉢	胴 部	416				5~8	に赤い黄褐色 GYR 5/4	明赤褐色 (GYR 5/8)	暗灰褐色 (GYR 4/1)	不良	胎土は緻密。精選された粘土を使用。極めて微細な全芸母を多く含む。
686	3 B-22	-	繩文土器	深鉢	胴 部					10~15	明赤褐色 (GYR 5/6)	暗赤褐色 (GYR 3/2)	明赤褐色 (GYR 5/6)	良	胎土はやや粗。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母をまばらに含む。
687	S56	-	繩文土器	深鉢	胴 部					5~8	赤褐色 (GYR 4/6)	赤褐色 (GYR 4/6)	黒褐色 (GYR 3/1)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。極めて微細な全芸母を多く含む。
688	3 B-22	-	繩文土器	深鉢	胴 部					6~8	黒褐色 (GYR 2/1)	赤褐色 (GYR 4/6)	黒褐色 (GYR 3/1)	良	胎土はやや粗。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。
689	3 B-22	-	繩文土器	鉢	強肩部					11~13	に赤い黄褐色 GYR 4/3	明褐色 (GYR 5/6)	に赤い黄褐色 GYR 5/3	良	胎土はやや粗。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母を極端に含む。
690	S56	-	繩文土器	鉢	胴 部					11.0	黒褐色 (GYR 4/1)	に赤い黄褐色 GYR 5/4	暗灰褐色 (GYR 5/1)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全芸母・角閃石を含む。
691	S56	-	繩文土器	鉢	胴 部					5~7	黒褐色 (GYR 3/1)	に赤い黄褐色 (GYR 5/4)	に赤い黄褐色 (GYR 5/4)	良	胎土はやや粗。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母を僅かに含む。
692	3 B-22	-	繩文土器	深鉢	胴 部					6~7	黒褐色 (GYR 3/1)	に赤い黄褐色 GYR 4/3	黒褐色 (GYR 3/1)	良	胎土はやや粗。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母を多量に含む。
693	3 B-22	-	繩文土器	鉢	胴 部					9~10	灰褐色 (GYR 6/2)	に赤い黄褐色 (GYR 6/2)	暗灰褐色 (GYR 4/1)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。極めて微細な全芸母と角閃石を含む。
694	3 B-22	-	繩文土器	鉢	胴 部					7~8	に赤い黄褐色 GYR 5/3	黒褐色 (GYR 3/2)	暗灰褐色 (GYR 5/1)	良	胎土は緻密。精選された粘土を使用。極めて微細な全芸母を含む。
695	3 B-22	-	繩文土器	鉢	口縁部	224				6~9	赤褐色 (GYR 4/8)	赤褐色 (GYR 4/8)	赤褐色 (GYR 4/8)	良	胎土はやや粗。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。極めて微細な全芸母を含む。
696	3 B-22	-	繩文土器	鉢	口縁部	158				5~9	に赤い黄褐色 GYR 5/3	に赤い黄褐色 GYR 5/3	に赤い黄褐色 GYR 5/3	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。
697	2 B-22	表 錆	繩文土器	深鉢	口縁部	19.4				6.5~9	明赤褐色 (GYR 5/6)	黒褐色 (GYR 3/1)	灰褐色 (GYR 5/2)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全芸母を多く含む。
698	3 B-22	-	繩文土器	鉢	口縁部	232				5~10	に赤い黄褐色 GYR 5/4	黒褐色 (GYR 2/1)	暗灰褐色 (GYR 3/1)	良	胎土は緻密。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母をまばらに含む。
699	2 B-22	-	繩文土器	鉢	口縁部	136				5~7	に赤い黄褐色 GYR 4/4	黒褐色 (GYR 3/1)	に赤い黄褐色 GYR 4/4	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全芸母を僅かに含む。
700	3 B-22	-	繩文土器	深鉢	口縁部					7~11	灰褐色 (GYR 6/2)	黒褐色 (GYR 3/1)	灰褐色 (GYR 6/2)	良	胎土は緻密。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母を多く含む。

遺物番号	調査次第	出土緯経	遺物種	器種	部位	法量					色調			焼成	備考
						口径(cm)	頭径(cm)	胴径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	器厚(mm)	内面	外面	断面	
701	3 B-12	-	縄文土器	深鉢	口縁部					7~9	灰褐色 (GYR 3/1)	黒褐色 (GYR 5/6)	明褐色 (GYR 5/6)	不 良	粘土はやや粗。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。微細な全雲母を多く含む。
702	S56	-	縄文土器	深鉢	口縁部					8~10	明褐色 (GYR 5/6)	明赤褐色 (GYR 5/6)	灰褐色 (GYR 6/2)	良	粘土はやや粗。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全雲母を多く含む。
703	3 B-12	-	縄文土器	鉢	口縁部					10~11	にごい青褐色 (GYR 4/4)	末褐色 (GYR 4/4)	にごい青褐色 (GYR 4/4)	良	粘土はやや粗。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全雲母を多く含む。
704	3 B-12	-	縄文土器	鉢	口縁部					10.0	にごい黄褐色 (GYR 5/3)	黒褐色 (GYR 3/2)	黒褐色 (GYR 3/2)	良	粘土はやや粗。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全雲母を多く含む。
705	3 B-12	-	縄文土器	深鉢	口縁部					7~11	灰褐色 (GYR 4/2)	赤褐色 (GYR 4/6)	灰褐色 (GYR 4/2)	良	粘土は緻密。精選された粘土を含む。微細な全雲母を多く含む。
706	3 B-12	-	縄文土器	深鉢	口縁部					5~9	明褐色 (GYR 5/8)	明褐色 (GYR 5/8)	明褐色 (GYR 5/8)	良	粘土はやや粗。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。微細な全雲母を僅かに含む。
707	3 B-12	-	縄文土器	鉢	口縁部					6.0	明褐色 (GYR 5/8)	明褐色 (GYR 5/8)	明褐色 (GYR 5/8)	良	粘土はやや粗。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全雲母を含む。
708	3 B-12	-	縄文土器	深鉢	口縁部					9~11	末褐色 (GYR 4/6)	黒褐色 (GYR 3/1)	黒褐色 (GYR 3/1)	良	粘土はやや粗。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。微細な全雲母を多く含む。
709	3 B-12	-	縄文土器	深鉢	肩 部					7~10	褐色 (GYR 4/3)	褐色 (GYR 4/3)	暗褐色 (GYR 3/6)	良	粘土は緻密。0.5~1mmの大砂粒を含む。微細な全雲母を含む。
710	3 B-12	-	縄文土器	深鉢	肩 部					8~9	黒褐色 (GYR 3/1)	にごい青褐色 (GYR 4/4)	黒褐色 (GYR 3/1)	良	粘土はやや粗。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全雲母をばらに含む。
711	3 B-12	-	縄文土器	鉢	肩 部	16.6	6~8	灰褐色 (GYR 3/1)	にごい黄褐色 (GYR 5/3)	にごい青褐色 (GYR 5/3)	にごい青褐色 (GYR 5/3)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全雲母を含む。		
712	3 B-12	-	縄文土器	深鉢	肩 部		7~8	末褐色 (GYR 4/6)	末褐色 (GYR 4/6)	末褐色 (GYR 4/6)	良	粘土はやや粗。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。微細な全雲母・角閃石を含む。			
713	3 B-12	-	縄文土器	深鉢	肩 部		9~11	にごい青褐色 (GYR 5/6)	明赤褐色 (GYR 5/6)	灰褐色 (GYR 4/1)	不良	粘土はやや粗。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全雲母を含む。			
714	3 B-12	-	縄文土器	深鉢	口縁部	24.0	8~11	明褐色 (GYR 5/8)	末褐色 (GYR 5/8)	末褐色 (GYR 4/6)	良	粘土はやや粗。0.5mmの大砂粒を多く含む。			
715	3 B-12	-	縄文土器	深鉢	口縁部		7~9	明褐色 (GYR 5/8)	暗褐色 (GYR 3/4)	暗褐色 (GYR 3/4)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全雲母を含む。			
716	3 B-12	-	縄文土器	鉢	口縁部		6~11	明褐色 (GYR 5/6)	灰褐色 (GYR 5/2)	灰褐色 (GYR 4/1)	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。微細な全雲母を多量に含む。			
717	3 B-12	-	縄文土器	深鉢	肩 部		6~8	明褐色 (GYR 5/8)	暗褐色 (GYR 3/2)	明褐色 (GYR 5/6)	良	粘土はやや粗。0.5~1mmの大砂粒を含む。微細な全雲母を含む。			
718	3 B-12	-	縄文土器	深鉢	口縁部		11.0	灰褐色 (GYR 5/6)	明褐色 (GYR 5/6)	明褐色 (GYR 5/6)	良	粘土はやや粗。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全雲母を多く含む。			
719	3 B-12	-	縄文土器	深鉢	口縁部	25.6	8~11	にごい褐色 (GYR 5/8)	にごい青褐色 (GYR 5/6)	にごい褐色 (GYR 5/6)	良	粘土は緻密。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。			
720	3 B-12	-	縄文土器	鉢	口縁部	19.4	6~9	明褐色 (GYR 5/6)	明褐色 (GYR 5/8)	明褐色 (GYR 5/8)	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。微細な全雲母を多量に含む。			
721	3 B-12	-	縄文土器	深鉢	口縁部		11.0	灰褐色 (GYR 3/1)	明褐色 (GYR 4/6)	赤褐色 (GYR 4/6)	良	粘土はやや粗。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全雲母をばらに含む。			
722	3 B-12	-	縄文土器	鉢	口縁部		6~10	明褐色 (GYR 5/6)	黒褐色 (GYR 3/1)	灰褐色 (GYR 4/1)	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。微細な全雲母を多量に含む。			
723	3 B-12	-	縄文土器	深鉢	肩 部		6~9	灰褐色 (GYR 5/2)	灰褐色 (GYR 5/2)	黒褐色 (GYR 2/1)	良	粘土はやや粗。0.5~1mmの大砂粒を含む。微細な全雲母を多く含む。			
724	3 B-12	-	縄文土器	深鉢	肩 部		6~7	黒褐色 (GYR 3/1)	にごい青褐色 (GYR 4/4)	黒褐色 (GYR 3/1)	良	粘土は緻密。0.5~3mmの大砂粒を含む。			
725	3 B-12	-	縄文土器	鉢	口縁部		6.0	暗褐色 (GYR 3/6)	暗褐色 (GYR 3/6)	にごい青褐色 (GYR 7/3)	良	粘土はやや粗。0.5~3mmの大砂粒を含む。			

遺物番号	調査次第等	出土経緯	遺物種	器種	部位	法量				色調			焼成	備考	
						口径(cm)	頭径(cm)	胴径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	器厚(mm)	内面	外面		
751	4 第1号	繩文土器	深鉢	口縁部						5~9	明赤褐色 (GYR 5-6)	明赤褐色 (GYR 5-6)	明赤褐色 (GYR 5-6)	良	粘土は緻密。0.5mm大の砂粒を多く含む。全茎母を多く含む。
752	4 第2号	繩文土器	深鉢	口縁部						4~8.5	褐灰青 (GYR 4-2)	赤褐色 (GYR 4-6)	赤褐色 (GYR 4-6)	良	粘土は緻密。0.5mm大の砂粒を含む。全茎母を僅かに含む。
753	4 第3号	繩文土器	深鉢	頭胴部	227					7~10	灰黄褐色 (GYR 5-2)	明赤褐色 (GYR 5-6)	明赤褐色 (GYR 5-6)	良	粘土はやや粗。0.5~1mm大の砂粒を多く含む。
754	4 第4号	繩文土器	深鉢	口縁部						5.5~8	明赤褐色 (GYR 5-6)	明赤褐色 (GYR 5-6)	に赤い黄褐色 (GYR 5-7)	良	粘土は緻密。0.5~1mm大の砂粒を含む。全茎母を含む。
755	4 第5号	繩文土器	深鉢	口縁部						8.5~10	に赤い黄褐色 (GYR 5-6)	に赤い褐色 (GYR 5-6)	褐灰 (GYR 4-1)	良	粘土はやや粗。0.5~1mm大の砂粒を含む。
756	4 第6号	繩文土器	深鉢	底 部						8~14	赤褐色 (GYR 4-6)	赤褐色 (GYR 4-6)	赤褐色 (GYR 4-6)	良	粘土はやや粗。0.5~1mm大の砂粒を多く含む。全茎母を含む。
757	4 第7号	繩文土器	浅鉢	胴 部						6~25	黒褐色 (GYR 3-1)	黄褐色 (GYR 5-3)	に赤い黄褐色 (GYR 6-3)	不良	粘土はやや粗。0.5mm大の砂粒を含む。腐植を含む。微細な全茎母を僅かに含む。時期不詳
758	4 第8号	繩文土器	浅鉢	底 部		96				5~9	赤褐色 (GYR 4-4)	褐 (GYR 4-4)	赤褐色 (GYR 4-6)	良	粘土は緻密。3mm大の砂粒を含む。微細な全茎母を含む。
759	4 第9号	繩文土器	深鉢	口縁部						7~10	明褐色 (GYR 5-6)	明赤褐色 (GYR 5-6)	に赤い黄褐色 (GYR 6-4)	良	粘土は粗。0.5~1.5mm大の砂粒を含む。
760	4 第10号	繩文土器	深鉢	口縁部						6~8	灰黄褐色 (GYR 4-7)	に赤い黄褐色 (GYR 5-4)	に赤い黄褐色 (GYR 6-7)	良	粘土は粗。1mm大の砂粒を少し含む。薄暗い全茎母を含む。
761	4 第11号	繩文土器	深鉢	胴 部						6~85	明赤褐色 (GYR 5-6)	水褐色 (GYR 4-6)	明赤褐色 (GYR 5-6)	良	粘土はやや粗。0.5~1mm大の砂粒を多く含む。
762	4 第12号	繩文土器	深鉢	胴上部						8.5~11	に赤い褐色 (GYR 5-4)	明赤褐色 (GYR 5-6)	明赤褐色 (GYR 5-6)	良	粘土は緻密。0.5mm大の砂粒を僅かに含む。微細な全茎母を含む。
763	4 第13号	石器	削器	変形	最大長 45	最大幅 18	最大厚 0.9	重量 5.8kg							
764	4 第14号	石器	石刀	変形	最大長 15	最大幅 12	最大厚 0.2	重量 0.5kg							
765	4 野鼠穴	繩文土器	深鉢	口縁部	368					5~10.5	明赤褐色 (GYR 5-6)	明赤褐色 (GYR 5-6)	に赤い黄褐色 (GYR 6-3)	良	粘土はやや粗。0.5~1mm大の砂粒を多く含む。微細な全茎母を含む。
766	4 野鼠穴	繩文土器	深鉢	口縁部	23.0					5~10	に赤い褐色 (GYR 5-3)	に赤い黄褐色 (GYR 6-4)	灰褐色 (GYR 5-2)	不良	粘土は粗。0.5~1mm大の砂粒を多く含む。薄暗い全茎母を多く含む。
767	4 野鼠穴	繩文土器	深鉢	口縁部						7~11	に赤い褐色 (GYR 5-4)	に赤い褐色 (GYR 5-4)	明褐色 (GYR 5-6)	良	粘土は緻密。比較的精選された粘土と想。微細な全茎母・角閃石を多く含む。
768	4 野鼠穴	繩文土器	鉢	口縁部	35.2					7~13	黒 (GYR 2-1)	黒褐色 (GYR 3-2)	黒褐色 (GYR 3-2)	良	粘土は粗。0.5~1mm大の砂粒を多く含む。長石が目立つ。
769	4 黒石遺跡	石器	石板	変形	最大長 12.2	最大幅 12.9	最大厚 4.5	重量 970kg							
770	4 配石遺跡	繩文土器	鉢	ほぼ 変形	17.7	18.7	9.3		3~14	黒 (GYR 4-3)	黒 (GYR 4-3)	黒 (GYR 4-3)	良	粘土は緻密。	
771	4 日吉遺跡	繩文土器	蓋	ツマミ 部分	64				8~24	に赤い黄褐色 (GYR 4-6)	赤褐色 (GYR 4-6)	赤褐色 (GYR 4-6)	良	粘土は緻密。残された粘土を使用。角閃石を多く含む。微細な全茎母を僅かに含む。	
772	4 日吉遺跡	繩文土器	深鉢	胴上部		38.0			7~9	褐灰 (GYR 4-1)	に赤い黄褐色 (GYR 5-4)	に赤い黄褐色 (GYR 5-4)	良	粘土は粗。0.5~1mm大の砂粒を多く含む。微細な全茎母・角閃石を多く含む。	
773	4 日吉遺跡	繩文土器	鉢	底 部			136		6~9	に赤い黄褐色 (GYR 5-6)	に赤い黄褐色 (GYR 5-6)	黒褐色 (GYR 3-1)	良	粘土はやや粗。0.5mm大の砂粒を多く含む。微細な全茎母に含まれる。	
774	4 日吉遺跡	繩文土器	壺	胴上部					8~9	褐灰 (GYR 4-1)	明赤褐色 (GYR 5-6)	明赤褐色 (GYR 5-6)	良	粘土はやや粗。0.5mm大の砂粒を多く含む。微細な全茎母を少し含む。	
775	4 日吉遺跡	繩文土器	深鉢	胴 部					6.5~9	黄灰 (GYR 4-1)	に赤い黄褐色 (GYR 5-4)	に赤い黄褐色 (GYR 6-4)	良	粘土はやや粗。0.5mm大の砂粒を多く含む。微細な全茎母を少し含む。	

遺物番号	調査次 数	出土 経緯	遺物 種類	層級	部位	法量				色調			焼成	備考		
						口径 (cm)	頭径 (cm)	胴径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	器厚 (mm)	内面	外面			
776	4	性別不明 遺骸	織文 土器	深鉢	底部					96	10 ~ 14	明赤褐色 GYR 5~6	明赤褐色 GYR 5~6	明赤褐色 GYR 5~6	良	粘土は緻密。精選された粘土を含む。微細な全芸母・角閃石を含む。
777	4	性別不明 遺骸	織文 土器	深鉢	口縁部	25.4				7 ~ 13	灰黄褐色 GYR 6~7	灰黄褐色 GYR 6~7	明赤褐色 GYR 5~6	良	粘土は粗。0.5 ~ 1mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母・角閃石をばらに含む。	
778	4	性別不明 遺骸	織文 土器	深鉢	口縁部	26.2				5 ~ 11	明褐色 GYR 5~6	明褐色 GYR 5~6	に赤い黄褐色 GYR 5~6	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を僅かに含む。精選された粘土を使用。微細な全芸母を僅かに含む。	
779	4	性別不明 遺骸	織文 土器	鉢	口縁部					6 ~ 10	に赤い黄褐色 GYR 5~6	褐 GYR 4~5	明褐色 GYR 5~6	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。微細な角閃石を僅かに含む。	
780	4	性別不明 遺骸	織文 土器	深鉢	口縁部					6 ~ 10.5	に赤い黄褐色 GYR 5~6	に赤い黄褐色 GYR 5~6	に赤い黄褐色 GYR 5~6	良	粘土はやや粗。0.5mmの大砂粒を含む。	
781	4	性別不明 遺骸	織文 土器	深鉢	開口部					4 ~ 6	明赤褐色 GYR 5~6	明赤褐色 GYR 5~6	明赤褐色 GYR 5~6	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を僅かに含む。	
782	4	性別不明 遺骸	織文 土器	深鉢	口縁部					10 ~ 17	灰黄褐色 GYR 6~7	に赤い黄褐色 GYR 7~8	灰褐色 GYR 5~6	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。精選された粘土を使用。金芸母・角閃石をばらに含む。	
783	4	性別不明 遺骸	織文 土器	深鉢	開口部					9 ~ 10	明赤褐色 GYR 5~6	明赤褐色 GYR 5~6	に赤い黄褐色 GYR 6~7	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。微細な全芸母を僅かに含む。	
784	4	性別不明 遺骸	織文 土器	深鉢	腹下部 付近					7 ~ 9	に赤い黄褐色 GYR 7~8	褐 GYR 7~8	明赤褐色 GYR 5~6	良	粘土は緻密。0.5 ~ 2mmの大砂粒を含む。微細な全芸母を僅かに含む。	
785	4	性別不明 遺骸	織文 土器	深鉢	口縁部					6 ~ 8	明赤褐色 GYR 5~6	明赤褐色 GYR 5~6	明赤褐色 GYR 7~8	良	粘土はやや粗。0.5mmの大砂粒を含む。全芸母を僅かに含む。	
786	4	性別不明 遺骸	織文 土器	深鉢	口縁部					5.5 ~ 8	明赤褐色 GYR 5~6	明赤褐色 GYR 5~6	褐 GYR 6~7	良	粘土は緻密。0.5 ~ 1mmの大砂粒を含む。微細な全芸母を多く含む。	
787	4	性別不明 遺骸	織文 土器	深鉢	胴上部					5 ~ 9	明赤褐色 GYR 5~6	明赤褐色 GYR 5~6	褐 GYR 4~6	良	粘土はやや粗。1mmの大砂粒を含む。微細な全芸母を含む。	
788	4	性別不明 遺骸	織文 土器	深鉢	胴上部					5 ~ 7	明赤褐色 GYR 5~6	明赤褐色 GYR 5~6	に赤い黄褐色 GYR 5~6	良	粘土は緻密。0.5 ~ 1mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母を多く含む。	
789	4	性別不明 遺骸	織文 土器	深鉢	胴 部					5 ~ 6.5	明赤褐色 GYR 5~6	に赤い赤褐色 GYR 5~6	黑褐色 GYR 3~4	良	粘土はやや粗。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母をばらに含む。	
790	4	性別不明 遺骸	織文 土器	浅鉢	胴 部					21.2	55	黑褐色 GYR 3~2	に赤い黄褐色 GYR 5~6	に赤い黄褐色 GYR 5~6	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。微細な全芸母を多く含む。
791	4	G_A3	織文 土器	深鉢	口縁部	21.8				5 ~ 7	に赤い黄褐色 GYR 6~7	に赤い褐色 GYR 5~6	に赤い褐色 GYR 5~6	不良	粘土はやや粗。0.5mmの大砂粒を含む。1mmの大砂粒を僅かに含む。	
792	4	G_B2	織文 土器	鉢	口縁部					5 ~ 10	に赤い黄褐色 GYR 5~6	に赤い黄褐色 GYR 5~6	に赤い黄褐色 GYR 5~6	良	粘土はやや粗。0.5 ~ 1mmの大砂粒を含む。微細な全芸母を含む。	
793	4	G_B2 破損	織文 土器	深鉢	底部					10.1	8 ~ 11	褐 GYR 6~7	明赤褐色 GYR 5~6	褐 GYR 6~7	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を僅かに含む。
794	4	G_B2 破損	石器	敲石	完形	最大長 11.7	最大幅 10.9	最大幅 5.3	重量 1080kg						粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母を僅かに含む。	
795	4	G_B3	織文 土器	深鉢	口縁部					4.5 ~ 10	黑褐色 GYR 3~1	に赤い褐色 GYR 5~6	黑褐色 GYR 3~1	不良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母を含む。	
796	4	G_B3 土質 不規則	环	底 部						5.4	3 ~ 7	浅黄褐色 GYR 8~9	浅黄褐色 GYR 8~9	浅黄褐色 GYR 8~9	良	粘土は緻密。
797	4	G_EG 剥離	石器	石皿	完形	最大長 27.0	最大幅 26.5	最大幅 7.9	重量 8000kg						粘土は粗。0.5 ~ 1.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母を僅かに含む。	
798	4	G_B4	織文 土器	深鉢	口縁部						5.5 ~ 13	褐 GYR 6~8	褐 GYR 6~8	褐 GYR 6~8	良	粘土は粗。0.5 ~ 1.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母を僅かに含む。
799	4	G_B4	織文 土器	深鉢	口縁部					6 ~ 7.5	明黄褐色 GYR 6~7	褐 GYR 6~7	明黄褐色 GYR 6~7	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を多く含む。接種された粘土を使用。	
800	4	G_B4	織文 土器	深鉢	口縁部					6 ~ 8	褐灰 GYR 4~1	明赤褐色 GYR 5~6	明赤褐色 GYR 5~6	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母を多く含む。	

遺物番号	調査次第等	出土経緯	遺物種類	器種	部位	法量					色調			焼成	備考
						口径(cm)	頭径(cm)	胴径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	器厚(mm)	内面	外面	断面	
801	4	G_B4	織文土器	深鉢	口縁部	25.4				6 ~ 7.5	明赤褐色 (GYR 5-6)	にぶい褐色 (GYR 6-7)	にぶい褐色 (GYR 6-7)	良	粘土は緻密。0.5 ~ 1mm大の砂粒を含む。微細な全芸母を含む。焼成火仕上がり。
802	4	G_B4	織文土器	鉢	胴 部					10.0	水褐色 (GYR 4-6)	赤褐色 (GYR 4-6)	赤褐色 (GYR 4-6)	良	粘土は粗。0.5mmの砂粒を多く含む。微細な全芸母を多く含む。
803	4	G_B4	骨角器	軸突具	先端	最大長 4.7	最大幅 0.5	最大厚 0.4	重量 1g						
804	4	G_B6	織文土器	深鉢	口縁部					8 ~ 12	相 (GYR 6-6)	相 (GYR 6-6)	相 (GYR 6-6)	良	粘土はやや粗。0.5 ~ 1mm大の砂粒を含む。
805	4	G_B6	織文土器	深鉢	胴 部					7 ~ 10	明黄褐色 (GYR 7-6)	明黄褐色 (GYR 6-6)	明黄褐色 (GYR 7-6)	良	粘土はやや粗。0.5 ~ 1mm大の砂粒を少し含む。
806	4	G_C0	織文土器	鉢	口縁部					8.0	明小褐 (GYR 5-8)	明小褐 (GYR 5-8)	明小褐 (GYR 5-8)	良	粘土は緻密。0.5mmの砂粒を多く含む。微細な角閃石を僅かに含む。
807	4	G_C0	織文土器	深鉢	口縁部					3 ~ 13.5	にぶい褐色 (GYR 5-5)	にぶい褐色 (GYR 5-5)	にぶい褐色 (GYR 5-5)	良	粘土は粗。1 ~ 2mmの砂粒を多く含む。微細な全芸母を多く含む。
808	4	G_C0	織文土器	深鉢	口縁部	29.0				5 ~ 11	黒褐色 (GYR 3-1)	明小褐 (GYR 5-8)	灰褐色 (GYR 4-2)	良	粘土は緻密。0.5mmの砂粒を多く含む。微細な全芸母を多く含む。
809	4	G_C0	織文土器	深鉢	口縁部					5 ~ 10.5	にぶい黄褐色 (GYR 5-4)	にぶい褐色 (GYR 5-4)	にぶい褐色 (GYR 5-4)	良	粘土は粗。1 ~ 2mmの砂粒を含む。微細な全芸母を多く含む。
810	4	G_C0	織文土器	深鉢	口縁部					8 ~ 11	にぶい褐色 (GYR 6-4)	にぶい褐色 (GYR 5-4)	明小褐 (GYR 5-6)	良	粘土はやや粗。0.5mmの砂粒を多く含む。微細な全芸母を多く含む。
811	4	G_C0	織文土器	鉢	胴上部					9.0	暗褐色 (GYR 4-1)	相 (GYR 6-6)	明小褐 (GYR 5-6)	良	粘土は緻密。0.5mm大の砂粒を含む。
812	4	G_C0	織文土器	深鉢	胴上部					6 ~ 7	にぶい赤褐色 (GYR 4-1)	赤褐色 (GYR 4-6)	にぶい水褐色 (GYR 4-4)	良	粘土は粗。0.5 ~ 1mm大の砂粒を多く含む。微細な全芸母を僅かに含む。
813	4	G_C0	織文土器	深鉢	胴 部					8 ~ 9	灰褐色 (GYR 7-2)	相 (GYR 6-6)	灰褐色 (GYR 5-2)	良	粘土は緻密。0.5mm大の砂粒を含む。微細な角閃石を含む。
814	4	G_C0	織文土器	深鉢	胴上部					7.5 ~ 10	明赤褐色 (GYR 5-6)	明赤褐色 (GYR 5-6)	にぶい水褐色 (GYR 5-4)	良	粘土は粗。0.5 ~ 1mm大の砂粒を多く含む。微細な全芸母を含む。
815	4	G_C0	石器	石器	変形	最大長 14	最大幅 13	最大厚 0.4	重量 0.9g						
816	4	G_C1	織文土器	深鉢	口縁部					7.0	水褐色 (GYR 4-6)	赤褐色 (GYR 4-6)	明小褐 (GYR 5-6)	良	粘土はやや粗。0.5mm大の砂粒を多く含む。
817	4	織文土器	深鉢	口縁部 底?						5 ~ 7	にぶい褐色 (GYR 7-4)	にぶい褐色 (GYR 7-4)	暗褐色 (GYR 4-1)	良	粘土は粗。0.5mm大の砂粒を多く含む。石英・長石を多く含む。
818	4	G_C1	織文土器	深鉢	胴胴部					7 ~ 11	にぶい赤褐色 (GYR 4-4)	明小褐 (GYR 5-6)	明小褐 (GYR 5-6)	良	粘土は粗。0.5 ~ 1mm大の砂粒を多く含む。長石を多く含む。
819	4	G_C1	織文土器	深鉢	胴上部					6 ~ 7	にぶい赤褐色 (GYR 4-4)	にぶい赤褐色 (GYR 4-4)	明小褐 (GYR 5-6)	良	粘土は緻密。0.5mm大の砂粒を含む。
820	4	GCI 只道 土器	石器	磨石	変形	最大長 12.9	最大幅 8.1	最大厚 3.0	重量 370g						
821	4	G_C2	織文土器	深鉢	口縁部					5 ~ 11	明褐色 (GYR 5-6)	明小褐 (GYR 5-6)	にぶい黄褐色 (GYR 5-4)	良	粘土はやや粗。0.5 ~ 1mm大の砂粒を多く含む。微細な全芸母を含む。
822	4	G_C2	織文土器	深鉢	口縁部					7 ~ 12	明水褐色 (GYR 5-6)	明小褐 (GYR 5-6)	にぶい黄褐色 (GYR 6-4)	良	粘土はやや粗。2 ~ 4mm大の砂粒を少し含む。微細な全芸母を含む。
823	4	G_C2	織文土器	鉢	口縁部	21.8				7 ~ 10	黒褐色 (GYR 3-1)	赤褐色 (GYR 4-6)	黒褐色 (GYR 3-1)	良	粘土は緻密。0.5mm大の砂粒を含む。微細な全芸母を含む。
824	4	G_C2	織文土器	深鉢	底 部					11.2	明小褐 (GYR 5-8)	にぶい褐色 (GYR 6-4)	明小褐 (GYR 5-8)	良	粘土は粗。0.5 ~ 1mm大の砂粒を多く含む。
825	4	G_C2	石器	網片	変形	最大長 4.1	最大幅 2.6	最大厚 0.6	重量 4g						

遺物番号	調査次第等	出土緯経	遺物種類	器種	部位	法量					色調			焼成	備考	
						口径 (cm)	頭径 (cm)	胴径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	器厚 (mm)	内面	外面	断面		
826	4	GCD 直土 貝塚	石器	敲石	尖形	底大径 13.8	最大幅 11.0	底大径 5.3	重量 1360g							
827	4	G C3	工具 石斧	环	底 部				6.0	3.5 ~ 8	浅黄褐 (00YR 8/4)	浅黄褐 (00YR 8/4)	浅黄褐 (00YR 8/4)	良	胎土は緻密。	
828	4	G C4	繩文 土器	深鉢	口縁部					10 ~ 11	褐灰 (00YR 4/1)	明赤褐 (5YR 5/6)	にじみ 黄褐 (5YR 6/4)	良	胎土は緻密。精選された胎土を使用。微細な全芸母をまばらに含む。	
829	4	G C4	繩文 土器	深鉢	口縁部					6 ~ 8	褐 (5YR 6/6)	褐灰 (5YR 6/6)	褐灰 (5YR 4/1)	不良	胎土はやや粗。0.5 ~ 1mmの大砂粒を多く含む。石英・長石が多い。	
830	4	G C4	繩文 土器	深鉢	底部					7 ~ 9.5	褐 (5YR 6/6)	明赤褐 (5YR 5/6)	褐 (5YR 6/6)	良	胎土は緻密。0.5 ~ 1mmの大砂粒を僅かに含む。微細な全芸母を僅かに含む。微細な全芸母を僅かに含む。	
831	4	G C4	繩文 土器	深鉢	胴上部					6 ~ 8	明赤褐 (5YR 5/6)	明赤褐 (5YR 5/6)	明赤褐 (5YR 5/6)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を多く含む。石英・長石が多く含む。	
832	4	G C4	繩文 土器	深鉢	口縁部					7.5 ~ 8	赤褐 (5YR 4/6)	赤褐 (5YR 4/6)	赤褐 (5YR 4/6)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母を多く含む。	
833	4	G C4	繩文 土器	鉢	口縁部					6 ~ 7	にじみ 褐 (5YR 4/4)	にじみ 褐 (5YR 4/4)	にじみ 褐 (5YR 4/4)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全芸母・角閃石をまばらに含む。	
834	4	G C4	繩文 土器	鉢	脇 部					5 ~ 8	赤褐 (5YR 4/6)	明赤褐 (5YR 5/6)	明赤褐 (5YR 5/6)	良	胎土はやや粗。0.5 ~ 1mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母を多く含む。	
835	4	G C4	繩文 土器	深鉢	脇 部					10 ~ 13.5	明赤褐 (5YR 5/6)	明赤褐 (5YR 5/6)	明赤褐 (5YR 5/6)	良	胎土はやや粗。1 ~ 2mmの大砂粒を含む。	
836	4	G C5	繩文 土器	鉢	口縁部					6.0	褐灰 (2.5Y 4/1)	褐 (5YR 6/6)	褐 (5YR 6/6)	不良	胎土は緻密。0.5 ~ 1mmの大砂粒を僅かに含む。微細な全芸母を含む。	
837	4	G C4	繩文 土器	鉢	口縁部					8.0	にじみ 褐 (5YR 5/4)	褐灰 (5YR 4/1)	褐灰 (5YR 4/1)	良	胎土はやや粗。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母を多く含む。	
838	4	G C4	繩文 土器	深鉢	口縁部					9.5 ~ 12	にじみ 黄褐 (00YR 6/4)	にじみ 黄褐 (00YR 5/4)	にじみ 黄褐 (00YR 6/4)	良	胎土はやや粗。0.5 ~ 1mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母・角閃石をまばらに含む。	
839	4	G C4	繩文 土器	深鉢	口縁部					5.5 ~ 9.5	黑 (00YR 5/2)	赤褐 (00YR 5/2)	灰黄褐 (00YR 5/2)	良	胎土は緻密。微細な全芸母を探かに含む。	
840	4	G C4	繩文 土器	鉢	把手					12.0	にじみ 黄褐 (00YR 7/3)	にじみ 黄褐 (00YR 7/3)	にじみ 黄褐 (00YR 7/3)	良	胎土は緻密。精選された胎土を使用。赤彩	
841	4	G C4	繩文 土器	鉢	底 部					13.0	7 ~ 12	にじみ 黄褐 (00YR 5/4)	にじみ 黄 (5YR 6/4)	にじみ 黄 (5YR 6/4)	良	胎土は緻密。微細な全芸母を多く含む。
842	5	GCD 直土 貝塚	石器	打削 石斧	底大径 7.4	最大幅 6.6	底大径 1.9	重量 110g								
843	4	GCD 直土 貝塚	石器	石鏟	底大径 1.5	最大幅 1.2	底大径 0.9	重量 0.45g								
844	4	GCD 直土 貝塚	石器	敲石	底大径 11.5	最大幅 8.5	底大径 5.5	重量 677g								
845	4	GCD 直土 貝塚	石器	敲石	底大径 8.5	最大幅 7.4	底大径 3.5	重量 347g								
846	4	G C4	骨 肉器	穿孔具	底大径 7.7	最大幅 6.4	底大径 1.35	重量 11g								
847	4	G C5	繩文 土器	深鉢	口縁部					9 ~ 13	褐 (5YR 4/3)	黒褐 (2.5Y 3/1)	赤褐 (5YR 4/6)	良	胎土はやや粗。0.5 ~ 1mmの大砂粒を多く含む。石英・長石が目立つ。微細な全芸母を多く含む。	
848	4	G C5	繩文 土器	深鉢	口縁部					5.5 ~ 11	暗灰褐 (2.5Y 5/2)	灰黄褐 (00YR 4/2)	灰黄褐 (00YR 4/2)	良	胎土は緻密。~ 0.5mmの大砂粒を含む。微細な全芸母を極端に含む。	
849	4	G C5	繩文 土器	鉢	口縁部	17.6				6 ~ 8	褐 (5YR 6/6)	褐 (5YR 6/6)	褐 (5YR 6/6)	不良	胎土は緻密。7mmの石を僅かに含む。微細な全芸母を少し含む。	
850	4	G C5	繩文 土器	鉢	口縁部					5 ~ 6.5	明赤褐 (5YR 5/6)	灰褐 (5YR 4/6)	にじみ 褐 (5YR 6/4)	良	胎土は緻密。精選された胎土を使用。微細な全芸母・角閃石を含む。	

遺物番号	調査次第等	出土緯経	遺物種	器種	部位	法量					色調			焼成	備考	
						口径(cm)	頭径(cm)	胴径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	器厚(mm)	内面	外面	断面		
851	4	G C5	織文 土器	浅鉢	口縁部					5.0	褐灰 (GYR 4/1)	明赤褐色 (GYR 5/6)	黒 (GYR 2/1)	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。微細な全芸母を僅かに含む。	
852	4	G C5	石器	削器		最大径 9.4	最大幅 8.9	最大厚 1.8	重量 216g							円盤形石器
853	4	GCS 直土 耳皿	石器	打製 石斧		最大径 8.8	最大幅 10.9	最大厚 3.6	重量 400g							
854	4	G C5	織文 土器	深鉢	口縁部					6 ~ 8	褐灰 (GYR 4/1)	黒褐色 (GYR 3/1)	灰黄褐色 (GYR 4/2)	不良	粘土は粗。0.5 ~ 1mmの大砂粒を多く含む。	
855	4	G C5	織文 土器	深鉢	胴 部					6.5 ~ 8	明赤褐色 (GYR 5/6)	明赤褐色 (GYR 5/6)	明赤褐色 (GYR 5/6)	不良	粘土はやや粗。0.5 ~ 1mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母を僅かに含む。	
856	4	G C5	織文 土器	深鉢	口縁部					5 ~ 12	明赤褐色 (GYR 5/6)	赤褐色 (GYR 4/6)	赤褐色 (GYR 4/6)	良	粘土はやや粗。微細な全芸母を含む。	
857	4	G D0	織文 土器	鉢	口縁部	25.4				7.5 ~ 8	にい・黄褐色 (GYR 7/2)	にい・黄褐色 (GYR 7/2)	褐灰 (GYR 5/1)	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。微細な全芸母を含む。	
858	4	G D0	織文 土器	深鉢	口縁部					6 ~ 11.5	灰黄褐色 (GYR 4/2)	にい・黄褐色 (GYR 4/3)	灰黄褐色 (GYR 5/2)	良	粘土は粗。1 ~ 2mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母を多く含む。	
859	4	G D0	織文 土器	深鉢	口縁部					7 ~ 12	黒褐色 (GYR 3/1)	黒褐色 (GYR 3/1)	褐灰 (GYR 5/1)	良	粘土はやや粗。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母・角閃石を含む。四面文。	
860	4	G D0	織文 土器	深鉢	口縁部					11 ~ 13	明赤褐色 (GYR 5/6)	明赤褐色 (GYR 5/6)	明赤褐色 (GYR 5/6)	良	粘土は粗。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母を僅かに含む。	
861	4	G D0	織文 土器	鉢	胴下部					8 ~ 9	明赤褐色 (GYR 5/6)	黒褐色 (GYR 3/1)	明赤褐色 (GYR 5/6)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母・角閃石を含む。	
862	4	G D0	織文 土器	鉢	胴下部					8 ~ 9	にい・黄褐色 (GYR 6/2)	明赤褐色 (GYR 5/6)	にい・黄褐色 (GYR 6/4)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全芸母・角閃石を僅かに含む。	
863	4	GDS 直土 耳皿	織文 土器	深鉢	胴上部					7 ~ 10	褐灰 (GYR 4/1)	明赤褐色 (GYR 5/6)	褐灰 (GYR 4/1)	良	粘土はやや粗。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母を多く含む。	
864	4	GDS 織文 土器	深鉢	頭脚部					6 ~ 7	にい・黄褐色 (GYR 6/2)	灰黄褐色 (GYR 5/6)	にい・赤褐色 (GYR 5/6)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全芸母を含む。		
865	4	G D0	織文 土器	深鉢	胴上部					5 ~ 9	明赤褐色 (GYR 7/6)	根 (GYR 6/6)	明赤褐色 (GYR 7/6)	良	粘土はやや粗。1mmの大砂粒を多く含む。角閃石をばらに含む。	
866	4	G D0	織文 土器	浅鉢	口縁部					10 ~ 12	にい・黄褐色 (GYR 7/2)	にい・黄褐色 (GYR 7/2)	にい・黄褐色 (GYR 7/2)	良	粘土は緻密。0.5 ~ 1mmの大砂粒を含む。微細な全芸母を含む。	
867	4	G D0	織文 土器	浅鉢	口縁部					6 ~ 7.5	にい・黄褐色 (GYR 6/3)	にい・黄褐色 (GYR 6/4)	にい・黄褐色 (GYR 6/3)	良	粘土はやや粗。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な角閃石を多く含む。半影。	
868	4	G D0	織文 土器	浅鉢小口付 耳皿	胴下部					8.0	褐灰 (GYR 4/1)	にい・黄褐色 (GYR 5/6)	にい・黄褐色 (GYR 5/6)	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。僅めて微細な全芸母を多量に含む。	
869	4	G D0	織文 土器	鉢	-	11.0				5.5 ~ 13	根 (GYR 6/6)	根 (GYR 6/6)	根 (GYR 5/2)	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。微細な全芸母を多く含む。	
870	4	G D0	織文 土器	深鉢	胴 部					6 ~ 11	黒褐色 (GYR 3/1)	赤褐色 (GYR 4/6)	赤褐色 (GYR 4/6)	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。微細な全芸母・角閃石を多く含む。	
871	4	G D0	織文 耳皿	壺	底 部					9.0	にい・黄褐色 (GYR 7/4)	にい・黄褐色 (GYR 7/4)	にい・黄褐色 (GYR 7/4)	良	粘土は緻密。	
872	4	G D1	織文 土器	深鉢	口縁部					7 ~ 12	根 (GYR 6/6)	根 (GYR 6/6)	根 (GYR 6/6)	良	粘土はやや粗。0.5 ~ 1mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母を僅かに含む。	
873	4	G D1	織文 土器	深鉢	口縁部					8 ~ 12	根 (GYR 2/1)	にい・黄褐色 (GYR 5/4)	にい・黄褐色 (GYR 5/4)	良	粘土はやや粗。0.5 ~ 1mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母を僅かに含む。	
874	4	G D1	織文 土器	深鉢	口縁部					6.5 ~ 9	明赤褐色 (GYR 5/6)	明赤褐色 (GYR 5/6)	明赤褐色 (GYR 5/6)	良	粘土はやや粗。0.5 ~ 1mmの大砂粒を含む。	
875	4	G D1	織文 土器	深鉢	口縁部	30.4				9 ~ 10	明赤褐色 (GYR 5/6)	にい・黄褐色 (GYR 5/3)	にい・黄褐色 (GYR 5/3)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を多く含む。	

遺物番号	調査次第等	出土経緯	遺物種類	器種	部位	法量				色調			焼成	備考	
						口径(cm)	頭径(cm)	胴径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	器厚(mm)	内面	外面		
876 4 G D1	織文土器	鉢	口縁部	16.4						5~7.5	に赤い黄褐 (GYR 5~7)	明赤褐 (GYR 5~6)	に赤い黄褐 (GYR 5~7)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な角閃石を僅かに含む。
877 4 G D1	織文土器	浅鉢	口縁部							4.5~8.5	明赤褐 (GYR 5~6)	相 (GYR 6~7)	に赤い黄褐 (GYR 7~8)	良	胎土は緻密。精選された胎土を使用。微細な全玉母を僅かに含む。
878 4 G D1	織文土器	鉢	口縁部							6~8	相 (GYR 6~9)	相 (GYR 6~9)	相 (GYR 6~9)	良	胎土は緻密。精選された胎土を使用。
879 4 G D1	織文土器	注口付土器	胴上部							7.5~9	明赤褐 (GYR 5~6)	相 (GYR 6~8)	に赤い黄褐 (GYR 6~7)	良	胎土はやや粗。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。微細な全玉母を含む。
880 4 GDI	織文土器	注口付土器	底部			15.8				8~10	褐灰 (GYR 5~7)	黒 (GYR 2~3)	黒 (GYR 2~3)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。比較的精選された胎土を使用。微細な全玉母を含む。
881 4 GDI	直筒土器	石器	打製石斧	完形	最大径 8.4	最大幅 30.2	最大幅 22	最大幅 22	重量 210g						
882 4 G D1	石器	打製石斧	完形	最大径 8.5	最大幅 7.7	最大幅 20	最大幅 137.5	重量 137.5						刃部の一部が欠損	
883 4 G D2	織文土器	深鉢	口縁部							5~12	明赤褐 (GYR 5~6)	に赤い褐 (GYR 5~6)	黄褐 (GYR 5~8)	良	胎土は粗。0.5~1mmの大砂粒を少し含む。微細な全玉母を含む。
884 4 G D2	織文土器	深鉢	口縁部							8~11	褐灰 (GYR 4~6)	黒褐 (GYR 3~4)	に赤い黄褐 (GYR 6~8)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全玉母を含む。皮状凹凸
885 4 G D2	織文土器	深鉢	口縁部							9~16.5	に赤い褐 (GYR 5~6)	に赤い褐 (GYR 5~6)	に赤い黄褐 (GYR 5~7)	良	胎土はやや粗。0.5~2mmの大砂粒を多く含む。微細な全玉母を多く含む。
886 4 G D2	織文土器	深鉢	口縁部							4~8.5	黒 (GYR 2~3)	褐灰 (GYR 4~5)	に赤い黄褐 (GYR 5~6)	不良	胎土はやや粗。0.5~1mmの大砂粒を含む。微細な全玉母を含む。
887 4 G D2	織文土器	深鉢	胴部							7.5	赤褐 (GYR 4~6)	に赤い赤褐 (GYR 4~6)	赤褐 (GYR 4~6)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全玉母を含む。
888 4 G D2	織文土器	深鉢	口縁部							11.0	褐 (GYR 4~3)	褐 (GYR 4~3)	相 (GYR 6~6)	不良	胎土はやや粗。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。微細な全玉母を多く含む。
889 4 G D2	織文土器	深鉢	口縁部							7~10	に赤い褐 (GYR 5~6)	に赤い褐 (GYR 5~6)	黄灰 (GYR 4~5)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。
890 4 G D2	織文土器	深鉢	底部			13.8				8~11.5	に赤い褐 (GYR 5~6)	に赤い褐 (GYR 5~6)	に赤い褐 (GYR 5~6)	良	胎土は緻密。0.5~2mmの大砂粒を含む。角閃石をまばらに含む。
891 4 G D2	織文土器	浅鉢	口縁部	42.2						6~7	褐 (GYR 4~4)	褐 (GYR 4~4)	褐 (GYR 4~4)	良好	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全玉母を僅かに含む。
892 4 G D3	織文土器	浅鉢	口縁部							6.5~8	褐灰 (GYR 4~1)	に赤い褐 (GYR 5~6)	に赤い黄褐 (GYR 7~8)	良	胎土は緻密。Im大の砂粒を多く含む。微細な全玉母を僅かに含む。
893 4 GDI	直筒土器	石器	打製石斧	完形	最大径 9.5	最大幅 6.6	最大厚 2.5	重量 170g							
894 4 GDI	直筒土器	石器	敲打石	完形	最大径 12.4	最大幅 7.3	最大厚 6.7	重量 1.00kg							
895 4 G D4	織文土器	深鉢	口縁部	28.8						5~11	黄褐 (GY 4~4)	明赤褐 (GYR 5~6)	明赤褐 (GYR 5~6)	不良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全玉母を含む。
896 4 G D4	織文土器	深鉢	口縁部	26.4						6~11	黄褐 (GY 4~4)	黄褐 (GY 4~4)	灰黄 (GY 5~6)	不良	胎土は粗。比較的精選された胎土を使用。
897 4 G D4	織文土器	深鉢	胴部							6~8	灰褐 (GY 3~4)	暗灰褐 (GY 5~5)	暗灰褐 (GY 5~5)	良	胎土はやや粗。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全玉母を僅かに含む。
898 4 G D4	織文土器	深鉢	胴部							6~8	相 (GYR 6~6)	明赤褐 (GYR 5~6)	明赤褐 (GYR 5~6)	良	胎土は粗。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。長石を多く含む。
899 4 G D4	織文土器	深鉢	口縁部	21.8						5~8	褐 (GYR 4~6)	褐 (GYR 4~6)	に赤い黄褐 (GYR 5~7)	不良	胎土は粗。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。長石と長石を含む。全玉母を僅かに含む。
900 4 G D4	織文土器	深鉢	口縁部							9~14.5	褐 (GYR 4~4)	に赤い褐 (GYR 5~6)	赤褐 (GYR 4~6)	良	胎土は粗。1~2mmの大砂粒を多く含む。長石と長石を含む。全玉母を僅かに含む。

遺物番号	調査次第等	出土緯	遺物種	器種	部位	法量				色調			焼成	備考	
						口径(cm)	頭径(cm)	胴径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	器厚(mm)	内面	外面		
901	4	G-D4	繩文土器	深鉢	胴部					8~95	黒灰 (GYR 4/1)	明赤褐 (GYR 5/8)	黒褐 (GYR 3/1)	良	胎土はやや粗。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母を僅かに含む。
902	4	G-D4	繩文土器	深鉢	口縁部					7~95	明赤褐 (GYR 5/6)	明赤褐 (GYR 5/6)	粗 GYR 6/6	良	胎土は緻密。0.5~1.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母・角閃石を僅かに含む。
903	4	G-D5	繩文土器	深鉢	口縁部	34.4				85~95	明褐 (GYR 5/6)	明褐 (GYR 5/6)	明褐 (GYR 5/6)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。1mmの角閃石をまばらに含む。
904	4	G-D4	繩文土器	深鉢	口縁部	35.4				8~105	にぶい黄褐 (GYR 6/0)	粗 GYR 6/6	にぶい黄褐 (GYR 6/0)	良	胎土はやや粗。0.5~6mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母を含む。
905	4	G-D5	繩文土器	深鉢	口縁部	30.0				5~12	褐 (GYR 4/6)	褐 (GYR 4/6)	褐 (GYR 4/6)	良	胎土はやや粗。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母を含む。
906	4	G-D5	繩文土器	深鉢	口縁部					9~16	明赤褐 (GYR 5/6)	明赤褐 (GYR 5/6)	明赤褐 (GYR 5/6)	不良	胎土は粗。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。石英・長石多い。
907	4	G-D5	繩文土器	深鉢	胴部					7~11	明赤褐 (GYR 5/6)	明赤褐 (GYR 5/6)	明赤褐 (GYR 5/6)	良	胎土はやや粗。0.5mmの大砂粒を多く含む。
908	4	G-D5	繩文土器	深鉢	胴上部					7.0	黒灰 (GYR 4/1)	明赤褐 (GYR 5/6)	明赤褐 (GYR 5/6)	良	胎土は緻密。0.5~2mmの大砂粒を多く含む。微細な角閃石を含む。
909	4	G-D5	繩文土器	深鉢	胴部					6~7	にぶい赤褐 (GYR 4/0)	明赤褐 (GYR 5/6)	にぶい赤褐 (GYR 4/0)	良	胎土は緻密。0.5~2mmの大砂粒を多く含む。微細な角閃石を含む。
910	4	G-D5	繩文土器	鉢	口縁部					6.5~11	黒灰 (GYR 5/6)	明赤褐 (GYR 5/6)	にぶい褐 (GYR 5/4)	良	胎土はやや粗。0.5~2mmの大砂粒を多く含む。
911	4	G-D5	繩文土器	鉢	口縁部	23.8				8~12	明赤褐 (GYR 5/6)	明赤褐 (GYR 5/6)	黒灰 (GYR 5/1)	不良	胎土はやや粗。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。石英・長石が多い。
912	4	G-D5	繩文土器	深鉢	口縁部	30.8				6~12	黒灰褐 (GYR 4/2)	明褐 (GYR 5/6)	明褐 (GYR 5/6)	不良	胎土はやや粗。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母を含む。
913	4	G-D5	繩文土器	浅鉢	底一部					11.8	にぶい黄褐 (GYR 5/2)	にぶい褐 (GYR 5/4)	黒褐 (GYR 3/1)	良	胎土は緻密。0.5~1mmの大砂粒を含む。微細な全芸母を含む。
914	4	G-D5	海生土器	壺	口縁部					6~7.5	黒灰褐 (GYR 6/2)	にぶい黄褐 (GYR 6/2)	黒灰 (GYR 7/2)	良	胎土は緻密。2mmの大砂粒を僅かに含む。微細な全芸母を含む。
915	4	G-D5	海生土器	壺	口縁部					7~9	黄褐 (GYR 7/8)	黄褐 (GYR 7/8)	灰黄褐 (GYR 5/2)	良	胎土は緻密。2mmの大砂粒を僅かに含む。
916	4	G-D5	海生土器	壺	口縁部	30.0				5.5~7	明赤褐 (GYR 7/6)	にぶい黄褐 (GYR 6/4)	灰黄褐 (GYR 6/2)	良	胎土は緻密。2mmの大砂粒を僅かに含む。微細な全芸母を多く含む。
917	4	GDS-波紋土器	石器	尖形	最大長 8.0	最大幅 6.7	最大厚 1.9	重量 150g						良	胎土はやや粗。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。石英・長石が目立つ。
918	4	GDS-セラミン	繩文土器	深鉢	口縁部					8~13	明赤褐 (GYR 5/6)	明赤褐 (GYR 5/6)	明赤褐 (GYR 5/6)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母を含む。
919	4	G-D8	繩文土器	深鉢	口縁部					9.5~13	水褐 (GYR 4/6)	明赤褐 (GYR 5/6)	明赤褐 (GYR 5/6)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全芸母を僅かに含む。
920	4	G-E4	繩文土器	深鉢	胴部					6~8	にぶい黄褐 (GYR 6/3)	にぶい褐 (GYR 5/4)	にぶい黄褐 (GYR 6/3)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を僅かに含む。微細な全芸母を僅かに含む。
921	4	G-E4	繩文土器	深鉢	口縁部					9~10	にぶい黄褐 (GYR 7/2)	にぶい黄褐 (GYR 7/2)	黒褐 (GYR 3/1)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。
922	4	G-E4	繩文土器	深鉢	口縁部	31.0				6.5~12	黒褐 (GYR 3/1)	赤褐 (GYR 4/6)	赤褐 (GYR 4/6)	良	胎土はやや粗。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母を含む。
923	4	G-E4	繩文土器	深鉢	口縁部	37.6				9~21	黒灰 (GYR 5/6)	明赤褐 (GYR 5/6)	明赤褐 (GYR 5/6)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母を多く含む。
924	4	G-E4	繩文土器	鉢	口縁部					3.5~6	にぶい黄褐 (GYR 5/2)	にぶい黄褐 (GYR 5/2)	灰黄 (GYR 4/1)	良	胎土は緻密。稍過された船上を使用。微細な全芸母を含む。
925	4	G-E4	繩文土器	深鉢	口縁部					5.5~9	にぶい黄褐 (GYR 5/2)	にぶい黄褐 (GYR 5/2)	にぶい黄褐 (GYR 5/2)	良	胎土は緻密。2mmの大砂粒を少し含む。

遺物番号	調査次第等	出土緯経	遺物種	器種	部位	法量					色調			焼成	備考	
						口径(cm)	頭径(cm)	胴径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	器厚(mm)	内面	外面	断面		
926	4	G E4	繩文 土器	深鉢	口縁部					8.5 ~ 12	赤褐色 (GYR 4-6)	赤褐色 (GYR 4-6)	に赤い黄褐色 (GYR 5-6)	良	粘土は緻密。0.5 ~ 1mmの大砂粒を少し含む。微細な全芸母を少しあむ。	
927	4	G E4	繩文 土器	深鉢	口縁部					5 ~ 7.5	に赤い赤褐色 (GYR 4-3)	灰褐色 (GYR 4-6)	に赤い赤褐色 (GYR 4-6)	良	粘土はやや粗。1 ~ 2mmの大砂粒を少し含む。微細な全芸母を僅かに含む。	
928	4	G E4	繩文 土器	浅鉢	口縁部					6 ~ 9.5	に赤い褐色 (GYR 5-4)	に赤い黄褐色 (GYR 5-4)	灰褐色 (GYR 6-2)	良	粘土は緻密。3mmの大砂粒を少し含む。微細な全芸母を僅かに含む。	
929	4	G E4	繩文 土器	浅鉢	口縁部					7 ~ 9.5	黒褐色 (GYR 4-3)	黒褐色 (GYR 3-3)	灰青褐色 (GYR 5-2)	良	粘土は緻密。1.5 ~ 2mmの大砂粒を少し含む。	
930	4	G E4	繩文 土器	深鉢	口縁部					7.5 ~ 13	に赤い黄褐色 (GYR 5-6)	褐 (GYR 6-0)	灰褐色 (GYR 5-6)	不良	粘土はやや粗。1 ~ 1.5mmの大砂粒を含む。微細な全芸母・角閃石を僅かに含む。	
931	4	G E4	繩文 土器	深鉢	口縁部					4.5 ~ 7	に赤い黄褐色 (GYR 5-6)	に赤い黄褐色 (GYR 5-6)	黄褐色 (GYR 4-1)	良	粘土はやや粗。微細な全芸母を僅かに含む。	
932	4	G E4	繩文 土器	鉢	口縁部					6 ~ 8	灰褐色 (GYR 4-2)	に赤い黄褐色 (GYR 6-3)	に赤い黄褐色 (GYR 6-3)	良	粘土はやや粗。0.5 ~ 1mmの大砂粒を少し含む。	
933	4	G E4	繩文 土器	鉢	胴 部					4 ~ 7	明赤褐色 (GYR 5-6)	明赤褐色 (GYR 5-6)	明赤褐色 (GYR 5-6)	不良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。	
934	4	G E4	繩文 土器	浅鉢	胴 部					4 ~ 8	に赤い褐色 (GYR 5-4)	に赤い褐色 (GYR 5-4)	灰褐色 (GYR 5-2)	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。微細な全芸母をばらに含む。	
935	4	G E4	繩文 土器	深鉢	底 部					8 ~ 11	褐 (GYR 6-0)	に赤い黄褐色 (GYR 6-4)	に赤い黄褐色 (GYR 6-4)	良	粘土はやや粗。0.5 ~ 1.5mmの大砂粒を含む。微細な全芸母を多く含む。	
936	4	G E4	繩文 土器	深鉢	底 部					13.8	7.5 ~ 11	褐 (GYR 6-0)	褐 (GYR 6-0)	褐 (GYR 6-0)	良	粘土はやや粗。1 ~ 2mmの大砂粒を含む。微細な全芸母を僅かに含む。
937	4	G E4	土製品	内盤	定形	最大長 42	最大幅 4.1			5 ~ 55	黒褐色 (GYR 3-1)	黒褐色 (GYR 3-1)	に赤い褐色 (GYR 5-3)	土器片	土器片を転用。	
938	4	GEI 土器 目録	石器	石器	定形	最大長 58	最大幅 4.4	最大厚 1.4	重量 52g							
939	4	GEI 土器 目録	石器	石器	半分 欠損	最大長 63	最大幅 8.0	最大厚 2.1	重量 167g							
940	4	一括	繩文 土器	鉢	口縁部	43.0				6 ~ 11	明赤褐色 (GYR 6-0)	赤褐色 (GYR 4-8)	灰褐色 (GYR 3-1)	良	粘土は緻密。0.5 ~ 5mmの大砂粒を含む。比較的精選された粘土を使用。	
941	4	一括	繩文 土器	深鉢	口縁部					6 ~ 16	に赤い黄褐色 (GYR 5-4)	明褐色 (GYR 5-6)	に赤い黄褐色 (GYR 5-6)	不良	粘土はやや粗。0.5 ~ 2mmの大砂粒を含む。微細な全芸母を少し含む。	
942	4	一括	繩文 土器	深鉢	口縁部					6 ~ 13	灰褐色 (GYR 5-2)	明褐色 (GYR 5-6)	灰褐色 (GYR 3-1)	良	粘土は粗。0.5 ~ 1mmの大砂粒を多く含む。	
943	4	一括	繩文 土器	鉢	口縁部					9 ~ 14	に赤い褐色 (GYR 6-4)	褐 (GYR 6-6)	褐 (GYR 6-6)	良	粘土は粗。0.5mmの大砂粒を多く含む。角閃石を含む。	
944	4	一括	繩文 土器	深鉢	口縁部					9 ~ 15	黒 (GYR 4-1)	明赤褐色 (GYR 4-1)	明赤褐色 (GYR 5-6)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母を多く含む。	
945	4	一括	繩文 土器	深鉢	口縁部					8 ~ 14.5	明赤褐色 (GYR 5-6)	明赤褐色 (GYR 5-6)	明赤褐色 (GYR 5-6)	良	粘土は緻密。0.5 ~ 1mmの大砂粒を含む。微細な全芸母を含む。	
946	4	一括	繩文 土器	深鉢	口縁部					5 ~ 13	明赤褐色 (GYR 5-6)	に赤い赤褐色 (GYR 5-4)	に赤い赤褐色 (GYR 5-4)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。	
947	4	一括	繩文 土器	深鉢	口縁部					6 ~ 11	に赤い黄褐色 (GYR 6-4)	に赤い黄褐色 (GYR 5-3)	に赤い黄褐色 (GYR 6-4)	良	粘土は緻密。0.5 ~ 1mmの大砂粒を含む。微細な全芸母を僅かに含む。	
948	4	一括	繩文 土器	深鉢	口縁部					6 ~ 9	黒 (GYR 2-1)	に赤い黄褐色 (GYR 6-3)	に赤い黄褐色 (GYR 6-3)	良	粘土は緻密。比較的精選された粘土を使用。	
949	4	一括	繩文 土器	深鉢	口縁部					6.5 ~ 12.5	黒 (GYR 2-1)	黒 (GYR 2-1)	に赤い黄褐色 (GYR 6-4)	良	粘土は緻密。微細な全芸母を含む。	
950	4	一括	繩文 土器	深鉢	口縁部					4.5 ~ 7	明赤褐色 (GYR 5-6)	明赤褐色 (GYR 5-6)	明赤褐色 (GYR 5-6)	良	粘土は緻密。微細な全芸母を含む。	

遺物番号	調査次第等	出土緯	遺物種	器種	部位	法量				色調			焼成	備考	
						口径(cm)	頭径(cm)	胴径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	器厚(mm)	内面	外面		
951	4	一括	織文土器	深鉢	口縁部					8~15	灰青褐色 (GYR 5-2)	褐 (GYR 6-6)	灰青褐色 (GYR 6-2)	五良	胎土はやや粗。0.5~1mmの大砂粒を含む。
952	4	一括	織文土器	深鉢	口縁部	41.0				6~11	にふい黄褐色 (GYR 6-0)	にふい褐色 (GYR 5-0)	にふい黄褐色 (GYR 6-0)	良	胎土はやや粗。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。微細な全玉母を多く含む。
953	4	一括	織文土器	深鉢	口縁部					9~14.5	にふい黄褐色 (GYR 5-2)	褐 (GYR 6-6)	赤褐色 (GYR 4-6)	良	胎土はやや粗。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。微細な全玉母を多く含む。
954	4	一括	織文土器	深鉢	口縁部					8~11	黒褐色 (GYR 3-2)	明小褐 (GYR 5-8)	明小褐 (GYR 5-8)	良	胎土は細密。0.5mmの大砂粒を含む。
955	4	一括	織文土器	深鉢	口縁部	22.2				6~10	にふい黄褐色 (GYR 5-3)	灰赤褐色 (GYR 4-2)	灰青褐色 (GYR 5-2)	良	胎土は細密。精選された胎土を使用。
956	4	一括	織文土器	深鉢	口縁部					8~12	にふい黄褐色 (GYR 6-0)	明小褐 (GYR 5-0)	にふい黄褐色 (GYR 6-0)	良	胎土は細密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全玉母を多く含む。
957	4	一括	織文土器	鉢	口縁部					6~9	黒褐色 (GYR 3-1)	黒褐色 (GYR 3-1)	明褐色 (GYR 5-6)	不良	胎土は細密。5~10mmの大砂粒をまことに含む。
958	4	一括	織文土器	深鉢	口縁部					7~8	褐 (GYR 6-8)	褐 (GYR 6-6)	明小褐 (GYR 5-6)	良	胎土はやや粗。1mmの大砂粒を多く含む。微細な全玉母を確かに含む。
959	4	一括	織文土器	深鉢	口縁部					9~12	にふい褐色 (GYR 5-4)	にふい黄褐色 (GYR 6-0)	灰青褐色 (GYR 5-2)	不良	胎土は粗。0.5~2mmの大砂粒を多く含む。全玉母をまことに含む。
960	4	一括	織文土器	深鉢	口縁部					7~11	黒 (GY 2-1)	にふい褐色 (GYR 4-3)	にふい褐色 (GYR 5-4)	良	胎土は細密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全玉母を確かに含む。
961	4	一括	織文土器	深鉢	胴上部					7.5~10	にふい赤褐色 (GYR 5-0)	明小褐 (GYR 5-6)	黒褐色 (GYR 3-1)	良	胎土は細密。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全玉母を含む。
962	4	一括	織文土器	深鉢	胴上部					6~7	黄褐色 (GY 4-1)	赤褐色 (GYR 4-5)	赤褐色 (GYR 4-8)	良	胎土はやや粗。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。微細な全玉母を確かに含む。
963	4	一括	織文土器	浅鉢	口縁部					6.5~10.5	灰褐色 (GYR 4-2)	にふい赤褐色 (GYR 4-3)	にふい黄褐色 (GYR 5-3)	良	胎土は細密。微細な全玉母を確かに含む。
964	4	一括	織文土器	浅鉢	底 部				9.8	7~9	黑褐色 (GYR 3-2)	黒褐色 (GYR 3-2)	にふい黄褐色 (GYR 5-3)	良	胎土は細密。0.5~1mmの大砂粒を含む。微細な角閃石を含む。
965	4	一括	織文土器	鉢	口縁部	24.4				9~10	黒褐色 (GYR 3-1)	明小褐 (GYR 5-5)	明小褐 (GYR 5-8)	良	胎土は細密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な角閃石を含む。
966	4	一括	織文土器	浅鉢	胴 部					4~5.5	褐 (GYR 7-6)	褐 (GYR 7-6)	褐 (GYR 7-6)	良	胎土は細密。微細な全玉母を多く含む。
967	4	一括	織文土器	深鉢	口縁部	36.2				6~8	にふい黄褐色 (GYR 5-3)	褐 (GYR 6-6)	褐 (GYR 6-6)	良	胎土は細密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全玉母を多く含む。
968	4	一括	織文土器	深鉢	口縁部	39.2				8~9.5	にふい褐色 (GYR 5-4)	明小褐 (GYR 5-6)	明小褐 (GYR 5-6)	良	胎土は細密。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。微細な全玉母を多く含む。
969	4	一括	織文土器	深鉢	口縁部					5~10	明小褐 (GYR 5-6)	明小褐 (GYR 5-6)	赤褐色 (GY 4-6)	良	胎土はやや粗。0.5~2mmの大砂粒を含む。微細な全玉母を確かに含む。
970	4	一括	織文土器	深鉢	口縁部					5~10.5	明小褐 (GYR 5-6)	明小褐 (GYR 5-6)	明小褐 (GYR 5-6)	良	胎土は細密。微細な全玉母・角閃石をまことに含む。
971	4	一括	織文土器	深鉢	口縁部	33.0				6~10.5	灰褐色 (GYR 4-6)	褐 (GYR 4-6)	にふい黄褐色 (GYR 6-0)	良	胎土は細密。0.5~1mmの大砂粒を含む。微細な全玉母を多く含む。
972	4	一括	織文土器	深鉢	口縁部					5.5~10.5	明小褐 (GYR 5-6)	明小褐 (GYR 5-6)	にふい赤褐色 (GYR 5-2)	良	胎土は粗。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。微細な全玉母を含む。
973	4	一括	織文土器	深鉢	口縁部					9.5~11.5	明小褐 (GYR 5-6)	明小褐 (GYR 5-6)	明褐色 (GYR 6-6)	良	胎土はやや粗。0.5~1mmの大砂粒を含む。微細な全玉母を含む。
974	4	一括	織文土器	深鉢	口縁部					4.5~10	にふい褐色 (GYR 5-3)	にふい褐色 (GYR 5-0)	にふい黄褐色 (GYR 5-0)	良	胎土はやや粗。1mmの大砂粒を確かに含む。微細な全玉母を含む。
975	4	一括	織文土器	深鉢	口縁部	26.7				7~9	にふい黄褐色 (GYR 5-3)	にふい黄褐色 (GYR 5-3)	にふい黄褐色 (GYR 5-3)	不良	胎土はやや粗。1~3mmの大砂粒をまことに含む。

遺物番号	調査次元等	出土緯	遺物種類	器種	部位	法量					色調			焼成	備考
						口径(cm)	頭径(cm)	胴径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	器厚(mm)	内面	外面	断面	
976	4	一括	繩文土器	深鉢	口縁部	40.2				5.5 ~ 8.5	明赤褐色 GYR 5~6	明赤褐色 GYR 5~6	明赤褐色 GYR 5~6	良	粘土は緻密。0.5 ~ 1mm大の砂粒を含む。微細な全芸母を多く含む。
977	4	一括	繩文土器	深鉢	口縁部	30.6				6 ~ 9	褐 GYR 6~8	褐 GYR 6~8	に赤い黄褐色 GYR 6~8	良	粘土は粗。0.5 ~ 1mm大の砂粒を多く含む。微細な全芸母を含む。
978	4	一括	繩文土器	深鉢	頭胴部					6 ~ 8	明赤褐色 GYR 5~6	明赤褐色 GYR 5~6	明赤褐色 GYR 5~6	良	粘土は緻密。3mm大の砂粒を保有する。微細な全芸母を含む。
979	4	一括	繩文土器	深鉢	胴 部					6 ~ 8	に赤い黄褐色 GYR 5~8	に赤い黄褐色 GYR 5~8	に赤い黄褐色 GYR 5~8	良	粘土はやや粗。0.5 ~ 1mm大の砂粒を多く含む。微細な全芸母を多く含む。
980	4	一括	繩文土器	深鉢	胴 部					8 ~ 9.5	明赤褐色 GYR 5~6	に赤い黄褐色 GYR 5~8	に赤い黄褐色 GYR 5~8	良	粘土はやや粗。0.5 ~ 1mm大の砂粒を多く含む。微細な全芸母を含む。
981	4	一括	繩文土器	深鉢	口縁部					4 ~ 7	に赤い黄褐色 GYR 5~4	に赤い黄褐色 GYR 5~4	に赤い黄褐色 GYR 5~4	良	粘土はやや粗。1mm大の砂粒を含む。
982	4	一括	繩文土器	深鉢	口縁部					5 ~ 8	黒褐色 GYR 3~1	明赤褐色 GYR 5~6	に赤い黄褐色 GYR 6~4	良	粘土は緻密。0.5 ~ 1mm大の砂粒を含む。微細な全芸母を含む。
983	4	一括	繩文土器	鉢	口縁部	16.0				4.5 ~ 6	灰褐色 GYR 4~2	灰褐色 GYR 4~2	褐 GYR 6~6	不良	粘土はやや粗。0.5mm大の砂粒を多く含む。
984	4	一括	繩文土器	深鉢	口縁部					7 ~ 9	に赤い黄褐色 GYR 4~3	褐 GYR 4~6	灰褐色 GYR 4~2	良	粘土はやや粗。0.5 ~ 1mm大の砂粒を含む。微細な全芸母・角閃石をまばらに含む。
985	4	一括	繩文土器	深鉢	口縁部	44.8				5 ~ 10	灰褐色 GYR 6~2	に赤い黄褐色 GYR 6~3	に赤い黄褐色 GYR 6~3	良	粘土は緻密。比較的精選された粘土を使用。微細な全芸母を含む。
986	4	一括	繩文土器	鉢	口縁部	27.8				6 ~ 8	灰褐色 GYR 5~4	明赤褐色 GYR 5~6	灰褐色 GYR 4~1	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。微細な角閃石を多く含む。
987	4	一括	繩文土器	深鉢	口縁部					6.0	に赤い黄褐色 GYR 5~4	黑褐色 GYR 3~1	黑褐色 GYR 3~1	良	粘土は緻密。0.5mm大の砂粒を含む。微細な全芸母を含む。
988	4	一括	繩文土器	鉢	口縁部	16.0				5.5 ~ 7	に赤い黄褐色 GYR 6~4	に赤い黄褐色 GYR 6~3	黑褐色 GYR 2~1	良	粘土は緻密。微細な全芸母を保有する。
989	4	一括	繩文土器	深鉢	口縁部					6 ~ 13	灰褐色 GYR 5~2	灰褐色 GYR 5~1	灰褐色 GYR 5~2	良	粘土は緻密。0.5 ~ 1mm大の砂粒を多く含む。微細な全芸母をまばらに含む。
990	4	一括	繩文土器	深鉢	口縁部					7 ~ 10	灰褐色 GYR 4~2	明赤褐色 GYR 5~6	明赤褐色 GYR 5~6	良	粘土は緻密。比較的精選された粘土を使用。微細な全芸母を保有する。
991	4	一括	繩文土器	深鉢	胴上部					6.0	明赤褐色 GYR 5~8	明赤褐色 GYR 5~8	明赤褐色 GYR 5~8	良	粘土はやや粗。0.5 ~ 1mm大の砂粒を含む。微細な全芸母・角閃石を多く含む。
992	4	一括	繩文土器	深鉢?	胴上部					4 ~ 5	明赤褐色 GYR 5~6	明赤褐色 GYR 5~6	明赤褐色 GYR 5~6	良	粘土は緻密。0.5mm大の砂粒を多く含む。微細な全芸母を含む。
993	4	一括	繩文土器	深鉢	頭胴部					6 ~ 8	明赤褐色 GYR 5~6	灰褐色 GYR 4~2	に赤い黄褐色 GYR 5~4	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。角閃石を多く含む。
994	4	一括	繩文土器	深鉢	頭胴部	23.0				7.5 ~ 11	褐 GYR 6~6	褐 GYR 6~6	褐 GYR 6~6	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。微細な全芸母を含む。
995	4	一括	繩文土器	深鉢	胴 部					8 ~ 8.5	に赤い黄褐色 GYR 6~4	褐 GYR 6~6	に赤い黄褐色 GYR 6~7	良	粘土は緻密。0.5 ~ 2mm大の砂粒を多く含む。微細な全芸母・角閃石を多く含む。
996	4	一括	繩文土器	鉢	胴下部	11.8				5 ~ 6	灰褐色 GYR 6~6	に赤い黄褐色 GYR 5~4	褐 GYR 6~6	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。微細な全芸母を含む。
997	4	一括	繩文土器	深鉢	口縁部					5.5 ~ 8	明赤褐色 GYR 5~6	明赤褐色 GYR 5~6	赤褐色 GYR 4~6	良	粘土はやや粗。0.5 ~ 1mm大の砂粒を多く含む。微細な全芸母を含む。
998	4	一括	繩文土器	深鉢	口縁部	41.2				5.5 ~ 7	明赤褐色 GYR 5~6	明赤褐色 GYR 5~6	に赤い黄褐色 GYR 5~3	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。微細な全芸母を含む。
999	4	一括	繩文土器	深鉢	口縁部	36.8				5 ~ 8	明赤褐色 GYR 5~6	明赤褐色 GYR 5~6	に赤い黄褐色 GYR 6~3	良	粘土は緻密。0.5 ~ 1mm大の砂粒を含む。
1000	4	一括	繩文土器	深鉢	口縁部	54.8				4.5 ~ 5.5	明赤褐色 GYR 5~6	明赤褐色 GYR 5~6	明赤褐色 GYR 3~2	良	粘土は緻密。微細な全芸母を含む。

遺物番号	調査次元等	出土緯	遺物種	器種	部位	法量				色調			焼成	備考		
						口径(cm)	頭径(cm)	胴径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	器厚(mm)	内面	外面			
1001	4	一括	繩文土器	深鉢	口縁部	47.0				6~8	赤褐色 GYR 4/8	赤褐色 GYR 4/8	赤褐色 GYR 4/8	良	粘土はやや粗。0.5~2mmの大砂粒を含む。微細な全芸母を多く含む。	
1002	4	一括	繩文土器	深鉢	口縁部	27.4				5~8	褐 GYR 4/6	明赤褐色 GYR 5/6	明赤褐色 GYR 5/6	良	粘土はやや粗。1mmの大砂粒を含む。微細な全芸母を多く含む。	
1003	4	一括	繩文土器	深鉢	口縁部	26.0				5.5~7.5	明赤褐色 GYR 5/6	明赤褐色 GYR 5/6	にぶい黄褐色 GYR 5/4	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。微細な全芸母を含む。	
1004	4	一括	繩文土器	深鉢	口縁部	30.6				4~7.5	明赤褐色 GYR 5/6	明赤褐色 GYR 5/6	褐 GYR 4/6	良	粘土は緻密。1mmの大砂粒を僅かに含む。微細な全芸母を多く含む。	
1005	4	一括	繩文土器	深鉢	口縁部	27.0				4~5.5	褐 GYR 4/5	褐 GYR 4/4	にぶい褐色 GYR 5/3	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。微細な全芸母を含む。	
1006	4	一括	繩文土器	浅鉢	胴 部					4~5	浅黃 GYR 4/1	浅黃 GYR 3/1	黒褐色 GYR 7/4	良	粘土は緻密。比較的精選された粘土を使用。微細な全芸母を含む。	
1007	4	一括	繩文土器	深鉢	底 部					11.6	5~10.5	にぶい褐色 GYR 5/4	明赤褐色 GYR 5/6	明赤褐色 GYR 5/6	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を僅かに含む。微細な全芸母を含む。
1008	4	一括	繩文土器	深鉢	底 部	9.0				5~10	にぶい褐色 GYR 5/4	明赤褐色 GYR 5/6	黒褐色 GYR 3/2	良	粘土はやや粗。1mmの大砂粒を含む。微細な全芸母を多く含む。	
1009	4	一括	繩文土器	深鉢	底 部	10.8				8~17	にぶい黄褐色 GYR 6/6	褐 GYR 6/6	にぶい褐色 GYR 5/4	良	粘土はやや粗。0.5~2mmの大砂粒を含む。微細な全芸母を含む。	
1010	4	一括	繩文土器	深鉢	底 部	13.0				9~12.5	にぶい黄褐色 GYR 5/5	にぶい黄褐色 GYR 5/5	にぶい黄褐色 GYR 5/5	不良	粘土は粗。0.5~2mmの大砂粒を多く含む。	
1011	4	一括	繩文土器	深鉢	底 部	4.0				10~11	明赤褐色 GYR 5/6	にぶい黄褐色 GYR 5/4	にぶい黄褐色 GYR 5/4	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全芸母と、土殻片または土塊を含む。	
1012	4	一括	繩文土器	深鉢	底 部	10.0				7~12	明赤褐色 GYR 5/6	明赤褐色 GYR 5/6	にぶい黄褐色 GYR 5/5	良	粘土はやや粗。0.5~1mmの大砂粒を含む。	
1013	4	一括	繩文土器	深鉢	底 部					7.0	14~20	灰褐色 GYR 5/2	褐 GYR 6/6	灰褐色 GYR 5/2	良	粘土はやや粗。1mmの大砂粒を僅かに含む。角閃石を多く含む。
1014	4	一括	繩文土器	深鉢	底 部	8.8				4~10	灰褐色 GYR 4/2	にぶい黄褐色 GYR 5/3	明赤褐色 GYR 5/5	良	粘土は緻密。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母を多く含む。	
1015	4	一括	繩文土器	深鉢	底 部					10.6	9~15	明赤褐色 GYR 5/6	明赤褐色 GYR 5/6	にぶい黄褐色 GYR 5/4	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を僅かに含む。微細な全芸母を多く含む。
1016	4	一括	繩文土器	鉢	底 部	6.6				8~11	にぶい黄褐色 GYR 6/2	にぶい黄褐色 GYR 7/4	褐 GYR 6/6	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。微細な全芸母を含む。	
1017	4	一括	繩文土器	深鉢	底 部					9.0	3.5~11	褐灰褐色 GYR 5/2	にぶい褐色 GYR 5/5	褐 GYR 6/6	良	粘土はやや粗。0.5~2mmの大砂粒を含む。微細な全芸母を多く含む。
1018	4	一括	繩文土器	鉢	底 部	7.6				10.0	黑褐色 GYR 6/2	にぶい黒褐色 GYR 5/4	にぶい黒褐色 GYR 4/3	良	粘土は緻密。0.5~1mmの大砂粒を含む。微細な全芸母を多く含む。	
1019	4	一括	繩文土器	浅鉢	口縁部	33.8				6~6.5	にぶい黄褐色 GYR 6/4	にぶい褐色 GYR 6/4	にぶい黄褐色 GYR 6/4	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。微細な全芸母を多く含む。	
1020	4	一括	繩文土器	浅鉢	口縁部	24.8				6~7	にぶい褐色 GYR 6/4	にぶい褐色 GYR 6/4	にぶい褐色 GYR 6/3	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を僅かに含む。微細な全芸母を僅かに含む。	
1021	4	一括	繩文土器	鉢	口縁部	12.8				6.0	褐赤褐色 GYR 3/2	褐赤褐色 GYR 3/2	明赤褐色 GYR 5/6	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。微細な全芸母を僅かに含む。	
1022	4	一括	繩文土器	浅鉢	口縁部					5~7.5	灰褐色 GYR 3/2	灰褐色 GYR 4/2	にぶい黄褐色 GYR 5/2	良	粘土は緻密。比較的精選された粘土を使用。	
1023	4	一括	繩文土器	浅鉢	口縁部					5~6	灰褐色 GYR 4/4	灰褐色 GYR 4/4	にぶい褐色 GYR 6/4	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。微細な全芸母を多く含む。	
1024	4	一括	繩文土器	浅鉢	口縁部					4.5	にぶい黄褐色 GYR 4/3	灰褐色 GYR 4/2	明赤褐色 GYR 5/6	良	粘土はやや粗。0.1~1mmの大砂粒を含む。微細な全芸母を含む。	
1025	4	一括	繩文土器	注口付土器	頭側部	10.8				4~6	灰褐色 GYR 6/2	にぶい黄褐色 GYR 6/4	オリーブ黒 GYR 3/1	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。精選された粘土を使用。	

遺物番号	調査次第等	出土緯経	遺物種類	器種	部位	法量					色調			焼成	備考
						口径(cm)	頭径(cm)	胸径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	蓋厚(mm)	内面	外面	断面	
1026	4	一括	織文土器	浅鉢	胴 部		14.4			5 ~ 6	黒褐 (GYR 3/1)	黒褐 (GYR 3/1)	黒褐 (GYR 3/1)	良	胎土は緻密。精選された砂粒を使用。微細な金雲母を多く含む。
1027	4	一括	織文土器	浅鉢	胴 部				4.5 ~ 6	■■■■■ (GYR 2/1)	■■■■■ (GYR 5/5)	■■■■■ (GYR 2/1)	良	胎土は緻密。0.5mm以上の砂粒を含む。精選された砂粒を使用。	
1028	4	一括	織文土器	浅鉢	口縁部	29.0				4.5 ~ 8	赤褐 (GYR 4/6)	明赤褐 (GYR 5/6)	■■■■■ (GYR 5/3)	良	胎土はやや粗。0.5mm以上の砂粒を含む。微細な金雲母を含む。
1029	4	一括	織文土器	浅鉢	底 部		10.4		9 ~ 11	■■■■■ (GYR 5/3)	■■■■■ (GYR 5/6)	■■■■■ (GYR 3/1)	良	胎土は緻密。0.5mm以上の砂粒を含む。微細な金雲母・角閃石を僅かに含む。	
1030	4	一括	織文土器	鉢か?	底 部			40	6.5 ~ 8	■■■■■ (GYR 5/4)	■■■■■ (GYR 6/4)	■■■■■ (GYR 6/4)	良	胎土は緻密。微細な金雲母を含む。	
1031	4	一括	織文土器	浅鉢	底 部			4.4	5 ~ 9	■■■■■ (GY 4/1)	■■■■■ (GY 5/6)	■■■■■ (GY 3/1)	良	胎土はやや粗。0.5mm以上の砂粒を含む。	
1032	4	表 採	織文土器	深鉢	口縁部				5 ~ 6	■■■■■ (GYR 7/3)	■■■■■ (GYR 5/1)	■■■■■ (GYR 5/1)	良	胎土はやや粗。0.5 ~ 1mmの砂粒を多く含む。	
1033	4	表 採	織文土器	深鉢	口縁部	37.8			8 ~ 15	■■■■■ (GYR 3/1)	■■■■■ (GYR 5/8)	■■■■■ (GYR 5/8)	良	胎土はやや粗。0.5mm以上の砂粒を多く含む。石英・長石多。微細な金雲母・角閃石を含む。	
1034	4	表 採	茎生土器	壺	口縁部	14.0			7 ~ 8	■■■■■ (GYR 6/8)	■■■■■ (GYR 5/6)	■■■■■ (GYR 4/2)	良	胎土はやや粗。1 ~ 5mmの砂粒を含む。微細な金雲母を多く含む。	
1035	4	表 採	織文土器	深鉢	口縁部				5.5 ~ 8	■■■■■ (GYR 5/3)	■■■■■ (GYR 5/3)	■■■■■ (GYR 5/3)	良	胎土は緻密。2mmの砂粒を僅かに含む。微細な金雲母を含む。	
1036	4	表 採	土器	壺	底 部		7.2		4 ~ 7.5	■■■■■ (GYR 7/4)	■■■■■ (GYR 7/4)	■■■■■ (GYR 7/4)	良	胎土は緻密。	
1037	4	表 採	土器	壺	底 部		6.4		6 ~ 12	■■■■■ (GYR 8/4)	■■■■■ (GYR 8/4)	■■■■■ (GYR 8/4)	良	胎土は緻密。1 ~ 3mmの砂粒を含む。	
1038	4	表 採	土器	壺	底 部		6.2		4 ~ 9	■■■■■ (GYR 7/6)	■■■■■ (GYR 7/6)	■■■■■ (GYR 7/6)	良	胎土は緻密。	
1039	4	表 採	土器	小瓶	底 部		4.1		2 ~ 6	■■■■■ (GYR 8/4)	■■■■■ (GYR 8/4)	■■■■■ (GYR 8/4)	良	胎土は緻密。	
1040	4	表 採	土器	-	底 部		7.0		4 ~ 10.5	■■■■■ (GYR 8/4)	■■■■■ (GYR 8/4)	■■■■■ (GYR 8/4)	良	胎土は緻密。0.5mm以上の砂粒を僅かに含む。	
1041	4	表 採	瓦器	-	底 部		4.6		35 ~ 6	■■■■■ (GYR 6/6)	■■■■■ (GYR 6/6)	■■■■■ (GYR 6/6)	良	胎土はやや粗。0.5 ~ 1mmの砂粒を含む。	
1042	4	表 採	瓦器	环	底 部		5.0		3 ~ 5	■■■■■ (GYR 6/6)	■■■■■ (GYR 7/4)	■■■■■ (GYR 7/4)	良	胎土は緻密。4mm以上の砂粒を僅かに含む。	
1043	4	表 採	石器	打製石斧	完形	最大径 7.3	最大幅 8.0	最大幅 2.1	重量 148g						
1044	4	表 採	石器	打製石斧	完形	最大径 8.2	最大幅 7.4	最大幅 1.6	重量 141g						
1045	4	表 採	石器	打製石斧	完形	最大径 8.0	最大幅 6.7	最大幅 1.8	重量 129g						
S62_11_25	一括	織文土器	深鉢	口縁部					6 ~ 9	■■■■■ (GYR 4/1)	■■■■■ (GYR 6/4)	■■■■■ (GYR 6/4)	良	胎土は緻密。0.5mm以上の砂粒を含む。微細な金雲母を含む。	
S62_11_25	一括	織文土器	深鉢	胴 部					9 ~ 13	■■■■■ (GYR 5/3)	■■■■■ (GYR 5/3)	■■■■■ (GYR 5/3)	良	胎土はやや粗。0.5 ~ 1mmの砂粒を含む。	
S62_11_25	一括	織文土器	深鉢	口縁 突起					6 ~ 10	■■■■■ (GYR 5/8)	■■■■■ (GYR 5/8)	■■■■■ (GYR 5/8)	良	胎土は緻密。0.5 ~ 1mmの砂粒を多く含む。石英・長石が立つ。	
S62_11_25	一括	織文土器	深鉢	口縁 突起					5 ~ 8	■■■■■ (GYR 3/2)	■■■■■ (GYR 5/8)	■■■■■ (GYR 2/1)	良	胎土はやや粗。0.5mm以上の砂粒を含む。微細な金雲母を多く含む。	
1049	11_25	一括	織文土器	深鉢	口縁 突起				5 ~ 11	■■■■■ (GYR 5/8)	■■■■■ (GYR 5/8)	■■■■■ (GYR 4/8)	良	胎土は緻密。0.5 ~ 1mmの砂粒を多く含む。微細な金雲母を多く含む。	
1050	11_25	一括	織文土器	深鉢	口縁 突起										

遺物番号	調査次元	遺物種類	遺物種類	部位	法量			色調			焼成	備考	
					口径(cm)	頭径(cm)	胴径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	器厚(mm)			
S62	11.25	一括 織文土器	深鉢	突起					8~12	明赤褐色 (G5YR 5-8)	明赤褐色 (G5YR 5-8)	明赤褐色 (G5YR 5-6)	良 鉄土はやや暗。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。微細な全雲母を多く含む。
S62	11.25	一括 織文土器	深鉢	口縁部	23.6				5~9	明赤褐色 (G5YR 5-8)	明赤褐色 (G5YR 5-8)	にごり、半透明 (G5YR 4-6)	良 鉄土はやや暗。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。微細な全雲母を多く含む。
S62	11.25	一括 織文土器	深鉢	口縁部	37.2				5~8	明褐色 (G5YR 5-6)	明褐色 (G5YR 5-6)	明褐色 (G5YR 5-6)	良 鉄土はやや暗。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。微細な全雲母を多く含む。
S62	11.25	一括 織文土器	深鉢	口縁部	32.8				5~6	黒褐色 (G5YR 3-1)	黒褐色 (G5YR 3-1)	半透明 (G5YR 4-6)	良 鉄土は暗め。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。微細な全雲母を多く含む。
1054	11.25	一括 織文土器	深鉢	口縁部					60	赤褐色 (G5YR 4-8)	赤褐色 (G5YR 4-8)	赤褐色 (G5YR 4-8)	不良 鉄土は赤。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。
1055	11.25	一括 織文土器	深鉢	口縁部					5~8	赤褐色 (G5YR 4-8)	赤褐色 (G5YR 4-8)	赤褐色 (G5YR 4-8)	良 鉄土は暗め。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。微細な全雲母を含む。
S62	11.25	一括 織文土器	深鉢	口縁部					5~8	赤褐色 (G5YR 4-8)	赤褐色 (G5YR 4-8)	赤褐色 (G5YR 4-8)	良 鉄土は暗め。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。微細な全雲母を含む。
1056	11.25	一括 織文土器	深鉢	口縁部					5~8	赤褐色 (G5YR 4-8)	赤褐色 (G5YR 4-8)	赤褐色 (G5YR 4-8)	良 鉄土は暗め。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。微細な全雲母を含む。
1057	11.25	一括 織文土器	深鉢	口縁部					5~9	明赤褐色 (G5YR 5-8)	明赤褐色 (G5YR 5-8)	明赤褐色 (G5YR 5-8)	不良 鉄土はやや暗。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。全雲母を僅に含む。
S62	11.25	一括 織文土器	深鉢	口縁部					5~6	赤褐色 (G5YR 4-6)	赤褐色 (G5YR 4-6)	赤褐色 (G5YR 4-6)	良 鉄土はやや暗。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全雲母が多い。
1058	11.25	一括 織文土器	深鉢	口縁部					5~6	赤褐色 (G5YR 4-6)	赤褐色 (G5YR 4-6)	赤褐色 (G5YR 4-6)	良 鉄土はやや暗。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全雲母が多い。
S62	11.25	一括 織文土器	深鉢	口縁部					6~7	にごい黄褐色 (G0YR 5-6)	にごい黄褐色 (G0YR 5-6)	にごい黄褐色 (G0YR 5-6)	良 鉄土は暗め。0.5~1mmの大砂粒を含む。
1059	11.25	一括 織文土器	深鉢	口縁部					5~6	にごい黄褐色 (G0YR 5-6)	にごい黄褐色 (G0YR 5-6)	にごい黄褐色 (G0YR 5-6)	良 鉄土は暗め。0.5~1mmの大砂粒を含む。
1060	11.25	一括 織文土器	深鉢	口縁部	26.2				5~6	にごい黄褐色 (G0YR 5-6)	小赤褐色 (G5YR 3-6)	黑褐色 (G5YR 3-6)	良 鉄土は暗め。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。
S62	11.25	一括 織文土器	深鉢	口縁部					7~8	赤褐色 (G5YR 4-6)	赤褐色 (G5YR 4-6)	黑褐色 (G5YR 3-1)	良 鉄土は暗め。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全雲母を含む。
1061	11.25	一括 織文土器	深鉢	口縁部					5~6	明赤褐色 (G5YR 5-8)	明赤褐色 (G5YR 5-8)	明赤褐色 (G5YR 5-8)	良 鉄土は暗め。0.5~1mmの大砂粒を含む。
S62	11.25	一括 織文土器	深鉢	口縁部	34.4				5~6	にごい黄褐色 (G0YR 5-6)	にごい黄褐色 (G0YR 5-6)	にごい黄褐色 (G0YR 5-6)	良 鉄土は暗め。0.5~1mmの大砂粒を含む。石英・長石が多い。
1063	11.25	一括 織文土器	深鉢	口縁部					4~7	明赤褐色 (G5YR 5-8)	明赤褐色 (G5YR 5-8)	明赤褐色 (G5YR 5-8)	良 鉄土はやや暗。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全雲母を多く含む。
S62	11.25	一括 織文土器	深鉢	口縁部					6~7	赤褐色 (G5YR 4-6)	赤褐色 (G5YR 4-6)	赤褐色 (G5YR 4-6)	良 鉄土は暗め。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全雲母を含む。
1064	11.25	一括 織文土器	深鉢	口縁部					5~8	赤褐色 (G5YR 4-6)	赤褐色 (G5YR 4-6)	赤褐色 (G5YR 4-6)	良 鉄土は暗め。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全雲母を含む。
S62	11.25	一括 織文土器	深鉢	口縁部					50	明赤褐色 (G5YR 3-6)	明赤褐色 (G5YR 3-6)	黑褐色 (G5YR 3-1)	良 鉄土は暗め。精選された粘土を使用。微細な全雲母を含む。
1065	11.25	一括 織文土器	深鉢	口縁部					5~8	赤褐色 (G5YR 4-6)	赤褐色 (G5YR 4-6)	赤褐色 (G5YR 4-6)	良 鉄土は暗め。精選された粘土を使用。微細な全雲母を含む。
S62	11.25	一括 織文土器	深鉢	口縁部	18.8				5~8	赤褐色 (G5YR 4-6)	赤褐色 (G5YR 4-6)	赤褐色 (G5YR 4-6)	良 鉄土は暗め。精選された粘土を使用。
1066	11.25	一括 織文土器	深鉢	口縁部					5~8	赤褐色 (G5YR 4-6)	赤褐色 (G5YR 4-6)	赤褐色 (G5YR 4-6)	良 鉄土は暗め。精選された粘土を使用。微細な全雲母を含む。
S62	11.25	一括 織文土器	深鉢	口縁部	23.0				5~7	明褐色 (G5YR 5-6)	赤褐色 (G5YR 4-6)	赤褐色 (G5YR 4-6)	不良 鉄土は暗め。精選された粘土を含む。
1068	11.25	一括 織文土器	深鉢	口縁 頭頂					5~12	赤褐色 (G5YR 4-6)	小赤褐色 (G5YR 3-2)	小赤褐色 (G5YR 3-2)	良 鉄土は暗め。微細な全雲母を多く含む。
S62	11.25	一括 織文土器	深鉢	口縁部	29.4				5~6	にごい黄褐色 (G0YR 5-6)	にごい黄褐色 (G0YR 5-6)	黑褐色 (G5YR 4-6)	良 鉄土は暗め。精選された粘土を使用。角閃石とクサリ輝石を含む。
1069	11.25	一括 織文土器	深鉢	口縁部					7~15	小赤褐色 (G5YR 4-6)	小赤褐色 (G5YR 4-6)	半透明 (G5YR 4-6)	良 鉄土はやや暗。0.5mmの大砂粒を多く含む。全雲母を含む。
1070	11.25	一括 織文土器	深鉢	口縁 突起					6~9	小赤褐色 (G5YR 3-2)	小赤褐色 (G5YR 3-2)	黑褐色 (G5YR 3-2)	良 鉄土はやや暗。0.5mmの大砂粒を多く含む。全雲母を含む。
S62	11.25	一括 織文土器	深鉢	口縁部					4~10	黒褐色 (G5YR 3-1)	黒褐色 (G5YR 3-1)	半透明 (G5YR 4-6)	良 鉄土は暗め。精選された粘土を使用。
1071	11.25	一括 織文土器	深鉢	口縁部					6~10	黒褐色 (G5YR 3-1)	黒褐色 (G5YR 3-1)	黑褐色 (G5YR 3-2)	良 鉄土は暗め。0.5mmの大砂粒を含む。角閃石とクサリ輝石を含む。
1072	11.25	一括 織文土器	深鉢	口縁 突起					6~10	黒褐色 (G5YR 3-1)	黒褐色 (G5YR 3-1)	半透明 (G5YR 4-6)	良 鉄土は暗め。精選された粘土を使用。
S62	11.25	一括 織文土器	深鉢	頭頂部					6~10	赤褐色 (G5YR 4-6)	赤褐色 (G5YR 4-6)	赤褐色 (G5YR 4-6)	良 鉄土は暗め。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全雲母を含む。
S62	11.25	一括 織文土器	深鉢	頭頂部					6~7.5	明褐色 (G5YR 5-6)	明褐色 (G5YR 5-6)	明褐色 (G5YR 5-6)	良 鉄土は暗め。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全雲母を多く含む。
1074	11.25	一括 織文土器	深鉢	頭頂部					7~9.5	赤褐色 (G5YR 4-6)	赤褐色 (G5YR 4-6)	にごい赤褐色 (G5YR 4-6)	良 鉄土は暗め。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全雲母を多く含む。
1075	11.25	一括 織文土器	深鉢	頭上部					7~9.5	赤褐色 (G5YR 4-6)	赤褐色 (G5YR 4-6)	にごい赤褐色 (G5YR 4-6)	良 鉄土はやや暗。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全雲母を多く含む。

遺物番号	調査次元	遺物種類	器種	部位	法量					色調			焼成	備考	
					口径(cm)	頭径(cm)	胴径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	器厚(mm)	内面	外面	断面		
1076	11.25	一括 織文土器	深鉢	頭部					6~11.5	明赤褐色 (GSR 5-6)	に赤い青褐色 (GSYR 4-6)	暗赤褐色 (GSR 3-7)	良	粘土はやや粗。0.5~1mmの大粒を多く含む。微細な金雲母を多く含む。	
S62	11.25	織文土器	深鉢	頭部					5~6	明赤褐色 (GSR 5-6)	に赤い青褐色 (GSYR 5-6)	赤褐色 (GSR 4-6)	良	粘土は緻密。0.5~1mmの大粒を含む。微細な金雲母をまばらに含む。	
1077	11.25	一括 織文土器	深鉢	頭部					4~6	明赤褐色 (GSR 5-6)	明赤褐色 (GSR 5-6)	明赤褐色 (GSR 5-6)	良	粘土は緻密。0.5~1mmの大粒を含む。微細な金雲母を多く含む。	
S62	11.25	織文土器	深鉢	頭部					37.6	5~8	明赤褐色 (GSR 5-6)	明赤褐色 (GSYR 5-6)	明赤褐色 (GSR 5-6)	良	粘土は緻密。0.5~1mmの大粒を含む。微細な金雲母を多く含む。
1078	11.25	一括 織文土器	深鉢	頭部					6~9	赤褐色 (GSR 4-6)	暗赤褐色 (GSR 3-6)	赤褐色 (GSR 4-6)	良	粘土はやや粗。0.5mmの大粒を含む。微細な金雲母を多く含む。	
S62	11.25	織文土器	深鉢	頭部					6.0	黄褐色 (GYR 5-6)	黄褐色 (GYR 5-6)	黄褐色 (GYR 5-6)	良	粘土は緻密。0.5mmの大粒を含む。	
1081	11.25	一括 織文土器	深鉢	側下部										粘土は緻密。0.5mmの大粒を含む。	
1082	11.25	一括 織文土器	深鉢	側上部					6~8	赤褐色 (GSR 4-6)	赤褐色 (GSR 4-6)	赤褐色 (GSR 4-6)	良	粘土は緻密。0.5mmの大粒を含む。微細な金雲母を含む。	
S62	11.25	織文土器	深鉢	側上部					7~9	赤褐色 (GSR 4-6)	赤褐色 (GSR 4-6)	赤褐色 (GSR 4-6)	良	粘土は緻密。0.5mmの大粒を多く含む。微細な金雲母を多く含む。	
1084	11.25	一括 織文土器	深鉢	側上部					6~8	明赤褐色 (GSR 5-6)	明赤褐色 (GSR 5-6)	暗灰 (GYR 5-1)	良	粘土は緻密。0.5mmの大粒を多く含む。微細な金雲母を多く含む。	
1085	11.25	一括 織文土器	深鉢	側上部					6~8	赤褐色 (GSR 4-6)	赤褐色 (GSR 4-6)	赤褐色 (GSR 4-6)	良	粘土は緻密。0.5mmの大粒を多く含む。微細な金雲母を多く含む。	
S62	11.25	織文土器	深鉢	側上部					4~5	明赤褐色 (GSR 5-6)	明赤褐色 (GSR 5-6)	明赤褐色 (GSR 5-6)	良	粘土は緻密。0.5mmの大粒を含む。微細な金雲母を含む。	
1086	11.25	一括 織文土器	深鉢	側上部					5~7	黑褐色 (GYR 3-1)	明赤褐色 (GSR 5-6)	暗灰 (GYR 4-2)	良	粘土は緻密。0.5mmの大粒を含む。微細な金雲母を含む。	
S62	11.25	織文土器	深鉢	側上部					5~7	黑褐色 (GYR 3-1)	黑褐色 (GYR 3-1)	に赤い黄褐色 (GYR 5-6)	良	粘土は緻密。0.5mmの大粒を含む。微細な金雲母を含む。	
1087	11.25	一括 織文土器	深鉢	側上部					5~7	黑褐色 (GYR 3-1)	明赤褐色 (GSR 5-6)	暗灰 (GYR 4-2)	良	粘土は緻密。0.5mmの大粒を含む。微細な金雲母を含む。	
S62	11.25	織文土器	深鉢	側上部					5~7	黑褐色 (GYR 3-1)	黑褐色 (GYR 3-1)	に赤い黄褐色 (GYR 5-6)	良	粘土は緻密。0.5mmの大粒を含む。微細な金雲母を含む。	
1088	11.25	一括 織文土器	深鉢	側上部					59	6~12	明赤褐色 (GSR 5-6)	明赤褐色 (GSR 5-6)	暗灰 (GYR 4-2)	良	粘土はやや粗。0.5~1mmの大粒を多く含む。
S62	11.25	織文土器	深鉢	側上部					6.8	4~8	明赤褐色 (GSR 5-6)	赤褐色 (GSR 4-6)	暗灰 (GYR 3-1)	良	粘土は緻密。0.5~1mmの大粒を多く含む。微細な金雲母を多く含む。
1091	11.25	一括 織文土器	深鉢	口縁部					10~11	明赤褐色 (GSR 5-6)	明赤褐色 (GSR 5-6)	に赤い青褐色 (GSYR 5-6)	良	粘土はやや粗。0.5~1mmの大粒を多く含む。	
S62	11.25	織文土器	深鉢	口縁部					10.0	に赤い青褐色 (GSR 5-6)	暗赤褐色 (GYR 4-2)	明赤褐色 (GSR 5-6)	良	粘土はやや粗。0.5~1mmの大粒を多く含む。微細な青陶石が多い。	
1092	11.25	一括 織文土器	深鉢	口縁部					6~14	明赤褐色 (GSR 5-6)	明赤褐色 (GSR 5-6)	明赤褐色 (GSR 5-6)	良	粘土は緻密。0.5mmの大粒を含む。石英、長石が目立つ。	
S62	11.25	織文土器	深鉢	口縁部					7~11	赤褐色 (GSR 4-6)	暗灰 (GYR 4-2)	に赤い黄褐色 (GYR 5-6)	良	粘土をやわらか。0.5~1mmの大粒を含む。金雲母を多く含む。	
1094	11.25	一括 織文土器	深鉢	口縁部					6~8	灰青褐色 (GYR 5-6)	暗灰 (GYR 6-6)	に赤い青褐色 (GSYR 5-6)	良	粘土は緻密。0.5mmの大粒を含む。微細な金雲母を含む。	
S62	11.25	織文土器	深鉢	口縁部					9.0	明赤褐色 (GSR 3-1)	明赤褐色 (GSR 5-6)	黑褐色 (GYR 3-1)	良	粘土は緻密。0.5~1mmの大粒を多く含む。微細な金雲母を多く含む。	
1095	11.25	一括 織文土器	深鉢	口縁部					5~6	灰青褐色 (GYR 5-6)	暗灰 (GYR 6-6)	に赤い青褐色 (GSYR 5-6)	良	粘土は緻密。0.5mmの大粒を含む。微細な金雲母を含む。	
S62	11.25	織文土器	深鉢	口縁部					5~6	明赤褐色 (GSR 5-6)	明赤褐色 (GSR 5-6)	暗灰 (GYR 4-1)	良	粘土は緻密。0.5mmの大粒を多く含む。微細な金雲母を多く含む。	
1096	11.25	一括 織文土器	深鉢	口縁部					50	黑褐色 (GYR 3-2)	明赤褐色 (GSR 5-6)	暗灰 (GYR 3-2)	良	粘土はやや粗。0.5~1mmの大粒を含む。	
S62	11.25	織文土器	深鉢	口縁部					60	暗灰 (GYR 4-1)	暗灰 (GYR 4-1)	暗灰 (GYR 4-1)	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。素彩。	
1097	11.25	一括 織文土器	深鉢	口縁部	27.0										

遺物番号	調査次第等	遺物種類	遺物種類	器種	部位	法量				色調			焼成	備考	
						口径(cm)	頭径(cm)	胴径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	器厚(mm)	内面	外面		
1101	S62 11. 25	一 括	織文 土器	深鉢	口縁部					6 ~ 8	にふい赤褐 GYR 5~6	灰褐 GYR 4~5	褐灰 GYR 6~7	不良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。
1102	S62 11. 25	一 括	織文 土器	注口付 土器	胴下部					5 ~ 7	水鉢 GYR 4~6	黒褐 GYR 3~4	褐灰 GYR 4~5	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。織目全表面を含む。
1103	S62 11. 25	一 括	織文 土器	注口付 土器	胴下部		20.8			7.0	にふい黄褐 GYR 7~8	にふい黄褐 GYR 7~8	褐灰 GYR 3~4	良	粘土はやや粗。0.5mm以上の砂粒を多く含む。織目全表面を含む。
1104	S62 11. 25	一 括	織文 土器	注口付 土器	胴 部					4 ~ 45	にふい黄褐 GYR 6~7	褐灰 GYR 5~6	にふい黄褐 GYR 6~7	不良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。織目全表面を含む。
1105	S62 11. 25	一 括	織文 土器	深鉢	口縁部					8.0	明赤褐 GYR 5~6	明赤褐 GYR 5~6	明赤褐 GYR 5~6	良	粘土は緻密。0.5 ~ 1mmの大砂粒を含む。織目全表面を含む。
1106	S62 11. 25	一 括	石器	打製石斧	基部 柄根	最大長 85	最大幅 56	最大厚 17	重 量	106g					
1107	S62 11. 25	一 括	骨 肉身	垂飾品	完形	最大長 42	最大幅 18	最大厚 15	重 量	6g					
1108	5	試掘 坑1	織文 土器	深鉢	口縁部					5.5 ~ 8	褐赤灰 GYR 3/1	赤褐 GYR 4~6	褐赤灰 GYR 3/1	良	粘土は緻密。0.5mm以上の砂粒を含む。織目全表面を多く含む。試掘坑1の貝層下から出土。
1109	5	試掘 坑1	織文 土器	深鉢	口縁部					6 ~ 7	明赤褐 GYR 5~6	明赤褐 GYR 5~6	褐灰 GYR 3~4	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。試掘坑1の貝層下から出土。
1110	5	試掘 坑1	織文 土器	深鉢	口縁部					5.5 ~ 6	明赤褐 GYR 5~6	明赤褐 GYR 5~6	褐赤灰 GYR 3~4	良	粘土はやや粗。0.5 ~ 1mmの砂粒を比較的多く含む。全表面を含む。試掘坑1の貝層下から出土。
1111	5	試掘 坑1	織文 土器	深鉢	頭部					6 ~ 9	赤褐 GYR 4~6	赤褐 GYR 4~6	褐 GYR 6~7	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。試掘坑1の貝層下から出土。
1112	5	試掘 坑2	織文 土器	深鉢	口縁部					9.0	黒褐 GYR 3/1	黒褐 GYR 3/1	赤褐 GYR 4~6	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。試掘坑2の貝層下から出土。
1113	5	試掘 坑2	織文 土器	深鉢	口縁部					8 ~ 12.5	赤褐 GYR 4~6	赤褐 GYR 4~6	赤褐 GYR 4~6	良	粘土は緻密。0.5 ~ 1mmの大砂粒を含む。全表面を僅かに含む。試掘坑2の貝層下から出土。
1114	5	試掘 坑3	織文 土器	深鉢	口縁部					5.5 ~ 6	明赤褐 GYR 5~6	明赤褐 GYR 5~6	褐赤灰 GYR 3/1	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。織目全表面を含む。試掘坑3の貝層上から出土。
1115	5	試掘 坑4	織文 土器	深鉢	口縁部					5 ~ 6	明赤褐 GYR 5~6	明赤褐 GYR 5~6	明赤褐 GYR 5~6	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。試掘坑4の貝層下から出土。
1116	5	試掘 坑4	織文 土器	深鉢	胴 部					5 ~ 9	黒褐 GYR 3~4	赤褐 GYR 4~5	黒褐 GYR 3~4	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。試掘坑4の貝層下から出土。
1117	5 G A0	織文 土器	深鉢	口縁部	41.0					5 ~ 7	明赤褐 GYR 5~6	明赤褐 GYR 5~6	明赤褐 GYR 5~6	良	粘土はやや粗。0.5 ~ 1mmの大砂粒を含む。石英・鉄石の他、織目全表面を多く含む。
1118	5 G A0	織文 土器	深鉢	口縁部	39.2					5.0	明赤褐 GYR 5~6	明赤褐 GYR 5~6	赤褐 GYR 2~3	良	粘土はやや粗。0.5 ~ 1mmの大砂粒を含む。全表面を含む。織目全表面を多く含む。
1119	5 G A0	織文 土器	深鉢	口縁部	36.4					6 ~ 8	明赤褐 GYR 5~6	にふい赤褐 GYR 4~5	にふい赤褐 GYR 4~5	良	粘土は緻密。0.5 ~ 1mmの大砂粒を多く含む。織目全表面・角円石を含む。
1120	5 G A0	織文 土器	深鉢	口縁部	30.6					5 ~ 7	にふい赤褐 GYR 5~6	明赤褐 GYR 5~6	にふい褐 GYR 5~6	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。角円石と織目全表面を多く含む。
1121	5 G A0	織文 土器	深鉢	口縁部	25.4					4 ~ 6	明赤褐 GYR 5~6	明赤褐 GYR 5~6	黒褐 GYR 3~4	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。織目全表面を多く含む。
1122	5 G A0	織文 土器	深鉢	口縁部	25.4					4.5 ~ 5	明赤褐 GYR 5~6	明赤褐 GYR 5~6	褐赤灰 GYR 3~1	良	粘土は緻密。0.5 ~ 1mmの大砂粒を多く含む。織目全表面を含む。
1123	5 G A0	織文 土器	深鉢	口縁部	25.2					5 ~ 7.5	明赤褐 GYR 5~6	明赤褐 GYR 5~6	明赤褐 GYR 5~6	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を僅かに含む。織目全表面を多く含む。
1124	5 G A0	織文 土器	深鉢	口縁部	24.0					4.0	にふい褐 GYR 5~6	にふい褐 GYR 5~6	にふい褐 GYR 5~6	良	粘土は緻密。簡めて精選された粘土を使用。織目角円石を僅かに含む。
1125	5 G A0 黑色 土	織文 土器	深鉢	口縁部	23.2					5 ~ 6	明赤褐 GYR 5~6	明赤褐 GYR 5~6	明赤褐 GYR 5~6	良	粘土は緻密。織目全表面を多く含む。

遺物番号	調査次第等	出土緯	遺物種類	器種	部位	法量				色調			焼成	備考	
						口径(cm)	頭径(cm)	胴径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	器厚(mm)	内面	外面		
1126	5	G A0 A1	繩文 土器	深鉢	口縁部	22.0				5~8	明赤褐色 (GYR 5~8)	明赤褐色 (GYR 5~8)	暗赤褐色 (GYR 3~7)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な金雲母を含む。
1127	5	G A0	繩文 土器	深鉢	口縁部	30.6				6~9	明赤褐色 (GYR 5~8)	明赤褐色 (GYR 5~8)	明赤褐色 (GYR 5~8)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を僅かに含む。焼造された粘土を使用。金雲母を僅かに含む。
1128	5	G A0	繩文 土器	深鉢	口縁部					5~7	褐 (GYR 6~8)	褐 (GYR 6~8)	灰黒 (GYR 7~9)	良	胎土は緻密。微細な金雲母を含む。
1129	5	G A0	繩文 土器	深鉢	口縁部					5.5~6	にふい・黄褐色 (GYR 7~9)	褐 (GYR 6~8)	褐 (GYR 6~8)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。角閃石を多く含む。
1130	5	G A0	繩文 土器	鉢	口縁部					4.5~5	黒褐色 (GYR 3~4)	褐灰 (GYR 4~5)	褐灰 (GYR 4~5)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を僅かに含む。精選された粘土を使用。
1131	5	G A0	繩文 土器	深鉢	口縁部					9~13	赤褐色 (GYR 4~6)	明赤褐色 (GYR 5~8)	赤褐色 (GYR 4~6)	良	胎土はやや粗。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な金雲母を多く含む。
1132	5	G A0	繩文 土器	深鉢	口縁部					5.5	にふい・赤褐色 (GYR 5~6)	にふい・褐 (GYR 5~6)	黒褐色 (GYR 3~5)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な金雲母・角閃石を含む。
1133	5	G A0	繩文 土器	深鉢	口縁部					5~7	明赤褐色 (GYR 5~8)	明赤褐色 (GYR 5~8)	明赤褐色 (GYR 5~8)	良	胎土は緻密。精選された粘土を使用。微細な金雲母を多く含む。
1134	5	G A0	繩文 土器	深鉢	口縁部					7~9	明赤褐色 (GYR 5~8)	明赤褐色 (GYR 5~8)	暗赤褐色 (GYR 3~7)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を多く含む。
1135	5	G A0	繩文 土器	深鉢	口縁部	36.8				5~6	明赤褐色 (GYR 5~8)	明赤褐色 (GYR 5~8)	明赤褐色 (GYR 5~8)	良	胎土はやや粗。0.5mmの大砂粒を多く含む。角閃石の他、微細な金雲母を含む。
1136	5	G A0	繩文 土器	深鉢	口縁部	38.6				5~7	明褐色 (GYR 5~6)	明褐色 (GYR 5~6)	明褐色 (GYR 5~6)	良	胎土は緻密。精選された粘土を使用。
1137	5	G A0	繩文 土器	深鉢	頭胴部					4~6	褐 (GYR 4~4)	明赤褐色 (GYR 5~8)	にふい・褐 (GYR 5~6)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を多く含む。角閃石を多く含む。
1138	5	G A0	繩文 土器	深鉢	胴上部					5~7	明赤褐色 (GYR 5~8)	褐灰 (GYR 4~2)	褐灰 (GYR 4~2)	良	胎土は緻密。0.5~1mmの大砂粒を含む。角閃石に並びに微細な金雲母を多く含む。
1139	5	G A0	繩文 土器	深鉢	胴 部					6.0	赤褐色 (GYR 4~8)	褐 (GYR 4~4)	赤褐色 (GYR 4~4)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。角閃石と並びに微細な金雲母を多く含む。
1140	5	G A0	繩文 土器	深鉢	胴下部					4.5~7	明赤褐色 (GYR 5~8)	明赤褐色 (GYR 5~8)	明赤褐色 (GYR 5~8)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な金雲母を多く含む。
1141	5	G A0	繩文 土器	深鉢	胴上部					5~7	明赤褐色 (GYR 5~8)	にふい・赤褐色 (GYR 5~6)	明赤褐色 (GYR 5~6)	良	胎土は緻密。微細な金雲母を多く含む。
1142	5	G A0	繩文 土器	深鉢	胴上部					5~6	明赤褐色 (GYR 5~8)	明赤褐色 (GYR 5~8)	明赤褐色 (GYR 5~8)	良	胎土はやや粗。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。
1143	5	G A0	繩文 土器	深鉢	胴 部					8~9	GYR 6~8	褐 (GYR 6~8)	褐 (GYR 6~8)	良	胎土はやや粗。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。微細な角閃石を含む。
1144	5	G A0	弦文 土器	甕上部	頭胴部					5.5~8	褐 (GYR 6~8)	明赤褐色 (GYR 5~8)	褐 (GYR 6~8)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な角閃石をまばらに含む。
1145	5	G A0	繩文 土器	深鉢	底面部					9.0	明赤褐色 (GYR 5~8)	明赤褐色 (GYR 5~8)	褐 (GYR 6~8)	良	胎土はやや粗。0.5~1mmの大砂粒を含む。
1146	5	G A0	繩文 土器	深鉢	底面部					9~14	明赤褐色 (GYR 5~8)	褐灰 (GYR 4~2)	黄褐色 (GYR 5~8)	良	胎土はやや粗。0.5mmの大砂粒を含む。長石・黄褐色の他、金雲母が目立つ。
1147	5	G A0	繩文 土器	深鉢	口縁部					8~10	にふい・黄褐色 (GYR 6~8)	にふい・黄褐色 (GYR 6~8)	にふい・黄褐色 (GYR 6~8)	良	胎土は緻密。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。微細な金雲母を多く含む。
1148	5	G A0	繩文 土器	深鉢	口縁部					4~6	褐 (GYR 6~8)	明黄褐色 (GYR 6~8)	明黄褐色 (GYR 6~8)	良	胎土は緻密。微細な金雲母を多く含む。
1149	5	G A0	繩文 土器	鉢	口縁部					6~11	明赤褐色 (GYR 5~8)	明赤褐色 (GYR 5~8)	にふい・黄褐色 (GYR 6~8)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を僅かに含む。微細な金雲母を含む。
1150	5	G A0	繩文 土器	深鉢	頭胴部					6~9	明赤褐色 (GYR 5~8)	明赤褐色 (GYR 5~8)	褐 (GYR 6~8)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を僅かに含む。

遺物番号	調査次第等	出土緯	遺物種	器種	部位	法量					色調			焼成	備考	
						口径(cm)	頭径(cm)	胴径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	器厚(mm)	内面	外面	断面		
1151	5	G A0	織文 土器	深鉢	頭部					65 ~ 9	浅黄 (GYR 7-3)	明示褐色 (GYR 5-8)	に赤い黄 (GYR 6-4)	五 直	胎土はやや粗。0.5mmの大砂粒を多く含む。青閃石・カリ輝石を含む。	
1152	5	G A0	織文 土器	深鉢	口縁部					6 ~ 11	明示褐色 (GYR 5-6)	明示褐色 (GYR 5-6)	明示褐色 (GYR 5-6)	良	胎土は緻密。微細な金雲母を多く含む。	
1153	5	G A0	織文 土器	深鉢	口縁部	30.8				4 ~ 6	黒褐 (GYR 3-2)	明示褐色 (GYR 5-8)	明示褐色 (GYR 5-8)	良	胎土はやや粗。0.5 ~ 1mmの大砂粒を多く含む。	
1154	5	G A0	織文 土器	深鉢	口縁部	20.0				4 ~ 5	黒褐 (GYR 4-1)	黒褐 (GYR 4-1)	黒褐 (GYR 4-1)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。青閃石をまばらに含む。	
1155	5	G A0	弦生 土器	壺	口縁部	21.6				5 ~ 65	褐 (GYR 6-6)	明褐色 (GYR 5-6)	明褐色 (GYR 5-6)	良	胎土はやや粗。0.5mmの大砂粒を多く含む。	
1156	5	G A0	織文 土器	鉢	口縁部					4 ~ 6	に赤い褐色 (GYR 5-4)	に赤い褐色 (GYR 5-6)	に赤い褐色 (GYR 5-6)	良	胎土は粗。0.5 ~ 1mmの大砂粒を含む。微細な金雲母をまばらに含む。	
1157	5	G A0	土 器	壺	頭部	21.6				4 ~ 65	灰オリーブ (GYR 6-2)	赤褐色 (GYR 4-6)	明示褐色 (GYR 5-8)	良	胎土は緻密。0.5 ~ 1mmの大砂粒を多く含む。微細な金雲母・青閃石を僅かに含む。	
1158	5	G A0	織文 土器	鉢	底 部					4.4	5 ~ 10	浅黄 (GYR 7-3)	明示褐色 (GYR 5-8)	明示褐色 (GYR 5-8)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を多く含む。
1159	5	G A0	織文 土器	深鉢	底 部					60	6 ~ 16	に赤い黄褐色 (GYR 6-4)	明示褐色 (GYR 5-8)	黒褐 (GYR 3/1)	良	胎土はやや粗。0.5 ~ 1mmの大砂粒を含む。底部外周に剥離を有する。
1160	5	G A0	織文 土器	深鉢	底 部					15.0	6 ~ 7	明示褐色 (GYR 5-6)	明示褐色 (GYR 5-8)	明示褐色 (GYR 5-6)	良	胎土はやや粗。0.5 ~ 1mmの大砂粒を含む。
1161	5	G A0	織文 土器	深鉢	底 部					7.0	5.5 ~ 11.5	褐 (GYR 6-6)	褐 (GYR 6-6)	灰黄褐色 (GYR 4-2)	良	胎土はやや粗。0.5 ~ 2mmの大砂粒を含む。微細な金雲母を僅かに含む。
1162	5	G A0	織文 土器	深鉢	底部付近	14.8				9 ~ 13	明示褐色 (GYR 6-6)	明示褐色 (GYR 5-8)	明示褐色 (GYR 5-8)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な金雲母をまばらに含む。	
1163	5	G A0	織文 土器	深鉢	底 部					11.8	6.5 ~ 10	赤褐色 (GYR 4-6)	明示褐色 (GYR 5-8)	明示褐色 (GYR 5-8)	良	胎土はやや粗。0.5 ~ 1mmの大砂粒を多く含む。石英・長石が多い。角端に剥離を有する。
1164	5	G A0	織文 土器	鉢	口縁部	36.6	30.8			4 ~ 6	黒褐 (GYR 3-4)	黒褐 (GYR 3-4)	黒褐 (GYR 3/1)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。石英・カリ輝石を含む。	
1165	5	G A0	織文 土器	鉢	口縁部					7.0	黄褐色 (GYR 4-1)	黒褐 (GYR 3/1)	黒褐 (GYR 3/1)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を多く含む。石英・カリ輝石を含む。	
1166	5	G A0	織文 土器	注口付 土器	胴上部					6 ~ 8	に赤い微褐色 (GYR 6-4)	暗褐色 (GYR 6-4)	明示褐色 (GYR 5-6)	良	胎土は緻密。精選されたもの。	
1167	5	G A0	織文 土器	浅鉢	胴 部	24.0				5.5 ~ 7	黒褐 (GYR 3-2)	明黄褐色 (GYR 6-6)	黒褐 (GYR 3/2)	良	胎土はやや粗。0.5 ~ 1mmの大砂粒を含む。微細な金雲母をまばらに含む。	
1168	5	G A0	織文 土器	浅鉢	胴下部					5 ~ 6	黒褐 (GYR 4-1)	黒褐 (GYR 4-1)	オリーブ黒 (GY 3/1)	良	胎土は緻密。精選された胎土を有する。	
1169	5	G A0	織文 土器	鉢	口縁部					4 ~ 5	に赤い黄褐色 (GYR 6-5)	に赤い黄褐色 (GYR 6-5)	に赤い黄褐色 (GYR 6-5)	良	胎土は緻密。微細な金雲母を多く含む。	
1170	5	G A0	織文 土器	鉢	口縁部					5 ~ 8	に赤い黄褐色 (GYR 7-6)	に赤い黄褐色 (GYR 7-6)	に赤い黄褐色 (GYR 7-6)	良	胎土は精選されたもの。	
1171	5	G A0	石器 打製石斧	定形	最大径 7.1 6.5	最大幅 6.9 9.0	最大厚 3.2	最大厚 1.5 1.6	重量 100.5g							
1172	5	G A0	石器	削器	定形	最大径 7.5	最大幅 9.0	最大厚 3.2	重量 216.5g							
1173	5	G A0	G器	削器	定形	最大径 7.6	最大幅 5.0	最大厚 2.9	重量 107.3g						縦面を打面としており、刃部角は68°	
1174	5	G A0	G器	剥片	-	最大径 8.2	最大幅 5.9	最大厚 2.5	重量 130.5g						打面の形状は单面削で、打面跡は認められず。剥離角は110°である。	
1175	5	G A0	G器	剥片	-	最大径 4.4	最大幅 6.2	最大厚 1.6	重量 29.5g						打面の形状は单面削で、打面移行部は認められない。	

遺物番号	調査次第等	出土緯	遺物種	器種	部位	法量				色調			焼成	備考	
						口径(cm)	頭径(cm)	胴径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	器厚(mm)	内面	外面		
1176	5	G_A1	織文土器	深鉢	胴部		46.8			8 ~ 95	にぶい黄褐色 GYR 5~6	明ホ白 GYR 5~6	明ホ白 GYR 5~6	良	胎土は緻密。0.5 ~ 3mmの大砂粒を含む。石英を少し含む。微細な角閃石を多く含む。
1177	5	G_A1	織文土器	深鉢	底面部					8.5	にぶい黄褐色 GYR 5~6	黒褐色 GYR 3~2	暗褐色 GYR 3~2	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全雲母を多く含む。
1178	5	G_A1	織文土器	深鉢	口縁部					90	青白葉 GYR 5~6	明ホ白 GYR 5~6	にぶい黄褐色 GYR 4~5	良	胎土はやや粗。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全雲母を多く含む。
1179	5	G_A1	織文土器	深鉢	口縁部	230				4.0	赤褐色 GYR 4~8	赤褐色 GYR 4~8	赤褐色 GYR 4~8	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全雲母を多く含む。
1180	5	G_A1	織文土器	深鉢	口縁部					5 ~ 7	明ホ白 GYR 5~6	明ホ白 GYR 5~6	にぶい黄褐色 GYR 5~6	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全雲母を少し含む。
1181	5	G_A1	織文土器	深鉢	口縁部	44.4				7.0	明ホ白 GYR 5~8	明ホ白 GYR 5~8	明ホ白 GYR 5~8	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全雲母を含む。
1182	5	G_A1	織文土器	鉢	口縁部	18.0				2.5 ~ 8	明ホ白 GYR 5~8	明ホ白 GYR 5~8	明ホ白 GYR 5~8	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全雲母多。
1183	5	G_A1	織文土器	深鉢形	口縁部	13.4				4.5 ~ 5.5	灰褐色 GYR 4~5	赤褐色 GYR 3~4	黒褐色 GYR 3~1	良	胎土はやや粗。0.5 ~ 1mmの大砂粒を多く含む。微細な全雲母、角閃石を多く含む。
1184	5	G_A1	織文土器	深鉢	口縁部					6 ~ 7.5	褐 GYR 4~6	明ホ白 GYR 5~8	赤褐色 GYR 4~2	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全雲母、角閃石を含む。
1185	5	G_A1	織文土器	深鉢	頭胴部					4.5 ~ 6.5	明ホ白 GYR 5~8	明ホ白 GYR 5~8	明ホ白 GYR 5~8	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を多く含む。
1186	5	G_A1	織文土器	深鉢	頭胴部					5 ~ 6.5	褐 GYR 4~3	明ホ白 GYR 5~8	灰褐色 GYR 4~2	良	胎土はやや粗。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全雲母を含む。
1187	5	G_A1	織文土器	深鉢	胴上部					5.5 ~ 7	にぶい褐 GYR 5~4	明ホ白 GYR 5~8	黒 GYR 2~1	良	胎土はやや粗。0.5mmの大砂粒を比較的多く含む。
1188	5	G_A1	織文土器	深鉢	胴下部	30.4				7 ~ 10	灰褐色 GYR 4~2	明ホ白 GYR 5~8	明ホ白 GYR 5~8	良	胎土はやや粗。0.5 ~ 2mmの大砂粒を多く含む。石英、長石多い。微細な全雲母を多く含む。
1189	5	G_A1	織文土器	深鉢	胴下部	26.6				6 ~ 7.5	明ホ白 GYR 5~8	明ホ白 GYR 5~8	暗褐色 GYR 3~2	良	胎土は緻密。全雲母を多量に含む。
1190	5	G_A1	織文土器	深鉢	頭胴部					5 ~ 9	明ホ白 GYR 5~6	明ホ白 GYR 5~6	にぶい黄褐色 GYR 6~7	良	胎土はやや粗。0.5 ~ 1mmの大砂粒を多く含む。
1191	5	G_A1	織文土器	深鉢	頭胴部					4.5 ~ 6.5	灰褐色 GYR 3~4	赤褐色 GYR 4~3	赤褐色 GYR 2~1	良	胎土はやや粗。2 ~ 5mmの大砂粒をまばらに含む。
1192	5	G_A1	織文土器	浅鉢	胴部					4 ~ 9	赤褐色 GYR 4~6	黒褐色 GYR 3~1	黒褐色 GYR 3~1	良	胎土は粗。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全雲母を多く含む。
1193	5	G_A1	織文土器	深鉢	胴上部					5.5 ~ 7	明ホ白 GYR 5~8	明ホ白 GYR 5~8	明ホ白 GYR 5~8	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全雲母を含む。
1194	5	G_A1	織文土器	深鉢	胴上部					5.0	赤褐色 GYR 4~6	赤褐色 GYR 4~6	黒褐色 GYR 2~1	良	胎土はやや粗。2 ~ 5mmの大砂粒を多く含む。
1195	5	G_A1	織文土器	深鉢	胴上部					8 ~ 9	明褐色 GYR 5~6	明褐色 GYR 5~6	赤褐色 GYR 4~6	良	胎土はやや粗。2mmの大砂粒を含む。
1196	5	G_A1	織文土器	深鉢	胴上部					5.0	赤褐色 GYR 4~6	赤褐色 GYR 4~6	黒褐色 GYR 2~1	良	胎土はやや粗。2mmの大砂粒を含む。
1197	5	G_A1	織文土器	深鉢	口縁部					5 ~ 8	褐 GYR 4~6	褐 GYR 4~6	にぶい黄褐色 GYR 4~5	良	胎土はやや粗。0.5 ~ 1mmの大砂粒を含む。微細な全雲母をまばらに含む。
1198	5	G_A1	織文土器	深鉢	口縁部					6 ~ 10	明ホ白 GYR 5~8	明ホ白 GYR 5~8	黒褐色 GYR 3~1	良	胎土は緻密。0.5 ~ 1mmの大砂粒を多く含む。微細な全雲母をまばらに含む。
1199	5	G_A1	織文土器	深鉢	頭胴部					4 ~ 8	明ホ白 GYR 5~6	明ホ白 GYR 5~6	明ホ白 GYR 5~6	良	胎土はやや粗。1mmの大砂粒を含む。
1200	5	G_A1	織文土器	深鉢	胴上部					8 ~ 9	黒褐色 GYR 3~1	にぶい褐 GYR 5~6	黒褐色 GYR 5~1	良	胎土はやや粗。0.5mmの大砂粒を含む。微細な角閃石を僅かに含む。

遺物番号	調査次第等	出土緯	遺物種	器種	部位	法量					色調			焼成	備考	
						口径(cm)	頭径(cm)	胴径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	器厚(mm)	内面	外面	断面		
1201	5	G_A1	織文土器	深鉢	口縁部	40.6				5~6	明赤褐色 (G5YR 5-8)	明赤褐色 (G5YR 5-8)	明赤褐色 (G5YR 5-8)	良	鉄土はやや粗。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母を角凹に多く含む。	
1202	5	G_A1	織文土器	深鉢	口縁部	36.0				6~8.5	赤褐色 (GYR 4-6)	明赤褐色 (GYR 5-6)	明赤褐色 (GYR 5-6)	良	鉄土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全芸母を含む。	
1203	5	G_A1	織文土器	深鉢	口縁部	21.0				5~7	明赤褐色 (G5YR 5-8)	明赤褐色 (G5YR 5-8)	赤褐色 (GYR 4-6)	良	鉄土はやや粗。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母を多く含む。	
1204	5	G_A1	織文土器	深鉢	口縁部					6~8	明赤褐色 (G5YR 5-8)	明赤褐色 (G5YR 5-8)	明赤褐色 (G5YR 5-8)	良	鉄土はやや粗。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母を多く含む。	
1205	5	G_A1	織文土器	鉢	口縁部	17.0				4~6	明赤褐色 (G5YR 5-8)	赤褐色 (GYR 4-6)	赤褐色 (GYR 4-6)	良	鉄土はやや粗。0.5~2mmの大砂粒を含む。微細な全芸母を含む。	
1206	5	G_A1	織文土器	鉢	口縁部					6.5	にぶい黄褐色 (GYR 6-8)	相 (GYR 6-8)	にぶい黄褐色 (GYR 6-8)	不良	鉄土は緻密。微細な全芸母を多く含む。	
1207	5	G_A1	織文土器	鉢	口縁部	29.2				4~6	明赤褐色 (G5YR 5-8)	明赤褐色 (G5YR 5-8)	灰赤褐色 (GYR 4-6)	良	鉄土は相。0.5~2mmの大砂粒を含む。	
1208	5	G_A1	織文土器	深鉢	口縁部					6~7.5	黒褐色 (GYR 5-7)	赤褐色 (GYR 4-6)	にぶい黄褐色 (GYR 5-7)	良	鉄土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全芸母を含む。	
1209	5	G_A1	織文土器	深鉢	底部					6.0	6~7	明赤褐色 (GYR 5-8)	明赤褐色 (GYR 5-8)	にぶい黄褐色 (GYR 6-8)	良	鉄土は相。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。
1210	5	G_A1	織文土器	深鉢	底部					7~9	明赤褐色 (GYR 5-8)	明赤褐色 (GYR 5-8)	明赤褐色 (GYR 5-8)	良	鉄土は相。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母を多く含む。	
1211	5	G_A1	織文土器	浅鉢	底部					8.0	9~14	灰赤褐色 (GYR 5-7)	明赤褐色 (GYR 5-8)	にぶい黒褐色 (GYR 5-7)	良	鉄土はやや粗。1~3mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母を保有する。
1212	5	G_A1	織文土器	深鉢	底部					4.6	5~8.5	明赤褐色 (G5YR 5-8)	明赤褐色 (G5YR 5-8)	明赤褐色 (G5YR 5-8)	良	鉄土はやや粗。0.5~1mmの大砂粒を含む。微細な全芸母を多く含む。
1213	5	G_A1	織文土器	深鉢	底部					5.0	5~8	赤褐色 (GYR 4-6)	明赤褐色 (GYR 5-8)	明赤褐色 (GYR 5-8)	良	鉄土はやや粗。0.5mmの大砂粒を多く含む。
1214	5	G_A1	織文土器	深鉢	底部					8.0	8~11	黒褐色 (GYR 5-7)	明赤褐色 (GYR 5-6)	明赤褐色 (GYR 5-6)	良	鉄土はやや粗。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母と角凹石を含む。
1215	5	G_A1	織文土器	浅鉢	口縁部	29.0				5.0	にぶい黄褐色 (GYR 5-8)	灰黃褐色 (GYR 4-6)	黒褐色 (GYR 2/1)	良	鉄土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。	
1216	5	G_A1	織文土器	深鉢	口縁部					6~7	にぶい黄褐色 (GYR 6-8)	黒褐色 (GYR 3-1)	明赤褐色 (GYR 5-6)	良	鉄土は緻密。微細な全芸母を保有する。	
1217	5	G_A1	石器	石鏃	突形	最大長 4.0	最大幅 5.2	最大厚 1.8	重量	80.5g						
1218	5	G_A1	石器	削器	一端欠損	最大長 3.7	最大幅 8.0	最大厚 1.6	重量	25.3g						
1219	5	G_A1	石器	刮片	後大長 3.6	後大幅 4.8	後大厚 1.0	重量	12.5g						剥離角は 131° である。	
1220	5	G_A1	石器	刮片	前大長 6.2	前大幅 4.7	前大厚 1.8	重量	32.5g						打削の状況は鋭面で、剥離角は 108° である。	
1221	5	G_A1	石器	敲石	突形	最大長 6.5	最大幅 5.5	最大厚 3.0	重量	139.5g						
1222	5	SX1	織文土器	深鉢	口縁部	36.0				6~7	黒褐色 (GYR 3-7)	黒褐色 (GYR 3-7)	明赤褐色 (G5YR 5-6)	良	鉄土は緻密。精選された鉄土を使用。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母を多く含む。	
1223	5	SX1	織文土器	深鉢	口縁部					3.5~8.5	相 (G5YR 6-8)	相 (G5YR 6-8)	にぶい黄褐色 (GYR 6-8)	良	鉄土は緻密。Imaxの砂粒を少し含む。微細な全芸母を多く含む。	
1224	5	SX1	織文土器	深鉢	口縁部					6~12	明赤褐色 (GYR 5-8)	明赤褐色 (GYR 5-8)	明赤褐色 (GYR 5-8)	良	鉄土は緻密。0.5~1mmの大砂粒を含む。微細な全芸母を保有する。	
1225	5	SX1	織文土器	深鉢	肩上部					6~10	灰褐色 (GYR 4-6)	明赤褐色 (G5YR 5-8)	灰褐色 (GYR 4-6)	良	鉄土は緻密。0.5~1mmの大砂粒を含む。微細な全芸母を含む。	

遺物番号	調査次第等	出土緯	遺物種	器種	部位	法量				色調			焼成	備考	
						口径(cm)	頭径(cm)	胴径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	器厚(mm)	内面	外面		
1226	5	SX1	繩文土器	深鉢	胴上部					5~9	にふい黄褐色 (GYR 6/4)	明赤褐色 (GYR 5/8)	明赤褐色 (GYR 5/8)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全雲母を含む。
1227	5	SX1	繩文土器	深鉢	胴 部					7.5~8.5	明褐色 (GYR 5/6)	にふい黄褐色 (GYR 5/8)	明褐色 (GYR 5/6)	良	胎土は緻密。0.5~1mmの大砂粒を含む。微細な全雲母をまばらに含む。
1228	5	SX1	繩文土器	小鉢	口縁部	13.4				4~5.5	明赤褐色 (GYR 5/8)	明赤褐色 (GYR 5/8)	明赤褐色 (GYR 5/8)	良	胎土はやや粗。0.5~1mmの大砂粒を含む。微細な全雲母を含む。
1229	5	SX1	繩文土器	深鉢	口縁部	36.0				8~10	灰黄褐色 (GYR 4/2)	明赤褐色 (GYR 5/8)	明赤褐色 (GYR 5/8)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全雲母を深く含む。
1230	5	SX1	繩文土器	深鉢	胴 部					6.5~7.5	にふい褐色 (GYR 5/4)	明褐色 (GYR 5/6)	にふい褐色 (GYR 5/4)	良	胎土はやや粗。1mmの大砂粒を含む。微細な角閃石をまばらに含む。
1231	5	SX1	繩文土器	深鉢	胴 部					7.5~10	にふい褐色 (GYR 5/4)	にふい褐色 (GYR 5/4)	黒褐色 (GYR 3/1)	良	胎土はやや粗。0.5mmの大砂粒を含む。
1232	5	SX1	繩文土器	深鉢	胴 部					5~8	にふい黄褐色 (GYR 6/4)	褐 (GYR 6/6)	にふい黄褐色 (GYR 6/4)	良	胎土は粗。0.5~2mmの大砂粒を含む。微細な全雲母を深く含む。
1233	5	SX1	繩文土器	鉢	底 部					7.0	明赤褐色 (GYR 5/8)	明赤褐色 (GYR 5/8)	明赤褐色 (GYR 5/8)	良	胎土は緻密。0.5~1mmの大砂粒を含む。微細な全雲母を含む。
1234	5	SX1	繩文土器	鉢	底 部	4.4				6~15	明赤褐色 (GYR 5/8)	明赤褐色 (GYR 5/8)	明赤褐色 (GYR 5/8)	良	胎土は緻密。
1235	5	SX1	繩文土器	浅鉢	胴 部					7~8.5	褐 (GYR 6/6)	褐 (GYR 6/6)	褐 (GYR 6/6)	良	胎土はやや粗。0.5~1mmの大砂粒を含む。
1236	5	G A2	繩文土器	深鉢	胴 部					6~7	黒褐色 (GYR 3/2)	黒褐色 (GYR 3/1)	黒褐色 (GYR 3/1)	良	胎土は粗。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。角閃石と長石が目立つ。
1237	5	G A2	繩文土器	深鉢	胴 部					7~9	にふい黄褐色 (GYR 6/2)	灰黃色 (GYR 5/4)	灰黃色 (GYR 5/1)	良	胎土はやや粗。0.5~1mmの大砂粒を含む。石英・長石・ナトリウム長石が目立つ。
1238	5	G A2	繩文土器	鉢	胴 部					8.0	褐 (GYR 4/3)	明赤褐色 (GYR 5/8)	にふい黄褐色 (GYR 5/2)	良	胎土は緻密。0.5~1mmの大砂粒を含む。微細な全雲母を深く含む。
1239	5	G A2	繩文土器	深鉢	口縁 突起					8~16	明赤褐色 (GYR 5/6)	明赤褐色 (GYR 5/6)	明赤褐色 (GYR 5/6)	良	胎土は緻密。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。微細な全雲母を多く含む。
1240	5	G A2	繩文土器	深鉢	口縁 突起					5~9	明赤褐色 (GYR 5/6)	明赤褐色 (GYR 5/6)	にふい黄褐色 (GYR 6/2)	良	胎土は緻密。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。微細な全雲母を含む。
1241	5	G A2	繩文土器	深鉢	口縁 突起					8~10	明赤褐色 (GYR 5/6)	明赤褐色 (GYR 5/6)	水黒 (GYR 2/1)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全雲母を深く含む。
1242	5	G A2	繩文土器	深鉢	口縁部					5.0	赤褐色 (GYR 4/6)	赤褐色 (GYR 4/6)	黑褐色 (GYR 2/1)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全雲母を含む。
1243	5	G A2	繩文土器	深鉢	口縁部					4.5~7.5	黑 (GY 2/2)	明赤褐色 (GYR 5/8)	明赤褐色 (GYR 3/6)	良	胎土は緻密。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。石英・長石・ナトリウム長石が目立つ。
1244	5	G A2	繩文土器	深鉢	口縁部					4~8	灰黃色 (GY 6/2)	赤褐色 (GYR 4/6)	黑褐色 (GYR 5/1)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全雲母を深く含む。
1245	5	G A2	繩文土器	深鉢	口縁部					5~7	明赤褐色 (GYR 5/8)	明赤褐色 (GYR 5/8)	にふい赤褐色 (GYR 4/6)	良	胎土は緻密。0.5~1mmの大砂粒を含む。微細な全雲母・角閃石を含む。
1246	5	G A2	繩文土器	深鉢	口縁部					6~11	赤褐色 (GYR 4/6)	赤褐色 (GYR 4/6)	赤褐色 (GYR 4/6)	良	胎土はやや粗。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全雲母を深く含む。
1247	5	G A2	繩文土器	深鉢	口縁部					4.5~6	にふい黄褐色 (GYR 5/4)	にふい黄褐色 (GYR 5/4)	灰褐色 (GYR 4/1)	良	胎土はやや粗。精選された胎土を用いる。0.5~1mmの大砂粒をまばらに含む。全雲母が深くに含む。
1248	5	G A2	繩文土器	深鉢	胴上部	26.6				6~8	にふい褐色 (GYR 5/4)	明赤褐色 (GYR 5/8)	明赤褐色 (GYR 5/6)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全雲母を多く含む。
1249	5	G A2	繩文土器	深鉢	胴上部					6~7	明褐色 (GYR 5/6)	明赤褐色 (GYR 5/8)	黒褐色 (GYR 3/1)	良	胎土は緻密。精選された胎土を用いる。0.5~1mmの大砂粒をまばらに含む。全雲母が深くに含む。
1250	5	G A2	繩文土器	鉢	胴 部	22.2				5~6	黑褐色 (GYR 3/1)	にふい黄褐色 (GYR 6/3)	にふい黄褐色 (GYR 6/3)	良	胎土は複数選された胎土を使用。0.5~1mmの大砂粒を含む。微細な全雲母を多く含む。

遺物番号	調査次元等	出土緯	遺物種	器種	部位	法量				色調			焼成	備考	
						口径(cm)	頭径(cm)	胴径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	器厚(mm)	内面	外面		
1251	5	G_A2	繩文土器	深鉢	胴上部					5 ~ 6	明赤褐色 (GYR 5~6)	明赤褐色 (GYR 5~6)	明赤褐色 (GYR 5~6)	良	粘土は緻密。0.5 ~ 1mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母をまばらに含む。
1252	5	G_A2	繩文土器	鉢	胴 部					5 ~ 6	明赤褐色 (GYR 5~6)	明赤褐色 (GYR 5~6)	明赤褐色 (GYR 5~6)	良	粘土は緻密。稍濃された粘土を使用か。僅かに全芸母を含む。
1253	5	G_A2	繩文土器	深鉢	胴上部					4 ~ 8	明赤褐色 (GYR 5~6)	明赤褐色 (GYR 5~6)	明赤褐色 (GYR 5~6)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母を多く含む。
1254	5	G_A2	繩文土器	深鉢	胴上部					6 ~ 8	明赤褐色 (GYR 5~6)	明赤褐色 (GYR 5~6)	黒褐色 (GYR 3~4)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全芸母を多く含む。
1255	5	G_A2	繩文土器	鉢	胴 部					10.0	黒褐色 (GYR 3~4)	明赤褐色 (GYR 5~6)	にぶい赤褐色 (GYR 4~5)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全芸母を含む。
1256	5	G_A2	繩文土器	深鉢	胴 部					7.0	明赤褐色 (GYR 5~6)	明赤褐色 (GYR 5~6)	にぶい赤褐色 (GYR 4~4.5)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全芸母を多く含む。
1257	5	G_A2	繩文土器	深鉢	胴 部					7.0	灰褐色 (GYR 4~2)	明赤褐色 (GYR 5~6)	暗赤褐色 (GYR 3~1)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全芸母を含む。
1258	5	G_A2	繩文土器	深鉢	胴 部					10.0	褐 (GYR 6~8)	褐 (GYR 6~8)	褐 (GYR 6~8)	不良	粘土は粗。0.5 ~ 1mmの大砂粒を多く含む。
1259	5	G_A2	繩文土器	深鉢	口縁部					6.0	明赤褐色 (GYR 5~6)	明赤褐色 (GYR 5~6)	明赤褐色 (GYR 5~6)	良	粘土はやや粗。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母を多く含む。
1260	5	G_A2	繩文土器	深鉢	口縁部	306				4 ~ 5.5	にぶい黄褐色 (GYR 5~6)	にぶい黄褐色 (GYR 5~6)	にぶい黄褐色 (GYR 5~6)	良	粘土はやや粗。0.5 ~ 1mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母・角凹石を多く含む。
1261	5	G_A2	繩文土器	深鉢	口縁部	300				5.5 ~ 6.5	にぶい黄褐色 (GYR 7~6)	にぶい黄褐色 (GYR 7~6)	灰褐色 (GYR 5~2)	良	粘土は粗。0.5 ~ 2mmの大砂粒を多く含む。
1262	5	G_A2	繩文土器	深鉢	口縁部					6 ~ 7	明赤褐色 (GYR 5~6)	明赤褐色 (GYR 5~6)	にぶい黄褐色 (GYR 6~5)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全芸母を多く含む。
1263	5	G_A2	繩文土器	深鉢	口縁部					10.0	にぶい黄褐色 (GYR 6~4)	褐 (GYR 6~6)	褐 (GYR 6~6)	良	粘土は緻密。微細な全芸母・角凹石を多く含む。
1264	5	G_A2	繩文土器	深鉢	胴上部					9 ~ 10	明赤褐色 (GYR 5~6)	明赤褐色 (GYR 5~6)	灰褐色 (GYR 5~2)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母を多く含む。
1265	5	G_A2	繩文土器	深鉢	胴上部	22.6				7 ~ 8	黒褐色 (GYR 3~1)	黒褐色 (GYR 5~5)	暗褐色 (GYR 3~1)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全芸母を含む。
1266	5	G_A2	繩文土器	深鉢	口縁部	20.0				5 ~ 6	灰褐色 (GYR 6~5)	にぶい黄褐色 (GYR 6~5)	灰褐色 (GYR 4~1)	良	粘土はやや粗。0.5 ~ 1mmの大砂粒を多く含む。
1267	5	G_A2	繩文土器	深鉢	口縁部	38.4				13.0	灰褐色 (GYR 3~1)	にぶい黄褐色 (GYR 5~5)	暗褐色 (GYR 3~1)	良	粘土は粗。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母・角凹石を多く含む。
1268	5	G_A2	繩文土器	深鉢	口縁部	28.4				6 ~ 8	黒褐色 (GYR 3~1)	暗赤褐色 (GYR 5~3)	暗褐色 (GYR 3~2)	良	粘土はやや粗。0.5mmの大砂粒を多く含む。角凹石を多く含む。
1269	5	G_A2	繩文土器	深鉢	口縁部	25.2				8.5 ~ 9.5	にぶい赤褐色 (GYR 4~3)	にぶい赤褐色 (GYR 4~3)	にぶい黄褐色 (GYR 5~3)	良	粘土は緻密。0.5 ~ 1mmの大砂粒を含む。微細な全芸母に角凹石を含む。
1270	5	G_A2	繩文土器	深鉢	口縁部					6 ~ 9	黒褐色 (GYR 3~1)	明赤褐色 (GYR 5~6)	灰褐色 (GYR 4~2)	良	粘土は緻密。微細な全芸母をまばらに含む。
1271	5	G_A2	繩文土器	深鉢	胴 部					6.0	黒褐色 (GYR 3~1)	明赤褐色 (GYR 5~8)	明赤褐色 (GYR 5~8)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全芸母および角凹石を含む。
1272	5	G_A2	繩文土器	深鉢	口縁部					6 ~ 12	明赤褐色 (GYR 5~8)	暗赤褐色 (GYR 3~2)	暗褐色 (GYR 3~2)	良	粘土はやや粗。0.5 ~ 1mmの大砂粒を含む。
1273	5	G_A2	繩文土器	深鉢	口縁部	31.4				7 ~ 9	にぶい黒褐色 (GYR 5~4)	明赤褐色 (GYR 5~6)	にぶい褐色 (GYR 5~4)	良	粘土は緻密。1 ~ 3mmの大砂粒を含む。石英・長石は主。
1274	5	G_A2	繩文土器	浅鉢小口付	口縁部	14.0				7.0	にぶい黒褐色 (GYR 5~4)	明赤褐色 (GYR 5~6)	明赤褐色 (GYR 5~6)	良	粘土はやや粗。0.5 ~ 1mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母を含む。
1275	5	G_A2	淡生土器	壺	口縁部	15.2				6 ~ 9	明赤褐色 (GYR 5~6)	褐 (GYR 7~6)	灰褐色 (GYR 6~1)	良	粘土は緻密。僅かに3 ~ 4mmの大砂粒を含む。

遺物番号	調査次第等	出土緯経	遺物種	器種	部位	法量				色調			焼成	備考	
						口径(cm)	頭径(cm)	胴径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	器厚(mm)	内面	外面		
1276	5	G A2	石器	打削石斧	完形	最大径 8.5	最大幅 6.7	最大厚 1.5	重量 127g						
1277	5	G A2	石器	石斧	完形	最大径 8.3	最大幅 7.1	最大厚 3.3	重量 203.5g						
1278	5	G A2 工具	石器	石斧	完形	最大径 7.5	最大幅 6.5	最大厚 1.9	重量 108.5g						
1279	5	G A2	石器	石核	完形	最大径 6.2	最大幅 5.0	最大厚 3.7	重量 300g						2つの作業面があり。調節角は62°と82°である。
1280	5	G A2	石器	刮削器	完形	最大径 3.9	最大幅 4.7	最大厚 1.3	重量 19.9g						裏面を打面としており、刃部角は59°である。
1281	5	G A2	石器	二次加工片		最大径 4.6	最大幅 6.6	最大厚 1.0	重量 30.5g						
1282	5	G A2	石器	剥片		最大径 3.7	最大幅 3.7	最大厚 1.5	重量 9.5g						打面の形状は複数面であり、打面の軸移は認められない。調節角は108°である。
1283	5	G A2	石器	敲石	完形	最大径 11.4	最大幅 9.1	最大厚 5.4	重量 814.5g						
1284	5	G B0	織文土器	深鉢	突起					5~8	明赤褐色 (2SYR 5-8)	明赤褐色 (2SYR 5-8)	明赤褐色 (2SYR 5-8)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な金雲母を含む。
1285	5	G B0	織文土器	深鉢	口縁部					7~75	明赤褐色 (2SYR 5-8)	明赤褐色 (2SYR 5-8)	明赤褐色 (2SYR 5-8)	良	粘土はやや粗。0.5mmの砂粒を多く含む。微細な金雲母を多く含む。
1286	5	G B0	織文土器	深鉢	口縁部					6~8	赤褐色 (SYR 4-6)	明赤褐色 (2SYR 5-8)	明赤褐色 (2SYR 5-8)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な金雲母を多く含む。
1287	5	G B0	織文土器	深鉢	口縁部					5~95	明赤褐色 (2SYR 5-6)	明赤褐色 (2SYR 5-6)	明赤褐色 (2SYR 5-8)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。
1288	5	G B0	織文土器	深鉢	口縁部					90	明赤褐色 (2SYR 5-8)	明赤褐色 (2SYR 5-8)	赤褐色 (2SYR 4-1)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。
1289	5	G B0	織文土器	深鉢	口縁部	242				5~7	明赤褐色 (2SYR 5-6)	明赤褐色 (2SYR 5-6)	にじみ黄褐色 (SYR 5-6)	良	粘土は緻密。0.5~1mmの大砂粒を含む。微細な金雲母を含む。
1290	5	G B0	織文土器	深鉢	口縁部	348				60	明赤褐色 (SYR 5-6)	明赤褐色 (SYR 5-6)	にじみ黄褐色 (SYR 6-4)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。
1291	5	G B0	織文土器	深鉢	口縁部	420				8~10	灰褐色 (2SYR 4-2)	褐 (2SYR 4-4)	灰褐色 (2SYR 4-2)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な金雲母を多く含む。
1292	5	G B0	織文土器	深鉢	頭 部					5~9	赤褐色 (SYR 4-6)	明赤褐色 (2SYR 5-6)	赤褐色 (SYR 4-6)	良	粘土は緻密。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。微細な金雲母を微細に含む。
1293	5	G B0	織文土器	深鉢	口縁部	302				60	明赤褐色 (2SYR 5-6)	明赤褐色 (2SYR 5-8)	にじみ黄褐色 (SYR 5-6)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒をまばらに含む。微細な金雲母・角閃石をまばらに含む。
1294	5	G B0	織文土器	深鉢	口縁部	264				5~65	赤褐色 (SYR 4-6)	赤褐色 (SYR 4-6)	赤褐色 (SYR 4-6)	良	粘土はやや粗。1~2mmの大砂粒を含む。微細な全雲母を微細に含む。
1295	5	G B0	織文土器	鉢	側 部					5~6	にじみ黄褐色 (SYR 5-4)	明赤褐色 (2SYR 5-6)	明赤褐色 (2SYR 5-6)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な金雲母を多く含む。
1296	5	G B0	織文土器	深鉢	側 部					9~10	明赤褐色 (2SYR 5-8)	明赤褐色 (2SYR 5-8)	明赤褐色 (2SYR 5-8)	良	粘土はやや粗。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全雲母・角閃石を多く含む。
1297	5	G B0	織文土器	深鉢	側上部		294			5~8	明赤褐色 (SYR 5-6)	明赤褐色 (SYR 5-6)	灰褐色 (2SYR 6-2)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な金雲母を含む。
1298	5	G B0	織文土器	深鉢	側上部					5~6	灰褐色 (2SYR 4-2)	明赤褐色 (2SYR 5-8)	灰褐色 (2SYR 4-2)	良	粘土は緻密。0.5~1mmの大砂粒を含む。微細な金雲母を含む。
1299	5	G B0	織文土器	深鉢	側上部					5~6	明赤褐色 (2SYR 5-6)	明赤褐色 (2SYR 5-6)	明赤褐色 (2SYR 5-6)	良	粘土はやや粗。0.5~1mmの大砂粒を含む。微細な金雲母を含む。
1300	5	G B0	織文土器	深鉢	側上部					6~8	にじみ黄褐色 (SYR 5-6)	明赤褐色 (SYR 5-6)	黒褐色 (SYR 3-1)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な金雲母を多く含む。

遺物番号	調査次第等	出土緯	遺物種類	器種	部位	法量					色調			焼成	備考	
						口径(cm)	頭径(cm)	胴径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	器厚(mm)	内面	外面	断面		
1301	5	G B0	繩文 土器	深鉢	胴 部					7.0	に赤い黄褐 (GYR 5-6)	明赤褐 (GYR 5-6)	黒褐 (GYR 3-1)	良	粘土はやや粗。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。	
1302	5	G B0	繩文 土器	深鉢	胴 部					6.0	に赤い朱褐 (GYR 4-6)	赤褐色 (GYR 3-1)	明赤褐 (GYR 5-6)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全芸母を多く含む。	
1303	5	G B0	繩文 土器	深鉢	胴上部					5~6	墨赤褐 (GYR 5-6)	深赤 (GYR 4-2)	明赤褐 (GYR 5-6)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全芸母を多く含む。	
1304	5	G B0	繩文 土器	鉢	胴上部					5.5~6	墨 (GYR 2-1)	灰褐 (GYR 4-2)	に赤い褐 (GYR 6-4)	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。微細な全芸母を僅かに含む。	
1305	5	G B0	繩文 土器	深鉢	胴上部	230				6~8.5	に赤い黄褐 (GYR 6-6)	黒褐 (GYR 3-1)	黒褐 (GYR 3-1)	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。微細な全芸母を僅かに含む。	
1306	5	G B0	繩文 土器	深鉢	胴上部					5~6	赤褐 (GYR 4-6)	明赤褐 (GYR 5-6)	明赤褐 (GYR 5-6)	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。微細な全芸母を僅かに含む。	
1307	5	G B0	繩文 土器	浅鉢か 注口付 土器	胴下部					5.0	に赤い褐 (GYR 5-4)	黒褐 (GYR 3-1)	灰褐 (GYR 4-2)	良	粘土は緻密。微細な角閃石を多く含む。	
1308	5	G B0	繩文 土器	深鉢	胴 部					5~5.5	墨赤褐 (GYR 5-6)	明赤褐 (GYR 5-6)	に赤い黄褐 (GYR 6-4)	良	粘土は緻密。2mmの大砂粒を僅かに含む。微細な全芸母と角閃石をどちらに含む。	
1309	5	G B0	繩文 土器	深鉢	胴 部					5.5~7	赤褐 (GYR 4-6)	赤褐 (GYR 4-6)	に赤い朱褐 (GYR 4-6)	良	粘土は緻密。微細な全芸母を含む。	
1310	5	G B0	赤生 土器	壺	胴側部					5~6	に赤い褐 (GYR 5-4)	に赤い褐 (GYR 5-4)	灰褐 (GYR 5-2)	良	粘土は緻密。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。角閃石をどちらに含む。	
1311	5	G B0	繩文 土器	深鉢	胴 部					8~9	灰黃褐 (GYR 6-6)	灰白 (GYR 8-2)	灰白 (GYR 8-2)	良	粘土はやや粗。0.5~1mmの大砂粒を含む。石英、角閃石が目立つ。	
1312	5	G B0	繩文 土器	深鉢	口縁部					8~9	灰黃褐 (GYR 5-2)	明赤褐 (GYR 6-6)	明赤褐 (GYR 6-6)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を少し含む。微細な全芸母を僅かに含む。	
1313	5	G B0	繩文 土器	深鉢	口縁部					5~5.5	明赤褐 (GYR 5-6)	に赤い褐 (GYR 5-4)	明赤褐 (GYR 5-6)	良	粘土はやや粗。0.5~1mmの大砂粒を含む。微細な全芸母を僅かに含む。	
1314	5	G B0	繩文 土器	深鉢	胴上部					9~11	黒褐 (GYR 3-1)	明赤褐 (GYR 5-6)	灰褐 (GYR 4-2)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全芸母を含む。	
1315	5	G B0	繩文 土器	深鉢	胴上部					6~10	明赤褐 (GYR 5-6)	明赤褐 (GYR 5-6)	明赤褐 (GYR 5-6)	良	粘土はやや粗。0.5~1mmの大砂粒を含む。微細な全芸母と角閃石を多く含む。	
1316	5	G B0	繩文 土器	深鉢	口縁部	10.1				4~8	明赤褐 (GYR 5-6)	明赤褐 (GYR 5-6)	に赤い朱褐 (GYR 4-6)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。	
1317	5	G B0	繩文 土器	深鉢	口縁部	26.0				6~9	褐 (GYR 6-6)	褐 (GYR 6-6)	に赤い黄褐 (GYR 7-8)	良	粘土はやや粗。0.5~1mmの大砂粒を含む。石英多し。微細な全芸母をまばらに含む。	
1318	5	G B0	繩文 土器	深鉢	口縁部					6~10	明赤褐 (GYR 5-6)	明赤褐 (GYR 5-6)	に赤い黄褐 (GYR 6-6)	良	粘土は緻密。1mmの大砂粒を僅かに含む。	
1319	5	G B0	繩文 土器	深鉢	口縁部	35.0	29.0			35~55	に赤い黄褐 (GYR 6-6)	に赤い黄褐 (GYR 6-6)	に赤い黄褐 (GYR 5-6)	良	粘土はやや粗。0.5~4mmの大砂粒を含む。微細な全芸母を多く含む。	
1320	5	G B0	繩文 土器	深鉢	口縁部	27.6				4~7	に赤い赤褐 (GYR 4-6)	に赤い赤褐 (GYR 5-4)	に赤い赤褐 (GYR 5-4)	良	粘土はやや粗。1~2mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母を含む。	
1321	5	G B0	繩文 土器	深鉢	胴 部					5~7.5	赤褐 (GYR 4-6)	明赤褐 (GYR 5-6)	明赤褐 (GYR 5-6)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全芸母を多く含む。	
1322	5	G B0	繩文 土器	深鉢	底 部					4.5	4~6	明赤褐 (GYR 5-6)	明赤褐 (GYR 5-6)	明赤褐 (GYR 5-6)	良	粘土は緻密。0.5~1mmの大砂粒を含む。
1323	5	G B0	繩文 土器	深鉢	底 部					5~6	5~6	明赤褐 (GYR 5-6)	明赤褐 (GYR 5-6)	赤褐 (GYR 2-1)	良	粘土はやや粗。微細な全芸母を含む。
1324	5	G B0	繩文 土器	鉢	口縁部	14.0				7~8	黒褐 (GYR 3-2)	明赤褐 (GYR 5-6)	黒 (GYR 2-1)	良	粘土はやや粗。0.5~1mmの大砂粒を含む。微細な全芸母を多く含む。	
1325	5	G B0	繩文 土器	浅鉢	口縁部	23.0				6.0	褐 (GYR 6-6)	に赤い褐 (GYR 5-4)	に赤い褐 (GYR 5-4)	良	粘土はやや粗。0.5~5mmの大砂粒を含む。微細な全芸母を僅かに含む。	

遺物番号	調査次第等	出土緯	遺物種	器種	部位	法量				色調			焼成	備考	
						口径(cm)	頭径(cm)	胴径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	器厚(mm)	内面	外面		
1336	5	G B0	繩文 土器	浅鉢	口縁部	41.4				8 ~ 9	明赤褐色 GYR 5~8	明赤褐色 GYR 5~8	に赤い黄褐色 GYR 7~8	良	胎土は緻密。0.5 ~ 1mm大の砂粒を含む。微細な全芸母を含む。
1337	5	G B0	繩文 土器	深鉢	口縁部					5 ~ 8	褐色 GYR 5~9	に赤い黄褐色 GYR 7~8	に赤い黄褐色 GYR 7~8	良	胎土は緻密。精選された胎土を使用。軽めて微細な角閃石を多く含む。
1338	5	G B0	繩文 土器	浅鉢	口縁部					7 ~ 8	褐色 GYR 4~1	褐色 GYR 4~1	に赤い褐色 GYR 6~4	良	胎土は緻密。0.5 ~ 1mm大の砂粒を少く含む。微細な全芸母を多く含む。
1339	5	G B0	石器	打製 石斧	完形	最大径 8.4	最大幅 6.1	最大厚 2.2	重量	140g					
1330	5	G B0	石器	打製 石斧	完形	最大径 8.2	最大幅 6.4	最大厚 1.7	重量	153g					
1331	5	G B0	石器	石斧	完形	最大径 7.4	最大幅 5.1	最大厚 2.7	重量	123.5g					
1332	5	G B0	石器	削器	完形	最大径 4.2	最大幅 2.8	最大厚 1.5	重量	15.5g					縦面を打面としており、刃部角は36°である。
1333	5	G B1	繩文 土器	深鉢	口縁部	37.6				5 ~ 6	赤褐色 GYR 4~8	明赤褐色 GYR 5~8	明赤褐色 GYR 5~8	良	胎土は緻密。0.5mm大の砂粒を多く含む。微細な全芸母を多く含む。
1334	5	G B1	繩文 土器	深鉢	肩上部					6.0	明赤褐色 GYR 5~8	明赤褐色 GYR 5~8	褐 GYR 4~6	良	胎土は緻密。0.5mm大の砂粒を多く含む。微細な全芸母を多く含む。
1335	5	G B1	繩文 土器	鉢	口縁部	23.4				5.5 ~ 6	明赤褐色 GYR 5~8	明赤褐色 GYR 5~8	明赤褐色 GYR 5~8	良	胎土は緻密。0.5mm大の砂粒を含む。微細な全芸母を僅かに含む。
1336	5	G B1	繩文 土器	深鉢	口縁部					7 ~ 8	褐 GYR 6~8	褐 GYR 6~8	褐 GYR 6~8	良	胎土は緻密。0.5mm大の砂粒を含む。角閃石を僅かに含む。
1337	5	G B1	繩文 土器	深鉢	肩上部					10 ~ 11	黒褐色 GYR 5~10	に赤い黄褐色 GYR 5~10	黒褐色 GYR 5~10	良	胎土はやや粗。0.5 ~ 1mm大の砂粒を含む。微細な角閃石を多く含む。
1338	5	G B1	繩文 土器	深鉢	肩上部					5 ~ 10	明赤褐色 GYR 5~6	明赤褐色 GYR 5~6	に赤い褐色 GYR 5~2	良	胎土はやや粗。0.5 ~ 1mm大の砂粒を少く含む。微細な角閃石をまことに含む。
1339	5	G B1	石器	刮削器	完形	最大径 5.1	最大幅 4.8	最大厚 2.4	重量	90.7g					打面を縦面であり、刃部角は60°である。
1340	5	G B1	繩文 土器	深鉢	口縁部	38.4				8 ~ 9	灰褐色 GYR 4~2	明赤褐色 GYR 5~8	明赤褐色 GYR 5~8	良	胎土は緻密。0.5mm大の砂粒を多く含む。微細な全芸母を多く含む。
1341	5	G B1	繩文 土器	深鉢	口縁部					9 ~ 10	明赤褐色 GYR 5~9	明赤褐色 GYR 5~9	暗赤褐色 GYR 3~7	良	胎土はやや粗。0.5 ~ 1mm大の砂粒を含む。角閃石を多く含む。
1342	5	G B2	繩文 土器	深鉢	口縁部					9.0	褐 GYR 6~6	灰褐色 GYR 4~2	灰褐色 GYR 4~2	不良	胎土は緻密。0.5mm大の砂粒を含む。微細な全芸母を含む。
1343	5	G B2	繩文 土器	深鉢	口縁部	23.0				10.0	褐 GYR 6~6	褐 GYR 6~6	褐 GYR 6~6	良	胎土はやや粗。0.5mm大の砂粒を多く含む。微細な全芸母を多く含む。
1344	5	G B2	繩文 土器	鉢	口縁部					8 ~ 12	褐 GYR 6~8	褐 GYR 6~8	褐 GYR 6~8	不良	胎土は緻密。0.5mm大の砂粒を僅かに含む。微細な全芸母・角閃石をばらに含む。
1345	5	G B2	繩文 土器	深鉢	口縁部					8.5	明赤褐色 GYR 5~9	明赤褐色 GYR 5~9	明赤褐色 GYR 5~9	良	胎土は緻密。0.5mm大の砂粒を多く含む。微細な全芸母を僅かに含む。
1346	5	G B2	繩文 土器	深鉢	口縁部	16.0				4 ~ 8	灰褐色 GYR 4~2	灰褐色 GYR 4~2	黑 GYR 2~1	良	胎土は緻密。0.5mm大の砂粒を含む。微細な全芸母を多く含む。
1347	5	G B2	繩文 土器	深鉢	口縁部					6 ~ 10	に赤い黄褐色 GYR 6~7	に赤い黄褐色 GYR 5~4	に赤い黄褐色 GYR 6~7	良	胎土は緻密。0.5mm大の砂粒を含む。角閃石を多く含む。
1348	5	G B2	繩文 土器	鉢	肩 部		12.8			3 ~ 6.5	褐褐色 GYR 4~6	明赤褐色 GYR 5~6	明赤褐色 GYR 5~6	良	胎土はやや粗。0.5 ~ 1mm大の砂粒を含む。微細な全芸母を多く含む。
1349	5	G B2	繩文 土器	深鉢	口縁部	26.2				10 ~ 11	明赤褐色 GYR 5~6	明赤褐色 GYR 5~6	に赤い黄褐色 GYR 6~7	良	胎土は緻密。0.5mm大の砂粒を含む。微細な全芸母・角閃石を多く含む。
1350	5	G B2	繩文 土器	深鉢	口縁部	22.0				6 ~ 8	明赤褐色 GYR 5~8	明赤褐色 GYR 5~8	灰褐色 GYR 4~1	良	胎土は緻密。精選された胎土を使用。微細な全芸母を僅かに含む。

遺物番号	調査次元等	出土緯経	遺物種類	器種	部位	法量					色調			焼成	備考	
						口径(cm)	頭径(cm)	胴径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	器厚(mm)	内面	外面	断面		
1351	5	G_B2	織文土器	深鉢	口縁部					11 ~ 12	明赤褐色 GYR 5~6	明赤褐色 GYR 5~6	明赤褐色 GYR 5~6	良	粘土はやや粗。0.5 ~ 2mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母をまばらに含む。	
1352	5	G_B2	織文土器	深鉢	胴 部					7.0	明赤褐色 GYR 5~6	明赤褐色 GYR 5~6	明赤褐色 GYR 5~6	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母を多く含む。	
1353	5	G_B2	織文土器	鉢	口縁部	12.4				3.5 ~ 6	明赤褐色 GYR 5~6	明赤褐色 GYR 5~6	明赤褐色 GYR 5~6	良	粘土は粗。1 ~ 2mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母を含む。	
1354	5	G_B2	土器製品	不明	不明					19.0	褐 GYR 6~9	に赤い・赤褐色 GYR 5~6	に赤い・赤褐色 GYR 5~6	良	粘土はやや粗。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母を多く含む。	
1355	5	G_B2	織文土器	浅鉢	口縁部	13.2				6 ~ 8	に赤い・黄褐色 GYR 7~8	褐 GYR 6~8	褐 GYR 6~8	良	粘土はやや粗。1 ~ 2mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母を含む。	
1356	5	G_B2	織文土器	浅鉢	脚下部					22.2				良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を僅かに含む。微細な全芸母を多く含む。	
1357	5	G_B2	石器	刮削器	不定	最太径 8.0	最幅 7.4	最厚 2.5	重量 130kg						難面を打面としており、刃部角は60°である。	
1358	5	G_B2	石器	二次加工剥片	最太径 8.1	最幅 7.4	最厚 2.3	重量 187g								
1359	5	G_1層	織文土器	深鉢	口縁部	20.8				5 ~ 6	に赤い・黄褐色 GYR 6~8	灰黃 GYR 6~2	灰黃 GYR 6~2	良	粘土はやや粗。0.5 ~ 1mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母・角閃石を多く含む。	
1360	5	G_1層	織文土器	深鉢	口縁部					8 ~ 10.5	に赤い・赤褐色 GYR 5~6	褐 GYR 6~6	に赤い・赤褐色 GYR 5~6	良	粘土はやや粗。0.5 ~ 1mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母・角閃石を多く含む。	
1361	5	G_1層	織文土器	深鉢	口縁部					6 ~ 7	明赤褐色 GYR 5~6	明赤褐色 GYR 5~6	明赤褐色 GYR 5~6	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。微細な全芸母を少し含む。	
1362	5	G_B1	織文土器	浅鉢	口縁部					4.5 ~ 6	に赤い・褐 GYR 5~6	褐 GYR 6~6	に赤い・褐 GYR 6~6	良	粘土は緻密。0.5 ~ 1mmの大砂粒を僅かに含む。微細な全芸母を使用。	
1363	5	G_B1	織文土器	浅鉢	口縁部					4.5 ~ 7	明赤褐色 GYR 5~6	灰褐 GYR 4~2	褐 GYR 6~6	良	粘土は緻密。0.5 ~ 1mmの大砂粒を含む。微細な全芸母を少し含む。	
1364	5	G_B1	織文土器	浅鉢	胴 部					5.5 ~ 6	墨 GYR 2~1	に赤い・黄褐色 GYR 5~6	に赤い・黄褐色 GYR 5~6	良	粘土は緻密。0.5 ~ 1mmの大砂粒を僅かに含む。微細な全芸母を僅かに含む。	
1365	5	G_B1	織文土器	深鉢	口縁部					5.5 ~ 8	明赤褐色 GYR 5~6	褐 GYR 6~6	褐 GYR 6~6	良	粘土はやや粗。0.5 ~ 1mmの大砂粒を含む。微細な全芸母を僅かに含む。	
1366	5	G_B1	織文土器	深鉢	口縁部					6 ~ 8	黒褐色 GYR 3~1	明赤褐色 GYR 5~6	明赤褐色 GYR 5~6	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を多く含む。全芸母を僅かに含む。	
1367	5	G_B1	織文土器	深鉢	口縁部	30.6				7.0	黒褐色 GYR 3~2	赤褐色 GYR 4~8	黒褐色 GYR 2~1	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を僅かに含む。	
1368	5	G_B1	織文土器	鉢	口縁部	16.0				5 ~ 6	黒褐色 GYR 3~1	黒褐色 GYR 3~1	黒褐色 GYR 3~1	良	粘土は粗。0.5mmの大砂粒を僅かに含む。	
1369	5	G_B1	織文土器	深鉢	口縁部					10 ~ 12	に赤い・黄褐色 GYR 6~5	黒褐色 GYR 3~2	黒褐色 GYR 6~2	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。角閃石を多く含む。	
1370	5	G_B1	織文土器	鉢	口～胴部	15.8				5 ~ 8	黒褐色 GYR 3~1	明赤褐色 GYR 3~2	赤褐色 GYR 4~6	良	粘土は緻密。0.5 ~ 1mmの大砂粒を含む。微細な全芸母・角閃石を僅かに含む。	
1371	5	G_B1	織文土器	深鉢	脚下部					29.0				良	粘土は緻密。0.5 ~ 1mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母・角閃石を多く含む。	
1372	5	G_B1	織文土器	深鉢	底 部					8.0	6 ~ 9	黒褐色 GYR 3~1	赤褐色 GYR 4~8	黒褐色 GYR 3~1	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。
1373	5	G_B1	織文土器	深鉢?	胴 部					10.0	に赤い・褐 GYR 5~6	黒褐色 GYR 3~1	に赤い・褐 GYR 5~6	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。微細な角閃石を多く含む。	
1374	5	G_B1	織文土器	深鉢	胴上部					8 ~ 11	褐 GYR 4~4	黒褐色 GYR 3~2	明赤褐色 GYR 5~6	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な角閃石を僅かに含む。	
1375	5	G_B1	織文土器	深鉢	胴 部					7 ~ 9	明赤褐色 GYR 5~6	に赤い・赤褐色 GYR 5~6	に赤い・赤褐色 GYR 5~6	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。	

遺物番号	調査次元等	出土緯経	遺物種類	器種	部位	法量				色調			焼成	備考		
						口径 (cm)	頭径 (cm)	胴径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	器厚 (mm)	内面	外面	断面		
1376	5	G_B4_Eg_E	繩文土器	深鉢	口縁部	45.8				7~9	赤褐色 (2SYR 4-6)	暗赤褐色 (2SYR 3-4)	明赤褐色 (2SYR 5-8)	良	粘土は緻密。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。微細な金雲母を僅かに含む。	
1377	5	G_B4_Eg_E	繩文土器	深鉢	口縁部					6~7	明赤褐色 (2SYR 5-8)	明赤褐色 (2SYR 5-8)	に赤い褐色 (2SYR 5-8)	良	粘土はやや粗。0.5~1mmの大砂粒を含む。	
1378	5	G_B4_Eg_E	繩文土器	深鉢	頭胴部					6~8	に赤い褐色 (2SYR 6-4)	褐	褐	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な金雲母を含む。	
1379	5	G_B4_Eg_E	繩文土器	深鉢	頭胴部					7~10	明赤褐色 (2SYR 5-8)	明赤褐色 (2SYR 5-8)	明赤褐色 (2SYR 5-8)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な金雲母を含む。	
1380	5	G_B4_Eg_E	繩文土器	鉢	胴 部					5~6	褐 (2SYR 6-6)	褐 (2SYR 6-6)	褐 (2SYR 6-6)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。	
1381	5	G_B4_Eg_E	繩文土器	鉢	頭胴部					6~8.5	に赤い褐色 (2SYR 5-4)	に赤い褐色 (2SYR 5-4)	灰褐色 (2SYR 4-2)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な金雲母を含む。	
1382	5	G_B4_Eg_E	繩文土器	深鉢	口縁部					7~11	に赤い褐色 (2SYR 5-4)	明赤褐色 (2SYR 5-8)	暗黒褐色 (2SYR 2-1)	良	粘土はやや粗。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な金雲母を含む。	
1383	5	G_B4_Eg_E	繩文土器	深鉢	胴 部					8~9	に赤い黄褐色 (2SYR 6-2)	灰黄褐色 (2SYR 6-2)	灰黄褐色 (2SYR 6-2)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。角閃石を多く含む。	
1384	5	G_B4_Eg_E	繩文土器	深鉢	底部					8.0	45~11 (10YR 2/1)	に赤い褐色 (2SYR 5-4)	褐灰 (10YR 4/1)	良	粘土はやや粗。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な金雲母を含む。	
1385	5	G_B4_Eg_E	繩文土器	深鉢	底部					9.6	6~8 (2SYR 5-8)	明赤褐色 (2SYR 5-8)	明褐色 (2SYR 5-8)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な金雲母を僅かに含む。石灰岩の付着有る。	
1386	5	G_B4_Eg_E	繩文土器	浅鉢	底部					11.2	6~11 (2SYR 5-8)	明赤褐色 (2SYR 6-8)	褐 (2SYR 6-8)	良	粘土はやや粗。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。微細な金雲母をまばらに含む。	
1387	5	G_B4_Eg_E	石器	石器	変形	最長26 最大幅2.3	最大幅0.7	最厚3.8g							打削の軸跡は認められない。未製品の可能性がある。	
1388	5	G_B4_Eg_E	石器	敲石	変形	最大長34 最大幅30	最大幅24	重量29g							打削の軸跡は認められない。未製品の可能性がある。	
1389	5	G_B4_Eg_E	貝製品	貝身貝	変形	最高47	横径4.6	重 量28g		-					孔内の剥離により直筒形として理解するのが妥当。	
1390	5	G_B4_Eg_E	繩文土器	鉢	胴上部					7~10	に赤い黄褐色 (2SYR 5-4)	に赤い黄褐色 (2SYR 5-3)	に赤い黄褐色 (2SYR 5-3)	良	粘土は緻密。1mmの大砂粒を含む。角閃石・石英を多く含む。	
1391	5	G_B4_Eg_E	繩文土器	鉢	胴 部					6~7 (10YR 3-1)	黑褐色 (10YR 3-1)	に赤い黄褐色 (10YR 3-3)	褐灰 (10YR 4/1)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。	
1392	5	G_B4_Eg_E	繩文土器	鉢	口縁部					7~8	明赤褐色 (2SYR 5-8)	明赤褐色 (2SYR 5-8)	明赤褐色 (2SYR 5-8)	良	粘土はやや粗。0.5mmの大砂粒を多く含む。	
1393	5	G_B4_Eg_E	繩文土器	深鉢	口縁部					7~8	褐 (2SYR 6-8)	明赤褐色 (2SYR 5-8)	に赤い褐色 (2SYR 6-8)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。	
1394	5	G_B4_Eg_E	繩文土器	鉢	口縁部	27.0				4~6	黑褐色 (2SYR 3/2)	赤褐色 (2SYR 4/8)	明赤褐色 (2SYR 5-8)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な金雲母を僅かに含む。	
1395	5	G_B4_Eg_E	繩文土器	深鉢	口縁部付近					8~12	に赤い黄褐色 (2SYR 6-4)	明赤褐色 (2SYR 5-6)	明赤褐色 (2SYR 5-6)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な金雲母・角閃石を多く含む。	
1396	5	G_B4_Eg_E	繩文土器	鉢	口縁部					7~8	暗赤褐色 (2SYR 3/2)	暗赤褐色 (2SYR 3/2)	明赤褐色 (2SYR 5-8)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な金雲母・角閃石を含む。	
1397	5	G_B4_Eg_E	繩文土器	鉢	底 部					5.4	-	黑褐色 (10YR 3/1)	赤褐色 (2SYR 4-6)	に赤い赤褐色 (2SYR 4-6)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を僅かに含む。微細された粘土を使用。
1398	5	G_B4_Eg_E	石器	石器	先端部欠損	最長19 最大幅1.4	最大幅0.5	最厚1.2g							打削の軸跡は認められない。	
1399	5	G_B4_Eg_E	石器	石器	変形	最長28 最大幅9.5	最大幅0.7	最厚0.6 重 量3.1g							打削の軸跡は認められない。未製品の可能性がある。	
1400	5	G_B4_Eg_E	石器	石器	変形	最長28 最大幅9.5	最大幅0.7	最厚4.0 重 量36.2g						剥片の素材である。		

遺物番号	調査場所	出土位置	遺物種類	器種	部位	法量					色調			焼成	備考	
						口径(cm)	側径(cm)	胴径(cm)	底径(cm)	器高(mm)	器厚(mm)	内面	外面	断面		
1401	5	G B N R E	石器	磨石	尖形	最大径 3.3	最大幅 3.0	最大深 2.6	最大厚 2.6	重星 28.7g						
1402	5	G B N R E	縄文 土器	浅鉢	口縁部					6 ~ 9	に赤い黄褐 (GYR 6~9)	褐灰 (GYR 4~1)	灰黄褐 (GYR 6~9)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を僅 かに含む。微細な全雲母を多く 含む。	
1403	5	G B N R E	縄文 土器	深鉢	口縁部					5 ~ 17	黒褐 (GYR 3~2)	明褐色 (GYR 5~9)	深褐 (GYR 3~1)	良	粘土は相。0.5~1mmの大砂粒を 多く含む。微細な全雲母をまば らに含む。石英多し。	
1404	5	G B N R E	縄文 土器	深鉢	口縁部					8.0	明褐色 (GYR 5~9)	明褐色 (GYR 5~9)	明褐色 (GYR 5~9)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を含 む。微細な全雲母多し。	
1405	5	G B N R E	縄文 土器	鉢	胴上部					10 ~ 12	に赤い黄褐 (GYR 6~9)	明褐色 (GYR 5~9)	に赤い黄褐 (GYR 6~9)	良	粘土はやや相。0.5~1mmの大砂 粒を多く含む。	
1406	5	G B N R E	縄文 土器	深鉢	胴 部					10.0	に赤い黄褐 (GYR 6~9)	灰白 (GYR 8~2)	灰黄 (GYR 6~2)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を含 む。微細な角閃石をまばらに含む。	
1407	5	G B N R E	縄文 土器	鉢	胴上部					5 ~ 7	黒褐 (GYR 3~2)	暗褐色 (GYR 3~2)	暗赤褐 (GYR 3~2)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を多 く含む。微細な全雲母を多く含 む。	
1408	5	G B N R E	縄文 土器	鉢	胴 部					10.0	黒褐 (GYR 3~1)	明褐色 (GYR 5~9)	に赤い半褐 (GYR 4~9)	良	粘土はやや相。0.5~1mmの大砂 粒を多く含む。微細な全雲母・ 角閃石を含む。	
1409	5	G B N R E	縄文 土器	深鉢	口縁部					8 ~ 9	に赤い黄 (GYR 6~9)	灰黄 (GYR 6~2)	灰黄 (GYR 6~2)	良	粘土は相。0.5~1mmの大砂粒を 多く含む。	
1410	5	G B N R E	縄文 土器	深鉢	口縁部					10.0	明褐色 (GYR 5~9)	明褐色 (GYR 5~9)	明褐色 (GYR 5~9)	良	粘土は緻密。0.5~1mmの大砂 粒を多く含む。微細な全雲母多 く含む。	
1411	5	G B N R E	縄文 土器	深鉢	口縁部					9 ~ 11	褐灰 (GYR 4~1)	明褐色 (GYR 5~9)	に赤い黄褐 (GYR 6~9)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を多 く含む。微細な角閃石を多く含 む。	
1412	5	G B N R E	縄文 土器	深鉢	口縁部	28.0				7 ~ 8	黒褐 (GYR 3~1)	明褐色 (GYR 5~9)	明褐色 (GYR 5~9)	良	粘土は緻密。0.5~1mmの大砂 粒を多く含む。微細な全雲母多 く含む。	
1413	5	G B N R E	縄文 土器	鉢	口縁部					8 ~ 11	に赤い黄褐 (GYR 6~9)	に赤い黄褐 (GYR 5~4)	黒褐 (GYR 3~2)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を 多く含む。微細な全雲母を多く含 む。	
1414	5	G B N R E	縄文 土器	深鉢	底 部					7.6	に赤い黄褐 (GYR 6~9)	に赤い黄褐 (GYR 6~4)	褐灰 (GYR 5~1)	良	粘土はやや相。0.5~1mmの大砂 粒を多く含む。カオリナイト多し。	
1415	5	G B N R E	縄文 土器	深鉢	口縁部					7 ~ 9	褐灰 (GYR 4~1)	に赤い黄褐 (GYR 6~4)	褐灰 (GYR 5~2)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を含 む。微細な全雲母を多く含む。	
1416	5	G B N R E	縄文 土器	鉢	胴 部					4 ~ 5	褐 (GYR 4~4)	黒褐 (GYR 3~2)	褐 (GYR 4~4)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を含 む。	
1417	5	G B N R E	縄文 土器	鉢	胴 部					7 ~ 10	半褐 (GYR 4~6)	半褐 (GYR 4~6)	半褐 (GYR 4~6)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を含 む。	
1418	5	G B N R E	縄文 土器	鉢	胴下部					7 ~ 8	に赤い半褐 (GYR 4~6)	明褐色 (GYR 5~9)	明褐色 (GYR 5~9)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を含 む。微細な全雲母を多く含む。	
1419	5	G B N R E	縄文 土器	浅鉢	底 部					13.2	7.5 ~ 10.5 (GYR 2~1)	褐灰 (GYR 2~1)	黑 (GYR 2~1)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を少 し含む。角閃石をまばらに含む。	
1420	5	G B N R E	縄文 土器	深鉢	口縁部					7 ~ 11	に赤い褐 (GYR 6~4)	赤褐 (GYR 4~6)	赤褐 (GYR 4~6)	良	粘土は相。1mmの大砂粒を多く含 む。微細な全雲母を多く含む。	
1421	5	G B N R E	縄文 土器	深鉢	口縁部					9.0	灰白 (GYR 4~2)	青褐 (GYR 4~2)	灰褐 (GYR 6~1)	良	粘土はやや相。0.5~1mmの大砂 粒を多く含む。	
1422	5	G B N R E	縄文 土器	深鉢	口縁部					6 ~ 13	明褐色 (GYR 5~6)	赤褐 (GYR 4~6)	灰褐 (GYR 4~6)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を含 む。微細な全雲母・角閃石を多 く含む。	
1423	5	G B N R E	縄文 土器	深鉢	口縁部					6 ~ 65	に赤い黄褐 (GYR 6~4)	明褐色 (GYR 5~6)	黒褐 (GYR 3~1)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を含 む。微細な全雲母を含む。	
1424	5	G B N R E	縄文 土器	鉢	胴 部					11.0	に赤い黄褐 (GYR 5~4)	に赤い黄褐 (GYR 5~4)	に赤い黄褐 (GYR 5~4)	良	粘土は相。0.5~1mmの大砂粒を 多く含む。微細な全雲母を多く 含む。	
1425	5	G C O	縄文 土器	深鉢	口縁部					9 ~ 12	黒褐 (GYR 3~1)	に赤い黄褐 (GYR 5~4)	明褐色 (GYR 5~6)	良	粘土はやや相。0.5~2mmの大砂 粒を多く含む。角閃石をまばら に含む。	

遺物番号	調査次第等	出土緯	遺物種類	器種	部位	法量					色調			焼成	備考
						口径(cm)	頭径(cm)	胴径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	器厚(mm)	内面	外面	断面	
1426	5	G C0	繩文 土器	深鉢	突起					9 ~ 15	にぶい黄 (GYR 6-3)	明赤褐 (GYR 5-8)	にぶい黄 (GYR 6-3)	良	粘土は緻密。0.5mm大的砂粒を含む。
1427	5	G C0	繩文 土器	深鉢	口縁部					4.5 ~ 8	黄褐 (GYR 5-6)	黄褐 (GYR 5-6)	黄褐 (GYR 5-6)	不良	粘土は緻密。0.5mm大的砂粒を含む。微細な角閃石を多く含む。
1428	5	G C0	繩文 土器	深鉢	口縁部	30.8				5 ~ 7	灰褐 (GYR 4-2)	明褐 (GYR 5-6)	灰褐 (GYR 3-2)	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。微細な全雲母を多量に含む。
1429	5	G C0	繩文 土器	深鉢	口縁部	35.4				50	黒褐 (GYR 3-1)	明赤褐 (GYR 5-6)	灰褐 (GYR 4-2)	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。微細な全雲母を多量に含む。
1430	5	G C0	繩文 土器	深鉢	胴上部					6 ~ 8	明褐 (GYR 5-6)	橙 (GYR 6-8)	橙 (GYR 6-8)	良	粘土はやや粗。0.5 ~ 1mm大的砂粒を多く含む。石英が立つ。
1431	5	G C0	繩文 土器	鉢	胴上部					50	黒褐 (GYR 3-1)	黒褐 (GYR 3-1)	黒褐 (GYR 3-1)	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。微細な全雲母・角閃石を多く含む。
1432	5	G C0	繩文 土器	深鉢	胴上部					6 ~ 7	明赤褐 (GYR 5-6)	暗赤褐 (GYR 3-2)	明赤褐 (GYR 5-6)	良	粘土はやや粗。0.5 ~ 1mm大的砂粒を含む。微細な全雲母並に石英を含む。
1433	5	G C0	繩文 土器	鉢	附 部					5 ~ 8	黒褐 (GYR 3-1)	明黄褐 (GYR 6-6)	明黄褐 (GYR 6-6)	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。微細な全雲母を含む。
1434	5	G C0	繩文 土器	深鉢	胴上部					6 ~ 8	明赤褐 (GYR 5-6)	明赤褐 (GYR 5-6)	明赤褐 (GYR 5-6)	良	粘土は緻密。0.5mm大的砂粒を多く含む。微細な全雲母を含む。
1435	5	G C0	繩文 土器	鉢	附 部					20	黒褐 (GYR 3-1)	明赤褐 (GYR 5-6)	黒褐 (GYR 2-1)	良	粘土は緻密。0.5mm大的砂粒を含む。微細な全雲母を多量に含む。
1436	5	G C0	繩文 土器	注口付 土器	胴上部	18.0				7 ~ 9	にぶい黄 (GYR 7-0)	明赤褐 (GYR 5-6)	明赤褐 (GYR 5-6)	良	粘土は緻密。0.5mm大的砂粒を含む。微細な全雲母を多く含む。
1437	5	G C0	繩文 土器	深鉢	口縁部					7 ~ 10	橙 (GYR 6-6)	橙 (GYR 6-6)	橙 (GYR 6-6)	良	粘土はやや粗。0.5mm大的砂粒を多く含む。微細な全雲母を多く含む。
1438	5	G C0	繩文 土器	深鉢	口縁部					12 ~ 13	明赤褐 (GYR 5-8)	明赤褐 (GYR 5-8)	明赤褐 (GYR 5-8)	良	粘土は粗。0.5mm大的砂粒を多く含む。微細な全雲母・角閃石を多く含む。
1439	5	G C0	繩文 土器	深鉢	口縁部					7 ~ 11	明赤褐 (GYR 5-8)	明赤褐 (GYR 5-8)	黒褐 (GYR 3-1)	良	粘土はやや粗。0.5 ~ 1mm大的砂粒を多く含む。微細な全雲母・角閃石を含む。
1440	5	G C0	繩文 土器	深鉢	口縁部	24.0				45 ~ 55	灰青褐 (GYR 5-2)	灰褐 (GYR 4-1)	にぶい黄 (GYR 5-3)	良	粘土はやや粗。0.5 ~ 1mm大的砂粒を多く含む。微細な全雲母を含む。
1441	5	G C0	繩文 土器	鉢	口縁部	25.2				4.5 ~ 6	赤褐 (GYR 4-8)	にぶい赤褐 (GYR 4-8)	赤褐 (GYR 4-8)	良	粘土は緻密。0.5 ~ 1mm大的砂粒を含む。微細な全雲母を含む。
1442	5	G C0	繩文 土器	鉢	口縁部	21.8				5.0	浅黄 (GYR 7-3)	浅黄 (GYR 7-3)	黒褐 (GYR 2-1)	良	粘土はやや粗。0.5 ~ 1mm大的砂粒を多く含む。微細な全雲母を含む。
1443	5	G C0	繩文 土器	浅鉢	口縁部					6 ~ 9	明黄褐 (GYR 6-6)	明黄褐 (GYR 6-6)	明黄褐 (GYR 6-6)	不良	粘土は緻密。
1444	5	G C0	石器	磨石	欠損有	最大長 9.8	最大幅 9.4	最大厚 5.2	重量 620g						
1445	5	G C1	繩文 土器	深鉢	口縁部					8 ~ 14	にぶい黄褐 (GYR 6-4)	にぶい黄褐 (GYR 6-4)	黄褐 (GYR 4-1)	良	粘土はやや粗。1 ~ 2mm大的砂粒を多く含む。微細な角閃石をまばらに含む。
1446	5	G C1	繩文 土器	深鉢	口縁部					9 ~ 11	闇赤 (GYR 4-1)	明赤褐 (GYR 5-8)	黒褐 (GYR 2-1)	良	粘土はやや粗。0.5 ~ 1mm大的砂粒を多く含む。微細な全雲母を含む。
1447	5	G C1	繩文 土器	深鉢	口縁部					5 ~ 8	明赤褐 (GYR 5-8)	明赤褐 (GYR 5-8)	黒褐 (GYR 3-1)	良	粘土はやや粗。0.5 ~ 1mm大的砂粒を多く含む。微細な全雲母を多量に含む。
1448	5	G C1	繩文 土器	深鉢	胴上部					6 ~ 9	明褐 (GYR 5-6)	明褐 (GYR 5-6)	明褐 (GYR 5-6)	良	粘土はやや粗。0.5mm大的砂粒を多く含む。
1449	5	G C1	繩文 土器	鉢	胴下部					7 ~ 8	闇灰 (GYR 4-1)	にぶい黄褐 (GYR 7-2)	にぶい黄褐 (GYR 7-2)	良	粘土は緻密。0.5mm大的砂粒を含む。微細な角閃石を多く含む。
1450	5	G C1	繩文 土器	深鉢	口縁部					8 ~ 10	明赤褐 (GYR 5-8)	明赤褐 (GYR 5-8)	明赤褐 (GYR 5-8)	良	粘土はやや粗。0.5 ~ 1mm大的砂粒を多く含む。

遺物番号	調査次第等	出土緯	遺物種類	器種	部位	法量					色調			焼成	備考
						口径(cm)	頭径(cm)	胴径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	器厚(mm)	内面	外面	断面	
1451	5	G.C1	繩文土器	深鉢	口縁部					90	明赤褐色 GYR 5-6	明赤褐色 GYR 5-6	明赤褐色 GYR 5-6	良	粘土は緻密。0.5mm人の砂粒を含む。微細な全青母を多く含む。
1452	5	G.C1	繩文土器	鉢	頭縁部					7~8	暗赤褐色 GYR 3-3	明赤褐色 GYR 5-6	明赤褐色 GYR 5-6	良	粘土は緻密。微細な全青母を僅かに含む。
1453	5	G.C1	繩文土器	深鉢	胴 部					8~9	橙 GYR 6-6	明赤褐色 GYR 5-6	明赤褐色 GYR 5-6	良	粘土はやや粗。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。微細な全青母を含む。
1454	5	G.C1	繩文土器	深鉢	底 部					11.4	明褐色 GYR 5-6	にぶい褐色 GYR 5-6	にぶい褐色 GYR 5-6	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。微細な全青母をまばらに含む。
1455	5	G.C2	繩文土器	深鉢	口縁部					8~11	にぶい褐色 GYR 5-6	明褐色 GYR 5-6	明褐色 GYR 5-6	良	粘土は緻密。0.5mm人の砂粒を多く含む。微細な全青母を含む。
1456	5	G.C2	繩文土器	深鉢	口縁部	358				7~14	明赤褐色 GYR 5-6	にぶい黄褐色 GYR 3-3	にぶい黄褐色 GYR 7-8	良	粘土は緻密。0.5mm人の砂粒を多く含む。微細な全青母を含む。
1457	5	G.C2	繩文土器	深鉢	口縁部					12.0	明赤褐色 GYR 5-6	明赤褐色 GYR 5-6	明赤褐色 GYR 5-6	良	粘土はやや粗。0.5mm人の砂粒を多く含む。石英多い。
1458	5	G.C2	繩文土器	深鉢	胴上部					7~9	明赤褐色 GYR 5-6	明赤褐色 GYR 5-6	にぶい小輪 GYR 4-4	良	粘土は緻密。0.5mm人の砂粒を多く含む。微細な全青母を含む。
1459	5	G.C2	繩文土器	深鉢	胴上部					7~8	橙 GYR 6-6	橙 GYR 6-6	橙 GYR 6-6	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。微細な角閃石を多く含む。
1460	5	G.C2	繩文土器	鉢	口縁部					6.0	褐 GYR 4-3	褐 GYR 4-3	黑褐色 GYR 3-1	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。微細な角閃石を多く含む。
1461	5	G.C2	繩文土器	深鉢	口縁部					8.5~10	橙 GYR 4-3	明赤褐色 GYR 5-6	明赤褐色 GYR 5-6	良	粘土は緻密。微細な全青母を僅かに含む。
1462	5	G.C2	繩文土器	深鉢	口縁部					9.0	橙 GYR 6-6	橙 GYR 6-6	灰褐色 GYR 6-2	良	粘土は緻密。微細な全青母を多く含む。精選された粘土を使用。
1463	5	G.C2	繩文土器	鉢	口縁部					5~6	にぶい褐色 GYR 5-4	にぶい褐色 GYR 6-4	灰褐色 GYR 5-2	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。
1464	5	G.C2	繩文土器	深鉢	口縁部					6.5~7.5	にぶい黄褐色 GYR 7-8	橙 GYR 6-6	灰褐色 GYR 6-2	良	粘土はやや粗。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。微細な全青母を僅かに含む。
1465	5	G.C2	繩文土器	深鉢	口縁部					9~11	暗灰褐色 GYR 5-2	赤褐色 GYR 4-6	赤褐色 GYR 4-6	良	粘土はやや粗。0.5mm人の砂粒をまばらに含む。微細な全青母を含む。
1466	5	G.C2	繩文土器	深鉢	口縁部					9.5~12.5	橙 GYR 6-6	橙 GYR 6-6	にぶい橙 GYR 6-4	良	粘土はやや粗。0.5mm人の砂粒を僅かに含む。
1467	5	G.C2	繩文土器	鉢	口縁部	26.0				4~6	赤褐色 GYR 4-6	赤褐色 GYR 4-6	赤褐色 GYR 4-6	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。微細な全青母を多く含む。
1468	5	G.C2	繩文土器	鉢	口縁部	21.4				6~9	暗赤褐色 GYR 3-3	赤褐色 GYR 4-6	赤褐色 GYR 4-6	良	粘土はやや粗。0.5mm人の砂粒を多く含む。微細な全青母を含む。
1469	5	G.C2	繩文土器	深鉢	口縁部	40.0				4~10	明赤褐色 GYR 5-6	明赤褐色 GYR 5-6	赤褐色 GYR 4-6	良	粘土は緻密。0.5~1mmの大砂粒を含む。微細な全青母・角閃石を含む。
1470	5	G.C2	繩文土器	深鉢	口縁部	25.8				8.5~30	明赤褐色 GYR 5-6	明赤褐色 GYR 5-6	明赤褐色 GYR 5-6	不良	粘土はやや粗。2~5mmの内裡をまばらに含む。
1471	5	G.C2	繩文土器	深鉢	胴上部					5~7	黑褐色 GYR 3-3	暗赤褐色 GYR 3-4	暗赤褐色 GYR 3-4	良	粘土は粗。0.5mm人の砂粒を含む。
1472	5	G.C2	繩文土器	深鉢	胴上部					5~8	にぶい赤褐色 GYR 4-4	赤褐色 GYR 4-6	赤褐色 GYR 4-6	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。微細な全青母を僅かに含む。
1473	5	G.C2	繩文土器	浅鉢	胴下部	26.8				5~6	灰褐色 GYR 6-2	灰褐色 GYR 4-4	灰褐色 GYR 5-1	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。微細な全青母を僅かに含む。
1474	5	G.C2	繩文土器	深鉢	胴上部					4~6	明赤褐色 GYR 5-6	明赤褐色 GYR 5-6	灰褐色 GYR 4-2	良	粘土は緻密。0.5mm人の砂粒を含む。微細な全青母を僅かに含む。
1475	5	G.C2	繩文土器	鉢	胴 部					9.0	橙 GYR 6-6	橙 GYR 6-6	橙 GYR 6-6	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。微細な角閃石・全青母を含む。

遺物番号	調査次元等	出土緯経	遺物種類	器種	部位	法量				色調			焼成	備考		
						口径(cm)	頭径(cm)	胴径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	器厚(mm)	内面	外面			
1476	5	G C2	繩文 土器	深鉢	胴 部					7 ~ 9	相 (GYR 6/3)	相 (GYR 6/3)	相 (GYR 6/3)	良	胎土は緻密。0.5 ~ 2mmの大砂粒を多く含む。石英を多く含む。	
1477	5	G C2	繩文 土器	深鉢	口縁部	35.4				6 ~ 9	に赤い黄褐色 (GYR 5/0)	に赤い黄褐色 (GYR 5/0)	に赤い黄褐色 (GYR 5/0)	不良	胎土は緻密。0.5 ~ 2mmの大砂粒を多く含む。陶器的な全表面を僅かに含む。	
1478	5	G C2	繩文 土器	深鉢	口縁部	23.0				5.5 ~ 9	灰青褐色 (GYR 4/3)	黒褐色 (GYR 3/1)	灰青褐色 (GYR 4/2)	不良	胎土は緻密。0.5 ~ 2mmの大砂粒を多く含む。	
1479	5	G C2	繩文 土器	深鉢	口縁部	30.8				7 ~ 9	赤褐色 (GYR 4/6)	黒褐色 (GYR 3/1)	に赤い黄褐色 (GYR 4/3)	良	胎土はやや粗。0.5mmの大砂粒を含む。	
1480	5	G C2	繩文 土器	深鉢	胴 部					9 ~ 11	明赤褐色 (GYR 5/6)	明赤褐色 (GYR 5/6)	明赤褐色 (GYR 5/6)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全表面を僅かに含む。	
1481	5	G C2	繩文 土器	浅鉢	口縁部	23.6				7 ~ 8	に赤い黄褐色 (GYR 5/0)	黒褐色 (GYR 2/1)	に赤い黄褐色 (GYR 2/1)	良	胎土は緻密。精選された胎土を使用。微細な角閃石を多く含む。	
1482	5	G C2	繩文 土器	浅鉢	胴 部		13.8			7 ~ 8	に赤い黄褐色 (GYR 6/0)	に赤い黄褐色 (GYR 6/0)	に赤い黄褐色 (GYR 6/0)	良	胎土は緻密。精選された胎土を使用。微細な全表面・角閃石をほぼに含む。	
1483	5	G C2	繩文 土器	鉢	胴上部					6 ~ 8	相 (GYR 6/6)	明赤褐色 (GYR 5/6)	に赤い黄褐色 (GYR 7/3)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全表面を僅かに含む。	
1484	5	G C2	繩文 土器	浅鉢	口縁部	31.0				5 ~ 7	相 (GYR 6/8)	相 (GYR 6/8)	灰黒 (GYR 7/2)	不良	胎土は緻密。Im大の砂粒を含む。微細な全表面を僅かに含む。	
1485	5	G C2	繩文 土器	浅鉢	底 部					5.6	6 ~ 9	に赤い黄褐色 (GYR 3/1)	明赤褐色 (GYR 5/8)	に赤い赤褐色 (GYR 5/6)	良	胎土は緻密。精選された胎土を使用。微細な全表面・角閃石を僅かに含む。
1486	5	G C2	繩文 土器	浅鉢	底 部					8.4	11.0	黒褐色 (GYR 3/1)	明赤褐色 (GYR 5/6)	赤褐色 (GYR 4/1)	良	胎土は緻密。精選された胎土を使用。微細な角閃石を多く含む。
1487	5	G C2	石器	打削石斧	刃部欠損	最大長 7.3 最大幅 4.3 奥大厚 12 重量 51g									刃部角は 45°である。	
1488	5	G C2	石器	刮器	基部欠損	最大長 42 最大幅 64 奥大厚 0.9 重量 28g										
1489	5	G C3	繩文 土器	深鉢	口縁部					6 ~ 11	明赤褐色 (GYR 5/6)	明赤褐色 (GYR 5/6)	灰黒褐色 (GYR 4/2)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を多く含む。	
1490	5	G C3	繩文 土器	鉢	胴 部					9.0	相 (GYR 6/8)	相 (GYR 6/8)	灰黒 (GYR 7/2)	良	胎土は緻密。精選された胎土を使用。微細な全表面・角閃石を含む。	
1491	5	G C3	繩文 土器	深鉢	胴 部					8 ~ 9	に赤い黒褐色 (GYR 6/3)	灰褐色 (GYR 4/2)	明赤褐色 (GYR 5/6)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を多く含む。	
1492	5	G C3	繩文 土器	深鉢	胴上部					6 ~ 10	灰褐色 (GYR 4/2)	相 (GYR 4/6)	黑褐色 (GYR 2/1)	良	胎土はやや粗。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全表面を多く含む。	
1493	5	G C3	繩文 土器	深鉢	胴上部					5 ~ 7	灰黒 (GYR 5/8)	明赤褐色 (GYR 5/8)	灰褐色 (GYR 4/1)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全表面をどちらに含む。	
1494	5	G C3	繩文 土器	鉢	胴 部					6 ~ 7	黒褐色 (GYR 3/1)	黒褐色 (GYR 3/1)	黒褐色 (GYR 3/1)	良	胎土は緻密。0.5 ~ 1mmの大砂粒を含む。微細な角閃石を含む。	
1495	5	G C3	繩文 土器	鉢	胴 部					7 ~ 8	灰褐色 (GYR 4/2)	灰褐色 (GYR 4/2)	に赤い黄褐色 (GYR 6/3)	良	胎土は粗。0.5 ~ 1mmの大砂粒を多く含む。	
1496	5	G C3	繩文 土器	鉢	底 部		6.0			6 ~ 9	赤褐色 (GYR 4/6)	赤褐色 (GYR 4/6)	に赤い黄褐色 (GYR 6/3)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全表面を含む。	
1497	5	G C3	繩文 土器	深鉢	底 部					10.0	6 ~ 16	に赤い赤褐色 (GYR 5/6)	に赤い赤褐色 (GYR 5/6)	に赤い赤褐色 (GYR 5/6)	良	胎土は緻密。精選された胎土を使用。
1498	5	G C3	石器	石核	完形	最大長 7.5 最大幅 10.3 奥大厚 3.1 重量 279g					6 ~ 11	黒 (GYR 2/1)	に赤い赤褐色 (GYR 4/4)	赤褐色 (GYR 4/6)	良	胎土はやや粗。0.5 ~ 1mmの大砂粒を含む。微細な全表面を多く含む。
1499	5	G C3 以上	繩文 土器	深鉢	口縁部	32.0				7.5 ~ 9	灰黒 (GYR 5/1)	に赤い黄褐色 (GYR 6/4)	に赤い黄褐色 (GYR 6/4)	良	胎土は緻密。精選された胎土を使用。微細な角閃石を多く含む。	
1500	5	G C3 以上	繩文 土器	深鉢	口縁部	32.0									洞開角は 58°である。	

調査番号	出芽部	被覆種	器種	部位	法量				色調			焼成	備考	
					口径(cm)	側径(cm)	脚径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	器厚(mm)	内面	外面	断面	
1501	5 G C4 以降	織文 土器	深鉢	頭胴部					6 ~ 7	明赤褐色 (GYR 5~6)	明赤褐色 (GYR 5~6)	暗赤褐色 (GYR 3~4)	良	粘土は粗。0.5 ~ 1mmの大粒砂を多く含む。微細な全苔母を多く含む。
1502	5 G C4 以降	織文 土器	深鉢	脚上部					8 ~ 9	に赤い黄褐色 (GYR 7~8)	に赤い黄褐色 (GYR 7~8)	に赤い黄褐色 (GYR 7~8)	良	粘土は緻密。0.5mmの大粒砂を多く含む。微細な角凹石を多く含む。
1503	5 G C4 以降	織文 土器	鉢	脚 部					7 ~ 8	明赤褐色 (GYR 5~6)	に赤い黄褐色 (GYR 4~5)	に赤い黄褐色 (GYR 4~5)	良	粘土は粗。0.5 ~ 1mmの大粒砂を多く含む。微細な全苔母を多く含む。
1504	5 G C4 以降	織文 土器	深鉢	口縁部	38.6				6 ~ 7	明赤褐色 (GYR 5~6)	暗赤褐色 (GYR 3~4)	黒褐色 (GYR 3~4)	良	粘土は粗。0.5 ~ 1mmの大粒砂を多く含む。石英立晶。微細な全苔母を多く含む。
1505	5 G C4 以降	織文 土器	深鉢	口縁部					6 ~ 8	に赤い黒褐色 (GYR 5~6)	黒褐色 (GYR 3~4)	に赤い黄褐色 (GYR 4~5)	良	粘土はやや粗。0.5mmの大粒砂を多く含む。微細な全苔母を多く含む。
1506	5 G C4 以降	織文 土器	深鉢	口縁部	48.8				6 ~ 7	明赤褐色 (GYR 5~6)	明赤褐色 (GYR 5~6)	明赤褐色 (GYR 5~6)	良	粘土は緻密。0.5mmの大粒砂を多く含む。微細な全苔母を多く含む。
1507	5 G C4 以降	織文 土器	深鉢	口縁部					7 ~ 10	明赤褐色 (GYR 5~6)	明赤褐色 (GYR 5~6)	明赤褐色 (GYR 5~6)	良	粘土はやや粗。0.5 ~ 1mmの大粒砂を多く含む。微細な全苔母を多く含む。
1508	5 G C4 以降	織文 土器	深鉢	口縁部					7 ~ 9	相 (GYR 5~6)	に赤い黄褐色 (GYR 5~6)	黒褐色 (GYR 3~4)	良	粘土はやや粗。0.5 ~ 1mmの大粒砂を多く含む。微細な全苔母を多く含む。
1509	5 G C4 以降	織文 土器	深鉢	口縁部	32.4				6 ~ 8	黒褐色 (GYR 3~4)	明赤褐色 (GYR 5~6)	明赤褐色 (GYR 5~6)	良	粘土は緻密。0.5mmの大粒砂を含む。微細な全苔母を多く含む。
1510	5 G C4 以降	織文 土器	深鉢	口縁部	45.4				5.5 ~ 7	明赤褐色 (GYR 5~6)	明赤褐色 (GYR 5~6)	明赤褐色 (GYR 5~6)	良	粘土は緻密。精密された粘土を使用。微細な全苔母を多く含む。
1511	5 G C4 以降	織文 土器	深鉢	口縁部					7 ~ 8	赤褐色 (GYR 4~6)	明赤褐色 (GYR 5~6)	明赤褐色 (GYR 5~6)	良	粘土は緻密。0.5mmの大粒砂を多く含む。
1512	5 G C4 以降	織文 土器	深鉢	口縁部					7 ~ 9	明赤褐色 (GYR 5~6)	暗赤褐色 (GYR 4~5)	赤褐色 (GYR 4~6)	良	粘土はやや粗。0.5mmの大粒砂を多く含む。微細な全苔母を多く含む。
1513	5 G C4 以降	織文 土器	深鉢	口縁部	68.6				6.0	赤褐色 (GYR 4~6)	暗赤褐色 (GYR 3~4)	黒褐色 (GYR 3~4)	良	粘土は緻密。精密された粘土を使用。0.5mmの大粒砂を多く含む。角凹石を多く含む。
1514	5 G C4 以降	織文 土器	深鉢	口縁部	42.0				7 ~ 8	明赤褐色 (GYR 5~6)	明赤褐色 (GYR 5~6)	に赤い赤褐色 (GYR 5~6)	良	粘土は緻密。精密された粘土を使用。微細な全苔母を多く含む。
1515	5 G C4 以降	織文 土器	深鉢	口縁部	36.6				6 ~ 8	に赤い赤褐色 (GYR 5~6)	明赤褐色 (GYR 5~6)	明赤褐色 (GYR 5~6)	良	粘土は緻密。0.5mmの大粒砂を含む。微細な角凹石を多く含む。
1516	5 G C4 以降	織文 土器	鉢	口縁部					5 ~ 6	相 (GYR 6~6)	相 (GYR 6~6)	相 (GYR 6~6)	良	粘土は緻密。精密された粘土を使用。微細な全苔母と角凹石を多く含む。
1517	5 G C4 以降	織文 土器	深鉢	口縁部	26.6				6 ~ 7.5	明褐色 (GYR 5~6)	明褐色 (GYR 5~6)	明褐色 (GYR 6~6)	良	粘土は緻密。0.5mmの大粒砂を含む。微細な全苔母を多く含む。
1518	5 G C4 以降	織文 土器	浅鉢	口縁部	28.0				4 ~ 6.5	暗褐色 (GYR 3~3)	に赤い赤褐色 (GYR 4~5)	に赤い赤褐色 (GYR 4~5)	良	粘土は緻密。精密された粘土を使用。微細な全苔母を多く含む。
1519	5 G C4 以降	織文 土器	深鉢	口縁部	28.0				4.5 ~ 6.5	暗褐色 (GYR 3~3)	に赤い赤褐色 (GYR 4~5)	に赤い赤褐色 (GYR 4~5)	良	粘土は緻密。精密された粘土を使用。
1520	5 G C4 以降	織文 土器	深鉢	頭胴部	13.2				6 ~ 12	赤褐色 (GYR 4~6)	明赤褐色 (GYR 5~6)	黒褐色 (GYR 2~3)	良	粘土はやや粗。0.5mmの大粒砂を多く含む。微細な全苔母を多く含む。
1521	5 G C4 以降	織文 土器	深鉢	頭 脇 部					7 ~ 9	に赤い黄褐色 (GYR 6~6)	明赤褐色 (GYR 5~6)	明赤褐色 (GYR 5~6)	良	粘土はやや粗。0.5mmの大粒砂を多く含む。微細な全苔母を多く含む。
1522	5 G C4 以降	織文 土器	深鉢	脚 部					8 ~ 11	赤褐色 (GYR 4~6)	明赤褐色 (GYR 5~6)	明赤褐色 (GYR 5~6)	良	粘土は粗。0.5 ~ 1mmの大粒砂を多く含む。石英多。
1523	5 G C4 以降	織文 土器	深鉢	脚 部					7 ~ 11	に赤い黄褐色 (GYR 6~6)	明赤褐色 (GYR 5~6)	灰褐色 (GYR 6~6)	良	粘土は緻密。0.5mmの大粒砂を多く含む。
1524	5 G C4 以降	織文 土器	鉢	頭胴部	14.8				4 ~ 8	明赤褐色 (GYR 5~6)	赤褐色 (GYR 4~6)	暗赤褐色 (GYR 3~4)	良	粘土は緻密。0.5 ~ 1mmの大粒砂を含む。
1525	5 G C4 以降	織文 土器	鉢	脣下部					6 ~ 8	に赤い赤褐色 (GYR 4~5)	に赤い赤褐色 (GYR 4~5)	に赤い赤褐色 (GYR 4~5)	良	粘土は緻密。精密された粘土を使用。微細な全苔母と角凹石をどちらに含む。

遺物番号	調査次第等	出土緯	遺物種	器種	部位	法量				色調			焼成	備考	
						口径(cm)	頭径(cm)	胴径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	器厚(mm)	内面	外面		
1536	5 G C4 以中	繩文土器	鉢	胴上部						5 ~ 6.5	褐灰(0YTR 4/1)	明赤褐色(2SYR 5~8)	褐灰(0YTR 4/1)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全芸母を多く含む。
1527	5 G C4 以中	繩文土器	鉢	口～脚部	11.2					6 ~ 9	灰灰(0SYR 4/2)	赤褐色(0YTR 4/6)	赤褐色(0YTR 4/6)	良	胎土は緻密。微細な全芸母を極端に含む。
1528	5 G C4 以中	繩文土器	深鉢	口縁部	20.0					7 ~ 8	にぶい黒(0SYR 5~4)	にぶい黒(0SYR 5~4)	にぶい黒(0SYR 5~4)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を僅かに含む。微細な全芸母を僅かに含む。
1529	5 G C4 以中	繩文土器	深鉢	口縁部	29.0					6 ~ 10	にぶい黒(0SYR 6~0)	にぶい黒(0SYR 6~0)	にぶい黒(0SYR 6~0)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な角閃石・全芸母を多く含む。
1530	5 G C4 以中	繩文土器	深鉢	口縁部	40.0					8 ~ 10	明赤褐色(0YTR 5~8)	明赤褐色(0YTR 5~8)	明赤褐色(0YTR 5~8)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を僅かに含む。微細な全芸母を僅かに含む。
1531	5 G C4 以中	繩文土器	深鉢	脚 部						9 ~ 10	明赤褐色(0SYR 5~6)	にぶい黒(0SYR 4~3)	にぶい黒(0SYR 4~3)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全芸母を多く含む。
1532	5 G C4 以中	繩文土器	深鉢	底 部		6.2				8 ~ 14	にぶい黒(0SYR 5~4)	赤褐色(0YTR 4~6)	赤褐色(0YTR 4~6)	良	胎土はやや粗。0.5 ~ 2mmの大砂粒を多く含む。
1533	5 G C4 以中	繩文土器	深鉢	底 部						7.0	にぶい黒(0SYR 5~4)	粗(0SYR 6~0)	粗(0SYR 6~0)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な角閃石・全芸母を含む。
1534	5 G C4 以中	繩文土器	浅鉢	口縁部	26.0					5 ~ 8	にぶい黒(0SYR 6~4)	にぶい黒(0SYR 6~4)	にぶい黒(0SYR 6~4)	良	胎土は緻密。精選された胎土を使用。微細な角閃石を多く含む。
1535	5 G C4 以中	繩文土器	壺	頭部						7 ~ 10	粗(0SYR 6~6)	粗(0SYR 6~6)	粗(0SYR 6~6)	良	胎土は緻密。選された胎土を使用。微細な全芸母を多く含む。
1536	5 G C4 以中	石器	石鏡	完形	最大径 4.2 最大幅 1.8 最大厚 0.9 重量 5.3g									打面の転移は認められない。	
1537	5 G C4 以中	繩文土器	深鉢	口縁部	42.2					9 ~ 10	浅灰(0SYR 7~0)	黄灰(0SYR 4/1)	黄灰(0SYR 4/1)	良	胎土は緻密。0.5 ~ 1mmの大砂粒を僅かに含む。微細な全芸母・角閃石を含む。
1538	5 G C4 以中	繩文土器	鉢	口縁部						8 ~ 14	明赤褐色(0YTR 5~9)	明赤褐色(0YTR 5~9)	明赤褐色(0YTR 5~9)	良	胎土はやや粗。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母・角閃石を含む。
1539	5 G C4 以中	繩文土器	鉢	口縁部	12.2					6 ~ 8	明赤褐色(0YTR 5~9)	明赤褐色(0YTR 5~9)	明赤褐色(0YTR 5~9)	良	胎土は粗。0.5 ~ 1mmの大砂粒を含む。微細な全芸母を含む。
1540	5 G C4 以中	繩文土器	鉢	口～脚部	17.4					8.0	黑(0YTR 3~2)	明赤褐色(0YTR 5~6)	明赤褐色(0YTR 5~6)	良	胎土はやや粗。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母を含む。
1541	5 G C4 以中	繩文土器	鉢	脚 部						8 ~ 9	黑(0SYR 3~1)	黑(0YTR 2~1)	灰黄褐色(0YTR 4~2)	良	胎土は粗。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母を含む。
1542	5 G C4 以中	繩文土器	深鉢	脚 部						5 ~ 7	褐灰(0SYR 4/1)	黑褐色(0SYR 3~1)	褐灰(0YTR 4/1)	良	胎土はやや粗。0.5 ~ 1mmの大砂粒を多く含む。
1543	5 G C4 以中	繩文土器	鉢	脚下部						4 ~ 5	赤褐色(0SYR 4~6)	明赤褐色(0SYR 5~6)	にぶい黄褐色(0YTR 5~6)	良	胎土は緻密。精選された胎土を使用。微細な全芸母・角閃石をまばらに含む。
1544	5 G C4 以中	繩文土器	浅鉢	口縁部	28.6					7 ~ 8	灰(0YTR 4~2)	灰黄褐色(0YTR 4~2)	褐灰(0YTR 5/1)	良	胎土は緻密。精選された胎土を使用。微細な全芸母を多量に含む。
1545	5 G C4 以中	繩文土器	深鉢	口縁部						5.5 ~ 7	粗(0SYR 6~6)	粗(0SYR 6~6)	にぶい黄褐色(0YTR 6~6)	良	胎土は緻密。微細な全芸母と角閃石を極端に含む。
1546	5 G C4 以中	貝製品	貝 缸	半分 欠損	残存長 7.5 残存幅 3.8 最大厚 0.6 重量 11g										
1547	5 G C4 以中	繩文土器	深鉢	口縁部	32.8					7 ~ 10	褐灰(0YTR 5~1)	褐灰(0YTR 5~1)	褐灰(0YTR 5~1)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母・角閃石を多量に含む。
1548	5 G C4 以中	繩文土器	深鉢	脚 部						8.0	にぶい黄褐色(0YTR 6~6)	にぶい黄褐色(0YTR 6~6)	粗(0SYR 6~6)	良	胎土は緻密。1mmの大砂粒をまばらに含む。微細な全芸母を多く含む。
1549	5 G C4 以中	繩文土器	深鉢	脚 部						8 ~ 11	明赤褐色(0YTR 5~6)	にぶい赤褐色(0SYR 5~4)	にぶい黒(0SYR 6~6)	良	胎土は緻密。0.5 ~ 3mmの大砂粒を含む。微細な全芸母・角閃石を多く含む。
1550	5 G C4 以中	繩文土器	鉢	脚上部						6 ~ 9	灰褐色(0YTR 4~2)	灰褐色(0YTR 4~2)	明赤褐色(0YTR 5~6)	良	胎土は緻密。精選された胎土を使用。微細な角閃石を多く含む。

遺物番号	調査次第等	出土緯度	遺物種	層種	部位	法量				色調			焼成	備考	
						口径(cm)	頭径(cm)	胴径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	器厚(mm)	内面	外面		
1551	5	CD帯 C4 横文 土器	深鉢	口縁部	27.4					5.5 ~ 7	にふい・黒 (G.YR 5-4)	にふい・黒 (G.YR 5-3)	にふい・黒 (G.YR 5-2)	良	胎土は緻密、微細な全雲母を多く含む。
1552	5	CD帯 C4 横文 土器	深鉢	口縁部					5.5 ~ 8	にふい・黒 (G.YR 4-3)	にふい・黒 (G.YR 5-0)	にふい・黒 (G.YR 5-3)	良	胎土は緻密。0.5~1mmの大砂粒を含む。微細な全雲母を僅かに含む。	
1553	5	G.C4 横文 土器	深鉢	口縁部	22.0				8.0	黒褐 (G.YR 3-1)	黒褐 (G.YR 3-1)	黒褐 (G.YR 6-2)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な角閃石を多く含む。	
1554	5	G.C4 横文 土器	深鉢	胴上部					6 ~ 8	灰黄褐 (G.YR 4-3)	褐 (G.YR 4-3)	にふい・黒 (G.YR 5-3)	良	胎土はやや粗。0.5~1mmの大砂粒を含む。	
1555	5	CD帯 C4 横文 土器	深鉢	口縁部					4.5 ~ 5.5	明赤褐 (G.YR 5-6)	明赤褐 (G.YR 5-6)	にふい・黒 (G.YR 5-3)	良	胎土はやや粗。0.5~1mmの大砂粒を含む。微細な全雲母を含む。	
1556	5	CD帯 C4 横文 土器	白付 土器	圓					6 ~ 9.5	にふい・黄褐 (G.YR 6-0)	褐 (G.YR 6-0)	にふい・黄褐 (G.YR 6-2)	良	胎土はやや粗。0.5~1mmの大砂粒を含む。微細な全雲母を含む。	
1557	5	CD帯 C4 横文 土器	深鉢	底 部		7.4			5 ~ 12	明赤褐 (G.YR 5-6)	明赤褐 (G.YR 5-6)	にふい・黄褐 (G.YR 6-3)	良	胎土は緻密。1~2mmの大砂粒を含む。微細な全雲母を多く含む。	
1558	5	CD帯 C4 横文 土器	深鉢	底 部		7.0			4.5 ~ 7.5	明赤褐 (G.YR 5-6)	明赤褐 (G.YR 5-6)	にふい・黄褐 (G.YR 5-3)	良	胎土は緻密。精選された胎土を使用。微細な全雲母を僅かに含む。	
1559	5	G.C4 横文 土器	深鉢	胴 部					10 ~ 11	にふい・黄褐 (G.YR 5-0)	にふい・黒 (G.YR 5-4)	黄褐 (G.YR 5-2)	良	胎土は粗。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。微細な全雲母を多く含む。	
1560	5	G.C4 横文 土器	深鉢	胴上部					14.0	褐灰 (G.YR 4-1)	明赤褐 (G.YR 5-6)	明赤褐 (G.YR 5-6)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を僅かに含む。角閃石を僅に含む。	
1561	5	G.C4 横文 土器	深鉢	口縁部					7 ~ 10	明赤褐 (G.YR 5-8)	明赤褐 (G.YR 5-8)	明赤褐 (G.YR 5-8)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を僅かに含む。微細な全雲母を原灰に含む。	
1562	5	G.C4 横文 土器	深鉢	口縁部	32.0				9 ~ 10	黒褐 (G.YR 3-1)	明褐 (G.YR 5-6)	にふい・黄褐 (G.YR 6-4)	良	胎土は緻密。精選された胎土を使用。微細な全雲母を僅かに含む。	
1563	5	G.C4 横文 土器	深鉢	口縁部	43.2				5 ~ 6	暗赤褐 (G.YR 3-3)	暗赤褐 (G.YR 4-6)	暗赤褐 (G.YR 5-2)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を僅かに含む。精選された胎土を使用。微細な全雲母を僅かに含む。	
1564	5	G.C4 横文 土器	深鉢	胴頭部					6 ~ 9	明赤褐 (G.YR 5-8)	明赤褐 (G.YR 5-8)	褐灰 (G.YR 4-1)	良	胎土は粗。1mmの大砂粒を多く含む。微細な全雲母を多く含む。	
1565	5	G.C4 横文 土器	深鉢	胴上部					7 ~ 9	明赤褐 (G.YR 5-6)	明赤褐 (G.YR 5-6)	明赤褐 (G.YR 5-6)	良	胎土は粗。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。微細な全雲母をばらばらに含む。	
1566	5	G.C4 横文 土器	深鉢	胴上部					6 ~ 9	にふい・赤褐 (G.YR 5-0)	褐 (G.YR 6-4)	褐 (G.YR 6-4)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。角閃石をばらばらに含む。	
1567	5	G.C4 横文 土器	浅鉢	口縁部					6 ~ 8	にふい・黒 (G.YR 5-3)	にふい・黒 (G.YR 5-3)	黒褐 (G.YR 3-2)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な角閃石を多く含む。	
1568	5	G.C4 横文 土器	深鉢	底 部		6.0			6 ~ 12	にふい・黄褐 (G.YR 6-4)	褐灰 (G.YR 4-1)	明赤褐 (G.YR 5-8)	良	胎土はやや粗。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。微細な全雲母を僅かに含む。	
1569	5	G.C4 横文 土器	浅鉢	底 部		8.8			5 ~ 6	明赤褐 (G.YR 5-6)	明赤褐 (G.YR 5-6)	明赤褐 (G.YR 5-6)	良	胎土は緻密。精選された胎土を使用。	
1570	5	G.C4 横文 土器	浅鉢	口縁部	23.0				5 ~ 9	黒褐 (G.YR 5-3)	明赤褐 (G.YR 5-8)	黄褐 (G.YR 5-3)	良	胎土は多く含む。微細な全雲母をまばらに含む。	
1571	5	G.C4 横文 土器	口付 土器	胴上部		20.4			6.0	黒褐 (G.YR 3-1)	黒褐 (G.YR 3-1)	明赤褐 (G.YR 5-8)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。精選された胎土を使用。微細な全雲母を僅かに含む。	
1572	5	G.C4 横文 土器	鉢	胴上部					4.5 ~ 5	灰褐 (G.YR 4-2)	灰褐 (G.YR 4-2)	灰褐 (G.YR 4-2)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全雲母を多く含む。	
1573	5	G.C4 横文 土器	鉢	胴 部					6 ~ 7	明赤褐 (G.YR 5-8)	暗赤褐 (G.YR 3-1)	明赤褐 (G.YR 5-8)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を僅かに含む。精選された胎土を使用。	
1574	5	G.C4 貝殻 品	貝殻 品	半分 欠損	最大径 7.3	最大径 4.3	最大径 0.5	最大径 7g							
1575	5	G.C4 石器	石器	完形	最大径 7.6	最大径 6.4	最大径 4.1	最大径 267g							

遺物番号	調査次第等	遺物種類	遺物種類	器種	部位	法量					色調			焼成	備考
						口径 (cm)	頭径 (cm)	胴径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	器厚 (mm)	内面	外面	断面	
1601	5 G D0 II 等	G 石器	G 石斧	打削石斧	刃部 欠損	最大長 5.1	最大幅 4.2	最大厚 1.8	重量 34.5g						
1602	5 G D0 II 等	G 石器	G 石斧	深鉢	側 部		37.2			5.5 ~ 6	明赤褐色 (GYR 5/6)	明赤褐色 (GYR 5/6)	に赤い黄褐色 (GYR 5/6)	良	粘土は緻密。1mm大の砂粒を少し含む。簡陋な金雲母を多く含む。
1603	5 G D0 II 等	G 石器	G 石斧	口縁部	18.6					6 ~ 9	灰褐色 (GYR 7/2)	灰褐色 (GYR 5/1)	灰褐色 (GYR 7/3)	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。0.5mm大の砂粒を含む。微細な金雲母・角閃石を含む。
1604	5 G D0 II 等	G 石器	G 石斧	深鉢	口縁部					7.0	明赤褐色 (GYR 5/6)	明赤褐色 (GYR 4/5)	明赤褐色 (GYR 5/6)	良	粘土は緻密。0.5mm大の砂粒を含む。良石が多く含む。
1605	5 G D1 等	G 石器	G 石斧	深鉢	側 部					5.5 ~ 7	明赤褐色 (GYR 5/6)	明赤褐色 (GYR 5/6)	明赤褐色 (GYR 5/6)	良	粘土は緻密。1 ~ 2mm大の砂粒を多く含む。簡陋な金雲母を多量に含む。
1606	5 G D1 等	G 石器	G 石斧	深鉢	側上部					7 ~ 14	黒褐色 (GYR 5/1)	褐 (GYR 6/6)	褐 (GYR 6/4)	良	粘土は粗粒。1.5mm大の砂粒を多く含む。簡陋な金雲母を僅かに含む。
1607	5 G D1 等	G 石器	G 石斧	深鉢	側上部					6 ~ 9	に赤い黄褐色 (GYR 5/6)	明赤褐色 (GYR 5/6)	暗灰褐色 (GYR 5/2)	良	粘土は緻密。0.5mm大の砂粒を多く含む。微細な金雲母をまばらに含む。
1608	5 G D1 等	G 石器	G 石斧	口頂部	41.6					6.5 ~ 7	に赤い黄褐色 (GYR 5/6)	に赤い赤褐色 (GYR 4/5)	明赤褐色 (GYR 5/6)	良	第1回調査。0.5mm大の砂粒を多く含む。簡陋な金雲母と角閃石を多く含む。
1609	5 G D1 等	G 石器	G 石斧	深鉢	頭側部		36.2			6 ~ 9	に赤い黄褐色 (GYR 5/3)	明赤褐色 (GYR 5/6)	明赤褐色 (GYR 5/6)	良	粘土は緻密。0.5mm大の砂粒を多く含む。簡陋な金雲母を含む。
1610	5 G D1 等	G 石器	G 石斧	深鉢	側上部					7 ~ 10	黒褐色 (GYR 3/1)	明赤褐色 (GYR 5/6)	に赤い褐 (GYR 6/3)	良	粘土は粗。0.5mm大の砂粒を多く含む。良石・角閃石を多く含む。
1611	5 G D1 等	G 石器	G 石斧	深鉢	側上部					5 ~ 12	灰褐色 (GYR 4/2)	明赤褐色 (GYR 5/6)	明赤褐色 (GYR 5/6)	良	粘土はやや粗。0.5 ~ 1mmの大砂粒を含む。簡陋な金雲母・角閃石が多量。
1612	5 G D1 等	G 石器	G 石斧	深鉢	側 上部					5.5 ~ 7	に赤い黄褐色 (GYR 5/4)	に赤い黄褐色 (GYR 5/4)	に赤い黄褐色 (GYR 5/4)	良	粘土は緻密。3 ~ 4mm大の砂粒を多く含む。簡陋な金雲母・角閃石を多く含む。
1613	5 G D1 II 等	G 石器	刮削器	不定形	最大長 5.6	最大幅 7.9	最大厚 1.2	重量 79.2g							打削面は鋸面であり、刃端角は 62°である。
1614	5 G D1 II 等	G 石器	G 石斧	深鉢	側下部		35.4			7 ~ 8	黒褐色 (GYR 3/1)	赤褐色 (GYR 4/8)	黒褐色 (GYR 2/1)	良	粘土はやや粗。0.5mm大の砂粒を多く含む。簡陋な金雲母・角閃石を多く含む。
1615	5 G D2 等	G 石器	貝製品	不定形	最大長 5.6	最大幅 7.1	最大厚 2.0	重量 21g							
1616	5 G D2 等	G 石器	貝製品	不定形	最大長 5.7	最大幅 6.4	最大厚 1.9	重量 21g							
1617	5 G D2 等	G 石器	貝製品	深鉢	側上部		44.0			10 ~ 13	に赤い黄褐色 (GYR 7/3)	に赤い黄褐色 (GYR 7/3)	黒褐色 (GYR 4/7)	良	粘土はやや粗。0.5 ~ 3mmの大砂粒を多く含む。角閃石・金雲母を多く含む。
1618	5 G D2 等	G 石器	貝製品	深鉢	側 部					7 ~ 8	灰褐色 (GYR 4/2)	に赤い黄褐色 (GYR 5/4)	に赤い黄褐色 (GYR 5/6)	良	粘土はやや粗。0.5 ~ 1mmの大砂粒を含む。良石に含む。簡陋な金雲母を僅かに含む。
1619	5 G D2 等	G 石器	貝製品	深鉢	口縁部					7 ~ 9	に赤い褐色 (GYR 5/4)	明赤褐色 (GYR 5/6)	明赤褐色 (GYR 5/6)	良	粘土は緻密。0.5mm大の砂粒を含む。微細な金雲母を含む。
1620	5 G D2 等	G 石器	貝製品	深鉢	口縁部					10.0	明赤褐色 (GYR 5/6)	明赤褐色 (GYR 4/3)	明赤褐色 (GYR 5/6)	良	粘土はやや粗。0.5mm大の砂粒を多く含む。微細な金雲母を多量に含む。
1621	5 G D2 等	G 石器	貝製品	口縁部	12.6					5.0	黒褐色 (GYR 4/1)	黒褐色 (GYR 5/2)	黒褐色 (GYR 5/2)	良	粘土は緻密。0.5mm大の砂粒を含む。微細な金雲母を僅かに含む。
1622	5 G D2 等	G 石器	貝製品	深鉢	口縁部					5 ~ 6	褐 (GYR 4/3)	褐 (GYR 4/3)	に赤い黄褐色 (GYR 5/2)	良	粘土はやや粗。0.5mm大の砂粒を少し含む。微細な金雲母を僅かに含む。
1623	5 G D2 等	G 石器	貝製品	深鉢	口縁部					7 ~ 8	明赤褐色 (GYR 5/6)	明赤褐色 (GYR 5/6)	明赤褐色 (GYR 5/6)	良	粘土は緻密。0.5mm大の砂粒を含む。微細な金雲母を僅かに含む。
1624	5 G D2 等	G 石器	貝製品	深鉢	口縁部					5 ~ 6	明赤褐色 (GYR 5/6)	明赤褐色 (GYR 5/6)	黒褐色 (GYR 3/1)	良	粘土は緻密。0.5mm大の砂粒を含む。
1625	5 G D2 等	G 石器	貝製品	深鉢	口縁部					5 ~ 6.5	に赤い褐 (GYR 5/4)	黒褐色 (GYR 3/1)	黒褐色 (GYR 2/1)	良	粘土は緻密。0.5mm大の砂粒を含む。

遺物番号	調査次第等	出土緯	遺物種	器種	部位	法量					色調			焼成	備考	
						口径(cm)	頭径(cm)	胴径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	器厚(mm)	内面	外面	断面		
1626	5	G D2	繩文 土器	深鉢	口縁部					6~7	暗灰黄 (GYR 5~2)	明赤褐 (GYR 5~8)	暗灰黄 (GYR 5~2)	不 良	胎土はやや粗。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全芸母を僅かに含む。	
1627	5	G D2	繩文 土器	深鉢	頭胴部					8~11	暗赤褐 (GYR 3~2)	赤褐 (GYR 4~6)	にぶい赤褐 (GYR 4~6)	良	胎土はやや粗。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。	
1628	5	G D2	繩文 土器	深鉢	胴上部					7~8	明赤褐 (GYR 5~8)	明赤褐 (GYR 5~8)	明赤褐 (GYR 5~8)	良	胎土はやや粗。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母を多量に含む。	
1629	5	G D2	繩文 土器	深鉢	頭胴部					11~ 13	赤褐 (GYR 4~8)	赤褐 (GYR 4~8)	赤褐 (GYR 4~8)	良	胎土は粗。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母を多く含む。	
1630	5	G D2	繩文 土器	深鉢	胴 部					8~10	明赤褐 (GYR 5~8)	明赤褐 (GYR 5~8)	にぶい黄褐 (GYR 6~4)	良	胎土はやや粗。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母を含む。	
1631	5	G D2	繩文 土器	深鉢	口縁部	44.4				8~10	赤褐 (GYR 4~6)	赤褐 (GYR 4~6)	赤褐 (GYR 4~6)	良	胎土は粗。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母を僅かに含む。	
1632	5	G D2	繩文 土器	鉢	口縁部	18.6				9~10	黒褐 (GYR 3~2)	暗赤褐 (GYR 3~4)	暗赤褐 (GYR 3~4)	良	胎土は粗。1~2mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母を含む。	
1633	5	G D2	繩文 土器	深鉢	口縁部					8~10	褐 (GYR 6~6)	にぶい黄褐 (GYR 6~4)	にぶい黄褐 (GYR 6~4)	良	胎土は粗。0.5~1.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母を僅かに含む。	
1634	5	G D2	繩文 土器	深鉢	口縁部					10.0	明赤褐 (GYR 5~6)	明赤褐 (GYR 5~6)	明赤褐 (GYR 5~6)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を僅かに含む。	
1635	5	G D2	繩文 土器	鉢	胴 部					5~55	にぶい褐 (GYR 5~4)	明褐 (GYR 5~6)	にぶい褐 (GYR 5~4)	良	胎土は緻密。0.5~1mmの大砂粒を含む。微細な全芸母と夷岡石を含む。	
1636	5	G D2	繩文 土器	深鉢	胴 部					8~9	褐 (GYR 4~3)	明赤褐 (GYR 5~6)	明赤褐 (GYR 5~6)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を多く含む。	
1637	5	G D2	繩文 土器	深鉢	胴上部					6.0	明赤褐 (GYR 5~6)	明赤褐 (GYR 5~6)	にぶい赤褐 (GYR 4~6)	良	胎土は緻密。0.5~1mmの大砂粒を含む。微細な全芸母を含む。	
1638	5	G D2	繩文 土器	深鉢	胴 部					6~7	赤褐 (GYR 4~6)	赤褐 (GYR 4~6)	赤褐 (GYR 4~6)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。	
1639	5	G D2	繩文 土器	深鉢	胴下部					8~9	黒 (GYR 2~1)	黒褐 (GYR 4~2)	灰黄褐 (GYR 4~2)	良	胎土は緻密。0.5~1mmの大砂粒を含む。微細な全芸母と夷岡石を含む。	
1640	5	G D2	繩文 土器	深鉢	胴 部					5~8	にぶい褐 (GYR 5~4)	にぶい褐 (GYR 5~4)	にぶい褐 (GYR 5~4)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な夷岡石を多く含む。	
1641	5	G D2	繩文 土器	鉢	胴 部					5.0	褐灰 (GYR 4~3)	褐灰 (GYR 4~3)	にぶい褐 (GYR 5~2)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を僅かに含む。微細な全芸母をばらに含む。	
1642	5	G D2	繩文 土器	鉢	口縁部					5~6	にぶい黄褐 (GYR 6~4)	にぶい黄褐 (GYR 6~4)	にぶい黄褐 (GYR 6~4)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全芸母と夷岡石を僅かに含む。	
1643	5	G D2	繩文 土器	深鉢	口縁部					6~8	褐 (GYR 4~3)	明赤褐 (GYR 6~6)	明赤褐 (GYR 6~6)	不 良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全芸母を多く含む。	
1644	5	G D2	繩文 土器	深鉢	底 部					7.5	褐 (GYR 6~6)	明赤褐 (GYR 5~8)	明赤褐 (GYR 4~1)	良	胎土は粗。1mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母をまばらに含む。	
1645	5	G D2	繩文 土器	深鉢	底 部					6.0	明赤褐 (GYR 5~6)	明赤褐 (GYR 5~6)	灰黄褐 (GYR 4~2)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全芸母を含む。	
1646	5	G D2	繩文 土器	浅鉢	口縁部					7.0	明赤褐 (GYR 5~6)	明赤褐 (GYR 5~6)	暗赤褐 (GYR 3~2)	良	胎土はやや粗。0.5mmの大砂粒を多く含む。	
1647	5	G D2	繩文 土器	壺	胴上部					7.0	明褐 (GYR 5~6)	明褐 (GYR 5~6)	灰黄褐 (GYR 5~2)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全芸母を含む。	
1648	5	G D2	繩文 土器	注口付 土器	胴 部					4~6	明赤褐 (GYR 5~6)	明赤褐 (GYR 5~6)	黑褐 (GYR 3~1)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な夷岡石を僅かに含む。	
1649	5	G D2	繩文 土器	浅鉢	胴 部					5~6	灰黄褐 (GYR 6~2)	黑褐 (GYR 3~1)	灰黄褐 (GYR 6~2)	良	胎土は緻密。0.5~1mmの大砂粒を含む。微細な全芸母を含む。	
1650	5	G D2	瓦質 土器	培塿	体 部	21.0				21.2	23	-	黒 (N 2)	黒 (N 2)	良	胎土は緻密。微細な全芸母を多く含む。

遺物番号	調査次元等	出土緯線	遺物種類	器種	部位	法量				色調			焼成	備考	
						口径(cm)	頭径(cm)	胴径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	器厚(mm)	内面	外面		
1651	5	G D2 II層	石器	打削石斧	完形	最大径 7.8	最大幅 6.9	最大厚 1.6	151.5g						
1652	5	G D2 II層	石器	磨石	完形	最大径 5.7	最大幅 5.1	最大厚 2.9	重質	106.0g					
1653	5	G D2 II層	石器	石鏟	完形	最大径 8.1	最大幅 4.8	最大厚 1.4	重質	63.0g					
1654	5	G D2 II層	石器	二次加工剥片	基部欠損	最大径 2.8	最大幅 4.8	最大厚 1.2	重質	14.4g					
1655	5	G D3 IV層	織文土器	深鉢	胴 部					7 ~ 7.5	橙 (GYR 6-6)	にぶい褐 (GYR 5-4)	にぶい褐 (GYR 5-4)	良	胎土はやや粗。0.5 ~ 2mmの大砂粒を多く含む。微細な全雲母を多く含む。
1656	5	G D3 IV層	織文土器	深鉢	胴 部					8 ~ 11	褐 (GYR 6-6)	にぶい褐 (GYR 5-4)	明黄褐 (GYR 7-7)	良	胎土はやや粗。0.5 ~ 2mmの大砂粒を多く含む。微細な全雲母を多く含む。
1657	5	G D3	織文土器	深鉢	胴 部					8 ~ 9.5	灰黃褐 (GYR 4-2)	赤褐 (GYR 5-4)	赤褐 (GYR 4-6)	良	胎土は緻密。精選された胎土を使用。微細な全雲母・角閃石を含む。
1658	5	G D3	織文土器	鉢	胴上部					7 ~ 13	褐赤褐 (GYR 5-6)	暗赤褐 (GYR 3-1)	暗赤褐 (GYR 3-1)	良	胎土はやや粗。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全雲母・角閃石を含む。
1659	5	G D3	織文土器	深鉢	胴上部		29.0			9 ~ 10	赤褐 (GYR 5-4)	にぶい赤褐 (GYR 4-3)	にぶい赤褐 (GYR 4-3)	良	胎土はやや粗。0.5 ~ 2mmの大砂粒を多く含む。
1660	5	G D3	織文土器	鉢	胴上部					8 ~ 9	にぶい褐 (GYR 5-4)	褐 (GYR 4-3)	褐 (GYR 4-3)	良	胎土は緻密。精選された胎土を使用。微細な全雲母を含む。
1661	5	G D3	織文土器	鉢	胴上部					10.0	灰黃褐 (GYR 5-6)	暗灰 (GYR 6-1)	暗灰 (GYR 6-1)	良	胎土は緻密。精選された胎土を使用。微細な全雲母・角閃石を多く含む。
1662	5	G D3	織文土器	深鉢	口縁部					9 ~ 10.5	褐灰 (GYR 5-1)	褐灰 (GYR 6-6)	褐灰 (GYR 4-1)	良	胎土は緻密。精選された胎土を使用。微細な全雲母を多量に含む。
1663	5	G D3	織文土器	深鉢	口縁部					7.5 ~ 9	明赤褐 (GYR 5-6)	明赤褐 (GYR 5-6)	にぶい黄褐 (GYR 5-2)	良	胎土は緻密。0.5 ~ 1mmの大砂粒を多く含む。微細な全雲母をまばらに含む。
1664	5	G D3	織文土器	深鉢	口縁部					7 ~ 9	褐 (GYR 6-6)	明赤褐 (GYR 5-6)	明赤褐 (GYR 5-6)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全雲母を含む。
1665	5	G D3	織文土器	壺	口縁部	17.4				5 ~ 8	黃褐 (GYR 4-1)	黃褐 (GYR 6-2)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全雲母を復かに含む。	
1666	5	G D3	織文土器	深鉢	胴 部					9 ~ 11	明赤褐 (GYR 5-6)	明赤褐 (GYR 5-3)	明赤褐 (GYR 5-3)	良	胎土は粗。0.5 ~ 0.5mmの大砂粒を多く含む。
1667	5	G D3	織文土器	深鉢	胴 部					6 ~ 7	褐 (GYR 6-6)	褐 (GYR 6-6)	褐 (GYR 6-6)	良	胎土は緻密。0.5 ~ 1mmの大砂粒を多く含む。微細な全雲母をまばらに含む。
1668	5	G D3	織文土器	鉢	胴 部					5.5	黑褐 (GYR 3-2)	黑褐 (GYR 3-2)	明赤褐 (GYR 5-6)	良	胎土はやや粗。0.5 ~ 1mmの大砂粒を含む。微細な全雲母を復かに含む。
1669	5	G D3	織文土器	深鉢	口縁部	22.3				6 ~ 7	黑褐 (GYR 3-1)	明赤褐 (GYR 5-6)	明赤褐 (GYR 5-6)	良	胎土は緻密。精選された胎土を使用。微細な全雲母を復かに含む。
1670	5	G D3	織文土器	壺	口縁部	12.9	14.8			6 ~ 9	黒 (GYR 2-1)	黒 (GYR 2-1)	明褐 (GYR 5-8)	不良	胎土は粗。0.5 ~ 1mmの大砂粒を多く含む。微細な全雲母を含む。
1671	5	G D3	織文土器	深鉢	胴 部					5 ~ 6	褐 (GYR 4-1)	黒褐 (GYR 3-1)	にぶい褐 (GYR 5-2)	良	胎土は緻密。0.5 ~ 1mmの大砂粒を含む。微細な角閃石を含む。
1672	5	G D3	織文土器	深鉢	胴下部					7 ~ 9	明赤褐 (GYR 5-6)	明赤褐 (GYR 5-6)	明赤褐 (GYR 5-6)	良	胎土は粗。0.5 ~ 1mmの大砂粒を多く含む。石英・長石を含む。微細な全雲母を復かに含む。
1673	5	G D3	織文土器	深鉢	胴 部					6 ~ 8	にぶい褐 (GYR 5-4)	にぶい褐 (GYR 5-4)	赤褐 (GYR 4-6)	良	胎土はやや粗。0.5 ~ 1mmの大砂粒を多く含む。微細な全雲母をまばらに含む。
1674	5	G D3	織文土器	深鉢	胴 部					7 ~ 9	赤褐 (GYR 4-6)	赤褐 (GYR 4-6)	赤褐 (GYR 4-6)	良	胎土は粗。角閃石を含む。微細な全雲母を含む。
1675	5	G D3	織文土器	深鉢	底 部		7.0	5.5 ~ 8		明赤褐 (GYR 5-6)	灰褐 (GYR 5-3)	にぶい褐 (GYR 5-3)	良	胎土は粗。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全雲母をまばらに含む。	

遺物番号	調査次第等	出土緯	遺物種	器種	部位	法量				色調			焼成	備考		
						口径(cm)	頭径(cm)	胴径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	器厚(mm)	内面	外面			
1676	5	G_D3	繩文土器	深鉢	底部					124	8~13	黄灰(25Y 4/1)	明赤褐(25YR 5/8)	明赤褐(25YR 5/8)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母を多く含む。
1677	5	G_D3	繩文土器	壺	口縁部	26.0					7~12	明赤褐(25YR 5/8)	明赤褐(25YR 5/8)	褐灰(10YR 5/1)	良	胎土はやや粗。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。
1678	5	G_D3	繩文土器	深鉢	胴部					4.5~6	黑(00TR 2/3)	にぶい黒(03YR 5/4)	にぶい黒(03YR 5/4)	明赤褐(25YR 5/8)	良	胎土は緻密。0.5~1mmの大砂粒を少し含む。微細な全芸母を確かに含む。
1679	5	G_D3	繩文土器	鉢	胴部					60	黒褐(5YR 3/1)	黒褐(5YR 3/1)	褐灰(7.5YR 4/1)	不良	胎土は緻密。精選された粘土を使用。	
1680	5	G_D3 II層	石器	打製石斧	完形	最大長89	最大幅75	最大厚13	重量	137g						
1681	5	G_D3 II層	石器	打製石斧	完形	最大長72	最大幅83	最大厚20	重量	155.5g						
1682	5	G_D3 II層	石器	石鏟	完形	最大長11.6	最大幅8.0	最大厚24	重量	331g						
1683	5	G_D3	石器	二次加工剥片	完形	最大長8.7	最大幅9.0	最大厚2.0	重量	130g						
1684	5	G_D4	繩文土器	鉢	口縁部					9~14	にぶい黒(10YR 5/4)	明赤褐(5YR 5/6)	明赤褐(5YR 5/6)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。精選された粘土を使用。角閃石を多く含む。	
1685	5	G_D4	繩文土器	深鉢	口縁部					4~13.5	明赤褐(25YR 5/6)	褐灰(10YR 4/1)	明赤褐(25YR 5/6)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母を含む。	
1686	5	G_D4	繩文土器	深鉢	口縁部					7.5~13	にぶい黒(5YR 5/4)	灰黒(5YR 4/2)	にぶい黒(5YR 5/4)	良	胎土は緻密。0.5~1mmの大砂粒を少し含む。微細な全芸母を含む。	
1687	5	G_D4	繩文土器	深鉢	胴上部					7~12	にぶい黒(5YR 5/4)	明赤褐(5YR 5/6)	明赤褐(5YR 5/6)	良	胎土は緻密。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。微細な角閃石を僅かに含む。	
1688	5	G_D4	繩文土器	深鉢	胴上部					7.0	赤褐(5YR 4/3)	赤褐(5YR 4/3)	赤褐(5YR 4/3)	良	胎土はやや粗。0.5mmの大砂粒を含む。	
1689	5	G_D4	繩文土器	深鉢	胴部					6.5~7	にぶい黒(7.5YR 5/4)	褐灰(10YR 4/3)	にぶい黒(10YR 4/3)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全芸母を多く含む。	
1690	5	G_D4	繩文土器	鉢	口縁部					6~7	にぶい黒(10YR 6/3)	褐灰(10YR 4/1)	褐灰(10YR 4/1)	良	胎土は緻密。精選された粘土を使用。角閃石を僅かに含む。	
1691	5	G_D4	繩文土器	壺	口縁部	13.0				8~9	明赤褐(5YR 5/6)	明赤褐(5YR 5/6)	灰褐(5YR 5/2)	良	胎土はやや粗。0.5~1mmの大砂粒を多く含む。微細な全芸母を僅かに含む。	
1692	5	G_D4	繩文土器	深鉢	口縁部					6~7	明赤褐(5YR 5/6)	灰黒(5YR 4/2)	にぶい黒(10YR 6/3)	良	胎土はやや粗。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全芸母を含む。	
1693	5	G_D4	繩文土器	深鉢	口縁部					6~7.5	灰黒(5YR 4/2)	褐(10YR 5/3)	にぶい黒(10YR 5/3)	良	胎土は緻密。1.5mmの大砂粒を確かに含む。微細な全芸母を含む。	
1694	5	G_D4	繩文土器	深鉢	胴部					6~9	にぶい黒(5YR 5/4)	明赤褐(5YR 5/6)	にぶい黒(5YR 6/4)	良	胎土は緻密。1mmの大砂粒を少し含む。微細な全芸母を含む。	
1695	5	G_D4	繩文土器	壺	胴上部					4.5~6	明赤褐(5YR 5/6)	明赤褐(5YR 5/6)	灰黒(10YR 5/2)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を僅かに含む。微細な全芸母を多く含む。	
1696	5	G_D4	繩文土器	深鉢	胴上部					5~8	褐灰(5YR 4/1)	灰黒(5YR 4/2)	褐灰(5YR 5/2)	良	胎土は緻密。精選された粘土を使用。	
1697	5	G_D4	繩文土器	深鉢	胴部					5.5~8	明赤褐(25YR 5/6)	灰黒(7.5YR 4/2)	灰黒(10YR 5/2)	良	胎土は緻密。0.5~1mmの大砂粒を含む。	
1698	5	G_D4	繩文土器	深鉢	口縁部					6.5~10.5	明赤褐(5YR 5/6)	灰黒(5YR 4/2)	にぶい黒(10YR 5/3)	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。	
1699	5	G_D4	繩文土器	深鉢	口縁部					4.5~6.5	黒褐(6YR 3/1)	にぶい黒(6YR 6/3)	にぶい黒(6YR 6/3)	良	胎土は緻密。微細な全芸母を多く含む。	
1700	5	G_D4	繩文土器	深鉢	口縁部					5~8	にぶい黒(7.5YR 5/4)	明赤褐(5YR 5/6)	明赤褐(5YR 5/6)	良	胎土は緻密。微細な全芸母を含む。	

遺物番号	調査次第等	出土緯	遺物種	器種	部位	法量				色調			焼成	備考	
						口径(cm)	頭径(cm)	胴径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	器厚(mm)	内面	外面		
1701	5	G D4	繩文 土器	深鉢	口縁部					75	明赤褐色 GYR 5~8	明赤褐色 GYR 5~8	明赤褐色 GYR 5~8	良	粘土はやや粗。0.5mm大の砂粒を多く含む。微細な全雲母を多く含む。
1702	5	G D4	繩文 土器	深鉢	胴 部					55~85	にふい黄褐色 GYR 5~41	明褐色 GYR 5~6	明褐色 GYR 5~6	良	粘土は緻密。0.5mm大の砂粒を少し含む。微細な全雲母を含む。
1703	5	G D4 単	繩文 土器	深鉢	胴上部					6~9	にふい黄褐色 GYR 5~4	黒褐色 GYR 3~2	黒褐色 GYR 3~2	良	粘土はやや粗。0.5mm大の砂粒を多く含む。微細な全雲母を多く含む。
1704	5	G D4	繩文 土器	鉢	胴 部					5~7	にふい黄褐色 GYR 5~41	明赤褐色 GYR 5~6	にふい黄褐色 GYR 5~6	良	粘土は緻密。0.5mm大の砂粒を少し含む。微細な全雲母を多く含む。
1705	5	G D4	繩文 土器	深鉢	口縁部					7~8	にふい赤褐色 GYR 5~6	褐灰褐色 GYR 5~1	褐灰褐色 GYR 4~2	良	粘土は緻密。0.5~1mm大の砂粒を含む。微細な全雲母を僅かに含む。
1706	5	G D4	繩文 土器	鉢	口縁部	204				85~15	褐 GYR 6~9	褐 GYR 6~9	褐灰 GYR 4~1	良	粘土はやや粗。0.5~2mmの砂粒を多く含む。微細な全雲母、角閃石を含む。
1707	5	G D4	繩文 土器	亞	口縁部					8~10	にふい褐色 GYR 5~6	褐灰褐色 GYR 4~2	褐 GYR 6~8	良	粘土は緻密。0.5mm大の砂粒を少し含む。微細な全雲母を多く含む。
1708	5	G D4 玉形	繩文 土器	深鉢	胴 部					5~85	にふい褐色 GYR 5~6	赤褐色 GYR 4~6	赤褐色 GYR 4~6	良	粘土は緻密。0.5mm大の砂粒を少し含む。微細な全雲母を含む。
1709	5	G D4	繩文 土器	深鉢	底 部	136				8~10	にふい赤褐色 GYR 5~6	明赤褐色 GYR 5~6	にふい赤褐色 GYR 5~6	良	粘土はやや粗。0.5mm大の砂粒を多く含む。微細な全雲母・角閃石を含む。
1710	5	G D4	繩文 土器	浅鉢	底 部					70	60	にふい赤褐色 GYR 3~1	にふい赤褐色 GYR 4~4	良	粘土はやや粗。0.5mm大の砂粒を多く含む。柔軟した粘土片を一片含む。
1711	5	G D4	繩文 土器	深鉢	胴 部					45	明赤褐色 GYR 5~6	黒褐色 GYR 3~1	にふい赤褐色 GYR 4~6	良	粘土は緻密。0.5~1mm大の砂粒を含む。微細な全雲母を僅かに含む。
1712	5	G D4	石器	石錐	完形	最太径 73	最大幅 6.7	最厚 22	重量 106.5g						
1713	5	G E1	石器	打製石斧	刃部	最太径 60	最大幅 60	最厚 19	重量 80.5g						
1714	5	G F1	繩文 土器	深鉢	口縁部					7~8	明赤褐色 GYR 5~6	明赤褐色 GYR 5~6	明赤褐色 GYR 5~6	良	粘土は緻密。0.5~1mm大の砂粒を含む。微細な全雲母を僅かに含む。
1715	5	G F1	繩文 土器	深鉢	張綱部					70	褐 GYR 6~9	褐 GYR 6~9	褐 GYR 6~9	良	粘土はやや粗。0.5~1mm大の砂粒を多く含む。微細な全雲母を多く含む。
1716	5	G F1	繩文 土器	鉢	胴下部					7~8	浅黃 GYR 7~9	浅黃 GYR 7~9	浅黃 GYR 7~9	良	粘土はやや粗。0.5mm大の砂粒を多く含む。微細な角閃石を含む。
1717	5	G F1	繩文 土器	深鉢	口縁部					6.5~8	黒褐色 GYR 3~1	黒褐色 GYR 3~1	黒褐色 GYR 3~1	良	粘土は緻密。0.5mm大の砂粒を含む。微細な全雲母を僅かに含む。
1718	5	G F1	繩文 土器	深鉢	胴 部					5~10	赤褐色 GYR 4~6	赤褐色 GYR 4~6	赤褐色 GYR 4~6	良	粘土はやや粗。0.5~2mmの砂粒を多く含む。微細な全雲母を多く含む。
1719	5	G F2	繩文 土器	鉢	口縁部					8~10	明赤褐色 GYR 5~6	明赤褐色 GYR 5~6	明赤褐色 GYR 5~6	良	粘土は緻密。0.5mm大の砂粒を多く含む。
1720	5	G F2	繩文 土器	鉢	口縁部					7~8	明赤褐色 GYR 5~6	明赤褐色 GYR 5~6	明赤褐色 GYR 5~6	良	粘土は緻密。0.5mm大の砂粒を多く含む。微細な全雲母・角閃石を多く含む。
1721	5	G F2	繩文 土器	深鉢	口縁部					7~9	褐褐色 GYR 3~3	褐褐色 GYR 5~6	明赤褐色 GYR 5~6	不良	粘土は粗。0.5~1mm大の砂粒を多く含む。微細な全雲母を含む。
1722	5	G F2	繩文 土器	深鉢	液頭部					7~8	明赤褐色 GYR 5~6	明赤褐色 GYR 5~6	にふい黄 GYR 6~9	良	粘土は緻密。0.5mm大の砂粒を多く含む。
1723	5	G F2	繩文 土器	鉢	口縁部					10.0	褐灰褐色 GYR 4~1	褐灰褐色 GYR 4~1	黑 GYR 2~1	良	粘土は緻密。0.5mm大の砂粒を僅かに含む。微細な角閃石を僅かに含む。
1724	5	G F2	繩文 土器	深鉢	胴上部					9~13	赤褐色 GYR 4~6	赤褐色 GYR 4~6	灰黄褐色 GYR 6~2	不良	粘土は粗。0.5mm大の砂粒を多く含む。微細な全雲母を含む。
1725	5	G F2	繩文 土器	深鉢	口縁部	296				6~8	明赤褐色 GYR 5~6	明赤褐色 GYR 5~6	明赤褐色 GYR 5~6	良	粘土は緻密。0.5mm大の砂粒を含む。微細な全雲母を含む。

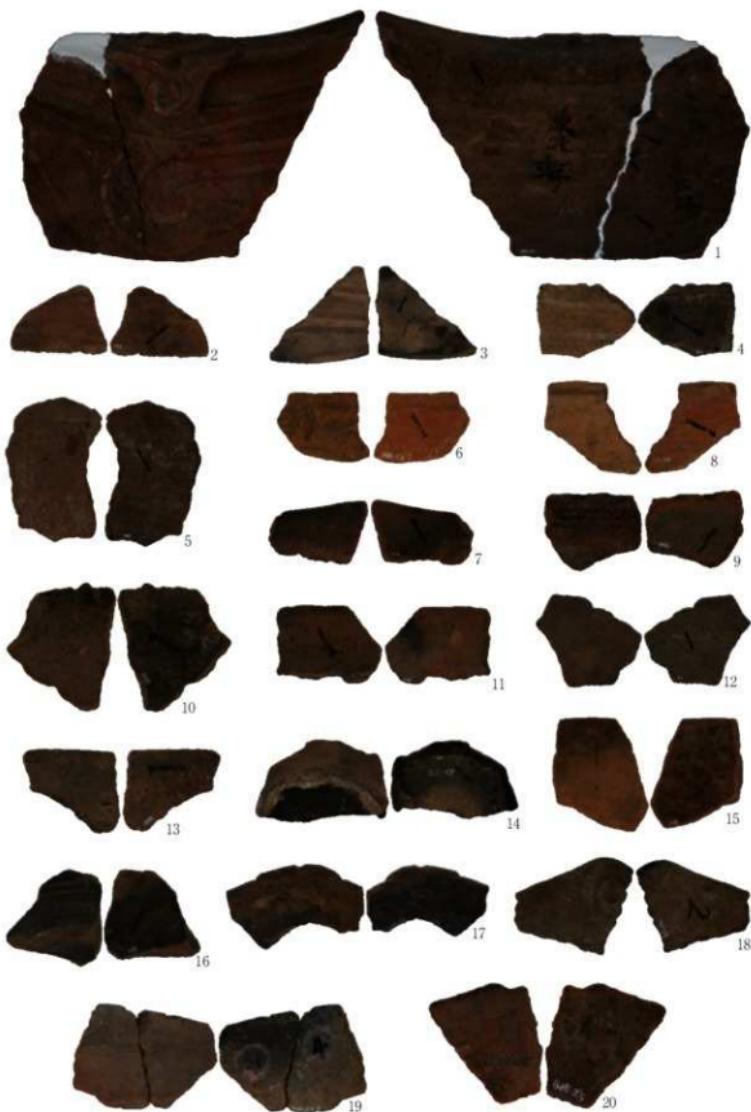
遺物番号	調査次元等	出土緯経	遺物種類	器種	部位	法量				色調			焼成	備考	
						口径(cm)	頭径(cm)	胴径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	器厚(mm)	内面	外面		
1726	5	G F2	織文 土器	深鉢	胴 部					5 ~ 75	に赤い黒 (G5YR 5-4)	褐 (G5YR 6-8)	に赤い黒 (G5YR 5-4)	良	粘土は緻密。0.5 ~ 1mmの大砂粒を含む。微細な全玉母を多く含む。角閃石を僅かに含む。
1727	5	G F3	織文 土器	深鉢	口縁部					7 ~ 12	黒褐 (D5YR 3-2)	に赤い黄褐 (D5YR 5-3)	黒褐 (D5YR 3-1)	良	粘土はやや粗。0.5 ~ 2mmの大砂粒を含む。微細な全玉母を含む。
1728	5	G F3	織文 土器	深鉢	口縁部	28.2				50	黒褐 (D5YR 3-1)	明赤褐 (G5YR 5-8)	明赤褐 (G5YR 5-8)	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。微細な全玉母を僅かに含む。
1729	5	G F3	織文 土器	深鉢	頭胴部					7 ~ 8	に赤い黒 (G5YR 6-4)	明赤褐 (G5YR 5-8)	明赤褐 (G5YR 5-8)	良	粘土はやや粗。0.5 ~ 1mmの大砂粒を含む。微細な全玉母を含む。
1730	5	G B	織文 土器	深鉢	胴 部					10.0	に赤い黄褐 (D5YR 6-4)	黒褐 (D5YR 3-1)	黒褐 (D5YR 3-1)	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。微細な全玉母を含む。
1731	5	G B	織文 土器	小鉢形	胴 部					4 ~ 5	黒褐 (D5YR 4-1)	黒褐 (D5YR 4-1)	黒褐 (D5YR 4-1)	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。
1732	5	G B	織文 土器	深鉢	胴上部					6 ~ 7	に赤い黄褐 (D5YR 6-4)	明赤褐 (G5YR 5-8)	に赤い黄褐 (G5YR 6-4)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全玉母を僅かに含む。
1733 不明 中尾 サンバッハ	織文 土器	鉢	口縁部	23.0						6 ~ 10.5	に赤い黄褐 (D5YR 7-3)	灰 黄褐 (D5YR 6-2)	黒褐 (D5YR 4-1)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全玉母と少量の金雲母を含む。
1734 不明 中川	織文 土器	深鉢	口縁部							7 ~ 7.5	黒 (G5YR 2-1)	褐 (G5YR 4-3)	褐 (G5YR 4-3)	良	粘土は緻密。0.5 ~ 1mmの大砂粒を含む。微細な全玉母を僅かに含む。
1735 不明 中川	織文 土器	深鉢	口縁部							6 ~ 6.5	褐 (G5YR 6-6)	に赤い黒 (G5YR 6-4)	に赤い黒 (G5YR 7-2)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全玉母を多く含む。
1736 不明 -	織文 土器	鉢	胴 部							4 ~ 6	に赤い黄褐 (D5YR 6-4)	に赤い黄褐 (D5YR 6-4)	に赤い黄褐 (D5YR 6-4)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を僅かに含む。微細な全玉母を多く含む。
1737 不明 -	織文 土器	深鉢	口縁部							4.5 ~ 5	明赤褐 (G5YR 5-6)	に赤い赤褐 (G5YR 5-4)	に赤い赤褐 (G5YR 5-4)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を僅かに含む。微細な角閃石を多く含む。
1738 不明 -	織文 土器	深鉢	口縁部							9 ~ 12	に赤い黄褐 (D5YR 5-2)	黒褐 (D5YR 3-2)	に赤い黄褐 (D5YR 6-4)	良	粘土はやや粗。0.5 ~ 15mmの大砂粒を僅かに含む。微細な全玉母を多く含む。
1739 不明 -	織文 土器	鉢	口縁部							5 ~ 11	黒褐 (D5YR 5-1)	黒褐 (D5YR 4-1)	黒褐 (D5YR 5-1)	良	粘土は緻密。
1740 不明 -	織文 土器	鉢	突起							6 ~ 10	黒褐 (D5YR 5-1)	褐 (D5YR 5-1)	褐 (D5YR 5-1)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な角閃石を含む。
1741 不明 -	織文 土器	鉢	口縁部	36.0						8 ~ 12	に赤い黄褐 (D5YR 5-2)	に赤い黄褐 (D5YR 5-2)	に赤い黄褐 (D5YR 5-2)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な金雲母を含む。
1742 不明 -	織文 土器	鉢	口縁部	38.8						7.5 ~ 12	灰褐 (G5YR 5-1)	暗灰褐 (G5YR 5-2)	暗灰褐 (G5YR 5-2)	不良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。精選された粘土。0.5mmの角閃石を多く含む。
1743 不明 -	織文 土器	鉢	-	23.0						6 ~ 9	に赤い黄褐 (D5YR 6-4)	灰褐 (G5YR 4-2)	灰褐 (G5YR 4-2)	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。微細な角閃石を多く含む。
1744 不明 -	織文 土器	深鉢	胴 部							7 ~ 10.5	に赤い黒 (G5YR 6-4)	明赤褐 (G5YR 5-6)	に赤い黄褐 (D5YR 6-4)	良	粘土は緻密。微細な角閃石を多く含む。
1745 不明 -	織文 土器	深鉢	頭胴部							6.5 ~ 8.5	に赤い黒 (G5YR 5-2)	に赤い黒 (D5YR 6-3)	に赤い黒 (D5YR 6-3)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な角閃石を多く含む。
1746 不明 -	織文 土器	深鉢	頭胴部							7 ~ 11	に赤い黄褐 (D5YR 5-2)	に赤い黄褐 (D5YR 5-2)	に赤い黄褐 (D5YR 5-2)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全玉母・角閃石を多く含む。
1747 不明 -	織文 土器	深鉢	胴 部			34.0				4.5 ~ 8	に赤い黒 (G5YR 5-2)	に赤い赤褐 (D5YR 5-1)	に赤い赤褐 (D5YR 4-1)	良	粘土はやや粗。0.5 ~ 1mmの大砂粒を多く含む。微細な全玉母を多く含む。
1748 不明 -	織文 土器	注口付 土器	胴 部			24.4				6 ~ 8.5	に赤い黄褐 (D5YR 6-2)	灰 黄褐 (D5YR 5-2)	に赤い黄褐 (D5YR 6-2)	良	粘土はやや粗。0.5 ~ 1mmの大砂粒を含む。微細な全玉母を含む。
1749 不明 -	織文 土器	鉢	口縁部	44.4						5.5 ~ 12	暗灰 (N 3)	に赤い黒 (G5YR 5-4)	灰 黄褐 (D5YR 6-2)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全玉母を含む。
1750 不明 -	織文 土器	深鉢	口縁部	40.0						5 ~ 13	明赤褐 (G5YR 5-6)	明赤褐 (G5YR 5-6)	明赤褐 (G5YR 5-6)	良	粘土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。

遺物番号	調査次元等	出土緯	遺物種	器種	部位	法量					色調			焼成	備考	
						口径(cm)	頭径(cm)	胴径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	器厚(mm)	内面	外面	断面		
1751 不明 - 織文土器 深鉢 口縁部 28.0						8 ~ 11.5	橙	GYR 6~8	橙	GYR 6~8	にぶい橙	GYR 6~8	良	胎土は緻密。0.5 ~ 1mmの砂粒を多く含む。		
1752 不明 - 織文土器 深鉢 口縁部 35.2						6 ~ 13	にぶい黄	GYR 5~4	にぶい黄	GYR 5~4	明赤褐	GYR 5~6	良	胎土は緻密。0.5mm以上の砂粒を含む。角閃石を僅かに含む。		
1753 不明 - 織文土器 深鉢 口縁部						5 ~ 11	灰褐	GOTR 3~1	明赤褐	GYR 5~6	明赤褐	GYR 5~6	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を多く含む。		
1754 不明 - 織文土器 鉢 口縁部 52.0						9 ~ 12	灰黄褐	GOTR 5~2	にぶい黄褐	GOTR 6~4	にぶい黄褐	GOTR 6~4	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。焼成された胎土を使用。微細な角閃石を含む。		
1755 不明 - 織文土器 鉢 口縁部 33.6						5.5 ~ 6	明赤褐	GYR 5~6	橙	GYR 6~8	暗灰黄	GYR 5~2	良	胎土は緻密。1mmの大砂粒を僅かに含む。		
1756 不明 - 織文土器 鉢 口縁部						6 ~ 11	灰褐	GOTR 4~1	灰褐	GOTR 5~6	黄灰	GOTR 5~1	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全雲母を含む。		
1757 不明 - 織文土器 深鉢 口縁部 27.4						7 ~ 11	にぶい黄褐	GOTR 5~0	灰黄褐	GOTR 5~2	灰黄褐	GOTR 5~2	良	胎土はやや粗。0.5mmの大砂粒を含む。		
1758 不明 - 織文土器 鉢 口縁部						6 ~ 13	黒	GOTR 2~	明赤褐	GOTR 5~6	明赤褐	GOTR 5~6	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全雲母を含む。		
1759 不明 - 織文土器 鉢 口縁部						8 ~ 13.5	浅黄	GOTR 7~0	黄灰	GOTR 4~1	黄灰	GOTR 7~2	良	胎土は緻密。0.5 ~ 1mmの大砂粒を含む。微細な全雲母をまばらに含む。		
1760 不明 - 織文土器 鉢 口縁部						7 ~ 10	灰褐	GOTR 4~1	灰褐	GOTR 4~1	黑褐	GOTR 3~1	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な角閃石を多く含む。		
1761 不明 - 織文土器 鉢 口縁部						6 ~ 13.5	にぶい赤褐	GOTR 5~0	灰褐	GOTR 4~2	灰褐	GOTR 4~2	良	胎土は粗。0.5 ~ 2mmの大砂粒を多く含む。微細な全雲母・角閃石を含む。		
1762 不明 - 織文土器 深鉢 口縁部						6 ~ 11	にぶい黄褐	GOTR 5~4	灰褐	GOTR 4~1	灰褐	GOTR 5~2	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。		
1763 不明 - 織文土器 鉢 口縁部 39.8						5.5 ~ 8.5	暗褐	GOTR 0~3	暗褐	GOTR 0~3	にぶい橙	GOTR 6~4	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な角閃石を多く含む。		
1764 不明 - 織文土器 鉢 口縁部						3 ~ 11	にぶい黄褐	GOTR 6~0	明赤褐	GOTR 5~6	灰褐	GOTR 5~2	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全雲母・角閃石を含む。		
1765 不明 - 織文土器 鉢 口縁部 30.8						5 ~ 12	にぶい黄	GOTR 6~3	灰褐	GOTR 4~2	明赤褐	GOTR 5~6	良	胎土はやや粗。0.5 ~ 1mmの大砂粒を多く含む。微細な全雲母を含む。		
1766 不明 - 織文土器 鉢 口縁部 31.6						6.5 ~ 13.5	黑褐	GOTR 3~1	黑褐	GOTR 3~1	明赤褐	GOTR 5~8	良	胎土は緻密。0.5 ~ 1mmの大砂粒を含む。微細な全雲母を含む。		
1767 不明 - 織文土器 鉢 口縁部 51.2						5.5 ~ 10.5	橙	GOTR 6~6	灰褐	GOTR 4~2	明赤褐	GOTR 5~6	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全雲母を多く含む。		
1768 不明 - 織文土器 深鉢 口縁部						7.5 ~ 11	橙	GOTR 6~6	橙	GOTR 4~1	灰褐	GOTR 4~1	良	胎土は緻密。微細な角閃石を保有する。		
1769 不明 - 織文土器 深鉢 口縁部						8 ~ 13	にぶい赤褐	GOTR 5~0	にぶい赤褐	GOTR 5~0	灰褐	GOTR 3~1	良	胎土はやや粗。0.5mmの大砂粒を含む。		
1770 不明 - 織文土器 鉢 口縁部 22.4						7 ~ 11	明赤褐	GOTR 5~6	灰褐	GOTR 4~1	灰褐	GOTR 4~1	良	胎土はやや粗。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全雲母・角閃石を多く含む。		
1771 不明 - 織文土器 鉢 口縁部 27.0						5 ~ 10.5	にぶい黄褐	GOTR 5~0	にぶい黄褐	GOTR 3~1	にぶい黄	GOTR 6~3	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を含む。微細な全雲母と角閃石を含む。		
1772 不明 - 織文土器 鉢 口縁部						34.2			7 ~ 12.5	明赤褐	GOTR 5~6	黑褐	GOTR 3~1	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を多く含む。微細な全雲母を含む。	
1773 不明 - 織文土器 深鉢 口~底部 30.2						4 ~ 9	にぶい黄褐	GOTR 4~0	明赤褐	GOTR 5~6	明赤褐	GOTR 5~6	良	胎土は緻密。0.5 ~ 1mmの大砂粒を含む。微細な全雲母を僅かに含む。		
1774 不明 - 織文土器 鉢 口縁部						8 ~ 10	明赤褐	GOTR 5~6	明赤褐	GOTR 5~6	明赤褐	GOTR 5~6	良	胎土は緻密。0.5mmの大砂粒を僅かに含む。		
1775 不明 - 織文土器 深鉢 刃 部						7 ~ 7.5	明赤褐	GOTR 5~6	明赤褐	GOTR 5~6	にぶい橙	GOTR 5~0	良	胎土はやや粗。0.5 ~ 1mmの大砂粒を多く含む。微細な全雲母を多く含む。		

遺物番号	調査次第等	出土緯経	遺物種類	器種	部位	法量				色調			焼成	備考	
						口径(cm)	頭径(cm)	胴径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	器厚(mm)	内面	外面		
1776 不明 -	-	繩文土器	鉢	口縁部	16.6					5.5 ~ 10.5	にぶい・黄褐色 (GYR 5~6)	褐 (GYR 6~8)	灰黄褐色 (GYR 5~7)	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。微細な金芸母を多く含む。
1777 不明 -	-	繩文土器	深鉢	口縁部						6.5 ~ 11	褐灰 (GYR 3~4)	にぶい・赤褐色 (GYR 5~6)	灰黄褐色 (GYR 6~7)	良	粘土は緻密。微細な金芸母を僅かに含む。
1778 不明 -	-	繩文土器	鉢	口縁部						7 ~ 13.5	にぶい・黄褐色 (GYR 6~7)	褐 (GYR 6~8)	深褐色 (GYR 3~7)	良	粘土は緻密。Imax大的砂粒を含む。
1779 不明 -	-	繩文土器	深鉢	口縁部	27.4					7.5 ~ 11	にぶい・赤褐色 (GYR 5~6)	にぶい・赤褐色 (GYR 5~6)	にぶい・黄褐色 (GYR 5~7)	良	粘土は緻密。0.5mm大的砂粒を僅かに含む。
1780 不明 -	-	繩文土器	鉢	口縁部	23.4					7 ~ 8.5	黄灰 (GYR 4~5)	黄灰 (GYR 4~5)	黄灰 (GYR 4~5)	良	粘土は緻密。0.5mm大的砂粒を含む。微細な金芸母多し。
1781 不明 -	-	繩文土器	鉢	口縁部	19.2					5 ~ 10.5	黑褐色 (GYR 4~5)	にぶい・褐 (GYR 5~6)	黑褐色 (GYR 3~7)	良	粘土は緻密。Imax大的砂粒を多く含む。微細な金芸母及び角凹石を多く含む。
1782 不明 -	-	繩文土器	鉢	口縁部						5.5 ~ 8	黑褐色 (GYR 3~4)	にぶい・赤褐色 (GYR 4~5)	にぶい・黄褐色 (GYR 5~6)	良	粘土は緻密。0.5mm大的砂粒を僅かに含む。微細な金芸母多し。
1783 不明 -	-	繩文土器	鉢	口縁部	28.0					5.5 ~ 9	にぶい・褐 (GYR 5~6)	にぶい・褐 (GYR 5~6)	にぶい・黄褐色 (GYR 5~6)	良	粘土は緻密。Imax大的砂粒を僅かに含む。微細な金芸母を多く含む。
1784 不明 -	-	繩文土器	鉢	口縁部						7.5 ~ 9	にぶい・黄褐色 (GYR 5~6)	にぶい・黄褐色 (GYR 5~6)	にぶい・黄褐色 (GYR 5~6)	良	粘土は緻密。0.5mm大的砂粒を僅かに含む。精選された粘土を微細な角凹石を含む。
1785 不明 -	-	繩文土器	浅鉢	口縁部						6.5 ~ 8	黑褐色 (GYR 3~4)	褐灰黒褐色 (GYR 4~5)	灰黄褐色 (GYR 4~5)	良	粘土は緻密。精選された粘土を微細な角凹石を含む。
1786 不明 -	-	繩文土器	鉢	口縁部						6 ~ 8.5	にぶい・黄褐色 (GYR 5~6)	にぶい・黄褐色 (GYR 5~6)	灰褐色 (GYR 4~5)	良	粘土は緻密。精選された粘土で、0.5 ~ 2mm大的砂粒を僅かに含む。微細な金芸母及び角凹石を含む。
1787 不明 -	-	繩文土器	鉢	口縁部	22.5					6.5 ~ 8	明赤褐色 (GYR 5~6)	明赤褐色 (GYR 5~6)	明赤褐色 (GYR 5~6)	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。角凹石を多く含む。
1788 不明 -	-	繩文土器	鉢	口縁部	20.0					7.5 ~ 8.5	にぶい・黄褐色 (GYR 5~6)	黑褐色 (GYR 3~4)	褐灰黒褐色 (GYR 5~6)	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。僅かに角凹石を含む。
1789 不明 -	-	繩文土器	浅鉢	口縁部	19.0					6 ~ 8	にぶい・黄褐色 (GYR 6~7)	にぶい・黄褐色 (GYR 6~7)	にぶい・黄褐色 (GYR 6~7)	良	粘土は緻密。0.5mm大的砂粒を僅かに含む。微細な金芸母を含む。
1790 不明 -	-	繩文土器	浅鉢	胴部						5 ~ 7	褐灰黒褐色 (GYR 4~5)	灰黄褐色 (GYR 4~5)	褐灰黒褐色 (GYR 4~5)	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。
1791 不明 -	-	繩文土器	鉢	口縁部						7 ~ 10	灰褐色 (GYR 4~5)	灰褐色 (GYR 4~5)	にぶい・褐 (GYR 6~7)	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。微細な金芸母を多く含む。
1792 不明 -	-	貝製品	貝冠	完形	體長6.2	殻幅8.5	體高21	重量35g							
1793 不明 -	-	貝製品	貝冠	完形	體長5.7	殻幅7.1	體高18	重量21g							
1794 不明 -	-	貝製品	貝冠	完形	體長5.2	殻幅6.7	體高17	重量16g							
1795 不明 -	-	貝製品	貝冠	半分欠損	最大長6.5	最大幅3.2	最大厚0.8	重量7g							
1796 不明 -	-	骨角器	刺突具	完形	最大長10.2	最大幅3.4		重量11g							
1797 不明 -	-	骨角器	刺突具	完形	最大長6.5	最大幅2.9		重量10g							
1798 不明 -	-	骨角器	刺突具	完形	最大長6.5	最大幅2.9		重量9g							
1799 不明 -	-	骨角器	刺突具	完形	最大長7.5	最大幅2.9		重量9g							
1800 不明 -	-	骨角器	椎角斧	完形	最大長18.5	最大幅7.8		重量83g						最大幅は、枝角先端と幹の開隙を計測。	

遺物番号	調査次等	出土緯経	遺物種	器種	部位	法量					色調			焼成	備考
						口径 (cm)	測径 (cm)	側径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	器厚 (mm)	内面	外面	断面	
1801 不明 - 骨角器	鹿角斧	先端部	最大長 5.7 最大幅 2.7 最大厚 1.3	重量 10g											
1802 不明 - 骨角器	重飾品	定形	最大長 3.9 最大幅 1.7 最大厚 0.9	重量 35g											
1803 不明 - 石器	石器	研磨石斧	最大長 10.5 最大幅 2.4 最大厚 1.4	重量 61g											
1804 不明 - 石器	石器	石砧丁	最大長 8.5 最大幅 4.9 最大厚 1.0	重量 35g											
1805 6 Pit8 横文土器	深鉢	側部							10	橙 G5YR 6-6	にぶい橙 G5YR 7-4	にぶい橙 G5YR 7-4	良	粘土は粗。0.5mm大の砂粒を多く含む。石英立つ。	
1806 6 Ic層下部 横文土器	鉢	口縁部							6~7	橙 G5YR 6-6	にぶい赤褐 G5YR 5-6	にぶい橙 G5YR 6-6	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用。陶器を全表面と角凹石をまばらに含む。	
1807 6 Ic層上部 石器	石器	定形	最大長 1.8 最大幅 2.1 最大厚 0.5	重量 25g											
1808 6 Pit15 石器	敲石	半分骨	最大長 8.9 最大幅 10.4 最大厚 3.9	重量 641g											
1809 7 Pit1 横文土器	壺	底部			6.2			5.5~12	橙 G5YR 7-6	橙 G5YR 6-6	橙 G5YR 6-6	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用しており、精緻なつくり。		
1810 7 Pit2 横文土器	深鉢	口縁部						6	明赤褐 G5YR 5-8	明赤褐 G5YR 5-7	明赤褐 G5YR 5-8	良	粘土はやや粗。0.5mm大の砂粒を多く含む。微細な角凹石を多く含む。		
1811 7 Pit2 丸生土器	壺	側部						7	黒 G5YR 2-1	橙 G5YR 6-6	褐灰 G5YR 5-1	良	粘土はやや粗。微細な角凹石を多く含む。		
1812 7 北壁裏-2号 土器	皿	口縁部	15.6		112	2.6	8	橙 G5YR 7-6	橙 G5YR 7-6	橙 G5YR 7-6	不	粘土は緻密。1mm大のカサリ種を含む。			
1813 7 北壁裏-2号 土器	壺	ツマミ付近					5~8	灰白 G5YR 7-1	灰白 G5YR 7-1	灰白 G5YR 7-1	不	粘土は緻密。			
1814 不明 木村昭助資料 横文土器	深鉢	口縁部					6~15	にぶい黒 G5YR 5-4	褐灰 G5YR 5-4	黄灰 G5YR 5-1	良	粘土はやや粗。0.5~1mm大の砂粒を多く含む。全表面と石英を多く含む。			
1815 1 木村昭助資料 横文土器	深鉢	口縁部					7~12	明赤褐 G5YR 5-6	明赤褐 G5YR 5-6	明赤褐 G5YR 5-6	良	粘土は緻密。精選された粘土を使用しており、微細な全表面を傷目に含む。			

写 真 図 版



遺物番号 1 ~ 20

PL. 2



遺物番号 21 ~ 40



遺物番号 41 ~ 61

PL. 4



遺物番号 62 ~ 74



遺物番号 75 ~ 88

PL. 6



遺物番号 89 ~ 101



遺物番号 102 ~ 119

PL. 8



遺物番号 120 ~ 137



138



139

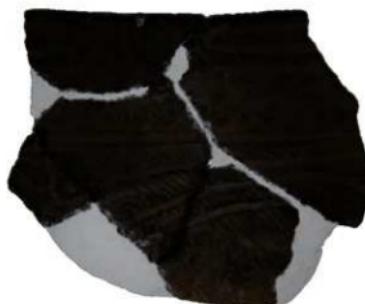
遺物番号 138・139



140



141



142



143



145



144



145

(愛媛県歴史文化博物館所蔵品で、2種持第73号で利用許可を得たもの)

遺物番号 140 ~ 145



遺物番号 146 ~ 166

PL.12



遺物番号 167 ~ 176.178 ~ 188



遺物番号 189 ~ 203

PL.14



遺物番号 204 ~ 221



遺物番号 222 ~ 237

PL.16



遺物番号 238 ~ 259



遺物番号 260 ~ 283



遺物番号 284 ~ 300



遺物番号 301 ~ 323



遺物番号 324 ~ 341



遺物番号 342 ~ 366

PL.22



遺物番号 373 ~ 395



遺物番号 396 ~ 418



遺物番号 419 ~ 442



遺物番号 443 ~ 466

PL.26



遺物番号 467 ~ 484



485

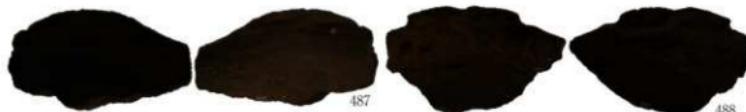


486 内面



486

遺物番号 485・486



遺物番号 487 ~ 501



502



502 口縁部内面文様



502 口縁部内面文様（復元）

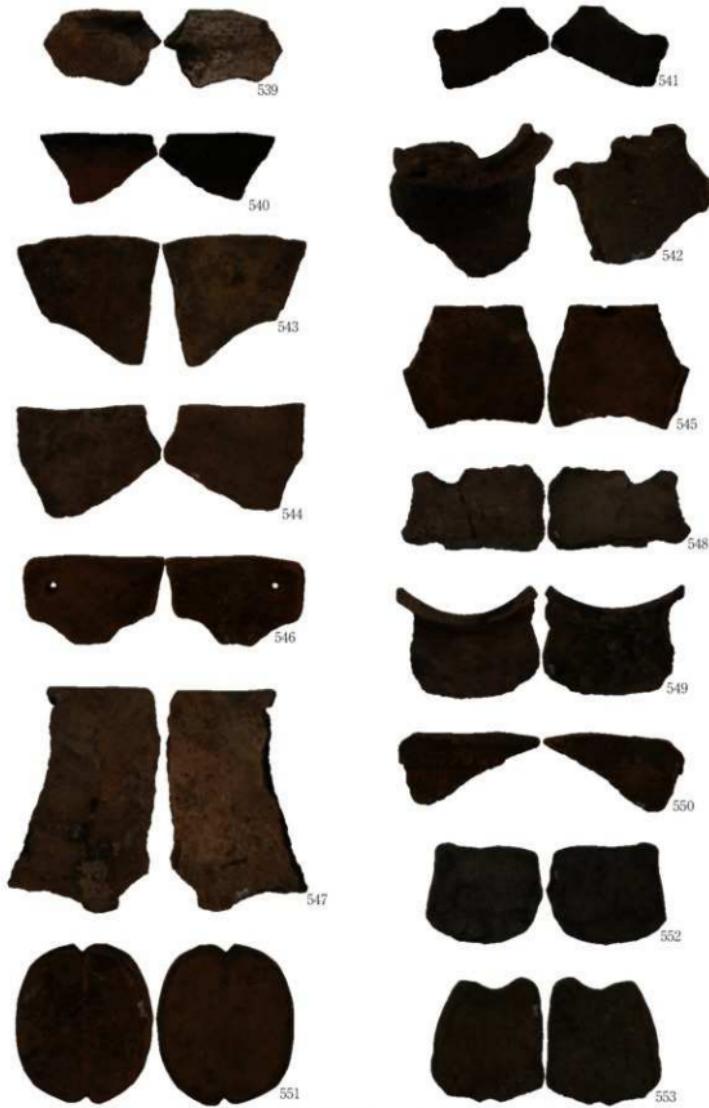
遺物番号 502



遺物番号 503 ~ 522



遺物番号 523 ~ 538



遺物番号 539 ~ 553



遺物番号 556 ~ 570

PL.34



遺物番号 571 ~ 592



遺物番号 593 ~ 611



遺物番号 612 ~ 632



遺物番号 633 ~ 655



遺物番号 656 ~ 677



遺物番号 678 ~ 700



遺物番号 701 ~ 722



遺物番号 723 ~ 746



遺物番号 747 ~ 764



遺物番号 765 ~ 770



771



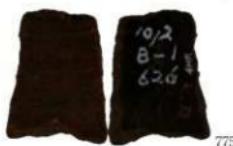
772



773



774



775



776

遺物番号 771 ~ 776



遺物番号 777 ~ 794



遺物番号 795 ~ 802, 804 ~ 815



817

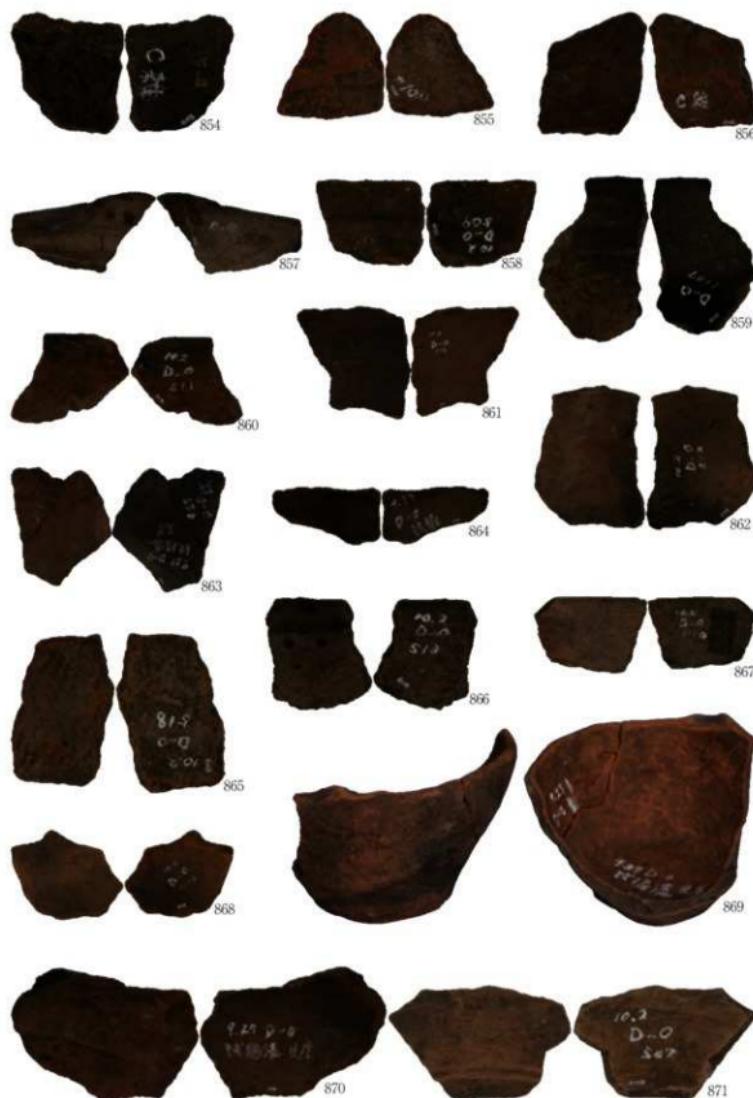


遺物番号 816 ~ 827

PL.48



遺物番号 828 ~ 845, 847 ~ 853



遺物番号 854 ~ 871



遺物番号 872 ~ 894



遺物番号 895 ~ 917



遺物番号 918 ~ 939



遺物番号 940 ~ 962

PL.54



遺物番号 963 ~ 986



遺物番号 987 ~ 1010

PL.56



遺物番号 1011 ~ 1035



1036



1037



1038



1039



1040



1041



1041



1042



1043



1044



1045



被热花岗岩砾



遗物番号 1036 ~ 1045, 被热花岗岩砾

PL.58



遺物番号 1046 ~ 1069



遺物番号 1070 ~ 1090

PL.60



遺物番号 1091 ~ 1106



遺物番号 1108 ~ 1129

PL.62



遺物番号 1130 ~ 1154



遺物番号 1155 ~ 1175

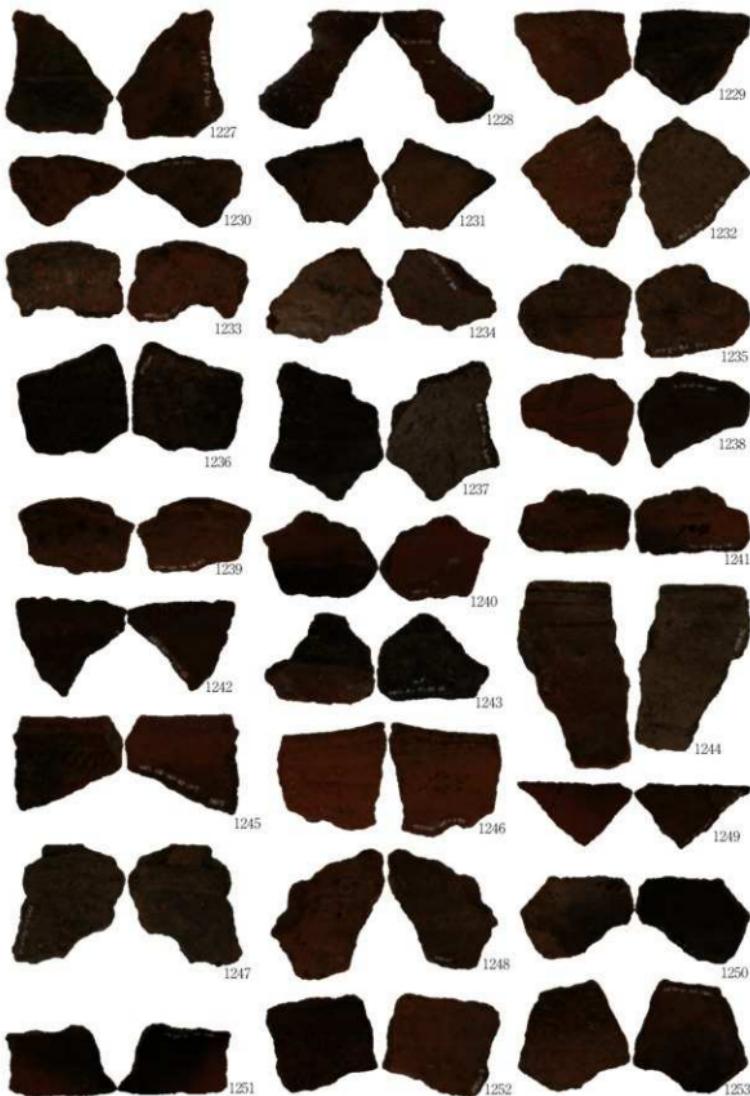
PL.64



遺物番号 1176 ~ 1201



遺物番号 1202 ~ 1226



遺物番号 1227 ~ 1253



遺物番号 1254 ~ 1279



遺物番号 1280 ~ 1303



遺物番号 1304 ~ 1325

PL.70



遺物番号 1326 ~ 1349



遺物番号 1350 ~ 1370



遺物番号 1371 ~ 1388, 1390 ~ 1395



遺物番号 1396 ~ 1419

PL.74



遺物番号 1420 ~ 1444



遺物番号 1445 ~ 1470



遺物番号 1471 ~ 1493



遺物番号 1494 ~ 1517



遺物番号 1518 ~ 1534



遺物番号 1535 ~ 1545, 1547 ~ 1555



遺物番号 1556 ~ 1573,1575



遺物番号 1576 ~ 1598

PL.82



遺物番号 1599 ~ 1614, 1617 ~ 1625



遺物番号 1626 ~ 1650



遺物番号 1651 ~ 1675



遺物番号 1676 ~ 1698

PL.86



遺物番号 1699 ~ 1722



遺物番号 1723 ~ 1743

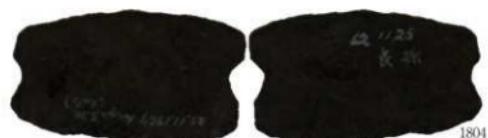


遺物番号 1744 ~ 1765



遺物番号 1766 ~ 1783

PL.90



遺物番号 1784 ~ 1791, 1803 · 1804



1805



1806



1807



1808



1809



1810



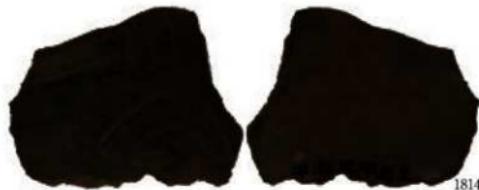
1811



1812



1813



1814



1815

遺物番号 1805 ~ 1815



遺物番号 177,367 ~ 372,554,555,803,846,1107,1389,1546,1574,1615



遺物番号 1616,1792 ~ 1795



遺物番号 1796 ~ 1802・馬歛（第1次調査出土）



「伊豫平城貝塚 - 縄文式土器を中心として -」(1957 御荘町教育委員会刊行)掲載図版
(※第1次調査)



骨角器



埋葬人骨



埋葬人骨



埋葬人骨

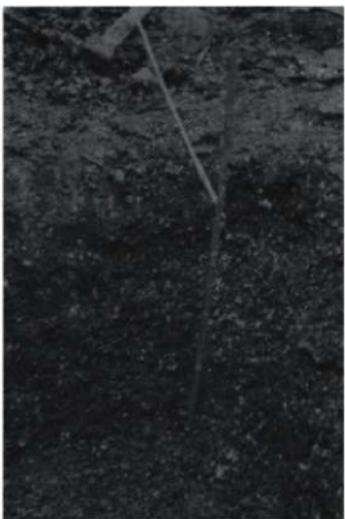


人面の意匠を描いたとされる土器（所在不明）

『御荘町史』(1970 御荘町) 掲載図版 (※第2次調査)



発掘風景



調査区南東隅ピット（下層確認トレンチのことか？）



出土状況



貝類



出土状況（Fig.59-523と思われる）



獸骨及び魚骨



第4次調査 第3号土壤墓（第3号人骨）出土状況



第4次調査 第3号人骨（第3土壤墓出土）復元



第6次調査 第1調査区遺構検出状況



第6次調査 第1調査区遺構検出状況（南より）



第6次調査 第1調査区遺構検出状況（東より）



第6次調査 第1調査区遺構検出状況（西より）



第6次調査 第1調査区SK 1埋土



第6次調査 第1調査区SK 3等出土状況



第6次調査 第1調査区SK 1完掘



第6次調査 第1調査区完掘状況(西より)



第6次調査 第1調査区SK 2埋土



第6次調査 第1調査区完掘状況(北より)



第6次調査 第1調査区SK 2等出土状況



第6次調査 第2調査区中央土壤堆積(西より)



第6次調査 第2調査区検出状況（南より）



第6次調査 第2調査区 Pit14・15 出土状況（西より）



第6次調査 第2調査区 SX 2 実掘状況（西より）



第7次調査 北壁土壤堆積



第7次調査 西壁土壤堆積



第7次調査 遺構検出状況（南より）



第7次調査 Pit 1・2 検出状況（南より）



第7次調査 Pit 1 検出（西より）



第7次調査 Pit 1 半裁（南より）



第7次調査 Pit 1 完掘（南より）



第7次調査 Pit 2 半裁（西より）



第7次調査 Pit 2 検出（西より）



第7次調査 Pit 2 完掘（南より）



第7次調査 Pit 2 検出（西より）



第7次調査 Pit 1・2 完掘（南より）



第7次調査 完掘状況（西より）



第7次調査 完掘状況（南西より）



平城貝塚立会調査（第4次調査地点西端の土壤堆積）



平城貝塚立会調査（第4次調査地点西端の混貝土壤）



平城貝塚立会調査（S52b 地点真南の土壤堆積）



平城貝塚立会調査（S52b 地点南道路下の土壤堆積）



鹿角製髪飾り 昭和 62 年 11 月 25 日 採集資料 (所在不明)



鹿角製髪飾り 昭和 62 年 11 月 25 日 採集資料 (所在不明)



愛媛県指定遺跡 平城貝塚

平城貝塚は明治二四年土佐の史家寺石正路先生によって発見されたもので、縄文時代後期の文化をとどめる大切な遺跡である。この偉大な功績により遠い私たち祖先の人々が生活した姿やそのうつり変わりを知ることができるのである。さらに昭和二九年二月四日国銀行御荘支店の改築工事と併行して発掘されたが出土した人骨や多くの土器類は学問のうえから大変貴重なものであることがしられた。これらのすべてはまた郷土の榮譽と言つてよい茲に先生の業績をたたえ学徳をしたい併せて誕満百年記念として一碑を建立 永く後世に伝えるものである

野平啓良謹書

昭和四十四年五月廿七日

愛媛県教育委員会
全文化財保護協会御荘支部
御荘町教育委員会
全文化財保護委員会
西四国郷土研究会
南宇和史談会
全考古学研究会
城辺町岡田石材工場彫
土地 二坪
寄付者 坂口ナヲ

平城貝塚の石碑とその碑文

報告書抄録

本書作成データ

バー ド : iMac(Retina 5K, 27-inch, 2019) 3GHz 6コア Intel Core i5

システム : macOS Big Sur (11.0.1)

ソ フ ト : Adobe Creative Cloud (Photoshop2021, Illustrator2021, InDesign2021)

Office Home&Business2019 (Word, Excel)

フォント : モリサワ OTF 基本 7 書体, TimesItalic

デ タ : Macintosh Full DTP で入稿

用紙

表紙 : レザック'80 つむぎ銀鼠 四六判 Y 目 210kg

力紙・内裏表紙 : タント P58 四六判

本文 : HG 書籍紙 イエロー 72kg A 判

巻頭図版・写真図版・報告書抄録・奥付 : V マット 90kg A 判

* 本文と図版の用紙は、古紙 80% の再生紙を使用した。

愛南町文化財調査報告書第2輯

愛南町内遺跡 2

平城貝塚

総括報告書 1

2021 年 3 月 31 日

発行 愛南町教育委員会

〒 798-4120

愛媛県南宇和郡愛南町城辺甲2420

電話 0895-73-1112

印刷 有限会社大成社

